本叢書の印刷に當りて文明社社長土屋豊吉氏の甚大なる好意を得たることを銘記す。

大正六年五月七日印刷
大正六年五月十日發行

非賣品

編輯者　東京市神田區通新石町十六番地　堀成之

發行者　東京市神田區通新石町十六番地　矢野惣次郎

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　加藤保

印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　文明社

發行所　東京市神田區通新石町世界新聞社内　大日本風教叢書刊行會

先年如レ此予染レ筆與二飛彈願智坊一訖而今年暦應三歳庚辰十月十五日隨二身此書一上
洛中一日逗留十七日下國仍於二燈下一馳二老筆一留レ之爲二利益一也

宗昭　七十一

(一)歸命の一念。如來の本願招喚の勅命に歸順する信の一念をいふ。

(二)南無は歸命。善導の『觀經玄義分』に「南無と言ふは即ち是れ歸命なり。亦是れ發願廻向の義なり。阿彌陀佛と言ふは即ち是れ、其の行なり」と釋せり。

(三)定業。必ず受くべく定められたる業報の因緣をいふ。

のなり。平生の時不定のおもひに任せば、かなふべからず。平生のとき、善知識のことばのしたに、(一)歸命の一念を發得せば、そのときをもて、娑婆のをはり臨終とおもふべし。そも〳〵(二)南無は歸命、歸命のこゝろは往生のためなれば、またこれ發願なり。このこゝろ　あまねく萬行萬善をして淨土の業因となせば、また廻向の義なり。この能歸の心、所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行、果地の萬德、こと〴〵く名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、「阿彌陀佛即ち是れ其の行なり」と釋したまへり。また殺生罪をつくるとき地獄の(三)定業をむすぶも、臨終にかさねてつくらざれども、平生の業にひかれて地獄にかならずおつべし。念佛もまたかくのごとし。本願を信じ名號をとなふれば、その時分にあたりて、かならず往生はさだまるなりとしるべし。

執持鈔

嘉曆元歲丙寅九月五日拭二老眼一染二禿筆一是偏爲レ利二益衆生一也

釋宗昭

五十七

（一）乃至一念。『無量壽經』に「信心歡喜せんこと乃至一念せん」と說けり。

根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根をすくふ大悲あり、行業をろそかなりとてうたがふべからず、經に（一）「乃至一念」の文あり。佛語に虛妄なし、本願あにあやまりあらんや。名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば、往生の業まさしくさだまるゆへなり。もし彌陀の名願力を稱念すとも、往生なを不定ならば、正定業とはなづくべからず。我すでに本願の名號を持念す。往生の業すでに成辨することをよろこぶべし。かるがゆへに臨終にふたゝび名號をとなへずとも往生をとぐべきこと勿論なり。一切衆生のありさま、過去の業因まち／＼なり。また死の緣無量なり。やまひにをかされて死するものもあり。つるぎにあたりて死するものもあり。水にをぼれて死するものもあり。火に燒て死するものあり。乃至、寢死するものもあり。酒狂して死するたぐひあり。これみな先世の業因なり。さらにのがるべきにあらず。かくのごときの死期にいたりて一旦の妄心をおこさんほかは、いかでか凡夫のならひ、名號稱念もおこり、往生淨土の願心もあらんや。平生のとき期するところの約束もしたがはゞ、往生ののぞみ、むなしかるべし。しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまれるも

光明もこれを攝取するなり。されば名號につきて信心をおこす行者なくば、彌陀如來攝取不捨のちかひ成ずべからず。彌陀如來の攝取不捨の御ちかひなくば、また行者の往生淨土のねがひ、なにゝよりてか成ぜん。されば「本願や(一)名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願」といふ、これこのいはれなり。本願寺の聖人の御釋(二)『教行信證』にのたまはく。「(三)德號の慈父ましまさずば能生の因かけなん。光明の悲母ましまさずば所生の緣そむきなん。光明名號の父母、これすなはち外緣とす。眞實信の(四)業識、これすなはち內因とす、內外因緣和合して報土の眞身を得證す」とみえたり。これをたとふるに、日輪、(五)須彌の半にめぐりて他州をてらすとき、このさかひ闇冥たり、他州よりこの(六)南州にちかづくとき夜すでにあくるがごとし。しかれば日輪のいづるによりて夜はあくるものなり。世のひとつねにおもへらく、夜のあけて日輪いづと。今いふところは、しからざるなり。彌陀佛日の照觸によりて無明長夜のやみすでにはれて安養往生の業因たる名號の寶珠をばうるなりとしるべし。

一。私にいはく。

(一)本願や名號。法然上人の語。『西方指南鈔』に出づ。

(二)『教行信證』親鸞上人立教開宗の本典。其の行の巻に此の釋あり。

(三)德號。大善大功德を具足する彌陀の名號。

(四)業識。第八阿賴耶識のことなり。業は動作の義。無明煩惱に動かされて萬有を造作す。今は光明名號の外緣を父母に譬へ、眞實信心の內因を業識に喩へ、父母と業識との因緣和合して子の生るゝが如く、光號と信心との因緣和合して報土の眞身を得證すと明す。

(五)須彌。須彌山。梵音スメール(Sumeru)妙高と譯す。一世界の中央に在りと傳說す。

(六)南州。南閻浮洲。須彌山の南にあり。是れ我等の住する此の世界なりと傳說す。

ひかりはなからん」とちかひたまへり。これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり、かの願すでに成就して、あまねく無礙のひかりをもて、十方微塵世界をてらしたまひて、衆生の煩惱惡業を長時にてらしまします。さればこのひかりの縁にあふ衆生、やうやく無明の昏闇うすくなりて、(一)宿善のたねきざす時、まさしく報土にむまるべき第十八の念佛往生の願因の名號をきくなり。しかれば名號執持すること、さらに自力にあらず。ひとへに光明にもよほさるゝによりてなり。これによりて光明の縁にきざゝれて名號の因をうといふなり。かるがゆへに(二)宗師善導大師の御ことなり「光明名號を以て十方を攝化したまへり。」「但信心をして求念せしむ」といふは、光明と名號と父母のごとくにて子をそだてはごくむべしといへども、子となりていでくべきたねなきには、ちゝはゝとなづくべきものなし、子のあるとき、それがために、ちゝといひ、はゝといふ名あり。それがごとくに光明をはゝにたとへ、名號をちゝにたとへて、光明のはゝ名號のちゝといふことも、報土にまさしくむまるべき信心のたねなくばあるべからず。しかれば、信心をおこして往生を願求するとき、名號もとなへられ、

(一)宿善。過去に積みたる善根。

(二)宗師。唐朝の善導大師。今引く所は其の『往生禮讃偈』の御釋なり。

惡人の往生また、かけてもおもひよるべき報佛報土にあらざれども、佛智の不思議なる奇特をあらはさんがためなれば、五劫があひだ、これを思惟し、永劫があひだ、これを行じて、かゝるあさましきものが、(一)六趣四生よりほかは、すみかもなく、うかむべき期なきがために、とりわき、むねとおこされたれば、惡業に卑下すべからず、とすゝめたまふむねなり。されば、をのれをわすれて、あふぎて佛智に歸するまことなくんば、をのれがもつところの惡業なんぞ淨土の生因たらんや。すみやかにかの(二)十惡(三)五逆(四)四重謗法の惡因にひかされ、(五)三途(六)八難にこそしづむべけれ。なにの要にかたゝん。しかれば善も極樂にむまるゝたねにならざれば、往生のためにはその要なし、惡もまたさきの如し。しかればたゞ機生得の善惡なり。かの土ののぞみ、他力に歸せずば、おもひたへたり。これによりて善惡凡夫のむまるゝは大願業力ぞと釋したまふなり。增上緣とせざるはなしといふは、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるにまされるものなしとなり。

一。又のたまはく、

光明名號の因緣といふことあり。彌陀如來四十八願の中に、第十二の願は「我

(一)六趣四生。四惡趣に、人間、天上を加へて、六趣といひ、胎生、卵生、濕生、化生を四生といふ。

(二)十惡。殺生、偸盜、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡。

(三)五逆。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。

(四)四重。殺生、偸盜、邪婬、妄語。

(五)三途。火途(地獄)血途(畜生)刀途(餓鬼)。

(六)八難。佛を見ず、正法を聞く能はざる難に八種あり。三惡道、長壽天、北洲、盲聾、世智辯聰、生佛前佛後。

明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆかば、ひとりゆくべからず、師とともにおつべし。さればたゞ地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへ、まいらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらずといふなりと。これ自力をすてゝ他力に歸するすがたなり。

一。又のたまはく、

光明寺の和尚（善導の御こと）の『大無量壽經』の第十八の念佛往生の願のこゝろを釋したまふに「善惡の凡夫、生を得る者は、皆阿彌陀佛の大願業力に乘じて(一)增上緣と爲ざるはなし」といへり。このこゝろは善人なればとて、をのれがなすところの善をもて、かの阿彌陀佛の(二)報土へむまるゝこと、かなふべからずとなり。惡人また申すにやおよぶ。己が惡業のちから、(三)三惡四趣の生をひくよりほか、豈報土の生因たらんや。しかれば善業も要にたゝず、惡業もまたさまたげとならず。善人の往生するも、彌陀如來の(四)別願超世の大慈大悲にあらずば、かなひがたし

(一)增上緣　結果に對して增上の用あるをいふ。

(二)報土。願行に酬報したる報身佛の居する眞實の淨土をいふ。

(三)三惡四趣。地獄、餓鬼、畜生を三惡道といひ、修羅を加へて四惡趣といふ。

(四)別願超世。特別の誓願ありて世に超えたるをいふ。

(一)補處。佛處を補ふべき等覺の位をいふ。釋尊の後を補ふは彌勒(Maitreya)菩薩なり。

(二)故聖人。已に世を去りし恩師。即ち法然上人の事。

(三)善知識。正法を説きて善く敎へ導く人。今は法然上人のこと也。

り。往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、(一)補處の彌勒菩薩を初として、佛智の不思議をはからふべきにあらず。まして凡夫の淺智をや。かへすがへす如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり。これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。さればわれとして淨土へまいるべしとも、又地獄へゆくべしともさだむべからず。(二)故聖人(黒谷源空聖人の御ことなり)のおほせに、「源空があらんところへゆかんとおもはるべし」と、たしかにうけたまはりしうへは、たとへ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり。このたびもし(三)善知識にあひたてまつらずば、われら凡夫かならず地獄におつべし。しかるに、いま聖人の御化導にあづかりて、彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土のむまれがたきを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるをいつはりて往生淨土の業因ぞと、聖人さづけたまふに、すかされまいらせて、われ地獄におつといふとも、さらにくやしむおもひあるべからず。そのゆへは、

執持鈔

覺如上人

一。(一)本願寺聖人の仰せに云く、
(二)來迎は(三)諸行往生にあり。自力の行者なるがゆへに。臨終まつこと、來迎たのむことは、諸行往生のひとにいふべし。眞實信心の行人は、(四)攝取不捨のゆへに、(五)正定聚に住す。正定聚に住するがゆへにかならず(六)滅度にいたる、かるがゆへに、臨終まつことなし。來迎たのむことなし。これすなはち(七)第十八の願のこゝろなり。臨終をまち來迎をたのむことは、諸行往生をちかひまします第十九の願のこゝろなり。

一。又のたまはく、
是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。往生淨土の爲には、たゞ信心をさきとす。其ほかをばかへりみざるな

(一)本願寺聖人。本願寺の祖師、親鸞上人。淨土眞宗の開祖なり。
(二)來迎。臨終に佛菩薩の來り迎ふるをいふ。他力信心の人は平生に攝取の光益にあづかるが故に來迎を待たず。
(三)諸行往生。念佛往生に對して、自力心の行者が餘の諸善を修して往生を願ふをいふ。
(四)攝取不捨。佛の心光、信心の人を攝め取りて捨てず。
(五)正定聚。正しく佛に成るべき身と定められたる者をいふ。
(六)滅度。涅槃(Nirvana)の譯語生死の苦を滅し煩惱の暴流を超度したる證果なり。
(七)第十八の願。阿彌陀佛の四十八願中の第十八、十念佛往生の願。

はん時は、いかにもいかにも念佛の功をはげませ給ひ候べく候。これが正身の上の正教と申ことにて候。穴賢々々。

眞盛上人奏進法語　終

奏進法語○此法語は天台宗眞盛派開祖慈攝大師眞盛上人が、明應元年後土御門帝の勅問に應へて、奏進し給ふ所なり。

眞盛上人奏進法語

御往生の安心は、定めて御心に研かせ給ひ候はんなれども、承り候に付て一端申參らせ候。常には念佛を申し候て、この念佛の力によりて往生せんずるぞと心得る、それも背かぬ事にて候得共、それは念佛と往生とが別のもの〵様に候ほどに、猶ほ煩らはしき心得にて候。只様も候はず、南無阿彌陀佛と唱ふるが即ち往生にて候なり。南無と申は佛を賴む心なり。この心頓て彼の佛の光りの中に攝め取りて捨て給はず、迎ひとり給ふ佛を阿彌陀とは唱へ顯はして、加樣に賴む我れ等が心と、救ふ佛の覺りと、一つになりて候を南無阿彌陀佛の佛とは心得候。されば南無阿彌陀佛と申すは、佛の正覺即ち我れ等が往生ぞと御心得候べく候。加樣に御心得候て疑の御心だにも候はずば、御手に珠數をとらず、御口に聲なくとも、御忘れなきばかりが念佛にて候べく候。左りながら御氣もよくすゝしみ候

よりまふしいだしたる念佛は、にごりにしまぬ蓮の如くにして、決定往生疑ひあるべからず。妄念をいとはずして、信心のあさきをなげき、心ざしをふかくしてつねに(一)名號をとなふべし。

橫川法語 終

(一)名號。南無阿彌陀佛。

横川法語

源信僧都

夫一切衆生、(一)三惡道をはなれて人間にむまるゝこと、おほひなるよろこびなり。身はいやしくとも畜生におとらんや。家はまづしくとも餓鬼にはまさるべし。心におもふことかなはずとも、地獄のくるしみにはくらぶべからず。世のすみうきは、いとふたよりなり。人かずならぬ身のいやしきは、(二)菩提をねがふしるべなり。このゆへに人間にむまるゝことをよろこぶべし。信心あさくとも(三)本願ふかきがゆへに、たのめばかならず(四)往生す。念佛ものうけれども、となふればさだめて(五)來迎にあづかる。功德莫大なり。このゆへに本願にあふことをよろこぶべし。又妄念はもとより凡夫の地體なり。妄念のほかに別の心もなきなり。臨終の時までは一向に妄念の凡夫にてあるべきぞとこゝろえて念佛すれば、來迎にあづかりて(六)蓮臺にのる時こそ、妄念をひるがへしてさとりの心とはなれ、妄念のうち

(一)三惡道。地獄、餓鬼、畜生。

(二)菩提。梵音ボードヒ(Bodhi)覺と譯す。佛の覺りの智慧をいふ。

(三)本願。阿彌陀佛の攝化衆生の大願。

(四)往生。佛の淨土に生るゝことをいふ。

(五)來迎。佛菩薩の來り迎ふるをいふ。

(六)蓮臺。淨土に迎へ取らるゝ時蓮の臺に乘せられてゆく。

惱に任せて取付く處もなき時、眞實に是くの如く信向せば、佛祖の本意に通じて、二世の所願成就す。疑ふこと莫れ。疑ふこと莫れ。謹で以て信向あるべし。

大應國師法語(だいおうこくしはふご)　終

く、「若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、是人邪道を行ず、如來を見ること能はず」と。是れ肝要の語なり。諸佛の御心に少しも違ふべからず。

二　病中の者に示す

病中の工夫は、唯心に物を懸けざる、今世の祈禱、又未來の菩提なり。是れに過ぎたること有るべからず。縱ひ必死なれども、必ずたすかることあるべし。又死去すとも、更に六道四生に浮沈せず。只管に打拂て一切の事を打捨て、無心の時取付く處なき、自己の根本、悟を得るに近し。又取付く處無きとて、佛を念じ別の工夫有るべからず。左樣の雜事あれば、這の大法に入る甲斐なくして、生死海に輪廻して六道を離れず。古人云く、「一作事心にあれば、禍身にあり」といへり。大善知識に逢て、かゝる事を聞分るを以て、過去無量劫より大願堅固なる人と知るなり。故に云く、「道無心にして人に合し人無心にして道に合す」といへり。一心に此語を信じて二心あるべからず。法華經に云く、「諸法寂滅の相言を以て宣ぶべからず」といへり。(一)行住坐臥、無想無念なれば、一切の惡業、淸淨の光明と成り、三世十方寂滅爲樂にして、煩惱即菩提。生死即涅槃といふ意を得て、病

(一)行住坐臥無想無念。一切の善惡總じて以て思慮することなく、只行住坐臥に無念無想たればこれ即ち法身の尊形なり。

佛、法身の如來と申すにて候。此に至て地獄も無く極樂も無く、取る事も無く捨つる事も無く、衆生も無し。取る事も無き故に、僧は僧の行をなし、俗は俗の業をなすべし。然れども作す處に更に執着せず、捨つる事も無き故に、本の如く皆作す可し。喜愁も人と同じ樣に有れども、內心は次第に面白く涼しきなり、本心の何にも着せざる處を知る故なり。此時は前に申しつる迷ふ事も悟る事も無かるべし。祖師云く、善惡も思はず、此處に打向ふべし。若し又萬の念起らば、是れ何物ぞと看よ、本姿見ゆべし。又尋常の人の思ふたる樣は、佛とは毫光もさし、神通も有るべし、何事も一切知るべく、本の如く寒熱人に變はらずと思ふ。佛に三身あり、一に(一)法身、二に(二)報身、三に(三)應身なり。神通變化ある佛は、三番目の應身なり。これは悟を開て後に人を利益する時暫らくの方便なり。是程の事は、魔外も天狗も眞似することとなり。二に報身佛は智ある姿なり。第一の法身と申し候こそ、實の佛の御心にて候。是れ先に申しつる樣に、佛に在ても衆生に在っても、更らに變はらず、目にも見えず、耳にも聞えず、心にも及ばざる處なり。法華經に云く、「是法は思量分別の能く知る處にあらず。」金剛經に云

(一)法身。無色無形の、理佛と釋す。目に見えず、耳にきこえず。而も天地に充滿せる眞實無上世尊なり。

(二)報身。因位の修行に酬報せる佛身、極樂世界の阿彌陀佛の如し。

(三)應身。所被の衆同に應同せる佛身、釋迦佛の如し

無く果も無しなど申す由、是等も皆然る可き人々の申す事にて候へば、定めて一義あらんと覺え候へども、眞に透得候へば、何ぞ是體に亂れ候べき。本より法に二法無し。世間に是れこそ正知識と申さん人に、常に參じて聞し召さるべし。正知識とは、長老坊主によらず、遁世籠居の人の中にもあるべし。(一)羅山禪師(二)白雲守端などと申す人は、皆隱居の人にて候。是體の事を能く思食し分て御修行候べし。

又云く、本來是の如し。更に迷ふこと無く悟ること無し。謂はれ無く我は迷ひたりと思ひて、外に佛を求むる樣に思ふ心迷なり。外に別の法なし、(三)心と佛と衆生と三つの差別なし。祖師云く、「即心即佛」と。「又心の外に佛無し。心を離て佛を求むれば、地を堀て天を求むるが如し」と云へり。佛祖の言は、いかでか疑ふべき、偏に箇樣に信ずべし。明暮起ても居ても、加樣に振舞ふ物は、何物ぞと能く見れは、見る物も無く、見らるゝ物を忘れはてゝ、力竭き神疲れはてたる處を、少し力を得たりと申すなり。此に至て覺えざるに、我(四)本姿の不生不死、埋めども埋れず、燒けども燒けず、喜も憂もあらざる處を知るなり。是れこそ眞の

(一)羅山禪師。羅山道閑は巖頭全豁の嗣なり。法寶大師と云ふ。示寂年月不詳。

(二)白雲守端。揚岐方會の嗣なり。法華、龍門、興化、海會等の諸刹に歷住し、法化甚だ振ふ。宋の熙寧五年四十八歲を以て寂す。

(三)心佛衆生。『華嚴經』に「心佛及衆生是三無差別」とあり。

(四)本姿。本來の風姿の意。如何なるか吾が本姿、眼横縱鼻と參得せよ

何時を期し何に憑みて、徒に明かし暮すらん。世間有爲の法、何となくとも過すべきに、昨日は今日の爲めに移り、今日は明日の爲めに貯ふ。或は此は悲し、彼は惡しなんど思ふほどに、惡業は愈積り、善緣は愈遠ざかる。此體にして長き暗に入りなば、後悔すとも何の益かあらん。徒に野外に捨つる身を、同くば佛法の爲めに捨つ可し。努々怠るなかれ珍重。

上に細々書きて候へ共、只所詮は公案を一つ持て、何と答へんぞと案じ候へば、答へんるず樣を案じ得べく候。左樣の事候ひぬる時は、知識に參じて其樣を述べ申すべし。知識に參じて幾度も案じて、見解のあらん度ごとに述べ候なり。一句を透得する時は、千句萬句も皆透り候。其後は生死自在にして、極樂に生れんとも、都率に往かんとも、又人間に來て衆生を利益せんとも、其意樂によるべし。但だ一句を透得しても、是れを判じて出さんずる知識ぞ有り難く候。此の頃諸方を承るに、其の示めす處樣々にて、或は一切を忘れて、一物も無き處へ向へと云ひ、或は如何ともせぬ處へ向へといひ、或は憎愛無き處へ向へといひ、或は案ずるは是れ病、諸事煩ひ無き處こそ好けれといひ、或は諸法は自然の法にて、因も

(一)古帆。古ぼけたる帆布のこと。五燈會元に「僧巖頭に問ふ。古帆未だ掛けざるの時如何。頭云く、小魚大魚を呑む。掛けて後如何。頭云く後園の驢草を喫す」とあり。

(二)古人は等。禪林に柏樹子の話と稱して一則の公案たり。「僧趙州に問ふ。如何なるか是れ祖師西來意、州曰く、庭前の柏樹子」趙州は趙州觀音院從諗禪師なり。庭前柏樹子は庭さきの柏の樹のこと。

(三)把定。把住とも云ふ。師家が學人を接するに實際理致、一塵をも立せず、何物の出頭をもゆるさぬ。向上的手段を云ふ。收殺奪の意あり。

(四)放行。前に反して佛事門中一法をも捨てず、自由の往來を放下する向下的手段にして放、與、活の意あり。

風吹けば動き、雨降れば濕ふ。修行も此體になりぬれば、厭ふ可き生死も無く、欣ふ可き菩提もなし。其上には修す可き處もなく、行すべき道もなし。只是れ行住坐臥、任運自然なるものなり。さればとて、一向に木石の如くに無心の者に成れと云ふにはあらず、唯諸事に於て執心なきを云ふなり。風吹けば波立つ、波を離て水無し。境界に遇ふて衆生皆此惑性あり、此を救はん爲めに、(一)古帆掛と未掛と、小魚、大魚を呑むと云ふも倒なり。皆是れ惑性なり。此の如く擧揚し、此の如くに體裁あり、是又奇特の事にあらず、只是れ尋常の理也。此境界に遇ふて瞋恚起る、是れより外に心無し、透得して立歸て見れば、萬法は迷の法にもあらず、又悟の法にもあらず、本來歷然として不增不減なり。是れを(二)古人は如何なるか是れ佛法と問ふて、庭前の栢樹子と云ひ、柳は綠花は紅とも答へたり。さればとて、又這こそ佛法よとは取定むべからず。故に悟りし古人は、(三)把定すれば雲谷口に横はり、(四)放行すれば月寒潭に落つと云へり。此體の事を我と疑ひ無きほどに明むるを、道者とも佛者とも申すなり。愚なる哉、假令人千年を待つとも、終には其期あるべし。況や老少不定の世の中の、今日とも明日とも知れぬ身、

(一)太賢。新羅の學僧なり。傳不詳。梵網經古迹記等を作る。

(二)大慧禪師。圜悟克勤の嗣大慧宗杲。徑山に住す。宋の隆興元年八月、七十五歳にて寂す。皇帝謚して普覺禪師と云ふ。

天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、眼は横、鼻は直等是れなり。然れども此三句透得すること是れ難し、或は理に留つて知見解會を生じて、言句所説の文理を會し、或は機關に隨て、忙然として疑を絶せず、偏に機用に留り、或は向上に住して、法々自然の見をなして、無事甲中に墮す。然れども時節因縁到來して、三句通る者是れ多し。縦令不得心の者も、寢ても寤めても、立ても坐しても、精彩に眼を着て、心をゆるさず行ず可し。此の如くせば、終に得ずと云ふことなし。佛法の心得は、他事を思ふ可からず、只志の無きことを歎く可し。(一)太賢云く、「始めて入るは常に難し、難きを以て退かば、何れの時か得べき。縦令得ずとも、かくの如く歎きて死なば、臨終には獄卒の杖に打たる可からず。念々般若の功力、何ぞ空しかるべき、次の生には必ず大事を成ずべし」と。(二)大慧禪師云く、「縦令打して通らざるとも、般若の中にあると云ふ。唯是の身を思はんと思はゞ、此身を思はず、木石の如くになるべし。木人は人の打つをも痛まず、罵るをも腹立てず、謗すれども瞋らず、讃すれども喜ばず、生をも欣はず、滅をも歎かず、此は親しく彼は疎しとも思はず、用ゐれば用ゐられ、捨れば捨られ、

に答へ來れ」と。是れを答ふるに、(一)心意識を以て案ずべからず。又之れを離て案せず、道理を以ても答へず、道理を離ても答へず、只問へば答るばかりなり。鐘を打つに撞木に隨て響くが如く、名を喚ばれて、名に隨て應るが如し。利根の者は、與れば即ち答ふ。鈍根の者とて、半年一年十年二十年にも退轉なく辛苦すれば、終に透らずと云ふことなし。古人云く、「敵に向て只今勝負を決せんとする如くにせよ。毒矢の胸に立たるが如くにせよ。胸中に一團の火を燒くが如くにせよ。父母を一度に喪するが如くにせよ。百萬貫の錢を負ふて、償ふべき方便なくして、耻辱を與へらるゝが如くにせよ。此の如くせば、必ず一分の相應することあるべし。總て公案一千七百なりと雖も、山河大地、草木樹林、目に觸れ耳に聽くもの、皆公案ならずと云ふことなし。此宗に於て三重の義あり、謂はゆる(二)理致、(三)機關、(四)向上是れなり。初の理致と云ふは、諸佛の所說、並に祖師の所示の心性等の理語なり、次に機關と云ふは、諸佛祖師の眞に慈悲を垂れて、謂はゆる鼻を捻り目を瞬ろかして、乃ち云ふ、泥牛空に飛び、石馬水に入る等是れなり。のちの向上と云ふは、佛祖の直說、諸法の實相等、總て異ることなし。謂はゆる

（一）心意識。心は集起の義。意は思量の義。識は了別の義なり。小乗有部にては心意識は一體の異名なりと立て、大乗唯識宗にては、前六識を心と云ひ、第七末那識を意と云ひ。第八阿頼耶識を識と云ふと立つ。

（二）理致。理路を示して佛祖の言敎を開示するを云ふ。

（三）機關。根機に應じて種々の關門を設け階段を附して悟に入るの資助となせるもの。

（四）向上。悟の極致にして、自家本分の田地に逍遙自適するを云ふ。

起せども、無念となる。無念の處を暫らく心と云ふ。心と云ふは名のみ有つて實形はなし。古人は無心と云へり。箇樣に心得なば、念より結ぶ生死はあるべからず。此の如く見て知りはつるを、一分の見性得果と云ふなり。其上には厭ふべき生死も無く、欣ふ可き極樂も無し。迷悟の隔ても無く、凡聖の差別も無し。此處を生死を離るゝと云ひ、淨土に往生すと云ひ、佛に作るとも云ふなり。故に(一)『觀無量壽經』には、「是の心佛を作る。是の心是れ佛なり、諸佛の正遍知海は心想より生ず」と云ひ、(二)『往生禮讃』の晨朝の讃には、「西方遠しと謂ふこと莫れ」と云ひ、西方己が心に安ずる」とも云へ。又黑谷の(三)『金剛法界章』には、「阿彌陀とは、「心の異名なり」と云ふ。法華の妙の字を釋するには、妙とは心なり。是の樣に心得なば、唱へざれども鎭へに念佛し、行ぜざれども自ら極樂の衆生なり。是は教家の意なり。若し夫れ教外別傳と云ふは、鏡も影も打破して、總て(四)六識の思量を絕し、迷悟の差別を爲さず、念は有らばあれ、無くばなけれ、其れにも倚らず、是非を存せず、是非を離れず、唯知識の下す處の一句を得て、慥に透らんと工夫する也。其一句とは、知識授けて曰く、「父母未生以前の本來の面目、一句

(一)觀無量壽經。阿闍世王の逆惡が緣となり佛韋提希夫人の請に應じて王舍城王宮に於ての卷經を說く。一此あり、劉宋、畺良耶舍の譯なり。

(二)往生禮讃。往生禮讃偈と云ふ。光明寺善導作。一卷あり。六時禮讃の日課を修する行法及び其功德を說きたるもの。

(三)金剛法界章。黑谷の法然上人の作なり。一卷あり圓頓菩薩戒のことを說く。

(四)六識。眼耳鼻舌身意の六識のこと。

心を生ずれば善現じ、惡に住して心を生ずれば惡現じて、本心即ち隱沒しぬ。善惡に住せざる時は、十方世界只是れ一心なり」と。抑も諸の物を納めたる其心は何に在るぞ、尋ぬるに總て行き方なき者なり。內にも非ず外にも非ず、若し內にあらば、五藏六腑をも見るべし、若し外にあらば、唐土天竺、心に浮ぶ所皆見るべし。固に色を見ず、形を知らざれば、本心は無き者なり。本心旣に無き上には、影にて有る念はあるべからず。兩ながら無くんば、いづれにか思の影移り、業の影留らん。此の如く無き事に迷ふて、善惡の果報を受くる故に、佛の諸法は夢に似たり、又幻の如しと說き玉ふ。夢みるときは、善も惡も有り／＼と思へども、覺めて見たれば何もなし。夢幻は結ぶ初めもなく、覺めたる終りもなし。善惡の諸法は、善惡の境界に引れて生ずれども、其源を見れば始めも無く終りも無し。夢の覺めて後なきが如し。されども、夢は實は無けれとも、惡しき夢を見る時は、苦痛堪へ難し、吉夢を見る時は、喜び樂む。凡夫は此念のうちにして、生死の深き夢を見る。朝夕の境界の緣に向つて惡念をのみ起す、故に惡夢のみを見て、(一)三惡四趣に墮すと思へり。佛は善惡の起る源を知つて、執心なき故に、鎭へに念を

(一)三惡四趣。地獄、餓鬼、畜生を三惡道略して三惡と云ひ、更に修羅を加へて四惡趣略して四趣と云ふ。

れば、終には滅する後は、本の心にてあるなり。雲晴れぬれば、淸き虛空にてあるが如し。又此心を一の鏡に喩ふ。心に浮む念を、鏡に映る影に喩ふ。此心の鏡に善を作すときは、善の影映り、惡を作す時は、惡の影映る、一切の思ふ處の業、成す處の事、心の影と成て、此影に牽かれて(一)六道四生に沈淪するなり。思ふ影に牽かるゝと云ふは、一切の事を心に約束して、其約束を深く執して離さぬ程に、最後臨終に地獄餓鬼等の諸の境界を見出して、彼に隨て種々の生所に赴くなり。本より心の外には、善所もなき者ぞと知れば、何ぞ善惡の生を引くべき。譬へば世間に寒ずる時、柔なる水も堅き氷と成るが如し。氷は水の外の物に非ず。有も有と名乘らざるを、已れ執して有とし、空も空と云はざるを、已れ執して空とす。譬へば人あつて一の赤子を設けて、始めは鶴と名け、次に名を換て龜と名く、龜と名けて後は、前の鶴の名は忘て只龜とのみ認めり。又松竹等の名に替るも、替ることに前の名は忘じて、只今の名のみ執するが如し。其名を取り除て見れば、只本の赤子にてぞありける。此の如く、已れが物に名を附て置て、其名を執して無き事を有りと思て、其思に引れて流轉するなり。(二)安國師云く、「若し善に住して

(一)六道四生。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を六道と云ひ、胎、卵、濕、化を四生と云ふ。

(二)安國師。五祖弘忍の法嗣嵩嶽惠安を云ふ。唐景龍三年三月一百二十八歲にて寂す。

（二）『華嚴經』等。舊華嚴經第十一、夜摩天宮菩薩說偈品に說く如來林菩薩の偈なり、唯心偈と云ふ。

成り、他を化度せず我が自度を求めば、心聲聞緣覺と成る。智慧慈悲深ければ、心菩薩と成り、諸事を悟れば、心佛と成る。物を妬む女の直に蛇身を得たること其數多し。此の如く一心こそ、諸事に變す。佛法は更に外には無き者なり。喩へば一の金を以て十界の形を作るに、形は異なれども、金の性は是一なるが如し。諸法萬差なれども、一心を離れず。（二）『華嚴經』に云く、「三界は唯一心なり。心外に別の法なし。心と佛と及び衆生とは、是三差別なし」。又云く、「心は巧なる繪師の如し、種々の五陰を作る、一切世間の中に、心より生ぜざるは無し」と。又同しき經に云く、「此心をば淨法界の心と名く」と。淨法界の心とは、晴れたる空の如し。虛空の晴れたる時は、唯青くのみ見えて總て餘の物無きに、何處よりか來りつらん、一點の雲來ると見る程に、其雲次第にひろがりて、一天に覆ひぬれば、風を起し雨を降らす。其時は虛空の姿は皆失せて、只黑き雲のみを見る。此雲を無明と名く。諸の煩惱の根源を無明と申すなり。心も亦此の如し。何事も思はずしてある時は、晴空の如し。見聞覺知の境界に逢ふて、一念偏意う處なり起る時、妄念の雲厚く覆ふて、本心總て陰沒す。されども妄念は生ずる物にてありけ

故に古人云ふ、「物有り天地に先たづ。形無くして本寂寥。能く萬像の主と爲る。四時を逐て凋まず」只要す學道人、天然の志を起し、生佛未分、一念未起以前、精彩を著け見來り見去り、窮め來り窮め去て、靜に見よ、修行積り工夫至らば、明々として自已本來の心地と本地の風光とを見つ可し。若し能く此の如く、實に此心を知る者は、生死を出で佛界を越えて、獨樂安閑休歇無心の道人也。光陰速に遷り、時節留まらず、勉旃々々。夫生死を出づる道は、佛祖の示す所なりと雖も、其源を尋ぬるに、心を明むるに過ぎたるはなし。然るを人皆心即是佛なることを知らず、外に佛を覓め、徒に疲勞して、終に實理に稱ふ事無し。譬へば南に行ける親を知らず、其子北を尋ねて行くが故に、行くに隨て彌々親に遠ざかるが如し。又心が即佛なるのみに非ず、(一)十界十如、三千世界、山河大地、草木國土、淨土穢土、依正の二法（依は國土等 正は衆生等）悉皆心の内に具足せり。心は本より自性無きが故に、所爲の業に隨ひ、向ふ境界に付て移り行くものなり。物を害し物を盜み、罪を犯し法を謗れば、心地獄と成り、慳貪邪見なれば、心餓鬼となる、愚癡闇鈍なれば心畜生と成り、偏執我慢なれば、心修羅と成る、(二)五戒十善を持てば、心人天と

(一)十界十如。地獄餓鬼乃至菩薩佛等の十界の一一に如是相、如是性、等の十如を見足すと云ふこと。

(二)五戒十善。不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不飲酒を五戒と云ひ此の中不飲酒を除きたる餘の四戒に不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見の六戒を加へたるを十戒と云ふ。共に在家人の戒法なり

稱名念佛の人におなじ。又株を守て兎を待つに異らず。一千七百則の公案は、盡虛空に逼塞して、間に髮を容れず、(一)萬里一條の鐵なりと識得して、迷や悟や、得や失や、本來一物として取るべきともなく、又捨つべきこともなしと識得すれば、一法の情に當ることとなし。此の何をか提撕せん。(二)江月照し松風吹く、永夜の淸宵何の所爲ぞ」と。

又說ひて曰く、「初心晚學の人、若し自己を明らめ生死を明らめんと要せば、第一に道に向ふこと莫れ。況や迷を厭はんや。目前に色に着せず、心內に理を認めず、內外洞然として、手足を離れて看る處なかれ。此に到て、若し實に工夫を失せず、己れが工夫をかへて、當下に所知忘じ、空所に透脫し去らば、廓落として(三)脫體圓成ならん。萬緣萬境、自無く他無く、目無くして見、耳無くして聞くが如し。此の如くなるを、且く名けて大安樂大自在無碍の道場と云ふ。疑ふ莫れ。疑ふ莫れ。記取せよ。珍重。

又曰く、(三)法々本來法、心々無別心。世界國土未だ顯はれず、佛界衆生界未だ別れざる以前、此心獨り顯はれ、天に前だち地に前だち、古に光り今に輝く。是

(一)萬里一條の鐵。盡界絶對にして二物對待せざるの意。江戸の空氣と長崎の空氣、動物が吸ふてはき出すには、ちがひはなきなり。

(二)江月照し松風吹く。永嘉大師の『證道歌』の文なり。江月照し、松風吹く、幾度も讀んで其の意を江月にただし、松風に問ふべし。

(三)脫體圓成。體を露して隱すところなきを脫體といふ、有りの儘、木地の儘、分明なるの意、鶴の脚は長く、鴨の足は短し、これが脫體圓成、長きは長き儘、短きは短き儘、餘計な世話をなすべからず。

(四)法々本來法。心々無別心、天は高く地は低く、山聳え川流る、法々本來法、目を竪にせず、鼻を横にせず、心を臍下に据ゑて篤と思案すべし。

(一)大用現前の處。衲僧本分の自在無碍なる活三昧のあらはるゝ處の意。

(二)銀山鐵壁。銀鐵は堅くして鑽り難きを表し。山壁は險難にして攀ち難きを表す。寄もつけぬ、齒も立たぬ、棒にも挺にもあはぬの意。

(三)一千七百則の公案。公案は公府の案文の意。傳燈錄に見ゆる古德の話頭公案に一千七百あるを云ふ。

(四)不立文字の宗旨。禪宗のこと、直指人心見性成佛經論文字は月をさすの指。不淨を拭ふの故紙に過ぎず我が物にならずば役には立たぬなり

處なり。

問ふて曰く「如何なるか是れ(一)大用現前の處」。

答へて曰く「(二)銀山鐵壁」。

問ふて曰く「悟る時も銀山鐵壁。悟らざる時も銀山鐵壁と云ふ。同異如何。」

答へて曰く「銀山と云ふは、此性體、淸淨光明にして、終日般若の智を行じ、通霄圓覺の靈光を放て、天眞獨朗なる本源淸淨の心體を銀山と云ふなり。鐵壁と云ふは、此性體、十方虛空遍法界に逼塞して、進めば前にあり、退けば後にさゝへ、口を開かんとすれば齶をさゝへて、言語を出だして明らめざる處、此を鐵壁と云ふなり。此性體は、諸佛出世すれども、覺にも同せず、衆生輪廻すれども、迷にも同せず、湛然寂靜として、迷悟にも同せず、故に悟る時も銀山鐵壁、悟らざる時も銀山鐵壁と云ふなり。凡そ(三)一千七百則の公案は、皆一心の異名なり。或時は體を指し、或時は用を指し相を指す。或時は體用相を一句に現はす時あり。此の如く語は無量なりと雖も、指す處は本地の風光、本來の面目を顯はさず。人皆其句を守りて、其理を知らず、此の如き人は、(四)不立文字の宗旨を滅却して、

答へて曰く、「相傳と云ふは、一法を相傳するに非ず。佛見法見、有相無相ともに(一)截斷し盡して、胸中に一物も存する處なくして、孤明歷々赤洒々として、三世十方を貫通すれども、鳥道の虛玄なるに似て、羚羊の角を掛けたるに異らず。是れ即ち大安樂の處なり。唯此安心安樂の處を傳へて、更に一法として人に授くる所なし。されば道無心にして人に合ひ、人無心にして道に合ふと云へり。世間の中に有りとあらゆる處の物は、皆是道なり。道と心と二にあらず、心即是道、道即是心なり。心と道と一如なれば、誰あつてか道を行すべき、行ずれば二法となる。刀刀を斬らず、眼眼を見ずの喩の如し。父母所生の口を開て、心と說き性と說き、禪と說き道と說く、皆是れ是非海に墮す。佛に逢ては佛を殺し、祖に逢ては祖を殺し、六親眷屬に逢ては六親眷屬を殺し、一塵一法も立てざる、此れ大道に至る修行の體なり。若し心中にこゝぞと思ひ定むる處あれば、(二)六十二見を出でず。古人云ふ、眞證の處に至らんと思はゞ、直に目前を識得せよ。目前は是れ何物ぞ。目前は是れ法、法は是れ心なり。心法總て一如ならば、何ぞ法を尋ねん、尋ぬれば機法殊なり。心法共に忘すれば、即ち大用現前して軌則を存せざる

(一)截斷。タチキルこと。

(二)六十二見。六十二種の邪なる見解の意、即ち色受等の五蘊の一一に四種の見を起し總に二十見あり。此の見三世に亘るが故に六十見あり、而して此の見はもと斷常の二見を以て本とす。故に六十二見を成す。

大安樂の處なり」。

問ふて曰く、「一法不修の時は、安然として便り無し。此の如くなる時は、無爲無事の見に落ちんや否や」。

答へて曰く、「しわざなき處を好しと思はば、(一)無爲無事の見に墮す可し。本來無我と悟る時は、又何物あつてか無爲無事を好み取るべきや。眞に汝が共碍障する無明の我を急に打殺して看よ。山虛にして風、石を落し、樓靜かにして月、門を侵す」

問ふて曰く、「如何なるか是れ(二)佛祖不傳の處」。

答へて曰く、「來つて問へば早く天地遙に隔つ。有心にして求め、有念にして行ずれば、棒を擧て月を打ち、履を隔て痒を搔くに殊ならず。此汝が傳心の處にあらず。直に前念後念に渉らず、驀然として箭の絃を離れて返回の勢なきが如くならば、啞子の夢を見て他に向て語り得ざれども、心中明々たる處あるが如し。是れ即ち佛祖不傳の處なり」。

問ふて曰く、「既に一物も授くる處なしと云ふが如きんは、佛より(三)二十八代の祖師何としてか相傳と云ふ」。

(一)無爲無事の見。爲作造作なきを善しとする見解のこと、總べて物は執着を厭ふ。著を離るれば、一切可ならざるなし。是れはいかん彼はいかんと云ふ。即ち畢竟なまざとりの分齊これをハタ羅漢と云ふ、撲殺すべし。

(二)佛祖不傳の處。佛も說かず、祖も傳へず。

(三)二十八代。世尊法を第一祖迦葉尊者に傳へしより乃至二十八傳して達磨大師に至る。西天の四七と云ふも同じ、

汝が四大の地大に當る時、朦々として物を知らざるなり。物を愛し慕ふ心深ふして、泣けば涙の浮ぶことは、汝が四大の中の水大に當る精なり。何物をか我と云べきや。手をあげ足をおろし、東西南北に往來し、動きはたらき、音を出す。此れ汝が四大の中の風大のわざなり。何物をか我と云べき。又汝が一大事の命と云ふも息なり。息は風大にして、虚空にみちふさがりたる風なり。此四大は、本來法界の正體なり、何物をか我と云ふ可き。衆生の我と思へる物は、貪瞋癡なり、此を以て我とせり。如來の我と云ふは、(一)常樂我淨の當體、草木國土、有りとあらゆる處の物を我と云ふ。螻蟻蚊虻、蠢動含靈に到るまで、悉く是れ我なりと識得すれば、總て隔もなし。亦我とて取定めて愛す可き物も無し。朦々たるも法界の朦々、惺々たるも法界と惺々たり。此朦々惺々共に更に汝が朦々惺々に非ず、常住不變の妙心の妙用なり。唯汝がひごろの貪瞋癡を認て我ありと思へる、其我を急に打失して看よ。其(二)無明の我を殺得する時、誰あつて亦生死に迷ふ可けんや。本來生死無しと識得せば、誰あつてか修行を用ゆ可き。一法の得可き無く、一法の捨つべき無し、一塵一法も胸中に物無し。圓融無際大法現前の處、此即ち

(一)常樂我淨。佛の四德とも涅槃の四德とも云ふ。常住、安樂、自在、無漏淸淨の義なり。

(二)無明の我。無明は六煩惱の一にて事理に闇き精神作用を云ふ。生者必滅會者定離、死んだ吾が子の年をかぞへ、果ては人の子までも死ねかしと思ふは此れ無明の故なり。これが迷ひの根木なり。

(一)妙心。心は法界心、心即ち宇宙の本體、近くしては吾等の一心を云ふ。此の心妙不思議なるが故に涅槃の妙心とも、單に妙心とも稱す。

(二)本地の風光。本來の面目とも云ふ、飾り氣なき木地なりの風物光景の意。柳は綠に、花は紅なり。犬はワンと鳴き。雀はチユウと云ふ。これが本地の風光なり。

問ふ、「萬法は無念無心にして是非分別無し、我等は物ごとに是非分別あり、何としてか法と一如たる可きや」。

答て曰く、「我等が見聞覺知の精靈は、悉く虚空を以て體とする常住不變の(一)妙心より出でたる妙用なり。此妙用の鏡清ければ、萬像森羅の影、妙用の鏡にうかぶ。衆生は此一念本來の妙用なることを知らずして、此一念を愛し憎まば、癡狗の塊を逐ふが如し。汝看よ、世間の中に有りとあらゆる所の物は、皆これ是と非となり、此二を離れず。是は是にして無心無念なり、非は非にして無心無念なり。故に是非得失、生死轉變、一切の諸法は、皆是れ汝が(二)本地の風光、本來の面目なり」。

問ふて曰く、「此の如く心と性と一如なりと見れども、動もすれば物によりて、或時は愛し、或時は瞋り、或時は朦々、或時は惺々、或時は散亂す。衆生皆此病あり、何としてか是非一如と觀ず可き」。

答へて曰く、「汝が一の忿る精は、汝が四大の中の火大に當る時、面も赤み身の中もほゝめく。此は是れ火大の精なれば、何物をか我と云ふ可き。朦々たる時は、

大應國師法語

夫生死を離れ菩提を修せんと思はゞ、先づ此心と體とを明らむべし。體といふは汝が四大地水火風是れなり。此四大は、本來不生不滅にして、總じて生死なし。不來不去常住不變の法界より現じたる四大なれば、無主無我にして、來る時も法界より現じ、去る時も亦法界に歸す。故に心性は虛空と同體にして、(一)朕跡なく涯岸なし。萬像も增すことなく、五蘊も亂ることなし、(二)圓陀々孤迥々圓滿無際なり。只此正體は十方虛空遍法界に彌綸して、一塵一法も他物にあらず、草木國土山河大地、塵々法々、森羅萬像、悉く是れ本地の風光、本來の面目なり。此性體は、現定の見聞覺知の中に在て、嘗て見聞覺知に同じからず。諸佛出世すれども此性體は出世せず。衆生輪廻すれども、此性體は輪廻せず。(三)威音那畔空劫已前より天眞孤り朗かにして、虛空を以て體とし、虛空を以て性とす。諸佛の眞源、衆生の本性たり。草木國土有りとあらゆる物、皆此を性とす。故に萬法と心法とは一如なり。是れ卽心卽佛なり。

(一)朕迹。朕は兆迹は跡なり。きざしあとかたと云ふ意。

(二)圓陀々。孤迴々。陀々は佳麗美豔の意、圓くして美麗なること珠の如くなるを圓陀々と云ひ、孤は孤絶にして比倫なきこと、迴々は寥遠なるを貌にして物の比倫を絕したるを孤迴々と云ふ。

(三)威音那畔空劫以前。過去莊嚴劫に出世せる最初の佛を威音王佛と云ふ。此の佛の出世の前卽ち過去のその過去と云ふこと天地未分の前、父母未生已前と云ふに同じ。

群臣といふは(一)六賊にたとふ。かの六賊に諸善をうばひとられて、たつ方もなきをば、出離の縁なきにたとふ。泥中よりこがねをとりいだして富貴自在になるとゝいふは、念佛三昧によりて信心決定しぬれば須臾に(二)安樂の往生をうるにたとふ。穢物につゝみて泥中にをくといふは、(三)五濁の凡夫穢惡の女人を正機とするにたとふるなり。

一。機法一體之事

機法一體といふは、たきゞに火をつけつれば、はなるゝことなし。たきゞは行者の心にたとふ、火は彌陀の攝取不捨の光明にたとふるなり。心光に照護せられたてまつりぬれば、わが心をはなれて佛心もなく、佛心をはなれてわが心もなきものなり。これを機法一體といふ。されば機法一體とはすなはち南無阿彌陀佛なり。

實治二戊申年仲冬　釋眞佛四十歳記之

正嘉二戊午二月二日　釋眞佛書寫之

安心決定鈔　終

(一)六賊。色、聲、香、味、觸、法の六塵を賊に喩ふ。

(二)安樂。安樂國極樂淨土のことなり。

(三)五濁。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の五濁に汚されたる惡世をいふ。

ののち無記になるとも往生すべし。すでに『群疑論』に、無記の心ながら往生すといふは、攝取の光明にてらされぬれば、その無記の心はやみて慶喜心にて往生すといへり。また『觀經』の下三品は、いまだ歸命せざりしときは、地獄の相現じて狂亂せしかども、(一)知識にすゝめられて歸命せしかば、往生しき。また平生に歸命しつるひとは、いきながら攝取の益にあつかるゆへに、臨終にも心轉倒せずして往生す。これを正念往生となづくるなり。また歸命の信心おこりぬるうへは、たとひこゑにいださずしてをはるとも、なを往生すべしと『法鼓經』にみえたり。これを意念往生といふなり、されば、とにもかくにも、他力不思議の信心決定しぬれば、往生うたがふべからざるものなり。

一『觀佛三昧經』にのたまはく、長者あり。一人のむすめあり。最後の處分に(二)閻浮檀金をあたふ。穢物につゝみて泥中にうづみておく。國王、群臣をつかはして、うばひとらんとす。この泥をばふみゆけども、しらずしてかへる。そのゝち、この女人、とりいだしてあきなふに、さきよりもなを富貴になる。これはこれたとへなり。國王といふは、わが身の(三)心王にたとふ。たからといふは諸善にたとふ。

(一)知識。人を敎へて佛道に入らしむる善知識。

(二)閻浮檀金。閻浮(Jambu)、樹の下を流るゝ江(Nada)水中に生ずる沙金をいふ。金の中の最も貴きもの也。

(三)心王。六識、八識即ち我等の心識をいふ。從屬する心所に對して心王と名く。

(一)『守護國界經』にみえたり。されば、たゞさきの四人ながら、歸命の心おこりたらば、みな往生しけるにてあるべし。天親菩薩の(二)『往生論』に「歸命盡十方無礙光如來」といへり。ふかき法も、あさきたとへにて、こゝろえらるべし。たとへば、日は觀音なり。その觀音のひかりをば、みどり子よりまなこにえたれども、いとけなきときはしらず。すこしこざかしくなりて、自力にて「わが目のひかりにてこそあれ」とおもひたらんに、よく日輪のこゝろをしりたらんひと、「おのが目のひかりならば、よるこそものをみるべけれ、すみやかに、もとの日光に歸すべし」といはんを信じて、日天のひかりに歸しつるものならば、わがまなこのひかり、やがて觀音のひかりなるがごとし。歸命の義もまたかくのごとし。しらざるときのいのちも、阿彌陀の御いのちなりけれども、いとけなきときはしらず、すこしこざかしく、自力になりて、わがいのちとおもひたらんおり、(三)善知識「もとの阿彌陀のいのちへ歸せよ」とおしふるをきゝて、(四)歸命無量壽覺しつれば、わがいのち無量壽なりと信ずるなり。かくのごとく歸命するを、正念をうとは釋するなり。すでに歸命して正念をえたらんものは、たとひ(五)かせおもくして、この歸命

(一)『守護國界經』此の經には人界に生るゝ十相、天に生るゝ十相を說く其の中に「南謨佛陀」等と稱ふる一相を示す。

(二)『往生論』。『往生淨土論』の初には「世尊、我一心に盡十無礙光如來に歸命したてまつる」とあり。

(三)善知識。正法を說きて世を導く人をいふ。

(四)歸命無量壽覺 南無(Namus)は歸命、阿彌陀(Amitayus)は無量壽、佛(Buddha)は覺と釋す。阿彌陀佛に歸命するなり。

(五)かせ。桎梏枷鎖業報の障難を架に喩ふ。

(一)無記ならざりしとき、攝取の光明にてらされ、歸命の信心おこりたりしかども、生死の身をうけしより、しかるべき業因にて、無記になりたれども、往生はすがごとし。他力の佛智にひかれてうたがひなし。たとへば睡眠したれども月のひかりはてらすがごとし。無記心のなかにも、攝取のひかりたえざれば、ひかりのちからにて、無記の心ながら往生するなり。因果の理をしらざるものは、なにしに佛の御ちからにて、すこしきほどの無記にもなしたまふぞと難じ、また無記ならんほどにてはよも往生せじなんどおもふは、それは、くはしく聖教をしらず、因果の道理にまどひ、佛智の不思議をうたがふゆへなり。四には意念往生、これは(二)『法鼓經』にみえたり。こゝにいだしてとなへずとも、こゝろに念じて往生するなり。この四種の往生は、(三)黑谷の上人の御料簡なり。よのつねには、くはしくこのことをしらずして、臨終に念佛まふさず、また無記ならんは、往生せずといひ、名號をとなへたらば往生とおもふは、さることも、あらんずれども、それはなをおほやうなり。(四)五百の長者の子は、臨終の佛名をとなへたりしかども往生せざりしやうに臨終にこゑにいだすとも、歸命の信心おこらざらんものは、人天に生ずべしと

(一)無記。善にも惡にも非ず是とも非とも識別すべからざるをいふ、老ひて朽木の如く成り、善惡淨穢の情を失ひたる狀態。

(二)『法鼓經』。劉宋の求那跋陀羅の譯、その意念往生の說は『安樂集』に引用す。

(三)黑谷の上人。法然上人をいふ。

(四)五百の長者の子。月德長者に五百の子あり。臨終に「南無佛」と稱へて天に生れたりと『觀佛三昧經』に說けり。

し日のてらす因ありとも(一)生盲のものはみるべからず。またまなこひらきたる縁ありとも闇夜にはみるべからず。日とまなこと因縁和合してものをみるがごとし。歸命の一念に本願の功徳をうけとりて往生の大事をとぐべきものなり。歸命の心はまなこのごとし。攝取のひかりは日のごとし。南無はすなはち歸命、これまなこなり。阿彌陀佛はすなはち他力弘願の法體、これ日輪なり。よて本願の功徳をうけとることは、(二)宿善の機、南無と歸命して阿彌陀佛ととなふる六字のうちに、萬行萬善恒沙の功徳、たゞ一聲に成就するなり。かるがゆへに、ほかに功徳善根をもとむべからず。

一。四種往生の事。

四種の往生といふは、一には正念往生。『阿彌陀經』に(三)「心不轉倒即得往生」ととくこれなり。二には狂亂往生。『觀經』の(四)下品にときてのたまはく、十惡、破戒、五逆、はじめは臨終狂亂して手に虚空をにぎり身よりしろきあせをながし地獄の猛火現ぜしかども、善知識にあふて、もしは一聲、もしは一念、もしは十聲にて往生す。三には無記往生。これは(五)『群疑論』にみえたり。このひと、いまだ

(一)生盲。生れつきのめくらをいふ。

(二)宿善。過去に善を修めたるをいふ。

(三)「心不轉倒即得往生」心、轉倒せずして即ち往生を得。

(四)下品。『觀無量壽經』に説ける九品往生の中の下三品なり。下品上生は十惡、下品中生は破戒、下品下生は五逆の罪人なり。

(五)『群疑論』。唐の懷感の『釋淨土群疑論』七に論述せり。

（一）攝取不捨の佛體、すなはち凡夫往生の正定業なるゆへに、名號も名體不二のゆへに正定業なり。この機法一體の南無阿彌陀佛になりかへるを念佛三昧といふ。かるがゆへに機の念不念によらず、佛の無礙智より機法一體に成ずるゆへに、名號すなはち無爲無漏なり。このこゝろをあらはして（二）「極樂無爲」といふなり。念佛三昧といふは、機の念を本とするにあらず。佛の大悲の衆生を攝取したまへることを念ずるなり。佛の功德ももとより衆生のところに機法一體に成ぜるゆへに歸命の心のおこるといふもはじめて歸するにあらず、機法一體に成ぜし功德が、衆生の意業にうかびいづるなり。南無阿彌陀佛と稱するも、稱して佛體にちかづくにあらず。機法一體の正覺の功德、衆生の口業にあらはるゝなり。信ずれば佛體にかへり、稱すれば佛體にかへるなり。

一。自力他力日輪の事。

自力にて往生せんとおもふは、闇夜に、わがまなこのちからにて、ものをみんとおもはんがごとし。さらにかなふべからず。日輪のひかりを、わがまなこにうけとりて、（三）所緣の境をてらしみる、これしかしながら日輪のちからなり。たゞ

（一）攝取不捨。彌陀の光明、念佛の人を攝め取りて捨てず。

（二）極樂無爲。善導の『法事讚』に「極樂無爲涅槃界」と云へり。

（三）所緣の境。認知せらるゝ對象をいふ。

に、名號すなはち無爲常住なりとこゝろうるなり。(一)「阿彌陀佛すなはちこれその行」といへるこのこゝろなり。またいまいふところの念佛三昧は、われらが稱禮念ずれども自の行にはあらず、たゞこれ阿彌陀佛の行を行ずるなりといふは、歸命の心本願にのりて三業みな佛體のうへに乘じぬれば、身も佛をはなれたる身にあらず、こゝろも佛をはなれたるこゝろにあちず。くちに念ずるも、機法一體の正覺のかたじけなさを稱し、禮するも他力の恩徳の身にあまるうれしさを禮するゆへに、われらは稱すれども念ずれども、機の功をつのるにあらず、たゞこれ阿彌陀佛の凡夫の行を成ぜしところを行ずるなりといふなり。佛體無爲無漏なり。依正無爲無漏なり。されば名體不二のゆへに名號もまた無爲無漏なり。かるがゆへに念佛三昧になりかへりて(二)「もばらにして、またもぱらなれ」といふなり。專の字二重なり。まづ(三)雜行をすてゝ(四)正行をとる。これ一重の專なり。そのうへに助業をさしおきて正定業になりかへる。また一重の專なり。また、はじめの專は一行なりはのちの專は一心なり。一行心なるを「專復專」といふなり。この正定業の體は機の三業のくらゐの念佛にあらず。時節の久近をとはず。行住坐臥をえらばず

(一)「阿彌陀佛すなはち、これその行」。善導の『觀經玄義分』の釋。

(二)「もばらにしてまたもばらなれ」。善導の『法事讚』に「教念彌陀專復專」の句あり

(三)雜行。往生の正行に非ざる餘善餘行を廻向して極樂に往生せんとするをいふ。

(四)正行。彌陀の淨土に往生する正しき行業をいふ。善導の『觀經疏散善義』には讀誦、觀察、禮拜、稱名、讃歎供養の五種の正行を釋顯せり。此の中、稱名は第十八の本願に正しく誓ひ定められし行なれば之を正定業と爲し、餘の四行を助業と爲す。

（一）おほやけもの。公共の物のやうに思ひなして我物と思はぬをいふ。

べきのりものとなりたまふなり。かるがゆへに、歸命の心、本願に乘じぬれば、三業みな佛體にもたるといふなり。佛の願行は、さらに他のことにあらず、一向にわれらが往生の願行の體なるがゆへに、佛果の正覺のほかに往生の行を論ぜざるなり。このいはれをきゝながら、佛の正覺をば、（一）おほやけものなるやうにて、さておいて、いかゞして道心をもおこし行をもいさぎよくして往生せんずるとおもはんは、かなしかるべき執心なり。佛の正覺すなはち衆生の往生を成ずる體なれば、佛體すなはち往生の願なり行なり。この行は衆生の念不念によるべき行にあらず。かるがゆへに、佛果の正覺のほかに往生の行を論ぜずといふなり。この正覺を心に領解するを三心とも信心ともいふ。この機法一體の正覺は、名體不二なるゆへに、これをくちにとなふるを南無阿彌陀佛といふ。かるがゆへに、心に信ずるも正覺の一念にかへり、くちにとなふるも正覺の一念にかへる。たとひ千聲となふるとも、正覺の一念をばいづべからず。またものぐさく懈怠ならんときは、となへず念ぜずして夜をあかし日をくらすとも、他力の信心本願にのりゐなば、佛體すなはち長時の行なれば、さらにたゆむことなく間斷なき行體なるゆへ

て衆生の生死のきづなをきりて(一)不退の報土に生ずべきいはれを成就したまへる功德を念佛して、歸命の心本願に乘じぬれば、衆生の(三)三業、佛體にもたれて、佛果の正覺にのぼる。かるがゆへに、いまいふところの念佛三昧といふは、われらが稱禮念ずれども自の行にあらず。たゞこれ、阿彌陀佛の行を行ずるなりとこゝろうべし。大願といふは、五劫思惟の本願、業力といふは、兆載永劫の行業、乃至十劫正覺ののちの佛果の萬德なり。この願行の功德は、ひとへに未來惡世の無智のわれらがために、かはりてはげみおこなひたまひて、十方衆生のうへごとに、生死のきづなきれはてゝ、不退の報土に願行圓滿せしとき、機法一體の正覺を成じたまひき。この正覺の體を念ずるを念佛三昧といふ。ゆへに、さらに機の三業にはとゞむべからず。うちまかせでは、機よりしてこそ生死のきづなをきるべき行をもはげみ報土にいるべき願行をもいとなむべきに(四)修因感果の道理にこえたる別異の弘願なるゆへに、佛の大願業力をもて凡夫の往生はしたゝめ成じたまひけることのかたじけなさよと歸命すれば、衆生の三業は、(五)能乘となりて、うへにのせられ、彌陀の願力は、所乘となりて、われらが(六)報佛報土へ生ず

(一)不退。證果の退轉せざるをいふ。

(二)歸命。彌陀の本願の敎命に歸順するをいふ。

(三)三業。口に稱へ身に禮し意に念ずるをいふ。

(四)修因感果。因行を修して證果を感得するをいふ。

(五)能乘。乘る方を能乘と云ひ乘らるる方を所乘と云ふ。

(六)報佛報土。化佛化土に對し、願行酬報の眞實の佛土をいふ。

ひ念佛の行なりとも、自力の念佛は、隨緣の雜善にひとしかるべき歟。うちまかせて、ひとのおもへる念佛は、こゝろには淨土の(一)依正をも觀念し、くちには名號をもとなふるときばかり、念佛はあり、念ぜず、となへざるときは、念佛もなしとおもへり。このくらゐの念佛ならば、無爲常住の念佛とはいひがたし。となふるときはいでき、となへざるときはうせば、まことに無常轉變の念佛なり。無爲とは、なすことなしとかけり。(二)小乘には(三)三無爲といへりそのなかに、虛空無爲といふは、虛空はうすることもなく、はじめていでくることもなし。天然なることはりなり。(四)大乘には、眞如法性等の常住不變の理を、無爲と談ずるなり(五)序題門に「法身常住比若虛空」と釋せらるゝも、かのくにの(六)常住の益をあらはすなり。かるがゆへに、極樂を無爲常住の國といふは、凡夫のなすによりて、うせもし、いできもすることのなきなり。念佛三昧もまたかくのごとし。衆生の念ずればとて、はじめていでき、わするればとて、うする法にあらず。よく／＼、このことはりをこゝろうべきなり。

おほよそ念佛といふは佛を念ずとなり。佛を念ずといふは、佛の大願業力をも

(一)依正。依報の國土と正報の佛菩薩の莊嚴をいふ。
(二)小乘。聲聞緣覺の小機が小涅槃を得る法門をいふ。
(三)三無爲。虛空無爲。擇滅無爲。非擇滅無爲。
(四)大乘。菩薩の大機が大涅槃を得る法門をいふ。
(五)序題門。善導の『觀經玄義分』の七門料簡の第一なり。其の第二釋名門の釋に「法身は常住にして、たとへば、虛空のごとし」とあり。
(六)常住。生滅轉變なきをいふ。

一人なりとも、かゝる不思議の願行を信ずることあらば、まことに佛恩を報ずるなるべし。かるがゆへは（一）『安樂集』には、「すでに他力の乘ずべきみちあり。つたなく自力にかゝはりて、いたづらに（二）火宅にあらんことを、おもはざれ」といへり。このこと、まことなるかな。自力のひがおもひをあらためて、他力の一心を決定し、（三）論主の指歸をまもりて、まよひをひるがへして安養世界の正覺淨華の中に化生し、微妙の法樂をうべし。また（四）『法事讃』に「極樂無爲涅槃界、隨緣雜善恐難生、故使如來選要法、教念彌陀專復專」といへり。この文のこゝろは、極樂は、無爲無漏のさかひなれば、有爲有漏の雜善にては、おそらくはむまれがたし。（五）無爲無漏の念佛三昧に歸してぞ、無爲常住の（六）報土には生ずべきといふなり。まづ隨緣の雜善といふは、自力の行をさすなり。眞實に佛法につきて領解もあり信心もおこることはなくして、わがしたしきものゝ律僧にてあれば、戒は世にたふときことなりといひ、あるひは今生のいのりのために（七）眞言をせさすれば結緣もむなしからず眞言たふとしなんどいふ體に、便宜にひかれ緣にしたがひて修する善なるがゆへに、隨緣の雜善ときらはるゝなり。このくらゐならば、たと

（一）『安樂集』。唐の道綽の撰。

（二）火宅。五濁の世界を喩へて云ふ

（三）論主。『淨土論』の主。天親菩薩をいふ。

（四）『法事讃』唐の善導の撰「極樂は無爲涅槃界なり。隨緣の雜善、恐らくは生れ難し。故に如來をして要法を選び彌陀を念ずるを教ふること專にしてまた專ならしむ」と云へり。

（五）無爲無漏。爲作せらるゝことなく、生滅を離るゝを無爲と云ひ。煩惱なきを無漏と云ふ。

（六）報土。因位の願行に酬報して得たる報身佛の居する國土をいふ。

（七）眞言。秘密の咒を誦するをいふ

(一)三縁のなかに「口につねに、身につねに」と釋する、このこゝろなり。佛の三業の功徳を信ずるゆへに、衆生の三業、如來の佛智と一體にして、佛の(二)長時修の功德、衆生の身口意にあらはるゝところなり。また唐朝に、(三)傅大士とて、ゆゝしく大乘をもさとり、外典にも達して、たふときひとおはしき。そのことばにいはく、「あさな〳〵佛とともにおき、ゆふな〳〵佛をいだきてふす」といへり。これは聖道の通法門の、眞如の理佛をさして佛といふといへども、修得のかたよりおもへば、すこしもたがふまじきなり。攝取の心光に照護せられたてまつらば、行者もまたかくのごとし。あさな〳〵報佛の功徳をもちながらおき、ゆふな〳〵彌陀の佛智とともにふす。うとからん佛の功德は機にとをければいかゞはせん。眞如法性の理はちかけれども、さとりなき機にはちからおよばず。わがちからも、さとりもいらぬ他力の願行を、ひさしく身にたもちながら、よしなき自力の執心にほだされて、むなしく流轉の故鄕にかへらんこと、かへすがへすもかなしかるべきことなり。釋尊もいかばかりか(四)往來娑婆八千返の甲斐なきことをあはれみ彌陀もいかばかりか(五)難化能化のしるしなきことを、かなしみたまふらん。もし

(一)三緣。親緣、近緣、增上緣をいふ。善導の『定善義』に親緣を釋して「口に常に佛を稱すれば佛即ち之を聞きたまふ、身に常に佛を禮敬すれば佛即ち之を見たまふ。心に常に佛を念ずれば佛即ち之を知りたまふ」と云へり。

(二)長時修。永劫倦むことなく修行せるをいふ。

(三)傅大士。東陽郡の人、姓は傅、名は翕、字は玄風善慧大士と號す。陳の大建元年に寂す。引用の語は『禪林類聚』に出づ。

(四)往來娑婆。釋尊この娑婆世界へ往來し給ふこと八千返なりと『梵網經』に說けり。

(五)難化能化。教化し難き愚惡の衆生を能く厭はず教化するをいふ。

り。佛心を蓮華とたとふることは、凡夫の煩惱の泥濁にそまざるさとりなるゆへなり。なにとして佛心の蓮華よりは生ずるぞといふに、(一)曇鸞この文を「同一に念佛して、別の道なきがゆへに」と釋したまへり。とをく通ずるに、四海みな兄弟なり。善惡機ことに、九品くらゐかはれども、ともに他力の願行をたのみ、おなじく正覺の體に歸することは、かはらざるがゆへに、「同一念佛して別の道なきがゆへに」といへり。またさきに往生するひとも、他力の願行に歸して往生し、のちに往生するひとも、正覺の一念に歸して往生す。心蓮華のうちにいたるゆへに、四海みは兄弟なりといふなり。佛身をみるものは佛心をみたてまつる。佛心といふは大慈悲これなり。佛心はわれらを愍念したまふこと、骨髓にとほりてそみつきたまへり。たとへば、火の炭におこりつきたるがごとし。はなたんとするとも、はなるべからず。(二)攝取の心光われらをてらして、身より髓にとほる。心は(三)三毒煩惱の心までも、佛の功德のそみつかぬところはなし。機法もとより一體なるところを、南無阿彌陀佛といふなり。この信心おこりぬるうへは、口業にはたとひとき〴〵念佛すとも、常念佛の衆生にてあるべきなり。

(一)曇鸞等。『淨土論註』の解釋。

(二)攝取の心光。念佛の衆生を攝め取る佛の大悲心の光明をいふ。

(三)三毒煩惱。貪欲、瞋恚、愚癡。

國」この文のこゝろは「世尊、われ一心に盡十方無礙光如來に歸命し、ねがはくは安樂國にむまれん」となり。天親菩薩また世親菩薩といふ。天竺には婆藪槃頭菩薩ともいふ。『往生論』とは此の菩薩のつくりたまひたる論なり。この論には、(一)三經通申のことはりをもて、淨土の依正二報の莊嚴を讚嘆し、ひろく(二)廣略相入のすがたを示す。よりて具には『無量壽經優婆提舍願生偈』といふ。「世尊我一心」といふは、論主自ら教主世尊につげて「我一心にかの盡十方無礙光如來に歸命して安樂世界に生れむとねがふ」となり。また「如來淨華衆、正覺華化生」といへり。他力の一心をえたる行者を淨華衆とはいふなり。これは、おなじく正覺のはなより生ずるなり。正覺華といふは、衆生の往生をかけものにして「衆生もし生ぜずば正覺をとらじ」とちかひたまひし法藏菩薩の十方衆生の願行成就せしとき機法一體の正覺成じたまへる慈悲の御こゝろのあらはれたまへる心蓮華を正覺華とはいふなり。これを我師(三)『和讃』に「如來淨華の聖衆は、正覺のはなより(四)化生して、衆生の願樂こと〴〵く、すみやかにとく滿足す」といへり。又(五)第七の觀には「除苦惱法」とゝとき、下々品には、五逆の衆生を來迎する蓮華ととくな

(一)三經通申。淨土三經(『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』)の義意を通じて申述したるをいふ。

(二)廣略相入。廣とは淨土の二十九種莊嚴、略とは眞如法性の一法句をいふ。一如より淨相を生じ、淨相によりて一如を顯すを相入といふ。

(三)『和讃』。『高僧和讃』親鸞上人の撰。

(四)化生。托する所なく忽爾として生ずるをいふ。

(五)第七の觀。『觀經』の十六觀中の第七華座觀に、佛の正覺の華をば、「苦惱」を除く法と說けり。

念となへて往生するも、となふるときはじめて往生の成ずるにあらず、佛體より成ぜし願行の薫修が、一聲稱佛のところにあらはれて、往生の一大事を成ずるなり。かくこゝろうれば、われらは、今日今時往生するとも、わがこゝろのかしこくて念佛をもまふし他力をも信ずるこゝろの功にあらず。勇猛專精にはげみたまひし佛の功德、十劫正覺の刹那に、われらにおいて成じたまひたりけるが、あらはれもてゆくなり。覺體の功德は、同時に十方衆生のうへに成ぜしかども、昨日あらはすひともあり、今日あらはすひともあり。(一)已今當の三世の往生は、不同なれども、(二)弘願正因のあらはれもてゆくゆへに、佛の願行のほかには、別に機に、信心ひとつも、行ひとつも、くはふることはなきなり。念佛といふは、このことはりを念じ、行といふは、このうれしさを禮拜恭敬するゆへに、佛の正覺と衆生の行とが一體にしてはなれぬなり。したしといふもなをおろなり。ちかしといふもなをとをし。一體のうちにおいて(三)能念所念を體のうちに論ずるなりとしるべし。

(四)天親菩薩『往生淨土論』に曰く。「世尊我一心歸命盡十方無礙光如來願生安樂

(一)已今當。已往と現今と當來と也。卽ち過法、現在、未來の三世なり。

(二)弘願正因。第十八願に誓はせたまふ往生の正因、卽ち他方廻向の行信をいふ。

(三)能念所念。念ずる衆生の信行と念ぜらるゝ佛の覺體とをいふ。

(四)天親菩薩。眞宗七祖の第二。佛滅後九百年、北天竺に生れ、初、小乘を信じ、後、大乘に歸す。梵名は婆藪槃頭（Vasubandhu）舊譯には天親）新譯には世親といふ。

(一)まさしく。『定善義』に「正しく心到るに由るが故に身も亦隨て到る。身、心に隨ふが故に、是法界身と言ふ也」と釋せり。

(二)眞身觀。『觀經』の十六觀中の第九眞身觀に「念佛の衆生を攝取して捨てたまはず」と說けるを『定善義』に釋して「彼此の三業あひ捨離せず」と云へり。

(三)三寶滅盡。末法萬年を過ぎて佛法僧の三寶滅び盡きたる時ひとり此の法のみを留むと『無量壽經』に說けり。

を所化とす。「法界といふは所化の境衆生界なり」と釋するこれなり。(一)「まさしくは、こゝろいたるがゆへに、身もいたる」といへり。彌陀の身心の功徳、法界衆生の身のうち、こゝろのそこにいりみつゆへに、「入一切衆生心想中」ととくなり。こゝを信ずるを「念佛衆生」といふなり。また(二)眞身觀には、「念佛衆生の三業と、彌陀如來の三業と、あひはなれず」と釋せり。佛の正覺は、衆生の往生より成じ、衆生の往生は、佛の正覺より成ずるゆへに、衆生の三業と、佛の三業と、またく一體なり。佛の正覺のほかに衆生の往生もなく願も行もみな佛體より成じたまへりとしりきくを「念佛の衆生」といひ、この信心のことばにあらはるゝを「南無阿彌陀佛」といふ。かるがゆへに、念佛の行者になりぬれば、いかに佛をはなれんとおもふとも、微塵のへだてもなきことなり。佛のかたより機法一體の南無阿彌陀佛の正覺を成じたまひけるゆへに、なにとはかく〳〵しからぬ下々品の失念のくらゐの稱名も往生するは、となふるときはじめて往生するにはあらず、極惡の機のためにもとより成じたまへる往生をとなへあらはすなり。また『大經』の、(三)三寶滅盡の衆生の、三寶の名字をだにも、はかく〳〵しくきかぬほどの機が、一

凡夫のこゝろとしては、道心をおこすこともまれなれば、つねには(一)往生不定の身なり。もしや〳〵とまてども、往生を臨終までおもひさだむることなきがゆへにくちにとき〳〵名號をとなふれども、たのみがたき往生なり。たとへば、とき〳〵ひとに見參みやづかひするにたり。そのゆへは、いかにしてか佛の御こゝろにかなはんずるとおもひ、佛に追從して、往生の御恩をも、かふむらんずるやうに、おもふほどに、(二)機の安心と、佛の大悲とが、はなれ〳〵にて、つねに佛にうとき身なり。このくらゐにては、まことにきはめて往生不定なり。念佛三昧といふは、(三)報佛彌陀の大悲の願行は、もとよりまよひの衆生の心想のうちにいりたまへり。しらずして佛體より機法一體の南無阿彌陀佛の正覺に成じたまふことなりと信知するなり。願行みな佛體より成ずることとなるがゆへに、おがむ手、となふるくち、信ずるこゝろ、みな他力なりといふなり。かるがゆへに、機法一體の念佛三昧をあらはして、(四)第八の觀には、「諸佛如來、是法界身、入一切衆生心想中」ととく。これを(五)釋するに、「法界といふは、(六)所化の境、すなはち衆生界なり」といへり。(七)定善の衆生ともいはず、道心の衆生ともとかず、法界の衆生

(一)往生不定。必ず往生すべしと思ひ定め得ざるをいふ。

(二)機の安心。行者の方の信心。法に依りて確信安住するを安心といふ。

(三)報佛彌陀。報身の阿彌陀佛。因位の願行に酬報したる佛體を報佛といふ。

(四)第八の觀。『觀經』の十六觀中の第八像觀の文に「諸佛如來は是れ法界の身なり。一切衆生の心想の中に入りたまへり」とあり。

(五)釋。善導の『觀經定善義』の解釋。

(六)所化の境。佛に化度せらるゝ對象の衆生をいふ。

(七)定善。散善に對す。慮を息め心を凝らして觀想するをいふ。

(一)平信。理も義も知らず、ひらに如來の救濟を信ずるをいふ。

(二)名義。名號の實義。

(三)曇鸞。曇鸞の『淨土論註』に釋せり。

り。この佛の心は、大慈悲を本とするゆへに、愚鈍の衆生をわたしたまふを、さきとするゆへに、名體不二の正覺をとなへましますゆへに、佛體も名におもむき、名に體の功德を具足するゆへに、なにとはか〲しくしらねども、(一)平信のひとも、となふれば往生するなり。されども下根の凡夫なるゆへに、そぞろにひら信じもかなふべからず。そのことはりをきゝひらくとき、信心はおこるなり。念佛をまふすとも、往生せぬを、(二)名義に相應せざるゆへにとこそ、(三)曇鸞も釋したまへ。名義に相應すといふは、阿彌陀佛の功德力にて、われらは往生すべしと、おもふてとなふるなり。領解の信心を、ことばにあらはすゆへに、南無阿彌陀佛の六字をよくこゝろうるを、三心といふなり。かるがゆへに、佛の功德ひしとわが身に成じたりとおもふて、くちに南無阿彌陀佛ととなふるが、三心具足の念佛にてあるなり。自方のひとの念佛は、佛をばさしのけて西方におき、わが身をば、しら〲とある凡夫にて、とき〲こゝろに佛の他力をおもひ、名號をとなふるゆへに、佛と衆生ととう〲しくして、いさゝか道心おこりたるときは、往生もちかくおぼえ、念佛ものうく道心もさめたるときは、往生もきはめて不定なり。

樹の葉ひとつも、極悪のわれらがためならぬことなければ、機法一體にして南無彌陀佛なり。正報は眉間の(一)白毫相より、(二)千幅輪のあなうらにいたるまで、常沒の衆生の願行成就せる御かたちなるゆへに、機法一體にして南無彌陀佛なり。われらが(三)色心二法、三業四威儀、すべて報佛の功徳のいたらぬところなければ、南無の機と、阿彌陀佛の、片時もはなるゝことなければ、念々みな南無阿彌陀佛なり。されば、いづるいき、いるいきも、佛の功徳をはなるゝ時分なければ、みな南無阿彌陀佛の體なり。(四)縛日羅冐地といひしひとは、(五)常水觀をなしつゝかば、こゝろにひかれて身もひとつの池となりき。その法にそみぬれば、色心二法それになりかへることなり。念佛三昧の領解ひらけなば、身もこゝろも南無阿彌陀佛になりかへりて、その領解ことばにあらはるゝとき、南無阿彌陀佛とまふすが、うるはしき弘願の念佛にてあるなり。念佛といふは、かならずしもくちに南無阿彌陀佛ととなふるのみにあらず。阿彌陀佛の功徳、われらが南無の機において、(六)十劫正覺の刹那より成じいりたまひけるものをといふ信心のおこるを、念佛といふなり。さてこの領解をことばにあらはせば、南無阿彌陀佛といふにてあるな

等の依報とあり。

(一)白毫相。佛の眉間に白玉の毫あり。右に旋り宛轉して常に光明を放つ。

(二)千幅輪。佛の御足の裏に千の幅輪の紋あり。

(三)色心二法三業四威儀。色法は物質、心法は精神、三業は身業口業意業、四威儀は行住坐臥なり。

(四)縛日羅冐地。梵音ワヂニラボードヒ(Vajrabodhi)金剛智と翻す。南印度の人。唐の開元八年支那に來り密教を弘む。

(五)常水觀。常に水を觀想する行を修す。

(六)十劫正覺。阿彌陀佛は今より十劫の昔に正覺を成ぜり。

との、うれしさよとおもふとき、歡喜のあまり、おどりあがるほどにうれしきなり。(一)『大經』に「爾時聞一念」とも「聞名歡喜讃」ともいふは、このこゝろなり。よそにさしのけてはなくして、やがてわが往生すでに成じたる名號、わが往生したる御すがたとみるを、名號をきくとも形像をみるともいふなり。このことはりをこゝろうるを、本願を信知するといふなり。(二)念佛三昧において信心決定せんひとは、身も南無阿彌陀佛、こゝろも南無阿彌陀佛なりとおもふべきなり。ひとの身をば、地水火風の(三)四大よりあひて成ず。小乘には極微の所成といへり。身を極微にくだきてみるとも、(四)報佛の功德のそまぬところはあるべからず、されば、機法一體の身も南無阿彌陀佛なり。こゝろには、(五)煩惱隨煩惱等具足せり。刹那〳〵に生滅す。こゝろを刹那にちはりてみるとも、彌陀の願行の遍ぜぬところなければ、機法一體にして、こゝろも南無阿彌陀佛なり。彌陀大悲のむねのうちに、かの常沒の衆生みち〳〵たるゆへに、機法一體にして南無阿彌陀佛なり。われらが迷倒のこゝろのそこには、(六)法界身の佛の功德みち〳〵たまへるゆへに、また機法一體にして南無阿彌陀佛なり。淨土の(七)依正二報もまたしかなり。依報は寶

(一)『大經』。善導の『往生禮讃經』に『大無量壽經』の意を取りて「爾の時聞いて一念せん」とも「名を聞いて歡喜し讃ずれば」とも云へり。爾時とは法滅の時を云へるなり。

(二)念佛三昧。三昧(Samadhi)は等持と譯す。一心に佛名を持念するをいふ。

(三)四大。地(堅性)水(濕性)水(溫性)風(動性)の四成分より物質を構成す。其の體相用、大なるが故に、四大種と稱す。

(四)報佛。報身の阿彌陀佛。

(五)煩惱隨煩惱。根本煩惱の十惑と其に隨從して起る枝末煩惱とをいふ。

(六)法界身。法界(全宇宙)の衆生を照鑑する佛の報身をいふ。

(七)依正二報。果報に身心の正報と大地樹木衣服飮食

とに願行成就せしとき、佛は正覺を成じ、凡夫は往生せしなり。かゝる不思議の名號もしきこえざるところあらば、正覺とらじとちかひたまへり。われらすでに阿彌陀といふ名號をきく。しるべし、われらが往生すでに成ぜりといふことを。きくといふは、たゞおほやうに名號をきくにあらず。本願他力の不思議をきゝて、うたがはざるをきくとはいふなり。御名をきくも本願より成じてきく。一向に他力なり。たとひ凡夫の往生成じたまひたりとも、その願成就したまへる御名をきかずば、いかでかその願成ぜりとしるべき。かるがゆへに名號をきゝても、形像を拜しても、わが往生を成じたまへる御名ときゝ、われらをわたさずは、佛にならじとちかひたまひし法藏の誓願むなしからずして正覺成じたまへる御すがたよとおもはざらんは、きくともきかざるがごとし、みるともみざるがごとし。(一)『平等覺經』にのたまはく、「淨土の法門をとくをきゝて、歡喜踊躍し、身の毛いよだつ」といふは、そゞろによろこぶにあらず、わが出離の行をはげまんとすれば、道心もなく、智慧もなし、(二)智目行足かけたる身なれば、たゞ(三)三惡の火坑にしづむべき身なるを、願も行も佛體より成じて、機法一體の正覺成じたまひけるこ

(一)『平等覺經』。後漢の支婁迦讖の譯。『無量壽經』の異譯なり。

(二)智目行足。智慧を目に譬へ、修行を足に喩ふ。

(三)三惡。地獄、餓鬼、畜生の三惡道。

名號をとなふとも、よそなる佛の功德とおもふて、名號に功をいれなば、などか往生をとげざらん、なんどおもはんは、かなしかるべきことなり。ひしとわれらが往生成就せしすがたを、南無阿彌陀佛とはいひけるといふ、信心おこりぬれば、佛體すなはちわれらが往生の行なるがゆへに、一聲のところに往生を決定するなり。阿彌陀佛といふ名號をきかば、やがてわが往生とこゝろえ、わが往生はすなはち佛の正覺なりとこゝろうべし。彌陀佛は正覺成じたまへるか、いまだ成じたまはざるかをばうたがふとも、わが往生の成ずるか成ぜざるかをば、うたがふべからず。一衆生のうへにも往生せぬことあらば、ゆめ〳〵佛は正覺なりたまふべからず。こゝをこゝろうるを、第十八の願をおもひわくとはいふなり。まことに往生せんとおもはゝ、衆生こそ願をもおこし、行をもはげむべきに、願行は菩薩のところにはげみて、感果はわれらがところに成ず。(一)世間、出世の因果のことはりに超異せり。(二)和尚はこれを、(三)「別異の弘願」とほめたまへり。衆生にかはりて願行を成ずること、(四)常沒の衆生をさきとして、善人におよぶまで、一衆生のうへにもおよばざるところあらば、大悲の願滿足すべからず。面々衆生の機ご

(一)世間出世。出世は迷界、出世は迷界を脱出する悟道をいふ。

(二)和尚。善導大師。

(三)別異の弘願。善導の『觀經玄義分』に「安樂の能仁は別意の弘願を顯彰す」と云へり。今「別異」とあるは超異の義を顯す爲ならん。

(四)常沒。常に生死の苦海に沒溺せるをいふ。

し、「又此經定散文中、唯標專念彌陀名號得生」とも釋して、三經ともに、たゞこの本願をあらはすなり。第十八の願をこゝろうるといふは、名號をこゝろうるなり。名號をこゝろうるといふは、阿彌陀佛の衆生にかはりて、願行を成就して、凡夫の往生、機にさきだちて成就せしきざみ、十方衆生の往生を、正覺の體とせしことを領解するなり。かるがゆへに、念佛の行者、名號をきかば、あはやわが往生は成就しにけり。十方衆生往生成就せずは、正覺とらじとちかひたまひし、法藏菩薩の正覺の果名なるがゆへにとおもふべし。また彌陀佛の形像をおがみたてまつらば、あはやわが往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずば、正覺とらじとちかひたまひし法藏薩埵の(一)成正覺の御すがたなるゆへにとおもふべし。また(二)極樂といふ名をきかば、あはわが往生すべきところを、成就したまひにけり。衆生往生せずば正覺とらじとちかひたまひし法藏比丘の成就したまへる極樂よとおもふべし。機をいへば、佛法と世俗との二種の善根なき(三)唯知作惡の機に、佛體より(四)恒沙塵數の功德を成就するゆへに、われらがごとくなる(五)愚癡惡見の衆生のための樂のきはまりなるがゆくに、極樂といふなり。本願を信じ

唯專ら阿彌の名號を念じて生ずることを得と明す、」「又此經の定散の文の中に、唯專ら名號を念じて生ずることを得と標す」と釋せり。

(一)成正覺。佛の正覺を成就せるをいふ。

(二)極樂。阿彌陀佛の淨土。

(三)唯知作惡。たゞ惡を作すことのみを知れるをいふ。

(四)恒沙塵數。恒河(Ganga)の沙の數ほど、空に浮ぶ塵の數ほど、多大なるをいふ。

(五)愚癡惡見。事に惑ひ理を辨へざるを愚癡といひ、眞理に對して謬見を起すを惡見といふ。

（一）名體不二の（二）弘願の行なるがゆへに、名號すなはち正覺の全體なり。正覺の體なるがゆへに、十方衆生の往生の體なり。往生の體なるがゆへに、われらが願行こと〴〵く具足せずといふことなし。かるがゆへに（三）『玄義』にいはく、「いまこの『觀經』の（四）下品下生の、十聲の稱佛には、すなはち（五）十願ありて十行具足せり。いかんが具足せる。南無といふは、すなはちこれ歸命、またこれ發願迴向の義なり。阿彌陀佛といふは、すなはちこれその行なり。この義をもてのゆへに、かならず往生をう」といへり。下品下生の（六）失念の稱念に、願行具足することは、さらに機の願行にあらずとしるべし。法藏菩薩の（七）五劫兆載の願行の凡夫の願行を成ずるゆへなり。阿彌陀佛の凡夫の願行を成ぜしいはれを領解するを、（八）三心ともいひ、三信ともとき、信心ともいふなり。阿彌陀佛は凡夫の願行を、名に成ぜしゆへを、口業にあらはすを南無阿彌陀佛といふ。かるがゆへに領解も機にはとゞまらず。領解すれば佛願の體にかへる。名號も機にはとゞまらず。となふれば、やがて弘願にかへる。かるがゆへに淨土の法門は、第十八の願をよく〳〵こゝろうるほかにはなきなり。（九）「如無量壽經四十八願中、唯明專念彌陀名號得生」とも釋

（一）名體不二。佛は德を名に施すが故に名號と佛體とは更に其の體德異なる者に非ざるをいふ。
（二）弘願の行。他力本願の念佛。
（三）『玄義』『觀經玄義分』。唐の善導の撰。
（四）下品下生『觀經』に說ける九品往生の中の極惡の機の往生をいふ。
（五）十願十行。南無に願、阿彌陀佛に行の義あり。故に十聲の念佛には十願十行を具す。
（六）失念 臨終に苦に逼られて意に佛を念ずる能はざるをいふ。
（七）五劫兆載。五劫思惟の本願、兆載永劫の修行。
（八）三心。至誠心、深心、迴向發願心。『觀無量壽經』の說。
（九）如無量壽經。善導の『觀經定善義』眞身觀の跡文。『無量壽經の四十八願の中の如き、

も成ぜずといふことなき功德なり。このことはりを慇懃につげたまふことを、信ぜずしらざることを、おほきにはづべしといふなり。(一)三千大千世界に、芥子ばかりも、釋尊の身命をすてたまはぬところはなし。みなこれ他力を信ぜざるわれらに、信心をおこさしめんと、かはりて難行苦行して、緣をむすび、劫をかさねたまひしなり。この廣大の御こゝろざしをしらざることを、おほきにはぢはづべしといふなり。このこゝろをあらはさんとて、(二)「種々の方便をもて、われらが無上の信心を發起す」と釋せり。無上の信心といふは、他力の(三)三信なり。つぎに種々の方便をとく敎文、ひとつにあらずといふは、諸經隨機の得益なり。凡夫は左右なく他力の信心を獲得することかたし。しかるに自力の成じがたきことをきくとき、他力の易行も信ぜられ、聖道の難行をきくに、淨土の修しやすきことも信ぜらるゝなり。おほよそ佛のかたよりは、なにのわづらひもなく成就したまへる往生を、われら煩惱にくるはされて、ひさしく流轉して、不思議の佛智を信受せず、かるがゆへに三世の衆生の歸命の念も、正覺の一念にかへり、十方の有情の稱念の心も、正覺の一念にかへる。さらに機において、一稱一念もとどまることなし。

の因緣なき劣機をいふ。

(八)法滅百歲。正法五百年、像法千年、末法萬年を過ぎて、佛法滅したる後の百年。『無量壽經』の說に據る。

(一)三千大千世界に。『法華經』提婆品の說なり。三千世界は一佛敎化の領域なり。

(二)種々の方便。『般舟讚』の文。

(三)三信。至心、信樂、欲生。『無量壽經』の說。

でたるか、いでざるかを、おもふべし。やみははれざるか、はれたるかを、うたがふべからず。佛は正覺なりたまへるか、いまだなりたまはざるかを、分別すべし。凡夫の往生をうべきか、うべからざるかを、うたがふべかちず。衆生往生せずば、佛にならじと、ちかひたまひし(一)法藏比丘の、(二)十劫にすでに成佛したまへり。佛體よりはすでに成じたまひたりける往生を、つたなく今日までしらずして、むなしく流轉しけるなり。かるがゆへに(三)『般舟讃』には、「おほきにすべからく慚愧すべし、釋迦如來は、まことにこれ慈悲の父母なり」といへり。慚愧の二字をば、天にはぢ、人にはづとも釋し、自にはぢ、他にはづとも釋せり。なにごとをおほきにはづべしといふぞといふに、彌陀は(四)兆載永劫のあひだ、無善の凡夫にかはりて、願行をはげまし、釋尊は(五)五百塵點劫のむかしより、(六)八千返まで世にいでて、かゝる不思議の誓願をわれらにしらせんとしたまふを、いまゝできかざることをはづべし。機より成する大小乘の行ならば、法はたへなれども機がおよばねばちからなしといふこともありぬべし。いまの他力の願行は、行は佛體にはげみて、功を無善のわれらにゆづりて、(七)謗法闡提の機、(八)法滅百歳の機まで

(一)法藏比丘。阿彌陀佛の因位。世自在王佛の所にて四十八願を建つ。

(二)十劫。劫は梵音カルパ(Kalpa)非常に長き時間をいふ。阿彌陀佛は今より十劫以前に成佛す。

(三)『般舟讃』『般舟三昧行道往生讃』唐の善導の撰。

(四)兆載永劫。彌陀の因位修行の時間の永かりしを云ふ。『無量壽經』の說なり。

(五)五百塵點劫。釋尊の本門は五百億塵點劫の古に成佛せり。『法華經』壽量品の說なり。

(六)八千返。釋尊この世界に來現せしこと八千返なり。『梵網劫』に說けり。

(七)謗法闡提。謗法は佛法を謗りたる大罪人。闡提は梵音イツチユ・ハーイテカ(Icchantika)信不具足と譯す。本來成佛得脱

にみづから佛にならむは、たとへば(一)火擿して一切の草木を摘てやきつくさしめむと欲するに草木いまだつきざるに火擿すでにつくるがごとし。その身をのちにしてしかも身をさきむずるをもてのゆへに方便となづく」といへり。しかれども佛は衆生にかはりて(二)願と行とを圓滿して、われらが往生をすでにしたゝめたまふなり。十方衆生の願行圓滿して、往生成就せしとき(三)機法一體の南無阿彌陀佛の正覺を成じたまひしなり。かるがゆへに、佛の正覺のほかには、凡夫の往生はなきなり。十方衆生の往生の成就せしとき佛も正覺をなるゆへに、佛の正覺なりしと、われらが往生の成就せしとは同時なり。佛のかたよりは往生を成ぜしかども、衆生がこのことはりをしること不同なれば、すでに往生するひともあり、今往生するひともあり、當に往生すべきひともあり。人によりて(四)三世は不同なれども、彌陀のかはりて成就せし正覺の一念のほかは、さらに機より、いさゝかもそふることはなきなり。たとへば、日出れば、(五)刹那に十方のやみこと〱くはれ、月いづれは、(六)法界の水同時にかげをうつすがごとし。月はいでゝかげを水にやどす。日はいでゝやみのはれぬことあるべからず。かるがゆへに、日はい

(一一)『論註』『淨土論註』。天親菩薩の『淨土論』を註釋す。

(一)火摘。『論註』には火栝とあり。栝は木杖なり。火を摘む木の箸をいふ。

(二)願と行。願とは得んと欲する所を願ひ定むる心にして、行とは其の果を得んが爲に修する行業なり。

(三)機法一體。機とは佛の救をたのむ行者のこと、法とは其の佛の救ひのことなり。たのむ機と助くる法との離れざるを云ふ。

(四)三世。已(過去)今(現在)當(未來)。

(五)利那。梵音クシヤナ(kṣaṇa)極めて短き時刻をいふ。

(六)法界。すべての世界。

安心決定鈔

南無阿彌陀佛

淨土眞宗の行者はまづ(一)本願の(二)生起本末をたづね知るべきものなり。本願は四十八なれども、(三)第十八の本願をもて(四)正因の願とす。餘の四十七はこの大願を信知せしめむための方便の願なり。よりて(五)光明寺和尚も、(六)「一々願言、若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺」といへり。この文のこゝろは、「もしわれ成佛せむに、十方衆生、我名號をとなへて下十聲にいたらむ、もし生ぜずば(七)正覺をとらじ」といへり。しかれば佛の正覺は衆生より成就し、衆生の往生は佛の正覺より成就す。しかるに十方衆生いまだ往生せざるさきに正覺を成ずることは、こゝろえがたきことなり。こゝを(八)我師の(九)『敎行證文類』第四に、(一〇)曇鸞和尚の(一一)『論註』を引て、「巧方便者、いはく、菩薩ねがはくば、おのれが智惠の火を以て一切衆生の煩惱の草木を燒かむに、もし一衆生として成佛せざることあらば、我佛にならじと。しかるに衆生いまだ成佛せざるに菩薩すで

(一)本願。阿彌陀佛の因位の誓願をいふ。
(二)生起本末。佛願の生起したる根元と其結果とをいふ。
(三)第十八。念佛往生の願。
(四)正因。衆生往生の正因。
(五)光明寺和尚。唐朝の善導大師。長安の光明寺に住す。
(六)一一願言。『觀經玄義分』に第十八願文を取意加減して此の一願文を以て四十八を代表せしむ。
(七)正覺。正しき覺りの結果をいふ。
(八)我師。親鸞上人。
(九)『敎行證文類』立敎開宗の本典。又『敎行信證』とも云ふ。六軸あり。第四は其の證の巻なり。
(一〇)曇鸞和尚。眞宗七祖の第三。後魏の興和四年に寂す。

はち、希に津を問ふものには、示すに(一)西方の通津をもてし、たま〱行をたづぬるものには、誨に念佛の別行をもてす。これを信ずるものは多く、信ぜざるものは尠し。當に知るべし。淨土の教、時機を叩きて、行運にあたれり。念佛の行、(二)水月を感じて、昇降を得たり。しかるに今はからざるに(三)仰を蒙る。辭謝するに地なし。よりていま慭に、念佛の要文を集め、剰へ念佛の要義をのぶ。たゞ命旨を顧みて、不敏をかへり見ず。これすなはち無慙無愧の甚しき也。庶幾は一たび高覽を經て後、壁底に埋めて、窓前に遺すことなかれ。をそらくは破法の人をして、惡道に墮せしめんことを。

選擇本願念佛集 終

(一)西方の通津。往生極樂の要法。

(二)水月を感じて云云。水昇らず月降らずして一月萬水に現ず、此の如く佛來らず衆生往かずして念佛の力よく佛凡を融ず。

(三)仰を蒙る。藤原兼實公の依囑をいふ。

もて相看て、菩提まで眷屬し、眞の善知識となり、おなじく淨國に歸して、共に佛道を成ぜん。この義すでに、證を請うて定め竟ぬ。一句一字、加減すべからず。寫さんと欲せん者、もはら經法のごとくせよ知べし」已上

靜に以ば、善導の『觀經の疏』は、これ西方の指南、行者の目足なり。然れば、すなはち、西方の行人、かならずすべからく珍敬すべし。就中毎夜夢中に僧ありて、『玄義』を指授す。僧は恐くはこれ(一)彌陀の應現ならん。爾ば謂べしこの疏はこれ、彌陀の傳説なりと。いかにいはんや。大唐あひつたへていはく、「善導はこれ彌陀の化身なり」と。爾ば謂べし。又この文はこれ彌陀の直説なりと。「すでに寫さんと欲せんもの、もはら經法のごとくせよ」といへり。このことば誠なるかな。仰で本地を討ぬれば、四十八願の法王也。十劫正覺のとなへ、念佛にたのみあり。俯して垂跡を訪へば、專修念佛の導師也。三昧正受のことば、往生にうたがひなし、本迹異といへども、化導これ一也。こゝに(二)貧道昔茲典を披閲して、粗素意を識り、立どころに、餘行を舍て、こゝに念佛に歸す。それより已來今日にいたるまで、自行化他たゞ念佛を縡す。しかればすな

(一)彌陀の應現。極樂の彌陀如來が『玄義』を指授する爲めに現はし給へる化身。

(二)貧道。愚衲の意、法然上人の自稱。

すなはち見る。(一)三具の礙輪道の邊にひとり轉ず。たちまち一人の白き駱駝に乘ずるあり、きたりすゝんで勸めらる。師當に努力て、決定往生すべし。(二)退轉をなすことなかれ。この界は穢惡にして、苦多し、(三)貪樂を勞せざれと。答ていはく、大に賢者好心の視誨をかうむる。某畢命を期として、あへて懈慢の心を生ぜじと。云々 第二の夜に見らく、阿彌陀佛の身、眞金色にして、七寶樹の下、金蓮華の上に、まし〳〵て坐し給ふ。十僧圍繞して、またをの〳〵一の寶樹の下に坐せり。佛樹の上に、すなはち天衣ありて掛り遶れり。面を正し西に向て、合掌して、坐して見る。第三の夜に見らく、兩の幢杆、きはめて大に高く顯れ、幡還て、五色なり。道路縱橫にして、人觀に礙ることなし。すでに此相を得をはりて、即ち休止て、七日にいたらず。上來の所有靈相は、本心(四)物のためにして、已身の爲にせず。すでにこの相をかうむれり。あへて隱藏せず、謹でもて義の後に申呈して、聞を末代にかうむらしむ。ねがはくば含靈、これを聞て信を生じ、有識觀ん者をして西に歸せしめんことを。この功德をもて、衆生に廻施す。こと〳〵く菩提心をおこして、慈心をもてあひむかひ、佛眼を

(一)三具の礙輪。礙輪は馬を馴らすに用ゆるもの、今野馬の如き人心を馴らすに三心の礙輪を用ゆ。

(二)退轉をなすことなかれ。四修の中の長時修をすゝむ。

(三)貪樂を勞せざれ。四修の中の無間修をすゝむ。

(四)物のため。衆生の爲。

(一)古今を楷定。『觀無量壽經』に對する古今諸師の見解の誤を正すこと

(二)日別。毎日の意。

(三)義門を條録す　信條を筆録すること。

して、(一)古今を楷定せんと欲す。もし三世の諸佛、釋迦佛、阿彌陀佛等の、大悲の願意にかなはゞ、ねがはくは夢中において、上の所願のごときの、一切境界の諸相を見ることを得せしめ給へと。佛像の前において、願を結びをはりて、(二)日別に『阿彌陀經』を、誦すること三遍、阿彌陀佛を、念ずること三萬遍、至心に發願す。すなはち當夜において見らく、西方の空中に、上のごとくの諸相の境界、ことごとくみな顯現す。雜色の寶山、百重千重、種々の光明、下地をてらして地金色のごとし。中に諸佛菩薩ましませり。あるひは坐し、或は立し、或は語し、或は默し、或は身手を動し、あるひは住して動ぜざるものあり。既に此相を見て、合掌立觀す。量久してすなはち覺む。さめをはりて欣喜に勝ず。於即ち(三)義門を條録す。これより已後。毎夜夢中に、つねに一僧あり。きたりて『玄義』の科文を指授す。すでにをはりぬれば、さらにまた見えたまはず。後時脱本し竟て、復こゝに至心に。七日を要期して、日別に『阿彌陀經』を誦すること十遍、阿彌陀佛を、念ずること十萬遍、初夜後夜に、かの佛の國土の、莊嚴等の相を觀想し、誠心に歸命すること、もはら上の法のごとくす。當夜に

において、第三の罪を懺すべし。綽公靜に往咎をおもふに、みないふことむなしからず。こゝにおひて洗心悔謝し訖りて、導に見ゆ。すなはちいはく、師の罪滅しぬ。のち當に白光ありて照燭すべし。これ師の往生の相なり。以上『新修經生傳』に出づ爰に知ぬ。善導和尚は行三昧を發して、力師位に堪えたり。解行凡にあらざること、まさに是曉けし。況や又時の人の諺にいはく、「(一)佛法東行より已來、いまだ禪師のごときの、盛德あらず」と。絕倫の譽得て稱すべからざるもの歟。しかのみならず『觀經』の、文義を條錄するの刻、すこぶる靈瑞を感じ、屢〻聖化にあづかれり。すでに聖の冥加を蒙つて、然して經の科文をつくる。世擧て『證定の疏』と稱し、人これをたうとぶこと、佛の經法のごどし。すなはちかの疏の、第四卷の奥にいはく、「敬つて一切有緣の、知識等に白す。余は既にこれ、生死の凡夫、智惠淺短なり。しかるに佛教幽微なれば、あへて輙く異解を生ぜず、遂にすなはち心を標し、願を結んで、靈驗を請求して、方に心を造すべし。南無歸命、盡虛空遍法界の、一切の三寶、釋迦牟尼佛、阿彌陀佛、觀音勢至、かの土の諸菩薩、(二)大海衆、をよび一切の莊嚴相等、某いざこの『觀經』の要義を出

(一)佛法東行。佛教が印度より支那へ渡ること。

(二)大海衆。極樂にある無量の衆生をいふ。

(一)師資の釋云云善導と懷感との所說異るをいふ。

(二)行道七日。七日間經を讀み乍ら佛を遶ること。

もちひざる。答へいはく。善導はこれ師たり。懷感はこれ弟子なり。かるがゆへに師によりて、弟子によらざるなり。いはんや(一)師資の釋、其相違はなはだおほし。かるがゆへにこれもちひず。問ていはく、もし師によりて弟子によらずば、道綽禪師は、これ善導和尚の師なり。そも〳〵又淨土の祖師なり。何ぞこれを用ざる。答ていはく、道綽禪師は、これ師なりといへども、いまだ三昧を發せず。かるがゆへにみづから往生の得否をしらず。善導に問ていはく、道綽念佛す往生を得んや否や。導一莖の蓮化を辨じて、これを佛前に置かしめ、(二)行道七日せんに萎悴ずば、すなはち往生を得給はんと。これによりて七日するに、果然として華萎黄せず。綽その深詣を嘆ず。ちなみに入定して、當に生ずることを得べきや否やを、觀んことを請ふ。導すなはち定に入て、須臾に報じていはく、師まさに三罪を懺して、方に往生すべし。一には師曾て佛の尊像を安じて、檐牖の中に置き、みづからは深房に處れり。二には出家の人を、驅使し策役す。三には屋宇を營造して、蟲命を損傷す。師よろしく十方佛の前におひて、第一の罪を懺し、四方僧の前において、第二の罪を懺し、一切衆生の前

(一)三昧。念佛三昧を得れば自由に阿彌陀佛を拜し極樂の莊嚴を見ることを得。

に歸すべし。正行を修せんとほつせば、正助業二の中には、猶助業を傍にし、えらんで正定をもはらにすべし。正定の業とは、すなはち是佛名を稱するなり。名を稱すれば、かならず生ずることを得。ほとけの本願に依るがゆへなり。問ていはく、華嚴、天台、眞言、禪門、三論、法相の諸師、をの〳〵淨土の法門の、章疏をつくる。何ぞかれ等の師によらずして、唯善導一師を用るや。答ていはく。かれ等の諸師、をのをのみな淨土の章疏をつくるといへども、しかも淨土をもて宗とせず。たゞ聖道をもて、その宗とす。かるがゆへに彼等の諸師によらざるなり。善導和尚は、ひとへに淨土をもて宗とし、しかも聖道をもて宗とし給はず。かるがゆへにひとへに善導一師によるなり。問ていはく、淨土の祖師その數又多し。いはく弘法寺の迦才、慈愍三藏等是なり。なんぞかれ等の諸師によらず。たゞ善導一師をもちゆるや。答ていはく。此等の諸師、淨土を宗とすといへども、いまだ(一)三昧を發せず。善導和尚はこれ、三昧發得の人なり。道におひてすでに其證あり。かるがゆへに且くこれをもちゆ。問ていはく、もし三昧發得によらば、懷感禪師もまた是三昧發得の人なり。何ぞこれを

をおひて、證誠せず。この經の中に、念佛往生をとき給ふにいたりて、六方恒沙の諸佛、をの〳〵舌をのべて、大千におほひ、誠實の語をときて、これを證誠したまふ。故に選擇證誠といふなり。しかのみならず、『般舟三昧經』の中に、又一の選擇あり。いはゆる選擇我名なり。彌陀自からときてのたまはく、「我國に來生せんとほつせんものは、つねに我名を念じて、休息あることなかれ」と。かるがゆへに選擇我名といふなり。本願と、攝取と、我名と、化讃と、この四は、これ彌陀の選擇なり。讃嘆と、留教と、付屬と、この三は、これ釋迦の選擇なり。證誠は六方恒沙諸佛の選擇なり。然ればすなはち、釋迦、彌陀、をよび十方をの〳〵恒沙等の諸佛、心を同じうして、念佛の一行を選擇し給ふ。餘行はしからず、かるがゆへに知んぬ。三經ともに念佛をえらびて、以て宗致とするのみ。

はかなりおもんみれば、夫れすみやかに生死をはなれんとほつせば、二種の勝法の中には、しばらく聖道門を閣きて、選びて淨土門にいれ。淨土門にいらんとほつせば、正雜二行の中には、且くもろ〳〵の雜行を抛ちて、選びて正行

たり。かるがゆへに選擇本願といふなり。二に選擇讃歎とは、(一)上の三輩の中に、菩提心等の餘行を擧ぐといへども、釋迦すなはち、餘行を讃歎せず、たゞ念佛におひて、しかも讃嘆して、「當知一念無上功德」といふ。かるがゆへに選擇讃歎といふ也。三に選擇留教とは、又(二)上に餘行諸善を擧ぐといへども、釋迦選擇して、たゞ念佛の一法を留む。故に選擇留教といふなり。次に『觀經』の中に、又三の選擇あり。一に選擇攝取、二に選擇化讃、三に選擇附屬なり。一に(三)選擇攝取とは、『觀經』の中に、定散の諸行を明すといへども、彌陀の光明、たゞ念佛の衆生をてらして、攝取してすて給はず。かるがゆへに選擇攝取といふ也。二に(四)選擇化讃とは、下品上生の人。聞經と稱佛との二行ありといへども、彌陀の化佛、念佛を選擇して、『汝稱佛名故、諸罪消滅、我來迎汝』といふ。かるがゆへに選擇化讃といふ也。三に(五)選擇付屬とは、又定散の諸行を明すといへども、たゞひとり、念佛の一行を付屬す。かるがゆへに選擇付屬といふ也。次に『阿彌陀經』の中に、一の選擇あり。いはゆる(六)選擇證誠なり。すでに諸經の中におひて、多く往生の諸行を說くといへども、六方の諸佛、かの諸行

(一)上の三輩。第四章段を見よ。
(二)上に。第六章段を見よ。
(三)選擇攝取。第七章段を見よ。
(四)選擇化讃。第十章段を見よ。
(五)選擇付屬。第十二章段を見よ。
(六)選擇證誠。第十四章段を見よ。

十六、釋迦如來、彌陀の名號をもて、慇懃に舍利弗等に、付屬し給ふの文

『阿彌陀經』にいはく。「ほとけこの經を說きをはり給ふに、舍利弗、をよびもろ〳〵の比丘、一切世間の、天人阿修羅等、ほとけの所說を聞きて歡喜し信受し、禮をなして去りぬ」と。

善導の『法事讚』に、この文を釋しての給はく。「世尊說法の時將にをはらんとす。慇懃に彌陀の名を附屬したまふ。五濁增の時、疑謗多く、道俗あひきらふて、聞くことをもちひず。修行することあるを見ては、嗔毒をおこし、方便破壞して、競て怨を生ぜん。かくのごときの(一)生盲闡提のともがら、(二)頓教を毀滅して、ながく沈淪せん。大地微塵劫を、超過すとも、いまだ(三)三途の身を、はなるゝことを得べからず。大衆同心に、みなあらゆる破法罪の、因緣を懺悔せよ」と。

私にいはく、をよそ三經のこゝろを案ずるに、諸行の中に、念佛を選擇してもて旨歸とす。先づ雙卷經の中に、三の選擇あり。一に選擇本願、二に選擇讚歎、三に選擇留敎なり。一に選擇本願とは、念佛はこれ法藏比丘、(四)二百一十億の土の中において、選擇し給ふ所の、往生の行なり。細かき旨上に見え

(一)生盲闡提。念佛の功德を知らずして誹謗する人。

(二)頓教。念佛の法門のこと。

(三)三途。地獄、餓鬼、畜生。

(四)二百一十億の土。第三章段を見よ。

坐臥、一切の時處をとはず、もしは晝、若しは夜、つねに行者を、はなれたまはず。いますでにこの勝益のたのむべきあり。ねがはくはもろ〳〵の行者、をの〳〵すべからく至心に往ぐことをもとむべし。」又『觀念法門』にいはく。「又『觀經』の下の文のごときは、もし人ありて、至心につねに、阿彌陀佛、および二菩薩を念ずれば、觀音勢至、つねに行人のために、勝友知識と作りて、隨逐影護し給ふ」と。又云く、『般舟三昧經』の、行品の中にときていふがごとき、ほとけのたまはく、もし人もはらこの念彌陀佛三昧を行ずれば、つねに一切の諸天、および(一)四天大王、(二)龍神八部、隨逐影護し、愛樂相見することを得て、ながくもろ〳〵の惡鬼神、災障厄難、横に惱亂をくはふることなし。つぶさには護持品の中にとくがごとし。」又いはく。三昧の道場に入らんをのぞきて、日別に彌陀佛を念ずること、一萬して、命をはるまで、相續するものは、すなはち彌陀の加念をかうふり、罪障をのぞくことを得。又ほとけと聖衆と、つねにきたりて護念し給ふことをかふむる。すでに護念をかふむれば、すなはち延年轉壽を得」と。

(一)四天大王。增長天、持國天、多聞天、廣目天。佛敎の守護神。

(二)龍神八部。天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人。

(一)不至心。至誠の心なきこと。

得せしめず、また横病横死、横に厄難あることなく、一切の災障、自然に消散す。(二)不至心をのぞく」と。

『往生禮讃』にいはく。「もしほとけを稱して、往生するものは、つねに六方恒河沙等の、諸佛に護念せらる。かるがゆへに護念經と名づく。いますでにこの增上の誓願のたのむべきあり。諸の佛子等、何ぞこゝろをはげましてゆかざるや」と。

私にとふていはく、たゞ六方の如來のみありて、行者を護念するやいかん。

答ていはく、六方の如來にかぎらず、彌陀觀音等、又きたりて護念したまふ。故に『往生禮讃』にいはく。『十往生經』にいはく、もし衆生ありて、阿彌陀佛を念じて、往生を願ずれば、かのほとけすなはち、二十五の菩薩をつかはして、行者を擁護せしむ。もしは行、若は坐、もしは住、もしは臥、もしは晝、もしは夜、一切の時、一切の所、惡鬼惡神をして、その便を得せしめず。又『觀經』にいへるがごとき、若し阿彌陀佛を、稱禮念じて、かの國に往生せんと願ずれば、かのほとけすなはち、無數の化佛、無數の化觀音、勢至菩薩をつかはして、行者を護念す。復前の二十五の菩薩等と、百重千重に、行者を圍繞して、行住

（一）諸惡鬼神をして云云。諸佛衆生を護り給ふが故に惡鬼等は衆生を惱害すること能はず。

ず。この經は一向にもはら念佛をとく。かるがゆへに、これを證誠す。二に解していはく、かの雙卷等の中に、證誠のことばなしといへども、この經すでに證誠あり。これに準じてかれをおもふに、かれらの經の中におひて、とく所の念佛。又證誠の義あるべし。文はこの經にありて、義はかの經に通ず。かるがゆへに、天台の『十疑論』にいはく、「又『阿彌陀經、』『大無量壽經』『鼓音聲陀羅尼經』等にいはく、釋迦佛、この經をとき給ふとき、十方世界に、をの〳〵恒河沙の、諸佛まし〳〵て、その舌相をのべて、あまねく三千世界におほひ、一切衆生、阿彌陀佛を念ずれば、ほとけの本願、大悲の願力に乘するが故に、決定して、極樂世界に生ずることを得ることを證誠す」と。

十五、六方の諸佛、念佛の行者を、護念し給ふの文

『觀念法門』にいはく。「又『彌陀經』にとき給ふがごとき、もし男子女人ありて。七日七夜をよび一生を盡して、一心にもはら阿彌陀佛を念じて、往生を願ずればこの人つねに、六方恒河沙等のほとけ、ともにきたりて護念し給ふことを得。かるがゆへに護念經となづく。護念經といふこゝろは又諸の（一）惡鬼神をして、便を

の久近をとはず。たゞよく上百年をつくし。下一日七日にいたるまで、一心にもはら、彌陀の名號を念ずれば、さだめて往生する事を得。かならずうたがひなきなり」と。おなじく『法事讃』にいはく、「心心念佛して、うたがひを生ずることなかれ。六方の如來、不虛を證す。三業專心にして、雜亂なければ、百寶の蓮華、時に應じてあらはる」と。

法照禪師の、『淨土五會法事讃』にいはく。「萬行の中に、急要たり迅速なること、淨土門に過ぎたるはなし。たゞ(一)本師金口の說のみにあらず、十方の諸佛、ともに傳へて證し給ふ」と。

私に問ていはく、なんがゆへぞ六方の諸佛の證誠、唯念佛の一行にかぎるや。答ていはく、もし善導の意によらば、念佛はこれ彌陀の本願なり。かるがゆへにこれを證誠す。餘行はしからず、かるがゆへにこれなし。問ていはく、もし本願によりて、念佛を證誠せば、(二)雙卷觀經等に、念佛をとく時、なんぞ證誠せざるや。答ていはく。解するに二義あり。一に解していはく、雙卷觀經等の中に、本願念佛をとくといへども、兼て餘行を明す。かるがゆへに、證誠せ

(一)本師金口。釋迦牟尼佛の說法のこと。

(二)雙卷觀經。無量壽經二卷及び觀無量壽經のこと。

おなじく『往生禮讃』に、『阿彌陀經』を引ての給はく。「東方如恒河沙等の、諸佛、南西北方、をよび上下その方の、如恒河沙等の諸佛、をの〳〵本國におひてその舌相を出して、あまねく三千大千世界におほひて、誠實のことばをとき給ふ汝等衆生、みなまさにこの一切諸佛の、護念し給ふ所の經を信ずべし。云何が護念と名づく。若し衆生ありて、阿彌陀佛を稱念すること、若しは七日、をよび一日、下十聲、乃至一聲、一念等にいたるまで、かならず往生を得。此事を證誠す。かるかゆへに護念經となづく」と。

又云く。六方の如來、舌をのべて證し給ふ。もはら名號をとなふれば、西方にいたる。(一)彼にいたりて華開けて、妙法をきけば、(二)十地の願行自然にあらはる」と。

おなじく『觀經疏』に、『阿彌陀經』を引ての給はく。「又十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所説を。信ぜざらんことを恐畏て、すなはちともに同心同時に、をの〳〵舌相を出して、あまねく三千世界に覆て、誠實の言をとき給ふ。汝等衆生、みな是の釋迦の所説と、所讃と、所證とを信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節

(一)彼にいたりて華開けて云々。極樂に生るゝ時蓮華に包まる、其華開けば即ち極樂の莊嚴を見、又法門を聞くことを得。

(二)十地。菩薩の經る階級の名、第一地より一部分の眞如を證す。

また勝劣の義あり。いはく雑善はこれ劣善根なり。念佛はこれ勝善根なり。その義知べし。

十四、六方恒沙の諸佛、餘行を證誠せず、たゞ念佛を證誠し給ふの文

善導の『觀念法門』にいはく。又『彌陀經』にいへるがごとき、六方にをの〳〵(一)恒沙等の諸佛ましまして、みな舌をのべて、あまねく三千世界に覆て、誠實のことばを說き給ふ。もしは佛の在世、若しは佛の滅後の、一切のつみをつくる凡夫、たゞ廻心して、阿彌陀佛を念じて、淨土に生ぜんと願ば、上百年を盡し、下七日一日、十聲三聲、一聲等にいたるまで、命をはらんとほつする時、ほとけ聖衆とゝもに、みづから來りて、迎接して、すなはち往生を得せしむと。上のごときの六方等のほとけの、のべ給ふ舌はさだめて、凡夫の罪ほろび、むまるゝ事を得と、(二)證をなし給はんがためならじ。若しこの證によつて、生ずることを得ずば、六方諸佛ののべ給ふ舌、一たび口を出て已後、つゐに口に返りいらずして、自然にやぶれたゞれなん」と。

(一)恒沙。前出。

(二)證。證明の意

ては恐くは生れがたし。かるがゆへに如來要法を選びて、をしへて彌陀を念ずること、專にして復專ならしめ。七日七夜心をして無間にせしむ。長時の起行も、ますますみなしかり。臨終に聖衆、花を持て現じ給ひぬれば、身心踊躍して、金蓮に坐す。坐する時すなはち(一)無生忍を得。一念に迎へ將て、佛前にいたる。法侶衣を將てきそひ來りてきせたまふ。(二)不退を證得て、(三)三賢に入る」と。

私にいはく。「少善根福德の因緣をもて、かの國に生ずることを得べからず」とは、諸餘の雜行の者は、かの國に生じがたし。かるがゆへに「隨緣の雜善にてはおそらくは生れがたし」といへり。少善根とは、多善根に對することばなり。然ればすなはち雜善はこれ少善根なり。念佛はこれ多善根なり。かるがゆへに龍舒の『淨土文』にいはく。「襄陽の石に刻む『阿彌陀經』は、すなはち隋の陳仁稜が書ける所也。字畫清婉にして、人多くしたひもてあそぶ。一心不亂よりしもつかた專持名號、以稱名故、諸罪消滅、即是多善根、福德因緣といへり。今世に傳る本、この二十一字を脫す」已上たゞ多少の義あるのみにあらず。また大小の義あり。いはく雜善はこれ小善根なり。念佛はこれ大善根なり。

(一)無生忍。處不退を得ること。
(二)不退。初住の位、不退のこと。
(三)三賢。十住十行、十回向。

またこの中に遐代とは、雙卷經の意によるに、とをく末法萬年の、後の百歳の時を指すなり。これすなはち遐をあげて、邇を攝するなり。然ればすなはち法滅の後、なをもてしかなり。いかにいはんや末法をや。末法すでに然なり。いかにいはんや正法像法をや。かるがゆへに知ぬ。念佛往生の道は、正像末の、三時をよび、法滅百歳の、時に通ずることを。

十三、念佛をもて多善根とし、雜善をもて少善根とし給ふの文

『阿彌陀經』に云く、「少善根福德の因緣をもて、彼國に生ずることを得べからず。舍利弗、もし善男子、善女人ありて、阿彌陀佛を說くを聞きて、名號を執持すること、もしは一日、もしは二日、若は三日、もしは四日、若は五日、もしは六日、若は七日、一心不亂なれば、其人いのちをはる時にのぞみて、阿彌陀佛もろ〱の聖衆とともに、その前に現在したまふ。この人をはる時、こゝろ顚倒せず、すなはち阿彌陀佛の、極樂國土に、往生する事を得」と。

善導この文を釋してのたまはく、「極樂は(一)無爲涅槃の界なれば、隨緣の雜善に

(一)無爲涅槃。常住不變寂靜安樂の意。

咒なり。(一)持經とは。般若法華等の、もろ〳〵の大乘經を持するなり。(二)持咒とは隨求、尊勝、光明阿彌陀等の、もろ〳〵の神咒を持するなり。をよそ散善の十一人、みなこれ貴しといへども、しかもその中におひて、この四箇の行は、當世の人ことに、欲する所の行なり。これ等の行をもて、ほとんど念佛を抑ふ、つら〳〵經の意をたづぬれば、この諸行をもて付屬し流通せず。唯念佛の一行をもて、すなはち後世に、付屬し流通せしむ。知るべし釋尊の諸行を、付屬し給はざる所以は、すなはちこれ彌陀の本願に、あらざるがゆへなり。また念佛を付屬したまふ所以は、すなはちこれ彌陀の本願なるが故なり。いま又善導和尚。諸行を廢して、念佛に歸せしむる所以は、たゞ彌陀本願の、行たるのみにあらず。またこの釋尊、付屬の行なればなり。かるがゆへに知ぬ。諸行は(三)機にあらず、時をうしなへり。念佛往生は、機にあたり、時を得たり。感應豈唐捐ならんや。まさに知るべし。(四)隨他の前には、暫く定散の門をひらくといへども、(五)隨自の後は還て定散の門を閉づ。一たびひらきて以後、ながくとぢざるは、たゞこれ念佛の一門なり。彌陀の本願、釋尊の付屬、こゝろこゝにあり、行者知べし。

(一)持經。經文を讀むこと。

(二)持咒。咒とは佛の利益守護を乞ふ爲めに唱ふる簡單なる梵語の偈文之を唱ふるを持咒といふ。

(三)機にあらず。現代の人は諸行を修する力なしとの意。

(四)隨他。釋尊が自意を匿して他人の意樂に從ひて說法すること。

(五)隨自。釋尊が自意に基きて說法すること。

(一)理はこれ佛の源。眞如の理體は佛の所證なるが故なり。

分に、釋迦如來、阿難に告命して、往生の要法を付屬し、流通せしむるにいたりて、觀佛の法をきらふて、阿難に付屬せず、しかも念佛の法をえらびて、すなはちもて、阿難に付屬す。觀佛三昧の法、なをもて付屬せず。いかにいはんや、日想水想等の觀におひてをや。然ればすなはち、十三定觀は、みなこれ付屬せざる所の行なり。しかるに世人もし觀佛等を樂て、念佛を修せざるは、これたゞとをく彌陀の本願にそむくのみにあらず、またこれちかく釋尊の付屬に違ふ。行者よろしく商量すべし。次に散善の中に、大小の持戒の行あり。世みなおもへらく、持戒の行はこれ入眞の要なり、破戒の者は往生すべからずと。又菩提心の行あり。人みなおもへらく、菩提心はこれ淨土の綱要なり。もし菩提心なきものは、すなはち往生すべからずと。又解第一義の行あり。これはこれ理觀なり。人またおもへらく、(一)理はこれ佛の源なり。理をはなれては佛土をもとむべからず。もし理觀なきものは、往生すべからずと。又讀誦大乘の行あり。人皆おもへらく、大乘經を讀誦せば、すなはち往生すべし。もし讀誦の行なき者は、往生すべからずと。これにつきて二あり。一には持經、二には持

問ていはく、もししからばなんがゆへぞ直に本願念佛の行をとかず。わづらわしく非本願の、定散の諸善をとくや。答ていはく。本願念佛の行は、雙卷經の中に、くはしくすでにこれをとく。かるがゆへにかさねてとかざるのみ。又定散をとくことは、念佛餘善に超過することをあらはさんがためなり。もし定散なくば、なんぞ、念佛ひとり、秀でたることをあらはさん。例せば法華の、(一)三説の上に秀でだるがごとし。もし三説なくば、何ぞ法華第一なることを顯さん。かるがゆへにいま、定散は廢のためにとき、念佛三昧は立のためにとく。たゞし定散の諸善、みなもてはかりがたし。凡そ定善とは、それ依正の觀、鏡をかけて、照臨し、往生の願、掌をさして速疾なり。あるひは一觀のちから、よく多劫の罪愆を祛け、あるひは具憶の功、つゐに三昧の勝利を得。然ればすなはち往生をもとめん人、よろしく定觀を修行すべし。就中第九の眞身觀は、これ觀佛三昧の法なり。行もし成就すれば、すなはち彌陀の身を見たてまつる。彌陀を見たてまつるがゆへに、諸佛を見ることを得。諸佛を見るがゆへに、現前に授記せられ、この觀の利益、もとも甚深なり。しかるにいま『觀經』の流通

(一)三説。已説(『大品經等』)今説(『無量義經』)當説(『涅槃經』)

べからく淺業をすてゝ、深業を付囑すべし。もし觀の淺深によりて、嫌ひて付囑せずは、十三觀の中に、淺あり深あり、その淺觀は、日想水想これなり。その深觀は、始め地觀より雜想觀の終りまで、總て十一觀これなり。すべからく淺觀をすてゝ、深觀を付囑すべし。就中第九の觀は、これ阿彌陀佛觀なり。すなはちこれ觀佛三昧なり。すべからく十二觀をすてて、觀佛三昧を付囑すべし。就中同疏の玄義分の中にいはく「この經は觀佛三昧を宗とす。また念佛三昧を宗とす、」と。すでに二行をもて、一經の宗とす。何ぞ觀佛三昧を廢して、念佛三昧を付囑せんや。答ていはく、すでに、「佛の本願にのぞむるに、こゝろ衆生をして、一向に專ら彌陀佛の名を、稱せしむるにあり」といふ。定散の諸行は本願にあらず。かるがゆへに付囑せず。またその中において、觀佛三昧は殊勝の行なりといへども、ほとけの本願にあらず。かるがゆへに付囑せず。觀佛三昧は、これ佛の本願なり。かるがゆへにもて付囑す。望佛本願といふは、雙卷經の四十八願の中の、第十八の願をさすなり。一向專稱といふは、同經の三輩の中の、一向專念をさすなり。本願の義、つぶさには前に辨ずるがごとし。

（一）依正。依正二報のこと。極樂莊嚴。

ることを得。下品中生は、これ破戒の罪人なり。臨終に、佛の(一)依正の功德を聞て、罪滅して生ずることを得。下品下生はこれ五逆の罪人なり。臨終の十念に、罪滅して生ずることを得。此三品は尋常のとき、たゞ惡業をつくりて、往生をもとめずといへども、臨終の時、はじめて善知識にあふて、すなはち往生を得。もし上の三福に準ぜば、第三福の、大乘の意なり。定善散善、大概かくのごとし。文にすなはち、上來雖說定散兩門之益といふこれなり。次に、念佛とは、もはら彌陀佛の、名を稱するこれなり。念佛の義つねのごとし。しかるにいま「まさしく彌陀の名號を付屬して、遐代に流通することを明す」といふは、をよそこの經の中に、ずでにひろく定散の諸行をとくといへども、すなはち定散をもて、阿難に付囑して、後世に流通せしめず。たゞ念佛三昧の一行をもて、すなはち阿難に付囑して、遐代に流通せしむるなり。問ていはく、何がゆへぞ定善の諸行をもて、付囑し流通せざるや。もしそれ業の淺深によりて、嫌ひて付囑せずば、三福の業の中に、淺あり深あり、その淺業は孝養父母、奉事師長なり。その深業は具足衆戒、發菩提心、深信因果、讀誦大乘なり。す

なし。然らばすなはち正しく華嚴、方等、般若、法華、涅槃等の、諸大乘經にあたれり。勸進行者とは、いはく定散の諸善、をよび念佛三昧等を勸進するなり。次に九品とは、前の三福を開して、九品の業とす。いはく上品上生の中に、慈心不殺といふは、すなはち上の世福の中の、第三の句に當れり。次に具諸戒行とは、すなはち上の戒福の中の、第二の句の具足衆戒にあたれり。次に讀誦大乘とは、すなはち上の行福の中の、第三の句の讀誦大乘にあたれり。次に修行六念とは、すなはち上の第三福の中の、第三の句の意なり。上品中生の中に、善解義趣等といふは、すなはちこれ上の第三の福の中の、第二第三のこゝろなり。上品下生の中に、深信因果、發道心等といふは、すなはちこれ上の第三の福の、第一第二の意なり。中品上生の中に、受持五戒等といふは、すなはち上の第二の福の中の第二の句のこゝろなり。中品中生の中に、或一日一夜、受持八戒齋等といふは、又上の第二の福のこゝろにおなじく、中品下生の中に、孝養父母、行世仁慈等といふは、すなはち上の初の福の、第一第二の句のこゝろなり。下品上生は、是十惡の罪人なり、臨終の一念に、罪滅して生ず

ば、『貞元入藏錄』の中に、はじめ『大般若經』六百卷より、『法常住經』に終るまで、顯密の大乘經、惣て六百三十七部、二千八百八十三卷なり。みなすべからく讀誦大乘の、一句に攝すべし。ねがはくは西方の行者、をの〳〵その意樂にしたがひて、あるひは『法華』を讀誦して、もて往生の業とし、あるひは『華嚴』を讀誦して、もて往生の業とし、あるひて遮那經王、をよび諸尊法等を受持讀誦して、もて往生の業とし、あるひは『般若』『方等』、をよび『涅槃經』等を解說し、書寫してもて、往生の業とすべし。是すなはち淨土宗の『無量壽經』の意なり。問ていはく、顯密むね異なり。何ぞ顯の中に密を攝するや。答ていはく、この顯密の旨を、攝すといふにはあらず。『貞元入藏錄』の中に、同じく、これを編て、こと〳〵く大乘經の限りに入る。かるがゆへに讀誦大乘の、一句に攝するなり。問ていはく(一)爾前の經の中に、何ぞ法華を攝せんや。答ていはく、いまいふ所の攝とは、(二)權實偏圓等の、義を論ずるにあらず。讀誦大乘の言は、あまねく前後大乘の諸經に通ず。前とは『觀經』已前の諸大乘經これなり。後とは王宮已後の、諸大經乘是なり。たゞ大乘といひて、しかも權實をえらぶこと

(一)爾前。『法華經』說法以前の意。
(二)權實偏圓。方便、眞實、不完全、完全の意。

らば、いはく華嚴には、佛菩薩二種の因果をとき、阿含には、聲聞緣覺、二乘の因果をとく。方等の諸經には、四乘の因果をとくなり。般若の諸經には、通別圓の因果をとき、法華には、佛因佛果をとき、涅槃には、復四乘の因果を說くなり。しかればすなはち、深信因果の言、あまねく一代を該羅せり。もろ〳〵の往生をもとめん人、たとひ餘の行なくとも、深信因果をもて、往生の業とするなり。讀誦大乘とは、わかちて二つとす。一には讀誦、二には大乘なり。讀誦とは、すなはちこれ(一)五種法師の中に、轉讀諷誦の二師のを擧げて、受持等の三師をあらはす。もし(二)十種法行に約せば、すなはちこれ披讀諷誦の二種の法行をあげて、書寫供養等の、八種の法行を顯はすなり。大乘とは小乘を簡ぶの言なり。別に一經を指すにあらず。一切の諸大乘經に通ず。いはく一切とは、佛意ひろく一代所說の、諸大乘教を指す。しかるに一代の所說において、(三)已結集の經あり。未結集の經あり。又已結集の經において、あるひは龍宮にかくれて、人間に流布せざるの經あり。あるひは天竺に留まりて、いまだ漢地に來到せざるの經あり。しかるにいま翻譯將來の經につきて、しかもこれを論ぜ

(一)五種法師。受持、讀、誦、解說、書寫、等經文を傳通する方法。

(二)十種法行。書寫、供養、流通、諦聽、自讀、憶持、廣說、口誦、思惟、修行。

(三)已結集の經。筆錄したる經のこと。

がごとし。眞言には、すなはち三種の菩提心あり。いはく(一)行願と、(二)勝義と、(三)三摩地とこれなり。つぶさには『菩提心論』にとくがごとし。華嚴にまた菩提心あり。かの『菩提心義』をよび、『遊心安樂道』等に説くがごとし。三論法相、をの〳〵菩提心あり。つぶさにはかの宗の、章疏等に説くがごとし。又善導所釋の菩提心あり。具さには疏に述するがごとし。發菩提心その言一なりといへども、をの〳〵その宗にしたがひて、その義おなじからず。然ればすなはち菩提心の一句、ひろく諸經に亙て、偏く顯密をかぬ。意氣博遠にして、詮測沖邈なり。ねがはくはもろ〳〵の行者、一を執して、萬を遮することなかれ。もろ〳〵の往生をもとめん人、をの〳〵すべからく自宗の菩提心をおこすべし。たとひ餘行なりとも、菩提心をもて、往生の業とするなり。深信因果とは、これに就て二あり。一には世間の因果、二には出世の因果なり。世間の因果とは、すなはち六道の因果なり。『正法念經』にとくがごとし。出世の因果とは、すなはち(四)四聖の因果なり。もろ〳〵の大小乘經にとくがごとし。もしこの因果の二法をもて、あまねく諸經を攝せば、諸家おなじからず。しばらく天臺によ

(一)行願。一切有情を自己の如しと觀じて無上菩提に至らしめんとする心。

(二)勝義。一切法無自性と觀ずる心

(三)三摩地。一切有情の心に無量珍寶三摩地を含み、本來普賢の大菩提心なりと觀ず。

(四)四聖。聲聞、緣覺、菩薩、佛。

修十善業とは、これにつきて二義あり。一にははじめに慈心不殺とは、これ(一)四無量心の中の、はじめの慈無量なり。すなはち初の一をあげて、後の三を攝す。たとひ餘の行なくとも、四無量心をもて、往生の業とするなり。次に修十善業とは、一には不殺生、二には不偸盗、三には不邪婬、四には不妄語、五には不綺語、六には不惡口、七には不兩舌、八には不貪、九には不瞋、十には不邪見なり。二には慈心不殺、修十善業の二句を合して一句とす。いはくはじめに慈心不殺とは、これ四無量の中の、慈無量にはあらず。これ十善のはじめの不殺を指す。かるがゆへに知んぬ。正しくこれ十善の一句なることを。たとひ餘の行なくとも、十善業をもて、往生の業とするなり。受持三歸とは、佛法僧に歸依するなり。これにつきて二あり。一には大乘の三歸、二には小乘の三歸なり。具足衆戒とは、これにまた二あり。一には大乘戒、二には小乘戒なり。不犯威儀とは、これにまた二あり。一には大乘、いはく八萬あり。二には小乘、いはく三千あり。發菩提心とは、諸師のこゝろ不同なり。天臺にはすなはち、四教の菩提心あり。いはく藏、通、別、圓これなり。つぶさには『止觀』にとく

(一)四無量。慈無量、悲無量、喜無量、捨無量。

には寶樹觀、五には寶池觀、六には寶樓閣觀、七には華座觀、八には像想觀、九には阿彌陀佛觀、十には觀音觀、十一には勢至觀、十二には普往生觀、十三には雜想觀、つぶさには(一)經にとき給ふがごとし。たとひ餘の行なくとも、あるひは一、あるひは多、その堪るところにしたがつて、十三觀を修して、往生を得べし。其旨經に見えたり。あへて疑慮することなかれ。次に散善につきて二あり。一には三福、二には九品なり。初に三福とは、經にいはく、「一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず。十善業を修す。二には(二)三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯ぜず。三には菩提心をおこし、ふかく(三)因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す」已上。孝養父母とは、是につきて二あり。一には世間の孝養、二には出世の孝養なり。世間の孝養とは、『孝經』等の說のごとし。出世の孝養とは律の中の(四)生緣奉仕の法のごとし。奉事師長とは、これにつきて又二あり。一には世間の師長、二には出世の師長なり。世間の師とは仁義禮智信等を敎ふる師なり。出世の師とは、聖道淨土の二門等をしふる師也。たとひ餘の行なくとも、孝養奉事をもて、往生の業とするなり。慈心不殺、

(一)經『觀無量壽經』のこと。

(二)三歸。佛法僧の三寶に歸依すること。

(三)因果。善因善果惡因惡果の道理。

(四)生緣奉仕の法　五分律に說ける畢陵伽なる者貧しき父母に衣食を供養する如し。

し。たゞ一向にもはら阿彌陀佛を念じて、往生するもののみありて、つねに彌陀現在して、滅したまはざるを見たてまつる。これすなはちその終益なり。已上

當に知るべし。念佛はかくのごとき等の、現當二世始終の兩益あり。しるべし。

十二、釋尊、定散の諸行を附屬せず。たゞ念佛をもて阿難に付屬し給ふの文

『觀無量壽經』にいはく、「佛阿難につげたまはく、汝よくこの語を持せよ。是の語を持すとは、すなはちこれ無量壽經の名を持するなり」。

同經の疏に云く、「佛告阿難汝好持是語より以下は、正しく彌陀の名號を付屬して、(一)遐代に流通し給ふことを明す。上來定散兩門の、益をとくといへども、佛の本願にのぞむれば、こゝろ衆生をして一向にもはら彌陀佛の名を稱せしむるにあり」と。

私にいはく、疏の文を案ずるに、二行あり。一には定散、二には念佛なり。はじめに定散といふは、又分ちて二とす。一には定善、二には散善なり。初に定善に就て、その十三あり。一には(二)日想觀、二には水想觀、三には地想觀、四

(一)遐代。遠き末の世までも。

(二)日想觀等。心を一境に專注して極樂世界の莊嚴を觀察す。

十一品なり。しかのみならず、迦才のはく、衆生の起行すでに千殊あり。往生して、土を見ること、また萬別あり」と。一徃の文を見て封執を起すことなかれ。その中に、念佛はこれすなはち勝行なり。かるがゆへに分陀利を引いて、もてそのたとへとす。たとへのこゝろ知るべし。しかのみならず、念佛の行者には、觀音勢至、かげと形とのごとく、しばらくも捨離し給はず。餘行はしからず。又念佛する者は、命をすてゝ已後、決定して極樂世界に往生す。餘行は不定なり。をよそ五種の嘉譽をつたへ、(一)二尊の影護をかうふる。これはこれ現益なり。また淨土に往生して、乃至成佛す。これはこれ當益なり。又道綽禪師、念佛の一行において、始終の兩益を立つ。『安樂集』にいはく、念佛の衆生をば、攝取してすてたまはず。壽盡ればかならず生ず。これを始益と名づく。終益といふは、『觀音授記經』にいふによるに、阿彌陀佛の、住世長久、兆載永劫にして、また滅度し給ふことあり。(二)般涅槃のとき、たゞ觀音勢至ありて、(三)安樂を住持して、(四)十方を接引す。そのほとけの滅度、また住世の時節と、等同なり。しかるにかの國の衆生、一切ほとけを都見したてまつるものあることな

(一)二尊。釋迦牟尼佛と阿彌陀佛。

(二)般涅槃。入滅のこと。

(三)安樂。極樂世界のこと。

(四)十方を接引。十方の衆生を極樂に往生せしむ。

(一)九品の配當。上々品に讀誦大乘を配し、下々品に念佛を當つる等をいふ。
(二)解第一義。眞理を理解すること

は、契經等の中に、もとも第一とす。よく重罪をのぞき、もろ〳〵の衆生をして、生死を解脱して、すみやかに涅槃安樂の法身を證せしむ。」已上この中に「五無間罪」とは、これ五逆罪なり。すなはち醍醐の妙藥にあらずば、五無間の病、はなはだこれ療しがたし。念佛もまたしかなり。往生教の中には、念佛三昧はこれ惣持のごとく、また醍醐のごとし。もし念佛三昧、醍醐の藥にあらずば、五逆深重の病、はなはだこれ治しがたし。しるべし。問ふていはく、もし然らば、下品上生は、この十惡輕罪の人なり。何が故ぞ念佛を說くや。答ていはく。念佛三昧は、重罪なほ滅す。何にいはんや輕罪をや。餘行はしからず。あるひは輕を滅して、しかも重を滅せざるあり。あるひは一を消して二を消せざるあり。念佛はしからず。輕重かね滅し、一切あまねく治す。譬ば阿伽陀藥のあまねく一切のやまひを治するがごとし。かるがゆへに念佛をもて、王三昧とす。をよそ(一)九品の配當は、これ一往の義なり。五逆の廻心、上々に通じ、讀誦の妙行、下々に通ず、十惡輕罪、破戒次罪、をの〳〵上下に通じ、(二)解第一義、發菩提心、また上下に通ず。一法にをの〳〵九品あり。もし品に約せば、すなはち九々八

しかもかれがためには、(一)素呾纜藏を說き、もしかの有情、威儀をならひ、正法を護持し、一味和合して、久住することを、得せしめんとねがふには、しかもかれがために、(二)毗奈耶藏をとく。もしかの有情、正法をとき、性相を分別し、循環研覈して、甚深を究竟せんとねがふには、しかもかれがために、(三)阿毗達磨藏をとく。もしかの有情大乘眞實の智惠をならひて、我法執著の分別をはなれんとねがふには、しかもかれがために、(四)般若波羅蜜多藏をとく。もしかの有情、契經、調伏、對法、般若を、受持することあたはず、あるひはまた有情ありて、もろ〳〵の惡業たる、(五)四重八重、五無間罪、(六)謗方等經、(七)一闡提等の、種々の重罪をすくはんに。銷滅することを得、速疾に解脫し、頓に涅槃をさとらしめんには　しかもかれがために、もろ〳〵の陀羅尼藏をとく。

この五法藏は、たとへば乳酪生酥熟酥、をよび妙醍醐のごとし。契經は乳のごとく、調伏は酪のごとく、對法教はかの生酥のごとく、大乘般若はなほし熟酥のごとく、惣持門はたとへば醍醐のごとし。醍醐の味は、乳酪酥の中に、微妙第一なり。よく諸病を除いて、もろ〳〵の有情をして、身心安樂ならしむ。惣持門

(一)素呾纜。梵語契經と譯す。

(二)毗奈耶。梵語律と譯す。

(三)阿毘達磨。梵語論と譯す。

(四)般若波羅蜜多梵語、智慧到彼岸と譯す。

(五)四重。殺生、偸盜、邪婬、妄語。八重は之に摩觸、八事(捉手等)覆尼、隨擧芯芻を加ふ。

(六)謗方等經。大乘經を信ぜずして誹謗すること。

(七)一遲提。因果を信ぜず善根を斷じたる人。

がひて、九品をわかつべしといふこれなり。しかのみならず、下品下生はこれ五逆重罪の人なり。しかるによく逆罪を除滅すること、餘行のたへざる所なり。唯念佛の力のみありて、よく重罪を滅するに堪へたり。かるがゆへに極惡最下の人のために、しかも極善最上の法を說く。例せばかの(一)無明淵源の病は、(二)中道府藏の藥にあらざれば、すなはち治することあたはざるがごとし。いまこの五逆は、重病の淵源なり。またこの念佛は、靈藥の府藏なり。この藥にあらずば、何ぞ此病を治せん。かるがゆへに弘法大師の、『二敎論』に、『六波羅蜜經』を引きていはく。第三に法寶とは、いはゆる過去無量の、諸佛所說の正法と、をよび我今の所說となり。いはゆる八萬四千の、もろ〳〵の妙法蘊なり。乃至(三)有緣の、衆生を調伏し純熟す。しかも阿難陀等の、諸大弟子をして、一たび耳に聞いて、みなこと〴〵く憶持せしむ。攝して五分とす。一には素怛纜、二には毗奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜多、五には陀羅尼門なり。この五種の藏をもて、有情を敎化し、度すべき所にしたがひて、しかもためにこれを說く。若しかの有情、山林に處し、すでに閑寂に居して、靜慮を修せんとねがふ者には、一

(一)無明。迷妄の根本。

(二)中道。非有非空の中道。大乘敎の根本原理。

(三)有緣の衆生を調伏し純熟す。其法門に適應する衆生を化益すること

私に問ていはく、經に若念佛者、當知此人等といふは、たゞ念佛のものに約して、しかも是を讃嘆す。釋家何意ありて、實に雜善をもて、比類とすることを、うるにあらずといひて、雜善に相對して、獨り念佛を歎ずるや。答ていはく、文の中に隱れたりといへども、義意これ明かなり。知れる所以は、此經すでに、定散の諸善、ならびに念佛の行を說く。しかるにその中において、ひとり念佛を標して、分陀利に喩ふ。雜善に待するにあらずば、云何ぞよく念佛の功、餘善諸行に、こゆることをあらはさんや。然ればすなはち念佛するものは、すなはちこれ人中の好人とは、これ惡に待して美るところなり。人中の妙好人といふは、これ麁惡に待して、稱する所なり。人中の上々人といふは、これ下々に待して、讃ずる所なり。人中の稀有人といふは、これ常有に待して、歎ずる所なり。人中の最勝人といふは是最劣に待して、褒るところなり。問ふていはく。すでに念佛をもて、上々となづけば、何が故ぞ、上々品の中に說ずして、下々品にいたりて、しかも念佛をとくや。答ていはく。豈前に云はずや。念佛の行はひろく九品に亙と。すなはち前に引くところの『往生要集』に、その勝劣にした

同經の疏にいはく、「若念佛者より下、生諸佛家にいたる已來は、まさしく念佛三昧の、功能超絶して、實に雜善をもて、比類とすることを、うるにあらざることをあらはす。すなはちその五あり。一にはもはら彌陀佛の名を念ずることをあかし、二には能念の人を指して讃ずることをあかし、三にはもしよく相續して、念佛するものは、此人甚だ稀有なりとす。更に物のもて、これにくらぶべきなし。かるがゆへに芬陀利をひきて、喩とすることを明す。芬陀利といふは人中好花となづけ、また稀有花となづけ、また人中上々花と名づけ、また人中妙好花となづく。此の華あひつたふ。蔡華と名づくるこれなりと。もし念佛するものは、すなはちこれ人中の好人、人中の妙好人、人中の上々人、人中の稀有人、人中の最勝人なり。四にはもはら彌陀の名を念ずるものは、すなはち觀音勢至常に隨ひて影護し給ふ。また親友知識のごとくなることを明す。五には今生すでに此益をかふむる。命をすてゝすなはち諸佛の家に入る。すなはち淨土是なり。かしこにいたれば長時に法を聞いて、歷事供養す。(一)因圓かに果滿ず。道場の座、豈賒ならんやといふことをあかす」と。

(一)因圓かに果滿ず。因位の修行を完全に修して佛果に到る。

ず。念佛の行は、これ本願の正業なるがゆへに、化佛讃歎す。しかのみならず、聞經と念佛と、滅罪の多少おなじからざることを。『觀經疏』にいはく、「問ていはく。何故ぞ聞經は十二部なるに、たゞつみをのぞくこと千劫、稱佛は一聲なるに、すなはちつみをのぞくこと、五百萬劫なるは、何ごゝろぞや。答ていはく、造罪の人障おもく、くはふるに死苦來逼をもてす。善人多經を說くといへども、(一)飡受の心浮散す。心散ずるによるがゆへに、罪をのぞくことやゝ輕し。又佛名はこれ一なり。すなはちよく(二)散を攝して、もて心を住せしむ。また敎へて正念に名を稱せしむ。心おもきによるがゆへに、すなはちよく罪をのぞくこと多劫なり」と。

十一、雜善に約對して、念佛を讃歎し給ふの文

『觀無量經經』にいはく、「若念佛せん者は、まさにしるべし、此人はこれ人中の芬陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩、その勝友となる。まさに(三)道場に坐すべきをもて、諸佛の家に生ずべし」と。

(一)飡受の心。臨終の人が說法を聞く時の心。
(二)散を攝して。心の散亂するを統一して
(三)道場に坐す云々。成佛するをいふ。

一〇、彌陀化佛の來迎、聞經の善を讃歎せず、たゞ念佛の行を、讃歎し給ふの文

『觀無量壽經』にはいはく、「或は衆生ありて、もろ〳〵の惡業をつくらん。(一)方等經典を誹謗せずといへども、かくのごときの愚人、多く衆惡をつくりて、慚愧あることなし。命をはらんとほつする時、善知識ために、大乘(二)十二部經の首題名字を讃ずるにあへり。かくのごときの諸經の名をきくをもての故に、千劫極重の惡業を除却す。智者またをしへて、合掌叉手して、南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するがゆへに。五十億劫生死の罪をのぞく。その時かの佛、すなはち化佛化觀世音化大勢至をつかはし、行者の前にいたらしめて、讃じてのたまはく、善男子、汝佛名を稱するがゆへに、諸罪消滅すれば、我きたりて汝をむかふ」と。同經の疏にいはく、「聞くところの化讃、たゞ稱佛の功をのべて、我來りて汝を迎ふといひて、聞經の事を論ぜず。然るに佛の願意に望れば、唯正念に名を稱することをすゝむ。往生の義、疾こと雜散の業に同じからず。この經および諸部の中のごとき處々に廣く歎じ、すゝめて名を稱せしむるを、將に要益とす、しるべし」と。

私にいはく、聞經の善は、これ本願にあらず。雜業なるがゆへに、化佛讃せ

(一)方等。大乘教の意。

(二)十二部經。修多羅、祇夜、和伽羅、伽陀、優陀那、尼陀那、阿波陀那、伊帝目多伽、闍陀伽、毘佛略、阿浮陀達磨、優婆提舍。

業行を雑起せしめず。所作の業には、日別にすべからく念佛誦經を修して、餘課をとゞめざるべきのみ」と。

私にいはく、四修の文見つべし。繁を恐て解せず。たゞし前の文の中に、すでに、四修といひて、唯三修あり。もしその文を脱せるか。もし其意ありや。更に脱文にあらず。その深意あり。何をもてか知ることを得る。四修とは、一には長時修、二には慇重修、三には無餘修、四には無間修なり。しかるに初の長時は、たゞこれ後の三修に、通用するをもてなり。謂く慇重もし退せば、慇重の行、すなはち成すべからず。無餘もし退せば、無餘の行、すなはち成ずべからず。無間もし退せば、無間の行、すなはち成ずべからず。この三修の行を成就せしめんがために、みな長時をもて、三修に屬して、通じて修せしむる所なり。かるがゆへに三修の下に、皆結して畢命を期とし、誓て中止せざる、すなはちこれ長時修なりといへるこれなり。例せば彼の精進、餘の(一)五度に通ずるがごとくなる而已。

(一)五度。布施、持戒、忍辱、禪定、智慧。

誦せん時は、身手清潔にせよ。僧寶といふは、聖僧と菩薩と、破戒とのたぐひ、等心に敬をおこして、慢想を生ずることなかれ。三には無間修、いはくつねに念佛して、往生の心をなす。一切の時におひて、こゝろにつねに想巧すべし。たとへば若し人ありて、他に抄掠せられて、身下賤となりて、つぶさに艱辛をうく、たちまち父母をおもうて、はしりて國に歸らんと欲すれども、行裝いまだ辨せず、なを他郷にありて、日夜思惟して、苦しみたへしのびず、時として暫くもすてゝ耶孃を念せざることなし。はかりごとをなすことすでに成て、便かへりて、達ることを得て、父母に親近し、縱任に歡娛す。行者もまたしかなり。むかし煩惱によりて、善心を壞亂し、福智の珍財、ならびにみな散失す。ひさしく生死にながれて、制するに自由ならず。つねに魔王のために、しかも僕使となりて、(一)六道に駈馳せられて、身心を苦切す。いま善縁にあうて、たちまち彌陀慈父の弘願に違せず、群生を濟拔し給ふをきゝて、日夜に驚忙し、發心してゆくことを願ふ。所以に精勤して倦ず、當に佛恩を念じて、報の盡るを期として、心つねに計念すべし。四には無餘修、いはくもはら極樂をもとめて、彌陀を禮念す。たゞ諸餘の

(一)六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

たゞ深くうやまふことをしれ。もし輕慢を生ずれば、つみを得ることきはまりなし。かるがゆへにすべからくすべてうやまふべし。すなはち行の障をのぞく。四には同縁の伴をうやまふ。いはく同修業の者なり。みづからさはり重くして、獨業成せずといへども、要らず良朋によりて、方によく行をなす。危をたすけ、厄をすくひ、力を助けとあひたすく。同伴の善縁、ふかく相保重せよ。五には三寶をうやまふ。(一)同體、別相、ならびにふかくうやまふべし。つぶさに錄することあたはず。淺行の者の、依修することを、はたさゞるによりてなり。住持三寶とはいまの淺識のために、大因縁となる。今粗料簡せん。佛寶といふは、いはく檀を雕り綺に繡ひ素質金容玉を鏤め、繒に圖し、石を磨き、土を削りこの靈像ことに尊承すべし。しばらくも形を見れば、罪消え福をます。若し少慢を生ずれば、惡を長じ善を亡す。たゞ尊容をおもふこと、まさに眞佛を見るがごとくすべし。法寶といふは、三乘の敎旨、(二)法界所流の、名句の所詮なり。よく解を生ずるの緣なり。かるがゆへにすべからく珍仰すべし。慧を發するの基なるをもてなり。尊經を鈔寫して、恒に淨室に安んじ、箱篋に盛貯へて、ならびに嚴に敬ふべし。讀

(一)同體別相。同體の三寶とは眞理を云ふ、三方同一體の意、別相の三寶とは、三世十方諸佛は佛、其所說の法門は法、菩薩聖賢は僧。

(二)法界所流。宇宙の眞理より流れ出だせる。

て、餘業をもて、來り間てず、かるがゆへに無間修となづく。又貪瞋煩惱をもて來り間てず。(一)隨犯隨懺して、念をへだて、時をへだて、日をへだてしめず、常に清淨ならしむるを、また無間修となづく。畢命を期とし、誓て中止せざる。すなはちこれ長時修なり」と。

『西方要決』にいはく、「たゞ四修を修するをもて、正業とす。一には長時修、(二)初發心よりすなはち菩提にいたるまで、すでに淨因をなしてつゐに退轉することなし。二には恭敬修、これにまた五あり、一には有緣の聖人をうやまふ。いはく行住坐臥、西方に背かず、涕唾便利、西方にむかはず。二には有緣の像教をうやまふ。いはく西方の彌陀の(三)像變を造る。ひろくつくることあたはずば、たゞ(四)一佛二菩薩をつくるもまた得たり。教とは『彌陀經』等を五色の袋に盛って、みづから讀み他にをしへて此經像を室中に安置して、(五)六時に禮讃し、香華供養してことに尊重を生ずべし。三には有緣の善知識をうやまふ。いはく淨土の教をのぶる者をば、もしは(六)千由旬、十由旬よりこのかた、ならびにすべからく敬重し親近し供養すべし。別學の者にも、惣て敬心をおこし、をのれと同じからざるをも、

(一)隨犯隨懺。惡業を犯せば犯す後より懺悔すること

(二)初發心。初めて菩提心を起したる時。

(三)像變。阿彌陀佛を模寫したるもの。木像畫像の如し。

(四)一佛二菩薩。阿彌陀佛觀音勢至二菩薩。

(五)六時。晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜。

(六)千由旬。一由旬は約二千五百六十丈。

餘はすなはち是れ淨土門の意なり。文にありて見つべし。明かに知んぬ。善導の意またこの二門を出ざることを。廻向發願心の義、別釋をまつべからず。行者しるべし。此三心は惣じてこれをいはゞ、諸の行法に通じ、別してこれをいはゞ、往生の行にあり。いま通を擧げて別を攝す。こゝろすなはちあまねし。行者よく用心して、敢て忽緒にすることなかれ。

九、念佛の行者四修の法を行用すべきの文

善導の『往生禮讃』にいはく、「またすゝめて四修の法を行ぜしむ。何者をか四とす。一には恭敬修、いはゆるかの佛、をよびかの一切の聖衆等を恭敬禮拜す、かるがゆへに恭敬修となづく。畢命を期とし、誓つて中止せざる、すなはちこれ長時修なり。二には無餘修、いはゆる專らかの佛名を稱して、かの佛及び一切の聖衆等を、專念專想、專禮專讃して、餘業をまじへず。かるがゆへに無餘修となづく。畢命を期とし誓て中止せざる。すなはちこれ長時修なり。三には無間修、所謂相續して、恭敬禮拜し、稱名讃歎し、憶念觀察し、廻向發願し、心々相續し

(一)外を飜して内に蓄ば。外に見せたる精進を移して内心に懷く時はの意。

(二)九品。上々品乃至下々品。

だし外には賢善精進の相を現じ、内に虚假をいだくとは、外は内に對するのことばなり。いはく外相と内心と、とゝのはざるの意なり。すなはち是れ外は智にして内は愚なり。賢は愚に對するの言なり。いはく外はこれ賢にして、内はすなはち愚なり。善は惡に對するのことばなり。いはく外はこれ善にして、内はすなはち惡なり。精進は懈怠に對するのことばなり。いはく外には精進の相をしめし、内にはすなはち懈怠の心をいだく。もしそれ(一)外を飜して、内に蓄ば、秖に出要にそなへつべし。内懷虚假等とは、内は外に對するのことばなり。いはく内心と外相と、とゝのはざるの意なり。すなはちこれ内虚外實なり虚は實に對するのことばなり。いはく内虚外實の者なり。假は眞に對するの辭なり。いはく内假外眞なり。もしそれ内を飜じて外に播さば、また出要に足りぬべし。次に深心とは、いはく深く信ずるの心なり。當にしるべし。生死の家には、疑をもて所止とし、涅槃の城には、信をもて能入とす。かるがゆへにいま二種の信心を建立して、(二)九品の往生を決定するものなり。又此中に、一切の別解別行、異學異見等といふは、これ聖道門の、解行學見を指すなり。その

誠心と名づく。二には深心、すなはちこれ眞實の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉し。火宅を出でずと信知し、いま彌陀の本弘誓願及び名號を稱すること、十聲一聲等にいたるまで、さだめて往生を得と信知して、乃至一念も、疑心あることなし。かるがゆへに深心となづく。三には廻向發願心、なす所の一切善根、こと〴〵くみな廻して、往生を願ず。かるがゆへに廻向發願心となづく。この三心を具すれば、かならず生ずることを得。もし一心をもかきぬれば、すなはち生ずることを得ず『觀經』につぶさに說くがごとし、しるべし」と。

私にはいはく。引くところ三心は、是れ行者の至要なり。ゆへはいかんとなれば、經には則ち三心を具するものは、かならず彼の國に生ずといふ。明かに知ぬ。三を具すればかならず生ずる事を得べし。釋にはすなはちもし一心をも欠けぬれば、すなはち生ずることをえずといふ。明らかに知ぬ。一も欠けぬれば、これまた不可なることを。これによりて極樂に生ぜんとほっせん人は、全く三心を具足すべし。その中に至誠心とは、これ眞實心なり。その相かの文のごとし。た

わする丶事なく、かの願力の道に乘じて、捨命已後、かの國に生ずることをえて、ほとけと相見せば、慶喜なんぞ極まらんといふにたとふ。又一切の行者、行住坐臥三業に修するところ、晝夜時節を問ふことなく、つねに此解をなし、つねにこの想をなすかるがゆへに、廻向發願心となづく。又廻向といふは、かの國に生じをはりて、かへりて大悲を起して、生死に廻入して、衆生を教化するを、また廻向となづく。三心すでに具すれば、行として成ぜずといふ事なし。願行すでに成じて、もし生ぜずといはゞ、此ことはりある事なし。又この三心、また通じて(一)定善を攝するの義しるべし。」

『往生禮讃』に云く。問ていはく、いま人をすゝめて、往生せしめんとほつするもの、いまだしらずいかんが安心し、起業し、作業して、定めてかの國土に往生を得んや。答ていはく、かならずかの國土に生ぜんとほつせば、『觀經』に説くがごとき、三心を具すれば、かならず往生を得。何等をか三とす。一には至誠心、いはゆる身業にかの佛を禮拜し、口業に、かの佛を讃歎稱揚し、意業に、かの佛を專念觀察す。およそ三業をおこすに、かならず眞實をもちゆ。かるがゆへに至

(一)定善。前出。

とふるに白道のごとし。又水波つねに道をうるほすとは、即ち愛心つねにをこりて、よく善心を染汚するにたとふ。又火焔つねに道をやくとは、すなはち瞋嫌の心よく、功徳の法財をやくにたとふ。人みちの上をゆきて、直に西にむかふといふは、すなはちもろ〳〵の行業を廻して、直に西方にむかふにたとふ。東岸に人の聲ありて、すゝめやるをきゝて、道をたづねて直に西にすゝむといふは、すなはち釋迦すでに滅し給ひて、後の人見たてまつらざれども、なを敎法のたづぬべきあるにたとふ。すなはち是をたとふるに聲のごとし。あるひはゆく事、一分二分するに、群賊等よびかへすといふは、すなはち別解別行惡見人等、みだりに見解をときて、たがひにあひ惑亂し、をよびみづから罪をつくりて、退失するにたとふ。西岸のうへに人ありてよぶといふは、すなはち彌陀の願意にたとふ。須臾に西岸にいたれば、善友あひ見てよろこぶといふは、すなはち衆生ひさしく、生死にしづみて、曠劫に輪廻し、迷倒自纒して、解脱するによしなし。あふぎて釋迦發遣して、指して西方にむかはしむることをいふなり。又彌陀悲心をもて、招喚し給ふによりて、いま信じて二尊の意に順じ、水河の二河をかへりみず。念々に

よぶをきゝて、すなはちみづから身心を正當にして、決定してみちをたづねて、直にすゝみて、疑怯退の心を生せず。あるひはゆくこと一分二分するに、東岸の群賊等、よびていはく仁者かへりきたれ、この道嶮く惡し。過ることを得じ。かならず死なん事うたがはず。我等すべて惡心をもて、あひむかふことなしと。此人よぶこゑを聞くといへどもまたかへり見ず。一心を直にすゝみて、道を念じてゆけば、須臾にすなはち西岸にいたりて、ながくもろ〳〵の難をはなる。善友あひ見て慶樂やむ事なし。是はこれたとへ也。次にたとへを合せば、東岸といふは、即ち此娑婆の(一)火宅にたとふ。西岸といふは、すなはち極樂の寶國にたとふるなり。群賊惡獸いつはりしたしむといふは、即ち衆生の(二)六根、六識、六塵、五陰、四大にたとふ。人なき空逈の澤といふは、即ちつねに惡友にしたがひて、眞の善知識にあはざるにたとふ。水火の二河といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとく瞋憎は火のごとくなるにたとふ。中間の白道四五寸といふは、すなはち衆生の、貪瞋煩惱の中に、よく清淨なる、願往生の心を生ずるにたとふ。すなはち貪瞋つよきによるがゆへにすなはちたとふるに水火のごとし。善心微なるがゆへにた

(一)火宅。前出。

(二)六根六識云々 六根は眼根耳根鼻根舌根身根意根、六識は眼識耳識鼻識舌識身識意識。

ちにはしりて西にむかへば、忽然として此大河をみる。すなはちみづから念言すらく、此河南北邊畔をみず、中間に一つの白道をみるに、きはめてこれ狭く少し。二の岸あひさる事なしといへども、何によりてゆくべき。今日さだめて死せん事うたがはず、まさにいたり歸らんとほつすれば、群賊惡獸漸々にきたりせむ。まさに南北にさりはしらんとほつすれば、惡獸毒蟲、きをひきたりて我にむかふ。まさに西にむかひて道をたづねてさらんとほつすれば、またおそらくはこの水火の二河に墮せんことを。そのときの惶怖こと又いふべからず。即ちみづから思念すらく、われいまかへるともまた死なん。とゞまるともまた死なん。さるともまた死なん。一種として死をまぬかれず。我むしろ此道を尋ねて、さきにむかひてさらん。すでに此みちあり。かならずわたるべし。この念をなす時に東の岸にたちまちに、人のすゝむる聲をきく。仁者たゞ決定して、此道を尋ねてゆけ、かならず死の難なけん。もしとゞまらばすなはち死なんと。又西の岸のうへに人ありて、よびていはく。なんぢ一心正念にして、たゞちにきたれ我よく汝をまもらん、すべて水火の難に墮せんことを畏れざれと。この人すでにこゝに遣り、かしこに

ろにしたがひて、しかもその行を修すれば、かならず疾く解脱を得。行者まさにしるべし。もし解を學せんとほつせば、凡より聖にいたり、乃至佛果まで、一切無礙にみな學することを得よ。もし行を學せんとほつせば、かならず有緣の法によれ。すこしく功勞をもちゆるに、多く益を得。又一切の往生の人等にまふす。いまさらに行者のために、一の譬喩をときて、信心を守護して、もて外邪異見の難をふせがん。何者か是なる。たとへば人ありて、西にむかひて百千の里を、ゆかんとほつするがごとき、忽然として、中路に二河あるを見る。一はこれ火の河、南にあり。二はこれ水のかは北にあり。二河をの〳〵廣さ百步、をの〳〵ふかくしてそこなく、南北ほとりなし。水火の中間にあたりて、一の白道あり。ひろさ四五寸ばかり、この道ひんがしのきしより、西の岸にいたるまで、また長さ百步なり。その水の波浪こも〴〵すぎて、道をうるほし、その火の焰、またきたりて道をやく。水火あひまじはりて、つねに休息ことなし。この人すでに空曠の、はるかなるところにいたるに、さらに人物なし。おほく群賊惡獸ありて、此人の單獨なるをみて、きをひきたりて、ころさんとほつす。此人死ををそれて、たゞ

身上におひて、具に十惡、(一)五逆、四重、謗法闡提、破戒、破見等の、罪をつくりて、いまだ除き盡すことあたはず。しかるにこれらの罪は、三界の惡道に繫屬す。いかんぞ一生の修福念佛をもて、すなはちかの(二)無漏無生の國に入て、ながく不退の位を證悟することを得んや。答ていはく。諸佛の教行、かず塵沙に越え、(三)稟識の機緣、隨情一にあらず。たとへば世間の人の、眼に見つべく信ずべきがごときは、明よく闇をやぶり、空よく有をふくみ、地よく載せ養ひ、水よく生潤し、火よく成壞するがごとし。かくのごとき等の事、こと〳〵く待對の法となづく。目に即れて見つべし。千差萬別なり。いかにいはんや佛法不思議の力、あに種々益のなからんや。隨て一門を出づれば、すなはち一煩惱門を出で、したがひて一門にいれば、すなはち一解脫智惠門にいるなり。これによりて緣にしたがひて、行をおこして、をの〳〵解脫をもとむ。汝なにをもてか、すなはち有緣にあらざる。要行を將て、我を障惑するや。しかるに我愛するところは、すなはちこれ我有緣の行なり。すなはち汝がもとむるところにあらず。汝が愛するところは、すなはちこれ汝が有緣の行なり。また我もとむるところにあらず。この故にをの〳〵ねがふとこ

(一)五逆云云。五逆は殺父母、破和合僧、出佛身血、殺阿羅漢、破羯磨僧。四重は殺生、偸盜、邪婬、妄語、闡提は梵語、信不具と譯す。善根を斷じたる人。

(二)無漏無生の國　煩惱の汚れなき眞理の國、極樂を指す。

(三)稟識の機緣。衆生のこと。

二種あり。一には正行、二には雜行なり云々。前の二行の中に引く所のごとし繁を恐れて載せず見ん人心を得よ。三には廻向發願心。廻向發願心といふは、過去をよび今生の、(一)身口意業に、修する所の、(二)世出世の善根、をよび他の一切の凡聖の、身口意業に、修するところの、世出世の善根、をよび他の一切の、凡聖の身口意業に、修する所の、世出世の善根を隨喜せる、この自他の、所修の善根をもて、こと〴〵くみな、眞實深甚の、心中に廻向して、かの國に生ぜんと願ず。かるがゆへに廻向發願心と名づく。又廻向し發願して、生ぜんと願ずるものは、かならずすべからく、決定して、眞實心中に、廻向し願じて、得生の想をなすべし。この心ふかく信ずること、なをし(三)金剛のごとく、一切の異見異學、別解別行の人等のために、動亂破壞せられず、たゞこれ決定して、一心に投じ正直にすゝんで、かの人の語を聞きて、すなはち進退し、こゝろに怯弱を生ずることありて、廻顧落道して、すなはち往生の大益を、失ふことを得され。問ていはく、もし解行おなじからざる、邪雜の人等ありて、きたりてあひ惑亂し、あるひは種々の疑難をときて、往生を得ずといひ、あるひはいはん汝等衆生、曠劫よりこのかた、をよび今生の、身口意業に、一切凡聖の

(一)身口意業。前出。

(二)世出世。世間の善及び出世間の善。

(三)金剛。信仰心の不動不壞を譬ふ

ちこれ一切佛の化、一切佛の化は、すなはちこれ一佛の所化なり。みなはち『彌陀經』の中に、說きたまはく、釋迦極樂の、種々の莊嚴を讚歎して、又一切の凡夫、一日七日、一心にもはら、彌陀の名號を念ずれば、さだめて往生を得と、すゝめ給へば、次下の文に、十方にをの〳〵、恒河沙等の諸佛ありて、おなじく釋迦よく、(一)五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡見惡煩惱、惡邪無信の、盛んなる時におひて、彌陀の名號を指讚して、衆生稱念すれば、かならず往生を得と、勸勵し給ふことを讚じ給ふといへる、すなはちその證なり。又十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所說を、信ぜざらんことをおそれて、すなはちともに、同心同時に、をのをの舌相をいだして、あまねく三千世界におほひて、誠實の言をとき給ふ。汝等衆生、みなまさにこの釋迦の、所說、所讚、所證を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近をとはず、たゞよく上百年をつくし、下一日七日にいたるまで、一心にもはら、彌陀の名號を念ずれば、さだめて往生を得、かならずうたがふことなかれと。このゆへに一佛の所說は、すなはち一切佛、おなじく其事を證誠し給ふ。これを人に就て信をたつとなづく。次に行につきて信を立つとは、しかるに行に

(一)五濁時惡。前出。

(一)一佛は一切佛　佛と佛とは所證の理、能證の智、乃至外的作用皆同一平等なり。

(二)殺生十惡等。十惡とは殺生、偸盗、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、邪見。

(三)六度。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。

に覆ひて、一々にときて、釋迦の所說、あひ讃じて、一切の凡夫を勸發して、專心に念佛し、をよび餘善を修して、廻願すれば、かの淨土に生ずることを得といふ。これは是虛妄なり。さだめてこの事なしといはんに、我これらの諸佛の、所說を聞くといへども、畢竟して一念疑退の心をおこして、かの佛國に生ずることを、得ざらんかとおそれじ。何をもてのゆへに(一)一佛は一切佛なり。あらゆる知見解行、證悟果位、大悲等同にして、すこしも差別なし。このゆへに一佛の制するところは、すなはち一切佛おなじく制し給ふ。前佛の(二)殺生十惡等の罪を制斷し給ふに、畢竟じて犯ぜず、行ぜざるを、すなはち十善十行、隨順(三)六度の義と名づくるがごとき、もし後佛出世し給ふことあらんに、豈前の十善をあらためて、十惡を行ぜしむべけんや。此道理をもて、推驗するに明らかに知ぬ。諸佛の言行、あひ違失せざることを。たとひ釋迦一切の凡夫を指勸して、この一身をつくすまで、專念專修すれば、命をすてゝ已後、さだめてかの國に生ずとの給はゞ、すなはち十方の諸佛も、こと〳〵くみなおなじく讃じ、おなじくすゝめおなじく證し給はん。なにをもてのゆへに、同體の大悲なるがゆへに。一佛の所化は、すなは

(一)了義。究竟の教。

(二)化佛報佛。化佛は種々の機類に應同して變化して現はるゝ佛。報佛は因位の萬行に報ゐたる佛。

等、若しは一もしは多、乃至十方に遍滿してみな經論を引きて、證して生せずといふとも、我またいまだ一念の疑心をおこさじ。唯我清淨の信心を增長し成就せん。何をもてのゆへに、佛語は決定成就の(一)了義にして、一切のために破壞せられざるによるがゆへなり。又行者よくきけ。たとひ初地已上、十地已來、若は一もくは多、乃至十方に遍滿して、異口同音に、みな釋迦佛の、彌陀を指讃し、三界六道を毀呰し、衆生を勸勵して、專心に念佛し、をよび餘善を修すれば、これ一身ををはりてのち、必定して、かの國に生ずといふは、これかならず虛妄なり、依信すべからずといはんに、我これ等の所說を聞くといへども、また一念の疑心を生ぜず。たゞ我決定上々の、信心を增長し成就せん。なにをもてのゆへに、すなはち佛語は眞實決了の、義なるによるがゆへに。佛はこれ實知實解、實見實證にして、この疑惑の心中の語にあらざるがゆへに。又一切菩薩は、異見異解のために、破壞せられず。もし實にこれ菩薩ならば、すべて佛教に違せじ。又この事をば置く。行者當にしるべし。たとひ(二)化佛報佛、若は一もしは多、乃至十方に遍滿して、をの〳〵ひかりをかゞやかし、したをはきて、あまねく十方

はゞ、いかんがかの難を對治して信心を成就し、決定して直にすすんで、怯退を生せざらん。答ていはく、もし人ありて、多く經論を引きて證して生せずといはゞ、行者すなはちこたへていへ。仁者經論を持來つて、證して生せずといふといへども、我意のごときは決定して汝が破を受けず。何をもてのゆへに、然るに我まだこれかの諸經論を信ぜざるにはあらず、こと〴〵くみなあふひで信ず。しかれどもほとけ、かの經をとき給ふ時は、處も別に、時も別に、(一)對機も別に、利益も別なり。又かの經をとき給ふ時は、すなはち『觀經』『彌陀經』等を、とき給ふ時にあらず、然るにほとけ敎を說きて機に備へ給こと、時またおなじからず。かれはすなはち通じて、人天菩薩の解行をとき、いまは『觀經』の、定散二善をときて、たゞ(二)韋提をよび、佛滅後の、(三)五濁(四)五苦等の、一切の凡夫のために、證して生ずることを得との給へり。この因緣によりて、我いま一心に、この佛敎によりて、決定して奉行す。たとひ汝等、百千萬億ありて生せずといふとも、たゞ我往生の、信心を增長し成就せんと。又行者さらに向つてときていへ。仁者よくきけ、我いま汝がために、さらに決定の信相をとかん。たとひ(五)地前の菩薩、羅漢辟支

(一)對機。經を說き給ふ時の對者。

(二)韋提。韋提希夫人、阿闍世太子の母。

(三)五濁。前出。

(四)五苦。生、老、病、死、愛別離苦。

(五)地前。初地以前の略、初地に至れば一部の悟境に達す。

ことありといへども、かならずすべからく佛の證を請うて、定とすべきなり。もし佛意にかなへば、すなはち(一)印可して如是如是との給ふ。もし佛意にかなはざれば、すなはち汝等がとくところ、この義不如是とのたまふ。印せざるものは、すなはち(二)無記無利無益の語におなじく、佛の印可し給ふものは、すなはち佛の正教に隨順す。もし佛のあらゆる言説は、すなはちこれ正教、正義、正行、正解、正業、正智なり。若しは多もしは少、すべて菩薩人天等にとうて、その是非をさだめ給はず。もし佛の所説はすなはちこれ了教なり。菩薩等の説をば、ことごとく不了教となづくるなり。しるべし。この故に今時仰いですゝむ、一切有緣の往生人等、たゞふかく佛語を信じて、專注奉行すべし。菩薩等の、(三)不相應の教を信用して、もて疑碍をなし、抱惑自迷して、往生の大益を、廢失すべからず。又深心は、深く信ずるなりとは、決定して自心を建立して、教に順じて修行して、ながく疑錯を除きて、一切の(四)別解別行、異學異見異執のために退失し傾動せられざれ。問ていはく、凡夫智淺く、惑障ことはりふかし。もし解行不同の人、おほく經論を引來つてあひ妨難し、證して一切罪障の凡夫、往生を得ずといふに蓬

(一)印可。許可の意。

(二)無記。善に非ず、惡に非ざるをいふ。

(三)不相應の教。我身に相應せざる聖道門の教。

(四)別解別行。見解修行を異にする人。

攝受し給ふ。うたがひなくうらおもひなく、かの願力に乘じて、さだめて往生を得と。又決定してふかく信ず。釋迦佛、この『觀經』の三福九品、定散二善を說きてかの佛の依正二報を證讃して、人をして欣慕せしめ給ふことを。又決定して、ふかく信ず。『彌陀經』の中に、(一)十方恒沙の諸佛、一切の凡夫決定して、生ずることを得と、證勸し給ふことを。又深信とは、あふぎねがはくは、一切の行者等、一心にたゞ、佛語を信じて身命をかへり見ず、決定して依行せよ。佛の捨てしめ給ふものをばすなはちすて、佛の行ぜしめたまふものをばすなはち行じ、佛の去らしめ給ふ處をばすなはちされ。これを佛教に隨順し、佛意に隨順すとなづけ、是を佛願に隨順すと名づけ、これを眞の佛弟子となづく。又一切の行者、たゞよくこの經によりてふかく信じて、行ずるものは、かならず衆生をあやまらず。何をもてのゆへに、佛はこれ大悲を、滿足せる人なるがゆへに、實語し給ふがゆへに。佛をのぞきて(二)已還は、智行いまだ滿せず。その學地にありて、なを(三)正と習との、二の障ありていまだのぞかず、果も願もいまだまどかならず。これらの凡聖は、たとひ諸佛の教意を測量するも、いまだ決了することあたはず。(四)平章する

(一)十方恒沙の云云。第十四章段に委說す。

(二)已還。已下の意、菩薩等を指す。

(三)正と習。正は正使、理を障ふ惑。習は習氣、事を障ふ惑。

(四)平章する。正しく佛教を曉むること。

に、口業にかの阿彌陀佛、をおび依正二報を讃歎し、又眞實心中に、口業に(一)三界(二)六道等の、自他の依正二報、苦惡の事を毀厭し、また一切衆生の、三業になす所の、善を讃歎す。もし善業にあらざるをは、敬ひてこれを遠ざけ、また隨喜せざれ。又眞實心中に、身業に合掌禮敬して、(三)四事等をもて、かの阿彌陀佛、をよび依正二報を供養す。又眞實心中に、身業に、この生死三界等の、自他の依正二報を、輕慢し厭捨す。又眞實心中に、意業に、かの阿彌陀佛、をよび依正二報を思想し、觀察し、憶念して、目前に現ずるがごとくす。又眞實心中に、意業にこの生死三界等の、自他の依正二報を、輕賤し厭捨す。不善の三業をば、かならずすべからく、眞實心中にすつべし。又もし善の三業を起さば、からずすべからく眞實心中になすべし、(四)内外明闇をえらばず、みなすべからく眞實なるべし。かるがゆへに至誠心となづく。二者深心、深心といふはすなはちこれ、ふかく信ずるの心なり。又二種あり。一には決定してふかく信ず。自身は現に是、罪惡生死の凡夫、(五)曠劫よりこのかた、常に沒し、つねに流轉して、(六)出離の縁ある事なしと。二には決定してふかく信ず。この阿彌陀佛四十八願をもて、衆生を

(一)三界。欲界、色界、無色界。

(二)六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

(三)四事。飲食、衣服、臥具、湯藥。

(四)内外明闇。内心、外相、明るき所闇き所。

(五)曠劫。遠き遠き昔。

(六)出離の縁。生死輪廻の迷境を出づる方法。

(一)身口意業。身に行ふこと、口に言ふこと、心に思ふこと。

(二)安心起行。安心は心を据えること、起行は念佛を唱ふること。

(三)頭然をすくふ。頭に火のつきたるを消すこと、熱心に急ぎてなすを喩ふ。

一切衆生の(一)身口意業に、修する所の解行、かならずすべからく眞實心中になすべきことをあかさんと欲す。外に賢善精進の相を現して、内に虚假をいだく事を得ざれ。貪瞋邪僞、姧詐百端にして、惡性やめがたく、事蛇蝎におなじきは、三業を起すといへども、名づけて雜毒の善とす。また虚假の行となづく。眞實の業となづけず。もしかくのごときの、(二)安心起行をなすものは、たとひ身心を苦勵して日夜十二時、急に走り急に作すこと、(三)頭然をすくふごとくなるも、すべて雜毒の善となづく。此雜毒の行を廻して、かの佛の淨土に生ぜんことをもとめんと欲せば、これかならず不可なり。なにをもてのゆへに、正しくかの阿彌陀佛の因中に、菩薩行を行じたまひし時の乃至一念一刹那も、三業に修するところ、みなこれ眞實心中になし、おほよそ施爲趣求したまふ所、またみな眞實なるによりてなり。又眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。自利眞實といふはまた、二種あり。一には眞實心中に、自他の諸惡、をよび穢國等を制捨して、行住坐臥に、一切の菩薩の、諸惡を制捨し給ふにおなじく、我もまたかくのごとくならんとおもふ也。二には眞實心中に、自他凡聖等の、善を勤修し、眞實心中

(一)彼國。極樂世界。

の光明十方を照す。たゞ念佛のもののみありて、光攝を蒙る。まさにしるべし。本願最も強とす」。已上 又所引の文の中に、「自餘の衆善は、これ善となづくといへども、もし念佛に比すれば、また〳〵比校にあらず」といふは、意のいはく、これ淨土門の、諸行に約して、しかも比論する所なり。念佛はこれすでに、二百一十億の中に、選取する所の妙行なり。諸行はこれすでに、二百一十億の中に、選捨する所の麁行なり。故に「またく比校にあらず」といふ。又念佛はこれ本願の行、諸行は本願にあらず。かるがゆへに「またく比校にあらす」といふなり。

念佛の行者かならず、三心を具足すべきの文

『觀無量壽經』にいはく、「もし衆生ありて、(一)彼國に生ぜんと願ぜば、三種の心をおこして、すなち往生す。何等をか三とす。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具するものは、かならずかの國に生ず」と。同經の疏にいはく、「經にいはく、一者至誠心、至とは眞なり。誠とは實なり。

(一)定散。前出。

(二)心光。佛の心より起る光明。又は智慧光と名く。

佛に比すれば、またく比校にあらず。このゆへに諸經の中、處々に廣く念佛の功能を讚ず。『無量壽經』の四十八願の中のごとき、唯もはら、彌陀の名號を念じて、生ずることを得ることをあかせり。又『彌陀經』の中のごとき、一日七日もはら、彌陀の名號を念じて、生ずることを得。また十方恒沙の諸佛、不虚を證誠したまふ。又この經の(一)定散の文の中に、たゞもはら名號を念じて、生ずることを得ることを標す。この例一にあらじ。廣く念佛三昧をあらはし竟んぬ」と。『觀念法門』にいはく、「又前のごとく、身相等の光、一々あまねく十方世界をてらす、たゞもはら阿彌陀佛を念ずる衆生のみありて、かの佛の(二)心光つねにこの人をてらして、攝護してすて給はず、總て餘の雜業の行者を、照攝することを論ぜず」と。

私に問ていはく。ほとけの光明、たゞ念佛の者のみをてらして、餘行の者をてらさゞるは、なにごゝろありや。答ていはく、解するに二義あり。一には親緣等の三義、文のごとし。二には本願の義、いはく餘行は本願にあらず。かるがゆへに、これを照攝せず。念佛はこれ本願なり、かるがゆへに、これを照攝す。故に善導和尚の『六時禮讚』にいはく、「彌陀の身色は金山のごとし。相好

(一)別相。阿彌陀佛の身の一々特別のすがた。

(二)彼此の三業。阿彌陀佛と衆生との身業、口業、意業。

(三)諸邪業繫。衆生が嘗て作りたる惡業の障害。

(一)別相を觀ずるに、ひかり有緣を益することをあかすに　すなはちその五あり、一には相の多少をあかし、二には好の多少をあかし、三には光の多少をあかし、四には光照の遠近をあかし、五には光のをよぼさるゝ處、偏に攝益をかふむることをあかす。問ていはく、備に衆行を修して、たゞよく廻向すれば、みな往生を得、何をもてか、佛光あまねく照すに、念佛の者のみを攝すること何意ありや。答て曰く此に三義あり。一に親緣をあかす。衆生念をおこして、口つねに佛を稱すれば、佛すなはちこれをきゝたまふ。身つねに佛を禮敬すれば、佛すなはちこれを見たまふ。心つねに佛を念ずれば、佛すなはちこれをしりたまふ。衆生ほとけを憶念すれば、佛また衆生を憶念し給ふ。(二)彼此の三業あい捨離せず、故に親緣となづく。二に近緣をあかす。衆生ほとけを、見たてまつらんと願ずれば、佛すなはち念に應じて、目前に現在したまふ。故に近緣となづく。三に增上緣をあかす。衆生稱念すれば、すなはち多劫の罪を除き、命をはらんとほつする時、ほとけ聖衆とともに、みづから來て、迎接したまふ。(三)諸邪業繫、よくさふるものなし。故に增上緣となづく。自餘の衆行も、これ善となづくといへども、もし念

專心に佛を想へばほとけ人を知りたまふ」。故に知んぬ。四十八願の中にすでに念佛往生の願をもて、本願の中の王とするなり。こゝをもて釋迦の慈悲、特りこの經をもて、止住すること百歳なり。例せばかの『觀無量壽經』の中に、(一)定散の行を付屬せずして、たゞひとり念佛の行を、付屬し給ふがごとし。これすなはちかの佛願に順ずるが故に、念佛の一行を付屬したまふ。問ていはく。百歳の間、念佛を留むべきこと、その理しかるべし。これ念佛の行は、たゞかの時機にかふむるとやせんはた(二)正像末法の機に通ずとやせん。答へていはくひろく正像末法に通ずべし。後をあげて今をすすむ。その義知るべし。

彌陀の光明、餘行のものをてらさず、唯念佛の行者を、(三)攝取したまふの文

『觀無量壽經』にいはく、「無量壽佛に、八萬四千の(四)相あり。一々の相に、をの〱八萬四千の隨形好あり。一々の好に、また八萬四千の光明あり。一々の光明あまねく十方世界をてらして、念佛の衆生を、攝取して捨てたまはず」と。同經の疏にいはく。「無量壽佛より下、攝取不捨にいたる已來は、まさしく身の

(一)定散の行を云云。第十二章段に委說す。

(二)正像末法」前出。

(三)攝取。攝は攝護、取は不捨の意

(四)相。微妙なるすがた。

機縁もともあさく、念佛往生は、機縁はなはだ深きことを。しかのみならず、諸行往生は縁少く、念佛往生は縁多し。また諸行往生は、近く末法萬年の時に局り、念佛往生は、遠く法滅百歳の代を、うるほすことを。問ていはく、すでに「われ慈悲哀愍をもて、特りこの經をとゞめて、止住すること百歳ならん」といふ。若しからば釋尊慈悲をもて、經教をとゞめ給はゞ、何の經何の教かとゞまらざらん。しかるになんぞ餘經をとゞめず、唯この經をとゞめ給ふや。答ていはく、たとひ何の經を留むとも、別して一經をさすときは、またこの難をさけず。但し特りこの經をとゞめたまふこと、その深き意あらん歟。若し善導和尚の意によらば、この經の中に、すでに彌陀如來の、念佛往生の本願をとき給へり。釋迦の慈悲、念佛をとゞめんがために、ことにこの經をとゞめ給ふ。餘經の中には、いまだ彌陀如來の、念佛往生の、本願をとかず。故に釋尊の慈悲、しかもこれをとどめたまはず。おほよそ四十八願、それ本願なりといへども、ことに念佛をもて、往生の規とす。故に善導の釋にいはく、「弘誓多門にして四十八、偏に念佛を標して、もとも親しとす。人よく佛を念ずれば、佛還て念じたまふ。

に、略して四の意あり。一には聖道淨土の、二敎住滅の前後、二には十方西方の、二敎住滅の前後、三には(一)都率西方の、二敎住滅の前後、四には念佛諸行の二行住滅の前後なり。一に聖道淨土の、二敎住滅の前後とは、いはく聖道門の諸經、まづ滅す。故に「經道滅盡」といひ、淨土門のこの經特り留る。故に「止住百歲」といふ。まさにしるべし。聖道は(二)機緣淺薄に、淨土は機緣深厚なることを。二に十方西方の。二敎住滅の前後とは、いはく十方淨土の往生の諸敎まづ滅す。經に「經道滅盡」といひ、西方淨土往生のこの經ひとりとゞまる。故に「止住百歲」といふ。まさにしるべし。十方の淨土は、機緣淺薄に、西方淨土は、機緣深厚なることを。三に都率西方の、二敎住滅の前後とは、いはく上生心地等の、上生都率の諸敎、まづ滅す。故に「經道滅盡」といひ、往生西方のこの經特り留る。故に「止住百歲」といふ。まさにしるべし。都率は近しといへども、緣あさく、極樂は遠しといへども、緣深きことを。四に念佛諸行の二行住滅の前後とは、いはく諸行往生の諸敎まづ滅す。かるがゆへに「經道滅盡」といひ、念佛往生のこの經特り留る。經に「止住百歲」といふ。當に知べし。諸行往生は、

(一)都率西方。都率天は彌勒菩薩の居所、西方は阿彌陀佛の極樂淨土。

(二)機緣。法門と衆生との關係。

はんものは意の所願にしたがひて、みな得度すべし」と。

私に問ていはく、經にたゞ「特留二此經一、止住百歳」といひて、またく特留念佛止住百歳といはず。しかるにいまなんぞ、特留念佛といふや。答ていはく、この經の所詮、またく念佛にあり。その旨前に見えたり。再びいだすことあたはず。善導、懷感、慧心等のこゝろ、また〳〵かくのごとし。しかればすなはちこの經の止住は、すなはち念佛の止住なり。しかるゆへんはこの經に、菩提心の言ありといへども、いまだ菩提心の行相をとかず。また持戒の言ありといへども、いまだ持戒の行相をとかず。しかるに菩提心の、行相をとくことは、ひろく『菩提心經』等にあり。かの經まづ滅しなば、菩提心の行、なにによりてかこれを修せん。又持戒の行相を説くことは、ひろく(一)大小の戒律にあり。かの戒律まづ滅しなば、持戒の行、なにによりてかこれを修せん。自餘の諸行これに準じてしるべし。かるがゆへに善導和尚の『往生禮讃』に、この文を釋していはく、「萬年に(二)三寶滅せんに、この經住すること百年ならん。そのとき聞きて一念せば、みなまさに彼に生ずることを得べし」と。又この文を釋する

(一)大小の戒律。佛教々團の法規、大乘と小乘と其制規を異にす。

(二)三寶。佛寶、法寶、僧寶。

輩の文の中に、一念といふといへども、また功德大利をとかず。これ一念にいたりて、說きて大利とし歎じて無上とす。まさにしるべし、これ上の一念を指すことを。これ大利とは是小利に對するの言なり。しかればすなはち菩提心等の諸行をもて、小利とし、乃至一念をもてしかも大利とするなり。又無上功德とは、これ有上に對するの言なり。餘行をもて、有上とし、念佛をもて無上とす。すでに一念をもて、一の無上とす。當に知べし。十念をもて十の無上とし、又百念をもて百の無上とし、又千念をもて千の無上とすることを。かくのごとを展轉して、少より多にいたりて、念佛(一)恒沙ならば、無上功德もまた恒沙なるべし。かくのごとく知るべし。しかればすなはちもろ〳〵の往生を願求せんの人、何ぞ無上大利の念佛を廢して、しゐて有上小利の餘行を修せんや。

六、(二)末法萬年の後餘行こと〴〵く滅し、獨り念佛を留るの文

「無量壽經」の下巻にいはく、「當來の世に經道滅盡せんに、われ慈悲哀愍をもて、ひとり此經をとゞめて、止住すること百歲ならん。それ衆生ありて、この經にあ

(一)恒沙。恒河の沙の如く、無數に多くの意。

(二)末法萬年。佛滅後五百年間は正法。其後千年間は像法、其後萬年間は末法。

せり。然るにいま諸行においてはすでに捨てて歎ぜず、置て論ずべからざるものなり。たゞ念佛の一行につきて、すでにえらびてしかも讃歎じたまふ。おもうて分別すべきものなり。もし念佛に約して、三輩を分別せば、これに二意あり。一には觀念の淺深に隨ひて、しかもこれを分別し、二には念佛の多少をもて、しかもこれを分別す。淺深とは、上の所引のごとく「もし説のごとく行ぜば、理上上に當る」といふこれなり。次に多少とは、下輩の文の中に、すでに十念ないし一念の數あり、上中の兩輩これに準じてしたがひて增すべし。『觀念法門』にいはく、「日別に一萬遍の佛を念じ、またすべからく時によりて、淨土の莊嚴の事を禮讃すべし。大に精進をもちひて、あるひは三萬六萬十萬を得るもの、みなこれ上品上生の人なり」と。まさに知べし、三萬已上はこれ上品上生の業、三萬已去はこれ上品已下の業なることを。すでに念數の多少にしたがひて品位を分別する事、これ明らけし。いまこゝに一念といふは、これ上の念佛の願成就の中に、いふ所の一念と、下輩のなかに明す所の一念とを指すなり。願成就の文の中に一念といふといへども、いまだ功德大利を説かず。又下

等の文これなり。そは義(一)下に具さにのぶるがごとし。かるがゆへに知んぬ。九品の行、たゞ念佛にあることを。

五、念佛利益の文

『無量壽經』の下にいはく、「佛彌勒に語りたまはく、それかの佛の名號を聞くことをうることありて、歡喜踊躍して、乃至一念せん。當に知るべし。この人は大利を得たりとす。すなはちこれ無上功德を具足す」と。

善導の『禮讃』にいはく「それかの阿彌陀佛の、名號を聞くことを得ることありて、歡喜して一念するにいたるまで、みなまさにかしこに生ずることを得べし」と。

私に問ていはく、上の三輩の文に準ずるに、念佛の外に菩提心等の功德を擧ぐ。何ぞかれ等の功德を歎ぜずして、唯ひとり念佛の功德をのみを讃ずるや。答ていはく、聖意はかりがたし。さだめて深き意あらん。しばらく善導の一意によりてこれをいはゞ、原るにそれ佛意はたゞ正直に念佛の行をとかんと欲すといへども、一往機に隨て、菩提心等の諸行をときて、三輩の淺深不同を分別

（一）下。第十二章段。

こゝろにあるべし。いまもし善導によらば、初をもて正とするのみ。問ていはく、三輩の業みな念佛といふこと、その義しかるべし。ただし「觀經」の九品と、『壽經』の三輩とは、本これ開合の異なり。もししからば何ぞ『壽經』の三輩の中にはみな念佛といひ、『觀經』の九品にいたりては上中二品に念佛を說かず、下品にいたりてはじめて念佛を說くや。答ていはくこれに二義あり。一には問端にいふがごとく、『雙卷』の三輩と、『觀經』の九品と、開合の異なること、これをもて知るべし。九品の中にみな念佛あるべし。いかんが知ことを得たる。三輩の中に、みな念佛あり。九品の中、何ぞ念佛なからんや。かるがゆへに「經生要集』に云く。問ふ念佛の行は九品の中においてこれいづれの品の攝ぞや。答ふもし說のごとく行ぜば理上々に當れり。かくのごとくその勝劣にしたがひて、九品をわかつべし。しかるに經にとく所の九品の行業は、これ一端を示す、理實には無量なり。」已上かるがゆへに知んぬ。念佛また九品に通ずべきことを。二には『觀經』のこゝろ、はじめにはひろく、定散の行を說きて、あまねく衆機に逗し、後には定散二善を廢して、念佛の一行に歸せしむ。所謂（二）「汝好持是語」

（一）汝好持是語等「汝よく此語を持て。此語を持てとは即ち無量壽佛のみ名を持てとなり」。

づ念佛に約して三品を立つとは、いはくこの三輩の中に通じてみな「一向專念無量壽佛」〈已上〉といふ。これすなはち念佛門に約して、その三品を立るなり。かるがゆへに『往生要集』の念佛證據門にいはく、「雙卷經の三輩の業、淺深ありといへども、しかも通じてこれ一向專念無量壽佛といふ」と。〈感師これに同じ〉次に諸行門に約して、三品を立つとは、いはくこの三輩の中に通じてみな菩提心等の諸行あり。これすなはち諸行に約して、その三品を立るなり。かるがゆへに『往生要集』の諸行往生門にいはく、「雙卷經の三輩もまたこれを出でず。」〈已上〉おほよそかくのごときの三義、不同ありといへども、ともにこれ一向念佛のためにする所以なり。はじめの義はすなはちこれ廢立のために說く。いはく諸行は、廢のために說き、念佛は立のために說く、次の義はすなはちこれ助正のために說く。いはく念佛の正業を、助けんがためにしかも諸行の助業をとく。後の義はすなはち、これ傍正のためにとく。いはく念佛諸行の、二門をとくといへども、念佛をもて正とし、諸行をもて傍とす。かるがゆへに三輩通じて、みなねんぶつなりといふ。たゞしこれらの三義、（一）殿最知りがたし。請ふもろ〳〵の學者、取捨

（一）殿最。優劣の意。

（一）上の正雜二行の二章段を見よ。

は、念佛を助成せんがために、この諸行をとくとは、これにまた二の意あり。一には同類の善根をもて念佛を助成し。二には異類の善根をもて念佛を助成す。はじめに同類の助成とは、善導和尚の『觀經疏』の中に、五種の助行を擧て念佛の一行を助成す是なり。具には（一）上の正雜二行の中にとくがことし。次に異類の助成とは、先づ上輩につきて、正助を論ぜば、「一向專念無量壽佛」とは、これ正行なり。また是所助なり。「捨レ家棄レ欲、而作二沙門一、發二菩提心一」等とは、これ助行なり。またこれ能助なり。いはく往生の業には、念佛を本とす。かるがゆへに一向に念佛を修せんがために家をすて欲をすてゝ沙門となり、また菩提心をおこす等なり。就中出家發心等とは、且く初出および初發をさす。念佛はこれ長時不退の行なり。むしろ念佛を妨礙すべけんや。中輩の中に、また起立塔像、懸繒然燈、散花燒香等の諸行あり。これすなはち念佛を助成す。その旨『往生要集』に見えたり。いはく助念方法の中の、方處供具等これなり。下輩の中に、また發心ありまた念佛あり。助正の義、前に準じてしるべし。三に念佛諸行に約して、そのをの三品を立んがために、しかも諸行をとくとは、ま

衆生をして、一向にもはら彌陀佛の名を稱せしむるにあり」といへる、釋のこゝろになぞらへて、しばらくこれを解せば、上輩の中に、菩提心等の餘行をとくといへども、上の本願に望むれば、意たゞ衆生をして、專ら彌陀の名を稱せしむるにあり。しかるに本願の中には、さらに餘行なし、三輩ともに上の本願による。かるがゆへに一向專念無量壽佛と云なり。一向とは、二向三向等に對するの言なり。例せばかの〔一〕五竺に、三種の寺あるがごとき。一には一向大乘寺、この寺の中には、小乘を學することなし。二には一向小乘寺、此寺の中には、大乘を學することなし。三には大小兼行寺、この寺のなかには、大小兼學す。故に兼行寺といふ。當に知べし。大小の兩寺には一向の言あり。兼行の寺には一向の言なし。いまこの經の中の一向もまた然なり。もし念佛の外にまた餘行をくはへばすなはち一向にあらず。もし寺に準ぜば、兼行といふべし。すでに一向といふ、餘を兼ねざることあきらけし。さきに餘行をとくといへども、のちに一向專念といふ。明かに知ぬ、諸行を廢してたゞ念佛をもちゆ。かるがゆへに一向といふことを。もし然らずんば一向の言、もともて消しがたきか。二に

〔一〕五竺。印度のこと。

私に問ていはく、上輩の文の中に、念佛の外にまた捨家棄欲等の餘行あり。中輩の文の中に、亦起立塔像等の餘行あり。下輩の文の中に、また菩提心等の餘行あり。なんがゆへぞたゞ念佛往生といふや。答ていはく、善導和尚の『觀念法門』にいはく、「又これ經の下卷のはじめに曰く、ほとけ說きたまはく、一切衆生の根性不同にして上中下あり。その根性にしたがひて、ほとけみなすゝめてもはら無量壽佛の名を念ぜしむ。その人いのちをはらんと欲するとき、ほとけと聖衆とみづから來りて、迎接してこと〴〵く往生を得せしむ」と。この釋のこゝろによりて、三輩ともに念佛往生といふなり。問ていはく、此釋いまだ前難を遮せず、なんぞ餘行をすてゝ、たゞ念佛といふや。答ていはく、これに三の意あり。一には諸行を廢して、念佛に歸せんがために、しかも諸行をとく。二には念佛を助成せんがために、しかも諸行をとく。三には念佛諸行の二門に約して、をの〳〵三品を立んがために、しかも諸行をとく。一には諸行を廢して念佛に歸せんがために、しかも諸行をとくとは、善導の『觀經疏』の中に、上來(一)定散兩門の益を說くといへども、ほとけの本願にのぞむれば、こゝろ

(一)定散兩門。『觀無量壽經』の前部十三觀は定善門、後部三觀は散善門

て、彼國に生ぜんと願ずるに、行じて沙門となり、大に功徳を修することあたはずといへども、當に無上菩提の心をおこし、一向に專ら無量壽佛を念じ、多少に善を修し、(一)齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食し、繒をかけ、燈をとぼし、花をちらし、香をたき、これをもて廻向して彼國に生ぜんと願ずべし。その人をはりにのぞみて、無量壽佛その身を化現して、光明相好、つぶさに眞佛のごとく、もろ〳〵の大衆とともにその人の前に現じ給ふ。すなはち化佛にしたがひてその國に徃生して、不退轉に住し、功德智惠次で上輩の者のごとし」と。

「佛阿難につげたまはく。その下輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心ありて、かの國に生ぜんと欲せんに、假使もろ〳〵の功德をなすことあたはずとも、當に無上菩提の心をおこし、一向に心をもはらにして、乃至十念無量壽佛を念じて、その國に生ぜんと願ずべし。もし深法を聞き歡喜信樂して、疑惑を生ぜず、ないし一念かのほとけを念じ、至誠心をもて、その國に生ぜんと願ずれば、此人をはりにのぞみて、夢のごとくかの佛を見たてまつりて、また徃生を得、功德智慧、次で中輩の者のごとし」と。

(一)齋戒。食事の法規を守るに不殺生等の八戒を以て助く。

つるがゆへに、善導の惣じて念佛往生の願といへるは、其こゝろすなはちあまねし。然る所以は、上一形をもとり、下一念をもとり給へるがゆへなり。

四、三輩念佛往生の文

『無量壽經』の下にいはく、(一)「佛阿難につげたまはく、十方世界の、諸天人民それ至心ありて、かの國に生ぜんと願するに、凡そ三輩あり。その上輩とは、家をすて欲を棄て、しかも沙門となり、菩提心をおこし、一向にもはら無量壽佛を念じ、もろ〳〵の功徳を修して、かの國に生ぜんと願ずれば、これらの衆生、壽終のときにのぞみて、無量壽佛、もろ〳〵の(二)大衆とゝもに、その人の前に現じ給ふ。すなはちかのほとけにしたがひて、その國に往生し、便ち七寶の華の中におひて自然に化生し、不退轉に住す。智惠勇猛にして、神通自在なり。このゆへに阿難それ衆生ありて、今世におひて無量壽佛を、見たてまつらんと欲せば、無上菩提の心をおこし、功徳を修行して、かの國に生ぜんと願ずべし」と。

「佛阿難にかたりたまはく、その中輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心あり

(一)佛阿難。佛は釋迦牟尼佛、阿難は其十大弟子の一人。

(二)大衆。廿五菩薩等の聖衆。

（一）上盡一形。最も多く一生涯を盡すをいふ。

り」と。かるがゆへに知ぬ。念すなはち是唱なり。問て曰く。經に乃至といひ、釋に下至といふ。そのこゝろいかん。答て曰く。乃至と下至と、そのこゝろ是一なり。經にないしといへるは、多より少にむかふの言なり。多とは(一)上盡一形なり。少とは下至十聲一聲等なり。釋に下至といへるは、下とは上に對するのことばなり。下とは下至十聲一聲等なり。上とは上盡一形なり。上下相對の文、その例これ多し。宿命通の願にいはく、「もし我佛を得たらんに、國中の人天、宿命を識ず、下百千億那由他諸劫の事を、しらざるにいたらば、正覺をとらじ」と。かくのごとく五神通、をよび光明壽命等の願の中に、一々に下至の言ををく。これすなはち多より少にいたる、下をもて上に對するの義なり。上の八種の願に例するに、いまこの願の乃至とは、すなはち是下至なり。この故にいま善導の引釋する所の下至の言、そのこゝろ相違せず。たゞし善導と諸師と、そのこゝろおなじからず。諸師の釋は別して十念往生の願といひ、善導ひとり惣じて念佛往生の願といへり。諸師の別して十念往生の願といへるは、そのこゝろすなはち周からす。然る所以は、かみ一形をもすて、下一念をもす

（一）十劫。十大劫なり、一大劫は八十中劫、一中劫は人壽八萬歳より減じて十歳に至り、又增して八萬歳に至るまでの時間。

凡そ四十八願、淨土を莊嚴す。華池寶閣、願力にあらずといふことなし。なんぞその中におひて、ひとり念佛往生の願を疑惑すべきや。しかのみならず。一々の願のをはりに、「もししからずば、正覺をとらじ」といへり。しかるに阿彌陀佛、成佛したまひてよりこのかた、いまにおひて（一）十劫なり。成佛のちかひすでにもて成就せり。當にしるべし。一々の願むなしく設くべからず。かるがゆへに、善導ののたまはく、「かのほとけいま現に世にまし〳〵て成佛したまへり。まさにしるべし本誓の重願むなしからず。衆生稱念ずればかならず往生を得」。已上 問ていはく。經に十念といひ、釋に十聲といふ、念聲の義いかん。答ていはく、念と聲とこれ一なり。何をもてかしることを得たる。『觀經』の下品下生にいはく、「聲をして絕えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するがゆへに、念々の中におひて、八十億劫の、生死の罪を除く」と。いまこの文によるに、聲即ち是念、念即ち是聲なること、そのこゝろあきらけし。しかのみならず。『大集月藏經』にいはく、「大念は大佛を見、小念は小佛を見る」と。感師釋していはく、「大念とは、大聲の念佛、小念とは小聲の念佛な

成就せることを。なにをもてかしることを得たる。すなはち願成就の文に、「また地獄餓鬼畜生、(一)諸難の趣なし」といへるこれなり。又かの人天、壽終の後、三惡趣にかへることなし。まさにしるべし。これすなはち不更惡趣の願を成就せることを。何をもてかしることをえたる。すなはち願成就の文に、「又かの菩薩、乃至成佛まで、惡趣にかへらず」といへるこれなり。又ごくらくの人天、一人として(二)三十二相を、具せざることあることなし。まさにしるべし。これすなはち具三十二相の願を成就せることを。何をもてかしることを得たる。すなはち願成就の文に、「かの國に生ずるものは、みなことごとく三十二相を具足す」といへるこれなり。かくのごとくはじめ無三惡趣の願より、をはり得三法忍の願にいたるまで、一々の誓願、みなこと〲く成就せり。第十八念佛往生の願、豈ひとり成就し給はざらんや。しかればすなはち念佛の人、みなまさに往生すべし。何をもてかしることを得たる。すなはち念佛往生の願成就の文に「あらゆる衆生、その名號を聞て、信心歡喜し、(三)乃至一念、至心に廻向し、かの國に生ぜんと願ずれば、すなはち往生を得て、不退轉に住す」といへるこれなり。

(一)諸難の趣。苦しき果報。

(二)卅二相。足安平相等の衆德圓滿の身相。

(三)乃至一念。最も少きものにても一聲の念佛の意。

のはすくなく、破戒のものは甚だ多し。自餘の諸行、これに準じて知べし。まさにしるべし。上の諸行等をもて本願とし給はゞ、すなはち往生を得るものはすくなく、往生せざるものは甚だおほからん。しかればすなはち阿彌陀如來、法藏比丘のむかし、平等の慈悲にもよほされて、あまねく一切を攝せんがために、造像起塔等の諸行をもて、往生の本願となし給はず。たゞ稱名念佛の一行をもて、その本願とし給へり。」かるがゆへに法照禪師の『五會法事讚』にいはく、「この佛因中に弘誓を立つ。名をきゝて我を念ぜば總て迎來せんと。貧窮と富貴とを簡ばす、下智と高才とをえらばず、多聞と持戒とを簡ばず、破戒と罪根のふかきとをえらばず、但回心しておほく念佛せしめば、よく(一)瓦礫をして變じて金とならしむ。」已上 次に問ていはく、一切の菩薩、その願を立つといへども、あるひはすでに成就せるあり、またいまだ成就せざるあり、いぶかし法藏ぼさつの四十八願は、すでに成就したまふとやせん、將たいまだ成就し給はずとやせん。答ていはく、法藏の誓願一々に成就したまへり。いかんとなれば、極樂界中すでに(二)三惡趣なし。まさにしるべし。これすなはち無三惡趣の願を

(一)瓦礫を變じて云云。瓦礫の穢土を變じて七寶の淨土となす——淨土に往生せしむること。

(二)三惡趣。地獄餓鬼、畜生。

なんがゆへぞたゞ念佛の一門をすゝむるや。答て云く、いま念佛をすゝむる事は、是れ餘の種々の妙行を遮せんとにはあらず。たゞこれ男女貴賤、行住坐臥を簡ばず、時處諸縁を論ぜず。これを修するに難からず。乃至臨終に、往生を願求する。その便宜を得ること、念佛に如かず」已上かるがゆへに知ぬ。念佛はやすきがゆへに一切に通ず。諸行はかたきがゆへに諸機に通ぜず。しかればすなはち一切衆生をして、平等に往生せしめんがために、難をすて易をとりて、もて本願とし給ふか。もしそれ造像起塔をもて、本願とし給はゞ、すなはち貧窮困乏の類は、さだめて往生の望を絶ん。しかるに富貴のものは少く、貧賤のものははなはだ多し。もし智慧高才をもて、本願としたまはゞ、すなはち愚鈍下智のものは、さだめて往生ののぞみを絶ん。然るに智慧あるものはすくなく、愚癡なるものははなはだおほし。もし多聞多見をもて、本願とし給はゞ、すなはち少聞少見のともがらは、さだめて往生ののぞみをたゝん。しかるに多聞のものはすくなく、少聞のものは甚だおほし。もし持戒持律をもて、本願としたまはゞ、すなはち破戒無戒の人は、さだめて往生の望を絶ん。然るに持戒のも

一佛に、有所(一)四智三身、(二)十力四無畏等の、一切の內證の功德、相好光明、說法利生等の、一切の外用の功德、みなこと〲く、阿彌陀佛の名號の中に攝在す。かるがゆへに名號のくどく、もともすぐれたりとす。餘行はしからず、をの〱一隅をまもる。こゝをもて劣とす。たとへば世間の屋舍の名字の中には、棟梁椽柱等の、一切の家具を攝すれども、棟梁等の、一一の名字の中には、一切を攝することあたはざるがごとし。これをもてしるべし。しかればすなはち佛の名號のくどくは、餘の一切のくどくにすぐれたる。かるがゆへに劣をすてゝ勝をとりて、もて本願とし給ふ歟。次に難易の義とは、念佛は修し易く、諸行は修し難し。このゆへに『往生禮讃』にいはく、「問ていはく、なんがゆへぞ(三)觀をなさしめず、直もはら名字を稱せしむるはなにこゝろありや。答ていはく。すなはち衆生さはりおもく、境細心麁なるによりて、識あがり、たましひとびて、觀成就しがたし。こゝをもて、大聖悲憐して、直すゝめてもはら名字を稱せしむ。まさしく稱名やすきによるがゆへに相續して即ち生ず。」已上又(四)『往生要集』に「問ていはく、一切の善業をの〱利益ありて、をの〱往生を得。

(一)四智三身。大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、法身、報身、應身。

(二)十力四無畏。是處非處智力等、一切智無所畏等、內に智力ある故に總ての所に怖れなきをいふ。

(三)觀。極樂世界に向て觀念な凝らすこと。

(四)往生要集。慧心僧都の著なり。

國の、ほとけの名を稱して、往生の行とするの土あり。かくのごとく一行をもて、一佛土に配するはしばらくこれ一往の義なり。再往これを論ぜばその義不定なり。あるひは一佛土の中に、多行をもて、往生の行とするの土あり。或は多佛土の中に、一行をもて、通じて往生の行とするの土あり。かくのごとく往生の行種々不同なり。具にのぶべからず。すなはちいま前の布施、持戒、乃至孝養父母等の、諸行を選捨して、專ら佛號を稱するを選取す。かるがゆへにせんぢやくといふなり。しばらく五願に約して、略して選擇を論ずるに、その義かくのごとし。自餘の諸願、これに準へてしるべし。問ていはく、あまねく諸願に約するに、麁惡を選捨して、善妙を選取することその理然るべし。何がゆへぞ第八十願、一切の諸行を選捨し、たゞひとへに念佛の一行を選取して、往生の本願とするや。答ていはく、聖意測りがたし、輙く解することあたはず。しかりといへども、いま試に二義をもて、これを解せん。一には勝劣の義、二には難易の義なり。はじめに勝劣とは、念佛はこれ勝れ餘行はこれ劣れり。所以何となれば、名號はこれ萬德の歸する所なればなり。しかればすなはち彌陀

(一)般若。梵語なり、智慧と譯ず。
(二)菩提心。無上のさとりを求むる心。
(三)六念。佛法僧戒施天を念ずること。
(四)持呪。呪文を唱ふること。

色の國土あり。すなはち黄白二類の麁惡の國土を選捨して、黄金一色の善妙の國土を選取す。かるがゆへに選擇といふなり。第四に無有好醜の願といふは、その諸佛の土の中におひて、あるひは人天の形色、好醜不同なるの國土あり、あるひは形色一類にして、好醜あることなきの國土あり。すなはち好醜不同なる、麁惡の國土を選捨して、好醜あることなき、善妙の國土を選取す。かるがゆへに選擇といふなり。乃至第十八の、念佛往生の願といふは、その諸佛の土の中におひて、あるひは布施をもて、往生の行とするの土あり。或は持戒をもて、往生の行とするの土あり。或は忍辱をもて、往生の行とするの土あり。或は精進をもて、往生の行とするの土あり。或は禪定をもて、往生の行とするの土あり。或は(一)般若をもて、（第一義を信ずる等これなり）往生の行とするの土あり。或は(二)菩提心をもて、往生の行とするの土あり。或は(三)六念をもて、往生の行とするの土あり。或は持經をもて、往生の行とするの土あり。或は(四)持呪をもて、往生の行とするの土あり。或は起立塔像、飯食沙門、をよび、孝養父母、奉事師長等の種々の行をもて、をの／＼往生の行とするの國土等あり。或はもはらその

義あり。いはく「二百一十億の、諸佛の妙土、清淨の行を攝取す」といへるこれなり。撰擇と攝取と、そのことばことなりといへども、そのこゝろこれおなじ。しかればすなはち不清淨の行をすてゝ、清淨の行をとれり。上の天人の善惡、國土の麁妙その義またしかなり、これになぞらへて知るべし。それ四十八願に約して、一往をの〳〵撰擇攝取の義を論ぜば、第一に無三惡趣の願といふは、覩見する所の、二百一十億の土の中において、あるひは三惡趣あるの國土あり、あるひは三惡趣なきの國土あり。すなはちその三惡趣ある、麁惡の國土を撰捨して、その三惡趣なき、善妙の國土を選取す。かるがゆへに選擇といふなり。第二に不更惡趣の願といふは、かの諸佛の土の中において、あるひは國中に、三惡道なしといへども、その國の人天、壽終の後、その國より去つて、また三惡趣に更るの土あり。或は惡道にかへらざるの土あり。すなはちその惡道にかへる、麁惡の國土を撰捨して、その惡道にかへらざる、善妙の國土を選取す。かるがゆへに選擇といふなり。第三に悉皆金色の願といふは、かの諸佛の土の中において、或は一土の中に黃白二類の人天あるの國土あり。あるひは純黃金

（一）天眼。六神通の一、天眼通にして物質に障へらるゝことなく透視する能力。

（二）『雙觀經』。『無量壽經』上下二卷のこと。

の所說を聞き、嚴淨の國土をみなことごとく覩見して、無上殊勝の願を超發す。そのこゝろ寂靜にして、こゝろざし所着なし。一切の世間に、よくをよぶものなし。五劫を具足して、莊嚴佛國淸淨の行を思惟し攝取す。阿難、佛にまをさく、かの佛の國土の壽量いくばくぞや。佛ののたまはく、その佛の壽命四十二劫なり。時に法藏比丘、二百一十億の、諸佛の妙土、淸淨の行を攝取す」。巳上

又『大阿彌陀經』にいはく、そのほとけすなはち二百一十億の、佛國土の中の諸天人民の善惡、國土の好醜を撰擇し、爲に心中所欲の願を撰擇す。樓夷亙羅佛、こゝには世自在佛といふ 經をときをはりて、曇摩迦 こゝには法藏といふ 便ちその心を一にして、すなはち（一）天眼を得、徹視して、ことごとくみづから二百一十億の、諸佛の國土の中の、諸天人民の善惡、國土の好醜を見て、すなはち心中の所願を撰擇して、すなはちこの二十四願の經を結得す」と。『平等覺經』亦これにおなじ この中に撰擇といふは、すなはちこれ取捨の義なり。いはく二百一十億の、諸佛の淨土の中において、人天の惡をすてゝ、人天の善をとり、國土の醜をすてゝ、國土の好をとる。『大阿彌陀經』のせんぢやくの義かくのごとし。（二）『雙觀經』のこゝろ、また撰擇の

(一)四弘誓願。衆生無邊なれども誓つて度せん。煩惱無邊なれども、誓つて斷ぜん。法門無盡なれども誓つて知らん。無上菩薩を誓つて證らん

(二)無上正眞の道意。究竟の悟境を得んとする心。

(三)沙門。梵語なり、勤息と譯す。正行を勤めて諸惡を息むる意。

私にいはく。一切の諸佛に、その〳〵惣別二種の願あり。惣とは(一)四弘誓願これなり。別とは釋迦の五百の大願、藥師の十二の上願等のごときこれなり。いまこの四十八願は、これ彌陀の別願なり。問ていはく、彌陀如來、何れの時、いづれの佛の所におひて、この願をおこし給へるや。答ていはく、『壽經』にいはく、「ほとけ阿難につげたまはく、乃往過去、久遠無量、不可思議、無央數劫に錠光如來、世に興出して、無量の衆生を、敎化し度脱して、これを得度せしめて、すなはち滅度をとりたまふ。次に如來います。名づけて光遠といひき。乃至次をば處世となづく。かくのごときの諸佛、五十三佛なりみなこと〳〵くすでに過たまへり。その時次に佛います。世自在王如來と名づく。時に國王あり。ほとけの說法を聞て、こゝろに悅豫を懷きて、尋で(二)無上正眞の道意を發し、國をすて王をすてゝ、行じて(三)沙門となる。號して法藏といふ。高才勇哲にして、世と超異せり。世自在王如來の所にいたる乃至こゝにおひて世自在王佛、すなはち爲にひろく、二百十一億の、諸佛刹土の、天人の善惡、國土の麁妙を說き、その心願に應じて、こと〳〵く現じてこれをあたへたまふ。時にかの比丘、ほとけ

（一）設我等。阿彌陀佛四十八願中の第十八願の文。

し。豈百即百生の、專修正行をすてゝ、かたく千中無一の、雜修雜行を執せんや。行者よくこれを思量せよ。

三、彌陀如來餘行をもて往生の本願とし給はず、たゞ念佛をもて往生の本願とし給へるの文。

『無量壽經』の上にいはく、「（一）設し我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂し、我國に生ぜんと欲し乃至十念せんに、若し生ぜずば正覺をとらじ」と。『觀念法門』に上の文を引ていはく、「もし我成佛せんに、十方の衆生、我國に生ぜんと願ひて、我名字を稱すること、もし十聲にいたるまで、我願力に乘じて、もし生ぜずば、正覺を取らじ」と。

『往生禮讚』に、おなじく上の文を引ていはく、「もし我成佛せんに十方の衆生、我名號を稱すること、下十聲にいたるまで、若し生ぜずば、正覺をとらじ。かのほとけいま現に世にまし〳〵て成佛したまへり。當に知べし。本誓の重願むなしからざることを。衆生稱念すればかならず往生を得」と。

惱きたりて間斷するがゆへに、懺愧懺悔の心あることなきがゆへに、又相續してかの佛恩を念報せざるがゆへに。心に輕慢を生じて、業行をなすといへども、つねに名利と相應するがゆへに、人我みづから覆うて、同行善知識に親近せざるがゆへに。樂て雜緣にちかづき、往生の正行を自障障他するが故なり。何をもてのゆへに。余このごろみづから諸方の道俗を見聞するに、解行おなじからざるは、專雜ことなるゆへなり。但だこゝろをもはらにして、なさしむるものは、十はすなはち十生ず。雜を修して至心ならざるものは、千が中に一もなし。この二行の得失前にすでに辨ずるがことし。あふぎねがはくは一切の往生人等、よくみづから思量せよ。すでによく今身にかの國に生ぜんと願ぜんものは、行往坐臥かならずすべからく、心をはげましをのれをせめて、晝夜廢することなく、畢命を期とすべし。かみ(一)一形にあるは、少く苦なるににたれども、前念に命終して、後念にすなはち彼國に生じ、長時永劫つねに(二)無爲の法樂をうけ、乃至成佛まで生死を經ざるは、豈こゝろよきにあらずや。知るべし」と。

私にいはく。この文を見るに、いよ〳〵すべからく雜をすてゝ、專を修すべ

(一)一形。一生涯
(二)無爲。常住不變、爲は生滅變化の意。

二行をわかつこと善導一師にかぎらず。もし道綽禪師のこゝろによらば、往生の行多しといへども束ねて二とす。一にはいはく念佛往生、二にはいはく萬行往生なり。若し懷感禪師のこころによらば、往生の行おほしといへども、つかねて二とす。一にはいはく念佛往生、二にはいはく諸行往生なり。惠心これにおなじかくのごときの三師、おの／＼二行を立て往生の行を攝すること、はなはだその旨を得たり。自餘の諸師はしからず。行者これをおもふべし。

(一)『往生禮讃』にいはく、「もしよく上のごとく、念々に相續して、畢命を期とするものは、十はすなはち十生じ、百はすなはち百生ず。何をもてのゆへに、(二)外の雜緣なく、正念を得るがゆへに、佛の本願と(三)相應することを得るがゆへに、敎に違せざるがゆへに、佛語に隨順するがゆへなり。若し專をすてゝ、雜業を修せんと欲するものは、百時希に一二を得。千時まれに五三を得。何をもての故に、すなはち雜緣亂動して、正念を失するによるがゆへに、ほとけの本願と相應せざるがゆへに、敎と相違するがゆへに、佛語に順ぜざるがゆへに、係念相續せざるがゆへに、憶想間斷するがゆへに、迴願慇重眞實ならざるがゆへに、貪瞋諸見の煩

(一)往生禮讃。善導大師の著。

(二)外の雜緣。外界の刺戟の內心を惑亂するもの。

(三)相應。調和融合の意。

ることを。小乘にはすなはち四含の中におひて雜含を立つ。まさに知るべし。三含はこれ純、一含はこれ雜なることを。律には即ち二十犍度を立て、もて戒行を明す。その中に前の十九はこれ純、後の一はこれ雜犍度なり。論にはすなはち八犍度を立て、諸法の性相を明す。前の七犍度はこれ純、後の一はこれ雜犍度なり。(一)賢聖集の中に、唐宋の兩傳に、十科の法を立て、高僧の行德を明す。その中に前の九はこれ純、後の一はこれ雜科なり。乃至(二)『大乘義章』に五聚の法門あり、前の四聚はこれ純、後の一はこれ雜聚なり。またたゞ顯敎のみにあらず、密敎の中にも純雜の法あり。いはく(三)山家の佛法血脈の譜にいはく、一に胎藏界の曼陀羅血脈の譜一首、二に金剛界の曼陀羅血脈の譜一首、三に雜曼陀羅血脈の譜一首と、前の二首はこれ純、後の一首はこれ雜なり。純雜の例多しといへども、今略して小分をあぐるのみ。まさにしるべし、純雜の義、法にしたがひて不定なることを。これによりて今善導和尚のこゝろ、しばらく淨土の行におひて、純雜を論ずるなり。またこの純雜の名、內典にかぎらず、外典の中に、その例はなはだ多し。繁きをおそれて出さず。但し往生の行におひて、

(一)賢聖集。汎く賢人聖者の著述をいふ、書名に非ず。
(二)大乘義章。支那慧遠法師の著。
(三)山家。傳敎大師最澄のこと。

向對とは、正助二行を修するものは、たとひ別に廻向をもちひざれども、自然に往生の業となる。かるがゆへに疏の上の文にいはく、「いまこの『觀經』のなかの十聲稱佛はすなはち(一)十願十行ありて具足す。いかんが具足する。南無といふはすなはちこれ歸命、またこれ發願廻向の義、阿彌陀佛といふはすなはちこれその行なり、この義をもてのゆへにかならず往生を得」已上次に廻向とは、雜行を修するものはかならず廻向をもちゆるのとき、往生の因となる。もし廻向をもちひざるの時は、往生の因とならず。「故に廻向して、生ずることをうべしといへども」といへるこれなり。第五に純雜對とは、まづ純とは正助二行を修するものは、これ純極樂の行なり。次に雜とは、これ純極樂の行にあらず。(二)人天および三乘に通じ、また十方の淨土に通ず。故に雜といふなり。しかれば、西方の行者、すべからく雜行をすてゝ、正行を修すべし。問ていはく、この純雜の義、經論の中におひて、その證據ありや。答ていはく、大小乘の經律論の中において、純雜二門を立ること、その例一にあらず。大乘にはすなはち八藏の中におひて、雜藏をたつ。まさにしるべし。七藏はこれ純、一藏はこれ雜な

(一)十願十行。一聲の念佛に一願一行具はる故なり。

(二)人天。人間界天上界の略。

くるなり。」次に疎とは雜行なり。衆生くちほとけを稱せざれば、佛すなはちこれを聞たまはず。身ほとけを禮せざれば、ほとけすなはちこれを見たまはず。こゝろ佛を念ぜざれば、佛すなはちこれを知たまはず。衆生佛を憶念せざれば佛衆生を憶念し給はず。彼此の三業、常にあひ捨離す。かるがゆへに疎行となづく。第二に近遠對とは、まづ近とは、正助二行を修するものは、阿彌陀佛におひて、はなはだ隣近たり。故に疏の上の文にいはく、「衆生佛を見んと願ずれば、佛すなはち念に應じて、目前に現在す、故に近緣となづく」と。次に遠とは雜行なり、衆生ほとけを見んと願ぜざれば、佛すなはち念に應ぜず、目前に現ぜず、故に遠となづく。たゞし親近の義これ一なるに似たりといへども善導のこゝろわかちて二とす。その旨疏の文に見えたり。かるがゆへにいま引釋するところなり。第三に無間有間對とは、まづ無間とは、正助二行を修するものは、彌陀佛におひて憶念間斷せず、「かるがゆへになづけて無間とす」といへるこれなり。次に有間とは、雜行を修するものは、阿彌陀佛におひて、憶念つねに間斷す、「故に心常に間斷す」といへる是なり。第四に不廻向廻

第五に讃歎供養雜行とは、上の彌陀佛のぞきて已外、一切の諸餘の佛菩薩等、をよびもろ〳〵の世天等におひて、讃歎供養するを、こと〳〵く讃歎供養雜行となづく。この外にまた布施持戒等の、無量の行あり。みを雜行の言に攝盡すべし、次に二行の得失を判ずとは、「もし前の正助二行を修すれば。心つねに親近して、憶念たえざるを、なづけて無間とす。もし後の雜行を行ずれば、すなはち心常に間斷す。廻向して生ずることを得べしといへども。すべて疎雜の行となづく」とすなはちその文なり。この文のこゝろを案ずるに、正雜二行につきて、五番の相對あり。一には親疎對、二には近遠對、三には有間無間對、四には不廻向廻向對、五には純雜對なり。第一に親疎對とは、まづ親とは正助二行を修するものは、あみだ佛におひてはなはだ親昵とす。かるがゆへに疏の上の文にいはく。「衆生行をこして、口常に佛を稱すれば、ほとけすなはちこれをきゝたまふ。身つねに佛を禮敬すれば、ほとけすなはちこれを見たまふ。心つねに佛を念ずれば、佛すなはちこれをしりたまふ。衆生ほとけを憶念すれば、佛また衆生を憶し給ふ。彼此の三業あひ捨離せず。かるがゆへに親縁となづ

の本願の行なり。かるがゆへにこれを修するものは、かの佛願に乘じて、必ず往生を得。その本願の義は、下にいたりて知るべし。次に、雜行とは、すなはち文に、「この正助二行をのぞきて已外、自餘の諸行を、こと／＼く雜行となづく」といへるこれなり。意のいはく、雜行無量なれば、つぶさにのぶるにいとまあらざる也。たゞしいましばらく五種に正行翻對して、もて五種の雜行をあかさん。一には讀誦雜行、二には觀察雜行、三には禮拜雜行、四には稱名雜行、五には讃歎供養雜行なり。第一に讀誦雜行とは、上の『觀經』等の、往生淨土の經をのぞきて已外、大小乘顯密の諸經におひて、受持し讀誦するを、こと／＼くどくじゆ雜行となづく。第二に觀察雜行とは、上の極樂の依正をのぞきて已外、大小顯密(一)事理の觀行を、みなこと／＼く觀察雜行となづく。第三に禮拜雜行とは、上の彌陀を禮拜するをのぞきて已外、一切諸餘の佛菩薩等、をよびもろ／＼の(二)世天等におひて、禮拜恭敬するを、こと／＼く禮拜雜行となづく。第四に稱名雜行とは、上の彌陀の名號を稱するを除きて已外、自餘の一切の佛菩薩等、をよびもろもろの世天等の名號を稱するを、こと／＼く稱名雜行となづく。

(一)事理。事は具體的、理は抽象的

(二)世天。帝釋天毘舍門天の如し。

（一）佛願。第三章段を見よ。

專らかの佛を禮す」といへるこれなり。第四に稱名正行とは、もはら彌陀の名號を稱す。即ち文に「もし口に稱するには即ち一心に專らかの佛を稱す」といへるこれなり。第五に讃歎供養正行とは、もはら彌陀をさんだんくやうす。すなはち文に、「若し讃歎供養するには、即ち一心にもはら讃歎し供養す。是を名けて正とす」といへるこれなり。もし讃歎と供養とを開して二とせば、六種正行となづくべし。いま合の義による。かるがゆへに五種といふ。次に合して二種とすとは、一には正業、二には助業なり。はじめに正業とは、上の五種の中の第四の稱名をもて正定の業とす。すなはち文に、「一心に專ら彌陀の名號を念じて行住坐臥に、時節の久近を問はず、念々にすてざるもの、これを正定の業となづく。かの（一）佛の願に順するが故に」といへるこれなり。次に助業とは、第四の口稱をのぞきて外、讀誦等の四種をもて助業とす。すなはち文に、「若し禮誦等によるをば、即ちなづけて助業とす」といへるこれなり。問ていはく、何がゆへぞ五種の中に、ひとり稱名念佛をもて、正定業とするや。答ていはく、かのほとけの願に順ずるがゆへに。意のいはく、稱名念佛は、これかのほとけ

心つねに親近して、憶念斷えざれば、なづけて、無間とす。若し後の雑行を行ずれば、即ち心つねに間斷す。廻向して生ずることを得べしといへども、すべて疏雑の行となづく。

私に云く、此文に就て、二意あり。一には往生の行相をあかし、二には二行の得失を判ず。はじめに往生の行相をあかすとは、善導和尚のこゝろによるに往生の行おほしといへども、大に分て二とす。一には正行、二には雑行なり。はじめに正行とは、これに就て開合の二義あり。はじめには開して五種とし、のちには合して二種とす。初に開して五種とすとは、一には讀誦正行、二には觀察正行、三には禮拜正行、四には稱名正行、五には讚歎供養正行なり。第一に讀誦正行とは、もはら『觀經』等を讀誦す。すなはち文に、「一心にもはらこの『觀經』『彌陀經』『無量壽經』等を、讀誦す」といへるこれなり。第二に觀察正行とは、もはらかの國の依正二報を觀察す。すなはち文に、「一心專注して彼國の二報莊嚴を、思想し觀察し憶念す」といへるこれなり。第三に禮拜正行とは專ら、彌陀を禮す。すなはち文に「若し禮するには即ち一心に

唐宋兩傳(一)にいでたり。

二、善導和尚正雜二行をたてゝ、しかも雜行をすてゝ、正行に歸するの文

(二)『觀經疏』の第四にいはく、「行に就て信を立つとは、しかるに行に二種あり。一には正行、二には雜行なり。正行といふは、專ら往生經によりて行を行ずるものこれを正行となづく。何者か是なる。一心にもはらこの『觀經』『彌陀經』『無量壽經』等を讀誦し、一心に專注して、かの國の(三)二報莊嚴を、思想し觀察し憶念し、若し禮するにはすなはち一心にもはらかのほとけを禮し、もし口に稱するにはすなはち一心にもはらかのほとけを稱し、もし讃歎供養するには、すなはち一心にもはらさんだんし供養す。これをなづけて正とす。又この正の中に就てまた二種あり。一には一心にもはら彌陀の名號を念じ、行住坐臥に時節の久近をとはず念々にすてざるもの、これを正定の業となづく。かのほとけの願に順ずるがゆへに。もし禮誦等によるをば、すなはちなづけて助業とす。この正助二行を除きて已外、自餘の諸善をことごとく雜行となづく。もし前の正助二行を修すれば

(一)唐宋兩傳『唐高僧傳』及び『宋高僧傳』のこと。

(二)『觀經疏』『觀無量壽經』を解釋したるもの、善導大師の著。

(三)二報。依報と正報、依報は山河地家の如く人の依住する處、正報は人身、今は極樂世界の二報の美はしきをいふ。

土門において、そのこゝろざしあらんものは、すべからく聖道をすてゝ、淨土に歸すべし。例せばかの曇鸞法師、(一)四論の講說をすてゝ、一向に淨土に歸し、道綽禪師、(二)涅槃の廣業をさしをきて、ひとへに西方の行をひろめしがごとし。上古の賢哲なをもつてかくのごとし。末代の愚魯むしろこれにしたがはざらんや。問ていはく。聖道家の諸宗をの〳〵師資相承あり。いはく天台宗のごときは、惠文、南嶽、天台、章安、智威、慧威、玄朗、湛然、次第相承す。眞言宗のごときは、大日如來、金剛薩埵、龍樹、龍智、金智、不空、次第相承す。自餘の諸宗、又をの〳〵相承の血脈あり。しかるにいまいふところの淨土宗に、師資相承血脈の譜ありや。答ていはく聖道家の血脈のごとく、(三)淨土宗また血脈あり。ただし淨土一宗において、諸家おなじからず。いはゆる廬山の惠遠法師と、慈愍三藏と、道綽、善導等とこれなり。いましばらく道綽、善導の一家によりて師資相承の血脈を論ぜば、これにまた兩說あり。一には菩提流支三藏、惠寵法師、道場法師、曇鸞法師、大海禪師、法上法師なり。巳上『安樂集』にいでたり。二には菩提流支三藏、曇鸞法師、道綽禪師、善導禪師、懷感法師、少康法師なり。巳上

(一)四論。三論『中論』、『百論』、『十二門論』に『大智度論』を加ふ。

(二)涅槃『大般涅槃經』に依れる涅槃宗。

(三)淨土宗血脈。菩提流支三藏は印度の人、其の他は皆支那の人。

(一)廻して。回向して——振り向けて。

れにおなじく知べし。又『西方要決』にいはく、仰ぎおもん見れば、釋迦運をひらきて、ひろく有緣を益す。教闡方にしたがひて、幷に法潤にうるほふ。親り聖化にあへるは、道三乘をさとりき。福うすく因おろそかなるは、すゝめて淨土に歸せしむ。此業をなすものは、もはら彌陀を念じ、一切の善根、(一)廻してかの國に生ず。彌陀の本願、ちかひて娑婆を度したまふ。上現生の一形をつくし下臨終の十念にいたるまで、ともによく決定して、みな往生を得。已上又おなじき後序にいはく、それおもんみれば、生て像季に居して、聖をさることこれはるかなり。道三乘にあづかれども、契悟するに方なし。人天の兩位は、躁動にしてやすからず。智ひろく情ひろきは、よくひさしく處するにたへたり。若し識をろかに行あさきは、おそらくは幽途におぼれなん。かならずすべからく跡を娑婆にとをざけ、心を淨域にすましむべし。已上この中に三乘とは、すなはちこれ聖道門のこゝろなり。淨土とは、すなはちこれ淨土門のこゝろなり。三乘淨土と、その名ことなりといへども、其こゝろまた同じ。淨土宗の學者、まづすべからく此旨をしるべし。たとひ先に聖道門を學せる人といへども、若し淨

（一）阿毘跋致。梵語なり、不退轉と譯す。

（二）無顧の惡人。修道者を見て破毀する人。

（三）大乘正定聚。淨土に往生して退くことなきをいふ

鸞天台迦才慈恩等の諸師、みなこのこゝろあり、しば〳〵曇鸞法師の『往生論の註』に云く、謹んで案ずるに龍樹菩薩の『十住毘婆沙』にいはく、「菩薩阿毘跋致をもとむるに、二種の道あり、一には難行道、二には易行道なり。難行道とは、いはく五濁の世、無佛の時におひて(一)阿毘跋致をもとむるを難とす。この難にすなはち多途あり。粗五三を言て、もて義意をしめさん。一には外道の相善、菩薩の法をみだる。二には聲聞の自利、大慈悲を障ふ。三には(二)無顧の惡人、他の勝徳を破す。四には顚倒の善果、よく梵行を壞す。五にはたゞこれ自力にして、他力の持なし。かくのごとき等の事、目にふれてみな是なり。たとへば陸路の歩行はすなはちくるしきがことし。易行道とは、いはくたゞ信佛の因縁をもて、淨土に生ぜんと願ずれば、ほとけの願力に乘じて、便ちかの淸淨の土に往生することを得。佛力住持して、即ち(三)大乘正定の聚にいらしむ。正定は即ちこれあびばつちなり。たとへば水路の乘船はすなはち樂きがことし。」已上此なかに難行道とは、すなはちこれ聖道門なり。易行道とは、すなはちこれ淨土門なり。難行易行と、聖道淨土と、そのことばことなるといへども、そのこゝろこれ同じ。天台迦才こ

(一)天親。印度の人、新譯に世親といふ。

(二)起信論。馬鳴菩薩の作。

(三)寶性論。堅慧菩薩の作。

(四)十住毘婆沙論龍樹菩薩の作。

(五)攝大乘論。無着菩薩の作。

壽經』三には『阿彌陀經』なり。一論とは、(一)天親の『往生論』これなり。あるひはこの三經をさして、淨土の三部經と號す。問ていはく、三部經の名、またその例一にあらず。一には法華の三部、いはく『無量義經』、『法華經』、『普賢觀經』これなり。二には大日の三部、いはく『大日經』、『金剛頂經』、『蘇悉地經』これなり。三には鎭護國家の三部、いはく『法華經』、『仁王經』、『金光明經』これなり。四には彌勒の三部。いはく『上生經』、『下生經』、『成佛經』これなり。いまはたゞこれ彌陀の三部なり。かるがゆへに淨土の三部經となづくる也。彌陀の三部とは、これ淨土正依の經なり。次に傍に往生淨土を明せるの教とは、『華嚴』、『法華』、『隨求』、『尊勝』等の、もろ〳〵の往生淨土の行をあかせる諸經これなり。又(二)『起信論』、(三)『寶性論』、(四)『十住毗婆娑論』、(五)『攝大乘論』等の、もろ〳〵の往生淨土の行をあかせる諸論これなり。凡そこの集の中に、聖道淨土の二門を立ることゝろは、聖道をすてゝ、淨土門にいらしめんがためなり。これにつきて二つのゆへあり。一には大聖をさること遙遠なるによる。二には理ふかく解微なるによる。この宗のなかに二門をたつることは、ひとり道綽のみにあらず、曇

(一)顯密權實。顯露教、秘密教、權方便敎、眞實敎の略。

(二)聲聞緣覺。聲聞は佛の聲敎を聞て得悟する者。緣覺は無佛の世に出でゝ獨悟する者。

(三)三乘。聲聞乘緣覺乘、菩薩乘。

らく淨土宗につきて、略して二門をあかさば、一には聖道門、二には淨土門なり。はじめに聖道門とは、これにつきて二あり。一には大乘、二には小乘なり。大乘の中につきて、(一)顯密權實等の不同ありといへども、今この集の意、たゞ顯大および權大を存す。かるがゆへに歷劫迂廻の行にあたる。これに準じてこれをおもふに、密大および實大を存すべし。しかればすなはちいま眞言、佛心、天台、華嚴、三論、法相、地論、攝論、これらの八家のこゝろ、まさしくこれにあり、知るべし。次に小乘とは、すべてこれ小乘の經律論の中に、あかすところの(二)聲聞緣覺の斷惑證理、入聖得果の道なり。上になぞらへてこれをおもふに。また俱舍、成實、諸部の律宗を攝すべきのみ。凡そこの聖道門の大意は、大乘をよび小乘を論ぜず、この娑婆世界の中におひて、四乘の道を修して、四乘の果を得るなり。四乘とは、(三)三乘の外に佛乘をくはふる也。次に往生淨土門とは、これに就て、二あり。一には正しく往生淨土をあかせるの敎、二には傍に往生淨土をあかせるの敎なり。はじめに正しく往生淨土をあかせるの敎とは、いはく三經一論これなり。三經とは、一には『無量壽經』、二には『觀無量

空、中これなり。(一)無相宗のごときは、二藏教を立てもて一代の聖教を判ず。所謂菩薩藏、聲聞藏これなり。華嚴宗のごときは、五教を立て一さいの佛教を攝す。いはゆる小乘教、始教、終教、頓教、圓教これなり。法華宗のごときは、四教五味を立て以て一切の佛教を攝す。四教とは所謂藏、通、別、圓是なり。五味とはいはゆる乳、酪、生、熟、醍醐これなり。眞言宗のごときは、二教をたてゝ一切を攝す。いはゆる顯教、密教これなり。今この淨土宗は、若し道綽禪師のこゝろによるに、二門をたてゝ一切を攝す。いはゆる聖道門、淨土門これなり。問て曰く、それ宗名を立ることはもと華嚴天台等の(二)八宗九宗にあり。いまだ淨土の家におひてその宗名を立つることをきかず。しかるに今淨土宗と號することなんの證據ありや。答ていはく、淨土の宗名その證一にあらず。(三)元曉の『遊心安樂道』にいはく、「淨土宗のこゝろ、もと凡夫のためにし、かねては聖人のためにす」と。(四)又慈恩の『西方要決』にいはく、「此一宗による」と、又(五)迦才の『淨土論』にいはく、「此一宗ひそかに要點とす」と。その證かくのごとし疑端とするにたらず。たゞし諸宗の立教は今の正意にあらず。しば

(一)無相宗。三論宗のこと。

(二)八宗。南都六宗(倶舍、成實、三論、法相、律、華嚴)平安二宗(眞言、天台)これに禪を加へて九宗。

(三)元曉。新羅の人。

(四)慈恩。唐の人法相宗祖師。

(五)迦才。唐の人

いまだ一人もうるものあらじ」と。当今は末法現にこれ(一)五濁惡世なり。たゞ淨土の一門のみありて、通入すべきみちなり。この故に(二)『大經』に云く、もし衆生ありて、たとひ一生惡をつくるとも、命終の時にのぞみて、十念相續して、わが名字を稱せんに、若しむまれずば(三)正覺をとらじと。又復一切の衆生。すべてみづからはからず、もし大乘によらず、(四)眞如、實相、第一義空。かつていまだ心にをかず。もし小乘を論ぜば、見諦修道に修入し、乃至那含羅漢に、(五)五下を斷じ五上をのぞくこと、道俗を問ふことなくいまだ共分あらず。たとひ人天の果報あれども、みな五戒十善によりて、よくこの報をまねく。然るに持ちうるもの甚だまれなり。もし起惡造罪を論ぜば、なんぞ暴風駛雨にことならん。こゝをもて諸佛の大慈すゝめて淨土に歸せしめ給ふ。たとひ一形惡をつくれども、たゞよく意をかけて、專精につねによく念佛すれば、一切の諸障自然に消除して、さだめて往生する事をう。なんぞ思量せずして、すべて去心なきや。」

私に云く、ひそかに計るに、夫れ立敎の多少は、宗にしたがひておなじからずしばらく(六)有相宗のごときは、三時敎を立て一代の聖敎を判ず。いはゆる有、

(一)五濁惡世。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。

(二)大經。『無量壽經』のこと。

(三)正覺をとらじ。佛にはならぬの意阿彌陀佛因位の誓語。

(四)眞如。宇宙の本體、實相と第一義空とはその異名。

(五)五下。五下分結の略、有情を欲界に繫留する煩惱。五上は五上分結の略、有情を色界無色界に繫留する煩惱。

(六)有相宗。法相宗のこと。

選擇本願念佛集

法然上人撰

南無阿彌陀佛

往生の業には(一)念佛を先とす

一 (二)道綽禪師聖道淨土の二門をたてゝ、しかも聖道をすてゝ、まさしく淨土に歸するの文

『安樂集』の上にいはく、「問うて曰く。一切衆生皆佛性あり。遠劫よりこのかた多佛にあふべし。何によりてか今にいたるまで、なをみづから生死に輪廻して、(三)火宅を出でざる。答て曰く、大乘の聖教に依る。良に二種の勝法をえてもて生死をはらはざるによる。こゝをもて火宅をいでず。何ものをか二とす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生淨土なり。その聖道の一種は、今時證しがたし。一には大聖を去ること遙遠なるによる。二には理ふかく解微なるによる。この故に『大集月藏經』に云く、「わが末法時中に、億々の衆生、行をおこし道を修せんに、

(一)念佛を先とす　或本には「念佛を本とす」とあり。

(二)道綽禪師。隋代の人『安樂集』を著はす。

(三)火宅。『法華經』に三界無レ安猶如二火宅一とあり

選擇本願念佛集 目次

ふに願生念佛の衆生に於ては、道俗貴賤誰か歸せざらん。喜ばしき哉、天祐け神護りて、濁世の法潤否命早く通ず。時なる哉、君感じ臣悦んで、淨土の宗教嘉運大いに啓く。これに因りて、壁に埋むるの誠を知ると雖、還て版に彫るの印を貽す。あゝ、玄元聖祖の五千言、令尹早く上下の典を著はす。選擇本願十六章、門徒將に摺寫の益を得んとす。德を思ふの志、古今惟れ同じき者歟。

于時辛未の歲、建子の月、聊か意樹を勒して、遙かに來葉に傳ふと云爾。

新彫選擇本願念佛集序

藏人頭從三位行左大辨兼兵部卿平朝臣基親

夫れ以れば、專稱南謨の教門は、直至西刹の要路なり。但だ釋迦金口の宣ふのみならず、また彌陀素意の願たり。二日三日執持名號の證に、諸佛舌を舒ぶ、十聲一聲必得往生の義は、衆生肝に銘ず。爰に吾が大師空和尚、一軸文集の書あり。『選擇本願念佛集』と號す。誠にこれ苦海を渡る通津、また長夜を照す靈光たり。人、三學なくして橫に四流を截つ、弘願の密意こゝに彰はれ、佛、一行を以て普く萬機を濟ふ、大悲の本懷まさに暢ぶ。隨犯隨懺の行、誰か我が分に非ざる、易修易往の法、須らく他力を仰ぐべし。此門に入らずんば安んぞ彼岸に到らん。我等何の幸ぞ、斯の靈典に遇ふ、萬劫に一たび聞くも、寧ろ身命を惜まんや。然りと雖、秘密壇の行人は之を閣くべし、定慧ゆたかに備はりて、即身の觀を凝せばなり。大小乘の學者は之を操り難し、戒聞精進の隨心の法を愛すればなり。惟

憲清入道。　勝命親重入道安心（成保入道。賀茂氏人）　性照（康頼入道。）

男三十八人

太政大臣。　右大臣（實定。）　右大臣（兼實。）　左大將（公能。）　大納言藤原公通。　藤實房。　藤實國。　中納言公光。　源雅頼。　藤成憲（櫻町中納言。）　藤實家。　藤實守。　參議藤通親。　平親宗。　刑部卿藤範兼。　藤頼輔。　左京大夫藤修範。　源頼政。　神祇伯顯仲。　藤季能卿。　藤公重朝臣。　藤淸輔朝臣。　藤資隆朝臣。　藤季通朝臣。　源師光朝臣。　藤隆房朝臣。　藤公衡。　藤定家。　藤永範。　藤相如。　源仲綱。　源季廣。　藤伊綱。　祝部成仲。　賀茂重保。　賀茂政平。　散位惟宗廣言。　左衞門督藤親盛。

已上七十五人

寶物集　終

と、『古今』の序に侍るも、實もと覺えて、住吉玉津島の思召さん事も優しければ、人なみなみに此の道に力を入れて、一卷の文を造るべき事を營む程に、幸ひに佛の御前の物語を記して、名を『寶物集』と云ふなるべし。

寶物集近代の作者

女房七人

高松宮。　待賢門院兵衞。　北政所新少將。　前齋宮大輔。　太皇太后宮小侍從。　二條院讃岐。　同院參河内侍。

僧十三人

仁和寺御室 守覺法親王。　五宮 御室覺性法親王。　法印元性 華藏院。　前大僧正覺忠。　法印道勝。　法印靜賢。　僧都範玄。　法眼實快。　俊惠。　登蓮。　祐盛。　顯昭。　覺盛。

沙彌十七人

讃岐法皐。　法性寺入道殿 忠道。　中院右大臣入道殿 雅道。　左京大夫教長入道。　大貳重家入道。　大夫俊成入道。　寂念爲業入道。　寂超爲經入道。　寂照賴業入道。　寂蓮定長入道。　素覺家基入道。　空仁 大伴宮氏人。　道因敎賴入道。　西行

さのみはいかゞとて、覺えある人々ばかりを少々申し侍る也。『萬葉集』より以來の代々の集に入れる歌詠ども其數をしらず、皆申し侍らば、(一)多羅葉に書きて、(二)一由旬の城に籠めたりけん、教の多きに成り侍りなんずれも、一切の文に難なき事侍らば。是も聞き給へ、自ら書き傳へ給ふ事も侍らば、雜多かる文にてこそは侍らんずらめ。人の申しゝ事をのみ聞き集めて申し侍れば、實は少くぞ侍らんと云ふ程に、鐘打ち(三)後夜の行ひなどは始まるほどに、人々も出で合ひぬれば、此僧も何地か紛れて失せぬ。抑花の匂ひを懷しと思ふ人、紅葉を好める者、家家の木葉をかきあつめて所々にちらすは、古今の習ひに侍るべし。然りと云へども、雲井の花を見し昔は、同日同夜の上日に隙もなく、仙洞の月を詠し中比は、白浪音を起てじと營みし程に、和歌の浦のかたぎしらず。歌の林の言の葉をも忘れにし程に、俄に他國へまかりにしかば、又爲る事もなきまゝに、行なひの間には、素盞嗚の三十一字知らざりしおしあつめたりしを、風の便にや、都の方へ吹き傳へたりけるを、恐懼人見給ひて、哀とや覺しけん、數多の中に一人召し還へされたりしかば、目に見えぬ鬼神の心をも優め猛き武士の心にも哀れと思ふは此歌也

(一)多羅葉。多羅樹の葉のこと、印度にて經を寫すに用ゆ。

(二)由旬。印度の里數の名、四十里又は三十里に當ると云ふ。

(三)後夜。寅の時今の午前四時に當り即ち晨朝の勤行のこと。

西へ行く佛は誰も有る物を、ひとりな入りそ秋の夜の月。　源師時朝臣

闇晴れて心の空にすむ月は、西の山邊や近く成るらん。　西行法師

緩みなく心を懸くる彌陀佛の、人やりならぬ誓たがふな。　田口重如

月影は入る山の端もつらかりき、絶えぬ光を見る由もかな。　源季廣

草の庵露消えぬとや人は見る、蓮の花に宿りぬる身を。　藤資隆

惜めども常ならぬ世の花なれば、今は此の身を西に求めん。　讃岐法皇

極樂の蓮の華の上にこそ、露の我が身は置かまほしけれ。　右大臣兼實

花はみなあかぬ中にも來ん世まで、ゆかしき物は蓮なりけり。

此僧語り果てゝ、珠數おしすりて、南無大恩教主釋迦尊、南無西方極樂化主彌陀如來、觀音勢至二菩薩、南無九品蓮臺清淨大海衆、必ず來迎引接し給へと申し給ふべき也と云ひ居たるに、傍なる人、如何に歌を以て證に引き給ふに、人丸赤人の歌をば引き給はぬぞ、又其ならぬ上手どもの歌も、若し侍らぬやと申したれば、其人々歌をさして引かじとには侍らず。只うつり來る歌を申し侍るべき也。又人丸赤人の歌は、あまりに侍れば申し侍らず。當世の歌詠ども多く聞え侍れども、

深禪定の樂、大海の一結、須彌山の塵一に及ぶべからず。(一)勝過三界道と云へり、十方淨土に勝れたりと云ふ事を知りぬ。極樂世界と名づく、樂を極むる事あらは也。(二)金翅鳥の宮殿は、七寶を鏤むと云へども金翅鳥の目には萱原の如し、提婆達多が第三禪の樂と云は、阿鼻大城の底にあり。彼の極樂世界は、七寶の宮殿見れども見れども彌珍らしき也金翅鳥の思ひを乖けり。第三禪の樂を得たりと云へども、外には地獄の相を現ぜり。極樂淨刹は、樂のみありて地獄鬼畜の名をだに聞く事なし。淨瑠璃都率天勝蓮華袈裟幢奇妙なりと云へども、只有緣の極樂を願ふべし。(三)『稱讃淨土經』には、(四)「百千倶胝那由他の舌を以て、一一の舌の上に無量の聲を出して、讃むれども讃むれども盡すべからず」と演べられ。『往生要集』の(五)十樂を記すに、百千萬の樂みなりとも、十樂の中の一つには及ぶべからずと云へり。さればあやしの舌の端にて中中申し侍らじ。返々彌陀を念じて、かばかり目出度淨土へ參り給ふべき也。心ある人の淨土をねがひしを、歌にて申し侍るべし。

いかにして蓮の花に宿りなん、世を浮葉には住むかひもなし。　具平親王

(一)勝過三界道。天親の『往生論』に出づ。

(二)金翅鳥。龍をとりて食すと云ふ鳥類の王。

(三)『稱讃淨土經』『稱讃淨土佛攝受經』と云ひ一卷あり、唐の三弉の譯『阿彌陀經』の異譯なり。

(四)百千倶胝那由他。倶胝は億、那由他は千億のことと無量無數と云ふに同じ。

(五)十樂。西方淨土の十種の快樂、聖衆來迎樂、蓮花初開樂、身相神通樂、五妙境界樂、快樂無退樂、引接結緣樂、聖衆倶會樂、見佛聞法樂、隨心供佛樂、增進佛道樂。

四色の蓮花開て色々の光を交し、七寶の寶樹には花咲き果結びて寒暑改る事なし。大地映徹して木梢の華庭に移り、鳧鴈鴛鴦は遠近に群り、迦陵頻は彌陀の功德を讃歎す。宮殿に下りんと思へば宮殿來り、樓閣に上らんと思へば樓閣又現ず。法喜禪悅の味、心に任せて四種の甘露に勝れ、寶蓮華雨下りて金繩道をさかへり、簫笛琴箜篌空に飜りて、各百千萬種の微妙の音を出し、琵琶鐃銅鈸は奇異の調を奏す、浪の音風の聲は、皆佛道增進の妙文を唱へ。天人聖衆集會して、迴雪の袖を飜へす。一人として心に違ふ人なく、一つとして思に背く事なし。命は無量壽佛と等しくして死苦もなし。慈悲平等の衆生なれば、怨憎に値ふ事豈あらんや。淨土七寶滿ぬれば、求不得苦ある事なく、蓮花の中にあれば生苦もなし。常に菩薩聖衆にしたしみて、利生の方便をかたらひ、常に(一)聲聞緣覺に戲れて、佛果增進の道を營む。遙に天眼を以て、七世の恩所を照して導き、無緣の衆生を訪ふ。十方佛土に常に遊行して三世の諸佛を供養し奉り、昔は木像圖繪の形を見奉りしかども、今はまのあたり滿月の尊容八萬四千の相好を拜見奉り、古へは傳へて聞きし御法、梵音和雅にして說き給ふを聽聞す。忉利天上の億千歲の樂み、大梵王宮の

(一)聲聞緣覺。小乘教の悟道者。

郁として草木皆栴檀に同じ。紫磨黄金の御手を延べて我等が頂を撫で善哉善哉と讃め給ふ。觀音金蓮臺を傾け給へば、勢至は御手を授けて引接し給ふ。伎樂歌詠の聲耳に滿ち、無數の聖衆眼に遮る。寶蓮雨と降りて柴の庵を埋み、讃歎の聲々歡喜の涙を催す。則ち十萬億の國土を過ぎて、須臾に安養淨刹に生れて、寶池の中にあり。(一)第三禪の樂を得て、(二)三途の名業を聞かず。阿伽陀仙が耳に水を入れ、(三)數論外道が石に成りし神變を現ずる也。況や彌陀如來の神通自在に於ひて疑を成すべからず。一つの證を出すべし。大海を一毛につゝみ給へども、(四)摩竭魚は鱗をも落さず。(五)須彌を芥子に籠め給へとも、菩提樹は花をも散さず、況んや刹那に十萬億の國を過ぎて、須臾に安樂國に生るゝ、努々疑ひを成すべからず。遂ひに蓮花初めて開けて、極樂の依正を見る。七寶華坐の中に有りて、無量無數劫の樂みあり。歡喜の心喩を取るに物なし。自ら身を見れば、寶冠瓔珞を以て莊嚴して、黄金の光を具したり。飛行心に任て鳥の遊ぶが如くなり。邊鄙の民の王宮に入れるが如し。池の魚の大海に望むらんに似たり。盡虚空界の莊嚴は、眼雲路に疲れ、轉妙法輪の音聲は、聞寶刹に滿ち、初めて目を開く者の如し。八功德池には

(一)第三禪。天界夜摩天のこと。
(二)三途。地獄、畜生、餓鬼、三惡趣に同じ。
(三)數論外道。迦比羅仙人の立てし學派の名。
(四)摩竭魚。大身鯨魚と譯す、身は白山の如く、兩目は日の如く、能く舟を呑むと云ふ。
(五)須彌。梵語にして妙高山と稱す

「專ら無量壽佛を會せず、亦衆多の善根を植種するに非ずと雖も、己が諸善功德を修行するに隨ひて、彼の佛に廻向して往生せんと欲することを願ずれば、此の人命終の時に臨みて攝受引導す。」

と、『大寶積經』にも申しためれば、無量壽佛を念じ奉らん者、少しの功德なりとも、彼佛に廻向し奉らば、往生すべしと侍るは、實にて侍りける也。

「十惡と雖も猶は引接すること、疾風の雲霧を披くより甚し。一念なりと雖も必ず感應す。之を巨海の涓露を入るゝに喩ふ。」

と後中書王の書き給へるも此心に侍るべし。殊に慈恩大師は、「末法萬年には餘經悉く滅し、彌陀の一教利物偏へに存す」と云へり。「我等末に餘經悉滅の後の生をうけず。往生極樂の望みを致さゞれども、たよりあるものなり。南無西方極樂化主彌陀善逝。命終れば決定して極樂に往生せむ。」と申し給ふべき也。一生限りあり、終ひに今生の緣盡きて、眼を閉ぢん時、彌陀如來遙に來迎し給はん事を思ひ遣り給ふべし。萬德莊嚴の教主、西方に顯れて、漸く近付き、九品の蓮臺の聖衆、紫雲に乘じて斜に降り、光明赫燦として十方世界を照し、異香芬

て頓て髻を打ち切りて、法師に成りて、講師が衣袈裟を乞うて着て、西に向ひ、南無阿彌陀佛と高聲に唱へて行きければ、郎等ども、弓に矢を張り太刀拔きなどして騷ぎけれども、目出度き所へ行かんとするをば、如何に如此はずるぞとて、腹立ちて追ひ留めて、野山も厭はず、西方に向きて行きぬ、其後覺束なかりければ、彼の導師の聖跡を尋ねて行き見れば、西の海に向ひたりける小松の木の上に昇りてぞ死したりける。色形違ふ事なくて、口より青蓮華生へて、芳しき香匂ひて、往生の相を現はせり。又神崎の遊女と云ふ人は、年比色を好み、佛法の名字を知らず、船の內浪の上にして世を渡り、往還の客に身を任せて過す。男に具して西國へ下りける程に、海賊に値ひて、數多所切られて、ひきいらしとしける時、西方にかきむけられて、

我等は何しに老ひにけん、思へばいとこそ哀なれ、今は西方極樂の、彌陀の誓ひを念ずべし。

と云ふ歌を、度々歌ひて只弱りに弱くなりて絕え入りにけり。西方よりほのかに樂の音聞えて、海上に紫雲靉き往生しけりと云へり。

往生したる事、考へ申すべき也。讃岐國多度郡に、源大夫と云ふ武士ありけり。狩漁を以て業とし人の足手を切るを以て先とす。更らに佛法の行末を知らず、漸く年序積りて、物の命を殺す事其の數を知らず。十月ばかりの事なるに狩せんとて野に出でたりけるに、時雨のしければ、人里の見えける方へ馬を走かして行きける程に、茅堂のありけるに、佛供養する事ありて、人多く聽聞すとて集りたるを見て、是れは何事するぞと、收納の盛りに多く人を集めて、徒に置きたるはとて、目を怒らかして腹立ければ、講師只今ぞ、頭をも手足をも切ると思ひて、怖怖佛を供養し奉る也と云ひければ、佛とは何を云ふぞ。佛供養すれば、何事のあるぞと問ひければ、講師少し心付きて、是れより西に阿彌陀佛と申すおはします。其佛を供養し奉る也。此佛の名號を唱へ奉れば、極樂とて樂しく目出度き國へ參る也と云ひければ、我も參りならんやと問へば、極樂は人を分つ事なし、參らんと云ふ願ひある人をば、阿彌陀佛觀音勢至倶に迎へ給ふ也と云ひければ、如何やうにてか參るべきと問へば、男にても參りぬべけれども、佛の御弟子に成るとて、法師に成りて衣を着袈裟を掛けて參るべき也と云ひければ、さらば參らんと

(一)安息國。波斯地方に在りし國の名。

眼を以て相し損ひ給ふ事ありなんや。幷州に生るゝ者は、七歳以後は彌陀を念ずるが故に、必ず極樂に往生し。(一)安息國に生るゝ者は、地獄に落るなど申したれば、我等幷州に生れずと云へども、彌陀を稱念し奉らんに、何ぞ極樂に生を受けざらんや。彌陀を稱念して極樂に往生したる人、少々注し申すべし。聖德太子、行基菩薩、空也上人、千觀內供、僧善謝、僧眞賴、慈覺大師、隆海律師、延暦寺座主增命、東大寺明祐律師、元興寺智光、賴光、花山院、先一條院、內記聖人寂心、參河入道寂昭、梵釋寺兼算、延暦寺成意、源信僧都、勝尾寺勝如、以南野沙彌敎信、左衞門府生時原、祐通、永觀律師、出羽國住人、藤原榮家の女、播磨國賀古郡增祐、性空上人、義孝少將、增賀上人、敦忠中納言の子兵衞佐入道伊勢國飯高郡の尼、遠江國彥貞が妻、信濃國高井郡の沙彌藥蓮、大僧都寬忠姉の尼右大辨佐世の妾、道命阿闍梨、都て是の數申し盡し難し細かに注すに及ばず。片端ばかりを申す也。子細は各々往生傳に見えたり。極樂に往生する人、春雨の如しと侍るめれば、委細申すにあたはず。但し此人々は、本より道心ありて念佛の功つもり年久しき者也。佛法の名字もしらぬ極重の罪人の、須臾の一念に依りて

（一）上品蓮臺。佛衆生の機根に應じて上品、中品、下品の往生を説く、具さには『觀無量壽經』の所説を見よ。

の思ひをなして、他念なく彌陀を稱念し、淨刹を求め給ふべし。長き物をば轅に作り、短き物をば楔に用ひ、曲る物をば輪となし、直なる物をば輻に定め、明王の人を棄て給はぬ事、車を作るに似たり。佛の慈悲も又此くの如し。直なる物の爲めには(一)上品蓮臺を儲けて迎へ給ふ。曲れる者の爲には下品下生を設けて救ひ給ふ。彌陀如來の人を棄て給はぬ事明王車造等に同じ。法照禪師と申しゝ聖人は、清涼山の文殊と物語りし給ひし人也。只也人と申すべからず。彼人の詞に

此の界に一人佛名を念ずれば、西方に便ち一蓮の生ずることあり。但し一生常に不退ならしむれば、此の花還りて此の間に到りて迎ふ。

此界にして彌陀の名號を唱ふれば、西方淨刹に一つの蓮生ず、其蓮花を取りて蓮花臺となして、命終の時觀音來迎し給ふと侍るめれば、念佛は蓮花となるもの也。念佛の功なからん人、何を以て蓮臺としてか、往生の宿望を遂げん。猶々彌陀の名號を唱へて、來迎の蓮臺と成し給ふべし。佛、相人の譬を以て宣く、阿彌陀を念ずる者は、決定往生の相ある人也とぞ宣ひける。天竺には阿私陀仙、相者婆羅門、我朝には伴廣平、僧洞照等の相猶し違ふ事なし。況んや大聖世尊、慈悲の

きやすくして人なしと侍るめり。速かに往きやすき思ひを成して、彌陀を稱念し、極樂を願信すべし。善導和尙の定に入りて、極樂を觀念し給ひけるに、阿彌陀如來必ず道場に現じて、物語を爲し給ひける序に、道綽禪師の往生すべき事を問ひ奉り給ひけるには、喩を取りて敎へ給ふ。木を切る時には、頻に斧を下せば疾く切れ侍るべし、家に歸らんに、休む事なくば疾く歸る事を得べき也。往生を求めん者も、休む事なく彌陀を稱念せよと敎へ給へる也。早く頭燃を拂ふが如くに勤め行ひ給ふべし。極樂を願ひ彌陀を稱念し奉らん事、喩を以て申したる事侍るめる。能々心得給ふべし。喩へば人ありて道を行くに盜人に逢ひぬ。逃げて走る程に大河あり、物を脫ぎて渡らば、盜人や追ひ付かんと進む、物を着ながら渡らば、水にや溺れんずらんと、二つの事をのみ思ふが如く、彌陀を稱念し、極樂をば願ふべき也。喩へば樂しき人の子、人に偸まれて隣國へ行きて人の奴婢と成りて使はる、此人逃げんと思へども叶はず。我國に歸り、父母に逢はじと思ふが如く、極樂を願ひ彌陀如來をば戀ひ奉るべき也。されば彌陀を念ずる行者の行ひける時、人の來りて物申しけるには、只今火急の大事ありとこそ答へ侍りけれ。早く彼上人

て侍りけるとこそ。申し傳へて侍るめれ、實に淨土の生ずべき因なからん者の、彌陀の願力に乘じなば。安樂に生れる事は返々頼もしくぞ侍るべき、速かに惠心僧都の『往生要集』を守りて、或時は西方を觀念し、或時は彌陀を稱念し、或時は極樂の(一)依正を觀念すべき也、涕唾便利西方に向はず、行住坐臥片時も西方を背くべからず。遊び戯れの中なりとも、彌陀を忘れ奉る事なかれ、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と申したれば、彌陀を念じ奉らん人の、攝取の光明に照されて、無始生死の罪障消え失せて、安養淨刹に生れん事、努々疑ひ、を成すべからず。自ら光明を放ちて、行者の傍へに照し給ふのみにあらず。常に二十五の菩薩を遣して守り給ふなれば、返々すぞ頼もしくぞある。彌陀は攝取の光明を放ちて照し給ふ。二十五の菩薩は、常に來りて守り給へども、父母所生の眼拙くして見る事なき也。縦へば盲たる子を、父母養育すと云へども知らざるが如し。永觀律師の(二)『往生講の私記』には「一子の慈悲は平等なりと雖も、攝取の光明は念佛の者を照す」と侍るめれば、猶々御心に彌陀を念じて、淨土に心を住まし給ふべき也。「四十八願をもて淨土の華池寶閣を莊嚴す。往き易くして人なし。」ゆ

(一)依正。依報と正報、依報とは所依の土を云ひ、正報とは彌陀觀音等の佛菩薩のこと。

(二)『往生講の私記』『往生講式』と云ひ一卷あり、先出。

き也。此念佛は武士の腰刀の如し。武士軍の陣に望みて戰ふ時、五八の四十の矢皆射盡して、太刀長刀打ち折れて後。腰刀が身を離れぬ物なれば。自害をもし、高名をもする也、法華眞言の弓箭、戒行檀施の太刀長刀、臨終の時は身に添ふ事なし。只念佛の腰刀を以て、臨終一念の高名はする也。法華には此の經を以て成佛すべしと說き、眞言には咒力によりて佛に成るべしと侍るめれば、成佛の道何と申し候べくも侍らねども、『觀無量壽經』に「一定極樂に生るべきは、念佛也」と侍るめれば、努々疑ひを成す事なく、彌陀を稱念して、極樂の往生を遂げ給ふべし。阿彌陀の三字は、是(一)三身の如來也。(二)三因佛性也。(三)三部の諸尊也。三世の諸佛也、(四)空假中の三諦也。三界を出る指南也。三途の紲を切る劍也。是故に『維摩經』には「彌陀の功德は說き盡す事あたはじ」とは申したる也。後一條院の御時、宇治殿賴通延曆寺へ宣旨を下して、往生を願はん人の持つべき文、勘へ申せと仰せられたりければ、谷々の學頭集りて、一代の聖教を引きて、「若し重業障ありて、淨土に生ずるの因無くも、彌陀の願力に乘ずれば必ず安樂國に生ず。極重の惡人他の方便なし。唯彌陀を稱して極樂に生ずることを得。」此の文を記して奏し

(一)三身。法身、報身、應身。
(二)三因佛性。緣因佛性、了因佛性、正因佛性。
(三)三部の諸尊。佛部、金剛部、蓮花部の諸尊。
(四)空假中。空諦、假諦、中諦。

如し。生々世々の罪業は積りて四十里の伊蘭の様に茂けれども、わづかなる念佛の栴檀の力によりて、往生の宿願を遂げ侍る也とぞ申し給ひける、教主釋尊、無虛妄の詞を以て、父の大王を僞寄申し給ふ事あらんや。喩へば武士の本に、力強くして矢を走らかし、音を射させ。物を強く射通す弓取あり。主の武士是れを愛し、是れを惜みて重き寶と思へり。或人此弓を取りて、矢を張りて引かんとするに、強くして引くあたはず。故に音をも射ず。物にも強く立たず。力ある人は、堂塔も造り、法華經眞言をも勤め行なふべき也。力なき我等は、念佛の弱き弓を以て射れば、自ら物にあたるべし。縦へば玄上と云ふ琵琶を彈んとすれば。手を嫌ひて鳴らず、彈き馴らしたる琵琶を以て彈けば、自ら心澄みて面白きが如し。念佛の功德も亦復かくの如し。經論を習ひ功德も、無量無邊にして佛道に至る道也。然れども、師なくしては習ひがたく。本なくては讀む事なし。念佛は師なしと云へども忘るゝ事なし、本なしと云へども勤め安く。此度成佛の願を遂げて、事叶ひがたきに依りて、先づ此の念佛の功德を以て、極樂の衆生と生れて、三途の故鄉へ歸らずして、漸々に功德增進して、(一)等覺(二)妙覺の位まで至らん事を思すべ

(一)等覺。殆んど佛果の正覺に等しき位、因位の最上位なり。

(二)妙覺。因位五十二位の最後位佛果のこと。

に増すとは申したるなり。されば善導和尚、雜修には、百が中に一往生する事を得。專修には百に百往生する事を得とは敎へ給へる也。專修とは彌陀の行を申したる也。自餘の修行は「名は是れ多善なりと雖も、苦し念佛の者に比ぶれば全く比校するに非るなり」此文の意は、自餘の諸の行は、名は多善也と云へども、念佛の者に比ぶれば、ひとしからずと也。此念佛の功德、喩を以て申すべし。是れまでは事も愚かに侍り、敎主釋尊正覺成り給ひて、多くの法を說きておはしけるに、淨飯大王御父なれば、萬の事心に任せて尋ね申し給ひける中に、何の行を修して、何の淨土をか願ひ侍るべきと申し給ひけれは、彌陀の名號を唱へて、極樂を願ひ給へと申し給ひければ、淨飯大王、釋尊を恨み申し給ひて、多の聖敎の中に、わづかの阿彌陀の三字を敎へ給ふは、親ながらも我器量の程を見て、嘲り給ふかと申し給ひければ、佛恐れ畏り給ひて陳じ給ひけるは、喩へば伊蘭と云ふ樹あり。其香臭くして、一枝一葉を嗅ぐに、猶ほ醉ひ臥して死門に入る。其伊蘭四十里の間に生ひ茂らん中に、栴檀と云ふ樹其中に生出でゝ、未だ二葉に及ばずして、葦の角ばかりならんが、香芳しくて四十里伊蘭の臭氣を消し失ふ。念佛も亦かくの

(一九)『十因』。『往生十因』と云ひ一巻あり、禪林寺永觀の作なり。

(二〇)『往生傳』。『日本往生極樂記』と云ひ一巻あり、寛和年中朝散太夫保胤の作。

(二一)『續往生傳』。『續本朝往生傳』一巻あり、大江匡房の拾遺往生傳三巻あり。三善爲康の作。

(二二)『淨土論』。唐弘法寺迦才の作三巻あり。

多在彌陀と云へる事、あたらしく經論を擧ぐべきにあらず。末法萬年猶ほ彌陀の一教を賴むべしと云ふ事、佛法流布の時に於てをや。末法萬年に於ひて、彌陀の一教を賴むべしと云ふ事、佛喩を取りて教へ給へる事侍り。大國に王あり。國豐に民力ありて、七寶に乏しからず。一人の皇子あり、儲君とす。然るに皇子愚にして、國を保つべき器にあらず。父の王此事を覺り鑑て、數千の金を泥の中に埋めて、皇子に教へて云はく、汝世の末に、世間亂れて寶盡きたらん時、此金を以て身命を助くべし。教へて程なく失せぬ。皇子國請取りて行ふに、政亂れて國靜ならず成りぬ。異國の王此事を聞きて、數萬の兵を發し來りて、硨磲、瑪瑙、眞珠、瑠璃等の財寶一塵を殘さず、運び取りて歸りぬ。其の時愚なる國王、父の教へし泥の中の金を取出して、身命を助くる也。釋尊の父、愚なる我等が爲めに、末法萬年を鑑みて、彌陀一教の金を泥中に埋みて置き給へる也。釋尊の父隱れ給ひて、魔王の異國の軍來りて、般若花嚴の硨磲、瑪瑙の寶、法華涅槃の眞珠、瑠璃の貯も、殘す事なく、軍取りて歸りなん後、彌陀一教の金、泥中にして朽る事なからんが如し。爰を以て末法萬年には餘經悉く滅し、彌陀一教は、利物偏へ

(一一)起信論。『大乘起信論』と云ひ一巻、兩譯あり。
(一二)群疑論。『釋淨土群疑論』と云ひ七巻あり、善導の千足千福寺懷惑の作。
(一三)道綽禪師。支那唐朝の人、曇鸞の塔を拜して淨土門に歸す、眞觀十九年寂す、『安樂集』二巻の作あり。
(一四)慈恩大師。窺基と云ひ、玄奘の嗣なり、永淳元年寂す。『西方要史』は一巻あり。
(一五)往生論。具さには『無量壽經優婆提舍願生偈』と云ひ、一巻あり元魏菩提流支譯。
(一六)瑞應傳。『瑞應刪傳』と云ひ、一巻あり、少康文諗の作。
(一七)新修傳。『新修淨土往生傳』と云ひ三巻あり、敏仲郎王古の作。
(一八)戒珠傳。『淨土往生傳』と云ひ、三巻あり、宋の戒珠の作。

床に來りて、放光明を照し給ひなんと思ふ也。(一)烏瑟の上より、(二)千輻輪の跟に至るまで、佛の相好の功德、すくなからずといへども、眉間白毫の念、其功德少なからず、一念の間に八十億劫の生死の罪を除く也。或は聲を擧げて名號を唱へ、都て彌陀の名號を唱ふる、是を念佛と名づく。阿彌陀の三字は、是三世の諸佛の三身如來、細に申すに及ばず、『維摩經』には、阿難若し阿彌陀の三字の功德を讃めば、汝劫の命を以ても說き盡し難しと侍り。又三千大千世界の衆生を、皆阿難の多聞第一にして、諸〱の衆生に劫の命を與へて、說くとも聞き盡す事あたわずと侍る(三)『雙觀經』『觀無量壽經』(四)『悲花經』(五)『十往生經』『法鼓經』(六)『大阿彌陀經』(七)『小阿彌陀經』『法華經』『維摩經』(八)『藥師經』(九)『千手經』(一〇)『不空羂索經』馬鳴菩薩の(一一)『起信論』懷感禪師の(一二)『群疑論』(一三)道綽禪師の『安樂集』(一四)慈恩大師の『西方要決』天親菩薩の(一五)『往生論』(一六)『瑞應傳』(一七)『新修傳』(一八)『戒珠傳』、永觀律師の(一九)『十因』保胤入道の(二〇)『往生傳』江帥卿の(二一)『續往生傳』(二二)三善爲康の『拾遺往生傳』に至るまで、彌陀を稱念して、極樂に往生する事を註せり。委くは迦才の(二三)『淨土論』に敎へ、細かには惠心の『往生要集』に見えたり。諸敎所讃

(一)烏瑟。肉髻と譯す、佛頭の頂上に肉の高起して髻の如くなるを云ふ。

(二)千輻輪。佛の足下に千の輻輪の文あるを云ふ。

(三)『雙觀經』。『無量壽經』のこと、兩卷あり康僧鎧の譯

(四)『悲華經』十卷あり、北涼の時、曇無懺三藏の譯。

(五)『十往生經』。一卷あり、譯者を失す。

(六)『大阿彌陀經』二卷あり、吳の支謙の譯『無量壽經』の異譯なり。

(七)『小阿彌陀經』一卷あり、鳩摩羅什の譯。

(八)『藥師經』。『佛說藥師如來本願經』一卷。總べて五部あり、藥師如來の功德を說く。

(九)『千手經』。『千手陀羅尼經』と云ふ、一卷あり、唐の伽梵達摩の譯なり

(一〇)『不空羂索經』『不空羂索神變眞言經』と云ひ、三十卷あり、唐の菩提流志の譯。

る也。何にしてか佛には成り侍るべきと、申し給ひてありければ、(一)百八の木槵子を貫ぬきて、彌陀の名號を唱ふべしとぞ仰せける。又跋陀和菩薩、阿彌陀如來に向ひ奉りて、未來の衆生は、如何にして佛をば見奉るべきと申し給ひければ、我名號を念ずべしとぞ仰せありける。(二)法照禪師の清涼山に參りて、大聖竹林寺にして、文殊菩薩に逢ひ奉り、未來の衆生は、如何なる行をか專にすべきと申しけるにも、西方の阿彌陀佛を念じ奉るべしとぞ宣ひける。加之、藥師は(三)八菩薩をして、極樂へ送らんと誓ひ給ひ、(四)千手は我本師阿彌陀如來を、念じ奉るべしと敎へ給へり。普賢は面り彼の佛阿彌陀を見たてまつらんと願ひ、龍樹菩薩は(五)『十二禮』を作り給ふ。先づ彌陀を念ずるに、念相一つに非ず。遙に西方に向ひ、六十萬億那由他恒河沙由旬の身量を現じ、眉間白毫は、五須彌山の如く、御眼は四大海の如く、光明普く十方衆生を照し給へりと觀ずるを念佛と申す也、或は七寶合成の池の上に、青蓮華に坐して、無量百千億の光を放ちて居給へり。或は七重寶樹の下に、七寶華王座の上に、觀音勢至左右に立ちておはします折もあり。或は(六)七寶莊嚴の寶殿の上に百千萬億の佛菩薩に、圍遶せられておはします。或は念佛の

(一)百八の等。百八の木槵子を貫きて珠數を作ること百八の煩惱を表す法。

(二)法照禪師。支那唐代の人、五會山に入り大聖竹林寺にて五會の念佛を行ふ、後善導と稱せらる。

(三)八菩薩。『藥師本願經』に「命終時に臨んで八大菩薩あり其の名を文殊師利菩薩得大勢至菩薩無盡意菩薩、寶檀華菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩、彌勒菩薩と曰ふ、空に乗じて來る」とあり。

(四)千手。觀音菩薩のこと。

(五)十二禮。龍樹の造、十二偈を以て彌陀の功德莊嚴を讃嘆す。

(六)七寶。金、銀、瑠璃、頗黎、硨磲、赤珠、瑪瑙。

二つなく三つなき法と聞きつれば、五の障あらじとぞ思ふ。　和泉式部

教へ置きて入りにし月のなかりせば、いづくを西と指して詠めん。

皇后宮肥後

曉に見つる夢こそ嬉しけれ、つとめて寢たるしるしと思へば。　讀人不知

二つなき御法の船ぞ頼もしき、人を漏さず渡すと思へば。　藤原滿輔朝臣

第十二に彌陀を稱念して、佛道を成すべしと申すは、慥の淨土の劵記にぞ侍るめる。極樂と云ふは、彌陀の淨土也。往生を願はん人、如何に彌陀に思ひを懸け奉らざらんや。皆人心を一つにして、念佛を唱ふべし。然れば則ち諸教に讃むるところ多く彌陀に在り。故に西方を以て一准となすこと殊に勝れたり。此故に一代聖教の中に、何れか彌陀を稱念し、極樂を願ふべしと勸めぬは侍る。但し少々文を引き申すべし。「極重の惡人他の方便なし。唯彌陀を稱して極樂に生ずることを得。若し重業障ありて、淨土に生ずる因無くば、(一)彌陀の願力に乘じて必ず安國に生ぜむ。」此文どもを意得、彌陀を念じ給ふべき也。難陀國の波留離王、佛に申して申さく、自ら參りて申し侍るべきに、國の政隙なくて、使にて申し侍

(一)彌陀の願力。西方彌陀如來は因位の時衆生濟度のために四十八の大願を起せり具さには無量壽願の所説を見よ。

だる人、足より光明を放つ。況んや後世の爲めに讀まん人、即往安樂世界の望み違ふ事あるべからざる也。天竺に一人の國王おはしき、金を重くして、一國の金を尋ね求めて官庫に納め置き給ふ。是れ後世の資糧の爲め也。其の國に一人の長者あり。金を多く持ちたり、長者死去の後、子息に父の長者の許に金多く有る由聞し召し速かに奉るべしと云ふ宣旨を下されければ、子息等申して云くは、父長者金三千兩持ちて侍りし、後世の資糧の爲めに、棺に入れて墓に埋みたる由を奏しければ、僞り申したためりとて、官使を遣して、墓を掘りて見給ふに、三千兩の金則ち失せずしてあり。國王我金を官庫に集むる事は、後世の資糧の爲め也、然るに墓に埋むと云へども、資糧に成る事なかりけりとて、金を各主に返し與へ給ふ。爰を以て大師の云く、金玉三千なれども只身を養ふ一句は幻なりと雖も永劫に神を資くとは釋し給ひしぞかし。實に此『法華經』は、一文一句なれども、生々世々に身を助くる者也。『法華經』の心歌に多く讀みて侍るめり。

諸共に三の車に乘りしかど、我は一味の雨にぬれにき。　　讀人不知

に、御病ひ付きて大事におはしければ、多くの御祈ども數を盡し、(一)驗者には明尊阿闍梨、(二)心譽僧都なんど祈り詈るに、更に其のしるしなし。陰陽師には賀茂光榮、安倍吉平なんど、聲を上げ力を盡して祭りけれども叶はず。たゞよはりによはくなりて引き入り給ひければ、御父の御堂殿道長公のおはしまして、我年來賴み奉る『法華經』の力にて、是れを助け給へとて、壽量品を自ら一時許り讀み給ひて、御顏に當てゝ、日本國に『法華經』の是程に弘まり給ふ事は、偏に我が力なり。我子の命助け給へと哆き給ひければ、御前に侍りける女房に付きて、御舅の具平親王物氣に現れ給ひて、子を思ふ道は左こそ侍れ、誰も子の最愛し悲しきは同じ事なり。我れ墓なくなりて便なき身に、如此辛苦物を思はせ給ふが恨めしければ、助けがたくは思へども、『法華經』には敢勝まいらせず候ひて、此度は先づ歸り申す也とぞ宣ひける。其時本の北政所へ御迎を參らせ、此の由申させ給ひければ、恩愛の道此世ばかりと聞きつるに、草の陰までも是程淺からず思しけるかと、御涙に咽び給ふを、漸くに諫め參らせて、二度歸り入らせ給ひける。さて御病ひ止み給ひにけり。冥官冥道もいかゞかたさり奉らざらん。後妻の讀みたる經を蹈ん

(一)明尊。天台宗延暦寺の座主に補し康平六年六月寂す。

(二)心譽。天台宗園城寺の長吏寛德二年寂す。

力違ふ事なくて、其後我朝の國王と生れたり。淸和天皇是れ也。又彼大納言の、年八十有餘の人にて有りけるが、先世の宿意なりければ御氣息惡しき事にて、伊豆の國へ流し遣しにけり。或說には菅根の大臣と云へり。又其後御門未だ若くおはしましけれども、道心を發し御出家ありて、丹波國水尾と云ふ處に、籠り居させ給ひて、いみじく行ひすまさせ給ひけり。彼御誓ひ三つに別けて廻向し給ひけるひとつも違はず遂げさせ給ひける事を思ふに、『法華經』のいみじきためし云ふ許なし。かゝるためし多く侍る。況んや往生極樂の爲めに讀誦せし人、疑ふ事あるべからざる也。現世の利益も多く侍るめり。是も少々申し侍るべし。『法華經』の持者の沙門、重病を受けて餘命旦暮を知らず、醫師魚を服すべしと教へければ、身命を助けんが爲めに弟子を語ひて、名吉と云ふ魚を八侯買ひて、密に坊中へ取り入れんとするに、他坊の僧侶等引合せて、是れをあやしみて開けて見んとするに弟子心憂く思ひて、我師の年來持ち給ふ『法華經』扶け給へと、心中に祈念しけるに、此魚『法華經』八卷に變じけりとなん。宇治殿關白賴通時左大將を三條院聟にせんと仰せ事ありけるを、本の御前の親具平親王の物氣に出で、既に取殺さんとし給ひける

華經』を供養して、畜生道をまぬかれさせたりき。道命(一)阿闍梨は、泉式部に落つる不淨の僧也しかども『法華經』を讀誦の功德によりて、往生の素懷を遂ぐ。箇樣のためし是れに限らず、多く侍れども、申し盡し難し。委くは『法華經の驗記』を見給ふべし。又人皇五十五代文德天皇の御時、叡山の西坂本に貴僧ありき。『法華經』を三千部讀誦し奉りけるが、御門の內供奉を申し、いみじき御覺えありければ、何事にてもあれ、所望申さん事を叶へんと仰せありけるに、此の僧申しけるは、我を僧正になさせ給へと申しけり。御門既に成させ給ふべきにて有りけるを、大臣大納言伴善男等、支へ申し止るは、僧正なんどは、流石にいみじき人の公達こそ、成り給ふべきにて候へ。彼僧は貴しといへども、凡下の者也とて、申し止めてけり。是れを彼僧口惜き事に思ひければ、我速かに乾死せんと云ふ誓を起して云はく、我年來『法華經』を讀誦し奉る事、既に三千部也。此經一千部の力により、日本の國王と生れ、一千部の力を以ては、彼大臣大納言等の、未だ此世にあらん時、怨を成し罸せん。今一千部の力にては、我難行苦行して佛道を成じ後世の資糧とせんと、誓願を起して、此三つに分けて廻向して終に死にけり、願

(一)阿闍梨。梵語にして軌範師と飜す、軌範となりて弟子の行爲を矯正す、高僧に對する敬稱、密敎の僧職。

是れ汝が書寫の所に行き、逢ひて取次ぎし水を以て書かれたりし、『法華經』の方便品也とぞ答へ給ひける。錄事歡喜の涙を流して、炎王の前にて此願の事を答へ申すに、願を果すべしとて、許されて歸るさに一人の僧逢ひて云はく、冥途に行きたる人容易く歸へる事なし。汝何の因緣を以て歸るぞと問ひければ錄事沙門の敎へし樣を語るに、僧喜びて炎王の前にて在生の善を問はるゝ時、錄事が敎への任に、『法華經』を書き供養すべき願ある由を云ふ、炎王錄事が如くに歸して同じく返る。さて錄事蘇生して、宿願を遂げんが爲めに、市に出でゝ經の料紙を買ふに冥途にて逢ひたりし僧同く料紙を買ふに行き合ひぬ。僧錄事に語りて云はく、汝が敎によりて、冥途の苦患を免れて、二度人界に歸る事を得たり。我は河內國知識寺の住侶也とぞ云ひける。(一)性空聖人は六萬部を讀誦して、現身に六根淨を得たりき。宗緣法師は『法華經』を千部讀みて、往生せんと願ひしかば、八百部に成りし時に『法華經』の文字の悉く兩脇より翅に生ひ出で、西方へ飛行しけると夢に見え給ひ、千部に滿して往生し給ひき。延曆寺の僧禪靜をきらひて『法華經』を讀みて、母を往生せさせたり。伊賀國の山田郡の民は、母の牛に成りけるを『法

(一)性空上人。播州書寫山の開基、寬弘四年三月寂す

らずして、病を受けて死す。炎魔王宮に跪く時に、炎王遙かに見て王の床より下りて盲人を拜して云はく『法華經』を拜したる人也。速かに故郷へ歸りて(一)一乘妙典を誦し奉るべしと敎へて還し給ひへり。則ち蘇生して忽ちに眼開き、耳聞えて物云ふ事を得たり。(二)獅子國の五百の餓鬼は、一品耳に觸れて天上に生れたりき此故に長安宮の人は、切り止め惜み給ひしぞかし、佛神も魔王も皆隨喜し給へり誰か忽緖にする者侍るべき。定禪師が是れを讀みしかば、天童影の如く副ひ給へりき。惠果和尙讀み給ひしかば、口より光を出しき、日本國には、延喜年中に仁和寺に仁元內供と云ふ者あり。一人の弟子あり。彼の沙門が檀那あり。粟田錄事と云ふ。錄事一生の間、佛法を信ぜず、但し『法華經』を書寫する所に行き逢ひて心ならず硯の水を取り次ぐ事有り。錄事病を受けて死門に入りぬ、冥途の旅心細くして、影より外に添ふる物なし。然るに一人の沙門來りて語りて云く、汝在世の間佛法の名字を知らざりき、定めて地獄に落つべし、炎魔大王の前にして、在生に如何なる善かありしと問ん時、一乘妙典を書寫供養すべき願なんありしと答ふべしと、懇に敎へける。如何なる人の、如此は敎へ給ふぞと問ひければ、我は

(一)一乘妙典。一佛乘を說きたる微妙の經典の意『法華經』のこと。
(二)獅子國。印度錫崙島のこと。

（一）黒繩地獄。八熱地獄の第二、人を殺し、人を縛して金を奪ひしものゝ墮つる處。

流して、布施は請ふに依ると宣ふ、僧融冥途に來る事容易からず、我母の生所を知らんと申しければ、汝が母（一）黒繩地獄にあり、行きて見るべしとて、獄卒を一人添へて遣したりければ、黒繩地獄を行きて見れば、杵の頭に黒らかなる鴟を刺し貫きて、是れを汝が母よとて見せけるが、悲しかりけるまゝに、炎魔王宮へ歸り參りて、今日の布施に我母を申し受くべしと云ひければ、炎王大に怒りて、地獄に落る者容易く出づる事なし。今日の布施には母の生所を知らせたり。申す所理に非ずと宣ひければ、僧融押し返して、炎王法を重く爲し給はゞ我母を許し給へと申しければ、炎王我と許す事叶ふべからず。汝娑婆に歸りて『法華經』を書き供養し奉るべし。左有は自ら得脱する事もありなん、其の功德は何事を爲すとも叶ふべからずとぞ宣ひける。又同じ長安宮に、一人生盲の者あり。而も瘖にて物云はず、亦耳聞く事なし、故に佛像をも見奉らず、經論をも聞かず。法文をも誦せず、惣て佛法と云ふ事を知らず、時に玄孫と云ふ人、此事を哀み悲みて、彼の盲人の手を引きて『法華經』安置したりける道場に具して行きて、兩の手を取り合せて拜ましめたることあり、盲人何事と云ふ事をしらず、盲人其の後幾許な

現じ給ひ。（一）空也上人、大宮川にて是れを讀みしかば、松尾大明神、妙法の衣を願じて、寒夜の苦患を免れ給ふ。況んや後世の資粮と成らん事を知らで、經論を磨滅す。故に人名づけて惡毒王と云ふ、佛在世の事なりければ、佛救はんと思しけれども、佛教を用ひざりければ、力及び給はずして、迦葉舍利弗目連三人の御弟子を召して、誘へ給ふ事侍りけり。惡毒王牛を好み飼ふ事、又他事なし。佛此の事を鑑みて、迦葉をば牛と成し、舍利弗をば牛の主と成し、目連をば牛飼と成して、牛の名を妙法と付け、牛の主の名をば蓮華と付け、牛飼の名をば經と付けて、牛の主毒王に牛を奉る。毒王大に悅びて、牛を寵愛する間、心にもあらず、牛、牛主、牛飼の名を呼ぶ間、妙法蓮華經の五字を唱へ、毒王今生の緣盡きて炎魔王宮に跪く、獄卒毒王の罪を記す簡、鐵の車三輛に積みて引き出せり。一の簡の端に妙法蓮華經の五字を唱ふと云ふ事を記せり。炎王是れを聞きて、無量無數劫にも値ひ奉る事難き、妙法蓮華經の名號を唱へ奉る人也とて、王の冠を傾けて拜み給ひけりとこそ侍るめれ。昔大唐國に一人の說法師あり、名を僧融と云ふ炎魔王宮より導師に請ぜられて行きぬ。說法目出度くしければ、炎王隨喜の涙を

（一）空也上人。諸國を遊歴して常に彌陀の號を唱へ京都に六波羅密寺を開きて十一面觀世音を安置す。天祿三年九月示寂す

佛に成らんずる事を示し給へるとこそ、智者は宣ひしが。猶深く此心を持つべきなり。『心地觀經』に「來生生死の海に沈み、(一)五趣に輪廻して出る事なし、(二)善逝妙法の船を浮めて彼岸に渡し給へ。」と侍り。(三)多寶の證明、普賢の擁護、四天王の守護、(四)十羅刹の繞益のみに非ず。暫くも持てば十方三世の諸佛、皆悉く隨喜し給ふ。「此の經持ち難し。若し暫くも持つ者は、我れ即ち歡喜す。諸佛亦然り。」と說くは是れ也。佛の喜び給ふ事は、有難き事にぞ侍る也。阿難尊者は、佛の御從兄弟にて、常隨給事に奉りて二十五年也。釋尊跋提河の邊にして、涅槃し給ひけるに、佛を喜ばせ奉る事の一度もなくて、別れ奉る事をぞ悲しみ給ひけれ。況んや二千餘年の後、佛を喜ばせ參らせん事『法華經』を修せざらん外、何事か侍るべき、長安の宮人の(五)『提婆』の一品を切りとめ、花氏城の者の死人の頭を供養しけるも理にぞ侍るべき。六萬九千の文字、金色の佛と成りて、讀誦の舌の端より出でて、行者の傍を照し給ふなれば、無始生死の罪障も、如何消え失せずも侍るべき佛の喜び給ふのみにもあらず、神明も隨喜し給へり。傳敎大師、宇佐宮にて講讀せしかば、八幡大菩薩紫の衣を布施にし給ひ。又春日大明神は、紫雲の中に

(一)五趣。地獄、餓鬼、畜生、人間、天上。

(二)善逝。佛は無量の智慧を以て諸の惑を斷じ善妙に世間に出てゝ果上に趣き退轉することなき故に善逝と云ふ。

(三)多寶。東方寶淨國に在ませし佛『法華經見寶塔品』に『法華經』を證明すとゝけり。

(四)十羅刹。藍婆、毘藍婆等十婦の羅刹女のこと。

(五)提婆。『法華經提婆達多品』のこと。

て疑ひあることなし」と。「若し但だ書寫せば是の人命終に當に忉利天上に生ずべし。是の時八萬四千の天女衆の妓樂をなして之れを來迎し、即ち安樂世界の阿彌陀佛に往る」と說けり。實に髻中の珠に譬へ戴き侍る。無二亦無三と說き給へるのみならず、重ねて法華最第一と敎へ給へり。猶々此經を勤め行ひて、返々も疑ひをなし給ふべからず。「是の人佛道に於ひて決定して疑ひあることなし」とは、此の經の大意に侍る也。賴もしく侍るべし。「是れ則ち勇猛なり。是れ則ち精進なり。是れを戒を持して(一)頭陀を行ずるものと名づく」と說き給ひたれば、所狹き野山にかゝらずとも、此『法華經』の五種法師の行に依りて、佛に成らん事は、努々疑ひ有るべからず。靜に過去遠々の事を思ふに、靈山會の六種震動放光雨華を思ふに、我等が罪業重かりしかば、上至(二)有頂の光にこそ當らずとも、下至(三)阿鼻地獄まで照し給ふらん光には、よも漏るゝ事侍らざりけん。今一文一句を耳に觸るゝこそ、此文によりて成佛近くなるよと、返々賴もしく覺ゆる、決定知近水と云ふ此經の意なり。心を一つにして、如此思ひ給ふべき也。(四)白毫も光は白くこそ侍るべきに、皆如金色と說き給ふ。此光に當らん人は、皆金色の膚に成りて

(一)頭陀。梵語にして陶汰、斗藪、修治等と譯す。煩惱の塵垢を拂ひ去りて佛道を求むること。

(二)有頂。無色界の第四天。非想非々想天を有頂と云ふ。三界九地の絕頂なるが故に此の名あり。

(三)阿鼻地獄。無間地獄のこと、地獄の最下なり。

(四)白毫。佛の兩眉の間に毫あり、清淨柔輭にして細香の如く、右旋宛轉して常に光明を放つ之を白毫相と云ふ。

庭に綻ぶ。故に是れに値ふものは、一眼の龜の浮木の穴に値ふに喩へ、是を聞く人をば、三千年に一度花開く優曇華の如しとは云ふ也、誠に理にて侍るめる。されば此經を書き供養したる紙を、市にて買ひ取りたる女人さへ、冥途の闇をはれたる事あり。『法華經』書寫の硯の水を入れたる結緣にて、奈落の猛火を消したる事あり。渡に船を得たるが如くに悅び、子の母に遇へるが如くに樂みて、受持讀誦解脫書寫して、疾く佛に成り給ふべき也。(一)五種法師の行、何れか成佛の因ならぬはある。門の外の車に譬へ、早々三界の火宅を出で、法の衣の裏の玉と云へり。速かに恐れ給ひて、菩提の寶と成し給ふべし。無一不成佛の如來の金言也皆已成佛道の文、大聖の誓ひにあらずや、展轉第五十の功德猶ほ量りがたし。況んや心に任せて讀み思ひに隨ひて聞かんをや。決定知近水の念を成して、努々疑ふ事なかれ。六萬九千三百八十餘字皆佛也と申せども、殊に尊とく嬉しく侍る文おはします也。『提婆品』に、「妙法華經の提婆達多品を聞き、淨心信敬して疑惑を生せざる者は、地獄、餓鬼、畜生に墮せず。十方の佛の前に生ず」と。

「我が滅度の後に於いて、應に此の經を受持すべし。是の人佛道に於ひて決定し

(一)五種法師『法華經法師品』に說ける五種の弘教の人を云ふ、受持法師、讀經法師、誦經法師、解說法師、書寫法師なり。

りとぞししためる。入道中納言顯基卿の、罪なくして配所の月を見ばやと願ひ給ひし、流罪の好もしきにはあらず、此世を思ひ捨つべき善知識に値ひてとなり、中務少輔藤原定長、世の中の心にも叶はぬ事を恨みて、出家して籠り居て、かくこそ讀み侍りけり。

世の中の憂さは今日こそ嬉しけれ、思ひしらずは厭はましやは。

檢非違使左衞門尉平康頼、罪なくして鬼海島に流されて、出家の後かくぞよむ。

遂にかく背き果てける世の中を、疾く捨てざりし事ぞ悔しき。

朝露消え易し。春の夢長きに非ず。刹那の榮花變生の枯木。須臾の觀樂は、還りて苦の緣となる。

心有らん人是れを歎く事なくして、善知識に値ふ事を喜ぶべき也。

第十一に『法花經』を修行して、佛に成るべしと申すは(一)阿私仙に仕へし大王を始め、其證毛擧に遑あらず。三世諸佛の出世の本懷、一切衆生の成佛の直道也。五障の女人も成佛す。月無垢界の空に浮ぶ。(二)二乘の敗種も得道す。花鷲峯山の

(一)阿私仙。婆羅門の學者にして釋尊降誕の時、尊容を相し奉りたる人

(二)二乘の敗種。聲聞緣覺の二乘には生死を厭ふに急にして、利益度生の念なし、故に佛果を成ずる能はざれば貶して敗種と云ふ。

る。其人の一定渡海はせんずるやと申しければ、
止まらん止まらじとも思ほへず、何國も終の住家ならねば。
遂に大唐國へ渡りて、淸凉山の麓に草庵を結びて、命終の時かくぞ申し侍りける。
荒屋人無くして痛を扶けて起き。香爐火有りて西に向ひて眠る。笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上。聖衆來迎す落日の前。

法名寂昭參河の入道と云ふ是れ也。源滿仲は、あまりに罪を造る事を悲みて、法師子の(一)源賢と申すが、延曆寺に侍りけるが、惠心僧都や、(二)院源座主などの未だ若かりける比、心を合せて談ひて、攝津國多田と云ふ所なる家に具して行きて物語しける次でに、法文の奥義を說かせて、生死无常など申し聞かせければ、頓に道心を發して、即ち法師になりて、夏飼の鷹三百許り放ち、其外又多くの網どもを燒き捨てたりけり。妙莊嚴王の二子の例也。善知識と申すべき也。世の人多田新發意とぞ申しける、同日、法師になる郎等六十人ぞ侍りける。又父妻親子に後れ、憂き事に値ひ耻を見るも、橫難に罹りて法師尼になるも、善知識と思ふべき也。諸經の中に、或は貧しく、或は世を恨み、或は憂き事に値ふ、皆善知識の因緣な

(一)源賢。源滿仲の子、惠心僧都の室に入りて出家す。
(二)院源。比叡山延曆寺座主、僧正に任じ、長元元年に寂す。

けるを見れば、歯には黒歯打ち付けて、一日見しに違はざりけるを見て、命も捨てつべく覺えし。かなしさに、頓て法師に成りて、かくぞ讀み侍りける。

有りしこそ限り成りけれ逢ふ事を、など後の世と契らざりけん。

かくて長く佛道を修行しけり。大江定基、思はしかりける妻に後れて、世の中を恨みて大唐國へまかりける比、山崎の(一)寶寺と云ふ所にて、母の爲に(二)八講を行なひけるに、靜照法橋を請じて、說法させけるに、『法花經』講じ奉るとて、明日よりは妙法蓮花と誦すと云へども、今日は妙法蓮花經と釋して、聞かせ奉ると云ひけるより、聽聞の人皆泣きけり。「施主分になりて、日西に傾ぶかば、聖人の他州におはする事を忘れ給ふな。月東に出では、悲母の故鄕に留まり給ふ事を思ひ出で給へ。」と云ひけるに、聞く人哀れに有難ふ忍びがたくや思ひけん、或は車の内より髮を切りて出だす者もあり、笠の下より髻を切りて出だす者もあり、當座に彼れ是れ五百人あまり出家したる由をこそ、諸家の日記に侍るなれ。さて靜照を以て、導師にすべからずとぞ宣旨下りけりなんどぞ申し侍るめる。加樣の憂き事悲しき事の縁に値ひて、出家遁世する人を、佛は善知識に値ひたるとぞ宣ひけ

(一)寶寺。山城乙訓郡山崎天王山の南半腹に在り、本尊十一面觀世音、聖武天皇の勅願行基の開基と云ふ。

(二)八講。法華八講と云ひ、法華經八卷を八人に分ちて八座に讀誦供養する法會。

く度に、多くの佛弟子を殺すと申したためる。聖教の異ひ能々定説を尋ぬべき也。又不動國の金字太子の、憂き事に値ひて、出家遁世して行ない給ひし。佛善知識に値ふ人也とぞ宣ひける。我朝にも事に逢ひて、世をそむける人多く聞え侍るめり。少々申し侍るべし。義懐中納言は、花山院の何國ともなく失せさせ給ひにしかば、惟成辨と二人出家遁世して、籠り給ひにけり。中納言は飯室と云ふ所にて、花を見てかくぞ讀みたまひける。

見し人も問はず成り行く山里に、心長くも來たる春哉。

源兼長思はしかりける妻を持ちたりけるが、痛く遠くはなくて、二三日許の道なる所へ行くとて、今疾く歸らんと云ひて、終夜談ひて行きにけり。實に程なく歸り來りて、何となく胸さはぎのしければ頓て彼の妻の本に行きたりければ、使ひける女の童、打ち泣きて門に立ちたりければ、彌心惑ひて、如何なる事のあるぞと急ぎ問へば、早御前は失せさせ給ひにしかば、夜鳥部野へ送り參らせてき」と云ひければ、物も覺えず心も消えゆくやうにて、足の立ちども覺えねども、頓て鳥部野へ行きて見ければ、頭をば長やかなる髮付きなから、犬の抱へて嚙り

母憂き事と思ひて捍ふとすれども、女は甲斐なき者にて終に隨ひにけり。叶ふ可き事ならねば、志深くて過す程に、女の心憂き習ひは、逢ひ初めて後は度々値ひにけり。其の後は人目をも憚らず、心に任せて値はんが爲めに、父を殺してけり。父なく成りて後は、心のまゝに住み渡る程に、見聞く人禁忌がり惡みければ、母此事を耻ぢて、隣國に夫を儲けて住まんとて、逃んとしけるを聞きつけて、昔こそ母にて有りしが、今は我が妻也。何ぞ他人の膚觸んとするは安からずとて、瞋り腹立ちて打ちける程に母をも打殺してげり。梵士祇園精舍を通りけるに參りたりければ、五百の羅漢佛弟子等、禁忌しき罪人也とて逃げ隱れて逢はざりければ、又瞋りを成し腹立ちて(一)僧坊に火を放ちて燒きつ。多くの聖教皆燒け失せぬ。五逆罪の中に四逆を既に犯しつ。去れども佛は此重罪を哀み悲みて、善知識と成りて救ひ給ひたる事あり。此の如き惡人すら、善知識の力に助かる。況や是れ程の重罪なからん人の、善知識に逢ひて往生極樂を願ひて、努々疑ひ有る可からざる也。此梵士と云ふは、大夫が事歟。或經には、死の後葬むるに、重罪に依りて燒けず、故に犬の糞をかけて燒くなど申しためり。又祇園精舍の僧坊を燒

(一)僧坊。僧侶の住家。

一人の子口より炎を出す。是れを人蟒と名づけて、遙の島に放つ。さて其國に罪ある者をば、彼の島に放ちれければ、人蟒則ち皆是れを食ふ。加之、惡風に値ひて放れたる者、此島へ寄來るをも食ふ。然る間、人を食ふ事七萬二千人也。其罪算分喩分に及ばず。佛是れを哀み悲みて、阿難尊者を善知識に遣はして導き給ふ。人蟒阿難を七反見たりし故に、七度天上に生れて、終に果を得たりと云へり。鴦堀摩羅は外道の說を用ひて、千人が指を切りて編集むべき願有りて、既に九百九十九人が指を切る事を得たり。是に怖ちて世の人値ふ事無りければ、今一人殺んとする程に、佛に値ひ奉て、悅びて殺さんとしけるに佛是れを哀みて、神通を以て、少し前に立ちて近ふも寄せ給はず、かの及ばぬさきに、對治おはしましければ、嬉しと思ひて追ひ奉りて云く「住せよ住せよ、大沙門淨飯王の太子、我は是れ鴦掘摩なり。當に汝が一指を切るべし」と云ひける樣に、佛に近付き參らせたりしか故に、善知識として罪を滅し、果を得たりと云へり。舍衛國に一人の梵士あり。容好からん妻を儲けんが爲めに、國中を尋ね見巡るに、我母許の美人なし。是の故に母を人はなれたる處へすかしやりて、是れを犯さんとするに、

(一)智光禮光。智光は南都元興寺の僧なり、同學禮光が阿彌陀佛を念じて往生せしに感じて專ら念佛し淨土曼荼羅を圖畫し極樂院を開きて之れに居れり。

は善友に値はんと有り。善知識の心也とぞ心得て侍る。僧法が僧行を救ひ、頼光が知光を導く、善知識と申すべき也。昔し四人の聖人ありき。山に籠りて行ひけるほどに、一人づゝ里に出でゝ、食物を乞食して過ぐる程に、一人の聖人の云ふ様、唯一人して乞食して養はん、三人は靜に行ひて、我が後世をも弔ひ導き給へと云ひければ、三人悦ひて閑に行なひければ、年月を經て、四人ながら失せにけり。三人は正覺成じぬ、今一人は里に出でゝ乞食しける折節、君の御幸を見奉りて執心を止めける故に、即ち國王と生れき。三人の聖人昔の契を忘れずして、一人は后と成り、二人は子と成りて、父の王を敎へて、菩提の道に入りたりき。妙莊嚴王、淨德夫人、淨藏、淨眼の二人の子と申すは此の御事ども也。南都の(一)智光、頼光なんどこそは、加樣の契にて侍りけん。かまへて善知識に値はんと思ふべき也。加之、極重罪人の善知識に逢ひて得脱する事、少々考へ申すべき也。昔佛生國に、血の雨降りて、國土あまねく紅也。國王大に驚きて、陰陽に問ひ智臣に尋ね給ふに、今夜若し惡人などの生れたるか、今夜生れたらん赤子を召して見給ふべしと申しければ、舍衛城中に、其夜生れたりける赤子を召集めて見給ふに、

（一）優婆塞。近事男と譯す、在家にて佛道に入り三寶に親近し三歸五戒をうけたる男子。

（二）須陀洹果。預流果と譯す、三界の見惑を斷じ盡し初めて聖者の流類に入りし位。

（三）彌陀は等。『悲華經』に出づ。

（四）『千手陀羅尼經』。『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』と云ひ、一卷あり、唐伽梵達摩の譯。

文字、書きたき也。それがやらに、善知識に値へば善を修し、惡人に逢へば惡を成す也。一つの證を申し侍るべし。天竺に一人の聖人あり。道心堅固にして偏へに佛道を求む。歩めば蟻の子の足に障らん事を悲み、朝には講演を行じ、夕には經論を誦す、漸年序積りて、人佛の如くに歸す、一人の若き女、常に聽聞の爲めに來る、聖人自然に見馴て、愛念を成して、懇に談ふ、女の云く、「實に志有らば、僧の姿を改めて、男に成りたらば逢ふべし」と云ひければ、志深き故、忽に（一）優婆塞の姿に成りて、本意を遂げつ。人是れを聞きて歸依の心なし。故に衣食の二事闕けぬ。爲すべき方なくて、山の鹿木をして、市に出でゝ賣りて、夫妻が世路を渡る。或日弓矢を提げて、鹿を取らんが爲めに山へ行く道に、昔の同法の羅漢行き逢ひて、涙を流して彈指して恥しめ悲みければ、則ち弓矢を切り捨てゝ、又出家遁世して行ひて、其度遂に（二）須陀洹果をぞ經たり。（三）彌陀は珊提嵐國の昔し、無上念王と申しゝ時、寶海梵士の勸めによりて、空王佛を拜して正覺を成り。今西方の教主と顯れ給ふ。阿闍世王の父を殺せし逆罪を犯せりし、耆婆大臣が教へを以て、釋尊の御弟子と成りて、遂に靈山の聽衆に列る。（四）『千手陀羅尼經』に

きにはあらず、善知識に値ふ事の難き也。爰を以て『法華經』の『妙莊嚴王品』には、善知識は是れ大因緣とは說かれて侍る也。是の故に常に善知識に心を懸て、尊からん聖一人を談ひて持つべき也。然りと雖も、緣なく成りぬれば、道行く折に入海に逢ひ、岸より落ち、火に燒け、人に殺されて、少緣には善知識に値ふ事なし。されば人の言種には、臨終正念往生極樂と祈るべき也。是れ善知識に値ふべき相也。或人一生涯の間、佛法を信ぜずして、好みて罪を作る、病惱を受けて後、始めて善知識を請じて、臨命終の時、善知識の聖に云ふ。「我一生涯の間、佛法を信ぜずして、一善なきが故に、今地獄の迎ひを得て、火車既に眼の前に現ぜり」と悲む。善知識教へて云はく「罪を作れば地獄の迎ひを得、佛を念ずれば聖衆の來迎に預る者也。南無阿彌陀佛と十回申せ」と教ゆ。則ち善知識の教に任せて、南無阿彌陀佛と聲を擧げて唱へ未だ十返滿たざるに、聖問ひて云はく「只今何の相をか見る」答て云はく、「火車の報を返して、蓮華臺來りて迎へんとす」とぞ申しける。火車自然と去り、蓮臺即ち來迎と說くは是れ也。細かには(一)『法鼓經』に申しためる、月を見れば涼く、日にあたれば暖か也。弓を取れば引きたく、筆とれば

(一)『法鼓經』。『大法鼓經』と云ひ二巻あり、宋の求那跋陀羅譯。

寶物集 卷第七

第十に、善知識に値ひて佛に成るべしと申すは、慥の往生の因にて、其證多くぞ侍るめる、從ひ一生涯の間、(一)十惡(二)五逆の罪をのみ作り犯せる人なれども、命終の時に臨んて、善知識に値ひて、若くは(三)十念、若は(四)一念に彌陀の名號を唱へて、十念成就して、極樂に往生すと云へり。善知識に値はずば、十念具足せん事かたく侍るべし。縱ひ十念成就せずと云ふとも、若は一念、若は苦患隙なくば、せめて一念に及ばずとも、面を西に向けて、西方に思ひを懸けて、彌陀を共方に御座とだに思ひ知りなば、惡道を離れ往生する事を得べしと云へり。波に浮べる舟は萬里を走り、松に這ふ葛は千尋に升る。麒麟の尾につく蠅は雲路に飛び、輪王の行幸に隨ふ農夫は虛空を翔る。忉利天の園には歡喜の色を含み、(五)蓮華世界の鳥は妙法の文を囀る。麻の中の蓬は揉めざるに直し。栴檀の林に入れば衣自ら芳しく。善知識に値ふ人必ず臨終の時无上菩提の思ひを成すべき也。縱ひ竹馬の時より道心ある人も、緣なく成りぬれば、善知識に値ふ事なし。往生の難

(一)十惡。殺生、偸盜、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡、

(二)五逆。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。

(三)十念。十聲佛名をとなふること。

(四)一念。一聲佛名をとなふること

(五)蓮花世界。蓮の花の世界即ち極樂淨土のこと。

かく計うき身なれ共捨て果てんと、思ふになれば悲しかりけり。　空　仁

郭公あかで此の世を盡しては、語ふ空の雲とならばや。　藤原清輔朝臣

共とだにしる事あらば廻り逢ふ、六の道をも待たまし物を。　高松宮

されば百年の罪も、臨終の一念にて悉く消え失する事あり。臨終は老少をも選ばず、時日を知らぬ事なれば、常々臨終正念と心にこめて、佛を念じ給ふべき也。

寶物集 卷第六

夜を籠めて鶏の虚音は謀る共、世に逢坂の關は宥さじ。　清少納言

是は孟嘗君が、三千の客の中に鶏の鳴く眞似をする者の有りしかば、鶏のそらねとは讀む也。

老の波寄せじと人は厭へども、待つらん物を若の浦には。　蓮敏法師

天明と霞こめたる若の浦の、春の氣色はいかゞしきにし。　僧都公圓

若の浦に雪降りぬればした田鶴の、芦間に立てる數ぞ添ひける。寂念法師

波羅奈國に、鸚鵡頭陀師と云ふ人、佛に申して言く、「如何なれば百年功德を作せる人地獄に落ち百年罪を作る人淨土に往生する。」佛頭陀師に告けて宣く、「百年功德を作る者の地獄に落つるは、命終の時に臨みて今生に執をとむる忘念に依る故也。百年罪を作る者の淨土に往生するは、臨終に彌陀を念ずる故也」とこそ宣ひければ、此理をばしらで、夢の內の世に着を成し、幻の間の此の身に執をとむる人多くぞ侍る。歌にて申し侍るべし。

都には戀しき人の數多あれば、猶此度はいかんとぞ思ふ。　藤原惟規

行えなき空の煙と成りぬとも、思ふあたりを立ちは離れじ。　紫式部

此天井に萬文の錢を置きたりしを、さしも惜しとは思はざりけれども、臨終の時思ひ出しける故に、蛇の報を受けたり。其錢を以て、此れを救ひ給ふべき也と見えたりければ、大臣あやしと思して、急ぎ此の坊におはして、天井を見給ひければ、細き蛇錢に雜りてぞ有りける。大臣此を見給ふに、あさましく悲み給ふて、其錢を以て『法華經』を書寫供養し給ひけり。其夜の夢に、此功德に依りて、得脫しぬる由をぞ告げたりける。されば花を愛する人は胡蝶になり、鳥を愛する人は畜生に生るなど申したる也。爰を以て都率僧都は、眼は六賊の中の大將也。故に臨終に見欲を起さじが爲めに、盲目にならんと願ひ給ひしは、加樣の事にて侍るべし。されば歌に讀めり。

人の身に目ばかりつらき物はなし、見ずは戀しと思はましかば。

と讀みし人こそ、げにと覺え侍れ。遊子が函谷關の神となれる、月に心を留めしに依り、衣通姫の玉津島の明神となる、和歌浦に執を留めし故也。函谷關若浦の事、歌にも讀み侍り。

關の戸を明けぬ／＼と云ひなして、虛鳴しつる鷄の聲哉。　讀人不知

せらん人、往生淨刹の素懷を遂ぐべからず。されば人の命終の時は、思はしからん妻子や、惜しと思はん寶などを、皆見せぞとぞ申して侍るめる。臨終の作法記したる文の侍るには、先づ彌陀を西の壁に掛け、繪像木像心に任すべし、五色の糸を彌陀の御手に懸け奉りて、病者の手に取らしめよ。凡て人多く寄する事なかれ。五辛を近付くべからず。其外魚鳥の肉、並に酒の氣を取り除くべし。土砂を加持して病者の上に灑ぎ、善知識を枕に居ゑて、他念なく念佛を勸めよ。往生の思ひより外に、餘の思ひを雜へず。佛像の色より外に、他の色を見ざれなんどぞ侍るめる。(一)調達が六萬藏の聖教を讀みし、惡念に依るが故に阿鼻の底に沈み、(二)慈慧僧正の行業の高かりし、延曆寺に執をとゞめて金の天狗となれり。四禪比丘は地獄の相を見、慈悲童女は天上の報を受けたり。知りぬ後世の善惡は、臨終の一念に因ると云ふ事を。延喜の御時、无空律師とてやむ事なき聖おはしけり。命終の時、坊の天井に錢を一萬文藏し置きたりけるを、惜とは思はざりけれども、思ひ出たる妄念に依るが故に、往生の素懷を遂げずして、蛇に成りて彼の錢の中にぞ侍りける。死去の後年來の檀那なりける故に、枇杷左大臣仲平の夢に見えて、

(一)調達。提婆達多のこと、斛飯王の子、釋尊の從弟子なり。

(二)慈慧僧正。名は良源、天台座主に任じ大僧正に昇る。寬和元年正月寂す。

（一）須菩提。善吉と譯す、十大弟子の一、解空第一と云ふ。

は證果の羅漢なれば、輪王の形を現じて、一番に拜み奉る。佛歸り給ひて、我をば誰か一番に拜みつると問ひ給ひければ、華色比丘尼こそ、早く拜み參らせしかと申しければ、（一）須菩提が石室に居て、袈裟の綻を縫ひて、空寂を觀じて在りしこそ、我をば一番に見しかとぞ仰られける。

若し色を以て我を見、音聲を以て我を求むるは、是の人は邪道を行ずるなり、

如來を見たてまつること能はず。

是れ皆觀念の大意也。此の故に觀念を致して、淨土に往生し給へとは勸め申し侍る也。

○第九に臨終の惡念を止めて、佛に成るべしと申すは、縱ひ竹馬の時より、八十の算に至るまで、忍辱精進にして戒を持ち、念佛讀經の功を積める人と云ふとも臨終に色を見、聲を聞きて、一念の妄念を起せば、必ず生死に止まるべき也。天竺の長者、金の釜を惜しと思ひしかば、蛇に成りて中に蜿り、舍衞國の女容を好しと思ひしかば、髑髏の中の蟲と成りき。加之、柑子の木を惜みて木にまき付き水瓶を惜みて中に入りて蛇と成る人も多く聞え侍りぬ、況や生死に於ひて着を爲

槃」と云ひ、「婬欲即是道、恚癡亦是くの如し」と説くは是れ也。昔達磨和尚の天竺に行ひありき給ひける時、无智文妄なる法師二人して、一生涯の間、圍碁を打つ外他の所作なし。見る者是れを惡む、聽く人彼を誹る。達磨閑なる時、二人の僧答へて云く、「黑の死する時は、黑業煩惱の失する事を喜び、白の死する時は、白法善根の滅ずる事を悲みて、無上菩提を觀念する也」と申しければ、和尚隨喜の涙を拭ひて去りぬ。終には二人の僧、命終の時、聖衆の來迎に預りて、往生の相を顯すと云へり。又過去に一人の行者ありき。睡眠重くして常に眠る事あり。是の故に行業を退する事を悲みて、佛天に是れを祈誓す。或夜餘りに睡たかりければ、打ち解けて寢たりけるに、一人の天人來りて、如何に蛇のあるには寢たるぞと告げられければ、騷ぎ起きて見るに、蛇もなかりければ、幾所等蛇かと云ひければ、汝が身の中に四の蛇あり。是を地水火風と云ふ。何ぞ外に蛇を求むると云ひて失せぬ。行者其後四蛇を觀じて、自ら睡眠を除きて、行業を積めり。觀念の力ならずば、無上菩提は近付くべきにあらざる也。教主釋尊一夏九旬果てゝ、忉利天より天竺へ歸り給ひける時、多くの人我も我もと參り集る中に、華色比丘尼

べき人なし。犬は手を啐へて東西に走り、烏は眼を挑りて南北に飛び、終には蓬生が下の塵と朽ちて、唯殘る骨のみあり。誰の心有らん人か、是を愛して手を取り口を吸ひ懷き床を一つにせんや、此觀念をせん時、能く無始生死の罪障を消滅して、往生極樂の因を植ゆる者也。是の故に惠心の僧都は、此不淨觀成ぜずば、常に塚の間に臨みて、死人の骸を見よと敎へ給へる也。然のみならず、觀念に依るが故に、罪かへりて功德となり、惡變じて善となる事侍るめり。少々申し侍るべき也。仙預國王の人を殺し、東光梵士の婬を行じ、末利夫人の酒を勸めし、皆破戒なりと云へども、淨土の因となる也。仙預國王の人を殺し給ふは、佛法を信じ用ひざりし故に、五百の婆羅門を殺し給ふ也。東光梵士は美人なり、淺間敷き下女梵士を思ひかけて、逢はずば身を投げて死なんとせしを人の命を失はじが爲めに、下女を婬ぜし也。末利夫人の酒を勸むと云ふは、國王の瞋りて人を殺さんとせしかば、醉はしめて給び請けんが爲めに酒を勸し也。是の如く、惡業あれども觀念に依るが故に、此人皆果を得たりと云へり。是皆逆罪なりと云へども、皆淨土の因と成りて、无始の作れる罪は玉の如しと云ふは、是も「煩惱即菩提生死即涅

奉り、生けると云はヾ抓み殺し、死したると仰せあれば、生けて放たんとする事也。猿猴の取らんとすとする月の如しと云ふは、水に移りたる月を、五百の猿の取らんとする事也。是皆有りとも思ふべからず、無しとも云ふべからず。『般若心經』に不生不滅と說き玉ふは此心也。野干の菓を守るに似たり。幻師の財寶を貪るが如し。野干の菓を守るとは、狐菓の赤く熟みたるを見て、木の下に守り居て、落ちたるを見れば、肉にあらざる事を云ふなり。細かには『阿含經』に見えたり幻師の寶を貪るが如しとは、天竺に幻師と云ふ術道の者あり。人に我が寶を與へたれば、悦びて請け、家に取り歸りて見れば、石瓦になる事也。委くは(一)『仁王經』に出でたり。次に不淨を觀ずべしと申すは、我も人も、此身は始めより終りまで、内外不淨なる事を觀ずる也。譬へば繪がける瓶の内に、糞穢を入れたるが如しと云へり。細かには橫川の僧都の『往生要集』に註せり、縱ひ大海を傾けて洗ふとも、清く成る事あるべからず。西施南威が一たび笑を見し人、千金惜まざりき。されども野の間塚の邊に捨てられしかば、其姿皆かはれり。白き膚は青く腐り、赤き唇は黑く變じて、口より白き蟲うごめきたかり、不淨亂滿して臭き香遠く匂ひ、堪へ忍ぶ

(一)『仁王經』。具さに『仁王護國般若波羅密多經』と云ふ、二卷あり、鳩摩羅什譯とあり

色にのみ染めし心の悔しきに、空しととける法ぞうれしき。　小侍従
よしさらば散るもをしまじ櫻花、色香も共に空しとぞきく。　藤原公衡朝臣
天竺に國王、天下治まり人民樂しくして、一塵の凶なし、國王樂に傲りて、心の置所なきまゝに、禍と云ふ物は如何なる物やらん、禍と云ふ物求めて參らせよと云ふ宣旨を下されたりければ、宣旨重くて、大臣公卿より人民百姓に至るまで、禍を求むるに猪の樣なる物を一つ尋ね出して、是を禍と云ひければ、悅びをなして國王に奉る。國王愛して是を飼ひ給ふほどに、鐵の外に食ふ物なし。漸々年月積りて國中の鐵盡き失せぬ。禍物を欲しがりて荒れにけり。國王打殺すべしと云ふ宣旨を下されければ、射れども矢立つ事なし、切れども叶はず、爲かねて火を以て燒きたりければ、鐵のやうに成りて、禍の依る所ごとに燒け失せぬ。都を始めて、一國を殘す事なく滅す、況んや有待如幻の身ありと思ふ事なかれ。外道の手の中の雀の如し、猿猴の取らんとする月に似たり。蝸牛の角上の爭ひこそ思ふ事なく、石火の光の間の樂み、着を成す事なかれ。外道の手の中の雀の如しと云ふは、外道佛の智慧を心得んが爲に、雀を手に握りて、是は生けるか死したる物かと問ひ

ず、苦有る者は苦あり、樂有る者は樂あり。火は熱く水は冷し、何を以て諸法空也とは云ふべきぞ」と云ひければ、佛弟子答へて云はく「大焦熱地獄の衆生は、苦患隙なしと云へども、阿鼻大城の罪人の爲めには、(一)他化自在天を見るが如し。金輪聖王の果報は樂しけれども、(二)四王の眼の前には(三)等活地獄を見るが如し。人間の火は熱つけれども、地獄の火に比れば氷の如し。娑婆の氷は冷けれども、奈落の氷に比れば火の如し。樂も樂に非ず、苦をも苦と云べからず、火をも熱しと云ふべからず、水をも冷しと思ふべからずとこそ申し侍りければ、一切の經論に、何れか諸法空ならずと申して侍る、『法花經』の四の巻には、「諸法の空を座と爲す」と云ひ、五の巻には「一切法を觀ずれば空にして實相の如し」など侍るめり。早く此思ひをなして、諸法空寂なる事を觀じ玉ふべき也。心ある人、皆諸法空なる事を歌にさへ讀みて侍るめり。

金葉 色も香も空しと說ける法なれば、祈るしるしは有りける物を。　攝政前太政大臣

詞花 是の身をば空しき物と知りぬれば、罪うる事もあらじとぞ思ふ。　讀人不知

續詞花 我もなし人も空しと思ひなば、何か此の世のさはりなるべき。　赤染衞門

(一)他化自在天。六欲天の最高に在り。欲界の天主大魔王の居所なり、他の變化する樂事をかりて已が樂となすと云ふ。

(二)四王。四王天と云ひ、須彌山の半腹にありて地上を去ること四萬由旬、持國、增長、廣目、多聞の四天各々其の主たり。

(三)等活地獄。八大地獄の第一番目なり。

る夢に、怖氣なる魔王來りて、如何に汝が形我にくれよと云ひければ、夢心地に恐ろしさに承はりぬと云ひて、夢さめて見れば、夢に見つる魔王の形に成りぬ。見る人怖ぢ恐れければ、人に交る事なくて、一の伽藍に行きて住んで、諸法の空なる事を悟る我見目容すら遂ひに身に付く事なし。況んや自餘の諸法に於いて有と思ふ事なかれ。我朝には讃岐の國に依女と云ふ者あり。重病を受けて命終りぬ。父母悲みのあまりに祭を爲たりければ、鬼ども祭物を納受してけり。鬼神の習ひ祭物を受用しては、空しくて止む事なきが故に、同名同性の者に取り替へてけり。故の召人の依女を返し遣すに、物騒しく葬送を疾く爲たりければ、犬烏食ひ散らして跡形なかりければ、今の召人が體に、故の召人の依女が魂を入れてけり。則ち蘇生して物を云ふに、形は我娘なりと云へども、我をも見知らず。物云へるも替れり。故の依女が父母、此事を傳へ聞きて行きて見れば、形は我女にあらずと云へども、我等を見知りて泣き喜び、物云ふ聲違ふ事なし。此故に四人の父母を持ちたり。諸法の空寂なる事、今生すら此の如し。況んや流轉生死の空寂、推して知り給ふべき也。外道佛弟子に逢ひて、諸法を空なりと宣へども、「諸法空に非

にして、色は黑雲の如し、故に木樵水汲せ、是の如き役に使ふ。下女或日薪を拾ひに行く程に、天竺の習ひは死人を杣に擧ぐとて、木の上に置きたりけるが、いまだ髮形あざやかにして、池のありけるに移りたる所へ行きて見るに、日比は身に力なくて、一つの鏡をだに持たねば、戒身の程をしらず。今日水に移る影を見るに、長者の寵愛する女どもに劣らざりけりと思ひて、薪を拾ふ。さて長者の家に歸り行きて、長者の妻妾の中に交りぬ。長者制め忌々しがりて追ひ下しければ、下女陳じて云はく、我髮形を見るに、長者の妻子に差別なし。何ぞ長者木樵り水汲ませ、方見氣には使ひ給ふと云ひければ、汝が顏鬼王の如し、何を以て好しとは思ふぞと問ひければ、我今日薪拾ひに行きつる道に池あり、其池に我影うつりつと云ひければ、長者あやしみをなして、下女を具して池のほとりに行きて見るに、死人の有りつるを見て、長者心得て、死人を取り藏して、下女を水にうつして見するに、形鬼王の如し。下如好しと思ひつる影を失ひて、諸法の空なる事を知りぬ。又唐に僧あり、形ち人に勝れ愛敬身にあまれり。僧坊に打解けて寢たりけ

（一）多門。毘沙門天のこと、先出。
（二）持國。梵に提頭賴吒と云ふ、東方天の主にして、東方を守護す、須彌の半、第四層の東黃金埵に住す。
（三）増長。梵に毘留勒叉と云ふ、南方の天主にして南洲を守護し、須彌山の半、第四層の南瑠璃埵に居し能く自他の善根を增長せしむ。
（四）廣目。梵に毘留博叉と云ふ、西方須彌山中腹の西周羅城に居り、龍及び富單那を支配して西州の人を守る。
（五）『倶舍』。具さに『阿毘達磨倶舍論』と云ひ、三十卷あり、世親菩薩の作、唐玄奘の譯。
（六）『正法念經』。『正法念處經』と云ひ、七十卷あり。

是れを聞こしめされて、諸天の軍を集めて、陣を六に張りて、龍神夜叉に仰せて、羅護が軍を待ち給ふ。一陣 海睦善住龍王、二陣 須彌麓堅手夜叉、三陣 迷盧山持髮夜叉、四陣 初層級恒憍夜叉、五陣四天王宮三光天子、六陣 忉利天喜見城也羅護十六萬六十由旬の大身を現じて、無量無數の兵を引率して、旗を靡かし楯を築き、螺を吹き鼓を鳴らして、大海の水を忉利天に蹴上げて、大磐石を上せて攻め來るに、天帝の軍亂れ傾きて、六陣の城既に五陣落ちたり、(二)多門、(三)持國は圓生樹の下に徊み、(三)増長、(四)廣目は雜林園に交りて、程々喜見城危く侍りけるにも、善法堂にして香を薫き花を散して、般若の空寂を講讃し給ひければ、天より輪降りて修羅を切り、空より箭雨りて羅護を貫くとこそ申したためれ。況んや滅罪生善の爲めに、空寂の觀念をせん人、豈六生極樂の因とならざらんや。此事細かには、(五)『倶舍』十一の卷に註し、委くは(六)『正法念經』に說けり、五陣破るゝ時、王光天子の宮を、羅護阿修羅王撮むと云ふ說あり。手を負ふと云ふ說もあり。日月蝕の一說なり。羅計の二星は色黑き星也、日月に行きちがふ時のある也。故に日月彼の宮に遷りて黑くなる也。曆道宿曜道には記せり。定說を尋ぬべき也。天竺に長者あ

ら、十度まで是を奏するに大王大に喜びて宣はく、王子誕生の由一度聞くに、悦んで身に餘れり。二度聞くに亦復た此の如し。我則ち勅答をば數多回す。汝聞くまじければ、勅答無しとて、十度まで我心を悦ばしむる、故に百萬兩の金を與ふべしとて勅祿に預る。誰か箇様に空寂を觀ずる度に、十方三世の諸佛喜び給ひて、無始生死の罪障悉く消え失するもの也。細かには龍樹の『智論』に見えたり。呪摩質多羅阿修羅王の女舍揥夫人は、容顏美麗にして、天上に十樂しぬべき人なれば、父の阿修羅是れを寵ぎ冊きて、羅護阿修羅王を聟とすべき由を云ひやる。羅護美人なる由を聞きて、喜び樂みて、修羅宮を引き繕ひて迎へんとする處に、天帝釋此の事を傳へ聞きて志ありければ、遂ひに天の力を以て、舍揥を奪ひ取る事を得給へり。俄に毘首羯磨天を請じて、一萬間の家を作りて、千二百の門を開きて、一々の門に各五百の夜叉を居ゑて、舍揥夫人を將冊きて、片時も離れ給ふ事なし、羅護此の事を聞き大に怒りて云はく、天帝上﨟にておはすとも、人の妻取り給ふ事然るべからず。舍揥いまだ同宿せずといへども、父の阿修羅約儀終れり。生涯の耻此事にありと惱りて、四海の軍兵を調へて、喜見城を攻めんとす。帝釋

(二)般若。梵語にして智慧と譯す。

子を養ふ財寶を給はりけると云へども、幾くかあらん、一生涯ある許の財寶を給べと云ひければ、大王心付きなしとは思ひながら、宿願を破らじと隨ひて與ふ。婆羅門又歸り來り、財寶を返して云はく、我一生涯を過ぎつべき財寶を給はると云へども、無常來りなば身に添ふべき物に非ずとて、偈を結びて云はく、

珍寶を積集して嵩く蓄へて天に至ると雖も、是の如く世間に滿つれども道達を見ること能はず。

此文の義は、寶を集めて山の高さに積むとも、道達を知る事あたはじと也。是れ空寂を觀ずる心也。細かには『譬喩經』に說けり。無緣の乞者、猶ほ空を觀じて財寶を返す。況や心あらん人、空寂を觀ずべし。(二)般若畢竟空の目出たき事、喩を以て申したる事侍り。少々申し侍るべし。天竺に國あり、政靜にして民馬を花山に放つ、但し一つの遺根あり、國王齡かたぶき給ふまで、儲の公を持ち給はず、大臣公卿を始めて、人民百姓に至るまで、是れを歎きける程に、第一の夫人孕み給ひぬ。一天下是れを悅びて、皇子誕生の由を、急ぎ父の大王に奏するに勅答なし。二度奏するに勅答なし、三度奏するに勅答なし。大臣等異と思ひなが

り○佛弟子「其男の死ぬるをば見ぬか、家は何國に有るぞ、親などにも告げよかし」と云ひければ「此死ぬる男は我子也、家はあの見ゆる家なり」と云ひければ、佛弟子彌よあさみて、「父こそあらめ母あるらん」とて告げたりければ、母も苧と云ふ物うみて騒げる氣色も無かりければ、佛弟子淺間敷くて由を問ふに、一歳佛の法を說き給ひしに、此身は空しき物ぞと宣ひしかば、有りとてもありと思ふべからず、無きとても騒ぎ惑ふべからすとこそ申し侍りけれ。あやしの農夫猶空寂を知れり況んや心あらん人、諸法の空なる事を知り給ふべき也。されば龍樹の(一)智論に、「釣を呑める魚は池の中に久しからす。空寂を觀ずる人は、生死の中に久しからず」と申したるぞかし。(二)婆羅奈國に一人の王おはしき。名を多味寫と申しき。志(三)檀婆羅密にありて、數年の間一國の財寶を貯へて、山と等しく積みて、無緣の貧人に與ふ。一人の婆羅門他國より來りて、財寶を取る事餘の貧人の如し。此婆羅門七歩を行きて、歸り來りて大王に申して云はく、我財寶を給はると云へども、いくばくならず。妻子を養ひ、家地を設くる許り給へと云ひければ、大王乞ひに隨ひて施を婆羅門に與ふ。又七歩行きて、歸り來りて、財寶を返して云はく、我妻

(一)『智論』○『大智度論』のこと、先出。
(二)婆羅奈國中印度に在り。江繞城と譯す鹿野苑は此の國に在り。
(三)檀婆羅密。布施の行。

（一）色即是空。『般若心經』に「色即是空空即是色」とあり。

（二）『婆娑論』具さに『阿毘達磨大毘婆娑論』と云ふ。二百卷あり、五百の大阿羅漢の所造にして玄奘の所譯はかゝる。

女の爲めには、何の行にも增りてこそ侍るめれ。次に空觀と申すは、諸法は皆空也と觀じて、著を成す事をせざるなり。（一）色即是空の思ひを成して、諸法を空と知り、無大無小の觀を致して一切有と思はぬ也。

「身を觀ずれば、岸の額に根を離れたる草。命を論ずれば江の邊りに繫がざる船たり」

是の故に生ある者は必ず滅す、釋尊未だ栴檀烟を免れたまはず、樂しみ盡き悲しみ來り、天人尙五衰の日に値へり。是の故に萬法は皆是れ空なりと觀ずれば、人も空、我も空、是れも空、彼れも空、罪もなし功德もなし、淨土もなし地獄もなし。煩惱の叢の茂き中に、惑業の虎狼は住むもの也、空寂の火をつけつれば、惡業の虎狼住む事なし。此觀至りぬれば、無始生死の罪障皆消え失せて、終ひに菩提の岸に至る也。されば、（二）『婆娑論』の中には、「空を觀じける聖人を見れば、衣もなく袈裟もなく、敷たる莚もなく疊もなかりけり。」とこそ申したためれ。昔佛弟子の道を行くに、農夫二人田を作る。一人は若し、一人は老たり。若き農夫俄に倒れ死しぬ。佛弟子淺猿しと見る程に、此の老たる農夫見だにもやらで、猶田を作り立て

を噉はんするよと思ひければ、互に噉はれじとて、二人共に取り組みて終夜闘諍ける程に、夜明けて見れば我兄弟也。惑の衆生も此の如し。生死の長夜に迷ひぬれば、此の如く無明鬼なめりと思へども、菩提の曉に至りぬれば、眞如實相一つ也と知るなり。氷冽しく結べども、春來りぬれば水と成りぬ。波高しと云へども、風止みぬれば海と成りぬ。水と云ひ氷と云ひ、海と云ひ浪と云ふ、名は各別なりと云へども、誠は一つなるが如し。喩へば舞人の地久萬歳樂の裝束に隨ひて、名は替れりと云へども、其身は一つ成るが如し。縱へば獵師の鹿木を取りて、煎り燒くに隨ひて、名は替れども、實には同じ肉なるが如し。惡業煩惱の眼の前には、佛と衆生各別なりと見ゆれども、眞如實相を觀ずる人の爲には、無差別と知る也。又此の眞如實相を觀ずべき有樣、惠心僧都の『眞如觀』と申す文に、細かに教へられてたるめり、其を見給ふべき也。少々承りしは、我物を食ん時は、三十七尊を供養し奉ると觀ずべき也。人に物を食せん時は、上十方三世の諸佛を供養し奉り、下地獄餓鬼畜生に施せる思ひを成すべし。從者眷屬に物を食はせ、馬牛鳥獸を飼はん時も、此の思ひを成すべしと侍るなれば、在家の人や、公私を營ん男

（一）都率僧都。名は覺超、原信の嗣なり、比叡山兜率院に居り長元年中に寂す。

右大臣殿兼實

大空にあかぬ心の滿ちぬれば、我身の内の月かとぞ見る。

（一）都率の僧都は、此の心月輪の觀念至りて、胸の冷ゆるとこそ宣ひけれ、能く心得て心月輪を顯はし給ふべき也。然りと雖も、此の觀念は少々の智者だにも心得がたく侍る也。譬を取りて佛の教へ給へる事あり、氷あつく結べとも、水と成りぬれば替る事なし。海の波高く立てども、しづまりぬれば海となり。眞如實相も此の如く、一つなれども、迷の爲めには無明法性各別なり。然りと雖も、此の觀念は、少々の智者だにも、心得がたく侍るなり。佛と衆生と一つ也と觀ずる事。一の證を申し侍るべし。喩へば人の親、遠國に有りて、大事の病ひを受けて、既に失せなんとする由を、二人の子の別々に在る許へ告げにやりたるに、一人の子は居たる所近し、一人の子の居所遠し。近き所の子は、聞くまゝに行きける程に、夜深く余りに道の怖しさに、野中に塚穴のありけるに入りて、夜明けて行かんと思ひて入りぬ。かゝる程に、遠き子は後より行きけるが、其も殊に怖しかりければ、此の塚穴に入りて夜明けて行かんと思ひて入りけるを、初め入りたる子は、鬼の我を噉はんとて來るかと思ひけり。今入る子は、又塚の中に鬼の有りて、我

三藏佛前にして、此の觀念を成し給ふ時、三十七尊胸の間に現れて、十方に光を放ち給ふ。弟子等此の事を見て、長く疑ひを斷ち。隨喜の泪を流しけるとなん。樹に春花咲き、秋果を結ぶ。木を割りて見れば、中には花の姿もなし、菓の形もなし。然りと雖も、季節至りぬれば、花咲き菓を結ぶ。人の身の内を見れば、妙法の心蓮臺もなし、三十七尊も見え給はず。然りと雖も、眞如實相を觀ずる人の身の中には、必ず妙法蓮臺に住して哀み給ふもの也。喩へば大海の底なる石に、火の性あると云へども、無量百千歳を經るに、火の性を顯はす事なし。然りと雖も、人石を取り上げて、火燧をあつる時、火を出さずと云ふ事なし。三十七尊も亦復た此の如し。觀念せざる人の爲には、大海の底なる石の如し。觀念する人の爲めには、火打をあつるが如し。早々此の念をなして、心月輪をあらはし給ふべし。心ある人多く歌にさへ讀みて侍るめり。

月の輪に心を懸けし夕べより、萬の事を夢に見る哉。　僧都覺超

夜と共に心の内に住む月を、有りと知るこそ晴るゝ成りけれ。　證成法師

今ぞ知る心の内に住む月を、鷲のみ山のおなじ影とは。　俊惠法師

佛性を具せぬと云ふはある。一切の有情も非情も、皆中道佛性を具したりと觀ずる也。此故に我等が胸の內に、(一)本覺の法身、妙法の蓮臺に座して(二)三十七尊片時も立ち離れ給ふ事なし。然りと雖も、本有常住の月の光を藏して、生死長夜の闇深く、(三)四智圓明の鏡塵積りて三身萬德の影浮ぶ事なき也。されば『觀無量壽經』に「三十二相八十隨形の好なり、是の心是れ佛になる、是の心是れ佛也」と云ふ。『大集經』には、「菩薩を離れて一法ある事なし、是の故に心性の佛を觀念すべし」とは敎へ給へる也。早く我も佛、人も佛なりと觀じて、眞如實相ひとつなりと知り給ふべき也。昔(四)不空三藏と申しける聖の、五天竺に行ありき給ひけるに、僧多羅と申しける法師の、無智文妄にして、更に悟る處なかりけるが、口には三十七尊心城に住すると唱へ、心には眞如實相の思を成す、此の外全く他の行なし。人輕く思へる事塵の如し。僧多羅命終の時、天衆の來迎に預りて(五)都卒の內院に生れぬ。彼の三藏此の語を見て、常に口には三十七尊を唱へ、心には眞如實相を觀念す。三藏の弟子等、此の事を疑ひて云く、かばかり不淨なる身の中に、三十七尊、妙法の心蓮臺に住してましまさん事、不審なきに非ずと云ひければ、

(一)本覺の法身。本來覺性せる法身の意、即ち佛性のこと。

(二)三十七尊。金剛界羯磨會の諸尊即ち五佛、四波羅密、十六大菩薩、八供菩薩、四規菩薩のこと。

(三)四智。大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。

(四)不空三藏。眞言宗の第二祖、金剛智、龍智に法をうけ、支那に來り太歷九年寂す。

(五)都率の內院。都率天は須彌山の頂上十二萬由旬の處に在り、內外二院あり、內院は四十九院ありて彌勒菩薩此にありて法を說く。

（一）中道。偏邪を離れたる中正の道の意、眞實第一義諦のこと。
（二）佛性。佛になるべき性質、因位に於いて佛果に至るべき因種を有するを云ふ。
（三）跋陀婆羅。賢護と譯す、水の無性なるを悟りて菩薩の道を成ぜしと云ふ。

觀の大意とす。或は身の中の眞如實相を觀じ、或は諸法の空寂なる事を觀じ、或は此身の不淨なる事を觀ずる、皆往生極樂の因とならずと云ふ事なし。初に眞如實相を觀ずると云ふは、心佛及衆生の思ひをなして、是三無差別と觀ずる也。

「法身は諸の衆生に徧滿すれども、客塵煩惱ありて覆藏せり。
我が身に如來の在すことを知らず、生死に流轉して出づる期なし。」（心地觀經）

「毘盧遮那淸淨の性は、三界五趣の體皆同じ。
妄念に由るが故に生死に沈む、實智に由るが故に菩提を證す。」（華嚴經）

「一切衆生に悉く佛性あり。如來は常住にして變易あることなし。」（涅槃經）

爰を以て、心有る人、「皆一色一香（一）中道に非ざることなし」と觀じて、煩惱と菩提と一つなりと知る也。不輕菩薩の、「我れ深く汝等を敬ひて敢へて輕慢せず。所以はいかんとなれば、汝等皆菩薩の道を行じ當さに作佛するを得るがゆへなり。」と云ふ二十四字を唱へて拜み給ひし、一切衆生に（二）佛性ありと觀ずる故也。是れをうちし人、千劫阿鼻地獄に落つと云へども、終に（三）跋陀婆羅等の菩薩となりにき。谷の鶯の友を倡ふ、林に鳴き、尾上の鹿の叫ぶ、河の鴛鴦の羽をしける、何れか

○第八に、觀念を凝して佛道を成ずべしと申すは、諸法は觀念に依るが故に、先師皆な觀念を用ひ給ひて、往生淨刹の素懷を遂げ給へり。斗を帷幄の內に廻して、勝事を萬里の外に決すと云ふが如し。賢き將軍に成りぬれば、帷幄の內に臥しながら、萬里の外の軍に勝つべき謀をする也。賢き聖に成りぬれば、十萬億の國を過ぎて、極樂淨土の(一)依報を觀念して、往生極樂の望みを成就する也。藥草藥樹は耆婆遍鵲が眼の前、上品淨刹は觀念の掌の內と云ふは是れ也。日西に入らば、彌陀の來迎して、淨土に歸り給ふ光を思へ。水淸く澄めば、紺瑠璃の池の映徹せるを觀ぜよ。道珍禪師は、池を觀じて往生をとげ。(二)海雲比丘は、海に向ひて淨土の因を植ゑき。此故に或時は、彌陀如來八功德池の中に、寶蓮臺に座して、光明を放ち給ふを觀じ。或時は觀音勢至の二菩薩と共に、大梵和雅の御聲を以て、法を說き給ふを觀じ。或は六十萬億那由他恒河沙由旬の大身を現じ給ひて、眉間の白毫の五須彌の樣なるを觀じ。或は(三)上品蓮臺の曉の樂の聲を觀じ、或は鳧鴈鴛鴦の(四)五根(五)五力の法文を囀るを觀ずる時、八十億劫の生死の罪障を除きて、遂に安養淨刹に往生する也。細かには(六)『觀無量壽經』に說けり。是れを(七)十六想

(一)依報。山河、大地、衣服、飯食等の果報。

(二)海雲比丘。『華嚴經』に說く、五十五善知識の中第二の善知識。

(三)上品蓮臺。九品の中第一の上品往生人の乘すべき蓮臺。

(四)五根。信根、精進根、念根、定根慧根。

(五)五力。其の名五根に同じ、五根の惡を排し斥くるを五力と云ふ。

(六)『觀無量壽經』一卷あり、劉宋畺良耶舍の譯。佛韋提希夫人のために三福十六觀の定散二善を說く。

(七)十六想觀。日想觀、水想觀、地想觀乃至下輩觀の十六種の觀法。

て云く、「貧窮不幸にして實乏しかりし故、佛をも造り奉らず、堂をも立てざりしなり」と云へば、獄卒怒れる眼を開き、烈しき聲を擧げて云はく、「徒らに野邊に散りし花一枝、佛に奉らん、貧しきに依るべからず、空しき谷に流るゝ水一結僧に供養せん、賓なきに依るべからず」とて、呵嘖するといへり。早く一花一香なりと云ふとも、三寶に供養し給ふべし。

飛鳥寺より東大寺へ花を施する歌、

東の山べをさしてに入らせる、盧遮那佛に花たてまつる。

、此の歌を詠める歌にて

後撰 手に取らばたぶさにけがる立てながら、三世の佛に花奉る。　遍昭僧正

大原行蓮上人の許へ、小袖を遣すとて、

金葉 愍まんと思ふ心は廣けれど、孚む袖のせばくもあるかな。　天台座主僧正

極樂の十樂の中に、遊心供佛樂の心を詠める、

朝夕に花をいとなむ人のみな、佛の身には成るになりけり。　勝命法師

夜と共に思ふさまにぞ手向つる、花の匂はぬ時しなければ。　藤原親盛

如し。又(一)『大丈夫論』と申す文には、施する功德大きなる事大地の如し。食物を人に與ふるは五の德あり。一つには命を與ふる也、物食はざれば命無きが故に。二つには色を與ふる也、物食はざれば色なきが故に。三には力を與ふる也、物食はざれば力なきが故に。四には安易なる事を與ふる也、物食はざればやすらかならざる故に。五つには詞を與ふる也、物食はざれば物を云はぬが故に。細には(二)『福報經』にぞ申しためる。又『大莊嚴論』には、布施は少なれども、無量の福を成す。好堅樹と云ふ木の實は、芥子よりも小さけれども、一夜に百丈生ひ上りて、其陰に五百輛の車を藏せり。施の功德も小さけれども、亦復是の如し。爰を以て、海日大王は無遮の大會を行ひて、一切衆生に施し、我朝の御門は、春の蕨失せず秋の菓熟せざる先きに、賑給施米とて、貧者に行ひ給ふぞかし。光明王の后の、世の末のすゝめの爲めに施したりし田こそは、今の藥田とは申しぬれ。速かに程々に隨ひて、佛法僧に施して、佛道を成じ給ふべき也。此等を施の大意とは申し侍る也。されば獄卒地獄に落つる衆生に耻ぢしめて云く、「など適人界に生を受けながら、功德をば修せずして、二度奈落の故郷へは歸りたるぞ」と云へば、罪人答へ

(一)『大丈夫論』。二卷あり、提婆菩薩の作、北涼道泰の譯。

(二)『福報經』。具さには『食施獲五福報經』と云ひ、又『福德經』と云ふ。一卷あり、譯者を失す。

(一)阿閦佛。無怒無瞋恚等と譯す、過去に大日如來の所に於ひて發願し修行の後、東方に成佛して、その土を善快と云ふ、現に說法し給へり。

(二)阿那律。無貪離障等を譯す、釋尊十大弟子の一佛の從弟にて天眼第一と云ふ。

佛弟子たる、溫室の功德によるが故也。此故に祈成長者は、溫室を以て第一の功德にせし也。天竺震旦までは申さじや。光明皇后の、湯を沸して十方の衆生に浴し給ひて、一日に三人が垢を搯り給ひけるに、いぶせく怖し氣なる乞兒の、我垢搯りて給へと申しければ、物憂き事には思食すとも、行を破らじとて、竊に垢を搯りたまふが、我汝が垢搯りつと人に語るなと宣ひければ、此乞兒光を放ちて、汝も亦(一)阿閦佛の垢搯りぬと人に語るなと云ひて、かいけすやうに失せにけりと云へり。(二)阿那律光明を放つ事を、佛說きて云く、昔堂の中の佛具盜まんと思ひて、佛の御前の火をかゝげたりし故に、今身より光を出す。九十一劫を經て、佛に成るべしと言ひける。何に況んや心より起りて、燈明を施さん功德をや。南京の藥師寺の萬燈會は、惠達と云ふ者の初めたりし也。今に絕ゆる事なし。彼の會の日、今に惠達が墓に必ず光明ありと申す也。まして冥途の中有を照す事は何計り侍らん。佛布施の功德を說きて云はく、十萬國土を微塵に成して、其國土の草木瓦礫を知り、三千世界の水を大海に入れて、其の河の水とは知れども、施の功德は容易くかぞへ知るべからずとぞ宣ひける。一人に施す功德の大なる事、大山の

(一)末利夫人。祇陀太子及び勝鬘夫人の母なり。

ほとりの堂に、佛に箔を押さんとて、金を勸むる聖あり。繪師思ひけるは、此金を持ち歸りては、只今生一旦の寶にてこそあらんずれ、佛に參らせて生々世々の寶と成さんと思ひて、此金を皆佛に參らせてけり。家に歸りければ、妻子悅びて、汝歸りて返さんずればとて、多く人の物を借りたる也、何をか持ちて歸りけるぞと問へば、有りのまゝに語りけるを、妻聞きて大に怒りを成して、我借りし物を何として返辨すべき、定めて借主共の爲めに、まどはかされなんとす、一人まどふべきにあらずとて、檢非違使に告げて公に申しければ、事の有樣を召し問はれけるに、有りのまゝに申しければ、心大きなる者なりとて、罪はせられずして、頓がて綸旨を下し、一國の守護になされにけり。(一)末利夫人は須達が園を守る下女なり。當る所の日食を、必ず上の分を取りて、佛に供養し奉りし功德の故に、波斯匿王の后に成りき。金剛女は長者の使ひし奴也。麻布一端を得たりしを、自ら着用せずして、袈裟に縫ひて僧に施したりし功德の故に、現身に后といははれたりき。又佛に灯明を施し、僧に湯を沸して浴みする、是の如きの施も多く侍る。されば佛の御膚金色なる事は、過去にて湯を沸して人に施し給ひし故也。阿難の今

じかりければ、今生にも財寶出來べしと答へ給ひければ、長者大に喜びて、先づ庫倉を作して檀施を行ずるに、全く寳入り替らざりければ、長者大に怒りて、目連を恐みければ、目連神通を以て、長者を具して六欲天に上りて見するに、七寶の宮殿に玉の床をはらひて、天女人を待つ氣色也、長者如何なる人を待ち給ふぞと問ふに、天女微妙の聲を出して、南閻浮提に目連尊者の弟、檀施を行ずるゆへに、來世に此の所に生れて、我等と樂むべき事を兼ねて顯す也と云ひければ、長者隨喜の泪を流して、其後は寳を惜む事なく、檀施を行ふとこそ申して侍るめれ。檀彌離長者が、國王に過ぎぬる樂みの有りし。昔、四人の聖人ありき。三人は閑に山林に籠り行ひて、今一人は里に出でゝ乞食頭陀して、三人の聖人に施しき。三人は果を得てき。一人は今の檀彌離也。施の功德に依るが故に、今生には國王に過ぎたる樂みありき。未來佛に成るべしと云へり。天竺に繪師ありけるが、迦毘羅城より請じ、用を得て行きぬ。今日々々と思ふ程に、空しく十二年を送りけり。繪師が妻子立居に待ちかねて、男の歸るを賴みに、人の物を多く借りてつかひ、世を送り年月を暮しけるに、十二年と云ふに、金三十兩を得て歸りけるが、道の

經』にぞ侍る。佛天竺におはしませし時、無勝童子、德勝童子とて、兄弟二人の童子ありけり。佛にせめて物を參らせたさに、砂を手に入れて供養したりけるに、今阿育大王と生れて、未來成佛の報ひを得たりき。阿闍世王佛を迎へ參らせて、法とかせ奉りて、夜に入りて歸らせ給ひけるに、阿闍世王宮より祇薗精舍まで、十萬石の油を集めて、火を燈し給ひけるに、貧女の纔に錢二文持ちたりしを、一燈の油に代へてともして、佛納受し給はゞ、此火消ゆべからずと誓ひたりければ、目連尊者、怪みてあふぎ消し給ひけれども、消えざりければ、佛志の深き故に、此火消ゆる事なし。此の功德を以て、三十一劫をへて、後佛に成りて、須彌燈光如來と云ふべしとぞ告げ給ひける。是を貧女が一燈とは申す也。目連尊者の弟ありき。福貴にして寶に乏しからず。三千の庫倉を成して、寶を滿つるに處なし。然りと雖も、一紙半錢の施なくして、彌寶を尋ね求む。目連此事を哀み悲みて、弟を敎へこしらへて云はく、汝(一)檀施を行ずべし。弟の長者答へて云く、檀施を行じ侍らば、何とかあらんずる、寶又出で來なんやと云ひければ、目連思さく、現世には寶出來べからず、後世の資糧にこそならんずれと云へば、檀施を行ずま

(一)檀施。布施のこと。

の申す旨に任せて、太子を檀特山へ遣り奉り給ふ。勅勘に恐れて、御供に參る人もなかりければ、太子の女御ばかりぞ、斷金の契り深くして、九つになり給ふ王子、六つに成り給ふ女宮とを前に立て、檀特山へ入り給ひける。太子檀特山にして、恭敬禮拜して行ひ給ひければ、女御は谷の水を結び、澤の若菜を摘みて養ひ奉り給ふ。さる程に、倶留國の叟來りて云はく、君施に志しおはする由を承る。我老衰へて仕ふる者なし、願くは二人の御子を給はりて仕ふべしと申しければ、后他行の跡なりければ、還り來りて如何に嘆かんずらんとは思ひ給ひけれ共、是れを惜む物ならば、我が願破れぬべしと思ひ給ひて、則ち二人の御子を叟に給ひてけり。習はぬ御心に、怖ろしげなる叟の具して行きければ、ゆかじとて蹈ひ給ひけるを、昨日までこそ太子の御子にてはありしが、今日は我が從者なりと云ひて、二人の御子を縛りて、前に追ひ立て行きければ、聲を上げて叫き給ひけん、是を見聞き給ふに、流石に親子の恩愛なれば、哀に思召しけん。さて母の后、菜を摘み菓を拾ひて、還り來り聞き給ふに、悲み給ふ事云ふばかりなし。さて又後に后をも人の乞ひければ、とらせ給ひてけるとぞ侍るめる、細には『順隨那經』『六度集

寶物集 巻第六

○第七に、諸の施を行じて佛に成るべしと申すは、諸佛は皆施を行じて正覺を成り給へり。是れを檀波羅密と申す也。されば龍樹菩薩は、施を行ずる人は、月の初めて出るが如し。諸人に敬はる、怨返りて親みと成るとは宣ひしぞかし。國、城、妻子を施す事、草木石土を投げ捨るよりもやすく侍る」。況んや自餘の寶に於てをや。『法華經』に「頭目髓腦身肉手足身命を惜まず」と侍るは是れ也。爰を以て、尸毘王は鳩に替りて鷹の爲に自ら肉を施し、薩埵王子は飢ゑたる虎に我が身を與へ。雪山童子は半偈の爲めに命を替へ、(一)身子尊者は乞眼波羅門に眼をとらせし也。是れのみならず、施に志ある人少々註し申し侍るべし。攝波羅國に(或説三葉波羅)王子おはしき、名をば須陀那太子と申しき。施に志ありて、寶を惜む事なし。一國の珍寶乞ふ人ごとに與ふ。四千人の大臣等、此事をかたふきて云はく、王宮の寶盡きなんとす。國の寶失せなば必ず國衰ふべし。異國の爲めに責められん時、如何あるべき。願くば太子を檀特山へ、籠め奉るべしと奏しければ、大王大臣等

(一)身子。舍利弗のこと。

年が中の罪障を懺悔せんが爲めに、歳末に必ず(一)三千佛の名號を聞き給ひてけり是を佛名と名付けて、今に絶えず侍る、佛名の夜、昔今の人歌讀みてぞ侍る。

拾遺 年の内に作れる罪はかきくらし、降る白雪と共に消えなん。　紀　貫　之

朗詠 新玉の年も暮るれば作りけん、罪も殘らず消えやしぬらん。　平　兼　盛

拾遺 雪深き山路へ何と歸るらん、春待つ花の影に留らで。　大中臣能宣

過ぎにしも後も知らるゝ身の憂さに、三世の佛の耻しき哉。　源　仲　綱

年暮れて頭の雪は積りつゝ、三世の佛の御名をこそきけ。　中　將　隆　房

寶物集 卷第五

(一)三千佛。過去、現在、未來の三世に各々一千佛づゝ在しまして三千佛あり、過去莊嚴劫千佛名經、現在賢劫千佛名經、未來星宿劫千佛名經即ち三千佛名經に其の名號を詳說せり。

たらずば有るべからず、父父たらずと云へども、子以て子たらずば有るべからず」とは申したる也。此故に子路は「樹靜ならんとすれども風やまず、子養はんとすれ共親在さず。」と悲み。聖德太子は、用明天皇の怒れる杖の下に隨ひて、天に上り地に入るとも、父の命をば違ふべからずとは宣ふ也。是等の例を思ひて。父母に孝養し給ふべき也。是を孝養父母とは申し侍る也。極樂に往生したる衆生に向ひて、鳬鴈鴛鴦が申すなるは、父母孝養往生也や。師長奉仕往生やと問ひ侍るなれば、父母孝養する者、往生すべしと云ふ事は、是にても知られ侍り。是等を刹利居士のの懺悔大意とす。懺悔は實に目出度きことにて侍るなり。少々共樣を申し侍らん。昔阿育大王の、八萬四千の后を殺して、八萬四千の塔を立てゝ、未來成佛に定まる。我朝にも源賴義と云ひし武者は、陸奥守と侍りし時、安部貞任、宗任等が、厨屋河鳥海なんど云ふ城をかまへて、十二年の間合戰せしに、數萬人幷に馬を殺したりしか共、後に懺悔して啼き悲みける涙、大なる手洗に一盃有りけると聞きしに合せて、法師に成りて往生したりなんど申しぬれば、まして左程の罪を造らざらん人、懺悔せんになどか佛に成らざらんや。されば仁明天皇は、一

（一）中品往生。九品の中上三品に次く中位の三品の往生のこと、上生、中生、下生の別あり。

（二）『報恩經』。具さに『大方便佛報恩經』と云ひ、七卷あり、譯者を失す。

子の如くなんど宣へるも、親の子を思ふ志には譬へて仰せられけるぞかし。人界に生を受くる本意は、父母孝養すべきばかり也。生身の佛を供養し奉らんと思はゞ、父母孝養すべしといへる事も侍り。孝養の人は必ず（一）中品往生すと說き給へり。然りと雖も、天人は樂に著して孝養の志なく、三途は苦にせめられて父母の恩德を知らず。唯人身を受けたるたび、父母に孝養して第一の懺悔と成し給ふべき也人界に生を受くる事は、よく有りがたき事にて侍る。佛喩を取りて仰せられたるは大海の底に針を一つ置きて、梵天より糸を下して貫かんが如しと侍るめれば、多生曠劫に叶ひがたくぞ聞ゆる。されば心有る人の誰か父母孝養せぬは侍る。佛は淨飯王宮を出で給ひし時は、心つよく「流轉三界の中、恩愛を斷つこと能はず」と宣ひしか共、正覺成り給ひて後は、先づ忉利天に上りて（二）『報恩經』を說き給ひき。唐に舜と申す君は、瞽叟と申せし父の盲目たりしが、象と云ふ後妻の腹の子に敎へられて、殺さんとするとは知りながら、親の命を違へずして、手づから井を掘り、屋の上を葺なんどはせしぞかし。位に即き給ひしかば、瞽叟を迎へて綾綺殿にすゑ給ひき。爰を以て『孝經』と申す文には「君たらずと云へども臣以て臣

さんとする時、大地俄に割けて火丸落ち入りけるを、母悲みて髻を取りて引き上ぐるに、髻は拔けて主は地下に落ち入りぬ。誠に我が命の失はん事をば恐れずして敵となる子を引き上げしはわりなふこそ覺ゆれ。生を受けたる本意は、父母孝養の志しばかり也。況んや文時の三位が、輔昭が風月の才は父に似て淺しと云へども文時が旦暮の涙は、子を思ふに彌深しと書くは、事も愚かぞ侍るべき。昔今の人子を悲める事も歌にて申すべし。

人の親の心は闇にあらね共、子を思ふ道に迷ひぬる哉。　中納言兼輔

後拾遺　五月闇子戀の森の郭公、人知れずのみ鳴きわたる哉。　藤原兼房

月詣集　孩き我子をなゝの里に置きて、今夜の月に面影ぞ立つ。　藤原基俊

雛鶴の花の林に入りぬれば、飛び立つまでに嬉しかりけり。　太宰大貳重家

子を思ふ道をぞ祈る皇に、仕ふる跡をたがへざらなん。　中納言雅頼

是れ程志深く淺からぬ親の爲めに、孝養報恩せん人は、いかゞ懺悔とならずも侍らん。實に志の深き事は、親の子を思ふには過ぎず。されば佛は『法華經』の『譬喩品』に「其中の衆生は悉く是れ吾が子なり」と說き給ひ、(一)如意輪觀音の慈は一

(一)如意輪觀音。如意輪を轉じて、衆生に福德を與へたまふ觀世音、六臂あり。

（一）三車。羊車、牛車、鹿車を云ふ『法華經』譬喩品に出づ。

釋尊も、子を思ふ譬を取り給ふには、三界火宅の中なる諸子を哀みて、父の長者は（一）三の車をかまへ、五十餘年迷へる窮子を悲みて、親の長者は二人の使を遣すとこそ、『法華經』の二卷にも侍るめれ、これらは喩にてこそ侍れ。或經には正しく「一切衆生を見ること猶ほしも羅睺の如し」と侍るめれば、佛だにも子を思ふ志は如此侍る。いかに申さんや、人界は理りにぞ侍るべき。されば淨飯王の病ひ付きて、物心細げにぞ涙ぐみ給ひしを、大臣等慰め奉んとて、公今生は大國の王と生れて、一事の違亂おはしまさず。十善におはしませば、後世又惡處へおはしますべからず。何事をかくは思召すぞと申しければ、淨飯王偈を結びて宣ふ。

「我れ命逝ると雖も以て苦となさず、但恨むらくは我が子悉達を見ざることを。」

此の文の心は、我命うせん事を以て苦みとせず、但しうらむらくは、我子悉達太子を見ざらん事の悲しきと也。天竺震旦までは申さじや。我朝武藏國に、玉の火丸と云ふ者あり。聖武の御時也上京して人の供に母など具して、鎮西へ下向して太宰府に住みげる程に、主人上京しける供に上るべきにありけるに、思はしき妻を設けたりけるに、離れじとて障りを致して停らんが爲めに母を山へ具して行きて殺

(一)鬼子母。梵に訶利帝と云ふ、千子を生み暴惡にして他人の子を食ひしが後佛の說法を聞きて五戒をうけ千子と共に正法に歸したりと云ふ。

申すべき也。昔子を懐きて恒河川を渡る女あり、水早くして流に引かれて下る時に、河岸なる人敎へて云はく、其の子を捨て、我が命を助かれと云ひけれども、子を悲む心深くして、終に子を捨てず流れて死にけり。又漢の高祖と楚の項羽と戰ひし時、高祖の方に石奢と云ふ兵あり。項羽石奢が母を取り籠めて、汝が子石奢を呼び寄せずば命を斷つべしと云ひけるに、石奢が母項羽は天下を保つべからず。軍をして必ず漢王に仕う奉れ。我は命を捨るぞと、我子の石奢が許云ひやりて、劍に落ち懸りて死しぬ。されば『心地觀經』には、「世の人子の爲めに諸の罪を造り、三途に墮在して長く苦を受く」とは說きたり。實に人の親の子を思ふ志淺からずぞ侍るめる。(一)鬼子母は五道大臣の妻也。天上に五百人、人間に五百人千人の子を持ち給へり。生物の子をとりて是れを養育す。佛是れを懲さんとして一人の子を取りて鉢の底に秘し給ふ。鬼子母、千人まで持ちたる子の、一人无きを悲みて、我今より後、孩者を殺さずして返りて守と成らんとて誓ひて、子を返して給はるとて申しためる。訶梨帝母とて、孩き子共の守に懸くるは是也。寵愛の子と云ふは早咀孕迦也。訶梨天栢榴を持ち給ふ事は、五百の實ある故也。敎主

「觀念の窓の中には、心を三明の月に繋け、座禪の床の上には眉に八字の霜を垂る。預且に密網を燒くこと二萬八千八百三十三帖、烈卒馳道を堀ること四百五千三百餘所なり。縱ひ微少の形たりと雖も、命を惜むこと泰山よりも重し。縱ひ暴惡の形たりと雖も、子を思ふこと人界よりも勝れたり」

實にあはれにぞ侍りぬる。此御願文の賞に、息の長光の主を藏人に補せられ、昇殿ゆるされけるも、理にぞ侍りけり。さて白河法皇、御寶算七十七と申す七月七日まで保せおはしましけるも、其の故なめりとぞ世の人申し侍りける。又父母に孝養して佛に成るべしと申すは、懺悔の中の第一の懺悔にてぞ侍るべき。佛譬を取り給ふに、父の恩の高き事は、須彌山よりも高く、母の徳の深き事は、蒼海よりも勝れたりと侍れば、恩徳の淺からざることを思ひ知らざらんは、悲しき事には侍らずや。人生れて後成人となるまで、母の乳を呑こと百八十石、況んや一切の間に飲む所は、四大海の如しと云へり。白骨は父の恩、赤肉は母の恩、何れか父母の恩ならぬ物はある。龜の子を見る眼、鶴の子を思ふ聲、恩愛猶ほ深し。何に況んや人倫に於てをや。人の親の子を思ひて、我身に蒙るためし、少々勸へ

に流れけるを助け生けたり。其の故に此沙彌が命延びたる事ありき。夜叉長者は野澤の池の水の干上りて、そこらの魚の死しければ、彼長者壺に水を入れて、魚を取りて太河に放ち生け助けたりとなん申したる。八幡宮の御母神功皇后、異國退治の時、多くの殺生を爲し給ひし其罪障懺悔の爲めに、網人のとれる魚を買ひ取りて八月十五日放ち給ふ。放生會と申すは是れ也。或は今生の命を延べ、或は後世の憑みし糧と成りき。天竺に龜を生けたりし人に、龜の恩をしりて、寶をあたへ侍りき。日本にも龜の恩を知りて侍る事ありけり。山陰の中納言と申しける人の若かりける時、桂川にて遊びけるに、鵜飼龜を殺しけるを乞ひ請けて衣にかへて助けたりけるを思ひ知りて、太宰大貳に成りて下りける時、三歳になる若君を、繼母のあやまちの樣にて、海に落し入れて虛泣しけるを、此の龜船に添ふてありけるが、背に乘せて命を生けて、父に取らせて侍る事あり。其若君成長して、法師に成りて、名を如無僧都と申すは是也。人木石にあらず、龜雀恩を知ると申すも理りにこそ侍れ。箇樣の事聞召してやらん、白河法皇の、殺生禁斷をさせおはしましたる事侍りけり。式部太輔敦光の御願文奉り給へるこそ面白く侍れ。

左相府儀同三司、九卿には右將軍實資、右金吾齊信、左金吾公任、源納言俊賢、拾遺納言行成、平納言惟仲、左大丞扶義、霜臺相公有國、雲客には實成、定頼、相方、明理、管絃には道方、濟政、時仲、高遠、信明、信義、文士には匡衡、以言、齊名、定義、積善、爲憲、爲時、孝道、相如、濟道、和歌には道信、實方、長能、輔親、式部右衛門尉曾禰好忠、繪師には巨勢弘高、舞人には大伴の兼時、秦の多高、多の良茂、同政方、相撲には私宗平、三宅の時弘、伊勢の多、越智の經世、公政恒則、三春の時正、秦の經正、眞上の勝岡、大井の光遠、近衛の舍人には下野の重行、尾張の兼時、播磨の保信、物部の武文、尾張の兼國、下野の公時、陰陽師には賀茂の光榮、安倍の晴明、醫師には丹波の重雅、和氣の正世、明法には允亮、允正、明經には善澄の廣澄、武者には滿仲、滿正、維衡、致頼、頼光、頼信、驗者には觀修、勝算、源覺、眞言には寛朝、慶圓、說經師には清範、靜昭、院源、覺緣、碩學には源信、覺運、慶祚、實因、安海等の人々を得給へり

又堺の內の殺生を止どめ、(一)六齋日に物の命を殺さずと申すは、昔羅漢の使ひける小沙彌、七日の內に死すべき相あり。彼沙彌道を行きけるに、蟻の子の一つ水

(一)六齋日。月の八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、卅日の六日は四天王の天下を按行して伺察する日なるが故に齋日と云ふ。蓋し身を愼み心の清め齋戒すべき日との意なり。

めしかば、其罪を免るゝ事を得たりき。況んや本より政正法ならんに、如何懺悔とならずも侍らん、殷帝太戍の時、一夜の中に天下に桑穀茂り、釜の歯より雉の立つ事のありし也。帝政を改め給ひしかば、其罪なくてやみにし事を云ふ也。我朝にも斯様の事は多く侍るめり。寛算と申す法師すら、清貫民部卿、希世辨参内して、炎魔王宮にて政を恨みて、延喜の帝召して給へと云ふ聲なん、侍りつると奏しければ、俄に延長と云ふ年號には替るなんどこそは申して侍るめれ。爰を以て、魏の文帝は政直にして他の善なしと云へども、徃生の素懐を遂げ給へり。「朕位に在りて政何ぞ必しも正しからん。上聖衆を展べ下覺蘂を擧ぐ。」とこそ宣ひけれ。此故に弓削以言は「秦の皇帝の慘瘧なる、繁文秋荼の霜よりもからし。漢の高祖の寛仁なる、三章春竹の露を垂る」とは申したるぞかし。我朝にも政直にして民を愍み給ふ帝多く聞えさせ給ふ。仁德天皇は、高座に登りて「民の竈は賑はひにけり」と喜び給ふ、一條院は、寒夜に衾を脫がせ給ひて、民いかに寒かるらん、一人暖かなるべからずと宣へる事ありける。終に徃生の素懐を遂げ、人を哀み給ふ君也。人々を哀み得給ふ中に、親王には後の中書王、大臣には

彼の含める劍の頭を潑と吐き懸けつれば、其の劍あやまたず楚王の頭の骨を切り落し、鼎の中にて王の頭と眉間尺が頭と、上に成り下に成り喰ひ合ひけるに、動もすれば眉間尺が頭喰ひ負けぬべう見えければ、朋友自ら己が首を撥き落し、鼎の中に入り諸共に楚王の頭を喰ひ破りて、眉間尺が頭は死の後父の怨を報ずと呼ばはり、朋友の首は泉下に朋友の恩を謝すと悦ぶ聲して後、共に煎爛れにけり。其三の頭の鼎の中にして巡る樣を、已には形どれる共申し侍るめれ。又吳王夫差は、五員と云ひし人の云ふ事にも付き給はざりしかば、五員恨みを成して失せにき。我眼を挑りて、吳の東門の上に置け、越の軍の來りて吳を亡さんを見んと云ひけるに、合せて越王勾踐に亡さるゝ事也。芥子推は、晉の文公の敵に責められて飢ゑ給へりけるに、自ら肱の肉を切りて食せて生け奉りし、後戰に勝ちて政を爲し給ふに、遲く賞を蒙りければ恨みを成して、綿上山と云ふ山にて終ひに燒け死ぬる事也。政事直ならざる現當二世たゝりに成り侍る事也。伯夷わかくして見ば、盜跖命を以て終ふなどは申しつれども、程々につけて僻事の侍るまじき也。桑茂り穀簇り、釜より野鳥立つと云へども、政直に改

の曼陀羅は、其時一行の寫して弘め給ふ所也。其の時玄宗皇帝、安祿山が爲めに惱され、貴妃命を失ひし也。加之、屈原罪なくして禁められしかば、汨羅の淵に身を投ぐ。邦衍犯なくして罪を蒙りしかば、五月の天に霜降りき。楚王の干將が劍をせめし終りに、眉間尺が恨みを蒙り、夫差の五員を失ふ末に、越王勾踐に亡さる。周伯夷が首陽山に飢し、武王の仁の心なきが故也。芥子推が錦上山に燒けし、文公の政を恨みし也。楚王干將と云ふ鍛冶に劍を責め給ひて、干將が首を刎ねられしかば、其の子の眉間尺と云ひし者、憤を含みて父の怨を報ぜんとしけるに、干將が古の朋友の人、憐みて共に謀りて云はく、汝其の劍頭を三寸嚙切り、口中に含みて死すべし。我汝が首を持ちて楚王に献せば、王の心解けて汝が首を見給ふべし。其時口に含める劍の頭を楚王に吐き懸けて、共に怨を謝すべしとぞ申しける。眉間尺是を聞き大に悦び、劍の頭を口に含みて自ら己が首を撥き落し、朋友の前にぞ置きたりける。朋友其の首を楚王に献つれば、王喜びて獄門に掛けらるゝに、三月まで其の首目を怒し齒を食ひしばり、常に齒がみを爲しける程に、楚王恐れて鼎に入れて七日七夜煎らる、楚王鼎の蓋を明けさせ見給ふに、

次に刹利居士の懺悔と云ふは、正法を以て國を治め、六齋日に物の命を殺さず、堺の內の殺生を止め、父母に孝養するを申したる也。正法を以て國を治むると云ふは、政正法ならざれば天下亂れぬ。天下亂れぬれば民の歎き也。民の歎きは則ち罪業也。爰を以て、政正法なるを懺悔とは申たる也。此故に周の文王は、占ひて太公望を得て國をあづけ、殷の高宗は、夢に見て、傅說を求めて政を執らせし也。周の文王は、狩に出で給ふとて、今日は何をか得んすると占を問ひ給ひけるに、熊をも得給ふまじ、羆をも得たまふまじ、賢人をぞ得給ひんずると占ひたりけるに、大公望が、濁り河水の濱に釣して有りけるを得て、國をあづけ天下の靜まりし事也。殷の高宗は、夢に賢人を見て求め給ふに、傅巖野にして傅說を求めて政を執らせて世間なをりし事也。『法花』には「民の王に遇へるが如し」と說き、『尙書』には「天子道ある時は、守海外にあり」と云ふは此意に侍るべし。政直ならざる後世までは申さじや。今生にも其咎まぬかれ難し、唐の玄宗は、楊貴妃に近付きたりと云ふ疑を以て、一行阿闍梨を、火羅國とて七日空も見えぬ所へ流し給ふ。星宿無實によりて罪を蒙る事を哀みて、九曜の象を現じて守り給ふ。九曜

思とく法の光りし照らさずば、身に置く露を誰はらはまし。　賀茂重保

月詣集 心より結び置きける露なれば、思ひとく日は殘らざりけり。　前齋宮大輔

露霜にかはらぬ罪と聞きつれば、朝日の山の光をぞ待つ。　藤原盛方朝臣

懺悔と云ふは、生々世々に作りし罪を耻ぢ、惡業煩惱に恐るゝと云ふ事也。一つの證を申すべし。天竺に商人あり、諸の寶を求めんが爲めに、五百人の友を具して大海に浮ぶ。萬里の波の上に、風に任せて行く程に、何國ともなく、色青く頭髮は赤くして、口より火焔を出し、眼より光を放つ者、商人が船のはたをとらへて云はく、汝等我より怖しき物を見たりやと云ふ。五百の商人、各心を惑はし肝を失ひて、船の底に隱れ入りぬ。其中に五戒を持てる俗一人ありけるが、物云はでも中々あしかりぬべかりければ、「汝より怖しき物こそあれ、我等衆生が身の中にある惡業煩惱也。」彼鬼の云はく、「如何なる物ぞ聞間ほし」と云ふ時に、「汝等百千人をあつめたる阿防羅刹の中へ具して行かんとする惡業煩惱は、遙かに汝よりは怖き物にあらずや」と云ひければ、鬼云ふことなくて浪の中へ入りにけりと云へり。速かに彼の俗の思ひをなして、惡業煩惱に怖ぢ恐れ業障を耻ぢ給ふべし。

也。早々一心に懺悔して、業障を滅し給ふべき也。是を事の懺悔とは云ふ也。次に无想の懺悔と申すは、一切の業障は妄想より生じて、眞體と云ふものなし。是を觀ずるを以て理の懺悔と云ふ也。喩へば千歳闇にて昏き處なりと云へども、一寸の脂燭を入るれば、千歳の闇晴れぬ。業障は千歳の闇の如し、懺悔の一寸の脂燭を指し入るれば、業障の闇晴れぬ。喩へば業障の薪は、千里に樵り積むといへども、芥子ばかりの火を付くれば、業障の薪悉く燒け失せぬ。縱へば惡業の雲霧は厚けれども、懺悔の風吹けば、法性の空晴れぬ。縱へば煩惱の霜露は繁けれども、懺悔の慧日出でぬれば消え失せぬ。此の意を(一)『普賢經』に說きて云はく。

一切の業障の海は、皆妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば、端座して實相を思へ、衆の罪は霜露の如し。慧日能く消除す。是の故に至心に六情根を懺悔すべし。

此の意歌に讀みて侍るめり。

金葉　命をも罪をも露に喩けり、消えば共にや消えんとすらん。　覺樹法師

歌苑抄　露結ぶ霜に喩ふる罪なれば、朝日待つ間の歎き成りけり。　登蓮法師

(一)『普賢經』。具さに『佛說觀普賢菩薩行法經』と云ひ、普賢菩薩觀門及び六根の罪を懺悔すべきことを說きたるもの也。

障の願有りて、懺悔の教主といはれ給ひ、有想の懺悔、無想の懺悔、刹利居士の懺悔、此三の懺悔を敎へ給へり、よく〳〵心得て業障を懺悔し給ふべし。初めに有想の懺悔と申すは、无始生死より造れる罪を悔ひ悲みて、發露啼泣して懺悔し、或は本尊に向ひて禮拜恭敬して懺悔し、或は賢聖に向ひ語りて懺悔する也。(一)『大經』に云はく「若人罪を造りて藏せば、小罪なりと云へども增長す。大罪なりと云ども懺悔すれば則ち消滅しぬ」と云へり。懺悔の有樣廣く侍るめり。一切の善根は皆業障を懺悔する也。然りと雖も、(二)理趣三昧、(三)法花懺法、(四)七佛(五)五十三佛の名號、是等を懺悔の大意とする也。又禪林寺永觀は、常に彌陀佛を念じて名號を唱ふる者は、業障を懺悔する也とぞ申して侍るめる。鴆鳥水に觸るれば一切の魚類死し、犀角海に游べは死魚悉くよみがへる。琥珀の塵を取り、磁石の鐵を吸ふ、世間の不思議此の如し。况んや懺悔の力に依りて罪障を滅する事、努々疑をなすべからず。されば『大經』には、「世に二人の智者あり。一人は本より罪を作らぬ人、一人は罪を作ると云ふとも懺悔をする人也」とは申したるぞかし。然りと雖も、言は是にして心は非也、懺すれども懺せられず、淨名の呵する所

(一)『大經』。『大般涅槃經』のこと。

(二)理趣三昧。『大乘金剛不空眞實三昧耶經般若波羅密多理趣品』を讀誦し行道すること。

(三)法花懺法。『法華經』を讀誦して罪障を懺悔する法

(四)七佛。毘婆尸佛等の過去七佛の名號を唱へて罪障を懺悔すること。

(五)五十三佛。過去現未の五十三佛の名號を唱へて罪障を懺悔すること。

小夜衣隔つることはなけれ共、身を分けて社いかまほしけれ。大炊御門

第六に、業障を懺悔して、佛道を成ずべしと申すは、禪林寺の永觀の、七段の(一)『往生講式』に書くごとく、人一日一夜を經るには、八億四千の念あり。念々に成す所、皆三途の業也と云へり。實に夥しくは聞ゆれども、左も侍らんとこそ承はりしか。樂あるも罪也。貧しくして悲しきも罪也。惡しと思ふも罪也。妻を悲しむも罪也。子を哀れむも罪也。宮仕するも罪也。商人をするも罪也。形を好しと思ふも罪也。美目を惡しと思ひ歎くも罪也、田を作り蠶養をする又々此の如し。況や殺生偸盜の(二)十重に於てをや。人界に生を受けたる本意、懺悔の法に有るが故也。されば(三)『心地觀經』には「在家は能く煩惱の因を招く、出家は又清淨戒を破る」とは申したる所。然りと雖も、懺悔すれば所有の業障悉皆除く懺悔すればば菩提の花開け、懺悔すれば佛の大圓鏡を見、懺悔すれば能く寶所に至る。百丈の石なれ共、船筏に積みぬれば沈まず。罪は百丈の石の如し、懺悔は船筏の如し。早く業障懺悔の船筏に乘りて、生死の苦海を渡り、菩提の岸に着くべき也。十方三世の佛菩薩は、同體分身にして利益平等なりと云へ共、(四)普賢大士殊に懺除業

(一)『往生講式』。淨土往生を願はんため、毎月十五日發菩提懺悔業障門等の七門の講を修する法式を述べたるもの。

(二)十重。殺偸婬妄等の十重禁戒のこと。

(三)『心地觀經』。『大乘本生心地觀經』と云ひ八巻あり、唐の般若の譯。

(四)普賢菩薩。釋迦佛の右の脇士、慈悲を司り六牙の白象に乘る。

せはき。

般若は第一教なり。　此經に結縁する者は、

重業障ありと雖も、　必當さに解脫を得べし。

此文こそは、炎魔王の誦ひける文とて、其比一京の人の書きて持て侍りし文也。葉公、龍の形を書けば、眞龍堂上に現ず。漢王、香を燒きしかば、靈魂烟の中に顯る。況や往生極樂の願を起さん人の前に、彌陀如來光明を放ちて、聖衆と俱に現じ給はざらんや。葉公が眞龍を顯す事、歌にも讀みて侍るめり。俊賴朝臣の、口惜やとかみをろしの句に置けるは是れ也。又物を願ふに、叶ふまじき事をだにこそ願ふに侍りぬれ、まして往生極樂を願はん、何ぞ疑あらん。叶ふまじき事を願ふ人多く侍るめり。歌にて申し侍るべし。

大虛に覆ふばかりの袖もがな、春咲く花を風に任せじ。　讀人不知

秋の野の萩の錦を古鄕に、鹿の音ながら移してしかな。　清原元輔

數しらず重る年を鶯の、聲する方の我名ともかな。　藤三位

梅が香を櫻の花に匂はせて、柳が枝に咲かせてしかな。　中原時致

を得たりと云へども、頭より足の爪まで、針を貫く如くの苦患有りとこそ語りたりけれ。何事も一念發す所の願は、生々世々に果たす也。昔妻夫語らひ、生々世々妻夫たらんと契る者有り。妻は人に生れ、夫は蛇に生れたりけるが、妻池の邊を通りけるに、此蛇まき付きて嫁ぎける事侍りけり。願は善き事をも惡きにも如是たがはぬ事にてあるめれば、返す〴〵往生極樂の願を發して、此素懷を遂げて、有緣の衆生を導き、無緣の衆生を吊はんと覺すべき也、同じ事を申すやうには侍れ共、阿波國の聖人の、堂を作りさして、此國の守と生れて、作り果てん願をして死にけり。則願の如くに、彼國司に生れて作り果てけるとぞ侍る。又信濃國善光寺の、聖の願力に酬ひて、同じ姿に生を替へて、堂を作る事侍りけり。難波浦の海士の子は、十六年と云ふに、願力によりて舩光少將の妻と生れあひたりとこそ。『海士子物語』には申したるぞ。願の志是の如きの事に侍る故也。無下に近くの事には侍らずや。東大寺花嚴宗能惠得業と申しゝ人、『大般若』書寫し、供養すべき願ありて、營みありきし程に、病ひ付きて失せにき。炎魔王宮にて、此願ある由を申しければ、速に歸りて願を遂ぐべしとて、蘇して『大般若』書寫供養して程なく失

べき由を咒咀しければ、熱田明神大宮司に示現して宣はく、國司俊綱は昔汝が水を懸けたりし俊綱聖人也。彼時の願力こたへて、今水を懸け返す也。我れ俊綱聖人存生の時多く法施を得たりき。故に神罰に及ばずとぞ示し給ひける。俊綱後には修理大夫に成りたりければ、伏見修理大夫とぞ申しける。昔目連尊者、弟子を具して道を行くに、一人の女人自らの肉を噉ふ。弟子此の事を異みて目連に故を問ふ。目連弟子に告げて云く、昔佛生國に一人の后おはしき。一夏九旬の間、美饌を設けて僧に供養しき。一人の女人彼の饌を盗みて食ふ。后此事を聞きて、禁しめ尤め給ふに、此女若し彼の饌を盗みて食ふたらば、我生々世々自らの肉を噉ふ報ひを受くべしと誓ひき。彼の饌を盗みて食ひし者は此女也とぞ云ひける。過去に微妙尼と申す者あり。宿命通を得て、昔の事を語りて云はく、我昔長者の妻たりき。然りと雖も、一人の子を生まざりき。長者子のなき事を歎きて、又妻を設けたりき。彼妻の腹に程なく一人の子を設けたりき。此子を我れ悪く遺恨なりしかば、竊に針を以て頭に刺しつ。其の母驚き騒ぎて、我を疑ひしかば多くの誓ひ言を立てゝ陳ず。其誓言一も違ふ事なくて、生々世々に負ひき。今羅漢に至り、宿命通

ければ、小國なれば尋常の堂など作らん事はかなはじ、古堂などを修造して、後世の資糧にもせんとて、國中を見ありきけるに、古堂の有るに入りて見ければ、佛壇の下より能く認めたる文を、一つ求め出して見ければ、沙門公經敬つて白す、一堂を建立の願ありと云へども、力無くして供養を遂げず、願は來世に當國の國司と生れて、造立供養を遂ぐべしとぞ侍りける。公經我名を昔の公經聖人と云ふ事を知りて、供養を遂げ畢りぬ。是れも願のとげきたる也。又尾張の國に俊綱聖人とて、行業やんごとなき聖ありけり。一國これに歸し、殆んど他國の歸依に及び、知識をすゝむる事有りて、熱田の大宮司がもとへ行きて、奉加せよと云ひけるに、聖人中の間に押し入りて奉加をせめければ、大宮司醉のまぎれに腹を立てゝ、水を懸けて追ひ出しつ。聖人惡念を起して、我必ず水を懸け返すべしと云ひて程なく失せぬ。其後數年ありて、俊綱と云ふ國司下りて神拜しけるに、此大宮司老耄して、彼料に呼びけるに、遲く指し出でければ、國司怒をなして、社司こそ國司をば待つべけれ、國司に待たるゝ謂なしとて、慍りて大宮司に水を懸けてけり。大宮司大に怒りて、此事我が耻にあらず、大明神の御耻也。慥に罰し給ふ

と唱へてかき消すやうに失せ給ひぬ。皇子夢驚き睡さめて見るに、夢に見る處の金失せずしてあり。皇子彌よ隨喜の涙を落して、八幡大菩薩の合力し給ふ經也。只の水して書かん事あさましと覺して、七日佛神に祈り給ふに、淺猿く怖氣なる夜叉の盆に水を入れて與へければ、是も如何なる人の與へ給ふぞと、怖々問ひ給ひければ、我は是れ信濃國の鎭守諏訪明神也」汝が願を滿てんが爲めに、白鷺池の水を與ふる也とぞ宣ひける。夢さめて後、盆の水失せずしてあり。願の力による故に、金を得水を得て、『般若經』六百卷を書寫する事畢りぬ。昔までは申さじや。大外記定俊が、越中の國司に成りけるを、國人の國宣を用ひず、餘りに悲しければ、怪しと思ひて寢たりける夜の夢に、誰とも知らぬ貴人の告げ給ひけるは、汝越中國に有りし盲目の聖人也。願を發す事ありき。佛にも成りたからず、國王にも生じたからず、只當國の國司と成らんと云ふ願のありしが故に、今國司と生れたる也。然と云へども、下劣の者なりし故に、國人重く思はぬ也とぞ告げ失せにける。又手書の少納言公經とて有りし人、受領になるべき事有りけるに、好國に成りたらば、今生の貯へに一堂を建立せんと思ひける程に、河內國に成りたり

が故に、願力に酬ひて、今羅睺羅尊者の母と成り給へり。又善積比丘尼は、餘りに物耻をして、生るゝ度毎に裸にて生れじと願じければ、決定して衣を着て生る也。阿修羅王は、昔長低く勢小さき人なりしが、恒河を渡りし時、水越えてえわたらざりしに惡念を起して、我生々世々に、長高き者に生れんと云ふ願を起しゝ故に、大海のきはに立つ程の身と成れり。我朝には、柏原天皇の御子開成皇子、世を捨てて、佛法修行し給ひけり。攝州の(一)勝尾寺に迷ひおはして行ひ給ひける程に、思はざるに『如法經』の香水を得給へり。皇子心中に願を發して、此料紙を以て、金字紺紙の『大般若經』を一部書寫せんと思すに、一天聖主の皇子たりと云へども、山林流浪の行人と成りて、分米の砂金に乏し。故に七日佛天に祈り乞ひ給ふに、束帯の裝束したる人の、氣高く樣ことなきが、輪三寸長さ七寸なる金を與へ給ふ。皇子夢の内に歡喜の思ひをなして、如何なる人の我をば見て給ひけるぞと申し給ひければ、七言の偈を結びてぞ、答へ給ひける。

「得道よりこのかた法性を動ぜず。八正道よりかりに跡を垂れたり。
皆苦の衆生を解脱することを得。故に八幡大菩薩と號す。」

(一)勝尾寺。攝津國三島郡に在り、西國第二十三番の札所、開成皇子、善仲、善算の二師を師として開き玉ふ。

起して云く、我大海を汲み干して龍宮を顯すべしとて、蛤の貝を以て大海を汲み給ふに、半分大海の水減じて、龍宮を顯す。龍宮忽ちに騒ぎて本の如く玉を太子に奉れりとこそ申して侍れ、少縁にては叶ひ難き願にて侍るべし。委くは(一)『六度集經』(二)『報恩經』に云へり。又(三)波斯匿王の娘(四)勝鬘夫人は、形醜く髪縮み色黑くして人に見ゆべき人に非ず。然りと雖も大王恩愛捨てがたくして、一の樓の中に隱し置き給へり。去る程に、大王教主釋尊を迎へ奉りて、法を説かせ參らすべき事有りて、波斯匿王の宮の人聽聞すべき事を營みけるに、勝鬘夫人は、人前に指し出づべき身ならねば、是れを悲みて、佛説を聽聞せんと云ふ願を發して、佛を念じ奉る。佛此願を鑑みて、樓の中に光明を放ち給ふ。佛の光に當るが故に、形端嚴にかはり、髪は翡翠のごとくになりぬ。大王大に悅び給ひて、聽聞の庭に交り給ひき。是れ願力にあらずや。又昔三人の小兒有りき。心を一にして遊び戯れて、生々世々に師弟子とならんと契りき。願力に任せて、今佛と舎利弗目連師弟子と成れるなり。昔定光佛の世に出で給ひし時、釋迦如來と耶輸陀羅女と、二莖の蓮華を求めて、佛に供養し奉りて、汝と生々世々妻夫と成らんと契り給ひし

(一)『六度集經』。八巻あり、呉の康僧會の譯。

(二)『報恩經』。『大方便佛報恩經』と云ふ。七巻あり、譯者を失す。

(三)波斯匿王。月光、勝軍等と譯す。舎衛國の王、祇陀太子の父、釋尊の教に歸して能く國を治めたり。

(四)勝鬘夫人。波斯匿王の女、母は末利夫人云ふ、深く佛に歸依す、佛即ち其の請に應じの『勝鬘經』の説法あり。

（一）『六波羅密經』『大乘理趣六波羅密經』と云ふ。十巻あり、唐の般若の譯。

戰はずして逃げ去りぬ。猿猴等龍宮に責め入りて、后を取返し、七寶を奪ひ取りて、本の深山に歸る。扨彼の舅氏國の王失せにければ、大國小國臣家等、此王を忍びて迎へ取りて、二箇國の王としてあり。猿猴の龍宮城を責せて打ち取らん事、少縁には叶ひがたき願にぞ侍るめる。細かには(一)『六波羅密經』にぞ申しためる。波羅奈國に王子おはしましき。名をば大施太子と申す、施に志深く有りて、貧き者を愍み給ひて、國の寶をば盡すといへども、貧人をば盡すべからず、此の故に龍宮城に行きて、盡きせぬ寶を雨す如意珠と云ふ玉を、得んと云ふ、願を起して出で立ち給ふ。父の大王、母の后、此事を聞きて、惜み悲みてゆるし給ふ事なし。太子我願成就せずば、父母の前にして餓死すべしとて、物を食ひ給はず。此の故に目前にて死なんを見んよりはとて、父母早く暇を奉り給ふ。太子父母の暇を得て、心に大悦を懷きて、萬里の浪に浮かびて泣々龍宮へ渡り、自然に龍宮に行きて、願の志を語るに、龍王隨喜し憐みて、大龍の頷の下より玉を取り出して太子に奉る。太子大に悦びて歸り給ふに、龍衆等集りて、玉は龍宮城の第一の寶也。輙く與ふべからずと云ひければ、龍王思ひ返して玉を取り返しつ。太子願を

猿猴等大に悦びて、此喜びには如何なる事をかせんずると云ひければ、大王猿猴等に告げて曰く、我年來の后を龍王に盗み取られたり。故に龍宮城に向ひて、南方へ行くなりと宣ひければ、猿猴等申さく、我等が存命ひとへに大王の力なり。爭でか其恩を思ひ知らざらん、速に送り奉るべしとて、數萬の猿猴大王に隨ひて行き、南海のほとりにあらざりければ、徒に日月を送る程に、梵天帝釋、大王の殺生を恐れて國を捨て、猿猴の恩を知りて、南海に向ふ事を、憐れとおぼして、小猿に變して、數萬の猿の中に雜りて云ふ樣、かくしていつとなく龍宮を守ると云へども、叶ふべきにあらず。猿一つして板一枚草一把を儲けて、橋に渡し筏に組みて、龍宮へ渡らんと云ひければ、小猿の詮議に任せて、各板一枚、草一把を構へて、橋に渡し筏に組みて、自然に龍宮城へ至りぬ。龍宮怒りを成して、大なる聲を起してくれをやりて光を放つ程に、猿猴霧に醉ひ雪に怖れて顚れ伏しぬ。小猿雪山に登りて、大藥王樹と云ふ木の枝を折りて歸り來りて、醉ひ臥したる猿どもを撫づるに、忽ち醉ひ醒め心猛くなりて龍を責む、龍王光を放ちて鬪るを、大王矢を射だす。龍王大王の矢にあたりて、猿猴の中に落ちぬ。小龍等此事を見て、

御伽仕るべしとて仕へ奉る。大王有難く嬉しく思召して過ごし給ふ程に、大王嶺の木の子を拾ひにおはしたる間に、此梵士后を盗みて失せぬ。大王還りて見給ふに后のおはせざりければ、山深く尋ね入り給ふ。道に大なる鳥あり。二の羽折れて既に死門に入る。大鳥大王に申さく、日來屬き奉りたりつる梵士、后を盗み奉りて逃げ侍りつるを、大王還り給ふ迄と思ひて、防ぎ侍りつれとも、梵士龍王の形を現じて、此羽を蹶折りたりと云ひて、終ひに死門に入りぬ。大王哀れと思して、高き嶺に掘り埋み、梵士は龍王にて有りけると云ふことを知りて、南方に向ひておはしましける程に、深山の中に無量百千万の猿集りて、罵りける所へおはしぬ。猿猴大王を見付けて、悦び樂みて云く、我等年來領する山を、隣國より打ち取らんとする也。明日午の時に軍定むべし。大王を以て大將とすべしと云ふ。大王思ひかけぬ所へ來りて、悔しく思召しながら、承りぬとて居給ひたりければ、弓矢をもて大王に奉れり。云ふがごとく次の日の午の時ばかりに、池に萍なびきて、數萬の兵の襲ひ來る。大王猿猴の勸めに依りて、弓を引きて敵に向ひ給ふに、弓勢人に勝れて臂背央に廻る。敵大王の弓勢を見て、箭を放たざるさきに逃げぬ。

相議して云く、我等徒らに死なんより、隣國の大國に向ひて、五穀を奪ひ取りて命を活くべし。軍のならひ勢による事なし。一日と云ふとも存命せん事、庶幾ふところなりとて、已に軍を立てたるを、大國に聞き付けて、萬が一の勢なるが故に、輕め嘲りて、手捕にせんとするを聞きて、大王大公卿に宣く、合戰の時多くの人死なんとす。願くは軍を止むべしと制し給ひければ、宣旨と申しながら、此の事こそ力及び侍らぬ。我等合戰を好む事なし、隣國進み襲ふ。たゞかはずば存命すべからずと、申し侍りければ、大王ひそかに、后を呼びはなちて、我國王として合戰を好まば、多くの人死なんとす。我れ深山に籠りて、佛道を修行すべし。汝はいかゞ思ひ給ふと語らひ給ひければ、后大王を離ちたてまつらずして多年に及べり。今更に如何離れ奉らんとの玉ひければ、君は女人なり、隣國來ると云ふとも、よも殺し奉らじ。能々謀らひ給へとこしらへ給ひけれども、終ひに大王に具して深山にこもり給ひぬ。大國の軍國王の失せ給ふ事に驚きて、戰ふ事なくして小國に順ひぬ。大王深山にして、嶺の木の子をひろひ、澤の若菜を摘みて行ひ給ひける程に、一人の梵士出で來りて、大王のかくて行ひ給ふこと希代の事也、

云す也。御者とは牛飼を申したる也。早く往生の願を發して、疾く淨土に詣で、速に一切衆生を導き給ふべき也。爰を以て普賢は、「願くは我れ命終せんと欲する時に臨みて、盡く一切の諸の障礙を除き、面り彼の佛阿彌陀を見奉り、即ち安樂國に往生することを得む。」と云ふ願を發し給ひ、文殊は願くは我が命終らん時、盡く諸の障礙を除きて、面り阿彌陀佛を見奉り、安樂國に往生せん。」と云へり。只同じ様なる願を發し給へり。是のみならず、願の空しからぬども多く侍るめり。龍樹菩薩の『十住毗婆娑論』に云く、「若し人佛に作らんと願はゞ、心に阿彌陀佛を念ぜよ。時に應じて身を現じ給ふ。是の故に我れ歸依し侍る」と申したり。又云はく誓願不思議なり。西方の無量壽、極重罪の衆生も、安樂に往生すと申しためれば、極重罪人なをし頼みあり。とく佛に成らんと云ふ願を發し給へり。願は必ず成就すべし、とげがたき願の成就したる事、少々考へ申し侍るべし。昔釋迦如來、天竺の大國の王と生れておはしましゝ時、國靜に民穩にてすぐし給ふ程に、隣國に小國あり、舅氏國と云ふ。彼の國飢渇して五穀の種を斷ち、食物の名字を聞かず、此の故に死骸道に滿みて、殆んど國王餓死に及べり。舅氏國の人民

成りて行ひし也。何れなりとも心の趣ん方を行ひ給ふべき也。

第五に、淨土に往生せんと云ふ願を發して、佛道を成ずべしと云ふは、首楞嚴院の明賢が、『誓願講の式』に書きしがごとし。佛菩薩は衆生を愍みて苦患を救ひ給ふ。其心多く經論に見えたり。釋迦は五百の願、藥師は十二の願、彌陀は四十八願、普賢の十の願、何れか衆生の爲ならぬはある。我等一切衆生を愍み救はんと云ふ願ありと云へども、其力なくしては叶ふべからず。故に先佛道を成じて、有緣の衆生を導き、無緣の罪人を訪はんと云ふ願を發すべきと也。縱ひ此度(一)順次の往生を遂げずと云へども、(二)過現當の已修未修の善水、往生極樂の大誓願の海に流入して、二生三生の內なりとも、終に此願を遂げて、一切衆生を愍れまんと思ふべき也。爰を以て、(三)『十住毗婆娑論』には「一切諸佛は願を離れては生ぜず」と云ひ、(四)『十疑』には、淨土に生れんと思はゞ、一切衆生を愍む願を遂げんが爲め也」とは云ふ也。觀世音の千手千足千眼を具足し給ひし、願の力によるが故なり。されば(五)『大莊嚴論』と申す文には「行業は牛車のごとし、願は御者のごとし、願の御者なければ行業の牛車ありと云へども、庭にめぐる事を得ず」と

(一)順次の往生。命終りて次生に往生をとぐること。
(二)過現當。過去現在、未來のこと。
(三)『十住毘婆娑論』龍樹菩薩の造、十七卷あり、鳩摩羅什の譯。
(四)『十疑』『阿彌陀十疑論』と云ふ天台大師の作と傳ふ。
(五)『大莊嚴論』。馬鳴菩薩の作、十五卷あり。鳩摩羅什の譯なり。

にけり。本より思ひし事なりと思ひながら、魔王に云ふ樣、我行業を積みたる事は、佛の形を見奉らんと思ふ故也。此願を遂げざらん事の悲きなりと云ひければ、魔王行者に告げて云く、我が神通を以て佛像を現ずべし、穴賢貴しとな思ひそと云ひければ、承りぬと云ひて居たりけれ。魔王佛身を現じて、三十二相の形けだかくして、黃金の光を遠く放ちて指し出でたりけるを、魔王の變像とは思ひながら、歸命の念を成して偈を結ぶ。

「面は紫金色の如く、目の淨きこと青蓮の如し。清淨にして日月に超えたり。殊妙に勝れたる花の林、湛然として大海の若く、不動なること須彌の如し。安歩すること師子に踰えたり。顧視すれば牛王の如く、無量百千劫、淨く身口意を修す。是を以ての故に是の如きの殊妙の身を獲得す。」

是の故に、行者果を得るが故に、魔王力及ばずしてやみぬ。行は魔王に妨げらるゝ事なく、早く行業を積みて、淨土を欣ひ給ふべし。蓮の盛りなるを以て、池の深き事をしり。雨の大なるを以て、龍のたけき事を知るがごとく、行の大なるを以て、淨土の報をば知る也。爰を以て、覺尊僧都は船を渡し、永照律師は馬借と

況や三公九卿をや。行基菩薩を知識の聖人として、普く五畿七道を勸め給ふ。婆羅門行供養の日、他州より(一)婆羅門僧正、呼ばざるに來りて供養をとげ給ふ。婆羅門行基を見て、「文殊の御顏今見つる哉」と云ふ歌を讀み給ひ、此寺を普賢來りて供養し給ふべしと、人の夢に見ゆ。又聖武天皇は救世觀音の化身なり。知りぬ此寺を觀音、彌勒、普賢、文殊、合力して建立し給ふと云ふ事を。されば(二)眞如親王の入唐し給ひたりけるが、日本へ云ひつかはしたりけるは、寺は多けれ共我朝の東大寺ばかりの寺はなかりけり。師は多かれ共、我師の弘法大師ばかりの師は、なかりけるとは宣ふぞかし。佛を申せば十六丈金銅の盧舍那也、是をいとなみ給ひけん。爭で行業とならずは侍らん。惠心院の源信僧都は、丈六を作る人、決定往生の行也とこそ宣ひけれ。申さんや十六丈をや。況や金銅をや。天竺に一人の行者あり、名を優婆毱多と云ふ。行業隙なくして息みねぶる時なし。魔王是を妨げんとするに、隙なくして多年に及ぶ。行者既に果を得んとするが故に、魔王哀みて行者をかたらひて云く、汝しばらく行業を退せよ。其報には如何なる事なりとも、汝が命に隨はんと云ふ。行者心の中に悲歎して、我願既に魔王の爲めに妨げられ

(一)婆羅門僧正。印度の人、東大寺大佛開眼の導師なり、天平寳字四年二月寂す。

(二)眞如親王。平城帝の皇子高岳親王を云ふ、法を弘法大師にうけ、貞觀四年入唐し印度に向んとし途中にして薨じ玉ふ。

る東大寺こそ、一堂とは申せど、はかなくは侍るめれ。皆人の知らしめしたる事なれども、細かに申し侍るべし。(一)良辨僧正と云ふは、東大寺の一番の別當也。此良辨は相摸國の人也。生年三歳と申しける歳父母懷き出して愛しけるを、金色なる鷲來りて抓みて去りぬ。父母惜み悲むといへども、空に消えて失せぬ。鷲大和國春日山なる木のうろに置きて是を養ふ。此子日を歷年つもりて、物の心つくほどに、佛法を修行す。人是を金鷲仙人と名付く。仙人さのみ木のうつろにして、佛法を修行すべきにあらず。一堂を建立すべき也と云ふ、願ありと云へども、私の力を以ては叶ふべくもなかりければ、公家に申さんと思ひけるが、奉公なくては如何天聽を驚さんと思ひて、南無聖朝安隱と云ひ稽首ける聲、聖武天皇の奈良の都に御座ける比なるに、隱れなく聞えけり。又金色の光春日山より來りて、禁中を照らすと見る人あり。又春日山に、(二)彌勒光を放ちて御座すと、多くの人の夢に見ゆ。是故に天皇勅使をつかはして、仙人を召して故を問ひ答ふ。仙人願の有樣を申す、天皇德に歸して一堂を建立し給ふ。今の東大寺これなり。始めて地を開かれける時は、光明皇后錦の袖をひろげて、手づから自ら土を運び給ふ。

(一)良辨僧正。大和國東大寺本願、寶龜四年十一月寂す、壽八十五。

(二)彌勒。兜率天に居て當來佛果を得て世を救ふべき菩薩。

賀茂政平

結びあげし水に宿れる月影の、鷲の高根を照らす成りけり。

沙彌寂然

覺束なつねの薪を拾ふ間に、苔の洞にや烟立つらん。

是のみならず、大峰葛城を通り、五穀を斷ち、鹽を食せず。一晝夜の花をつとめ、八千枚を燒き、堂塔を造り、佛を供養し經を讀み、論を習ふ。皆是佛道に近づき行く也。迦毗羅長者の子、栴檀香と云ひし人は、昔(一)毗婆尸佛の時、堂のくづれたりしを、土をぬりてつくろひたりし故に、九十一劫惡道を免れて、今長者の子と生れて、口より栴檀の香を出す也。昔摩訶迦葉、道を行きけるに、堂の內に、佛の箔のはげ落ちたる御座ければ、はげたる處ばかりに、箔を押したりし功德の故に、未來に佛に成りて、光明如來と云つべし。かつ〳〵釋尊の御弟子たりと云へり。是の故に心ある人、皆佛像をあらはし、堂を造らずやは侍べる。天竺、震旦、我朝をろ〳〵申し侍るべし。阿育王は八萬四千基の塔を立て、戒日王は七十五日無遮の大會を五箇度まで行ひ、僧祇大王は百萬體の丈六をあらはし、魏の文帝は一千體の佛を造り鑄、梁の武帝は二千九百の堂を造り、我朝の聖德太子は四十六の堂を作り、行基菩薩は四十九院を立て給へり。聖武天皇の建立し給へ

(一)毘婆尸佛。過去七佛の一、單觀又は勝觀と譯す。人壽八萬歲の時出世し給へる佛なり

寶物集卷第五

第四に、諸の行業を積みて、佛に成るべしと申すは、諸佛は皆(一)六度を行じて、正覺を成じ給へり。爰を以て、行なくして淨土を欣ふは、孝養の者の親を打つが如しとは申したる也。萬行は何れと別つべく侍らねども、忍辱、禪定、恭敬、禮拜、此等の諸の行を以て先とする也。(二)忍辱仙人は、迦利王に手足を切られしかども忍び、尙闍梨仙人は、もとゝりに鳥の巣を食ひて、卵を生みけるに、卵のかへるまで働らかざりき。(三)悉達太子は、檀特山に入り。迦葉尊者は、雞足山に籠り。(四)藥王菩薩は、七萬二千歳臂を焦し。(五)不輕大士、は打ちし杖を忍び。昔の大王の、阿私仙人の洞の内に、千歳仕へ給ひし、行業を積むと申すべき給。「薪と菓蓏とを採る」の心を多く歌に讀みて侍るめり。少々申すべし。

法のため荷ふ薪に事よせて、頓て浮世をこりぞ果てぬる。　雲居寺瞻西聖人

千歳まで結びし水も露ばかり、我身の爲めと思ひやはせし。　僧都覺雅

仕けん心の程は千年まで、結びし水に汲みてしらなん。　祝部成仲

(一)六度。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。

(二)忍辱仙人。釋尊の因位なり、『金剛般若經』に說けり。

(三)悉達太子。釋尊の未出家の時の名。

(四)藥王菩薩。大悲の藥術を以て一切衆生の惑業の病を治し、藥を與へ玉ふ菩薩、二十五菩薩の一なり。

(五)不輕菩薩。常不輕菩薩とも云ふ『法華經』の行者。

花ゆへになき名立ちける歎きには、たとへて云はん言の葉やなき。　新少將

（一）『六波羅密經具』さに『大乘理趣六波羅密多經』と云ふ、十卷あり、唐の般若三藏の譯

らるゝ也とぞ答へ給ひける。速かに天の瓶をわらざるが如くに愼み、鉢の油をこぼさざらんが如く恐れて、佛道を求め給ふべき也。天の瓶を破らざるが如くに愼しめと云ふは、貧き人ありき、天の瓶を得て、瓶の中より七寶を出してたのしうなりぬ。餘りの嬉しさに、心地の置所のなきまゝに、瓶の上にして舞ひをどりける程に、天の瓶をふみわりて、又もとのやうに貧しく成りし事也。持戒の道は、瓶をわらざるが如く愼む也。又鉢の油をこぼさゞる如く愼むと云ふは、能く〳〵つゝしめば鉢の油こぼれず、心を麁くすれば油をこぼすなり。（二）『六波羅密經』には、

「彼の罪を犯せる人の如し。油の滿てる鉢を擧げ持ちて、若し油一滴を棄つれば罪殃大辟に入る。」

と云ふ是れ也。虚言の歌多く侍るめり。少々申すべし。

賴めつゝあはで年ふる僞に、こりぬ心を人はしらなん。　凡河内躬恒

陸奥にあると云ふなる名取河、なき名取ては苦しかりけり。　壬生忠峰

戀ひ侘びて君に逢ふてふ言の葉は、僞りさへぞうれしかりけり。　中原章經

日陰にはなき名立ちけり小忌衣、きて見よとこそ云ふべかりけれ。　源光綱母

によりて、地獄に墮ちて、苦患忍びがたき故に、早く『源氏物語』を破り捨てゝ一日『經』を書きて吊ふべしと、人の夢に見えたりけるとて、歌讀みども寄り合ひて、一日『經』書きて供養しけるは、覺え給ふらん物を。但したとへば狩人の鹿を追ひ失ひて、是れより鹿や行きつると問はんに、あの草の中に有りとはしれども、知らずと云はんに、虛言にあるべからず、佛もゆるし給ふなり。都べて一切の事に於ひて、物を助けん爲めにする虛言をば、失とすべからず。此の外の妄説は、一のことなりともすべからず。爰を以て、佛は虛妄せずと言ひ、綸言汗の如し、天子は二言なしと申したり。愼みてすまじきなり。是等を以て、五戒の大意とし侍る也。惠心院の源信僧都の、年の始めには、必ず首楞嚴院の洞より出で、朝覲の行幸を見給ひけるを、御妹の(一)安養尼と申しける人の、此の事を恠みて、君は極り無き道心の人也、何の料に年毎に出でゝ、朝覲の行幸をば見給ふぞと問ひければ、昔の十戒の力に依りて、今十善の位に生れ給へるが、なつかしさに見奉る也。又大臣公卿より始めて、あやしの唐笠持ちたる者に至るまで、前世の戒力によりて、上下の差別あるを見るに付けても、過去遠々の流轉の事のみ觀ぜ

(一)安養尼。天台宗、源信の俗妹なり。寂年を缺く。

錦女と云ふ二の龍女、佛に申す事ありけり。龍宮城に第一の難の侍る也。金翅鳥王來りて、毎月に五百の小龍をくらふ。是れ大なる難也と申しければ、佛あはれと思召して、御袈裟をぬぎて是をかくべしと仰せられければ、御袈裟は一なり、龍衆は四海に充ち滿てりと申しければ、細かに切りてちらすべしとぞ仰せける。畜生すら云ひつる事をたがへじが爲めに、毎月に五百の小龍を辨ふ。努々虚言をし給ふまじき也。此事細には六十卷にぞ申したる。後世を愼むのみにあらず。賢人は此世にても云ひつる事をばたがへ侍らざんめり。徐君と云ひし人、季札と云ふ人のはきたる太刀を乞ひければ、他へ行く事のあれば、今返り來りて進らせんと云ひて去りぬ。季札急ぎ歸り來りて、乞ひし劍をとらせんが爲めに、徐君を尋ぬるに、早く失せにきと人云ひければ、徐君が塚を尋ねて行き彼乞ひける太刀を懸け侍りける。徐君が塚の上に、季札が劍をかくと云ふは是の事也。此心を思ひて。

なき跡に懸けゝる太刀もある物を、さや塚の間も忘れはつべき。　俊頼朝臣

とは讀みしなり。まぢかくは、紫式部が、虚言を以て『源氏物語』を造りたる罪

比丘ありき。各々眼くらく諸根不具にして、自ら立つ事を得ず。此の苦みを悲みて、佛に申しければ、佛六十の比丘に告げ給はく、汝等聞け、昔(一)倶留孫佛の時僧ありき、説法しけるを、汝等虚言を以て僧をそしり侍りき。其罪に依りて、六十百千歳の間、阿鼻地獄に墮ちたりき、其業畢りて、四十百千歳、(二)等活地獄に墮ちたりき。又二百千歳、黒繩地獄に墮ちき。其業盡きて、今度人界に生れたりと云へども、五百世の中に眼闇く、正念無くして、常に貧窮下賤の家に生れて、形醜き物と成れる也。今此苦を受けたる彼の罪業をつぐなふなりとぞ仰せられける。

劫初に龍王と金翅鳥とあらがひしたる事侍りけり。龍王は、八萬由旬の須彌をゆるがして、(三)喜見城を振ひ動かさせんと云ひ、金翅鳥は八萬由旬の大海をあふきのけて、底の金をあらはさんと云ひ、龍鳥共にあらそひて、負方よりは子を辨ふべしと約り畢りぬ。龍王大身を現じて、須彌山を十五雙かこみてゆるがすに、諸天の力によりて動く事なし。金翅鳥は、三百萬里のつばさをのべて、一羽に大海をあふぎのけて、海底の金をあらはす。龍王あらがひに負けて、毎月に五百の小龍を辨ふ。(四)沙迦羅龍王、釋迦を徇ひまゐらせて、供養し奉りける時、寶錦女、無垢

(一)倶留孫佛。所應斷已斷と譯す、過去七佛の第四、人壽四萬歳の時、安和城に生れ給ひし佛。

(二)等活地獄。八大地獄の第一、閻浮提の下一千由旬に在り、殺生罪を犯せるもの墮つ。

(三)喜見城。忉利天に在り、帝釋天の居城なり。

(四)沙迦羅龍王。八大龍王の一、鹹海に居る。其の宮殿七寶を以て飾られ天と異ることとなしと云ふ。

語なり。妄語は即ち毒たり。」とは說く也。是の故に心ある人は、皆よくつゝしみて侍るめり。其の證を少々申し侍るべし。昔須陀摩王、后妃妻女を具して、園に出で、遊行の時に、一人の婆羅門、來りて物を乞ひけるに、今園より還りてとらすべしと云ひて、須陀摩王、野邊に出でゝ遊び給ふに、班足王來りて、鷹の雉を取るが如くにとらへて、殺すべき九百九十九王の內に置きつ。須陀摩王、涙をながし聲をあげて云はく、我命の惜しきにはあらず、我野邊に出づる時、一人の婆羅門物を乞ひつ。今野邊より歸りて與ふべしと云ひて出でぬ。我その妄語の罪故に、地獄に墮つべし。今七日が暇を得て、婆羅門を供養して、歸り來べしと云ひければ、班足王、七日が暇をとらせてけり。須陀摩王、我國に歸りて、一切の財寶を取出して、婆羅門を供養し、十方の衆生にあたへて、還り行きければ、國中の人集りて、初はかくともしらで打ちとけておはせしかばこそ、取られ給ひたれ。國中の兵を集めておはせんには、爭でか取られ奉らんと云ひけれ共、我七日の中に還り來るべしと云ひて行かずば、虛言の罪あるべしとて、班足王のもとへ行きぬと云へり。『仁王經』に見えたり。昔佛陀、(一)鹿苑におはしまし〻時、六十人の

(一)鹿苑。鹿野苑と云ひ、婆羅痆國に在り、釋尊成道三七日の後五比丘を濟度し給ひし處

無明の酒に醉ひて、衣のうらに珠をわすれて、貧しく悲しむは、酒の故にあらずや。繫着内衣の心を、歌にも多く侍るめり。

いかでかく花の袂を裁ち替へて、裏なる玉を忘れざるらん。　加賀左衛門

吹きかへす鷲の山風なかりせば、衣の裏の玉を見ましや。　僧正靜圓

いかにして衣の玉を知りぬらん、思ひもかけぬ人もある世に。　權僧正永緣

消えがたき御法の花に置く露や、頻て衣の玉と成るらん。　康資王母

立ち歸りとかずばいかゞ唐衣、裏にかゝれる玉をしらまし。　祐盛法師

五に不妄語と申すは、見たる事を見ずと云ひ、見ざる事を見たりと云ひ、聞きたる事を聞かずと云ひ、聞かざる事を聞きたりと云ふ事なく、都て虛言をせぬを申したる也。口の虎身をはみ、舌の劒命を割ると云ふは、虛言を禁めて侍る也。獄卒地獄にして罪人に敎へて云はく、忘語はよく大海を燒きつべし、況んや妄語の人を燒かん事、草木、薪の如しと云へり。地獄の薪と成る物也。つゝしみて虛言をすまじき也。されば(二)『住十毗婆娑論』の第三には「若し人身命を失ふとも妄語をせざれ」と敎ふ。『大集經』には、「甘露及び毒藥皆人中の舌に在り。甘露とは實

(一)『十住毘婆娑論』。十七卷あり、龍樹菩薩の造、『華嚴經十地品』を釋す。

には、三十六種の失をあげたるも理にぞ侍るべき。後世までは申さじや、今生にも、我身のたゞりなる事多く侍るめり。法住寺太政大臣爲光の御子、誠信、齋信、兄の君は臨時客の所にて、酒に醉ひて、弘高繪がける屏風に物をつきかけて其の事ゆへに中納言の所をば、弟の齋信の君に越えられ給ひけり。現世猶たゞりに成る、況んや後世の責とならん事をしり給ふべし。然りといへ共、此の文どもを見、彼證共をしりながら、酒を好み飲者多く侍るめる。下若村の傳へたる所、誰かつゝしめる。鄭康は三百盃を飲み、玄石は一石をくらふ、晋の竹林の七人の賢人、かしこしといへども是れを捨てず。大江時棟が風月の才に富めりし、榮啓期が三樂、酒には勝さらじとうたがふ。延喜の御時、伊衡少將の、酒を多く飲みて勅錄に馬寮の御馬を給はるを、目出度き事には思はれたりけるなんどは、無下にはかなく愚かにぞ侍るべき。後世の責には成り侍りけんかし。去れば佛も愚かなる事を說き給へる、『法花經』の喩にも、貧者の珠を得て衣の裏にかけて嬉しと思ふ程に、友の許へ行きて、酒を飲む程に、醉ひて珠を持ちたる事を忘れぬ。「親友の家に至り、酒に醉ふて臥す」と云ふは是れ也。我等眞如實相の珠を持ちながら

勤操怪みて、榮好が童子を呼びて、事の有樣を問ふに、童子なく〳〵語りて云はく、榮好が當る所の食四分也。一分をば三寶に供養し、一分をば八旬の母に當て一分をば一人の童子に當て、年來すごし侍る程に、師の入滅も悲しき上に、八旬の母、今日より後の存命、如何し給はんずらんとて、聲をあげて泣きければ、勤操なく〳〵童子を誘ひて、汝此の事少しも嘆くべからず。榮好が存生の如く、彼母と汝とに日食を我れ當つべし。又榮好を葬る事、我れ沙汰すべし。但し榮好が母には、榮好入滅の由を知らすべからず。其故は母榮好入滅の由を聞かば、存命すべからざる故にと云ひければ、勤操の敎に任せて、榮好入滅の由をしらせずして、日月を送る程に、或日勤操の房に客人數多來りて、酒なんど飮みける時、榮好が母の日食の事を思ひ忘れにけり。榮好が母童子を勘當し、榮好を恨みて今日の日の食の遲き事を云ひければ、童子哀みにたへずして、淚をながして榮好入滅の次第を今細かに語るに、母是れを聞きて思ひにたへずして、聞くまゝに死しぬ。勤操酒の醉覺めて榮好が母の日食の事を思ひ出して沙汰する時童子彼子細を語るに、勤操此の事を聞きて、大に悲嘆して、我坊内に永く酒をたつと云へり。『大論』

（一）勤操。三論宗の僧なり、天長三年大僧都に轉し、翌四年五月寂す、弘法大師の師なり

を說き玉ふ。唯酒を根本となす。飲まさざれば惡道を閉づ」と說き『梵網經』には「若し佛子盃を取りて人に與ふれば、五百世の間手なき者に生る。況んや自ら飲まんに於いてをや。」と敎へ給ふ。獄卒罪人を呵責しては、「佛所に於いて疑を生じ、世出世の事を壞る。解脫を燒くこと火の如し。所謂る酒の一法なり。」と云へり。

伊弉諾伊弉冊尊のむすめ、出雲國の大蛇に恐れて泣き給ひけるをば、杵築宮は酒七艘を飲ませて、醉はせてこそ殺しひ給て侍りけれ。其の蛇をやき捨て給ひける烟、八色にたち上りければ、其よりこそ八雲立つとは、歌にも讀み始めたるとぞ承りし。村雲と云ふ劍も、彼蛇の尾に有りけるとぞ『日本紀』には申すなれ。加之、大海の邊の猩々は、酒に耽りて血をしぼられ、蒼海の底なる犀は、これに醉ひて角をきられき、畜生猶し酒にたぶらかさる。況んや人倫に於ひてをや。南都の石淵寺の（一）勤操僧正のいまだ凡僧の時、學問して廻廊に住み給ひける、隣に窓を幷べて、榮好と云ふ僧同くひぢをくたして、年月久しく積みて、兩人隔つる事なくて、年序を送る程に、榮好病の床に伏して、終に死の爲めに侵さる。

酒の澄める事泉の如し。長者の妻、倉に入りて酒の瓶を見るに、若き女の容好きあり。長者の妻急ぎ返りて、長者を恨みて云はく、汝を頼みて偕老同穴の契深し。年來又遺恨なくして過しつるに、如何に瓶の中に容好き女を隱し置きて、我に打ちとけたる姿をば見せつるぞど恨みければ、長者急ぎ倉に入りて酒瓶を見るに、おとなしやかなる男の清氣なるあり。長者の思ひけるやうは、我妻の倉の內にひそかに隱し置きて、我をすかしやりて、殺さんとすることなりけりと心得て、年來の妻を恨みて、既に離別しなんとしけるを、一人の羅漢是の事を心得て、酒の瓶を取り出して、夫妻の前にして是れをうちわるに、其時內を見るに、男なし妻もなし。酒は是れいまだ飮まざるに凶を致す物也。況んや吞みて醉へるに於ひてをや。昔迦葉佛の時、一人の優婆塞ありき。酒に醉ひて本心を失へる故に、人の妻を犯しつ。又鷄を盜みて殺しつ。其の時主腹立ちてかこつ時、殺さずとあらがひぬ。此の故に則ち飮酒、殺生、偸盜、妄語等の五戒を破り畢りぬ。細には『十誦律』にこそ申しためる、此の故に天親菩薩の『俱舍論』には「遮中唯酒を離れよ餘の律儀を護らんが爲なり」と述べ玉ふ。『譬喩經』には「佛身口意の三業之惡行

難陀比丘を御裳のすそに隨へて、雪山の麓へ具しておはしまして、片目つぶれたる猿の有りけるを見せて、汝が愛する妻と、此の猿と何れか増りたると問ひ給ひければ、難陀答へて云く、我妻は形勝れいつくしく侍り、譬をとるに及ばずと申しければ、其より天上に昇りて、天女のなつかしく妙にして、珠縵のはなぶさをかんざしにさして、微妙の瓔珞を以て嚴れるを見せ給ひて、此の天女と汝が妻と何れか勝れりと問ひ給ひければ、難陀答へて云はく、此の天女に比れば、我妻は雪山の猿の如しと申しければ、今生に婬欲を止めたらば、後生には彼天女に倚勝りたる女と遊び戯れて樂むべき也と敎へ給ひければ、難陀忽ちに妻室を離れて、無上菩提の心を起しけるとこそ申し侍るめれ。天竺の美人を天女に比れば雪山の猿の如し。況んや日本國の末代の女は、美しと云ふとも定めて汚穢不淨にして、何事かは侍るべき。速かに難陀が思ひをなして、婬欲を離れて無上菩提の心を起すべき也。

四には不飲酒と云ふは、酒を飲まぬを申したる也。天竺に一人の長者ありき。七寶にともしからず、萬物豐にして、一つの庫倉の内に酒を作れり。壺大にして

り出でゝ、宰相中將俊房に値ひ給ふ。嵯峨の后の、

　事繁しばしはたてれ宵の間に、おけらん露は出でゝ拂はん。

とよみ給ひつるを『後撰集』には、帝に奏し給ふ御歌とは侍れども、俊賴朝臣の『髓腦』には密事に讀み給へるやうにぞ申しためる。世間をそむきて後までも、捨てがたく見ゆるためし多く侍るめり。唐國には則天皇后、我朝には定子皇后宮、尼の後子をうみ給へり。まして其次々の爲業申すに及び侍らず。天竺には師子の妻と成り、震旦には犬に契を結び、我朝には狐を妻にしたるためしあるめれば、人どちの事は理りにぞ侍るべき也。

「婬欲熾盛にして禽獸に擇ばず。此の經を謗るが故に罪を獲ること是の如し」

と『法華經』にも說れて侍るめれば、此道は忍びがたくぞ、見え侍るめるを觀じ給ふべし。不邪婬とて一人をば許さるゝ事も侍るめり、それも懷妊の時、月水の時、病の時、寢所ならぬ所などをば、禁められて侍るめり。昔難陀比丘と云ふ人有りき、淨飯大王の太子教主釋尊の御弟也。婬欲熾盛にして妻室にはなれず。佛是の事をこしらへ教へ給ふと云へども、更に用ひざりければ、佛の神通を以て、

すまれ給ひて、御兄基經大臣、國經大納言などにうばひ還へされて、かくぞ讀み給ひける。

白玉か何ぞと人の問ひし時、露とこたへて消えなましものを。

爲平親王の御娘、花山院の女御は、小野宮右大臣實頼に値ひ給ふ。道信中將も、御消息まゐらせ給ひける程に、右大臣殿に値ひ給ひぬと聞きて、かくぞよみ給ひける。

うれしきはいかばかりかは覺ゆらん、憂きは身にしむ心地こそすれ。

三條院の皇女前齋宮は、道雅三位に値ひ給ふ。此事世に聞えて、御消息をだに奉らぬ事に成りにければ、御方の高欄に結び付け給ひける。

陸奥の緒絶の橋やこれならん、ふみゝふまずみ心まどへる。

廣幡女御は村上の女御、中納言廣明の娘也。左大臣顯光の妻に成り給ひ、承香殿の女御は左大臣顯光の御娘、一條院の女御也。二人ながら宰相右兵衛督源頼定の君に値ひ給ふ。延喜女三の宮は、九條右大臣師輔の妻に成り給ふ。村上の女三の宮は、太政大臣兼家に値ひ給ひ。後朱雀院皇女賀茂の齋の宮は、本院よ

犬を陣の中へ入れたりければ、犬題信が妻の夷と寢たる所をかぎ付けて、衣をくひて引き出して、題信が許へ具して來りければ、題信喜しと思ひて、いざ具して還らんと云ひければ、婦の云ふやう、夷は寢入りたり、大事の物を忘れたり、取りて歸り來んと云ひて、陣の內へ入りて、夷を驚して、我男の追ひ來る由を云ひて本の男を殺させんとする事なり。我朝の事は、家々の日記『世繼』『伊勢物語』などに細に侍るめれば、申すに及び侍らざれ共、是も片端ばかりを申すべし。

高野天皇は、弓削道鏡に思ひ付きて、十善の位をさへゆづらんとて、和氣淸麿を勅使として、筑紫の宇佐宮へまゐらせ給ふ。伊勢の齋宮は、業平の中將のかりの使にて下りたりけるに、神慮をはゞからず、心を通はして、自らおはせる事有りき。又五條の后は、太政大臣冬嗣の御息女にて、仁明天皇の后也。業平中將に値ひ給ひて、優しき事ども侍りけり。さればとて値ひ給へる御年かは、后は四十二にておはしけるに、中將は二十五とぞ申しためる。

月やあらぬ春や昔しの春ならぬ、我身ひとつはもとの身にして。

二條の后は、贈太政大臣長良の御娘、淸和天皇の女御也。それも業平中將にぬ

をくじり給ふ事也。震旦又替る事なし。是を少々申侍るべし。夏太后は嫪毒を愛し、則天皇后は長文成に値ひ、陵園の妾は潘安仁に契をむすぶ。顯信が婦はゑびすに思ひうつりき。又夏太后と申すは、秦の始皇の母也。嫪毒と云ふ者は、玉莖大につよくして、車のよこがみに輪をかけて持ちあぐるをきゝて、召し擧げて人目を忘れて値ひ給ひし事也。又則天皇后と申すは、高宗の后也。長文成と云ふ、色好みに値ひて、遊仙窟と云ふ文を得給ふ事也。あなにくの病鵲のやもめがらすや、夜中に人ををどろかすと云ふは其度の事也。又陵園の妾と云ふは、潘安仁と云ふ形好き人に値ひ給ひ、かくし文あらはれてかくれ無くて、陵園と云ふ所へ遷され給ひし事也。又顯信が妻は夷に思ひつくと云ふに顯信には武士なり。夷起りて公城を責む、顯信力を勵して、戰ひて夷を追ひ歸しつ。夷背きさまに、顯信が家に行きて、最愛の妻を取りて行きぬ。顯信家に歸りて、妻を尋るになかりければ、顯信頓て追ひて行くに、人は皆鬪ひにこうじたりければ、年來飼ける犬計を具して唯一人追ひて行きけるに、夷ども戰ひ疲れて臥せる所に至りぬ。我妻は何方に有らんと知らざりければ、犬は心ある物なり、我妻の有る所求めて來よとて

れば、術婆迦かくすと云へども、終ひに母に語る。是れを聞きて思ひをとめんために、王宮に詣でゝ、后の方にたゝずみけるに、后恠みて故を問ひ給ふに、網人が母事の次第を語り申す。后是れを哀れと思召して、五百兩の車をかざりて、社頭へ參り網人にあはんと契り給ふ事也。(一)『大論』に、女は貴賤を嫌はず、但欲すれば是れに隨ふと申したるもことはりにこそ侍る。皇女は馬下兒に縁をむすぶと申すは、天竺に大臣あり、形好き妻を持ちたりけり。大臣妻に志ふかくして、住みわたるといへども、妻大臣に志なくして、密夫を以て常に通ふ。大臣此の事を恨み歎きて、志深き故にしらぬやうにて過ぐる程に、王宮に參り宿直するに、皇女ひそかに、馬を飼ふものゝ奴婢の臥せるに値ひ給ふを見つ。大臣是れを見て、我妻一人のみならず、すべて女の心憂たてき事を悟りて、愛心を失ひて發心する事也。委には(二)『諸經要集』にしるしたり。恒河にて水を浴みて懺悔すると申すは、天竺の后、ひそかに臣下に値ひて、公にうとまれ奉りて、恒河にて水を浴みて身をきよめて懺悔する也。鳩那羅太子の眼をくじると云ふは、阿育王の后の、繼子の鳩那羅太子に思ひをかけ給ふを、太子かたく辭し申し給ふによりて、太子の眼

(一)『大論』龍樹の『大智度論』のこと。

(二)『諸經要集』二十卷あり、唐の道世集、諸經の要文をあつむ。

戀しかりければ、見んと思ひて登りける程に、旅宿に行き逢ひて母ともしらで犯したる也。順源法師は、知りながら娘を嫁ぐと云ふは、流轉生死の往困を觀じて孰の人か我父子ならぬはあるとて、娘を妻とする也。遂に往生の素懷をとげたる人也。まして女は心憂くうたてき物なれば、我ながらもうとましく覺すべき也。

所有三千界。　男子の諸の煩惱。　合集して一人と爲る。　女人の業障。
女人は地獄の使。　能く佛の種子を斷ず。　外面は菩薩に似たれども、內心は
夜叉の如し。

是れは『華嚴經』の文也。佛は虛言をし給はんやは、實にさなんめりと覺ゆる事ども多く侍るめり。是も天竺、震旦、我朝をろ〳〵申し侍るべし。皇后は網人に逢はんとちぎり、皇女は馬下の兒に緣をむすび、或は恒河の水を吞みて懺悔し、或は倶那羅太子の眼をくじりき。

皇后の網人にあはんと契り給ひし事は、天竺に網人あり、名を術婆迦と云ふ。魚を持ちて王宮に至るに、思はざる程に、術婆迦后を見奉りて後、煩惱の思ひさむる時なく、歎き悲みて病の床を起きず。術婆迦が母此の事を恠みて、故を問ひけ

の驗をもちながら、子を設くる事を云ふ也。志賀寺の聖人の、貴女に行業をゆづると云ふは、京極の御息所、時に左大臣の女、志賀寺へ參り給へりけるを見奉り、次の日彼の御息所の御もとへまゐり、對面し給へりけるを悦びて、御手を取りて讀み侍りける歌。

初春のはつねの今日の玉はゝき、手にとるからにゆらぐたまの緒。

と詠めて、今生の行業をゆづり奉ると云ふ事也。此歌『萬葉集』二十にあり。家持中納言が詠ずる所也。同じ心に讀み合するか、古歌を詠ずるか、能く尋ぬべきなり。京極の御息所と申すは、延喜の女御に參り給ふ夜、寬平法皇の出立見んとて、御幸て見給ひけるに、心に着き給ひければ、老法師に給はりぬとて、押し取り給ふ人の御事也。又花山の法皇の十善の位を捨てゝ、所々に修行し給ひしが故鄕に歸りて御めのとの子、中務と云ふ女房に落ち給ひし事也。和泉の僧正は、行業貴くて高位に登り給ひし程に、東三條女院、兼良關白の娘に名を立つる事也。又明達律師は、下野國の人也。幼少にして天台山に登り、漸く學文して人となりけるまゝに、生國へ下りて母を見んと思ひて下る程に、母又天台山へ登りし子の

威が家に戯る。賢王は城にこめられて糞穢の中をくゞり、智臣はもとゞりを切られ〻參內をとゞむ。劍をぬき弓を引きて用心せし武者も、西施南威と云ひし美人のもとに行きて、打とけて遊び戯る事也。天竺の國王、ひそかに女のもとへ御幸し給ふ。女の親、只也人なめりと、殺して物をとらんがために城にこめつ。國王にぐる方なくて、糞穢の中をくゞりて逃げ給ふ事也。同國に大臣あり。名を增養と云ひき、女に愛し戯るゝ間に、もとゞりを切られて、參內をとゞめ籠り居る事也。聖人も是に堪へず、武士も彼を忍ばず、賢王も是れを愼み給はず、智臣も是れに憚らず。吾朝の事はあまり耳ちかにぞ侍れ共、それも少々申し侍るべき也。(一)淨藏貴所が驗德をあらはす、終ひに眞の弟子を設け、志賀寺の聖人の行業つもりしも、貴女に戀する事あり。花山の法皇は、十善の位を捨て給ひし御めのと子におち給ふ。和泉僧正の高位に上るも、國母に名を立つる事あり。明達律師は母を犯し、順源法師は娘を嫁ぐ。この道において忍びがたき事とぞ見侍るめる。淨藏貴所の驗德を顯すと申すは、帝王師父三人に驗德を施して拜まれたりと申し侍るめる。加之、珍皇寺の北にある八坂の塔のゆがめたるを、護法して直さるゝ程

(一)淨藏。三善清行の子、叡山に上り大慧法師に師事し、頗る神異あり、康保元年寂す。

欲を行ひき。一角仙人は、雨のふりて道のあしかりけるに腹を立て、諸の龍王を水瓶にかりこめて置く程の、驗ある人なりしかども、玉女の遊ぶを見て心をうつして驗を失ひける也。四目居士と云ひし行者は、臣家の娘に念をかけて、行法を忘るゝ事を云ふ也。鳩摩羅炎は、天竺の大臣也。佛法を重くして出家し、天竺を捨てゝ、龜茲國へ移りしほどに蒙遜王の御妹に押し合せられて、羅什三藏を設け給ふ事也。羅什三藏は只人にあらず、一日に八十張の聖教を覺ゆ、『法華經』を飜譯する人也。然りといへども、四人の子を設けて、各公と云ふ名を付ける事也。大樹仙人は、定に入りて行ずるほどに、女を見て婬欲を起し、忍びがたき故、定を出でゝ、負ひてはしりし事也。かさん比丘は、優婆麹多の弟子也。麹多女人に近付くべからずと制し給ひければ、我さる心なしとあながちに諍ひ申しけるを、心を見んとて、麹多女に變じて河を渡り給ひけるをかさん比丘手を引きて渡るほどに、婬欲を起して、麹多を犯さんとしければ、老法師をば河の料にかくはしたまふとて現れ給ふ事也。(二)須陀洹の聖人猶ほ然也。況んや末代の凡夫をや。劍をぬきて隙をうかゞひし人、西施が床にあそび、弓を引きてたんを求めしもの、南

(一)須陀洹。欲界の見惑を斷じて始めて聖者の部類に入れる位。

ために家を出んとせし時、此子六歳と云ひし時 我をばいかにして世にあれとて捨てては出づるぞとて足に取り付き啼き叫きしかば、恩愛見捨がたくして、其度の佛法修行を思ひとゞまりき。其の故に出離の方便なくして、又五百世の間、六趣に輪廻して、此度はかう〳〵して羅漢果を得たれ。彼の昔の六歳の子と云ふは、今に輪廻をはなれず、則ち此の鳥なりとぞ云ひける。されば婬は種のごとしとぞ申しためり。物の種こそは、をのづから大地に落ち散りぬれば、群り茂り草木とはなり侍るめり。婬も亦かくの如し、はかなく犯しつれば、五百世の間佛道をさまたぐ。まして著を成せらん罪、思ひやりて知り給ふべし。流轉生死の業は婬欲による也。春の駒の身を損ひ、秋の鹿の命を失ふも、唯婬欲のたぶらかす故也。銅を飲む象、鐵を食ふ犬、なをし此道にたえず。況んや人倫においてをや。一角仙人は、玉女の容に近付きて験を失ひ、四目居士は、呂子の命に隨ひて行を怠り、鳩摩羅炎は、龜茲國の玉女に縁を結び、羅什三藏は、四人の子を設けき、大樹仙人は、女を見て定を出づ。かさん比丘は、優婆麴多に化され、憍迦梵梵志が不還果を證せしも、女人を捨つる事なし。初果の聖者の法を信ぜし、晝夜に八十度婬

（一）『安樂行品』、『法華經』第十四品の名、釋迦佛文殊菩薩の問に答へ四安樂行を說きて、『法華經』を弘通し修行すべきよしをいへるもの。

しつれば、五百世の間、彼に隨て六趣に輪廻す。毒蛇は見るとも女人をば見るべからず、諸婬は女人に近付くが故なり。相かまへて是れをば遠ざかるべきなり。（二）『安樂行品』に、諸の婬女に近付くべからずなど侍るめり。是までは事もおろかに侍り。

一たび女人を見れば、三惡道を離れず。永く三途の業にしづむ。何に況んや一たび犯すをや。定んで無間獄に墮せむ。

など侍るめれば、見るにさへ三途の業を結び侍るなれば、とかく申すに及び侍らず。誠に左やあるらん。中比高野に侍りける聖人は、母の麓に詣で來て見んと申しければ、女人を見じと云ふ願のあればとて、逢はざりなどこそ申し置きて侍るめれ。大聖牟尼尊、無虛妄の言をもつて說き置き給ひつるにと、努々疑をなす事なく、女に近付き給ふまじきなり。昔一人の羅漢道を行くに、樹の枝に烏の居たりけるを見て、打笑ひて通り給ひければ、弟子あやしみて所以を問ひ奉るに、羅漢弟子に語りて云はく、我五百世のさき、優婆塞にて有し時、婬行多かりき、自然一人の子をまうけたりき、然りといへども世間の無常をさとり、佛道修行の

給べき事也。又(一)六識の賊と云ふ事あり。一には萬の物を見て欲しきと思ふ。二つには人の語る事を聞きて欲しきと思ふ。三つには物の香かぎて欲しきと思ふ、四つには舌に物の味を知りて欲しく思ふ、五には身にふるゝものは愛着を成して欲しく思ふ。六つには心に物を案じて思ひ出して欲しと思ふ。これみな輪廻の業なり。能々愼みて生死を離れ給ふべき也。

賊の龍田の山に入りにけり、同じかざしの名をやながさん。　藤原爲頼朝臣

盜人と云ふもことはり小夜中に、君が心を取りに來たれば。　讀人不知

雪の色をぬすみて咲ける卯花は、さへずや人に疑るらん。　源俊頼朝臣

小夜更けてぬすまれなくば郭公、聞きあらはしつ老の寢覺めに。　源仲正

主しらぬ花は見るとも袖ふれじ、匂をとるに成りもこそすれ。　左大將實定

三に不邪婬と申すは、妻ある者を夫とせず、夫ある者を妻とせずと制戒る也。されどもこれは一人をばゆるされて侍るめれば、事もおろかに侍るめり。又不婬とて、女の方へ目をだに見やるべからずと、數多の經の中に制し戒められて侍るめり。此次に大方の不邪婬戒の文を少々申すべし。女人は煩惱の源也。一度も犯

(一)六識、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識。

りて、惡行をしづむべしと相議して、數萬の軍を發して、波斯匿王宮をせむ。國さはぎおどろきて、佛在世の事なりければ、祇園精舍にこもりて、佛たすけ給へと申し給ひければ、佛五天竺の長者居士の軍に告げて曰く、三十二人の卵の武士は、昔三十二人の盜なり。酒を盜みて飲む時、さかなのために肥えたる牛のありしを殺して食ふ。此酒を飲み牛を食ふ家の主ありき。酒を飲ませ牛を食はせき、家主受け悅びて是れを愛し味ひき、此の家主と云ふは、三十二人の武士の母、今の毗舍利也。喜び愛敬せしが故に今悲む也。肴に成りし牛と云ふは、波斯匿王なり。三十二人同心合力して殺しゝ故に、今三十二人一度に殺さるゝ也と宣ひければ、長者居士の軍共、淚をながして歸り去りぬとこそ申して侍るめれ。ゆめ〳〵人の物を盜み取る事なかれ、此事ほのかなる傳にあらず、慥の經文なり。

表日寒甕子方の裘を得ず。　公給餓死盜父之粟を受けず。

賢き者は、かく主のあたふるをすら、得まじき者の物をば得ぬことにてぞ侍るめり。況んや主の惜み畜はふる物を、猶ほ盜む事なかれ。盜の罪の事、律令と申す文に、こまかに定め置かれて侍る也。況んや後世の責を蒙る事を、まく〳〵知り

をなびかす。舍衛、憍薩羅二箇國にかたをならぶる人なし。（舍衛、憍薩羅は一國各別の論議也。）時に一人の輔相（輔相とは大臣を云ふ也。）の子道を行くに、三十二人の武士の中に、少々行きあひて事をいたす。のりあれなど申すことやらん。大臣の子、はぢを見怨を懐くといへ共、力及ばずして年月をおくる。父の大臣此の事を欝念して、事をかまふることあり。三十二筋の鞭をかまへて、各々なかに劒をこめて飾りとうまきなどして、三十二人の武士に見するに、各々けこしてあひて一筋づゝ取りつ。大臣はかりごと成就して、國王に奏する様、憍薩羅國のならひ、國王の御前へ鐵の類を以て參る事なし。然るを三十二人の卵の武士、各鞭の中に劒をこめて、君をたばかりたてまつらんとするよし、承り候と奏しければ、國王駭きて鞭をめすに、三十二人の武士、此事をしらず心得ずして鞭を奉るに、各劒をこめたり。國王此事披露評定あらば、中々あしかりぬべかりければ、數多の將軍等に仰せて、三十二人の卵の武士の頸をきり給ふ。三十二人の武士の縁者、或は舅と云ひ、或は聟と云ひ、五天竺に充滿せり。長者居士等、大に慍りを成すと申しながら、させる罪科もなくして、三十二人の罪を行ひ給ふ。是れ人のうへにあらず、願くば波斯匿王を殺したてまつ

給ひし朝、御舍利を三に分ちて、龍宮城天上人間に賦し時、或は力を以て押し取らんとし、或は軍を起して奪はんとせしかば、心すなをなる人なりとて、香姓波羅門に賦せけるに、猶し一粒の御舍利を犯し用ゆる事ありき。又天帝釋の牙の舍利の給りて、あがめ行ひ給ひし。則ち四天王の子にぬすまれ給ふ。東方朔王母が薗の桃を盜みけることなどは、事も愚かにぞ侍るべき。白波綠林輩五十人をともなひ、梁の王公が族は八百人を具したり。鐵は針にてはて、人は盜にて終る。盜は是れ生生世世を經れども、其咎まぬかるゝ事なし。一の證を申すべし。憍薩羅國に一人の長者、行幸を悅びて、いとなみさはぎけるほどに、中間の女と申したるは、半者なんど云ふものやらん、名を毗舍利と云ふ。此女帝の勅命に隨ひて、使ひよくおぼしければ、長者に乞ひ取りて、波斯匿王宮人に具して歸り給ひぬ。殊にめしそひ寵愛して、夫などを合はせ給ひければ、懷妊しにければ、產を待つほどに、三十二顆の卵を生めり。母これをあやしみ恐ぢずして、衾をおほひ綿にあたゝめて、日數ををくる程に、三十二人の男子となれり。やう／＼生長して、各力つよく心たけくして、武勇をもてさきとす。一國これに恐怖れ、殆んど隣國

網代木にかけつゝよする物ならば、日をへて洗ふ錦なりけり。讀人不知

もろともに行かまじ物を網代木に、ひをまつ老の波なかりせば。源有房

冬くれば網代にかゝるひをゆへに、人も立ちよる宇治の川波。藤原定家

打ちはらふ雪もやまなん御狩野の、きゞすの跡を尋ぬ計に。能因法師

すがるなく裾野のとたち狩り行けば、眞柴が末も色付きにけり。勝明法師

二にに不偸盜と申すは、一草の草一筋、一針の針一をも、主にしらせずして取り侍らぬ也。況んや其の外の物をや、昔大聖世尊、戯れに阿祇陁長者が麥を取り給ひし故に、五百世の中に驢の報を受け給ひき。(一)憍梵波提、手ずさみに路の頭に落ちたりし粟の穂を取りたりし故に、多百生の間牛の體と成りにき。

釋尊佛位に昇る。　馬を示す麥の徃因。　羅漢(二)諸漏を盡し。

手跡の名稱を留む。

と申すは是れ也。加之佛の物を盜めりし人は、生生に手なき者に生まれ、朱砂を取りたりし者は、世世に指赤かりき。此の理を知らずして、愚に盜犯せる者多く侍り、或は觀音の眉間の玉を盜みつ、或は堂荘嚴の佛物を取る、佛栴檀の烟と昇り

(一)憍梵波提。牛司、牛主と譯す、釋尊十大弟子の一解律第一と稱せらる。

(二)諸漏。諸の煩惱惡業のこと。

み殺されぬべかりければ、須彌山を越えて、金翅鳥の卵のなき道へかゝらんとて歸り給ひけるを、修羅の軍、是れは天帝の兵をたけくなして、思ひかへして戰ひに來るなんめりと思ひてにげゝる程に、則ちせめをとされて負けにけり。是れは則ち天帝釋の不殺生の力に依るが故也。加之『大莊嚴論』には、將軍殺生戒を持てる故に、異國の軍をしたがふなと申したためれば、不殺生戒の力ばかり、ほとりもなく侍るべし。然りと雖も、此理を知らずして、物の命を殺す人は多くぞ侍るめり。小倉山の木の下には、木串を立てゝ鹿をねらひ、大井川の瀬には、篝火ならべて鵜をつかひ、宇治の網代には氷魚をもてあそび、交野の御野にては鷹を放ちて興をます。此心歌にて少々申し侍るべし。

あやしくも鹿の立どの見えぬ哉、小倉の山に我やきぬらん。　平　兼盛

立田山鹿の立どに夜もすがら、思ひをかけて明かしつる哉。　中納言俊忠

夏蟲の何はかなしと思ふらん、しかもともしに身をばかへけり。　沙彌観蓮

さまた川下す鵜舟にさす掉の、をときゆるまで夜は深けにけり。　二條院讃岐

飛びすぐる螢とぞ見る早瀬川、下す鵜舟のかゞり火のかげ。　季能朝臣

ちて待ち給ひ。羅漢參りたる由を奏しけるに、國王圍碁に切るべき處の有りけるに、興に入りて切れと宣ひけるを、羅漢を切れと宣ふなんめりと思ひて、則ち羅漢の頸を切りてけり。其後國王碁を打ち果て給ひて、羅漢を此方へと請じ給ひけるに、早く切れと仰せられつれば、切り侍りぬと申しける時に、心憂くあさましく思食しけれ共及ばず。是れは佛在世の事なりければ、佛の所に參り詣でゝ、此の有樣を申し給ひければ、佛國王に告げて曰く、昔國王は蛙にて田の中におはしき。又彼羅漢は田を作る農夫なりき。田を作る程に、鍬と云ふ物を以て、心ならず蛙の頭を打ち切りてけり。農夫悲み悔ゆれ共甲斐なくて止みぬ。今其業をつくのはんが爲めに、心ならず殺さるゝ也。物の報ひと云ふ事は、心を起して殺さば心を起して殺さるゝ也。心ならず殺せば心ならず殺さるゝ也。無始生死より、諸佛の出世の利益にもれて、六趣に輪廻して悲しむ事は、不殺生戒を持たざりしが故なりとぞ宣ひける。又持ちて破らざれば、後世までは申すに及ばず、現世に見する利益侍べり。

天帝釋修羅の軍に責られて、須彌山ににげ登りけるに、金翅鳥の卵の、多く蹊

てけり。師子手を負ひて、「我が命をば死ぬ共、袈裟をかけ衣を著たらん者をば殺さじ」と云ひて死しけり、こまかには『報恩經』に見えたり。

昔國王鹿野苑にして狩をし給ひけるに、多くの鹿うせにけり。二つの鹿の王あり、各五百の眷屬の鹿あり、鹿の王公に申して云はく、御狩のたびに多くの鹿失せぬ。願くは御狩を止め給へ。日次の鹿を進んと申しければ、鹿王の申す旨に任せて、日次の鹿を奉るべしとて、狩を止められぬ。鹿の王大に喜び、日次の鹿を奉る。去程に一の孕める鹿ありける。鹿王に憂へて曰く、「我今日の番に相當れり。然りと云へ共、此孕める子をうみたらば、今一日の日次の鹿も出で來りなんず、今日の番を他の鹿に指しかへてよ」と云ひにければ、誠に左もある事ならば、他の鹿を指しかへるに、誰も命の惜き事はかはるべからずと云ひて悲みければ、孕める鹿に子を生ませんが爲めに、鹿の王自ら日次に替り出でにけり。かゝる畜生すら物の命の死するをば哀しむ事にてぞ侍る。まして況んや心有らん人、物の命を殺す事なかれ。誠には『六度集經』に云へり。

昔天竺の國王、行業貴き羅漢を歸依せんが爲めに迎へ給へり。其の程圍碁を打

沙彌の(一)『法句經』の偈を讀みけるに、聲のあしかりければ、聞きながらなをさぬをば、佛の禁め給ひし事なれば、聲の違へる由を云ひてなをし給ひけるに、沙彌いかりをなして、我師は年若き人なり。よも僻事をば教へ給はじ。阿難は年老ひ給へる人なれば、僻事をぞ云ふらんと云ひて、直さゞりければ、此國の人の心惡く成りにけるとて、摩謁陁國を捨てゝ、すぐに毗沙離國へ移り給ひけるを聞きて、摩謁陁國の王、數萬の軍を發してをひ給ひけり。毗沙離國の王、此事を聞きて、若干の兵を集めて待ち給ふほどに、恒河の邊に行き合ひて、旣に戰はんとするほどに、阿難我故に多くの人の命失せなんずとて、自ら火城三昧に入りて燒け死に給ひぬ。又身を二に分つとも云へり。持戒のならひかやうに我が命をば失へ共、物の命をば殺し給ひ侍らぬ也。昔五百の緣覺の行じける所に、金色なる師子有りき。これを堅誓師子と云ふ。一人の栴茶羅これを見て、いまだ獸の金色なるをこそ見ざりつれ。これを殺して皮をはぎて、公に奉らせたらば、賞はかふりなんと思ひて、法師のまねをして衣の下に弓矢をかくし持ちて待ちける程に、師子僧をなつかしきものに思ひて、むつれたはぶれたる隙をはからひて、よき所を射

(一)『法句經』一巻あり、法救尊者の撰、呉の維祇難等の譯なり。

き也。五戒とは、殺生、偸盜、邪婬、妄語、飲酒を申したる也。

一つに不殺生と申すは、物の命を斷たぬ事、蟻の卵をすら殺すべからず。殺の因、殺の緣、殺の業と云ふは、自ら殺さぬのみにあらず、人の殺すにも同意せず、人にも敎へて殺させぬ也。先一の證據を申すべき也。

持戒の比丘、里に出で丶、乞食頭陀する程に、玉造る人の許へ行きぬ。玉造玉を磨きさして家の内へ入る。其間に鵝と云ふ鳥出で來りて、磨きさしたる玉を飲みつ。玉造歸り來つて、玉を見るに無かりければ、乞食の沙門の盜めるなんめりとて打ちせたむれ共云ふ事なし。是を打ちせたむるほどに、大きなるかなつちぬけて、鵝の頭に當りて、鵝ふためきて死しぬ。漸暫く有りて沙門人に問ひて曰はく「此鵝生き歸りなんや」と云ふ。人答へて云はく「此の鵝身冷えはてたり、今は生き歸る事有るべからず」と云ふ。時に「さらば鵝の腹をあけて見よ」と云ひければ、鵝の腹を見るに、玉うせずして腹の内に有りけり。其の時に玉造は罪なき沙門をせためける事をぞ悔ひ悲み侍りけり。乞食の沙門は鵝珠を死後に顯すと、天台の『戒牒』に書き給へるは是れ也。如來の滅後に、阿難道を行きけるに、

(十)二十五の善神　五戒に各々五人の善神ありて戒を護るを云ふ。
(十一)三千威儀。『大比丘三千威儀』二卷に說く。
(十二)四十八輕。『梵網經』に說く不敬師長戒等の四十八種の輕戒を云ふ。
(十三)三聚戒。大乘の菩薩戒にて、攝律儀戒、攝善法戒攝衆生戒を云ふ。
(十四)十種得戒。不殺不盜等の十種の戒法を云ふ。
(十五)八齊戒。不殺生等の八禁戒は齋法を助成するが故に八齋戒と云ふ

寶物集卷第四

○第三に戒を持もち佛となるべしと申すは、慥の證據に侍るべし。如來の禁戒の城に入りぬれば、(一)見思、塵沙、(二)三毒、(三)五蓋、(四)十使、(五)九十八の煩惱、八萬四千の惡業の軍、そこばくの勢を起して責め來ると云へども、全く落とさるゝ事なし。此故に(六)『梵網經』には、持戒の人は淨土人天の報を受くと云へり。犯者は地獄鬼畜の報を感ずと說き、(七)『成實論』には、淨戒なければ、諸善生ぜずと敎へ、(八)『智度論』には若し人最大の善を求めんと思はゞ、まさに戒を持つべし。持戒人事として得ずと云ふ事なしと云ひ、(九)『十誦律』には、戒を持つ人、(十)二十五の善神圍遶すとは申したる也。此の故に能く持つ人をば、持戒と云ひ、十善と云ひ、能く破れるは破戒と云ひ、十惡とは申したる也。戒の有樣廣く申さば、菩薩戒より沙彌戒にいたるまで、八萬の律儀、(十一)三千の威儀、(十二)四十八輕、(十三)三聚戒、(十四)十種得戒、(十五)八齋戒なんども侍れ共、佛妙海大王の爲めには、十戒を敎へ、提謂長者が爲めには、五戒をさづけ給ふが故に、先づ暫く五戒の有樣を申し侍るべ

(一)見思塵沙。見惑、思惑、塵沙惑。
(二)三毒。貪欲、瞋恚、愚痴。
(三)五蓋。心を蓋ふ五種の煩惱、欲貪、瞋恚、惛眠、掉悔、疑。
(四)十使。五利使と五鈍使。
(五)九十八。煩惱を九十八種に分てるもの。
(六)『梵網經』。二卷あり、鳩摩羅什の譯、十重、四十八輕戒を說く。
(七)『成實論』。十六卷あり、訶梨跋摩造、鳩摩羅什の譯。
(八)『智度論』。大智度論と云ひ百卷あり、龍樹菩薩造鳩摩羅什譯。
(九)『十誦律』。五十八卷あり、後秦弗若多羅、鳩摩羅什と共に譯す、薩婆多部の律なり。

一度びも南無阿彌陀佛と云ふ人の、蓮の上に登らぬはなし。　空也上人

阿彌陀佛と唱ふる聲に夢覺めて、西へ傾く月を見る哉。　選子内親王

今日開く寶の箱のをしてこそ、西へ行くべきしるし成りけれ。　讀人不知

梅の木の枯れたる枝に鳥の居て、花咲け〳〵と云ふぞはかなき。　清水寺の夢の歌

垂乳根はかゝれとてしもむば玉の、我黒髪を撫でずや有りけん。　僧正遍照

せきとむる山下水にみがくれて、澄み濁る物を秋の氣色は。　法眼實快

法のためのべしみ山の苔莚、まづ色々の花ぞふりしく。　雅道入道

も、天童鉢を以て廻る。爰を以て佛證果の羅漢なくば、持戒の比丘を供養せよ。持戒の比丘なくば、破戒の僧を供養せよ。破戒の僧なくば、頭を剃り衣を著たらん法師を供養せよ。大國に海の渚に鳥あり、玉を含みて捨てつ。鳥は寳と知らねども、玉は寳と成りぬ。僧不淨なりと云へども、供養の功德は寳と成りぬと宣へり。又(一)『十輪經』に云ふ、喩へば膽蔔花の萎めると云へども、餘の花の鮮かなるに勝れたるが如く、我が弟子も戒を破ると云へども、亦復た此くの如し。此故に一切の僧に於て、歸依を致し、僧を供養すべし。爰を以て(二)須達長者は、寺を作りて居ゑ、耆婆大臣は、湯を沸して僧に滌せ、影賢王は、千僧を供養し、太子に傳へて懈る事なく、阿育僧の諸僧を拜せし、大臣制せしかども、止む事なく侍りき。又維那と云ふ者愚にして外の僧慢しかば、九十一劫蟲の報を受けたり。又少年の戯れに、老僧を笑ひしかば、五百生の間犬の形に生れき。各法師と云ふ者を嘲かずして、歸依を致すべき也。黃帝の天老を訪ひし、百二十年の算を持ち、漢武代宗を祈りし、八十の壽を得たりき。況や往生極樂の望に於てをや。豈に三寳に祈らざらんや。佛法僧の歌も、少々侍り。一兩首申すべし。

(一)『十輪經』、『大方廣十輪經』と云ふ八巻あり。譯者を失す。

(二)須達長者。仁にして貧をすくひ博食を孤獨の人に施せし故給孤獨長者と云ふ。深く佛に歸依し、祇陀太子の園林を得て祇園精舍を建立せり。

んどは、承はるに返々頼母敷くぞ侍る。專ら名號を稱ずれば、極樂に往生し、(一)大悲神咒を受持する者、三惡道に墮つと云はゞ、我誓ひて正覺を取らじと宣へり。延暦寺の座主なりける(二)延昌は、(三)尊勝陀羅尼の功德に依りて、極樂に往生すと云へり。尊勝陀羅尼の功德、現世も目出度くぞ侍る。九條右大臣師輔公は、阿野の阡にして百鬼夜行に値ひ給うて、尊勝陀羅尼を滿てゝ、鬼の難を免れ給ふ。西三條大將光行卿は、若君の時、神泉苑の前にて、百鬼夜行に逢ひ給うてありしに、乳母の小袖の頸に、尊勝陀羅尼を縫ひ含みたりけるに、依りてこそ、助かり給ひけれ。増して地獄の中なりとも、阿防羅刹も、爭でか旁去たてまつらでは侍るべきや。次に僧と申すは、諸の聲聞緣覺を申すべき也。然りと云へども、此世には有り難く侍る故に、頭を剃り衣を染めたらん者を歸依すべき也。龍の子は稚しと云へども輕しむべからず、雲を起し雨をそゝぐ故に。(四)沙彌をば小しとても慢るべからず。道を歴て人を渡す故に。指鬘比丘は惡人なりしかば、孰か過去の如來とし る。不輕菩薩は下劣の姿なりしかば、打つ人未來の教主と思はず。野中に臥せる乞食の沙門、大聖文殊の化身也。みるをつは大食無智の者なれど

(一)大悲神咒。千手觀世音の陀羅尼のこと。

(二)延昌。天慶九年座主となり、康保元年寂す。

(三)尊勝陀羅尼。佛の帝釋天のために説き玉へる陀羅尼、一切の惡道を淨め、一生死の苦を除き、增壽利福を得せしむと云ふ。

(四)沙彌。息慈、勤策男と譯す、惡を息めて慈悲の行を修する出家の男子にして行修未だ至らざるもの、小僧と云はんが如し。

深く信じて頼み奉り、成佛せさ給ふべき也。

次に法を信じ佛に成るべしと申す。(一)方等、般若、法華、涅槃、是等の經は、皆成佛の因緣を說き給へる也。是をば(二)顯宗と云ふ。顯宗の心を大樣は『法華經』に究む。『法華經』の修行別に申すべき故に、(三)先密宗の方を少々申すべし。密宗は是宗の重きが故に、輙く申しのべかたき上、あやしの山寺法師なんどは、申し開くに及ばず、只人の談にする事どもを、少々申すべし。昔くはく婆羅門と云ふ者ありき。毎日に千の生物を殺す。罪業重き故に、命終の時地獄に墮ちぬ。漸く日かさなり年積る程に、(四)隨求陀羅尼の一文字、自らくはくが墓所にかゝりぬ。此功德の力に依りて、地獄の鼎破れ、冷しき池となりて、七寶の蓮華開けて、苦患を免れぬと云へり。況や心を盡して陀羅尼を誦み書きたらん功德、いかばかりならん。實に眞言の功德は、目出度き事に侍り。法身の眞言は、一返を誦すれば、一切經を百万返誦みたる功德に等しと云へり。(五)寶篋印陀羅尼の持者の、高峰に上りて見るに、目にかゝる程の衆生、惡趣を免るなんど申したるめれば、實に賴母敷く侍り。決定往生の眞言の名を聞くに賴みあり。(六)千手尼羅尼の功德な

(一)方等般若。天台の五時の判後の中後の三時を出す。
(二)顯宗。顯露に說ける宗旨即ち華嚴天台等の諸宗のこと。
(三)密宗。淫深秘密の教へ即ち眞言陀羅尼宗のこと。
(四)隨求陀羅尼。大隨求菩薩の陀羅尼のこと。
(五)寶篋印陀羅尼『一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經』に說ける眞言のこと。
(六)千手陀羅尼。千手觀世音の陀羅尼のこと。

初めて京に上りて、彼の御堂に參りて見ければ、事の儀式ゆゝしかりけり。宇治殿賴通、關白左大臣にて、願主の御子にて、官人番長の御隨身二人を拂はせて、四位五位の前駈、其數多く相具して參り給ひければ、御弟の君達、内大臣、左大將を初めて、萬人もてなし畏まり給ひけるを見て、あなゆゝしの事や、一の人の御果報こそ、目出度き事なれと思ひける程、又其時の御門は、後一條院の御位にてぞおはしましけるが、鳳輦の御輿にて、左右の兵衞の陣を引きて、左右の樂屋より亂聲を奏して、身の毛もよだつ程に覺えければ、是をば見奉りて、公こそ猶目出度き御事におはしましけれと思ひけり。さて有る程に、御門御輿より下りさせ給ひて、堂の莊嚴は心も詞も及ばず、極樂のやうに飾りたるに、皆金色の御佛の眸を並べて御座しけるを、御門をし拜みまいらせ、御手を合せて渡らせ給ひければ、此翁思ひけるやう、猶佛計りの目出度き御事こそおはしまさゞりけれと思ひて、彌佛に念をかけ奉りけるとこそ、語り侍りけれ。早く彼の翁の思ひける如く諸佛に心をかけ奉り、佛道を願ひ給ふべき也。十方三世の諸佛は、一體分身なるが故に、何れの悲願も皆以て利益此の如し。されば何の佛菩薩にてもましませ

く許す事なしと云へども、證空生死無常の有様をこしらへ云うて、「三界の中に流轉して恩愛たゆること能はず。恩を棄てゝ無爲に入るを眞實に恩を報ずるものと云ふ」と、佛の說かせ給へるなれば、親の恩は三界を離れざる恩也。師の恩は三界を離れて無爲に入る眞實の恩也我已に師匠の恩に命を捨てなん功力に依りて母も必ず無爲の都に入り給ふべし。心易く思ひ給へと云ひすてゝ、急ぎ歸り來りて、已に師匠に代る。晴明云ひつる如く祭り替へけり。其後證空忽ちに重病を受けて、惱亂する事智興の如し。證空餘りの堪へがたさに、年來安置して賴み奉る所の本尊、繪像の不動明王に向ひ奉りて、今生の命は師に代る、願くは臨終正念にして殺し給へと云ひぬる息をつぎければ、繪像の不動尊の御眼より、紅の御淚を流し、「汝は師の命に代る。我は汝が身に代る。」と仰せられて後、證空が病又宜しく成りぬ。智興も命活きぬ。一百由旬の內の文疑ふ人なく、大聖明王に念をかけて、二世の求願を祈り給ふべし。觀音地藏等の菩薩は、僧の分に申すべしと云へ共、女房などは心得給ふまじければ、佛の分に申し侍る也。又法城寺供養の日、河內の國に侍りける翁の京を未だ一度も見ざりけるが、法會の庭をも蹈まんとて、

院に至り給ひ、(一)智證大師渡海せしかば、船に顯はれて琉球の鬼難を免る。園城寺の內供智興は炎天に病苦を受けて、惱亂する事前後も知ず。陰陽師晴明を請じて、且つは祈り且つは卜筮せさするに、定業かぎりある人なれば、如何に祈るとも活べからず。但是に多く居ならびたる御弟子の中に、命を輕くして、年來習ひ受けつる所の經論を重んじて、師の命に代んと仰せらるゝ人なんどおはせば、祭りかへんと云ければ、智興無心に思うてければ、我が命に代れとは宣はねども、病の責めける堪がたさに、目を見廻して見るに、一人として代らんと云ふ者なし。是れを見るに悲く覺えければ、其中に證空阿闍梨とて、未だ若くて、習ふ所の聖教幾ならずと云へども、師弟子と成る事は多生の契也。此身は幻の如し。此度師に代りて、後生に三寶の慈みを蒙むらんと思ひて、我師の命に代り奉らんと云ふに智興惱める眼に淚を浮べて云く「我が命に代んと云ふ志は喜しけれ共、弟子を殺して我存命んこと逆儀なるべし、只祭り代ゆべかず」と云へども、證空云ひ出したるを、末かけてふつと思ひ切りたり。但し老母室あり、齡八旬なり、今一度今生の姿を見もし見えもして歸らんと云ひて出でぬ。母此事を聞きて、全

(一)智證大師。名は圓珍、近江國園城寺の開山、寛平三年寂す。

(一)不動明王。五大尊明王の一。大日如來が一切の惡魔を降伏せんが爲めに、變化して忿怒身を顯したまへる姿。

(二)相應。比叡山無動寺の開山。延喜十八年寂す。

僧是を聞いて、寂易き事にこそ侍るなれとて、指し寄りてひし〳〵としたゝめ、背にかき負ひて山へ送り、孝養し給ひけり。此女嬉しさ云ふばかりなし。此後此僧永く見えざりけり。是れは則ち六波羅の地藏の爲し給へると思ひて、忌の明きける時、參りて拜み奉りければ、地藏の御足に土打付きてぞおはしましける。其よりして此の地藏をば、山送りの地藏と申すとぞ。細には『地藏の驗記』にぞ申しためる。世の季にすらかく侍るめれば、道如が爲に『法華經』の偈を說き、王子が爲に『法華經』の咒を讀みて導き給ひけん事は、理に侍るべき。今世後世能引導の謂れあり、此言實なる哉。又(一)大聖不動明王は、惡業煩惱の怨敵を防がん爲に降伏の相を現じ給ふ者なり。左の手に索を握り、春の柳三綰、右の手には劍を持ち給へり、秋の霜三尺。後に火焰盛んなり。火盛三昧也。前には降伏の恣を顯はす、魔界を隨へんがため也。賴母しき哉や、阿防羅刹、怨火車を具して搦め取らんとせし時、大聖明王、智慧の劍を振ひて防ぎ給はん事を思ふに、早く不動明王に念をかけ、安養淨土に送られ奉るべき者なり。又現世の利益も、賴母しくぞ侍るめる。少々申すべし。(二)相應和尚天上を願ひ給へば、背に負ひて都率天の內

(一)二條。京都市に在り。

(二)東山。京都の東山を云ふ。(三)六波羅。京都市にあり。六波羅密寺と云ふ。

座すとぞ云へる、是を今申したる也。又(一)二條の堤に、色紙漉ありける。其あたりの町の者、冷泉河原の衆、寺の地藏講を結び執り行ひけるに、紙漉は、さして志もなかりけれども、慰みがてら、物などをも得て食はんと思うて、講衆に入りぬ。一年に三度づゝ此講を勤め、漸く年積りける程に、紙漉はかなく煩ひて死にけり。怖しき鬼どもに捕へからめられて、閻魔王宮へ參りぬ。罪の程を正さるゝ所に、若やかなる僧一人出で來り、閻魔王宮に强ちに乞ひ請けて、懇に娑婆へ歸るべき道を敎へてけり。餘りの嬉しさに、是は如何なる人のかくは爲し給ふぞと問ひければ、我は冷泉河原の邊に侍り、其にも每年に我を供養せしぞかし、其の嬉さに今汝の罪業なれば、乞ひ請けて歸へすとぞ宣ひける。紙漉蘇り泪を流し、有難く思ひければ、人々に語りて、彌此地藏を尊び奉りけり。又(二)東山に貧しき女ありける。年來地藏を念じ奉りしに、近きまゝに(三)六波羅の地藏へ常に參りける。此女年老ひたる母を持ちたりけるに、或時老母死してけり。如何して葬んと案じ煩ひ、只一人まもらへて泣き居たりける程に、或片夕暮に、行脚の僧一人出で來て何事にかくは歎き給ふぞと問ひければ、事の子細を有りの儘に語りける。

罪人を助け訪ひ給ふなり。「五逆罪を造れども、常に地藏尊を念ずれば、諸の地獄に遊戲して、決定して代りて苦を受く」と云ふは是也。現世の利益も淺からず、少々其證を申ずべし。(一)西坂本に觀音院と申す所あり。其程に住みける老女、五寸ばかりなる地藏菩薩を設けて、苧筒と云ふ物に入れ奉りて、食ひける物の(二)生飯を、必ず參らせけるほどに、漸く年積る程に、此女田を二反設け持ちたりけるを、年來男に誂へければ、作りて取らせけるが、何なる事のありけるにや、六月になるまで作らざりけるを、男を恨み歎きて、我年來頼み奉りつる地藏菩薩の人にてだにおはせば、此田は作りて給びてんと云ひて、臥したる夜の夢に、汝いまだ田を作らざる事を悲む間、我作りて與へんと宣ひて、若やかなる僧來り給ふと見て、明方に目覺めて聞きければ、大路通る人の聲にて、昨日までは作らざりし田を、夜の程に植ゑられにける不思議さよと云ひける聲に、怪しく夢に思ひ合せて、若し我田の事にやと、急ぎ行きて見れば、我田の皆植ゑられて侍りける。餘りの不思議さに、見れば田の中に鼠の足跡の樣なる物ぞ有りける、是れは地藏菩薩の御所爲と、心ばかりに思ひて、急ぎ家に歸り見れば、御足に土うち付けて御

(一)西坂本。近江國濟賀郡に在り。
(二)生飯。日常の供膳の食の一部をとりて鬼神に供し餓鬼に施すもの。

程に、觀音の御肩の上に、紅の袴を掛けて立ち給へる事を云へるなり。又粉河の觀音の、人を祈り給ふと云ふは、紀伊國に病ひ大事なる者ありけり。淨衣著たる童に變じて、祈り止め給ふ事を云ふ也。されば現當二世の利益、觀音を仰ぎ奉りて、努々疑ひを成す事なかれ。(一)念々に疑ひを成すること勿れ とは如來の金言にあらずや。又(二)地藏菩薩は、我等衆生が、深く賴み奉るべき菩薩也。其故は、釋迦如來忉利天の劫婆樹の下にて、十方の諸佛菩薩を集め給ひし中に、地藏菩薩を喚放ち給ひて告て宣はく、未來惡世の衆生をは汝に付屬す、一日一夜なりとも、惡道へ落し給ふなと宣ひしかば、菩薩無虛妄の吻を開いひて、うけがひ給ひぬと申したまひて、實に左なんめりと覺ゆる事ども多く侍るめる。身を二十五に散らして、(三)二十五有に住して、二十五有を救ひ、或は(四)十王と成りて、中有の旅人を宿し、或は閻魔王と成りて罪人を扶け、或は梵天帝釋と成りて、惡業をなだらめ給ふ。自業自得果の罪免れ難ければ、必ず衆生の苦患に代りて、地獄に落ち給ひ、紅蓮大紅蓮の氷の底には、億千歲の慈悲の膽を碎きて、焦熱大焦熱の炎の中、無量劫の間忍辱の膚を焦し給ふ。又每日の晨朝に、必ず地獄の扉に望みて、一切の

(一)念念に等。『法華經普門品』に說く。
(二)地藏。梵に枳師帝揭婆と云ひ、釋迦入滅より彌勒の下生に至る二佛中間の教主なり。
(三)二十五有。衆生の輪轉する廿五の生死界。四洲、四惡趣、六欲天、梵天、無想天、五那含天、四禪天、四空處天なり。
(四)十王。空府にありと云ふ十人の王秦廣王、初江王乃至五道轉輪王なり。

と云ふは丹波國に有りける人京なる佛師を請じて、觀音の像を造りをふせて、迎へ參らせたりけるに、其用途に數の寶を取らせて、人の身にとりて惜しと思ひける、馬を引き出だして取らせけり。佛師悅びて、此馬に乘りて京へ歸り上りけるを、馬の主思ひ反し、悔しく惜しかりければ、山の中に行きて、佛師を道にて射殺して、彼馬を取りてけり。さて家に歸りて、持佛堂に指入りて佛を拜み奉る。我即ち佛師を射殺しつる矢、佛に立ちて有りけるを、今申し侍る也。又丹後國成相の觀音の、猪に成りて行者に食れ給ふと云へる事あり。行者彼成相の寺にて、大雪に降りこめられて有りける時、食物なくして死なんとしければ、觀音の猪に成りて、死して臥したりけるを、行者見付けて、我身徒らに殍え死なんよりは、食はんと思ひて、彼猪の肉を下して食ひてけり。さて命を活きてけり。其事を今申し侍る也。金前の觀音の、女に成りて男を合せ給ふと云へるは、越前の國なる者、此觀音を作り奉りて有りけるに、皆失せて後悲しかりける女子の、一人殘りたりけるに、女出來して能き男を女に合せて、美濃の國へ具して行きければ、此女男を合せたるを悅びて、紅の袴を取らせたりければ、喜びて出でぬと思ふ

我は虚妄罪過の中に墮ちて本覺にかへらず、大悲を捨てゝ衆生を度すること難からん。能く度せば、悲愛の衆生に相現し、一子の如く慈まん。千手千眼觀世音は、生々世々希有なるものなり。一たび名號を聞けば重罪を滅して無量の佛果を成就することを得べし。

觀世音の悲願に預らずは、爭か蓮臺に生るゝ事を得ん。理世利生も人皆知れり。されば中々申すに及ばず、ゆめ〳〵此文を疑ふ事なく、大悲の誓願を仰ぎて、往生極樂を願ひ給ふべき也。淨土に生ると云ふは、則ち觀音臂を伸べ、金蓮華臺に乘り給ふなり。極樂に往生する人、誰か觀音の來迎を離れたるあるや。早く大悲の誓願を仰ぎて、來迎引接を待ち給ふべき也。天竺の毗舍離國には、法身のしるしに(一)烏瑟を隱し、我朝の(二)四天王寺には、佛法の始め救世の姿を顯し給ふ。南海の邊には熊野の權現、西の御前には千手の顯現なり。(三)此嶺の麓には日吉山王八王子、觀音の垂迹にあらずや。(四)穴生の觀音は佛師に代りて射られ給ひ(五)成相の觀音は猪に成りて行者に食はれ給ひ、金前の觀音は女に變じて女に男を合せ、(六)粉河の觀音は童に顯れて人を祈り給ふ。穴生の觀音の佛師に代りて射られ給ふ

(一)烏瑟。肉髻のこと。
(二)四天王寺。攝津の難波に在り。聖德太子の開創。
(三)北嶺。南都に對す。比叡山のこと。
(四)穴生。丹波穴生の菩提寺の觀音のこと。西國二十一番の札所なり。
(五)成相。丹後與謝郡府中村に在り。西國二十八番の札所なり。
(六)粉川。紀伊那珂郡にあり。風猛山と云ふ。本尊千手觀世音は西國第三番の札所なり。

て生まれ、鶣鵲が身の内の病を見しも、醫家の不思議を顯さんがため也。況や藥師醫王の法藥、誰か疑ふ者あらん。加之、八人の菩薩をして、極樂へ送り給はんと誓ひ給へり。旁々藥師如來を賴み奉りて、佛道を祈り給ふべき也。天竺の祇園寺には、釋迦如來、療病寺を作りて、藥師の形像を安置し、我朝の(二)天台山には、(三)傳教大師、延曆寺を立て、醫王の尊容を本尊とす。佛も是れに歸し給ひ、聖も是れに歸すと云へり、況や末代の衆生、いかゞ賴みをかけ奉らざるべき。大聖觀世音菩薩は、極樂にては彌陀の左脇の御弟子、娑婆にては施無畏の菩薩也。身を三十三に變じて、十方衆生を導き給ひ、形を六種に現じて、六道の群類を救ひ給ふ。身は羅刹女の懷に入るとも、心に念ずれば難もなく、命は旃陀羅が躰に望めども、念をかけつれば苦を免れ、定業能く轉じて、大悲苦に代り給ふ。中にも賴母敷悲しく侍る文ども少々申すべし。

法華經に云はく種々諸の惡趣、地獄鬼畜生、生老病死の苦漸を以て悉く滅せしむ。

如意輪經に云はく若し我れ誓願大悲の中に、一人として二世の願を成ぜずんば、

(一)天台山。比叡山のこと。

(二)傳教大師。日本天台宗の初祖、延曆二十三年入唐して法を道邃に承け、廿四年歸朝し盛に天台圓宗を唱ふ。弘仁十三年六月寂す。

侍るめり。されば燒け來る火の炎を防がんがために、我子を以て面にあてかざして炎を遁れ、相人は我相を歎られんがために、自ら子を殺すなど申したるめれば、今生すら救ふ事なし。況や冥途の苦患をや。大聖世尊の親は、全くうしろめたなき事なし。加之、今見佛聞法の結緣を成すも、偏に大恩教主釋迦如來の御悲願ならずや。淨土ありと知りて願ひ、惡道ありと知りて厭ひ、三寶を信ずべしと云ふ。是れ誰が力ぞや。大恩教主の教へ無くば　冥より冥に入りて、出離の期無からん者歟。此心を和泉式部が歌に、

冥きより冥き道にぞ入りぬべき、遙に照らせ山の端の月。

且つは隨喜し且つは悲みて、釋尊の父を信じ奉るべし。藥師如來は醫王の藥を授けて、一切衆生の病を愈し給ふ。我等貪瞋癡の病重きが故に、出離の期を知らず。惡病を除愈し乃至速かに無上菩提を證せむと宣へり。早く藥師如來を稱念して、佛道を祈り給ふ人、死苦に責らるゝが故に、臨終正念ならず。臨終正念ならざるが故に、往生の心なし。往生の心なきが故に、惡道に墮ち侍る也。藥師如來醫王の藥を授け給はゞ、臨終正念にして、生死の苦沉の海を渡り、耆婆が藥瓶を握り

の衆生は悉く是れ吾子なりと云ふ文違ふ事なき者也。早く釋尊を父の如く思ひ頼み奉つりて、無上菩提を祈り給ふべき也。須達が祇園精舍を作り奉つりしを悅び給はず、(一)提婆達多が佛の身より血をあやしゝも惡み給はず。(二)阿育大王の八萬四千の后を殺しゝをも恨み給はず。(三)憂婆利尊者が持戒なりし、善星比丘が破戒なりし、迦葉尊者の威儀を調へ、(四)六群比丘が威儀を忌みたる、(五)舍利弗尊者が智慧に富めりし、(六)周利槃特が鈍根なりしをも、皆同じく佛道に入りて、差別有る事なかりき。善の衆生をば羅睺の如くに思召し、惡の衆生をば善星比丘の樣に見給ひ、金輪聖王をも敬ひ給はず、田夫野叟をも欺き給はず、「我れ一切を觀ること普く皆平等なり」と『法華經』に說き給へるは是也。早く善根を修して、羅睺羅の樣に思はれ奉りて、佛道を得給ふべし。『譬喩經』を說き給ひし時、青蓮花の御眼より淚を流し、七日まで泣き給ひけるを、御弟子達怪みて問ひ奉りければ、道心なき衆生の事を悲む也とぞ仰られける。五百の大願も、未來の衆生のため、僧祇の苦行も、濁世の我等がため也、早く父の思ひをなして、尙々此道を成らんと心にこめ給ふべき也。人間の親は子を思ふ志し深しと云へども、後めたなき事も

(一)提婆達多。斛飯王の子、釋尊の從兄弟なり。出家して佛道に入りしが、佛を嫉み常に佛にあだをなせり。

(二)阿育大王。無憂と譯す。賓頭沙羅王の子なり。深く佛敎を歸依せり。

(三)憂婆利。近取と譯す。十大弟子の一、持戒第一と稱せらる。

(四)六群比丘。釋迦在世の時、群をなして非法を行ひたる六人の比丘。即ち闡陀、龕黑、鄔陀、跋難陀、馬師、滿宿を云ふ。

(五)舍利弗。十大弟子の一、智慧第一と云ふ。

(六)周利槃特。淨路邊生と譯す。性愚にして常に道を忘れ修道の望み少なかりしが、根機の強大なる遂ひに阿羅漢果を證せしと云ふ。

に、大地獄へ遣しけるに、罪人が云はく我已に七度還俗する罪によりて地獄に墮ち、又七度出家せし功德は、虛しからんやと申しければ、閻魔大王、冠を傾けて拜み給ひて、惡道を免れたりとこそ申したるめれ。まして大悲心を發し奉り、出家遁世せし者、淨土に生れん事豈疑ひあらんや。速に遁世して佛に成り給ふべし。

○第二に深く三寶を信じ奉りて、佛に成るべしと申す。三世の諸佛は、皆三寶を信じて、道を得給ふが故也。三寶と申すは、佛法僧の三つ也。佛に賴みをかけて、成佛すべき旨、少々申すべし。彌陀は空王佛を拜みて佛に成れり。釋迦は『法華經』を勤めて正覺を成ぜり。地藏は地獄の衆生を導き給ふ。僧の力にあらずや。是故に三寶を信じて佛道を祈り給ふべし。阿耨菩提は信心を因とすと『涅槃經』にも說きたれば、信を至して淨土を求め給ふべき也。白紙を本尊と賴めば眼開き、河の水を香水と信ずれば髮の色替る。況や三寶を信じて佛道を願はん人は、佛に成るべき事疑ひあるべからず。敎主釋尊は、一切衆生を慈みて、父の子を思ふが如くに育み給ふ也。『法華經』の文に云く、今此の三界は皆是れ我が有なり。其中

ける。常磐丹後守爲忠朝臣の子どもこそ、三人ながら道心を發して出家遁世して山住し、大原にこもり、靈山に居て侍りけれ。行ひの間には、和歌の道をも未だ捨てあへず、やさしき物から、其心の程貴くぞ覺えける。伊賀守爲業は、法名寂念也。靈山に籠り居て、かくぞ讀める。

　春來ても問はれざりけれ山里を、華咲きなばと何思ひけん。

長門守爲經、法名は寂超也。比叡山にしてかくぞ讀みける。

　やまがつと成りても猶ぞ郭公、鳴音にあらで年もへにけり。

壹岐守頼業は、法名寂然也。大原に籠り居て讀める。

　ちりつもる紅葉わけきてよそに見ば、哀なるべき庭の面影。

女の中にも聞え侍るめり、少々申すべし。冷泉院の二の宮、三條の一品宮、未だ御年若くして、(一)憍曇彌(二)婆提比丘尼の跡を追ひて、佛道を求め給ひけり。次次の人の事は申すに及ばず、佛も『法華經』の六卷に、『我少くして出家して阿耨菩提を得たりと宣ひぬれば、若くして出家は、殊に目出度侍るべし。婆羅門酒に醉ひて僧の眞似をしたりしだにも、終ひに佛を見奉る事ありき。重罪の者なるが故

(一)憍曇彌。明女と譯す。釋尊太子たりし時三夫人ありし中の第一耶輸陀羅のこと。
(二)波提。具さに摩訶波闍波提と云ふ。釋尊の姨母。

家貧しく身に病あり、年老ひ衰へて家を出で給ふにあらず、只菩提心を發して、佛道を求めんがため也。顯信入道の陪從の者、出家の後良程をへて、延暦寺の房に罷りて、御家の繁昌し給へる事を語り申しける。御堂殿の君達十二人、男子六人、女子六人なり。男子六人とは、大郎は關白左大臣賴通、宇治殿とぞ申す。二郎は內大臣敎通、二條殿と申す。次々の君達は、大納言春宮大夫賴宗、大納言中宮大夫能信、弟の君こそは民部卿長家とておはしけり。女君六人。大姉は一條院の后、後には上東門院と申しき。次の君は三條院の后、枇杷殿中宮と申しき。三の君は後一條院の后、四の君は後冷泉院の后なりき。他腹の君達二人おはします。一人は小一條院女御。弟の君こそはわろしと申し定む。具平親王の御子、三位の中將師房の君の北の方にておはすれと申しければ、少しも心動き給はず、加樣の事は只少時の樂み榮え也とぞ云ひける。實に淺からざる道心なりけり。此殿若くして、父の御供に、君達あまた中堂へ參り給ひて侍りけるに、所作もせずして寢入り給ひければ、こと君達は禮拜し行ひておはしけるが、如何に御所作は爲給はぬと問ひければ、今一度にとぞ宣ひける。共に合せて、此山にてぞ法師に成り給ひ

瀧口の問籍を驚かし、兵衛の夜行禁中を廻り、少しの御幸あれば、文武百官陣を率ひて、內侍劒璽を取りて、前後に隨ふ事、御心よはく思召出させ給ひてかくぞあそばしける。

旅の空夜半の煙と登りなば、海士の藻鹽火燒くかとや見る。

惟高親王の、比叡山の麓に、小野と云ふ所に法師になりこもり居給ひけるに、在中將業平參りて見給ひけるは、一年の鳥養の院の御遊び、禁野の御鷹狩、思召し出だされて、かくぞ讀み侍りける。

忘ては夢かとぞ思ふ思ひきや、雪ふみ分けて君を見んとは。

高光少將は、九條殿の御子、冷泉院圓融院の御伯父なり。道心發し出家して、多武峰に籠り、法師になり侍りける比、月の明かりける夜、かくぞ讀み侍りける。

かくばかりへがたく見ゆる世の中に、羨ましくもすめる月かな。

左馬頭顯信は、御堂の道長の御子。時叙少將は、左大臣雅信の御子。重家侍從は、左大臣顯光の御子。相任侍從は、右大將時濟の御子。業房中將は、中納言義懷の子。內記入道保胤、三河入道寂照、遁世してありし人々なり。彼の人々の、

心を起し給ふべし。天竺の國王、出家遁世をして、あな賴母敷やと云ふ聲を、高く擧げ悦び給ひけるを、大臣怪みて云ふ。十善の主として、四海の土產あきみち給ひし折だにも、樂み給ふ事なかりき。出家遁世して、七寳に乏しく、萬物に別れておはしますに、何にかくたのしとは仰せらるるぞと申しければ、十善の位に在りし時は、萬機の政に過有りしが故に、樂とすべからず、今出家遁世して、一向に淨土を求むる間、恐るゝ事もなく、心樂しとすべしとぞ宣ひける。我朝にも出家遁世して、菩提心を發し給ひし御門あまた聞え給へり。寛平法皇は、出家遁世して、道心を起し、所々に修行し給ひけるに、和泉の國日根と云ふ所にて、橘能俊と申しける人、只一人法師に成りて、御伴に侍りけるが、歌よめと仰せ事ありければ、日根と云ふ事をかくして讀める。

故鄕の旅ねの夢に見えつるは、恨みやすらん又と問はねば。

花山法皇は、十善の位萬機の政を捨て、淸凉紫震の玉のすだれを出でゝ、遙に那智山に籠り給ひき、紀伊の國千里濱と云ふ所にて、御心地煩ひて、岩屋の中に入らせ給ひて有りける當時、四府の陣を固め、十人の藏人の龍顏に近付き奉り、

賀茂重保が、年比御祈なんどして、仕うまつりけるが、心憂く覺えければ、御忌のはつるまゝに參りて、かく讀みてぞ罷り出でにける。

古も玉の臺は見しかども、いつかは袖に露はこぼれし。

夢の中の榮花、幻の間の快樂なり。皆人今生の名利を捨てゝ、後世の資糧を設け給ふべき也。秦始皇帝の人魚の油、冥途の旅には光なく。齊盛王の照涼の珠、中有の闇を照す事なし。露の命消えぬ前に、或ひは眼前の功德を營み、或は逆修の善を設くべき也。一期の後の追善は、七分が一にぞ當ると申すめる。佛喩を以て教へて宣く、「譬ば王宮に池あり、色香妙なる蓮花開きたり、此池に鴛鴦あり、夜晝も絶ゆる事なく鳴き遊ぶ、或人鴛の鳴くまねをするに、實の鴛鴦の聲に替る事なし。此人蓮を盜まんと思ふ心付きにけり。守人恠みて見る、鴛の鳴きせんずれば實の鴛の鳴くなんめりとて、怪むべからずと思ひて盜む程に見付けられて捕へ禁められぬ。其後鴛の鳴くまねをすれども、捕へたる者許す事なきが如く、死して後の功德、囚られて後に、鴛の鳴くまねをするが如し」と云へり。心ある人、囚られざる前の、鴛のまねをせんか如く、無常の風吹き來らぬ前に出家遁世して、菩提

今日まではよそにのみ聞くはかなさの、いつ身の上にならんとすらん。　藤原親盛

故郷の庭は木の葉に色替へて、かはらぬ松ぞ緑なりける。　惟宗廣言

見て過ぎし同じ浮世の夢なれば、問ふにつけてぞ我も悲しき。　平親宗

是までは昔物語なれば、細に申すに及ばず。近くは安元元年なんども、浅猿しく侍りし事ぞかし。六條の新院、高松の院、建春門院、九條の院、是も打續き、六七月ばかりに失せさせ給ひにき。院號一度にかく墓なく成らせ給ふ事も、目驚かしくぞ侍りし。建春門院は、七月八日に隱れさせ給ひしかば、天下昏闇み、(一)摩耶夫人の遷り給ひし夕にかはる事なく、非情草木に至るまで、歎き悲める色にぞありし。一天下の國母にておはししかば、諒闇を仰せ下されて、一條の人黒烏と成り侍りき。法住寺の七條殿の有様、あらぬ事になりて、南殿の御簾を給ひて、をぴたゞしく成りにければ、過ぎぬる春の御賀の舞御覽など思ひ出だされて、讀み侍りける。

袖ふれし春の庭とも見えぬ哉、涙時雨るゝ秋の夕暮。　待賢門院兵衛

(一)摩耶夫人。淨飯王の后。釋尊の生母。

り。二萬の鄕人の事は、遠國なれば不審も侍りなん。長德元年の事を、承るこそ淺猿しけれ。閑院の左大將朝光、小一條の右大將濟時、六條の左大臣、粟田の大臣道兼、桃園の中納言保光、此殿原三月より五月まで數ふれば、纔に百日が內に、一日に三人なんど失せ給ひにけり。六月に成りて、山の井の中納言道賴の君、又失せ給ふ。まして四位五位なんどの、人も知らぬは數をしらず。昔も、かく臣家一度に失せ給へる事無しとこそ、日記の家の人は申されけれ。されども其の故に、道心を發したりと聞えぬる人もなし。只人のわるくて死ぬるぞ、我は千年萬年有るらんずる樣に思うて、多くの司あきぬとて、望みをかけて趨り騷ぐ人のみぞ侍りける。生死の無常は、誰も免るまじき事にて侍る物を。されば『文選』と云ふ文には「何ぞ互にほこりて、速かなる事を恨むる」とは申したるぞかし。心ある人後れ先き立つ世間を、餘所に思へる事は無きものを。

世間にあらましかばと思ふ人、無きは多くに成りにける哉。　藤原爲賴朝臣

有るは亡く無きは數添ふ世間に、哀れいつまで有らんとすらん。　小大君

誰とても留りはつべき身ならねば、先初に立つ人ぞ悲しき。　賀茂成助

郷人を注す、男女大小を合せて九人になれり。延喜の御時、藤原公利と云ふ國司、補任して上りたりけるに、善宰相清行卿聞き給ひければ、一人も無しとこそ答へ侍りけれ。天下衰へ行くありさま、人の數の薄くなる事、むげにあらはにぞ侍るめる。此事細には清行卿の意見にあり。菅原家經が、後冷泉院の御時、大嘗會の主基方の歌に讀めるは、かくまどへる所なれども、二萬人に數そへて主を祝ひて讀めるなり。

「御調はこぶよせてふ數ふれば、二萬の里人數そひてけり」。神功皇后、新羅國を討ち給ひて、年毎に船二十艘の貢調すべき由の、請文なんど召して返し給ひける後に、新羅思ひ反して貢調せざりければ、其後代々の御門責んとし給ひけれども、遂げずしてのみ過ぎ行くに、皇極天皇、天智天皇の春宮にておはしますを、下し奉りて責め給ひけり。されども本意を遂げず。鎭西にて崩御し給ひぬ。神功皇后の責め給ひける時、安倍氏を以て將軍とせり。其の故に安倍氏の長者を召して、大嘗會の度に、吉志舞を仰せらる。今に斷ゆる事なし。其度皇后ひそかに梶取を召して懷み給ひぬ。其御子今の廣田大明神也。細かには『日本紀』に見えた

朝に花を見る人、夕の風に散り、宵の月を詠る人、曉の雲に隱る。櫻梅桃李の懷しき匂ひ、春の風に誘はれ、蘭菊紅葉の盛なる色、秋の霜に衰れ、曉の露に似たり。晡の電の如し。昔見し人は皆三途の故郷へ歸り、今聞く者は又九泉の旅路に趣く。實に天下の衰弊、佛法の磨滅、喩を取りて申すべきに非ず。天竺唐土我朝の事、少々申すべし。(一)毗沙離國の佛の迹を尋ぬれば、大林精舍は礎のみ殘れり。(二)白鷺池は水絶えて浮草繁れり。菩提樹は根を離れて若葉さす事なし。摩訶陀國の外に王なし。まして震旦は、魏の武帝、會昌天子、宋の太子、徽宗王の爲に、度々佛法を亡されて、諸寺諸山皆荒廢の地と成れり。雙林寺、(三)玉泉寺は、住侶皆逃散し。(四)天台山、(五)五臺山は、門人悉〳〵く離山す。咸陽宮は項羽に燒かれ、長安宮は大金國に取られて、名所各〳〵無きが如し。我朝の事は、皆人の知り給へる事なれば申すに及ばず侍れども、一つの證を申すべし。皇極天皇の、新羅國の責に向ひ給ひし時は、備中の國下道郡に一つの郷あり、兵を召すに二萬人を奉れり。此故に二萬郷と名づく。其後吉備大臣在國の時、二萬の人ありし所也とて數へ給ひければ、纔に千七百人ぞ有りける。其後民部卿藤原保則任の時に、此

(一)毗沙離國。印度の國名。摩伽陀國の北方恒河を隔てたる處に在りたり。佛說法の地。維摩の生國なり。
(二)白鷺池。竹林精舍の中に在りし池。
(三)玉泉寺。支那荊州玉泉山に在り。天台大師の開創。
(四)天台山。支那浙江省にあり。天台宗の開創地。國清寺あり。
(五)五台山。支那山西省にあり。文殊菩薩所居の淨土なりと云ふ。

出家の志なし。爰を以て弘法大師は「田を作る時は益飢ゑ其中にあり、物習ふ時には祿其中にあり」と『三教指歸』と云ふ文に書き給へり。實に誰も善には物うく、惡には進む事にてぞ侍るめる。然ども釋迦如來は、摩竭陀國の主、淨飯大王の太子にておはしませば、十善の位に供はり給ひて榮花に傲り、大臣百官に圍繞せられ給ふべきに、生死無常の墓なき事を歎き給ひて、王位を捨て給ふのみならず、御親にも妻にも別れ給ひて、只獨り檀特山に入り、十九にて出家し給ひ、十二年の間難行苦行の功をつみ、十二月八日に明星を見給ひて、諸法實相の理を證り給ひてより後、三界の導師と成り給へる也。されば大國の主と成り給ひたらん、夢幻の樂みなるべし。三世了達の佛と成り給ひて、永く生死の苦を離れ、不退快樂の地に座し給ふぞ有りがたけれ。爰を以て、濁世の我等を想ふに、何に心を留むべき。早く物憂き世路の營を振り捨てて、後生善所の勤めを成し給ふべき也。人の命の化なる事は、朝の露の如く、宵の電の如し。後れ先き立つ程こそあれ、遂には誰か殘るべき。愚なる哉や、菩提の善友に疎にして、煩惱の惡緣に親しめる。哀なる哉や、受けがたき人身を受け、値ひがたき佛法を修行する事は、

し。菩提心の玉を身に掛けぬれば、生死の海に沈まざるが如し。譬へば一切の寶の中に、如意寶珠勝れ、譬へば(一)膽蔔花波師花を以て、千年衣にしむと云へども、(二)栴檀香の一日に及ばざるがごとく、一切の功德の中に、菩提心も亦復此くの如し。一念菩提心を發せば無上尊となる。愼みて疑ひを成す事なかれ」と說けり。(三)『出世菩提心經』には、「十方國土を灰に成して、其國の草木と知り、十方世界の水を海に入れて、其河の水とは知るとも、菩提の功德は量りがたし。又若し人有りて、恒河沙の數の佛を作りて、須彌山のやうなる堂に居ゑ奉りたらん功德は、菩提心を發したらん功德の、十六分の一に及ばず。」と云へり。『寶積經』には、「菩提心の功德の水盡る事あらましかば、虛空に滿ちてこそあらまし」といひ、(四)『密藏經』には、始めの菩提心能々重々の十惡を除く。況や第二第三第四をや」と敎へ給へり。(五)『出家功德經』には、「在家は無量の罪あり、出家は無量の功德を得」と云へり、此故に(六)善財童子の、菩提心を發し給ひしをば、(七)彌伽大士、師子の座より下りて、光明を放ちて拜み給ふ。これ童子の貴きには非ず、菩提心の尊き故也。然りと云へども、富る者は樂みに耽りて道心を發さず、貧しき者は世路にはしり

(一)膽蔔花。又膽波と云ひ、香華と譯す。花の名。樹形廣大にして海岸にありと云ふ。
(二)栴檀香。香木の名與薬と譯す。赤白紫の類あり、能く病を治すといふ。
(三)『出世菩提心經』一卷あり。隋闍那崛多譯す。
(四)『密藏經』『大方等如來藏經』のこと。一卷あり。唐不空譯。
(五)『出家功德經』一卷譯あり。出家の功德を說く。譯者を失す。
(六)善財童子。『華嚴經』『入法界品』に說く。福城長者の子。發心して五十五の善知識を歷訪し、最後に普賢菩薩に謁して十大願をきゝ成佛せりと云ふ。
(七)彌伽大士。彌伽長者と云ひ、五十五善知識の中第四の知識なり。

也。大海は涓露より起り、須彌は微塵より初まる、無上の位に登らん事、又一念の力によるべし。道心とは(一)菩提心なり、菩提心とは大悲なり。(二)『千手陀羅尼經』に「大悲心是れなり」と云ふは則ち是也。(三)萬法は心の作す所にして、心の外に別の法なし。(四)心佛と佛と及び衆生と是の三は無差別の故に。心は第一の怨也。心に心を許す事なかれ。心は野馬の如し、靜めて道心を發せ、魂は獼猴に似たり。名づけて佛道を求めよ。煩惱は家の犬、打てども去らず、菩提は山のかせき、繋げども留まらず。猪金山をすり、風求羅をますが如く、好んで道心を發すべき也。爰を以て、南都東大寺禪林寺(五)永觀律師の云はく「人木石に非ず、好めば自ら發心す」とぞ侍るめる。早く道心を發して、速かに名利を離るべき也。一念の菩提心を發せば、百千の塔を造るにも勝れたり。況や永く道心を發して、偏へに佛道を求めん人をや。佛『華嚴經』の中に、多くの喩へを以て、菩提心の功德をば讃め給ふて侍り。「喩へば善現藥王の、一切の病を滅するが如く、菩提心も一切の煩惱の病を滅す。喩へば牛馬羊の乳の中に、師子の乳を入るれば、煩惱の牛馬羊の乳は消え失せぬ。譬へば信水の寶珠をかざりて水に入れば、人水にぬれざるが如

(一)菩提心。菩提を求むる心。
(二)『千手陀羅尼經』具さに『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』と云ふ。一卷あり。唐の伽梵達摩譯。
(三)萬法は等。『華嚴經』に三界虛妄但是一心作と說けり。
(四)心と佛と等。『華嚴經』に說く如來林菩薩の唯心偈の文。
(五)永觀。『往生十因』、『往生講式』等を作る。長承元年十一月寂す。

り、詠曲には十二山寺を謳ふ、蓬萊宮の上には十二樓を作り、會昌門の内には十二堂を立てたり、故に往生する道をも十二に注し申す也。十二の中にても、各其の心の引かん方を勤め給ふべき也。世間も人の心も區なれば、或は髮を剃り捨つる人もあり、かまへて長く生さんとする人もあり。又空へ抓きあぐる人もあり、下へ撫で下す者もあり。皆好々也。之加、明君は松を愛し、樂天は竹を好み、寧王は笛を吹き、楚王は琴を引く。是の如き人の心一品ならず侍る者也。故に十二門をば云ひ申し侍る也。『要集』に云はく、「華嚴經入法界品に云はく、譬へば金剛の如し。破れて全からずと雖も、一切の衆寶猶ほ及ばざるが如し。菩提の心も亦復是くの如し。少しく懈怠すと雖も、聲聞緣覺諸の功德の寶の能く及ぶ能はざる所なり。『要集』に『寶樓閣經』の偈を引きて云はく、菩提心の功德若し盡の方分あらば、虚空界に周遍して能く容受するものなし。『入法界品』の上に、「譬へば人ありて信水の寶珠璃瑠を得れば、其の身深水の中に入りて而も沒溺せず。菩提心の信水寶珠を得れば、生死海に入りて沈沒せず」

○第一に(一)道心を起し、出家遁世して佛道を求む可しと申すは、慥の往生の業因

(一)道心、佛道を求むる心。

如來の禁戒を堅く持つべし。○第四に諸の行業を積むべし。○第五に佛に成らんと願を發し、○第六に生々世々の業障を懺悔すべし。○第七に諸の布施を行ずべし。○第八に觀念を專にすべし。○第九に臨終に惡念を停めよ。○第十に善知識に値ふべし。○第十一に『法華經』を行ずべし。○第十二に阿彌陀佛を恭敬し、名號を唱ふべき也。一切の諸法に十二の數を具せずと云ふ事なし。其故を申すべし。神には十二處熊野の權現、佛には十二光の阿彌陀、藥師十二の大願、龍樹の十二禮、十一面觀音には十二面を現じ給ふ。經には十二部經、眞言には十二合掌、灌頂には十二表、梵字には十二轉聲、論には十二論、敎には十二分敎、顯密の法には十二種、三科法には十二慶、極樂の蓮華は十二大劫に開らけ、天には十二天、(一)鹿苑の說時十二年、(二)鶴林の法場は十二由旬・十二因緣あり、十二の頭陀あり、釋尊入滅の時、十二道せうしらゝもありき。一年を十二月に分け一日一夜を十二時に定め、醫家には十二經脈を治し、陰陽には十二式神をつかふ。天文には分野を見、曆道には十二直を記す。算道には十二空を算に擧げ、明法には十二貞觀格を引き、宿曜には十二運を勘へ、相には十二身相を見る。管絃には十二律を知

(一)鹿苑。具さに鹿野苑、釋迦最初說法の所。
(二)鶴林。釋迦入滅の地、最後說法の所。

限りは爭でか六道をば輙く離るべき」と云へば、女又云ふ「其はされば如何にして佛には成るべき」と問ふ。「佛に成る事は易しとも申しつべし。又難しとも申しつべし。まづ佛に成る事の難ければこそ、無始生死より以來、億々萬劫の間に、多くの佛の出世の利益に漏れて、諸の衆生六道には沈輪するなれ。『法華經』の六の卷に「この諸の罪の衆生は、惡業の因緣を以て、(一)阿僧祇劫を過ぐせども、三寶の名をも聞かず」と演べ給へり。されば佛に成る事は難き也。然れども天台宗の意を承れば、非情草木も佛と成れり。況や人間に於いてをや。見佛聞法の國に生れて、佛道を願はんに、爭でか成佛せざらん」と云へば、此女「女人は(二)五障あるゆへに、成佛に漏るべき樣に承はりしに、然らば女も遂に佛に成るべきにて候や、何事を勤め行ひてか、佛に成り候ふべき」と問へば、「佛に成る道は一つにあらず、區々の敎あり、喩へば王宮に入らんとする人の、數多の御門より心々に參るが如し。王城に十二門を立てたり、故にまづ淨土に往生すべき道に、十二門を立て申し侍るべし。

○第一に道心を發し、出家遁世すべし。○第二に深く三寶を信ずべし。○第三に

(一)阿僧祇劫。阿僧祇は梵語にして譯して無數、無央數とす。即ち無限の時間のこと。

(二)五障。五つの障りのこと。一に轉輪王となること能はず。二に梵天王となること能はず。三に帝釋となること能はず。四に魔王となること能はず。五に佛となること能はざる是れなり。

かども熱鐵のまろかせは食ひにくかりき。五妙の音樂には心澄みしかども、毒蛇の吼ゆる聲は怖しかりける。飛行の天衆は遊びよかりしかども、阿防羅刹は情もなし。爰を以て『正法念經』には「天上退かんと欲する時に心に大苦惱を生ず。地獄の苦痛十六にして一に及ばず」と說き給へり。天上の事多くは歌に讀みて侍る中に、其證を申すべし、七夕の歌に云はく、

契りけん心ぞつらき七夕の、年に一度び遇ふはあふかは。　藤原興風

徒らに過ぐる月日を七夕の、逢ふ夜の數と思はましかは。　惠慶法師

花の春重る甲斐ぞなかりける、散らぬ日數の添はゞこそあらめ。　權僧正範玄

世間に憂かりし秋と思へども、暮れ行く今日は惜くやはあらぬ。　大納言公通

大略六道の有樣は此の如し。されば佛は、昔此六道に廻り行き給ひて、一つゝ苦ならぬ所なし、疾して生死を厭ひ離るべしと敎へ給へる也」と語りければ、此女實に歎きふかき氣色にて、片端ばかりを宣ひつれども、實に血をも吐き候はんずる樣に覺え侍れ。況や冥途の道に趣き、誠の苦みを受けんに於いてをや。扨も扨も、何にしてか此六道をば離れ侍るべきといへば、此僧答へけるは「佛に成らざらん

山の端に隱れなはてそ秋の月、此世にだにも闇に迷はじ。　藤原永範

此世だに月待つ程は久しきに、哀れいかなる闇に迷はん。　神祇伯顯仲

佗つゝも此身ばかりはいかゞせん、廻らん世々を思ふ悲さ。　藤　實房

思ひ出づる昔は遠くなり果て、待つ方近き身をいかにせん。　參河内侍

長き夜の苦しき事を思へかし、何歎くらん假の宿りを。　讀人不知

次に天上と申すは、快樂無數也と云へども、終に五衰を免れず。五衰と云ふは、一には頭の華鬘萎む、二に脇の下より汗出づ、三に眼まじろく、四に天衣垢づき飛行心に任せず、五に天女眷屬に捨てられて、獨り林の中に仰ぎ臥して悲む。終に命終りて、則ち大地獄に墮ちて、無量の苦患を受く。(一)喜見城は住みよかりしかども、(二)阿鼻大城は住みうかりけり。劫婆羅樹の下は涼しかりしかども、刀林の下は身肉を切り破りにけり。衆車苑の車は乘り能かりしかども、火焰の車は乘り憂かりけり。帝釋の寶座は居能かりしかども、熱鐵の床の上は臥しにくかりき。白玉の血石は懷しかりしかども、(三)衆合の石は身を逼めひしぎけり。殊勝池の水は飮み能かりしかども、無間の鼎の湯はあつかりける。四種の甘露はあまかりし

(一)喜見城。忉利天の帝釋の住み給へる宮城。

(二)阿鼻大城。阿鼻地獄のこと。

(三)衆合。八大地獄の第三、殺生、偸盜、邪淫を犯せるものゝ墮つる處。

（一）光音天。色界十八天の第六。二禪天の第三にして光明を以て語音となすが故に此の名あり。

（二）有待の身。老病死を待つの身の意。

（三）栴陀羅。屠殺を業とする者。

歸』には「大に樂み大に笑ひ、大に驚き大に悲むべき相也」とは宣へるぞかし。されば『正法念經』には、智者は牢獄の中に籠められたるが如し、愚者は(一)光音天に生れたるが如しと說ける也。加之、心ある人は冥途の事を悲み、(二)有待の身を墓なくあだなる物と思へり。又毛血律師は、毛の孔ごとに血の出るまで、三途の苦患を悲み、夜長比丘は、短日に向ひても長夜也と云へり。毛血律師と云ひし人は、地獄の苦を悲みて歎きしかば、毛の孔ごとに血の出でし也。昔證果の羅漢の一日に三度衣を洗けるを、弟子怪みて故を問ひければ、我昔し地獄に墮ちてありし事を思ひ出づるに、血の身より出で丶衣を汚す故に洗ふとぞ宣ひける。又夜長比丘は夜も晝も、あはれ長き夜かなと宣ひければ、弟子異みて故を問ひければ、生死の長夜は、夜も晝も分つべからずとぞ宣ひける。心ある人は、世間の樂みなき事を、如是思ひ侍る也。一生過ぎやすし、萬事は夢の如し。冥途近きにあり丶暮る日に似たり。年迫まり歲暮れぬ、是を隙行駒に喩ふ。日出で丶日入りぬ、(三)栴陀羅が牛を觀つべき也。是等の苦み數へ盡しがたし。是を五盛陰苦と申す也。されば心ある人、皆かくぞ讀めり。

寶物集 巻第三

八に五盛陰苦と云ふは萬事に付き物の怖しく危き也。君は佛天に恐れ給ひ、天變地震、有る時に怪みをなし給ふ。臣は龍顏を恐れ奉る、狐啼き烏集りぬれば、魂を消し、海を渡る人は惡風海賊にあはじと思ひ、山を行く者は落馬山賊を愼む。又横難にかゝらじといとなみ、病を受けじと嗜む。『三界無安猶如火宅』と『法華經』に見えたり。此心は、三界はやすき事なし、猶し火のいへの如しと云へり。然れば三界火宅の世、龍の髭を撫づるが如し。五趣輪廻の界、虎の尾を踏むに似たり。加之世間に有りふる習ひにて、人の身に隨ひて敵と云ふ者あり。親の讎、主君の讎、其外萬づに付きての讎、數ふるに及ばず。されば物の恐るゝ事、生々世々に絶ゆる事なし。返々是等の苦みを遁るべき也。遁るゝと云ふは、縱ひ人我を殺さんとするとも、我は人に怨をなすべからず。怨をば恩にて報ずると云ふ事あり。此心を覺らざる人は、生々世々の敵を招く也。我他を失へば、人又我を亡ぼす。怨を報ずれば、怨遂に盡きずと演べ給へり。爰を以て、弘法大師『三敎指

傍人の榮貴に對へば、顔泥沙に低る。

と書て參らせければ村上の御時の內裏の燒亡に、直幹が申文は、取出したるかとぞ仰せられける。加之、位山ふもとに年を送りて、雲の梯渡り果てぬ人々、是れを歎かざるやある。

常よりもさやけき夜半の月を見て、哀れ戀しき雲の上哉。　源師光

羨し雲の梯立ち歸り、二度登る道を知らばや。　源行定朝臣

是れ等を皆求不得苦と申す也。生死を厭ひ、菩提を念じて、此苦み患ひを免るべき也。

寶物集　卷二

朝光、重明親王の御娘を捨てゝ、枇杷大納言の舊室を具し給ふ。帥の內大臣伊周の娘君の、上東門院に參り、粟田殿有兼の御娘の、枇杷殿の中宮に交はらせ給ひ、小一條大將濟時の女子、法成寺殿に參りて、自ら近江の庄の事答へ申されけるなんどをこそ、心ある人、貧苦ばかり心憂の悲しき事なかりけり。此の人々の振る舞ひ、皆貧苦より事起れりとぞ申しける。父の殿達の御座し時は、各女御后とこそ思ひ給ひて侍りけれ。實に貧苦は憂き事哉。加之、堯の時九年雨降りて、日の影を見ず。湯の代に七年の旱にて、桑林の祈あり。我朝の長承の飢渴には、多くの人ども死に失せたりし事も、皆求不得苦に値へるが故也。其比仲胤已講と申し、說經師の、日吉の御寶前にて、名句申したる事侍りける。年の卯月は山王の祭月也。されども(一)七社の御前に、幣帛を捧ぐる人もなく、月の八日は(二)醫王の緣日也。されども上下禮堂に、法施の聲絕えたりとこそ云ひ侍りけれ。又物を食ず、物を着ざるのみにもあらず。萬に物の心に叶はざる事、皆求不得苦と申すべし。橘直幹が下﨟に越えられて云く、

後進の歡華を望めば眼雲路に疲れ、

(一)七社。山王は比叡山延暦寺の鎮守神なり。大宮、聖眞子、二宮、八王子、客人社、十禪師、三宮を山王七社と云ふ。

(二)醫王。藥師如來のことゝ醫王佛と言ふ。東方淨瑠璃國の敎主にして十二誓願を起し衆生の病患を救ひ無明の舊痾を治する法藥を與し玉ふ。比叡山根本中堂の本尊なり。

受けて有ると云へども、檀波羅密の行をせざりし故に、鉢を空しくして食物の難き身となれり。此事を象に向ひて申しつる也」と云へり。されば一切衆生の苦み患ひは、皆前世の宿因に依る事なるべし。實にさや候はんと覺え侍り。佛の御弟子羅旬比丘は、頭陀をすれども食物を得がたく、又目連の弟子利堀戸は、乞食をれども鉢を空しくす。我朝延暦寺の(一)安然和尚は、根本中堂の藥師佛と御物語りし給ひし程の人なれども、食物を得る事難くして、常に土を食すなんど申し侍り。『後漢書』には、孫晨貧くして冬の日藁を敷き、顏淵瓢を掛け、原憲藜を食ふなんど申したるめれば、人には依らざる事にてぞ侍りぬる。小野小町が老衰して、貧々なりしさま、弘法大師の玉作と云ふ文に、末世を鑑みて書き給へるこそ哀なれ。着る物なく簑を以て衾とし、疊なくして俵を以て敷物としけり。自ら野の蕨を折りて、簣に入れて臂にかけたりき。昔色を好む人に愛せられし時、讀みたりける歌ども思ひ出でられて、悲しくぞ侍る。

色見えで移ろふ物は世の中の、人の心の花にぞ有りける。

其ならず、小一條院、堀河の女御を捨てて、御堂殿の御聟に成り給ふ。閑院大將

(一)安然和尚。天台宗比叡山五大院の祖なり。五大院の先德と云ふ。元慶八年、元慶寺の座主となる阿覺大師と謚す

つを食すれば、七日物ほしからぬ菓ありと聞きて、取りに行きたりける跡にて、繼母二人の子を舟に乘せて海邊にゆき、海松和布苅んと云うて漕ありきつゝ、島に放ちてけり。二人の子悲みの泪を流してありけるが、誓ひて云はく、我一切衆生の貧苦ならんを助け、萬の苦患を救はんとて終に失せぬ。則ち願力に任せて、草利速利二人は、觀音勢至の二菩薩と成り、母の摩尸羅女は阿彌陀佛と成りぬ。さて親子三人、則ち阿彌陀の三尊と云はれ給へり。彼の放れたりし島は、今の補陀落山也。是外典にあらず、經文に任せてをろ〳〵申し侍る也。又昔天竺の國王象を飼ひ給ひけるに、毎日に白米百石を食物にあてゝ飼ひ給へり。然るに一人の羅漢象の許に來りて、熟々と見て云く、象は賢し、我は墓なし。象は墓なし、我は賢しと云ふて去りぬ。是れを聞きて象物を食はずして倒れ伏しぬ。象を飼ふ者公家に此の次第を申しければ、羅漢の咒咀したるなんめりとて、件の羅漢を召し寄せて、此の有様を問ひ給ひければ、申して云く「昔象と我とは同朋なりき、然るに象は聖教の理を知らずして有りしかども、施を行ぜしが故に、今畜生に生れたりと云へども、毎日百石の米を食す、我は經論を悟りしが故に、今人界に生を

と讀める返り事に、彼男の讀み侍りける歌とぞ云へる。『大和物語』に見えたり。

大原やまだすみがまも習はねば、我宿のみぞ煙たえたる。

是は良暹法師が、伏見の修理大夫俊綱朝臣の許へ、物乞にやるとて讀める歌也。是等皆貧苦なる人の讀める歌と也。加之、透間あらはにして、月より外に指し入るもの無くて、庭には草のみしげりて、風より外に音信るゝ物なき類、多く侍るめり。是も歌にて申すべし。

透間あらみ荒たる宿の寂寞は、心にもあらぬ月を見る哉。　清仁親王

荒はてゝ庭も籬も野邊なれば、淺茅が下に鶉鳴く也。　藤原伊綱

爰を以て觀世音菩薩は、一切衆生の願を滿てゝ、貧苦なる者を慈み救はんために、菩薩の行を行ひ給へる也。其因緣をろ〳〵申すべし。昔父をば長那と云ひ、母をば摩尸羅女と云ふ者ありけり。兄をば早利、弟をば速利と云ふ二人の子を持ちたり。生死無常免れずして、母の摩尸羅女、病を受けて死す。長那淺からず歎くと云へども、世間の習ひなれば、又妻を設けてけり。去る程に、其比天下に飢饉出で來て、皆餓死す。長那二人の子を繼母に預けて、檀奈羅山と云ふ山に、一

に非ざらんや。歌に云く、

行を勧めて物のほしければ、西をぞ頼むくるゝ方とて。

是は行へる行者の、西にありける人の許へ、物をとらせければ、又得ると思ひて讀めり。

身に増さる物なかりけり嬰子は、遣ん方なく悲しけれども。

是は美き子を捨てける者、何に悲くや思ひけん、袖に書き付ける歌也。

今日のみと見るに涙のます鏡、なれにし影を人にかたるな。

是は五月長雨の比、鏡を賣りける人の、鏡の裏に書きたりける歌也。細には俊頼の口傳にあり。

君なくてあしかりけりと思ふにも、いとゞ難波の浦ぞ住みうき。

是は夫妻ともに、世中を住み佗びて、和議して離れて侍りけるが、女は能き人の妻に成りてありける程に、難河のかたを通りけるに、元の男あやしき様にて侍りけるが、難波の堀江に蘆を苅りて賣る態を見て、女の、

あしからしよからんとてぞ別れしに、難波の浦に何するぞ君。

る。御滅後に値ひ給はで、七日先立ちて死すなんど申すためしは、誠に淺からずぞ聞え侍りぬる。生ある者は滅あり、始あれば終あり、値ひ遇ふ者は別れあり。是を生者必滅會者定離と云ふ。是れ則ち愛別離苦の法也。誠に三界導師の釋尊だに、此法をば免れ給はず。況や濁世の我等に於ひてをや。爭でか此の苦みを遁るべき。此の心を詩歌にも詠み侍る也。

生者必ず滅す、釋尊未だ栴檀の煙を免れたまはず。
樂み盡き哀み來る、天人猶ほ五衰の日に逢ふ。　後江相公

是れを釋迦の入涅槃と云ふ。此の心歌にも讀みて侍り。

長き夜の闇に迷へる我を置きて、雲隱する空の月哉。　讀人不知

七に求不得苦と云ふは、萬の物を求むるに得ず、心に合ふ事のなき也。都べて是を貧窮と申すべき也。一切の苦の中に、此の苦尤も忍びがたし。爰を以て毗沙門天王は、死苦には逢ふとも、貧窮には逢はじと言へり。遲々たる春の日煙絶えて、食物を求むる得がたし。冷々たる秋の夜も、衣薄くして寒天明しがたし。衣食の二事に乏しき者、必ず萬の望み心に叶ふ事なし。民は食を王とす、何哉苦患

ば、召し使ふ帶刀に懷せて行くを見るに忍ぶべくも覺え侍らざりけれ共、遂に出で値はざりけり。さて殘の公卿殿上人は、御跡にて墨染など脫ぎ捨てゝ色めき渡りける由を聞きて讀みける。

皆人は花の袂に成りぬなり、苔の衣よかはきだにせよ。

亦上毛野岑雄と云ふ者、御別を歎きけるが、年來見馴たる櫻の下にて讀める。

深草の野邊の櫻し心あらば、此春ばかり墨染に咲け。

草木心なしと云へども、物の哀れを知ればこそ、其春は墨染に咲きけるとなり今に深草の墨染の櫻とてあり。又師匠に別るゝ歎き、寂淺からずぞ聞ゆる。されば釋尊入滅の期至り、八十の化緣盡き、二月十五夜半に、摩訶陀國より(一)拘尸那城へ趣き給ひし時、栴檀悉く枯れ乾き、(二)菩提樹は菓ちり、(三)沙羅林の風さびしく、(四)跋提河の波すさまじくして、十六の羅漢、五百の大弟子を始めて、(五)十六大國の王、九萬二千の衆生、一心に悲み、非情草木皆悲哀の色あり。五十二類も足をあがき、羽をたれて、憂に沈む。此時(六)憍梵波提は、本師入滅我隨入滅と云うて、水になりて流れ、(七)迦葉尊者は喚き叫びて悲み給ふ聲、三千世界に聞えけ

(一)拘尸那城。具さに拘尸那竭羅城と云ひ香茅城と譯す。毘舍利の東北にあり、佛の入滅し玉ひし處なり。
(二)菩提樹。佛の菩提を成し玉ひし處にある樹、畢波羅樹のこと。
(三)沙羅林。高遠と譯す、印度に產する落葉喬木にて高さ百餘尺に達す佛は此の林中に入滅せり。
(四)跋提河。中印度拘尸那羅國に在り佛陀は此の河の西岸にて入滅し玉へり。
(五)十六大國。釋尊の當時印度に在りし毘舍離國、憍薩羅國等の十六の大國。
(六)憍梵波提。牛司又は牛主と譯す、大弟子の一、解律第一と傳ふ。
(七)迦葉尊者。摩訶迦葉のこと。

よそよりも色こそ濃けれ萩の花、泪の雨のかゝる秋には。　麗景殿女御

右大将通房、失せ給ひて後、帳の内に蜘のいゑを造りける。

別にし人はくべくもなき物を、何とふるまふさゝかにの糸。　土御門右大臣師房女

一夜とて別れし床、塵積るすら歎く事にてこそ侍るめる。鴛鴦の衾の内さびしく薫爐の煙匂ひ絶えて、影をだに見ぬ歎き、悲き事にて侍るなる。されば湘浦の竹斑なるまで涙をかけ、燕子樓上にて袖をくだす類ひ多く聞え侍るめり。又主に別るゝは殊に悲しく侍るにや、賢臣二君に仕へずとて、長く世を背く者多くぞ聞えける。深草の御門、隱れさせ給ひければ、良峰宗貞とて藏人頭なりける人、頓て法師に成りて、笠置と云ふ所に、蓑と云ふ物を打ち敷きて行ひ居ければ人數多具したりける者の參りて、數珠を一時程すりて、行衞もなく出でにし人に、今一度値はせて給へと云ふ聲を聞けば、我妻の聲と聞きなしつ。餘りに哀れにて、是れにありとて指出づべく思ひけれども、心よはくては佛道修行かなはじと思ひかへして、曉方に歸へるを見れば、九つになる女子をば前に立て、五つになる男子を

時雨とぞ千種の花もふりまがふ、なに古郷に袖ぬらすらん。

昔は蓬來宮の裏の月を契り、今は極樂界中の風に遊ぶ。

又村上帝、隱させ給ひて後に、餘りに歎き給ひけるにや、例ならず成り給ひければ、かくぞ讀み給ふ。

後れても越ゆべき物をしでの山、先き立つことを何恨むらん。　女御の御歌

一條院、隱させ給ひて後、後一條院、未だ稚く御座し、何の心をも知らせ給はで、まされありかせ給ひけるを、上東門院の御覽じて讀み給ふ。

見るからに露ぞこぼるゝ後れにし、心も知らぬなでしこの花。

中納言實綱、隱れ給ひければ頓て尼に成りて、五月五日に。

菖蒲草あらぬ憂根を引き添へて、泪ぞ懸かる墨染の袖。　三河內侍

年來の妻に後れて讀める。

思ひやれ空しき床をうちはらひ、昔を戀ふる袖の雫を。　藤原元義

後朱雀院、隱れさせ給ひて後、東三條の萩を折りて、參らせたりけるを見給ひて讀み給ひける。

夢見ずとて歎きし君も程もなく、又我夢に見ぬぞ悲しき。

服にて侍りける比、四月に葵を懸けゝるを見て、　刑部卿頼輔

袂には泪をかけて藤衣、葵をよそのかざしとぞ見る。

讃岐法皇、隠させ給ひぬと聞かせ給ひて、御服奉りける日、法親王よりいへる御服は奉るとぞ申させ給ひければ、

憂ながら其松山の形見には、ことかひそ藤の衣をばきる。　花藏院印元性

是れまでは、「打ち任せての事なれば、いかゞせん、老小不定の習ひなれば、子に後るゝ人多く侍るめり。

人の上と聞きこし物をはての山、我がこの道に迷ひぬる哉。　高岳頼言

一條攝政伊尹の御子に、先の少將擧賢、後の少將義孝とて、ときめき給ふ君達御座しき。疱瘡を煩ひて、同日失せ給ひにけり。親の御心いかばかりか侍りけん。弟の君は、本より道心をはせし人にて、世尊寺の梅の木の本にて、命終決定往生極樂と云ふ鐘をつきけるが、合せて賀縁阿闍梨とて、頼みたる僧の夢に、心地よげにてかく讀み給ひける。

心を歌にて申し侍るべし。

思ひ出づや思出づるに悲きは、別れが後の別れなりけり。　橘　季　通

是れ等は生きての別れなれば、又行逢ふ事も侍りなん。只永世の別れこそ、悲しき事に侍れ老少不定のさかひなれば、親にも先き立ち、子にも後れ、妻にも別かれ、男にも後れ、主にも別かれ、師にも別かるゝ人多く侍り。是も歌にて申すべし。

母失せ給ひければ、常に引き給ひける琴の緒も、斷つとは斯し置き給ひけるに、一年も暮れにければ、引く人はなきに、塵居たる琴をまさぐりて、讀み給ひける。

無き人は音信もせぬ琴の緒を、斷ちし月日ぞ旋り來にけり。　傳大將母

此の歌は鐘子期失せにしかば、伯牙琴の緒を斷ちし心なるべし。

夢ならで又も逢ふべき君ならば、ねられぬべくも歎かざらまし。　藤原相如

と讀みてなげきしに、失せければ、相如が女又讀み侍り。

歸る鴈西へ行きせば玉章に、思ふ言の葉書きつけてまし。　沙彌蓮舜

同じ都の內にはあれども、年比の夫妻なんども、離れぬれば遙に別れ行く、同じ事にてぞ侍る。是れも證歌を申すべし。

小一條院、かれ〳〵に成らせ給ひければ、讀み給ひける。

果てにけん年月何を思ひけん、今しも物の歎かしき哉。　堀河女御

大江公資に忘られて讀める、

夕暮は待たれし物を今は只、行くらん方を思ひこそやれ。　相摸

王照君が、王宮を出て胡國へ趣きし樣は、かはれりと云へども、此心に侍るべし。胡國の后とはもてなせども、習はぬ旅の床露けく、月の光は爽けれども、泪にくれてぞ侍りける。只馬の上にて、照君彈曲を引きて、琵琶に心を慰む。此心の證歌多く侍り。少々申すべし。

胡角一聲霜後の夢　漢宮萬里月前の腸

思きや古き都を立ち別れ、この國人にならんものとは。　僧都懷秀

餘りに細かに侍れども、逢ひ見ぬ前の別れ、別れて後の別れなんども侍り、其

をくれゐて我が戀ひをれば白雲の、かゝれる山を今日や越ゆらん。

天原ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出でし月かも。　安倍仲丸

入唐しける比、(一)源信座主の許へつかはしける。

其の程と契れる旅の別れだに、値ふ事まれに有りとこそきけ。　三河入道寂照

(二)成尋法師、唐へ渡りける比讀める。

いか計空をあふぎて歎くらん、幾雲井とも知らぬ別れを。

鬼界島に侍りける比、未だ生きて侍る由を、風の便に母の許へつかはすとて、

薩摩がた沖の小島に我ありと、親には告げよ八重の潮風。　康頼入道性照

蘇武が胡國に罷りて、十九年まで歸らざりけんも、都は戀しく侍りけんかし。漢王林苑と云ふ所にて遊び給ひけるに、鴈の首に文を著けてありけるを見給ひければ、蘇武がことづけ也けり。其時蘇武は未だ生きたりけると思召して、召し歸されける。鴈書の事歌にも讀み侍りたり。

秋風に初鴈金ぞ聞ゆなる、誰が玉章をかけて來ぬらん。　友則

同じ玉章なれども、返事はかはる事なれば、歸鴈の歌申べし。

(一)源信。横川の惠信僧都のこと、寂照は僧都の上足なり。長保四年宋に入り、長元九年彼の地に沒す。

(二)成尋。天台宗の僧、延久四年宋に入り太平興國傳法院に住す、永保元年彼の地に沒す

侍らざり。人目しげき中の一夜をだにも、明さぬこそ哀なれ。是れを宵の別れとは申すべき也。

宵の間に髣に人を三日月の、あかで入りにし影ぞ戀しき。　藤原爲忠

夜も明けばきつにはめなんくたかけの、まだきに鳴きて夫をやりつる。

讀人不知

都を立ち別るゝ人、東路の小夜の中山思ひやられて、相坂の關路を越ゆれば、古里はいつしか戀しくぞ侍るなる。是を鄙の別れとは申す也。

相坂の關打ち越ゆる程もなく、今朝は都の人ぞ戀しき。　藤原惟規

鄙の別れは同じ事なれども、行衞も知らぬ浪の上にて、都の方も戀しく覺え、海士の小舟にても、歌は讀みて侍り。

都にて山の端に見し月影の、海より出でゝ浪に入哉。　紀貫之

是等をだにこそ、鄙の別れとて、都戀しき事に云ひたるに、幾雲井とも知ぬ浪をわけて、他州まで行き別るゝも侍り。天平五年春三月に、笠朝臣入唐使の時讀める。

さはへなす荒振神も押並て、今日は名越の祓成りけり。

藤原長能

花陽洞の秋の壇、燕子樓の霜夜、姨棄山の曙、明石浦の波の聲、面影にたつ秋の月ぞ、名殘りすくなく成りければ、秋の別れも悲く侍るべき。

終夜詠めてだにも慰まん、明けて見るべき秋の月かは。

源兼澄

世間に憂かりし秋と思へ共、暮れ行く今日は惜くやはあらぬ。

大納言公通

時雨の雨に袖ぬらし、夕部の炭竈煙の心細く、冬も暮れにければ、月の鼠羊の歩、思ひ知られて、深き夜の歌にも、

何事を待つとはなしに明暮れて、今年も今日に成りにける哉。

中納言國信

忍ねの泪色に出でで、富士の高根にかゝる白雲によせて、心空なる事を知らせ、室の八島の煙に譬へて、思ひにもゆる事を云ふ程に、前の世の契有りける中なれば、夫婦の交合に枕珍らしくて語らふ程に、更け行く鐘明け行く鳥の聲に心迷ひ睦言も盡きざるを曉の別れと云ひ侍り。

古の人さへ今はつらき哉、明くればなどか歸りそめけん。

源頼綱

是れまでは人を語らひ明かしぬ、此の暮を待つべき事なれば、いとをしき程には

ば、加様の事多く侍り、摩訶陀國の阿闍世王は、佛生國の勝軍王に負け、毗瑠璃王は五百の釋種を殺し、戒日大王は五天竺を討つ罽尼吒王は馬鳴菩薩慈心の鶏を取り、阿育大王は八萬四千の后を殺し、引正太子は龍樹菩薩の命を失ふ。舍衛國の商人は、佛の御弟子伽留陀夷を殺す。神通第一の目連は、竹林外道に打たる。無上の位に登り給ひし釋迦は、提婆達多に御脛を打たれ給ふ。是れ皆人間の習ひ、怨憎會苦の法也。

六に愛別離苦と云ふは、別れを惜むを申す也。是れも淺きより深く申すべし。大庾嶺の梅霞に薫り、金谷園の櫻風に匂ふ。春も暮れぬれば別れを惜む人多く侍り。

今日のみと春を思はぬ時だにも、立つ事やすき花の陰かは。　躬恒

思ひ出づる事のみ繁き野邊に來て、又花にさへ別れぬるかな。　永縁法師

皆人の心に染むる櫻花、幾しほ年に色まさるらん。　公光

蓮の浮葉にこゆる露、崑山の玉にまがふ。籬の内に開くる瞿麥、蜀江の錦と見ゆる夏、今日ばかりに成りぬれば、荒振神を和むる次でにも、歌讀みて侍り。

皇未だ大海王子と申せし時に殺され給ふ。左大臣長屋王は、聖武天皇に殺され給ふ。平城天皇は、嵯峨天皇に軍に負けて御出家。御子の高岳親王は、春宮の位を下りて出家に成り、眞如親王と申しゝ。天竺へ渡り給ふ道にて失せ給ふ。將門は貞盛に討たれ義親は正盛に討たる。又貞任は賴義に討たれ、武平は義家に討たれ、聖德太子は、救世觀音の垂迹也、されども守屋大臣が首を切り給ふ。弘法大師は、則ち第三地の菩薩也。然れども宗圓僧都を調伏し給ひけり。增して震旦は合戰を前として、煙塵を興とする所なれば、數へ申すに及ばず、『史記』と申す文は、大概軍の日記にてぞ侍るなる、黃帝は蚩尤を討ち、周武王は殷の紂を討ち、越王勾踐は吳王夫差を討ち、秦始皇は六國を隨へり。二世胡亥は趙高に殺され、趙高は秦王の子子嬰に殺され、子嬰は楚王項羽に殺され、項羽は漢高祖に討たれ、後漢の光武は王莽を殺し、魏の曹操は後漢の獻帝を殺す。魏の高貴卿公、晉の武帝に討たる。陳の後主は隋の文帝に亡され、隋の煬帝は唐の太宗に討たれたり。『左傳』と申す文には、二百四十四年の事を注す、臣の君さみする事二十六度と申したるめれば、數へ云ふに及ばず申さんや。天竺は國も廣く、人の心も大きなる所なれ

憂事の大江の山と知りながら、いとゞ深くも成る我身哉。

「天性疎かなりと雖も、恭しく龍顏逆鱗の譬に徵され。

地望是れ切ろに涙いて、烏頭變毛の恩を仰ぐ。」

と云ひ給ふは、此度の事に侍る。近くは敎長宰相、東の方へ流されけるに、かくぞ讀み侍りける。

落ち瀧津水の淡とは流るれど、うきに消えせぬ身を如何にせん。

道憲少將の御子達も、思ひ〳〵に流され行きける中に。

戀しくば來ても見よとて相坂の、關の清水に影は留めてき。　靜賢法師

我が爲に有りける物を下野や、室の八島に絶えぬ煙は。　中納言成憲

唐にも加樣の事は侍りけるとなんめり。(一)一行阿闍梨は、貨羅國へ流され、白樂天は江州の江の邊に琵琶を引きて、袖を涵すなんど申したるめるは、是までは命あらば、又古郷へ歸る事も有りぬべし。永く命に及ぶ恨みも多く侍るめり。天竺震旦までは遠し、先我朝の事少々申し侍るべし。孝德天皇の御代に、入鹿大臣、蘇我山田石河丸、右大臣二人ながら、天智天皇に誅され奉り。大友王子、天武天

(一)一行阿闍梨。眞言宗の祖師、善無畏金剛智に密敎をうく、開元十五年九月寂。大慧禪師と謚す。

作るとも又も燒きなん菅原や、むねの板間の合んかぎりは。
日藏上人が傳には、菅大臣にも値ひ奉りけるとぞ申し侍る。我は太政威德天と云ふ但し無實に依りて罪を蒙る故に、日本國を恨むる心あり。我には八萬四千の眷屬あり、其第三の使者北野の松原にあり。火雷天神とぞ言ひける。是は日藏上人、死して又蘇りたりけるが、語りける事也。又高明親王は、延喜の皇子也。姓を給はりて大將に成り給ひしかば、源氏の大將とぞ申しける。其も御孫の東宮、諍ひに筑前國へ流され給ふ事侍り。其歌に。
七日にも餘りにけりな使あらば、數へ聞かせよ興の島守。
中關白通隆君達、內大臣伊周、權中納言隆家、太上法王を射奉りて、公にならでは行ひ給はぬ。(一)太元の法を行ふて國母呪咀し給へりと云ふ事出で來て。兄の君は筑前の國へ流され、弟の君は但馬の國へ流され給ふ事あり。內大臣伊周は、明石浦にてかくぞよみ給ひける。
物思ふ心の內し昏ければ、明石の浦も甲斐なかりける。
中納言の君は、大江山にて、かくぞ讀み給ひける。

(一)太元法。太元師法と云ふ、太元師明王を本尊として國家を領護し怨敵を降伏するために修す、嘉祥四年正月治部省にて修せしより朝庭の大會となり每年正月八日より十四日迄修せらる。

和田原八十島かけて漕出でぬと、人には告げよ海士の釣舟。

延喜の御時、左大臣時平、いまだ年若く、身の榮えもをろかにおはしければ、菅原右大臣は、年をとなしく、身の才も目出度おはしければ、天下の政、右大臣のつかさどり給ひけるを、左大臣憤り給ひて、虚言を云ひ付けて右大臣を筑紫へ流し遣し侍りき。此の事に於ひて、哀に悲き事ども多く聞え侍りき。其中に取ても、宿の梅を思ひ出で給ふて、かくぞ讀み給ひける。

こち吹かば匂をこせよ梅の花、あるじなしとて春を忘れな。

其の後、此の歌に依りて、彼の梅、主を慕ひて、安樂寺へ飛びて、彼の所に生ひて有るとぞ云へる。筑紫にて多くの詩なんども作り給ひける中。

都府樓に纔かに瓦の色を見る、觀音寺には只鐘の聲を聞く。

かくて、漸程ふるまゝに、罪なくして咎を蒙むる事を恨みて、怖しき事ども出で來りけり。本院、左大臣時平も失せ給ひぬ。太郎八條大將保忠も失せ給ひぬ。其弟の敦忠中納言も失せ給ひぬ、御孫の敦敏の少將も失せ給ひぬ、又其比大内裏燒けたる後、一條院を作られける程に、裏板に虫の食ひける歌に、

めり。御堂關白道長と、堀河左大臣顯光とは、小一條院の女御の諍ひに、惡靈の左府と云はれて御座めり。一條攝政伊尹と、朝成中納言とは、藏人頭の諍ひに、中納言は怖しき物に成りて、一條殿の御孫を滅ぼし給ふぞかし、御孫の花山院も、いまだ十九と申せし時、修行に出でさせおはしましにき。太郎にておはせし義懷中納言も、其歎きに法師に成り給ひにき。其弟の高賢、義孝も、同日に失せ給ひにけりとぞ申したるめる。伴大納言善男は、左大臣信を損ぜんがために自ち應天門を燒き給ふ。是までは他人なれば理なり。正しき兄弟だにも、御中惡く見苦敷き事ども多く聞こえ侍りき。九條殿師輔君達堀河兼道と、東三條殿兼家とは、最後まで御中惡くて見苦敷き事ども有りき。法性寺殿爲光の君達誠信、齊信は御中惡くて、兄の君は手の中に爪の入るまでつよく握りて、失せてひきなんど申したる。其は人間の習ひ、怨憎會苦の怖しき事こそ侍りぬる。是までは又事もをろか也。仁明天王の御時、橘逸勢、伴健岑、怖しき心有りて、伊豆國、隱岐國に流さるゝ事ありき。小野篁は、常嗣宰相の遣唐使に渡りける時、副使につかはされけそに、船嫌へりと云ふ空事故に、隱岐國へ流され侍りけり。さてよめる歌にや。

契しにあらぬつらさも逢ふ事の、無きにはえこそ恨みざりけり。　周防内侍

さのみやは我のみ憂きに成果てゝ、人の惡さを恨みざるべき、　藤原ナリツネの女

よしさらば心の儘に惡かれよ、さなきは人の妄れ難きに。　讀人不知

是までは、情ありて聞ゆるに、村上帝の宣耀殿の女御芳子と、小一條左大臣の御娘、打ち戯れておはしますを、覗きて御覽じけるが、餘に妬く思しけるほどに、九條右大臣師輔の女御を、土器の破にて打ち給ひけるとぞ聞えし。さて御兄の殿原、一條殿伊尹、堀河殿兼通、三條殿兼家、三人ながら御かしこまりに成り給ひにけりとこそは聞こえしか。增てあやしの下子どもの、後妻打ちとかやをして、髮をかなぐり、取り組み引き組みするは、理にぞ侍るべき。唐にも加樣の事は侍りけるにこそ。上陽人の參りし時は十六、今は六十、紅顏空しく老ひて、白髮あらたなり、窓打つ雨に目を覺まし、宮の鶯を獨り聞かんと申したんめるは、其も楊貴妃にそばめられて侍りける、上陽人の事も歌によめり。

戀しくば夢にも人を見るべきに、窓打つ雨に目を覺ましつゝ。

九條右大臣師輔と、元方大納言とは、王子の諍ひに、元方民部卿の靈とて御座

かに申すべし。花を見れば春風に散り留まるためしなければ、木の下に恨みをなせり。此心を。

花散らす風の宿は誰かしる、我に敎へよ行きて恨みん。　素性法師

月を見れば、山の端に傾けり、終に入りぬれば、秋の夜の恨み是に過ぎたるはなし。

月影の入るを惜むも苦きに、西には山のなからましかば。　宇治忠信娘

心を一にして、春の山にまじり、秋の野邊に臥して、惜むに叶はざる時の恨み、いかばかり悲かりけん。又男女の習ひを思ふにも、恨みせちにこそ侍りける。

夢にだに値ふとは見えよさもこそは、現につらき心なり共。　徳大寺左大臣實能

厭るゝ我身ならずばいかにして、人の惡さを思ひ知るべき。　少納言實家

男物思ふさへ此の如し。殊に女は心深き者なれば、物に執心をとゞめ、男を恨むる事罪深くぞ侍るめる。

忘ねと云ひしに合君なれど、問はぬは惡き物にぞ有りける。　本院右近

前世の契を知らではかなくも、人を惡しと思ひける哉。　中宮上總

さり共と八重の潮路に入りしかど、底にも老の浪は寄りけり　　登蓮法師

されば、『文選』と云ふ書に。「水は滔々として日々に度る。世は人を閲べて世を爲し人は冉々として行暮しぬ。人何れの世としてか新ならざらん、世何れの人としてか能くふるからん」。とは申したるぞかし。實に水流れて還る事なし、死したる人又來る事なし。名を註せば多くに成りぬ。言ひ出せば昔物語也。屍は殘りて野の間に捨てられて、徒に蓬か本の土と成る。魂は遊きて冥途の苦みを受く、心有らん人誰か是を悲まざらん。此心を歌に。

草枕旅とは誰か言ひ置きし、終の栖は野山成りけり。　　源順

人の身を露の命と云ひけるは、終には野邊に置けば成りけり。　　僧都源信

皆人の命を露に譬ふるは、叢ごとに置けばなりけり。　　讀人不知

思ひきや君が栖を共ぞとて、蓬が本を來つゝ見んとは。　　覺盛法師

野邊見れば昔の人や誰ならん、其名も知らぬ苔の下哉。　　右京大夫顯方

皆人のよそにのみ見て止みなまし、鳥部野山の嶺の白雲。　　讀人不知

五に怨憎會苦と申すは、萬に恨を懷き、うらめしき事を申す也。淺より深く細

唯戒と布施と放逸ならざるとのみ、今世後世の伴侶となる」と説き給へり。又『摩訶止觀』には、「冥々として獨り行く、誰か是非を訪ふらはん、所有の財産は徒らに他の有と爲る」と云へり。『倶舍論』には「再び生じて汝今盛位を過ぐ、死して遂ひに將さに炎魔王に近かんとす。前路に往かんと欲すれば資糧なく、中有に住せんと求むれば、止る所なし」と云へり。されば、炎魔王の使は、貴きをも賤をも嫌はず、魂を奪ふ獄卒は、賢をも愚なるをも捨つる事なく呵責する也。されば大國の堯舜の賢王も、名のみ殘り、又我朝の延喜天暦の聖の帝も、影をだに留め給はず。況や月卿雲客に於いてをや。三平、三道、四納言又々是の如し。楊貴妃、李夫人の妙なりし姿をも、牛馬頭は情を殘さず、衣通姫、小野小町の優かりし心にも、阿防羅刹は耻づる事なし。秦の始皇の虎狼の心ありしも、梁の武帝の武勇の猛かりしも、賴光、賴信が謀の賢かりしも、維衡、致賴が人に怖ぢられしも、一人も留まる者なし。皆(一)三途の古郷へ歸りにき。天に升り海に入り、市中に交り山に籠りなんどせし四人の梵志も、遂に死苦を免るゝ事なかりき。此心を歌にも讀めり。

(一)三途。地獄、餓鬼、畜生。

(一)定業限りある死になれば、神に祈るも驗なく、佛に申すも甲斐なし。永保、雅忠が藥も叶はず、保憲、晴明が祭も徒事也。死期の堪へ難きのみならず、萬に付けて此世の離れ難く、親きをも疎きをも云はず、見る人毎に名殘惜き苦みのある也。假初の旅の名殘さへ、家を立ち出れば悲き俗ひ也。況や未だ夢にも見ぬ、何なる所とも、何國の國へ赴きて、何なる目にか値はんずらんとも知らぬに、一日片時も離れ難き、恩愛を振り捨てゝ、只獨り指出で行かん心の中推し量り給ふべし。既に今生の緣盡きぬれば、面を雙し親子なれども、怖しく冷じき心出で來て、疾く捨ん事をいとなみ、床を一にせし夫妻も、壁を隔てゝ遠く去りぬ。孟嘗君が三千の客、冥途の旅には副ふ事なく、石季倫二千の友の、後世を隔つれば値ふ事なし。獨り(二)中有の闇に向ひて、樣々の苦患を受けて、炎魔の廳に至りて、罪の輕重を正さるゝ時、罪を陳ずれども、淨婆梨の鏡曇りなく顯れば、作りし罪を悔み悲み、娑婆世界の親子親類は、いかゞすべきと喚き叫べども、生を隔てつれば見ゆる事なくして、憑へ訪ふ者なし。只徒の獨り言にて、遂に情なき獄卒の手に渡さるゝ也。爰を以て、(三)『大集經』に「妻子珍寶及び王位、命終の時に臨めば隨ふものあらず、

(一)定業。生れし、初めより定れる業報。

(二)中有。前世に死したる後未だ次の生を受けざる間のこと。この間の人類の身量は小兒の五六歲の形量にして、微細の色を以て成り肉眼には見えずと云ふ。

(三)『大集經』『大方等大集經』と云ひ六十卷あり、北涼曇無讖の譯なり

大蛇の報を受けたの流轉を鑑みて云はく、汝乃往一念の瞋恚のありしに因りて、一生涯の間になせる善根、須彌山の如くなりと仰せられける。是れのみならず、一念の瞋恚を起せば、善根の薪、瞋恚の猛火の爲めに悉く燒き亡ぼさると云へり。又愚癡の病と云ふは、をろかに拙きを云ふ。愚癡なれば佛法の事をも聞かず、因果の理をも知らず、善惡をも辨へず、貪欲邪見も憚らず、破戒罪業も恐れず。此故に大地獄に落ちて、生々世々に苦を受くる也。昔一人の愚人あり。父をつれて道を行くに、木の陰に休みければ、蚊と云ふ虫、父が額に食ひ付きたるを、大なる棒にて蚊を打ちける程に、親ともに打ち殺しけり。親を殺さんとは思はねども、愚癡なるに依りて逆罪をなしけり。釋迦の濟渡、彌陀の本願に誇り過りて、此三毒の病を免しなば、眞の佛には成り難かるべし。四百四病は此の世ばかり也。三毒の病は生々世々の病なり。此度療治して永世を助かり給ふべし。四四に死苦と申すは、一切の苦は忍び難しと云へ共、死苦を以て第一とす。八萬四千の塵勞門より、(一)毘藍風と云ふ風吹き來りて、四十四の次目ごとに、諸の病責め來りて、舌禁み眼反て、云はんと思ふ事も云はれず、見んと思ふ事も見られず、

(一)毘藍風。迅猛風と譯す、速力迅急にして、至るところ皆悉く壞散せしむと云ふ。

紅の戀の涙の如何なれば、果は朽葉に袖の成るらん。　右大辨宗親

(一)戒賢論師は、只也人にあらず。玄奘三藏の師也。阿闍世王は凡夫と云ふべからず、靈山の聽衆也。然りと云へども、或は三年重病を受け、或は癩病を受け、悲む事極なかりき。證果の羅漢も遁るゝ事なし。目連は(二)耆婆大臣に藥を乞ふ。大聖世尊も免れ給はず、頭痛背痛と宣ふ。況や(三)淨居名士の床にしづむ、衆生の業を病める也。又貪瞋癡の三毒の病ひと云ふ者あり。貧き者は、萬物を求めて、人の物をほしがり、我物を惜む也。是を貪欲の病と云ふ也。昔一人の長者あり、金を多く儲へ持ちけるが、置き所を妻子に知らせず。程なく死して後ち、犬に生れて、彼の金の在るあたりを、立ち去らずありき。けれども、妻子は其とも知らず、打ち扣く事生々世々の敵の如し。永く出離を得ずして苦患を受くる也。『經』に云く、「諸の苦みの因とする所は貪欲を本となす」と說き給へり。一切の惡業は、只貪欲より起るなれば、是を能々愼むべし。次に瞋恚の病ひは、腹を立て怒りを成す事なり。佛(四)靈鷲山の苔の場にて、御說法ありし時、一人の龍王法座に列なる、佛、過去

(一)戒賢論師。印度三摩呾吒國の王族なりしが、摩揭陀國那爛陀寺に入りて護法菩薩を師とせり、後寺に住し玄奘の師となる

(二)耆婆大臣。治命、能治等と譯す醫を業とし、又頗る佛教を尊信せり

(三)淨名居士。維摩詰のこと、印度毘舍離國の長者也在俗の身にて頗る佛教を信じ菩薩の行を修せり。

(四)靈鷲山。梵に耆闍崛山と云ふ。この山には多くの靈仙居住し、又多くの鷲鳥遊集するより此の名あり、中印度摩揭陀國王舍城の東北に在り

（一）大阿闍梨。軌範師、正行等と譯す、軌範となりて弟子の行爲を矯正する道德僧の敬稱。

（二）法橋。法橋上人位と云ふ、法を求めんが爲めに橋梁となりて衆生を濟度するの意。

を傳へ聞きて、簑笠も取り敢へず、京に上りて此女の住みける宮を尋ねければ、人の忌む病なれば、知る人なかりしが、大方朱雀門のあたりへ出されにきと、人云ひければ、心憂く悲く覺えて、軈て行きて見れば、しか〳〵それとは思はねど彼女房病宜くなりて、菰と云ふ物を引き迴して有りける中に、美しかりし髪は芥のやうに結ほゝれて、衣物には血打ち付きて兩の目は烏に挑れて、木の節の脱けたるやうにて有りけるを見るに、心憂く悲かりければ、軈て三井寺へ行きて出家して後には、戒行有りて、智法の人なりければ、（一）大阿闍梨にまで成りにけり。唐の房の（二）法橋行因と云ひしは是也。此物語を聞く時は、病にやつされぬれば、美目形貌麗しき人もなき事を申す也。我心に任せたる戀の病すら、堪難く忍び難し、在中將業平は、昭宣公の御妹を、鬼にくらはれて足摺をして嘆く。平貞文は本院大臣時平の北方を忍びて、若君の腕に歌を書きて悲むなんど云ふ事も侍るめれば、淺からずぞ聞ゆる。是のみならず、戀の病に沉みたる人、今其數云ひ盡しがたし。證歌にて申すべし。

紅に涙の色も成りにけり、かはるは人の心のみかは。　讀人不知

明日までは有るべき物と思はねば、今日晩蟬の聲ぞ悲しき。　梅壺女御

古へは月をのみこそ詠しか、今は日をまつ我ぞ悲しき。　藤原堅子

病大事になりて雪の降るを見て、

覺束なまだ見ぬ道を四手の山、雪蹈み分けて越えんとすらん。　良暹法師

病大事になれば、法師になりて、

はかなしな頭の雪は消え果て丶、適殘る露の我身は。　刑部卿範

病は誠に堪難く、悲しき事にてぞ侍る。國王大臣も所にをかず。されば冷泉院三條院なんども、御病の故に疾く御位を下り給ひけり。朝光道綱の、大將を辭し籠りて居給ひけるも、病の故とぞ承はる。染殿の后は清和の帝の國母にて、一天下を靡し給ひし程に、紺青鬼と云ふ御物氣に取籠られ給ひて、世間の人にもさがなく、云はれ給へり。(一)智證大師、御持僧にて御座けれども、力及ばで病み給ひけり。延暦の比、天下に世の中心地をこりて一人も殘らず倒れ臥して侍りけるに但馬守國高が、神拜使に下りて侍りけるに、子なりける人、父の供して下りたりけるが、ある宮腹なる方に、半者を志深く思ひけるが、病付ぎにけりと云ふ事

(一)智證大師。園城寺の開祖なり、寛平三年十月寂す壽七十八。

には死苦、五には怨憎會苦、六には愛別離苦、七には求不得苦、八には五盛陰苦也。まづ母の胎に宿りて三百日、或は二百六十日の間、業風に吹かれて初めて生るゝ時は生きたる牛の皮を剝ぎて、蕀の中を追ひ遣んが如しと云へり。又和衾を以て請け取ると云へども、百千の劍を以て切り裂くが如しと云へり。此故に赤子の初めて啼く聲は、苦哉とぞ申しける。二に老苦と云ふは、初にをろ〳〵中し侍し如く年月積りぬれば、老ひ衰へて、黑き髮筋は白く成り、色悴け、腰勾りて立居心に任せず、子にも人にも隔てられ、心を伸る事もなし。散り餘りたる花の風を待つが如く侍るなり。三に病苦と云ふは、四百四種の病あり、一として安き事なし。頭ぬるみ、身ほとをり、胸さはぎ、腹ふくる、何れか勘忍すべき。加之子病めば同じく親病む。又夫病めば妻も病む。五體身分の痛きのみならず、何事に付けても物心細く、壽の惜き苦み、いとゞ打ち副ひて覺ゆる也。其心の證歌を引き侍るべし。

胸に滿つ思をだにも晴ずして、烟とならん事ぞ悲しき。　贈皇后宮

御病大事に成り給ひける比蟬の鳴くを聞き給ひて、

（二）『入印經』。具には『信力入印法門經』と云ふ、元魏曇摩流支の譯なり。

の夢に見えてよみける。

奥山の行末しらぬ谷底に、哀いつまであらんとすらん。

加之畜生道に生るゝ者は、出ること難く侍る也。占婆城の鳩、祇園寺の蟻の過去八萬劫畜生なりき。又未來八萬劫も、畜生なるべしとこそ仰せられける。過去遠々占婆城の鳩、未來永々祇園寺の蟻と云へり。

次に修羅と申すは、瞋恚盛にして惡心さむる事なし。一日に三時の愁ひ、天皷自ら鳴るの嘆きあり。加之、天上に籠るが故に、細かには申すべからず。常に物妬しく、腹立て、瞋たる心を宗とする者也。文に云く「諸々の阿修羅等大海の邊に居在し、自ら共に言ひ語る時、大音聲を出す」とは申したるめる。物妬しき事歌にて申すべし。

搔つめて妬さも妬しもしほ草、思はぬ方に煙立つなり。　戒秀法師

次に人間と申すは、我等衆生の事也。（二）『入印經』に十六苦を明かせり。父の生めるも苦也。母の生めるも苦也、樂も苦也、榮ゆるも苦也。なんど申すめれども、常には只八苦とぞ申したる。八苦と云ふは、一には生苦、二には老苦、三には病苦、四

河と見て汲(飲)めば炎に成る物を、いつくを指して痩せ渡るらん。祐盛法師

次に畜生道を申さば、殘害の苦み忍び難し。大象の地に猛る、いまだ師子王の恐れを免れず。毒龍の海に蟠る。猶ほ金翅鳥の難を離れ難し。雉は鷹のために取られ、蝦は蛇のために呑まる。猫の前の鼠、鵜の前の鮎、何れか殘害を免れたる物ある。長きは短きを呑み、大なるは小さきを噉ふ。加之鷲は翅のために殺され、虎は皮のために命を失ふ。又但念水草の類、重きを負ひて坂に向ひ、五百由旬の蟒は、小虫のために噉る。蒼海の魚、暗を厭ひて出離を求め、雪山の鳥は光に値うて無常を觀ず。或は火の色に耽りて命を失ひ、或は蜘の井にかゝりて身を滅す。三十四億の種悉一として苦あらざる事なし。是のみならず終夜もゆる螢晩の蟬の泣く聲、秋の虫の怨むる聲、冬の鴛の水に睡る、苦みに非ずと云ふ事なし其心を歌にも讀める也。

音もせで思ひに燃ゆる螢こそ鳴く虫よりも哀なりけり。　源　重之

前世に法をやあしと謗りけん、難波堀江にあさる春駒。　前大僧正覺忠

經文なんどをも、此の如くよまれて侍り、又高遠の大弐、畜生道に生れたる由、子

近くは蘇生の若狹守邦忠も、加様の物語はし侍りけるとぞ。因幡守重隆、地獄の冥官に參りて、白河の法皇、罪の多く、又功德も多くまし〳〵けるが、未だ生所も定まらず御座を見よとて、見せ給ひけるとぞ語り侍りける。返々も地獄は厭ひ侍るべき者なり。

次に餓鬼道と云ふ事は、無量の苦患隙なしと云へども取分け飢饉の愁忍びがたし。徳尸羅城の餓鬼は、五百歳の間食を得ずして、子を飢し、師子國の餓鬼は七變海山に成るまで、飲食の名をだにも聞くことなし。或は自ら腦を喰ひて飢を助からんとす。或は生るゝ子を喰ひて命を繼ぐ。されば『倶舍論』に云く、我夜々五子を生む、生むに隨つて皆自ら喰ふと云は是れ也。(一)『雜寶藏經』に說く、菓を見て取らんとすれども、炎となる、腹は大海の如くにして、須彌山を食すと云へども、飽くべからず。口は針の穴の如し。芥子を飲むとも入べからず。百菓林に結ぶ、取らんと欲すれば刀葉なり。萬水海に入る。飲まんと欲すれば猛火なりとは是を申すなり。(二)『經律異相』には人間にも餓鬼は有るといへり。若し、貧苦の者を云へるにや、又餓鬼を歌にも讀めり。

(一)『雜寶藏經』十卷あり。元魏の吉迦夜、曇耀と共に譯ずる所なり。

(二)『經律異相』五十卷あり。梁の僧旻寶唱等の集めしもの。

を一劫とするぞと云へる。されば祝の歌にも、かくぞ讀める。

君が代は天の羽衣希にきて、摩づ共つきぬ巖成るらん。　大納言公任

又の説には、四十里の城に芥子を積みて、三年に一つを取りてあらんに、皆取盡すを一劫とするともいへり。金峯山の(一)日藏聖人、無言斷食にて行へる間、秘密瑜伽の鈴を拳りながら、死に入りたる事ありき。地獄に行きて、延喜帝に逢ひ奉りけるに、地獄へ落ちぬる者、二度娑婆に歸へる事なしと帝仰せられて、されども汝は蘇るべき者也。我は父寛平法皇の御命を背き奉り無實を以て菅丞相を流したりし罪の故に、今地獄に落ちて苦患を受る也。必ず我王子に此有樣を語りて苦みを救ふべしと仰せられければ、聖人畏りて承る。其時帝の仰せに冥途には罪なきを以て主とす。汝我を敬ふ事なかれと、仰せられけるこそ哀れなれ。此の心を歌に讀み給へり。

いふならく(二)奈落の底に入りぬれば、(三)刹利も(四)首陀も替らざりけり。　高岳親王

此歌こそ思ひ合せられて、いとゞ哀れに悲くは侍れ、又地獄の繪の屛風を見て。

淺猿や劒の枝のたはむまで、なにの此身のなれるなるらん。　和泉式部

(一)日藏上人。初の名を道賢と云ふ三善淸行の子なり寛和元年寂す。

(二)奈落。地獄のこと。

(三)刹利。具には刹帝利と云ひ、土田主と譯す。王及び武士の種族のこと。

(四)首陀。具には首陀羅と云ひ屠殺を業とする最下級の種族のこと。

されば、佛は細かにことはらば、聞んもの血を吐きて、死なんとぞ仰せられたりける。彼の地獄の有樣を云ふに、天には七重の網を張り、鳳凰の翅なりとも、飛んで去り難し、地には鐵城固く閉ぢて、(一)那羅延が力なりとも、破るべからず熱鐵熾盛として、四面に交雜せり。刀林刄利くして、鐵城に充滿せり。(二)阿防羅刹の忿れる恣を見るに、心迷ひ(三)牛頭馬頭の烈しき聲を聞くに肝を失ひ、天に仰ひて嘆かんとすれど、涙落ちず、刀葉下りて眼を破る。故に地にうつぶせして叫ばんとすれども、聲出ず。猛火來りて口に入る。故に況や苦ならぬ事を以て心をやすむる事あらんや。一日にもあらず、二日にもあらず、一年にもあらず、二年にもあらず(四)無數劫の中に苦を受る事一種に非ず、二種にあちず、百千萬の苦み堪へがたし。況や阿鼻大城の苦は、中々申すに及ばず。頂きを下に、足をば上にして、彼の地獄へ落つる事、二千年の間也。地獄の深き事をば是れにて知るべし。受苦の隙なき故に、名付けて無間と云ふと說けり。苦を受けざる事は、芥子ばかりもなし。命の長き事一中劫也。久しき事を譬を以て申すべし。劫と申すは、四十里の岩を、梵天三銖の衣を以て、三年に一度、摩んに、彼岩皆摩盡ん事

(一)那羅延。堅固力士と譯す、天の力士にして、其の力量は大象の七十倍なりと云ふ。

(二)阿防羅刹。下方可畏鬼と譯す、地獄の卒のこと、牛頭人首にして兩脚は牛蹄なり。剛鐵の劔を持すと云ふ。

(三)牛頭馬頭。地獄の卒のこと、牛頭人身なるあり。馬頭人身なるあり。

(四)無數劫。限なき時間のこと。

回るが如くにして、六道に輪回する事は、佛法の寶を儲けざりし故也。されば、『法華經』に三惡道に墜墮し、六趣の中に輪廻すと說きたるは、此心に侍るべし」と云へば、此女又問ふて云く「先地獄、餓鬼、畜生の有情は、如何樣に侍るぞや」と云へば、僧答へて云く「六道の事は、天臺山の住侶、惠心院の源信僧都の一代聖敎を開きて、撰し侍べる(一)『往生要集』と云ふ文こそ、細には注して侍るめる未だ見給はずや、少々申し侍るべし。

先地獄と云ふは、此の閻浮提の下一千由旬にあり、則ち一には等活地獄、二には黑繩地獄、三には衆合地獄、四には叫喚地獄、五には大叫喚地獄、六には焦熱地獄、七には大焦熱地獄、八には阿鼻地獄也。是を八大地獄とは申す也。是に亦各々十六の別所を具へたり。惣て一百三十六の地獄也。地獄は此の外に野の中山の中、海邊にもあるなりとぞ、(二)天親菩薩の(三)『俱舍論』には述べたる。實に左あらんと覺ゆる事は、我朝越中の國、立山の地獄より、近江國の愛智の大領が娘の、山伏に言付けて、親の方へ物申し越す事のありけると承る。大方は地獄の苦み、繪に書き喩を取るとも、百千萬億の中に一をだにも云ひ盡すべからず。

(一)『往生要集』三巻あり、分ちて六巻とす。源信僧都の著なり。經論の要文を集め、往生極樂の敎行を勸說したる書、永觀二年四月に起草して翌年四月に功成りしもの。

(二)天親菩薩。梵に婆藪槃豆、譯して世親又は天親と云ふ。北天竺健陀羅國の人、初め小乘敎を信ぜしが、後兄無著の勸化により大乘に入りて多くの書を著し大乘の法門を盛んに弘通せり。世に千部の論師と云ふ。

(三)『俱舍論』『阿毘達磨俱舍論』と云ひ卅卷あり。世親の作。玄弉の譯なり界根等の九品を分つ。

葉を観じて、生死無常をば覺り侍りけれ。欽明天皇の御代に、聖教渡り、上宮太子の御時、佛法弘まりて後、誰の心有る人か、諸行を無常也と知り、佛法を寶と思はぬ者有るや。飛花落葉の心、少々申すべし。

花よりも人こそ化に成りにけれ、何を先に戀ひんとか見し。　貫之

はかなさを恨みも果てじ櫻花、浮世は誰も心ならねば。　仁和寺御室

世の憂に秋の木の葉の深ければ、落る涙も紅葉しにけり。　素覺法師

小男鹿の妻問ふ聲も如何なれば、夕を分て悲しかるらん。　藤原修範

加樣に云ひければ、此女聞きて「實に如此承る時は、佛法計の寶はなかりけり。今より後は、佛法を寶と思ひ侍るべし。さても此六道と云へるは、何國を申し侍るぞ」と問ば、此僧答へて云はく「六道と云ふ事を知らぬ人や侍る。此世には五つ六つの少なき者や、あやしの下臈までも皆知りて侍るものを。されども、佛の御前にて知りながらはよも問ひ給はじと思ひ侍れば、少々申すべし、心を留めて、聞き給へよ。六道と申すは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、此等を申し侍る也。無始生死より、諸佛の利益に漏れて、鳥の林を離れず、車の庭に

に捨てられて、身分所々に散亂して、泥塊に交らんとすらんと申すぞかし。實に今生の身果て、如何覺束なくや侍らざるべき。清少納言が『枕草子』には除目の聞書の、赤子生れたる老の行末思はしき人の文なんどをだにこそ、覺束なき事には申して侍りぬれ。されば心ある人、皆かくぞ讀みて侍る。

何の日何の山の麓にて、結ぶ煙と成らんとすらん。　選子内親王

世間をかく言々て果々は、いかにやいかに成らんとすらん。　讀人不知

思出づる時ぞ悲しき世間は、空行く雲の果を知らねば。　同

消果し露の我身の置所、何の野邊の草葉成るらん。　前齋宮大輔

加様に思ふ人は皆諸行無常を觀じ、佛法の寶を儲くる也。『法華經』には「六道の衆生を見るに、貧窮にして福慧なし」と說き給ふ。此文の心は(一)六道の衆生を見るに、貧窮にして福慧なし、國王大臣も貧窮なり。只佛法を修行せし人こそ、寶を儲る人と云ふ心にてあれば、忉利天の億千歲の樂み(二)大梵王宮の深禪定の樂みも、佛法をだに修せずば、何にかはし侍るべき。繩を結び木を刻みて、物の數を定めし昔だにもこそ、心ある人の、花の散り、木の葉の落つるを見ても、飛花落

(一)六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

(二)大梵王宮。色界初禪天の主なる大梵天王の住する宮殿。

ずよりんば、誰か思ひに隨ふ人あらん」と云へり早く心に違はぬ淨土を願ひて、速かに思ひに背かざる聖衆と遊び戯れ給ふべき也。人界に生を受けたる事は爪の上の土の如く、又は大海の底に針を沈めて、八萬由旬の須彌山の頂より絲を下して、針の耳を通さんよりも猶ほ希なる事也。佛法に値へる事は、一眼の龜の浮木に乘れるが如し。今度佛法の寶を儲けずんば、又何の時をか期せん。早く頭燃を拂ふが如くに營みて、明日を期る事なく行ひ給ふべし。されば心ある人かくこそよめる。

思ひ知る人も有りける世間に、いつをいつとて急がざるらん。　大納言公任

いつ迄と長閑に物を思ふらん、時の間をだに知らぬ命に。　待賢門院堀河

浮世をば背かば今日も背きなん、明日の有りとは思ふべき身か。保胤入道

唐の太子の賓客白樂天は、「人生れて一百年、數ふれば三百六千日、共百年を持つ者、萬が一もなし」と嘆き、首楞嚴院の明賢阿闍梨は、縱ひ八十の竿を持つ者も連日を數ふれば、二萬八千餘日、況や半過ぎなん、いつを待つとかせん、いつの日、いつの時、出入の息再會待つことなく、永く漏れて、何の野、何の山の麓

心ある人は皆冥途の苦を悲んで、娑婆の樂をば厭ひ思ふなり。毛血律師の地獄の苦を悲歎せし、證果の羅漢の衣の血を洗ひし例あり。一生は過ぎやすし、萬事は夢の如し、年月は射る矢の如し。少時も留らず暮れ行くなり。是を羊の歩み隙行く駒に喩る也。されば心ある人は如此ぞ讀める。

山の端に隱れな果てそ秋の月、此世にだにも闇は惑はし。　藤原敎長

此世だに月待つ程は苦しきに、哀れいかなる闇に迷はん。　神祇伯顯仲女

永き世の苦しき事を思へかし、何歎くらん假の宿を。　讀人不知

佛『譬喩經』に説給はく、譬へば人二人道を行くに、あらまし事に一人が云はく「只今餅を三つ見付け拾ひたらんにいかゞせんずる」と云へば今一人が云はく「各一つづゝ食うて、今一つをば央より切りてこそ食はめ」と云へば「見付けたらん人こそ二つ食はめ」と云ふ、今一人は「同じ道を行くに同樣にこそ食はめ」と論じて諍ひ鬪ひをす。濁世末代の衆生は、加樣に無き福幸を諍ひて、萬人に鬪ひ論ずる也。富める者必ずしも樂しからず、命ある者必ずしも久しからず。爰を以て(一)行基菩薩は「淨土にあらずよりんば、何の處か心に合ふ處あらん、聖衆にあら

(一)行基。法相宗の僧。廿五歳大和國藥師寺に投じて出家し、後諸國に遊歷し寺を創し、交通をはかる、天平勝寶元年聖武帝及び皇后に菩薩戒を授け、二月寂す壽八十。

僧祇耶劫若干に苦種を植ゆ」とは書き給ふ也。是れ皆な諸行無常を觀ずる心に侍るべし。昔し天竺の國王、我國の中に佛法を信ぜん者をば命を斷つべしと云ふ宣旨を下し給ひて侍りける間、五百人の中の第一の御覺の后、命を捨てゝ佛法を崇め給ふ事侍りけり。是れ又諸行無常を觀じて、後の世を嘆き給ふが故也。此世には命に代る程の事は有りがたく侍るめり。早く諸行無常を觀じて、後世を勤め行ひ給ふべき也。淺間敷き瓦礫荊棘の穢土に著をなしてあらんは、蓼を食む虫の甘露の味ありと知らざるが如し。花池寶閣の淨刹を願はざるは井の内の蛙、大海の廣き事を覺らざるに似たり。五陰の化なる身は、樂ありとても久しからず、草露のはかなき命さかえ有りとても幾か有らんや。況や有るに付いても憂へ無きに付けても憂ふ。一生は盡くる事ありとも希望は盡くる事なし。生死に著を成す事なかれ。一切の諸佛は胸を焦きて悲み、十方の菩薩は嘆きて恥しめ給ふらん。爰を以て(一)弘法大師『三敎指歸』に「大に喜び大に笑ふ者は大に衰へ大に悲むべき相也」と書き給へり、されば(二)『正法念經』には「智者は憂を含むで樓閣の中に籠るが如し。愚者は喜を懷きて光音天に生れたるが如し」とは說き給ふなれ。加之

(一)弘法大師。眞言宗の祖、承和二年三月寂す、壽六十二、『三敎指歸』三卷あり、大師の作。

(二)『正法念經』。『正法念處經』と云ふ。七十卷あり。瞿曇般若流支の譯なり。

益かあらん、況や彼に仕へて輕佞慢居せんをやとこそ、正覺聖人は書き侍りけれ。賢き人は皆過去遠々の流轉を觀じて、名利を求めぬ事にてこそ侍るめる。されば許由は位に即くべき由を聞きて、穎川と云ふ川にて耳を洗ひしかば、巣父と云ふ者此の由を聞きて、其の河の流を忌嫌ひし也。是れ皆な諸行無常を觀ずる故也。又無言太子の十年までものいはず、別成太子七度まで位を辭し給ひしも、是生滅法を悟り給ふが故也。されば昔莊周と云ひし人の夢の中に、二百年の間蝴蝶となりて花の上に住みけるが、驚きて思ひけるは、夢を夢と思ふや、夢とも現とも分きかねてぞ侍りける。此心を江中納言匡房卿、堀河院の百首の歌めしけるによめる。

百歳は花に宿りて過してき、此世は蝶の夢にぞ有りける。

是れならず心ある人は、此世を必ずしも現とは思ひ侍らざんめん。

ぬるが内に見るをのみやは夢と云はん、はかなき世をも現とはみず。　忠岑

よしさらば値ふと見つるに慰まん、覺むる現も夢ならぬかは。　中納言實家

通夜昔の事を見つる哉、語るや現ありし世や夢。　大江定衡

爰を以て、(一)玄弉三藏の『西域記』には「何ぞ唯電光朝露のみ、短時の身たらん。

(一)玄弉三藏。名は褘、姓は陳氏、二十九歳にして西遊し那爛陀寺の戒賢論師に唯識を學び貞觀十九年長安に歸る諸經論を譯出すること凡そ七十五部一千三百三十巻麟德元年二月六十五歳にて寂す『西域記』は其の紀行文にして十二巻あり。

（一）祇園精舍。祇樹給孤獨園に建てられたる精舍釋尊及び衆僧のために須達長者の寄進せし所にして七層の伽藍ありて壯麗を極めたりと云ふ。

（二）金輪聖王。轉輪王の中最も最れたる王のこと。

の海を渡る船、生滅滅已は劒の山を越ゆる車、寂滅爲樂は八相成道の證果也。是故に釋迦如來因位の御時、雪山童子にておはしましける時、天の帝釋、羅刹と云ふ鬼に變じ給うて、諸行無常是生滅法の二句を授け給ひし時、童子云ひけるは、此文はいまだ末の句あるべし、同くば授け給へと仰せられければ、羅刹の云はく授け奉るべけれども飢に勞れたり、我は人の血を吸ふもの也。御命を我に與へ給はゞ、末の句を授け奉らんと云へば、童子の云はく、命を與へて後何者か授かり申すべき、先末の句を傳へ給へ、聽聞して命を捨つべしと云ひし時、生滅滅已寂滅爲樂と授け奉る。童子此文を聽聞し給ひて、さしも峻き雪山の峯より、谷に向ひて、身を投げ給ひし時、羅刹御身を受け留め奉り、御心を見ん爲め也、命を捨て給ふべきに非ずと云ひけり。されば半偈に身を投ぐると云ふ事は是れ也（一）祇園精舍の鐘の聲は、此文を唱ふる也。況や蜉蝣の化なる命なり。爭か諸行無常なりと觀せざらんや。渴鹿の墓無き身なり、何ぞ是生滅法を悟らざらん。出る息は入る息を待たず、石火の光の中に幾の樂みかあらん。（二）金輪聖王の位を經し事は幾ぞ、天龍の恭敬を以て喜びとせず、況や人間の歸依をや。自ら帝たらんすら、何の

の如きの觀をなすべし」

(一)「是の日已に過ぎぬ、命是減ずると小水の魚の如し。斯れ何の樂かあらんや」

「譬へば(二)旃陀羅の牛を駈つて屠所に至るが如し。歩々死地に近づく。人の命は亦是の如し。一切の諸法は皆悉く空寂にして生も無く滅もなく大もなく小もなし。人の命の停まらざることは山水よりも過ぎたり。今日は存すと雖も明は亦保ち難し」

又(三)『維摩經』の十喩にも、此身は水に宿れる月の如し、電の如し、芭蕉の如しなんど申したれば、(四)諸行無常なりと觀じて佛法を寶と思ひ給ふべき也。『維摩經』の心をば歌にも讀み侍り。

手に結ぶ水に宿れる月影の、有るか無きかの世にも住む哉。　貫之

世間を何に譬へん秋の田の、穗の上照す夜半の稻妻。　源重之

長き夜の夢の中にて見る夢は、何れか現いかゞ定めん。　權僧正永縁

されば、「諸行は無常なり是れ生滅の法なり。生滅滅し已れば、寂滅を樂と爲す」と觀ぜん人は皆佛法の寶を儲くべき也、諸行無常は天に上る階、是生滅法は愛欲

(六)止觀玄義。天臺宗所學の書『摩訶止觀』『法華玄義』共に十卷あり、天台山智者大師述弟子章安記『法華文句』と併せて天台の三大部と云ふ。

(七)七金山。九山の中須彌山と鐵圍山の七山を除く餘の七山皆金色の光明ある故に金山と云ふ。

(八)一切有爲の法等。金剛般若波羅密經の文。

(一)是の日已に等梵網菩薩戒經序の文。譬へば等上の文。

(二)旃陀羅。屠者殺者等と翻す。印度にて漁獵、守獄、屠殺等を業とするものを云ふ。

(三)『維摩經』『維摩結所說經』と云の三卷あり。雄摩羅計譯。今の文は『觀衆生品』の文なり。

(四)諸行無常『涅槃經』の文なり、行は遷流の義即ちもろ〳〵の移り變るものゝ意にして有爲の萬像のこと

盛なり」と說き、又「無量無數劫にも是の法を聞かんと亦難し、能く是の法を聽く者は、此の人も亦復た難し」

と說り。舍衛の三億は名をだにも聞かず。況や佛法流布せざらん國をや。されば、佛法は寶なんめりと知りながら、如何やうに申すべしとも覺え侍らず(一)顯密の聖敎(二)八宗に別れて、經論五千三百七十二卷也。(三)舍利弗が智惠(四)富樓那が辯舌、猶し及ぶところにあらず。況やあやしの山老、爭か申し述ぶべき。南都の修學に眼をさらさざりしかば(五)『瑜伽』『唯識』にも闇く、北嶺の聖敎に臂を下さざりしかば、(六)『止觀』『玄義』にも迷へり。雪を積み螢を集めずして徒に鳩の杖の齡に及べり。然と云へ共、田舍、山寺に只暫居住して侍りしに、勸學院の雀は蒙求を囀り、(七)七金山の鳥の黃なる翅生ひたるらんやうに、をろ〳〵承はりしは、諸行無常を觀ずるを、佛法の大意とは申すとこそ承はりしか。大聖世尊、四十餘年の間多く法を說き給へるにも、皆諸行は無常なりとのみこそ侍れ、少々其文どもを申し侍るべし。

(八)「一切の有爲の法は夢、幻、泡、影の如く、露の如く、亦電の如し。應さに是

(一)顯密の聖教。華嚴天台等の顯教と眞言密教との聖教の意、即ち一代佛教のこと。
(二)八宗。華嚴、律、法相、三論、成實、倶舍の六宗に天台眞言の二宗を如ふ。
(三)舍利弗、釋尊十大弟子の一、又は鶖鷺子と譯す。智慧第一と云ふ。
(四)富樓那。釋尊十大弟子の一、滿慈子又は滿願子と云ふ。說法第一の稱あり。
(五)瑜伽唯識。法相宗所依の論。瑜伽師地論は一百卷あり、無著菩薩の作。唯識論は十卷あり、護法等の菩薩の造なり。

て眠れてぞ在まほしきと言へり。一人の王は我は常に春の野に出でゝ花を見小松を引きて遊ばんと思ふなりと言ひけり。各かやうに言ひて後四人の王、又普安大王に君は何事をか又好ましく思ひ給ふと問ひければ、答へ給ひけるは、我身には常に、十善の位に居て、樂む事は目出度けれども、妻子珍寶及び王位なんどは後世まで身に付く事なし。父母六親に又副ばやと思ふは、孝養の志は深けれども生死無常心に叶ふべからず、常に形能き人にむつるゝ事はよけれども、能き形必ずしも久しからず、終には老のために衰れ、病のために疲る。春の野に出て、霞に嘯き、花に嘲るは面白けれども、春を駐るに春駐らず、一旦の興に侍るべし。されば、只生々世々の寶となるは佛法と云ふ物ぞ、好もしく侍ると言ひければ、四人の國王、普安大王の詞を感じ給ひて、軈て普安大王に歸して、佛の御所へ參り給ひけるとぞ聞こゆ。妙樂大師、往詣佛所の文を釋して云へる、細には。(一)『五王經』に說けり、實に一切の寶には値ふ事ありと云へども、佛法の寶には値ふ事難し。されば『法華經』にも、

「一百八十劫空しく過ぐれども佛あふことなし。(二)三惡道充滿して、(三)阿修羅亦

(一)『九王經』一巻小乘部にあり、譯者を詳かにせず。
(二)三惡道。地獄道餓鬼道畜生道。
(三)阿修羅。六道の一、非天、非類等と譯す。家相山中又は大海の底に居りて常に三十三天と相戰ふ。

寶物集卷第二

良暫くありて、若やかなる女房の聲にて「抑佛法の寶にて侍らん事を承り候はばや」と云ひければ、此僧微し打ち咲ふ氣色と覺えて云ふやう「佛法僧を以て三寶と申す也。名を以て意得侍るべし。又此の事初めて申すべきにあらず。昔天竺に國王御座き。名をば普安大王と申しき。隣の四人の國王の佛法の理をも知らず、罪障懺悔の心もなき事を悲み給ひ、方便を以て敎へんがために、四人の王を迎へ奉りて、地には瓔珞を敷き滿ちて、薪には沉香を折り薫べ、菓には洞庭の橘を擘き、鱠には天地の鱗を切り調へ、玉の盃をして醉を勸めて、又金の琴柱を雙べて興を催しなんどして、御物語を爲し給ひける。次に抑四人の國王、何事をか好ましと思召すと問ひ給ひければ、四人各、心地能く打ち融けて言ひけり一人の國王、我は常に國王として、大臣公卿に圍遶せられ、百姓萬民に仰がれて在まほしきと言ひけり。一人の國王は、我は父母六親に副うて、立居の姿を見えもし、又は見ばやと思ふなりと言ひけり。一人の王は、我は常に形能き人に副う

欝頭天に生じて期八萬刧、始終哀み免れず。爰を以て、天竺の輔相(大臣の名也)の子は疾く生を替へんために、海に入りなんどしけり。加之心ある人は、皆壽を寶とするためしは見えず。世親菩薩は、壽盡る時歡喜すること、猶し衆病を捨つるがごとしと教へ、釋尊は、我れ身命を愛せず但だ無上道を惜しむ。と說き給へり。此心の歌、一兩首申すべし。

惜めども惜み遂ぐべき命かは、身を捨てゝこそ身をば助けめ。　讀人不知

さらず共幾世か今はさは憂きに、替へたる命何と思はん。　藤原經家

假初の憂世ばかりの戀にだに、値ふに命を惜みやはする。　勝命法師

されば命を寶と思ふべからず、情思ひ解くに生々の寶には佛法と申す物こそ、いみじき寶にて侍れ」とぞ申しける。此上に又何なる申す者あらんと、聞き居たる程に、大方世間靜まりかへり、御堂の內鳴を止めて、音もせず侍りき。

燕の太子丹を召し籠めて置きたりけるが、暇を乞ひけるに、責めて取らせんがために、馬に角生ひ、烏の頭の白く成りたらん時、暇を取らせんと云ひける程に、先づ烏の頭白く成りたりければ、驚きて暇を取らせてけり。燕丹我國に歸へりて敵秦皇を伐んと思ふ志深くして、荊軻と云ふ兵に云ひ合せてければ、毒龍の劒と、樊於期が頸だにあらば、討たんと云ひければ、樊於期自ら頸を切りて、荊軻にかすと云へり、壽を寶と思はんには、自ら頸を切りて人にかすべしや。烏の頭の白く成りたりし事は、歌にも讀みたり。

山烏頭も白く成りにけり、我歸るべき時やきぬらん。　増基法師

命の寶ならぬためし、亦申すべし、猿澤の池に身を投げし采女又生田の川に身を沈めし女『源氏物語』には行末なく空の煙と登りし人、『狹衣の物語』には、早瀨の底のみくづと成りし人、此等を思ふも何等は命を寶と惜みける。去るは棄老國と云ふ國には、命長き者をば、他國へ流し遣はす也。實に命は長きも短きも生死無常は只同じ事也。

軒轅世を治む運一百回、登霞して駕留まらず。

實方中將

五節の歌の中に

足曳の山あひの水の氷れるを、いかなる風のとけるなるらん。

『萬葉集』より已來、家々の集、所々の打ち聞きにも、祝ひ歌と申したるは、皆君が代の久しかるべき事をのみよめり。實に誰も命を惜みければ、命こそ寶と聞き居たる程に、聖少し訛りたる者、法師なんめりと覺ゆるが、片角より懸り指出て云ふやう、「壽を寶と申す人もあり。又無下に寶とも思はぬためしも侍べり。或は等閑の一夜の宿と、世に命を替へ、或は化に散る花の匂にかへんと云へる人もあり。又身には病の嘆きある人の、年老ひたる哀れ疾して死なばやなんど云ふめり。皆人ごとに必ずしも命を惜み、寶と思へるものなかんめり。是も其證歌を以て申すべし。

紀友則

命やは何ぞと露の化物を、値ふにし替へば惜しからなくに。

永緣法師

戀ひ死なん命は事の數ならず、强顏き人のはてぞゆかしき。

源通親

櫻花命に替ふるためしあらば、いきて散るをば嘆かざらまし。

壽を寶と思はぬためし、尙々申すべし。秦の始皇六國を打ち隨へて侍りしに、

紫に八入染めたる菊の花、移ろふ色と誰か言ひけん。　藤原義忠

秦皇漢武は、命を寶と思ふが故に、不死の藥ありと聞きて、方士を以て年々に遣す也。「海漫々、風浩々、眼穿なんとすれども蓬萊島を見ず」と、白居易の樂府に書き給へるは是れ也。桓帝は、命を延べんがために、韓康が長安の市に出て、藥を賣りしをば、車を遣して迎へし也。竹田の千次が、助老延齡の文を守りて、枸杞を好みしは、命を寶と思ひし故也。漢家本朝の人、誰か壽を寶と思はざるや。都べて娑婆世界にある有情の類の壽を惜ぬはなし。されば萬業しげき中に、何か萬歲を祝ひ、千秋を祈らぬは有る哉。天照大神の天の岩戸を開き給ひし昔の歌に、萬の神達を集めて歌ひ始め給ひたる神樂にも、千秋萬歲と云ふ所侍り、清見原天皇の行ひ始め給へる豐明にも、雲の上人心を一つにして、先づ萬歲千秋の句をこそ詠じ給ひぬれ。神樂五節の事は歌にも讀み侍りき。

明けぬ夜の心ながらにやみにしを、朝倉と云ふ聲は聞きや。　讀人不知

朝倉の聲こそ空に聞ゆなる、天の岩戸も明けやしぬらん。　藤原致時

榊取る庭火の前に降る雪は、面白きとや神も見るらん。　河内

浦山し心の雲や晴ぬらん、鷲のみ山に照る月を見て。　藤原ともとし

鷲の山隔る雲や深からん、常にすむなる月を見ぬ哉。　康資王の母

あやなくに雲隠ぬと見し月の、鷲の峰にはすまぬ夜ぞなき。　朝日の尼

世間の人の心の浮雲に、空隠れする有明の月。　登蓮法師

張騫が、漢武帝の使にて、天河の水上を尋ねて歸り。劉晨が、仙家に行きて、頓て歸るとは思ひけれども、七世の孫に値ひしも、皆命の有りし故也。されば堀河右大臣の歌に。

逢迄とせめて命の惜しければ、戀こそ人の藥なりけり

と讀み給ふ、仙家には紅の雪を服ひ、紫の菊を飲み、命を寶と思ひて齡を延ぶる事也。詩歌を以て少少申すべし。

色ありて分け易し殘雪底。　情無くして辨へ難し夕陽中。

霑て干す山路の菊の露の間に、爭か我は千代を經ぬべし。　素性法師

此歌は、仙宮の菊を讀めり。是れに付いて祝ひに寄せて讀めり。

君が代の長月にしも白菊の、咲くや千年の初め成るらん。　法性寺殿

目出度しと云ふとも生る所の子罪を作る故に、生み置きし母罪を盛に得て、憂惱する也」と言ひける。後世にも又子を以て寶とすべからずと見えたり。されば經文に、人子の爲に罪を作りて、惡道に落ると說きたり。是を思ふには、子も欲しく侍らず。只命に過ぎたる寶なし。先一つの證據を申すべし。昔(一)玄奘三藏と云ふ人、佛法東漸のために、春秋寒暑を送る事、一十七年、耳目の見聞する事、百三十餘國、五天竺を廻りてありき給ひしに、盜人に値うて多くの物を取られぬ。月氏國の人、集りて訪ひ奉るに、少も嘆き給へる氣色もなく、何に多くの物を盜まれて御座すに、嘆きの色も見え給はぬぞと申しければ、我命と云ふ第一の寶を盜まれず。されば嘆きと思はずと答へ給ひける。然れば命を寶と云はんには僻事にあらず、箕子が五福を尋るには、命を以て寶とす。僞れる狐の命に及べば走る。鮎が王の鈴に怖しも命を惜むが故也。(二)阿鼻地獄の衆生すら、命の盡るは惜き事にてぞ有りける。爰を以て(三)『壽量品』には久遠實成と、壽の長き事を說き給ふ也。假に栴檀の煙と上り給ひしかども、實の靈山に月朗か也。中々細には申さず共、讀み顯したる歌あり。歌にて申すべし。

(一)玄奘三藏等。此事詳かに『西域記』十二卷見えたり。

(二)阿鼻地獄。無間地獄と譯す。八熱地獄の最下にして此ノ地獄に墮したるものは、受苦無間なりと云ふ。

(三)『壽量品』『法華經壽量品』のこと「我此安穩土常在靈鷲山」と說けり。

源順が、八月十五夜に雨降りて月朧なるに、六條の宮に參りて、詩を作りて侍るにも、物戀心苦しきためしにぞ申して侍る。其詩に。

楊貴妃歸りて唐帝の思。　李夫人去りて漢王の情。

と作れり。又此事多く歌に讀めり。少々申すべき也。

思ひかね別れし野邊を來て見れば、足立原に秋風ぞ吹。　源　道濟

幻の傳に聞くこそ悲しけれ、契りし事は夢ならねども。　藤原爲忠

詩の末に、次の李夫人の事を讀みたる歌、一首申すべし。

無影を石に移して見てしなを、又逢難き嘆をぞする。　覺盛法師

安祿山は、楊國忠を討ちて、玄宗皇帝を押籠め奉りて、天下を宰り侍りけるに何事か侍りけん。安慶緒と云ふ子に殺されたり。安慶緒をば、央師明と云ふ者殺しつ。央師明をば、央朝義と云ふ子殺しつ。是等を承る時は、人の子親の爲に寶と思ふべからず。又佛阿難を具して歩き給ふに、恒伽河の邊に、形ち好き女人の悲泣する事ありけり。阿難怪んで佛に問ひ奉る。佛阿難に告げて言く。「此女形は

（一）摩訶陀國等。此の因緣は『觀無量壽經』に見えたり。

跡に、虫を拾ひ置きて、佛は物を殺すをば制して、虫を多く踏みつぶし給ふぞと語り歩きける。加之、『仲文章』と云ふ文には「朝哺父を打ちしかば、靈蛇其身を吸ふ、酉夢母を罵詈しかば、天雷其身を裂く」なんど申しぬれば、父を打ち、母を罵る者も有りけりとぞ聞ゆる。是れ迄はやさし。又（一）摩訶陀國の阿闍世太子は父の頻婆娑羅王の、遲く死に給ひければ、疾々殺して我國の政を執んとて、高樓に籠めけるを、母の韋提希夫人の、瓔珞の中に蒲桃の漿を盛れて、籠を守る者に乞ひ請けて、大王に嘗めさせ給ひけるを聞きて、安からぬ事に思ひて、又母の韋提希夫人を殺さんとしければ、耆婆、月光と云ふ二人の大臣、是を見て云はく、「劫初より已來、父を殺す惡王は一萬八千人たりと云へども、未だ母を殺せる者は一人も聞かず。母の命を生け給はずは、二人の大臣仕へ奉るべからず」とて制しければ、母の命計りをば生けてとぞ云へる。又唐の玄宗皇帝の、楊貴妃と申しける后に思ひ付きて、國の政をば楊貴妃の兄、楊國忠と云ふ人に預けて、朝政どもしたまはざりければ、安祿山と云ふ人、此事を憤りて、數万の兵を聚めて楊國忠を殺しつ。此事の源を云へは、楊貴妃の科也とて、楊貴妃をも殺しつ。此

父大臣より先立ち隱れ給ひしを、いみじう思し歎く事限なくありし比、陸奥に侍りける仕人の、是をも知らで、少將君の御許へとて、馬を參らせたりしを見給ひて、かくぞあそばしける。

まだしらぬ人も有りけり東路に、我も行きてぞ見るべかりける。

上東門院の女房に、小式部內侍とて、いみじく時めきて、萬人の心を盡す女ありけり。二條殿(異に敎通の弟とあり)の敎通の御思人にて、もてなし給へるが、墓なく失ひければ、母の和泉式部が歎きける事、さこそ侍りけめ。院も最愛く思召けるなんめり。失にしかども、狎給ひたる事なれば、絹を遣されたるに、小式部內侍と云ふ書付の札の有るを見けるに、今更にかきくらす心地しければ。

もろともに苔の下には朽ちずして、埋れぬ名を聞くぞかなしき。和泉式部

又後江相公朝綱の、兵部丞澄明に後れて、一園中は花相傳へんとするに、主失せ給ふと悲み江中納言匡房の、加賀權守隆兼に別れて、九代相傳の文書、誰にか傳へんとすると歎きし、子の誤つ事はなけれども、親に物を思はすれば、敵なんど申さんも、僻事には有らじ物を、佛の御子(一)善星比丘の、佛の步み給ひたる御足の

(一)善星比丘。佛の弟子なりしが、佛の敎を信ぜず、邪見の心を起して尼連禪河の邊に於いて、大地割れて生きながら阿鼻獄に墮したりと云ふ

たりと云へども、産める所の子善を修する故に、樂を得るぞと言ひける。加之(一)大目犍連尊者は母の青提女が飢を助け、淨藏、淨眼の二人の子は、邪見の莊嚴王を導きて、菩提の道に入れたりき。大目犍連は、母の餓鬼道に落ちたりしを救はんとて衆僧を供養す、彼施の力に依りて、母の飢を助けし事也。細には(二)『盂蘭盆經』に見えたり。又妙莊嚴王は、邪見なりしかども、淨藏、淨眼二人の子、樣々の謀を廻らして、佛の御所に具して、參りてありし事也。細に『法華經』に見えたり。現世後生の孝養此くの如し。加之又能子を持ちたる人、子に引かれて寶を持ちたりと見ゆる事多く侍るめる。班固が『史記』を書きさすを、班彪是れを書き繼ぎぬ。佛は涅槃に入り給ひしかども、(三)羅睺羅其迹に法を崇め給ひき。文王は武王を儲けて國を靜かにし、月光王は子なくして跡を失ふ。此故に優闐大王は(四)多門天王に祈りて、天王の額より王子を出し給へると侍り」又傍なる人の聲にて「人の心は面の如く、必ずしも人毎に孝養なし、誤りて子は親の爲に敵となると云ふ事も多く聞え侍り。少々其例を申すべし。小野宮殿宮賴公の御子に、敦敏少將とて、母は本院大臣時平公の御娘の腹にて、類ひなく思ひ給ひしに、

(一)大目犍連。胡豆、釆菽氏と譯す。佛十大弟子の一にて神通第一と云ふ。舍利弗と共に外道に事へたりしが、釋尊王舍城にて說法の時一百の弟子と共に佛の弟子となれり。

(二)『盂蘭盆經』一卷あり。西晉竺法護の譯なり。盂蘭盆の因緣を說く。

(三)羅睺羅。覆障と譯す。釋尊の子十大弟子の一にて密行第一の稱あり。

(四)多聞天王。尊沙門天王のこと。須彌山の半腹、第四層の水精埵に住して北州を守護す四天王の一なり。

親の孝養の志は深くぞ侍りける。それならず、親に志深く見ゆる人を歌にて少々申すべし。

限あれば今日脱捨つる藤衣、果てなき物は涙なりけり。　藤原道信

思ひかねかたみに染めし墨染の、衣にさへも別れぬるかな。　平棟仲

藤衣など一年に限りけん、是計こそ記念と思ふに。　源有房中將

鳥邊山思ひやるこそ悲しけれ、獨や苔の下に逝くらん。　中納言成範

昔今の人、迹无までも、如此志深く嘆き悲む事も、子にあらざらん人の、誰か思ひ寄るべき。されば子なからん人は、心憂き事にこそ侍るべき、後世までも寶と成るは子にぞあるべき、猶々重ねて申すべし、秦の良郭と云ひし人と、阿用子と云ふ者と、二人を炎魔王宮に召し置れて、罪の重き輕きを正されけるに、良郭は子を持ちたる者也、冥途を弔ふべき人ありとて差し置かれぬ。阿用子は、嗜はるべき子なき者也とて、忽に地獄へ落されにき。又佛(一)阿難を具して、道を行き給ふに、淺間しき餓鬼の、心地能氣にて舞ひ樂むありけり。阿難佛に是れを問ひ奉りけるに、佛告げて言く、是前世の罪業に依りて、淺間敷き餓鬼の報を受け

(一)阿難。具さに阿難陀と云ひ、歡喜、慶喜等と譯す。佛十大弟子の一にて多聞第一と云ふ佛の從弟なりしが二十餘年佛に近侍し、傳法第二祖となれり。

形は他州に破れて燈鬼と成る、爭でか舊里に歸へりて斯の身を寄せん。

是れを見給ひけん子の御心の中、いかばかりか悲かりけん、さて、唐土の帝に乞ひ請け奉りて、日本國へ相ひ具し奉りて歸り渡し給ひけるとぞ申し傳へたり。子にあらずんば、誰人か遙々の浪を分けて、唐土まで尋ね行かんや。又如何なる武士也とも、親の爲に亡き跡までも、忌日報恩せぬ者やは侍る。況や心ある人、親に孝養するは珍しからぬ事に侍る。漢の明帝は、母の御爲に一年に二度までこそ忌日をしたまひけれ。二度と云ふは母の失せ給ひし日と、又我を生み給ひし日と也。人の子を生める時は、一定死に入る事の有る也。されば其心を思ひ入れて有りける故とぞ云へる。又行基菩薩の、母の爲に孝養報恩したまひけるには、かくぞ讀み給ひける。

「百坂や八十坂こえて給ひてし、乳ぶさの報ひ今日ぞ我爲る」。又怪き女の有りけるが、實源律師を請じて、形の如く佛事をして、手箱を布施にしたりけるを、開きて見ければ、かくぞ讀みて入れたりける。

「玉櫛笥かけごに塵もすゑざりし二親ながら無身とも知れ」。左右に叶はぬ人も、

を刻みて、生きたりし時の様に孝養せし事也。又郭巨と云ふ者は、親を養はんが爲に悲かりける子を山中に堀り埋みし程に、天道の御悲憐ありて、金の釜を掘り出だす事の有りし也。又白年が衾を脱ぎしも、親の寒かるらんとて、衾を脱ぎし事あり。又王祥が親は、鮮魚なければ物を食はざる事を悲んで、氷の塞りたる江にまかりて見るに、魚氷を突き穿ちて跳り上る事也。箇樣の事、細に『蒙求』『孝子傳』なんどに申して侍る。又我朝にも、箇樣の事は多く侍る、輕大臣と云ひける人、遣唐の使に渡り給ひけるを、如何なる事か有りけん、言はざる藥を服させて、身には繪を書き、頭には燈臺を打ちて、火を燈して燈臺鬼と名づけて有りと云ふ事を、御子の弼宰相と云ふ人、ほのかに傳へ聞きて、悲み給うて、萬里の波路を凌ぎ分けて、佗州振旦まで尋ね行きて見給ひければ、大臣涙を流して、手の指を食ひ切りて、其血を出して、かくぞ書き給ひける。

我は是れ日本花京の客なり、汝は即ち同姓一宅の人。
父となり子となる前世の契り、山を隔て海を隔つ戀情の呻み。
年を經て涙を流す蓬蒿の宿、日を逐うて思を馳す蘭菊の親み。

がたきに、今は竹の林も霜降り雪積りて、如何に求るとも得がたからんとは思ひながら、孝養の志深き者なる故に、雪霜を掻き別けて、竹の根毎に掘り求けるに、雪の中に筍を求り得て、喜びに思ひて是れを取りて、親に奉り、老たる親の病を扶けたる事侍りき。子にあらずんば、爭か雪の中に筍を求むる事あらんや。又伯瑜と云ふ人の母、極めて腹惡く心猛くして、伯瑜を打つ事、幼少の昔より、長大の今に至るまで絶る事なし、母漸老ひ衰へて、子を又打ちける時、伯瑜涙を流して泣き悲めり、母怪みて云はく、「汝を打つ事昔より今に絶る事なし。然ども一度も泣く事なかりき。何とて今初めて泣き悲みて涙を流すや」と問ひければ、伯瑜答へけるは「我母年若く盛にて、力強く御座す時、打ち給ひし杖は身にしみて痛かりき。今年老ひ衰へ給へるにや、打ち給ふ杖は身に入痛む事なし。されば我母の餘命、少く成り給へる事の悲く覺え侍るなり。全く杖の痛きにあらず」と答ける。子ならざらん者は、如此思はんや。是のみならず、丁蘭が木母、郭巨が金釜、白年が衾を脱ぎ、王祥が氷に魚を得し事、皆孝養の事に侍るべし。丁蘭が木母とは、母を失ひて後、彼の母の形を戀ひ悲んで有りける故に、木を以て母の像

成して繋ぎつ。商人の心は人なりと云へども、馬に成りて歎き悲みけれども哀む人なし。去る程に、商人の子父の歸らざる事を怪んで、彼の國へ尋ね行きて、宿を借りて留りけるに、宿の主の彼の者に敎へて云はく、此の國は人を馬に成す事あり。馬に成されてある者、此の程も近くあり。其故は、他國より商人來て、馬に成されて繋れたる由を申しければ、我父馬に成されてけりと思ひ、心憂くて悲しく覺えければ、事の有樣を細かに問ひけり。家の主答へけるは、葉狹き草の有るを取て食すれば、則ち人馬に成る、又葉の廣き草を食すれば、馬則ち人に成る。然るにまぢかく馬に成されたる商人は、栗毛なる馬の眉に斑あると云ひければ、敎へたるまゝに行きて見れば、此の馬我を見付けて、嘶ひ淚を流し悲む。宿の主の敎たる如く、葉の廣き草を取りて、持ちて彼の馬に食せたれば、本の如く人に成りぬ。即ち我父也。相ひ具して本國へ歸り來ると云へり。是は子にあらずんば生きながら畜生に成りてこそは有らましか。又孟宗と云ひし人の親、老ひ衰へて物食はざる病をしけり。霜月の末、極月の初め計に、筍を食んと願ひければ、筍と云ふものは、四月の末、五月の初比に有る物にて侍るに、此比なんどは求め得

事侍りき。況や末代の凡夫、如何此の苦を嘆かざるべき、されば此の心を、詩にも作り、歌にも讀めり、其證を申すべし。

昔は京洛聲花の客となり、今は江湖潦倒の翁となる。　白居易

をし照るや難波の浦に燒鹽の、辛くも我は老にける哉。　讀人不知

何方に身をは寄せまし世間に、老を厭はぬ人しなければ。

替り行く鏡の影を見るからに、老曾森の歎をぞする。

いつとても身の憂き事は替ねど、昔は老を歎やはせし。

實に、老の姿舊にける形を、見る人是れを惡み聞く人彼を厭ふ、子にあらずんば誰人か愛む者有らんや、人の子の親の爲に寶なる事、麁々其證を申すべし。天竺に國あり、名をば安息國と云ふ。彼王、馬を好み、飼ひ給ふ事いかばかりと云ふ事を知らず。餘に馬を飼ひ給ふ、其德至りて、葉の狹き草を食はせつれば、人を馬に成す術を習ひけり。又葉の廣き草を食はせつれば、馬人に成り還る事ありき。此の如き間、人を馬に成す事、其の數を知らず。此の事をば知らずして、一人の商人、彼の國へ行きぬ。國王喜んで、前々の如く、葉の狹き草を食はせて、馬に

(一)惠慧和尚の手より、傳へし玉持ち難くして高野山に埋め(二)役行者の儲けたりし玉、大峰の玉置に納む。(三)無盡意菩薩の供養せし玉の瓔珞、觀音すら二に分けて釋迦多寶に奉り給ひき。況や末世の此の比の人、是を寶として持てる事や有らん。金翅鳥の玉を持ちたるも、食を求めて小龍を食ふ。大龍の玉を具へたる、猶ほ三熱の苦を脱れ難し。されば玉も無益に侍り、只人の身には、子に過ぎたる寶なし。人終に老ひ衰ふる事あり、貴賤賢愚を選まず、黒き髮は白く成り、赤き唇は色を失ひ、額には波を疊み、眉には商山の月を垂れて、骨強く腰かゞまり眼は昏く耳おぼろに成り、甘味は苦く替はり、温なる水はすゞしく成りて、萬事心に合はず、一切の人は坐に恨めしく、若きは賴みあり、若きに合すれば、老ひたるは賴みなし。老ひて久しき人なきが故に、是を老苦と云ふ。心あらん人、誰か嘆かざるべき、天竺の國王は、初めて白毛一筋生ひ出でしかば、(四)炎魔王の一番の使ひ付きたりとて、出家して行ひ給ふ。震旦の白居易は、四十六の年、容を鏡に移して、泪を流して蓋を覆ひけり、又大聖世尊の、五十年になりて、滿月の尊容衰へて、(五)三十二相の姿頽れ給ふを見て、優陀延と申せし御弟子の、老苦を嘆む

(一)惠慧和尚。眞言宗の祖師。不空三藏に法を承け弘法大師の師なり。永貞元年寂す。

(二)役行者。修道の祖師。役の小角と云ふ。神變あり。大和國大峯山を開く。

(三)無盡意菩薩等此の因緣は『法華經普門品』に出づ。

(四)炎魔王。地獄の主にして、衆生の罪を監視し惡の恐るべきを知らしむる冥王。

(五)三十二相。佛の具へ玉ふ三十二種の相好。足下安平相より、頂上肉髻相に至る。

（一）妙樂大師。支那天台宗の高祖、名は湛然、荊溪大師と云ふ。興元元年十二月寂す。
（二）『稻稗經』又『稻芉經』と云ふ。譯者を失す。

の中には、如意寶珠勝たり」と說、(一)妙樂大師は「如意寶の如きんば、天上の勝寶」と釋せり。實に如意珠などを得たらんには、五穀七寶、何れか乏しき物あらん、(二)『稻稗經』には、現世を祈のる者は、藁を乞ふが如し。後世願ふ者は、稻を乞ふが如しと云へり。實に稻を得たらんには、願はずとも藁は得べき也。玉を得ては、願はずとも金を得べき者なり。玉寶なる故に、一切の物を歎る詞には、玉と云ふ言を副へて云へり。譬へば玉鬘、玉の簪、玉の臺、玉の甃なんど共云ふぞかし」と申せば、又傍より「人々玉は寶なりと云へども、末代の凡夫の爲めには寶と云ふべからず、我朝には火取の玉、水取の玉の外に、德をあらはす玉なし。然りと雖も、火は燧と云ふ物あれば、石の中より出でぬ。水は土を堀れば出づる也。此の外に如意珠、摩尼珠と云ふ玉は得る事も難く侍り。縱ひ得たりとも、磨く樣を知らず、行ひ樣をも知らず。磨ざれは石瓦の如し、行はざれは土砂に似たり」と申しぬれば、何にかは爲し侍るべき哉、諸經の中に、或は高樓の中に持し或は幢の上に置きて、幡を懸け、香を燒き、八戒を持ちて行ふとは申したれども能く知る人あり難し。又自ら得たりとも、持つ事有がたく侍るべし。弘法大師の

哀と思召して、明日行ふべしと仰ありければ喜びて車を走らかして皈へる。道に五百の童子等に行き合ひて、何事に依り如此は物さはがしく皈へり給ふぞと問ひければ、明日佛を迎へ奉らんとする務に、皈へり侍ると云ひければ、童子等、明日は我等が請じ參らすべき事ありて其由を申しに參る也。明日を相ひ延べて、後に請じ參らせよと云ひければ、菴婆利女適申したる日なればと云ひて延べざりけり。明日延べたらんかはりには、汝に五百兩の金を與へんと云ひけれども、金は生々世々の寶にあらずとて終に取る事なかりき。寶ならんは、五百兩まで與へんと云ふ人も有るまじ。又取らぬ人も有べからず。此の故に韋賢が子を誡めけるには、黄金を箱に盈つるも、一經にはしかじと云へり。されば寶の中には、玉こそ第一の寶とは申しけり。合浦の玉、崑岳の玉、皆是れ德なきにあらず、燕の昭王の珠、齊の威王の珠、寶にあらずと云ふ事なし。毘沙門天王の、燒けども盡きせぬ福も、玉の力に依り、龍女が成佛を遂げしも、玉を捧し故也。此の故に卞和足を切られて血の涙を流し、大施太子の、一切衆生に寶を與へんために、龍宮城に只一人御座て、珠を求め給ひし事を云ふ也。爰を以て(一)『華嚴經』には、「一切の寶

(一)華嚴經。『大方廣佛華嚴經』と云ひ釋迦成道第二七日の說にして、六十卷本と八十卷本とあり。

れをば取らざるぞと云へば、天知り地知り我知り人知る。如何に主にも知れずして、物をば取るべきとて取らず。是を四知を耻づとは申す也。又兄弟父の手より各五百兩の金を得て、道にて、弟件の五百兩の金を投げ捨てけり。兄是れを見て、あやしみを成して、如何に是れをば捨つると問ふに、弟泣々答へけるは、我此金を持ちたる故に、汝が持つ所の金を奪ひ取りて、千兩に成して持たんと思ふ一念起りつ、此故に、金は方見敷物と思へば、捨つる由を云ひければ、兄涙を流して、我も汝を殺して、五百兩を奪ひ取りて、千兩に成さばやと思ひつると云ふて、又投げ捨てつ。是を斷金の契とは申す。又或説に、佛阿難を具して、道を御座しけるに、草村の中に穴あり。穴の中に金あり。佛是を見給ひて、毒蛇と仰せらる。阿難是を悟りて、大毒蛇と云へる。傍なる人是を見るに、蛇はなくして金ありければ、喜びて取りぬ。公家是れを聞召して、金を召すに有る限り献りつ。猶も此の殘りあらんとて、責を蒙りて悲みける時、毒蛇と宣ふを思ひ合せける事也。佛舍衛國に在す時、菴婆利女と云ふ者、佛を迎へ奉りて、法を說かせ參らせて、軈て我居たりける、菴婆利園と云ふ所を、御布施に參らせんとしけるを、佛

に替へ、范蠡が長男は、惜みて持ち皈るなんど云ふ事侍り。國王女を飾て是を集むと云ふは、天竺國にも、金を寶と思ひて、國中の金を以て、官庫に集め納め給ひて、猶も國王金を殘したると知らんがために娘を餝りて、金持ちたらん人にあたへんと云ひける事なり。次に婆羅門身の内に呑みて畜ふと云ふは金を餘りに寶と思ふが故に、倉の内に置きたるも、猶覺束無く思ひければ、身の内へ呑みける事也。次に盜人手に拳りて、搦められて後、手を開げずして、終ひに頸切られて後手を開ぐる事のありし也。次に范蠡が長男は、惜みて持ち歸ると云ふは范蠡が弟男の罪せられて召しけるに、兄に千金を持たせて、乞ひ受けに遣るに、金の寶なるが故に、手を離さずして持ちて皈りし事也。又傍より指出で丶、金は火に燒け、水にこそ濡れねども、下﨟などは、五所に主有りて、盜人と云ふ者取りつる時は、徒らに成りぬ。身に附く寶に非ず。又寶と云ふは、折をも嫌はず所をも嫌はず、有物を申すべき也。麗水も寶とならず、契丹に至れば干やらず。爰を以て楊震は四知を耻て取らず、兄弟は五百兩を捨て、阿難佛は大毒蛇と云へり。楊震道を行くに金を求めたりき。是を取らずして有りけるを、倶にある者、如何に是

れ。されば寳には、何よりも金と云ふ物には勝ずと云ふめり。昔より是を重寳と云は金とせり。火に燒けども損ず、水に入れども朽る事無く、彌光を增すものなり。千兩の金とて事々敷くは聞ゆれども、小さき手箱なんどへ押し入れて、身に添へて持ちぬべし。異寳は如何に云とも、左は侍らざれば、天平勝寳廿一年の春、陸奥より砂金を始めて奉りしに、公家も國に大なる重寳進來るとて、喜び思召して、大伴家持中納言に歌めしければ、讀みて獻り侍りける。

「天皇や御代さかえんと東なる、陸奥山に金華開く」、天に五行あり、金其中に居る。地に七寳あり、金を其初とせり。佛を金人と申し、朝を金輪聖王、名神に金峯山とて御座す『經』には(一)『金光明經』、加之、聖德太子の我朝へ來り給ひしには、金色の形を現じてこそ、用明天皇の后の御腹には宿り給へり。池上の(二)皇慶阿闍梨が、佛を供養しけるに、(三)寬印供奉を、導師に請じ奉りけるに、君は(四)三密の山の、金の油鉢を傾けずとぞ申しける。佛も是れを寳と思ひ給へり。智者も是を寳と云ひ、金は寳なる故に各金の字を具へたる也。又天竺、震旦の人、金を思はずや。國王王女を飾りて是を集め、婆羅門身の內に呑みて畜ふ。盜人手に拳りて命

(一)金光明經。四卷十八品あり。北涼曇無讖譯。

(二)皇慶。谷阿闍梨と云ふ。永承四年七月寂す。

(三)寬印供奉。延曆寺の僧なり。良源、源信の二師に從ひ、內供奉に任ぜらる。寂年を缺く。

(四)三密。身密、口密、意密。

事をも聞き、又床しからん人の隱れんをも見てんず。されば是れ程の寶やは有るべき」と云ひければ、又傍なる者の闇より云ふ樣、「物を願はんには、爭か人の物を取らんとは申すべき。それは云はば盜人にこそ候ふなれ。(一)龍樹菩薩の隱形の法すら顯れにければ、外法を捨てゝ、菩薩の行に趣きて、(二)馬鳴の弟子に成り給ひにき。されば人の寶には、打出の小槌と云ふ物こそ、能き寶にて侍りけれ。廣野に出で、居能からん家や、面白からん妻男や、遣ひ能からん從者、馬牛、食物、衣物なんど、心に任せて打ち出して有らんこそ、人の物をも取らずして、能く侍るべけれ」と云ふに、又人傍より指出でゝ云ふ樣は「打出の小槌は、目出度き寶にて有れども、口惜しき事は、物を打ち出して樂しく居たる程に、鐘の聲をだに聞きつれば、打ち出したる物、皆こそ〳〵と失する事の侍る也。されば目出度くて居たるとは思へども、左樣の時は、廣き野中に、只獨り裸にて居たらんこそ、淺增かるべけれ。貧窮よりは、衰苦は堪難し。(三)天人の五衰は、地獄の苦に增るなんど云ふめれば、無益にこそ侍れ。又昔より、隱簑打出の小槌を、持ちたると云ふ人も實はなし。隱簑の少將と申す物語も、有間敷事を作りて侍るとこそ承は

(一)龍樹。南印度の人。初め人生の樂は情慾にありとし、三人の友と謀りて酒色に耽り、又隱形の術を求めて王宮に入りその妾姫を犯せしが、こと顯れて三人は命を損せり。即ち欲は苦の本たるを知りて佛道に入り、雪山の一老比丘によりて大乘經典を授かり、又龍宮に入りて華嚴經を得たりと云ふ。頗る長壽を保てり。

(二)馬鳴。西印度の人。法を脇比丘に嗣ぎ『大乘起信論』を著して大いに大乘の深義を弘む。又詩文に巧みなりしと云ふ。

(三)天人の五衰。天人の壽命將につきんとする時五の異相を生ずるを云ふ。衣服垢穢、頭上花萎、身體臭穢、腋下汗流、不樂本座これなり。

奝然の歸朝の解文には、優闐王の栴檀を以て、摸し奉りたる釋迦像一體とぞ侍るめる。又白純王と申す王の名香也、府堅呂光と云ふ將軍を遣すとも侍るめり。張騫等の將軍、八十人を遣すなんど申したる者も侍り。能々定說を尋ぬべし。大江匡衡の河原院にて、・

昔忉利天の安居九十日、赤栴檀を刻んで尊客を摸す。今は跋提河の滅度二千年。紫摩金を始めて兩足を禮す。

と書けるも、此佛の御事ぞかしと、思ひ出されて哀れなり。內記聖人の聞いて歎めけるも、理りとぞ覺え侍る。軈て立ち歸らんも、木の本にして日暮れにければ、道も怖しかりぬべし、明けてこそ下向せめとて、在る程なりしが、漸く夜打ち更くる程に、あやしき下衆や、老たる尼なんどは、寢にけり。物の心ある人計り、目を覺ましつゝ、世間の事ども、既往又來裔まで申し出で侍る程に、餘りに物を云ひはやりて、抑人の身に何が第一の寶にて有りける、實に何が第一にて有るらんと聞き居たる程に、傍より指出て、「人の身には隱簑と云ふ物こそ、能き寶にて有るべけれ。食ひ物衣物欲しきと思はゞ、心に任せて取りてんず。人の隱れて云はん

の本迄參り給へりしかば、我八十年の化縁盡きて、涅槃に入るべき身なり。栴檀の佛は、末代の衆生を利益し給ふべき佛也とて、前に立てゝ參らせ給へる御佛也。天竺にて、多くの人を利益し給ひける程に、弗舍密多と申す惡王、國中の佛法を滅し失ひし時、鳩摩羅琰と云ひし人の、かばかり目出度御座す佛を、亡ひ奉る事を悲んで、東天竺の東に、(一)龜慈國と云ふ國へ渡し奉る程に、晝は佛を背に負ひ奉り、夜は佛に負はれ奉りけるとぞ申しける。龜慈國の白純王の、あながちに喜びて、供養恭敬し給ひける程に、唐の蒙遜王此事を聞き給ひて、兵を遣して奪ひ取りて、尊び崇めて行ひ給ひけるを、我朝日本國東大寺の(二)奝然上人、入唐し給ひけるに、拜ませ奉り給ひける時に、奝然申して云く、我一人拜み奉りて、甲斐なく侍る、此佛を移し奉りて、日本國の王に拜ませ奉らんと有ければ、佛像を弘めんがために許されにけり。奝然喜びて急ぎ摸し奉る程に、栴檀の佛夢の内に告げて宣く、我東土の衆生を利益すべき願あり。速に我を渡すべしと宣ひければ、奝然驚き心付きて、今作り奉りたる新佛を、古佛の樣に烟に熏て、栴檀の佛に取り替て渡し參らせたるとなん申しけり。さては直傳の佛にてこそ御座すなれ

(一)龜前國。支那新疆省の北、甘肅者の西に在りし國。

(二)奝然上人。大和東大寺の僧なり。永觀元年唐に渡り釋迦佛及び一切藏經を得て歸る。長和五年寂す。

にけるも、替り行く世間のためしと思へば哀なり。『毛詩』と云ふ文には、荒たる所には、麥秀とて、畠に喩へて申したるも、げにもと覺えて、麥と云ふ草のみぞ生ひ茂り侍りける。弓削以言が、伊豫國より歸りて、都の荒れたる事を悲みて詩に作りて侍るも、『毛詩』の心に侍るべし。

靑衫にして昔見しは猶ほ華麗なり。白首の今歸れば悉く黎離となりぬ。

さて、御堂に參り著きて見れば聞きしにたがはず、多く人參り集りて、稻麻竹葦の樣にぞ侍りける。西局に入りて、南無大恩教主釋迦牟尼無上大覺世尊、滅罪生善、臨終正念、往生極樂と伏拜みて、『法華經』の覺えさせ給ふ處々、打ち讀みて聞き居て侍れば、寺僧と思しき者、隣の局なる人に語るを聞けば、此の御佛の、日本國へ傳はり給へる事に聞き成ぬ。教主世尊正覺成り給ふ後、伽毗羅衛國の(一)善覺長者の女(二)御母の爲に、(三)『報恩經』を說き給はんとて、忉利天に上り給ひしを、天竺の(四)優闐大王の戀ひ奉りて、(五)毗首羯摩と云ふ人に誂て、赤栴檀を以て、御形を摸し奉りて拜み給ふ程に佛忉利天より、一夏九旬果てゝ(六)祇園精舍へ歸り給ひし時、(七)持地菩薩の、金銀水精の三の橋を渡し給ひしに、栴檀の佛も橋

(一)善覺長者。伽毘羅衛國拘利城の王なり。摩訶摩耶の父。

(二)御母。摩訶摩耶と云ふ。淨飯王の后なり。善覺長者の女、又は妹と云ふ。佛出生の後七日にして死せり。

(三)報恩經。具さに『大方便佛報恩經』と云ふ。一巻あり。譯人を失す。

(四)優闐大王。出愛、日子等と譯す。憍賞彌國の王なり。皇后の化によりて佛に歸し、外護の壇越の一人となれり。

(五)毗首羯摩。具さに毗首縛羯摩天と云ひ、種々工業と譯す。工匠を司る神なり。

(六)祇園精舍。祇樹給孤獨園にあり。須達長者の建立。七層の伽藍あり。莊嚴を極めしと云ふ。

(七)持地菩薩。地藏菩薩のこと。

「詫しらにましらな鳴きそ足曳の山のかひある今日にやはあらぬ」醍醐の御門の御時も、御狩侍りけり、白尾と云ふ御鷹の、夕日のかゞやきける程なるに、紺青色したる雄を取りて、鳳輦の御輿の上に居たりけるが、面白かりけるなんど、申し傳へて侍りぬれば、貞信公の御犬飼の皮袴の下に、犢鼻をかきて、桂川渡りに高名する、其日の事にてぞ有りける。近くは白河院、野の御幸に、土御門右大臣師房の和歌の序書き給へるこそ、面白く侍れ。

境ひ都城に近き故に、車馬の煩ひ無し。路山野を經る故に、雉兎の遊あり。言の葉も多く侍りける中に、御製ばかりぞ、目出度侍りければ、通俊の中納言の『後拾遺』にも入れ參らせて侍る。

「大井河深き流れを尋ね來て、嵐の山の紅葉をぞ見る」野の行幸は、常の御幸には替りて、諸衞前後左右四方に陣を引きて、放鷹樂と云ふ樂を奏じて、禁野の御鷹飼、下野敦友、かの鳥合けるこそ面白く侍りけれ。されば(一)忉利天の衆も、林園に雜り入れば、主伴の不同無く、嵯峨野の逍遙、太政官の儀式には同じからず。論議にもし侍るぞかし。誠に思ひ出されて、言葉しげき野邊の色の、跡形なく成り

(一)忉利天。卅三天と譯す。六欲天の第二、須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處にあり、城廓また、八萬由旬にして、帝釋こゝに居る。喜見城と名づく。

範永を、誰人やらん和歌の内に、名を得たる人哉と、歎めらるゝは此歌歟。

古の人は汀に影たえて、月のみぞすむ廣澤の池。　　源　頼政

波影は汀の雪も消えなまし、心有りても氷る池哉。　　守覺法親王

爰にては、月の歌をこそ讀めるに、雪の朝にかく讀み給へるもをかし。此池にも影も留めず通りぬれば、嵯峨野のわたりを見るにも、春の曙に朝立せし少將思ひ出でられて、大井河の波の音にも、心ぞ、澄み侍りぬる、光孝天皇の御時、芹河の御幸に、在原行平中納言、「裝束に鶴をぬひ付けて、

「翁さび人なとがめそ狩衣、今日ばかりとぞ田鶴も鳴くなる」。仁明天皇の御時、芹河の行幸に、御琴爪を取り落させ給ひけるを、照宣公の、いまだ童殿上人にて御座ける比、「是れ求て參らせよ」と仰せ事ありければ、稚き御心に、是を求め得たらん所に、伽藍を立てんと云ふ願を起し給へる所に、求め得給へる跡なればとて、(一)極樂寺をば作り給へりとぞ申したるに、芹河と云ふ所は、彼極樂寺の方樣にて侍るめる。然と云へども、嵯峨の山芹河と讀める歌も侍りぬれば、不審侍るべからず。寛平法皇の逍遙し給ひける日に。

(一)極樂寺。所在不詳、芹川は嵯峨大井川の邊り臨川寺の東に在れば此のあたりなるべし。

咲きにけり。

植て置きし君もなき世に年へたる、華や我身の類なるらん。　三　宮

去年見しに色も替らずさきにけり、華こそ物は思はざりけん。　秦　兼　方

此歌は、(一)圓宗寺の華を見て、後三條院の御事を思ひて、讀み侍りける。

春なれどいとゞ家路ぞ急がれぬ、待つらんと思ふ人しなければ。　右大將實定

此歌は、北方に後れて、(二)法金剛院の華を見て、木の下にて讀み給ひける也。

あやなしな外にも華のなくばこそ、一木が本に日をも暮らさめ。　顯　照　法　師

此歌は、(三)最勝院の花を見けるに、上西門院の藏人どもの詣うで來りければ、藏人どもの本より、如何に花を見捨てゝと申し遣したりければ、讀みける也。雲居の櫻にも立ち離れぬれば、此花をも見捨てゝぞ過ぎ侍りぬる(四)遍照寺の程を通るにも、敦實親王の御子寛朝僧正の、(六)『孔雀經』の隙には月に向ひて、鳳凰鴛鴦の調に思ひを懸け、流泉啄木の曲に心をすましつゝ、過ぐし給ひける跡も、見捨てゝ通りがたくぞ侍るめる。

住む人も無き山里の秋の夜は、月の光もさびしかりけり。　藤原範永朝臣

(一)圓宗寺。舊地京都仁和寺の東に在り。もと圓明寺と云ふ。延久二年十二月、後三條帝の御願により建立行幸あり。今は無し。

(二)法金剛院。京都府葛野郡花園村にあり。五位山法金剛院天安寺と云ふ。天安二年十月勅建。天安寺と云ふ。大治五年十月、待賢門院の本願により再興されしより法金剛院と稱す本尊丈六阿彌陀佛なり。

(三)最勝院。大覺寺の邊にあり今は無し。

(四)遍照寺、京都府嵯峨に在り。永祚元年十月、寛朝僧正開基、本尊十一面觀世音なり。

(六)孔雀經。具さに佛母大孔雀明王經と云ふ。三卷あり。不空三藏の譯。孔雀明王の神呪を説く。

を見て、只今土御門中納言の參れかしと言ひけるやをそきと、敦忠の公參り給ひたりければ、あれ見給ふや遲しと言ひければ、讀み給へりと侍り『拾遺』『金玉』の兩集には、源公忠と云へり。又公忠の『集』にあり。公忠の歌か。

〻見るからに花の名立の身なれ共、心は雲の上までぞ行く。　高岳頼言

雲の上の春こそ更に忘られね、花は數にも思ひ出しを。　沙彌釋阿

大宮左大臣俊家いまだ、若殿上人にて御座ける比、春の曙もあはれに覺え給ひけるまゝに、此花の隱にて、櫻人と云ふ歌を、花やかにうたひけるが面白かりければ、右の舞人多政賢が將監にて、陣の直勤めて侍るが、右近の陣より、地久を舞ひ出でたりしこそ、面白かりしかと言ひける。櫻人は地久の破に同じ聲の歌なれば、舞ひけるなるべし。裝束は、淺黄のうらたる上下に練色の衣をぞ著たりける。佛の思召さん事の悲しさよ。見捨てゝこそ通り侍りぬ。月華門の方さまに出づれば、橘の木見るにも、昔思ひ出でられて、內侍督朧月夜に詠めし給ひし、弘徽殿の細殿、義孝少將の心すまして過ぎ給ひける、登花殿の西うらも床しけれども、日も暮れぬべければ、頓て西京うち過ぎて見れば、(一)仁和寺の內の華も皆

(一)仁和寺。京都府葛野郡花園村に在り。光孝帝の勅建、宇多法皇の在山ましましゝより累世法親王居住し給ひ、總法務の宮たり。

(一)嵯峨の釋迦。京都嵯峨五台山清涼寺の本尊を云ふ。永延元年奝然入唐の時將來せる赤栴檀の釋迦像にして、三國傳來と稱す。

(一)嵯峨の釋迦こそ、天竺へ歸り給ふなんずるとて、一京の人ども、道もさりあへず、集り侍るめれと申せば、我朝日本の不思議には、此佛の御座すをこそ志し侍る、實ならば心憂悲くぞ侍るべき、左なしとても參らでや有るべきと思へば、客人歸りて後、やがて二月廿日、中御門の門を入りて、大膳職陰陽寮などを打ち過ぎて、大場の椋の木の本を見るにも、白馬の節會思ひ出だされて、摺文なせる衣袴きたる者、勘へ禁じ事思ひ出されて、悔しくぞ侍りける、坂上允亮が夢に、罪の深き事を見て、遣非違使に成らじとて、五位の官給はりけるも、理にぞ侍るべき。南殿の櫻も開きにけるなるべしと、九重の外に薫る風の氣色もしらるれば、急ぐ道なれども、春華門より入りて見れば、物思もなしと讀み給ひし人、實と覺えて、春より後の知人ぞ欲く侍る。彈正重明親王の家の櫻、匂ひ異なりとて、村上天皇の御時、移し植ゑ給へる華なれば、實に面白くぞ侍るめる。其後一兩度炎上の爲めに燒しと云へり。

「殿守の伴の官人心あらば、此春ばかり朝きよめすな」此歌『世繼』幷に宇治大納言隆國の『物語』には小野宮殿實頼の陣座に御座けるが、花の面白かりける

寶物集卷第一

平判官入道康頼記

治承元年の秋の比、薩摩國の島を出でゝ、同じき二年の春、再度舊里に歸りて侍りしかども、世間在りしにも非ず、浮木に乗りけん人の心地して、世の憂時の栖なれば、心をも慰めんとて、東山なる所に籠り居て侍りし程に、昔花の下月の前にて見馴たりし人、葦垣の間近く來りたる由を申し遣したれば、竹の編戸を押開きつゝ入れ侍りぬ。心つくしの思ひに、年は經けれども、憂に堪へたる身なりければ、老衰へていきの松原生きて歸りにける悦びになん來りたるとぞ申しける。三箇年の夢僅に覺めたりといへども、一生涯の嘆き晴れざる程、人にも知られず侍るに、何として尋ね來給へるぞ。さても鬼界之島の在様は、中々申しても無益なるべし。故郷の事は風の傳にも聞き難く侍りき。都を出でゝ後、如何なる事か侍りしと申せば、何となく世間も靜ならず、淺間敷事のみ多く侍りき。げにや

寶物集卷第七　目錄

石奢が母 并鬼子母 并淨飯王結偈の事
武藏國玉火丸 并文時の訓 付證歌の事
佛の孝養舜の孝養 并子路聖德大子等の事
阿育大王 并源賴義等の事
仁明天皇佛名を行ひ給ふ事

寶物集卷第六 目錄

第七施を行ずべし 付須陀那太子の事
童子砂を供養し 并貧女の一燈 并目連尊者の弟の事
檀彌離長者が施 并天竺の繪師金を佛に供する事
末利夫人金剛女 并灯明溫室等施の事
光明皇后阿閦佛に値ふ 并阿那律身光を放つ事
惠達が墓の光明 并施の功德の事
第八觀念を凝すべし 付觀念に依りて往生する事

寳物集卷第五　目錄

地藏菩薩付老女が地藏紙灑が地藏等の事
六波羅山送の地藏の事
不動明王付證空の本尊應驗の事
河内國の翁法城寺供養拜みし事
法を信ずべし付密宗の陀羅尼の功德の事
師輔公并三條大將光行鄉等陀羅尼利益の事
僧に歸依すべき事

寶物集卷第四　目錄

寶物集卷第三 目錄

佛神の道に於いて命を惜む沙汰の事

壽寶に非と云ふ沙汰の事

秦の始皇燕の太子丹并棄老國の事

佛法を寶と云ふ事

寶物集卷第二目錄

寶物集卷第一　目錄

益なし。(一)うきゝにのりてなにかせん。花臺たのしみあり、本願に乘ぜんにはしかじ。ことばを心あらむともがらによす。ゆめ／＼まよひをひるがへして本家にかへれ。

(一)うきゞにのりて。前漢の長騫が浮木に乘りて天の河に至りしと云ふ物語。

父子相迎 終

ども道もすたるゝ事なし。(一)「四種の威儀常に佛を見たてまつる、行來進止神通に駕す、(二)六識縱横自然に悟る。未だ思量一念の功を藉らず」とて、たちゐに佛をみたてまつれば、見佛の益たえず。ゆくもかへるも神道にのれば、聞法のみちになつまず。(三)俗諦森羅の萬像につきて、(四)眞空冥寂の一理をあらはすに、六識縱横にさとれども。思量一念の功をもからず。さばかり(五)壁觀あならうらをとかず、功夫こゝろざしをゆるくせざりしかども、(六)繩床むなしくうけて、心地はつゐにひらけざりしに いま(七)「微塵故業隨智滅、不覺轉入眞如門」といふ。道の自然なる事、まことにふしぎなるをや。すでに自行化他そなはりにたり。いまは因圓果滿はるかなるまじければ、(八)一生補處のゆふべ法王子の佳名をふるひ、(九)三身究竟のあかつき、(一〇)佛種性の貴姓をあらはさん事。ひさしかるべからず。(一一)「一到彌陀安養國、元來是我法王家」といへば、このとき、十刧始成の依正は我性本來の家父なりけりとさとらむ。極樂をすゝむるほいこれにあり。往生の亘益まめやかにたへなるかな。これすなはち法藏行因のむなしからずして、彌陀證果のいたすところ、衆生ほとけを稱すれば、父子相迎するによりてなり。(一二)雲漢

(一)善導大師の著法事讃の文也。
(二)六識。眼識耳識鼻識舌識身識意識。
(三)俗諦森羅の萬像。一切差別の諸法。
(四)眞空冥寂の一理。眞如平等の理。
(五)壁觀。坐禪觀法。
(六)繩床。坐禪の床。
(七)(一一)共に善導大師の般舟讃の文
(八)一生補處。等覺の位。
(九)三身究竟。法身報身應身の三身滿足するを云ふ。
(一〇)佛種性。佛乘の性と云ふに同じく、佛となる可き性。
(一二)雲漢。天の河。

ひらくるおりは聖衆こぞりて、往生ちかづきぬとよろこび。しぼむおりは流轉のびぬとかなしみいます。大悲のかぎりなさは、いかばかりげにおもひ給ふらむ。さればたまたま一人をもまちえては（一）「（二）清淨大海（三）無生衆、遙見生者皆歡喜」といへり。かまへて念佛申たちなん人は、花かひ〴〵しくひらけて、つゐにむかへのはちすとなるやうに心すべし。さていたづらにかれなんは、ねんなくうれはしき事ぞかし。たゞしそれをいたまざらんほどの人は、なにのなげきかあらむ。さきだちてまつ心にこそ、あやなくことにほいなかるらめ。いとゞ神通自在の身とさへなりて、衆生の世々に恩深かりし事も今のやうにおぼえ、父母の（四）長夜に迷ふありさまもまのあたりみる。妻子の三途のくるしみにさけぶこゑをもきゝ、眷屬の（五）八熱のほのほにむせぶ心をもしる。何事につけてこそ思ひのとむべきかたもなければ、しばしも極樂に逗留せんや。いそぎて（六）穢國に還來し、（七）無累解脫のちからをはげまして、（八）有海沈沒のともがらをすくひ。ともに（九）一佛土の花のうへによぢ、おなじく安養界の月のもとにあそぶ。このおりぞすこし大悲も心やすかるらむ。又かく（一〇）利他ひまなけれども（一一）自利もさまたげられず。樂おほけれ

（一）善導大師の著般舟讃の文也。
（二）清淨大海。極樂淨土。
（三）無生衆。無生を證得したる聖衆之等の聖衆が、遙かに淨土に生ずる者を見て歡喜するとの意也。
（四）長夜。生死の昏冥にして窮り無き事。
（五）八熱。八大地獄。曰く、等活、黒繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間これ也。
（六）穢國。穢土と云ふに同じく、娑婆。
（七）無累解脫。生死の苦縛より免るゝを云ふ。
（八）有海。生死の苦海。
（九）一佛土。同じ佛の淨土。
（一〇）利他。他人を化益し勝利を得せしむる事。
（一一）自利。自分の爲に修行し己の利益を得る事。

(一)「自然虛無之身、無極之體」といゝけり。おほよそ常樂我淨みなたのしみなれば、行住坐臥つねに心をよろこばしむ。くに、春秋冬夏なく、そらに晝夜昏曉なし。たゞいつも、さむからずあつからず。よるともいはずひるともいはねば、逍遙ときをまたずして、遊戯しばしもたゆることなし。しかあるにつけては、(二)「或は語り或は咲ふて身心樂み、卽ち閻浮の同行人を憶ふ。各誓願して遙に加被す、專注莫退して盡く須らく來るべし」とて、あはれ心ざしふかゝりし、むかしのともと、これをもろともにたのしまゝしかばと、事ひとつたらぬ心ちすれば、かまへて念佛退轉せで、とくこゝにきたれとのみ祈念すらんは、はかりなき往生のかたうどかな。むらなきあはれみも、緣あるをまづするならひなれば、さこそは心もとなく、侍るらめ。寶池のはちすに坐するにも、わが身はかたはらによりいて、半座をいたづらにのこすなるは、よくわりなき心ざしにこそ、人にはかりなるちぎりをも、ひとつはちすにとぞいふべかりける。さてこの界に念佛するもののいできぬれば、かならずかしこにひとつのはちす生ず。念佛をこたらざれば花ひゞにひらけ、すたるれば又むなしくしぼむ。

(一)無量壽經の文也。

(二)善導大師の著般舟讃の文也。

(一)多劫。曠劫と云ふに同じく、極めて永き時間の事

(二)善導大師の著般舟讃の文也。

(三)四種の威儀。行、住、坐、臥。

(四)法身。眞如法性の身。

(五)速證無生身。法身と云ふに同じく、不生不滅の理を速證せる身。

(六)紫金。紫磨黃金の略なり。

(七)虛薄の身。水穀を用ゐざるの身

さりがてらに見すぎぬべき心ちもなく、わづかに半日を七世になずらへしはさらなり。なを(一)多劫も一念とおぼえぬべきまで、こゝもなごりおしく、かしこも又ゆかしくて、やすらへば、心もとなく、すぐればあしもいそがれぬ。すゝみしりぞきに思ひはづらひては、いかで身をも、あまたにわけてしがなとおぼゆれば、(二)「(三)四種の威儀常に定に在り、三昧を出ずして神通を作す、一々の神通佛會に到り、會々に法を聴きて無生を證る」とて、しづかに禪定にありながらおほくの身を變化し、處々の佛會にわかちやりて、會々に法をきかしむ。その面面にきくところは、かへりて身ひとつのさとりとなる。これことなる逍遙のきはまりなり。

三には眞我あらはれて、(四)法身まどかなれば、われといふおもひの、まことある。(五)速證無生の身をえて、かりの身を、われはと思ひし迷ひも、ながくはれぬ。

四には、淨くして内外たまのごとくなるはだへ、(六)紫金のいろをおびて、ひかり月日よりなをあきらけし。これすなはちけがらはしき父母の精血をもちゐず、たゞいさぎよき蓮花よりおのづから化生せるゆへに、(七)虚薄の身かろくして、たちゐる心にさはらざれば、むなしうしてなきにたり。この淨德きはまらざるを

寶を鏤めたる宮殿に於ける集會。
（九）凡聖。新生の人と舊住の聖衆。
（一〇）法乳一味。同じ教法を信ずる事
（一一）三忍。音響忍、柔順心忍、無生法忍にして證悟の理
（一二）大衆無生法食會。三昧食會なり。
（一三）飯食經行。食を思うて行道する事。
（一四）三昧。梵語にして、正受、正定、平等と譯す。即ち證り也。或は定に住する事。
（一五）神通。今は六神通の内の神足通也。

會することをえたり。さしもいまゝで人のやつこに、なを身をまかせたりしほどのいやしさに、いつしか觀音勢至にかたをならべ、普賢文殊に、ひざをくみたてまつる。これ過分の面目などはいふにやをよぶ。ひかりにふれて（一）三忍をうるもはたありがたき巨益ぞかし。又（二）大衆無生法食會にまじはりて、（三）飯食經行すれば、七寶のはちおのづからまへにありて、百味の飯食そのなかに現ず。いまだもちゐざれどもみるにすなはちあきぬ。いにしへは一兩の褐衣、一餐のかれいひだにも、なをもとめがたく、（衣也）えがたかりしに、（食也）いま衣食自然にして、身をやすくし、たましゐをやしなへば、さらにうれへ、はぢらふことなし。ただなすわざとては、あしたにちりしく花をひろひもて、はるかに他方十萬億の佛にたむけ、かへさに無量百千（四）三昧をうるいとなみばかりなり。又（五）神通にのりて、虚空會にのぼれば、寶殿身にしたがひてそらのなかにとぶ。雲路の徘徊風情きはまりがたし。花雲そびきてかけはしとなれば、聖衆そでをつらねてわたり。香風ふきて樂をなせば、飛天たもとをひるがへしてまふ。面々に通をとばして、をのがじし遊戯快樂するありさま、とり〴〵にあやしくたへなり。すべていづこゝそ、なを

葉のたへなるだにもあるに、長風やゝ林をつたひてすぐれば、音樂ほのかにこずゑをわたりてゆく、こゑ妙法をとく。きけば(一)無生を證す。又(二)八功德池のほとりにのぞみて、(三)百寶池渠會をみれば、七寶のきし八德のなみにあらはれて、いとゞあざやかにうつろふかげを、をのがいろがほにすみなせる、水のそこも、くまなくいさぎよきに、青黃赤白のはちすさへ、ひかりをうかべてさきみだれたれば、いとゞ蓮花の大衆も、莊嚴をそへて、花にあそぶ人天は、(四)九品のすがたあらたに、なみにたはふるゝ菩薩は、(五)十地のかげたけたり。みぎはには、鳧鴈鴛鴦むらがりゐて、たへなるのりをなきつれたるこゑ、哀婉雅亮にして、ことに人の心をおこすたよりなり。これらはみな(六)「爲引他方凡生類」のたくみ(七)「故佛現此不思議」の御しわざなるべし。又(八)寶樓宮殿會にいりて、(九)凡聖まじはり坐するに、かたちに善惡なく、しなに貴賤あることなし。これみな彌陀法王、住持、のともがら、正覺淨花、化生の衆なれば、おなじく佛をもて父とし、はちすをもて母とし、さきに生れたるを兄とし、のちに生れたるを弟として、ともに(一〇)法乳一味のしたしみあれば、はゞかりなく、もろ〳〵の上善の人と、ともに一處に

(一)無生。不生不滅のさとり。
(二)八功德池。淨くして潤ひ、臭かず、輕く、冷く、柔かく、美しく、飲むに適し、飲みて後患ひなしと云ふ功德の德を具する池。
(三)百寶池渠會。百寶を以て嚴飾せる池に於ける集會
(四)九品。極樂に上中下三品あり、更に其の三品の各々に上中下三生の別ありて九品となる。
(五)十地。歡喜地、離垢地、明地、燄慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地。十地共に菩薩の位にして次での如く次第して高位也。
(六)(七)共に善導大師法事讚の文也。一は「他方の凡生類を引かむが爲に」と和訓し。二は「故に佛此の不思議を現したまふ」と和訓す。
(八)寶樓宮殿會。

ち、佛とひとしくして、おいもやまひもせぬ身なれば、よはひいつもさかりなり。かの(一)陶隱居が仙方をとふらへば延齢なをいくばくならざる事をそしる。この(二)無量壽の淨域にのぞめば、長生のつゐになかばならざることをよろこぶ。まことに悲愧して、地につばきはき、悲喜なみだながるゝことはりなり。

二には樂のみにして、くるしみはその名をだにもきかず。三惡のみちあとたえたれば、後の世のをそろしかるべきもなく、(三)五妙の境こゝろにまかせたれば、この身たのしみも又つくべからず。これを敎門になぞらへて思ひやりけんは、さらにかずにもあらざりけり。げにぞ、はじめて佛會にいりて、未曾有なる事をえたる。いへばことばもたらず、思へば心もをよばず。ただ物ごとにたぐひなくめづらしければ、國界あまねくゆかしくて、はるかに佛會をうかゞひゆくに、聖衆よそ〳〵たづさへゐて、かづ〳〵(四)寶林寶樹會にいらしむ。みれば(五)七寶をみがきて、(六)七重たがひにいろへたるうへき。光りをつらねてたちならぶかけ、そのがなみ〳〵みだりがはしからず。枝には春秋をならべて、花もあり、このみもあり。葉には衆色をまじへて、あを葉にもにたり、もみぢにもにたり。この寶花寶

(一)陶隱居。支那の仙術の道士。長生の方法を傳ふ。
(二)無量壽。阿彌陀の譯語也。
(三)五妙。眼に見耳に聞き、鼻にかぎ、舌に味ひ、身に觸るゝ所の境界皆快樂なるを云ふ
(四)寶林寶樹會。七重寶樹の林の中に於ける集會。
(五)七寶。金、銀、瑠璃、玻瓈、硨磲、赤珠、碼碯を云ふ。
(六)七重。根莖枝條葉花菓、相ひ重なるを云ふ。

報、をもくしていやし。人間には八苦のけふりたえず。天上には(一)五衰の露かわかず。三界みな苦にして、いづくもやすき事なかりきと、思ひいづるも心うげに申ゐたれば、ことばごとに、むねにたつこゝちし給ふべし。ほとけをはじめたてまつりて、ならびゐ給へる菩薩たちまで、すぎにしかばともいはず、いまある事のやうにかなしみあひ給へり。やゝよく、なきたまひて、又それなん、をのが心からうけしくるしみなり、人を怨むる事なかれと、なぐさめうけたまはるにも、いまさらくやしき流轉なるに、いまはかくなん、よくしえ給ひたりとや。この極樂と、かの三界と、いづれにてありなんと、とひ給ふは、せめてもうれしさのかぎりにこそと、いとゞ佛恩のみかなしうて、たゞむせかへる涙にことばもなし。これあまりなる御なずらへ也。中々なにとかは申もわかん。(二)淨穢ことのほかにして、雲泥なをちかし。まして何れかなどは、いかゞ思ひもよるべき。(三)願智たくみにかざりて、(四)依正ならびなければ、くに(五)泥洹のごとくして、たのしみ四德をきはめたり。

一には常にして、ながく無常をはなれたるゆへに、かずかぎりなくながきいの

(一)五衰。衣裳垢づく、頭の花萎む、腋下汗流る、其身臭く、本座を樂しまず。これ也、之れ天界の果報盡滅するの相也。

(二)淨穢。淨土と穢土。

(三)願智。四十八願と五智。五智とは、法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、これ也。

(四)依正。極樂の佛菩薩を正報と云ひ、其の國土の寶地、寶樓、寶樹、寶池華座等を依報と云ふ。

(五)泥洹。涅槃、即ち悟りの境界、極樂の事也。

眼。
（一）萬字。千輪。前者は佛の胸に、後者は足の裏に在りて、共に吉祥萬善の相也。
（二）善導大師の著法事讚の文也。
（三）新往の化生。新らしく往生したる者。胎卵濕化の四生の内、極樂往生は化生なり。

いろ（一）萬字千輪の文、すべて淸淨慈門の感ずるところなれば、見者無厭の御すがた也。めしばらくもすてず、頭頂に禮敬し彌陀の心水をうけて、如來の性海に歸す。さても（二）「父子相迎へて大會に入り、即ち六道苦辛の事を問ふ。或は所得人天の報あり、飢餓困苦して體瘡を生ず。爾時彌陀及び大衆、子の苦みを說くを聞きて、みな傷歎したまふ。彌陀諸佛子に告げて言はく、自ら作りて自ら受く他を怨むこと勿れ。彌陀諸佛子に告げて言はく、極樂は彼の三界に何如ぞ。（三）新往の化生ともに報へんと欲し、合掌悲咽して言ふこと能はず」と釋する、その時の儀式こそ、いひつゞくるもあはれにかなしけれ。わかれしとしふりて、あふ日あらたなれば、さぞうらみもいまだわすれがたく、よろこびもことさらにいますらめども、終焉は、とりあへざりしかば、さながらむせびてすぎたまひにけるならん。すでに父子あひむかへて大會にいりぬれば、いまは、佛も御心おちゐて、さまざまかたじけなき事かたらひつくし給なるに、さしも心ぐるしう思ひやりし、流轉のほどの苦樂いかゞありしと、とひ給へば、むかしおぼゆるさとりありて、こしかたなごりなく、おもひつゞくるに、地獄は劇苦ひまなくしてひさし。鬼畜は苦

ゝみて、往生のほかはよろづをわすれたり。すでに草菴にいきとゞまりぬとみれば、すなはち蓮臺に(一)あなうらをむすびぬ。歡喜いはんかたなし。不覺にして佛を禮す。そのかうべをかたふくるほどは、なをこの界にあり。めをあげてみれば、はやかのくにゝいれり。他鄕と自家とたゞ(二)一念をさかひ、脫苦と得樂とわづかに殺那をへだてたるに、いつしか(三)紫磨黃金のはだへ、(四)忍辱のころもにかゞやき、(五)環釧寶冠のかざり、(六)解脫の瓔珞にはへたり。(七)四八よそほひいつくしく、(八)六通さとりあきらかなれば、いかなる(九)大會にさしいづとも、かたへはづかしかるまじきさまなり。すなはち蓮臺よりおりて、やうやく佛所にすゝまんとすかれば、(一〇)雜厠間錯の寶地、あしのふみどころもおぼえず。(一一)大海塵沙の佛會、行路もうゐうゐしき心するに、觀音勢至まし〳〵て、たのもしく、みちしるべし給はんと、まづ瓔珞細輭のころもをきせて、威儀うるはしくかいつくろふ。これさしもはれ〴〵しき大會の初參なれば、心ことにいだしたて給ふなるべしこの法侶にたづさへられて、ほとけの御まへにまうでたれば、(一二)烏瑟こまやかにして、蒼天よりもみどりに、毫光あきらかにして皓月よりもしろし(一三)丹菓(一四)靑蓮の

(一)あなうらをむすぶ。結跏趺坐、即ち座する事。
(二)一念。刹那。何れも極めて短かき時間を云ふ。
(三)紫磨黃金。最上の黃金。
(四)忍辱。六波羅密(六度)の一、堪忍の修行。
(五)環釧寶冠。指卷、臂卷、かむり也。
(六)解脫。煩惱の繫縛を免れる事。
(七)四八。佛の三十二相。
(八)六通。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通、是れ也。
(九)大會。極樂の菩薩聖衆の集り。
(一〇)雜厠間錯。種々雜多の寶をも飾たると云ふ意。
(一一)大海塵沙。廣きこと大海の如く、數多きこと塵沙の如き佛の集會
(一二)烏瑟。佛の頂。
(一三)丹菓。佛の脣。
(一四)靑蓮。佛の

（一）火坑。三惡道。

（二）鳧磬。病人の枕もとにてならすかねの事。
（三）口稱。口に稱へる念佛。
（四）十念。十聲の念佛。
（五）（七）何れも善導大師の著、法事讃の言句也。
（六）異香。紫雲。共に來迎往生の奇瑞なり。
（八）毫光。佛の眉間に在る白毫の光
（九）靈儀。彌陀觀音勢至等の來迎の有樣を云ふ。

む友なれども、すゞろに人もなつかしくて、よろづとりそゝたる心ぼそさに、のがれぬみちもすまはしければ、業繋はいとゞちからをえてひく。（一）火坑はすでにあしのしたにのぞみにたり。引接すこしものびは、たゞちに泥梨にいりなんとす。あやうしなどはいふにもすぎたり。こはいかゞせんとかなしきに、彌陀慈父の大悲、かぎりなくおどろきさはぎたまひて、菩薩聖衆も、しづ心なく、來迎の儀、ときをいそがしませば、まづそのせちなる御心ざしのちからさきだちて、行者の身をたすくるゆへに、病苦うすらぎ、正念あきらかになりて、倒わすれ、心みだるゝ事なければ、（二）鳧磬かつ〳〵うちおどろかして、（三）口稱やゝをとづれたちぬ。稱名こゑすみてしづかに（四）十念をとなふるほど（五）「終時合掌奉香煙」にほひは（六）異香にまがひつゝ（七）「香煙直注彌陀佛」けふりや紫雲となりぬらん。紫雲まどにかゝる、（八）毫光うつろひて紅艶をそへ、音樂のきをめぐる、旋嵐ともなひて音韻をます。彌陀照臨してひかり室にみち。聖衆羅列して、かげ、にはにしく觀音うてなをよせ、勢至かうべをなでたまふ。よそほひもめづらしく、にほひもなつかしければ、（九）靈儀にめうつりして穢土のなごりもおぼえず。花臺に心す

どなかるべきにつき、しみぬる心のくせは、まよひなをはるけがたくて、たまく思つくるおり、うちおどろかるゝも、たゞいはればかりにて、緣にあふ時はことはりをだにも、なをわすれはてぬ。いゑぢには、つかれをかへりみぬならひなれども、極樂のかへさは、むげに念佛のあしも、やすらひがちなり。この心ざしのをろそかさには、往生もたちかへり、あやぶましかりぬべけれども、さすが南無阿彌陀佛をこたりはつるほどの、身にしあらねば、こゑをたづねん。かこつかたの、なかるべきにもあらず。さらにおもはぬをだに、したふはおやの慈悲なれば、ましていさゝかもたすけ給へと、ねんじきこえん子を、すつるみちありなんや。これおもひつづくるおりぞ、げに往生も、うちとけて心やすく、本願もうらなくたのもしくおぼゆる。たとひいかに、いゑのいぬ、つねになれたりとも、願力をかたうどにて、名號のつゑをとりなんに、すこしもなにのをそれかあらん。さりながら(一)妄執はにくきものぞ、よもとは思へども、たゞこれにむきては、いかほどもようい、ふかゝらんにしかじ。ことに臨終もちかくなりぬれば、(二)八苦あひやくところなれども、なにとなう世もなごりおしく、(三)六賊いつはりしたし

(一)妄執。妄念執着。

(二)八苦。生老病死の四苦に、愛別離苦と怨憎會苦と求不得苦と五陰盛苦との四苦を合せたる也。

(三)六賊。色、聲、香、味、觸、法、是等は善根功德を掠むる故に六賊と名け或は淨心を汚すの謂よりして六塵と云ふ。

父子相迎 下

向阿上人撰

抑法藏(一)五劫思惟して、父子あひあはん願をおこし、彌陀(二)十劫に覺をとなへて父子あひむかへむちからを、まうけ給ひしよりこのかた、(三)四十八願ねんごろに、わがまよひ子やあるとよばひ給へども、(四)二十五有のうち、いづくにこそ、こゝにありと、こたふるをとも、なかりつるほど、こひかなしみたまふ御心、さぞやるかたもなくおぼしけむ。しかるにわれらいま本家を思ひいでゝ、はじめて父の名をよばひたちぬ。この南無阿彌陀佛のこゑを、きこしめしつけぬるよろこび、又をき所なくおぼしめすべし。さればぞ(五)十萬億土のみちをなかにして每日に千返まで、行者のところにはきたり給らん。やうこそかはれ。かしこきさとりある心までも、なを子をおもふみちには、まよふなりけり。この御慈悲のあはれにかたじけなきを、思ひしならんには、いかほど、かほとけもなつかしう、往生も心も

(一)五劫思惟。極めて永き間、吾々を救ふ方法に就て思ひを凝らせし事

(二)十劫に覺をとなへて。十劫と云ふ永さ已前に本願成就して佛の覺を開きしこと。

(三)四十八願。彌陀因位、法藏比丘と稱せし時に建立せし本願の總體。無量壽經に出づ。

(四)二十五有。三界六道と云ふに同じ。

(五)十萬億土。娑婆と西方淨土との中間に十萬億佛の土を隔つ阿彌陀經に說くが如し。

しいかに機つたなく行すくなくとも、たゞ、われをたのまむものにだもあらば、かまへてわがくにゝうまれよと、あさからずねんじたまふ。その御こゝろざしにひかれて、などかは、われら往生する事をえざらん。ほとけのおほきなる願力、いをのわづかなる念力にをとらめや。母をおもはざるいをの子、なを水なきさはにくちず。父を念ずる一子いかでか(一)愛河のながれにしづまん。われすでに佛を稱念す。ほとけ又われを(二)還念したまふべし。かたちかれんとき父子相迎せば、いのちをはらんのち本家にかへらざらんや。たゞ身のつたなきにつけても、いとどこゝろをかたふけて願をあふぐ。南無阿彌陀佛かならずたすけ給へ。

(一)愛河。むさぼりの心。
(二)還念。善導大師の觀無量壽經疏に、衆生佛を念ずれば、佛還て(衆生を)念じ給ふとあるに基く。

て作る四罪、妄語、綺語、惡口、兩舌。意にて作る三罪、貪欲、瞋恚、愚癡。是を合せて十惡と稱す。

(一一)五逆。殺父、殺母、殺比丘、出佛身血、破和合僧これ也。善導大師の著、般舟讃の文也。

(一)常沒無緣の機。苦海に常に沒して、其れより出づる、たより無き者。

(二)魚母。此の譬喩は智度論に出づ。

と釋するは、をのがちからはともかうもあれ、たゞ他力のつよきにひかされて、たのまば、かならず徃生すべしといふなり。これまた彌陀の本願、かぎりなく、衆生を一子にかなしみ給ふゆへに、なをざりならず。いかゞしてわがくにゝ生ぜしめんとおぼしめす、御こゝろざしの、せちなるちからにすくはれて、(一)常沒無緣の機なれども、すみやかに徃生ののぞみをとぐるならん。すでにかくまで、ほとけの御かたより、すゝみて懇望し給ふ事なれば、たとひ一念なりともいかでも御みゝにたたぬやうはありける。にはかなる十こゑ一こゑに、とりあへず來迎し給ふをもて、よくも心となく、まちうけ給ひけるほどをば、はかりたてまつりなむかし。かやうにこま〲と、ほとけの御こゝろざしを思ひしりぬれば、徃生もうたがひなく、本願も、まめやかにかたじけなくて、(二)魚母子を念持するいはれさへ、おもひあはするかたには、あはれもそひ、たうとくこそおぼゆれ。げにさしも、をろかなるいをだにも、子をうみをきてのち、母わすれずそれを念ずれば、そのこゝろざし、まほりとなりて、子ひとつもくちず、みな魚となるとこそいふめれば、まして阿彌陀ほとけの、一子の慈悲ふかく衆生をあはれみたまひて、よ

これらのいぶかしさの、はるけざらん程は、まことしく極樂のねがはしき心も、おこりがたかりぬべければ、いかゞして疑網を(一)願海にたち、(二)法船を(三)彼岸によそはんと、くはしく教門をうかゞひみるに、まづ(四)「一者決定して深く信ず。自身は現にこれ罪惡生死の(五)凡夫にして、曠劫より已來、(六)常に沒し常に(七)流轉して、(八)出離の緣あることなしと。」と釋するは、彌陀の本願、もはらかゝる惡人を本として、おこされたりとさだむるなり。これ罪業をつくるが、にくからざるにはあらねども、たちまちに(九)惡趣におちなん事のいとおしければ、諸佛も、しかねたまへる(一〇)十惡(一一)五逆の機を、たやすく往生せさせぬるに、大悲の至極をあらはして、佛も世にこえたる高名とおぼすなるべし。さればむねとわろきものが、たのみて本願の名をも、あげたてまつるべきにてこそあるを、かへりてつみふかき身はいかゞとあやぶむをば、さぞほとけもおもはずに見給ふらん。願ひとをもらさねば、「人々分あり疑ふべからず。」といへり。むらなきちかひ、たれかをのがぶんにあらずとせん。「二者決定して深く信ず。彼の阿彌陀佛四十八願をもて衆生を攝受したまふ、疑ひなく慮なく、彼の願力に乘じて、定むで往生を得と。」

樂へ行く道路。

(一)願海。彌陀の本願の廣くして深きことを海に譬へて願海と云ふ。

(二)法船。念佛は六道生死の苦海を越えしむるの法なる故に船に譬へて法船と云ふ。

(三)彼岸。淨土の岸。

(四)善導大師の觀無量壽經疏散善義三心釋の下に出づる信相を明すの文也。

(五)凡夫。罪を造る鄙しき者。

(六)常沒。三界六道の苦海に沒して浮ぶ瀨なきの意。

(七)流轉。生々世々六道を轉々流浪するの意。

(八)出離。三界六道の苦より免るゝ意。

(九)惡趣。三惡趣。即ち三途三惡道と云ふに同じ。

(一〇)十惡。身にて作る三罪、殺生、偸盜、邪婬。口に

べくとも、浄土の法門、彌陀の本願を、きゝみん事は、さらに(一)「難中之難、無過此難」とゝけり。しかるにいま、たま〳〵(二)頓教菩提の門ひらけて、超絶易往のみち通ずる時にあへり。父子あひむかへて、(三)本家にかへらん日、けふにあらずばいつとか期せう。はやすでに安養の本家を、われらがために莊嚴して、彌陀慈父の本願、こゝろもとなくまち給ふなり。これをききながら、いかゞさは、なをいそがではありける。(四)「歸去來、魔郷には停るべからず、(五)曠劫よりこのかた流轉して、六道ことごとく皆經たり。到る所餘樂なく、唯愁嘆の聲のみを聞く。此の生平を畢て後、彼の(六)涅槃の城に入らむ」と。いざなはるゝ智識のことばを、しるべとして、さらばたゞちに、(七)西路に歸しなばやと、思ひたつにつきて、つら〳〵身のありさまを案じつゞくれば、又かた〳〵、とゞこほりぬべきうたがひあり。一には、凡夫のための本願とはいへども、さだめてわれらやうのつみふどをば、さりとてはの、なをざりがてらにおもひ給ふべし。さてはいかにも、往生のほいとげがたくやあらん。二には、たとへば惡人往生すべくとも、こゝろざしをはこび、こゑをかさねて、返々懇望せんにぞ、佛もみゝにきゝいれたまはん。

(一)無量壽經に在る語。浄土の法門を開き、彌陀の本願に値ふことは、難きものゝ中の最も難きもの、如何なる難きことも此の難きを越ゆる程の難きは無しとの意也。

(二)頓教菩提」佛教中階梯次第を經て漸次に悟りの境に至る教、頓に不次第にして證悟に入る教とあり、依て漸教頓教の分別を生ず。念佛の法門に、速に悟りの境に至り得る教なるが故に頓教と云ふ。故に次下に超絶易往と云ふ。此の意也。

(三)本家。先日自家と云へるに同じく極樂の事。

(四)善導大師の觀無量壽經の疏の文也。

(五)曠劫。極めて永き間。

(六)涅槃の城。さとりの都、即ち極樂」

(七)西路。西方極

業自得のちからなければ、主君たのもしとてもたすくまじ。妻子いとおしとてもかはるまじ。たゞ人は人われはわれなる、(一)「獨生獨死、獨去獨來」のみちこそ、おもひやるも、心ぼそかるべけれ。後世とても、他人なるまじければ、なにともならばなれとは、えおもひはなつまじかんめり。されども(二)「世人薄俗にして、不急の事を爭ふ」と、ときて、今生のいとなみの、いのちあらばと、ゆるかるべきをば、あしをうらにして急にし。後生のいでたちの、いまもしなばと、急なるべきをば、てをたんだきて、ゆるくする。これかしことやせん、をろかなりとやせむ。さしもうけがたくして、うしなひやすき人身を、いたづらはしく、なにともなき、ゆめのうちの事にのみ、くるしめて、つゐにげにげにしきながき世のおもひいで、ひとつもなくて、やみなんあさましさよ。この世こそ、かく思ふやうならざらめ。のちの世をさへ、むなしう(三)二世不得の身となして、ながく(四)刀山火湯に、たゞよひゐたらんは、いふにすぎたり。なのめに毛をき、角をいたゞきたるたぐひとなりても、たやすく、そのすがたを、あらためむ事かたかるべし。たとへば又、おのづから、ふたゝび人身をうる時はある

(一)無量壽經の語。生死の途には連れは無しと云ふ意也。

(二)無量壽經の文也。

(三)二世。今世と後世。

(四)刀山。火湯。獄の事。

（一）身受心法。身は不淨、受は苦、心は無常、法は無我なり。

（二）生盲云云。善導大師の般舟讃の文也。從て、次ぎ下に、古賢とあるは善導大師を指す。生盲。生れながらのめくら。

（三）業。善惡一切の行爲。

（四）智識。學德兼備の僧。

（五）自業自得。自己の修せし行爲た報ひて、自ら其の結果を獲得する事。

こと〴〵く、むなしきゆへに、もとよりかく無我なるものぞといふ事を、あらはしはてぬるなり。この有様をみるに、つや〳〵、われともわがものとも、執すべき世にこそあらざりけれ。すべて(一)身受心法ひとつとして、愛着あるまじきことはり、あら〳〵いひつゞくるに、かくのごとし。かやうに心をえなば、さすが人木石にあらず、いかゞげにもと、思ひおどろく、すこしの甘心なからん。しかはありとも、淨樂常我は、ひさしく轉倒しなれぬるまよひにて、きと、ひるがへさん事かたかるべし。もし松門にあとをかくして、ひたすら世のうきめみぬ身となりたらば、をのづから山のかせぎも、なれやしなましと、おぼゆれども。それ又かげとゞめらるゝほだし、おほければ、思きるほどのこゝろざしもえなし、なにかとやすらはんまに、思ひまうけぬ心ちして、とりあへず、あはてゆかん、のちの世の、くらきより、くらきにいらん。たゞよはしさこそ、いかにすべしともおぼえずかなしけれ。(二)「生盲にして(三)業にまかせてはしる。業にしたがひて、深坑に墮せん」と、傷嘆せし。古賢の案におちて、重苦にむすぼられなんのちは、(四)智識のよくおしへける物をと、くゆとも、さらに、かひあるべからず、(五)自

(一)忽爾云云。善導大師の法事讃の文なり。

(二)報命。過去世の因縁に報ひて受けたる現在の壽命。

(三)冥途。後の世。

(四)諸法。森羅萬象、有るとあらゆる物。

こそいふめれば、いつの媚なしと、はづかしめられんも、心うきかたりにあらずや。よくおもひわきて、くやしからずはからふべし。かぞふれば、むげに程なき一期を、あぢきなくかなはぬ世に、かゝづらひゐて、そこらのとしを、いたづらになしぬるこそ、あたらしけれ。いまはのこりの月日をば、いかにもして後世のいとまになすべき物を、(一)「忽爾として無常の苦來り逼り、精神錯亂して始めて驚忙す、萬事家生皆捨離し、專心に發願して西方に向へ」といふ、とをきおもんぱかり、いかゞなからん。

四には無我を我と執する、これ又まよひのきわまれるなり。しばしたゞ身にこころのよりゐたるを、かりにわれと、いひならはしたるにてこそあれ。さらにさでありはつべき物にはあらず。たとへば心はとまりをつたふみちゆき人ににたり。つねに六道をめぐりて、あともさだめず。身はひと夜をあかす、たびねのとこのごとし。わづかに一期が程、たましゐをやどすばかりなり。生涯つき、(二)報命をはりぬれば、心はゆきて(三)冥途のかぜにさすらひ、身はとゞまりて郊原の露にくちぬ。つゐになにゝむかひてか、われといふすがたを見ん。これ(四)諸法は皆

さみに、なりゆく身のはてこそ、はかなく、あぢきなき、きわまりなれ。これをよそにきくをり、さすがあはれといはぬはなけれども、をのが身のうへになしては、さらにおもひもよらぬけなり。かくなんしりがほにして、しらぬ心の、なまざかしきこそ、をしへどころもなく、しあつかひたれ。いにしへ、(一)佛弟子の、死人をくりすてたる野のなかに、まぎれありきけるを、何事し給ふにかととへば、こころのひがみに、あらそひかねて、證人もとめ侍るとなむ、いひけるは、せめても思ひかねたる、しわざなるべし。かくしても、げに、つれなきこゝろをば、いさむべきにや。さてすこしも無常思ひしりなむは、はかりなき世の、なぐさみかな。よしやいつまでの身ぞと、おもはましかば、なじかは、さのみの人わろさもあらむ。又ゆゆしき、なげきうれへの、やるかたぞかし。あはれ佛の御はからひにても、(二)一期こゝろに無常わすれず、くちに念佛をやまぬ身にしあらば、いかばかり世のありさま、もどかしう、すみたる心のうちならん。これなむ又なくあらまほしき心なり。ねがはくは、かまへて、佛もわれをそゝのかし給へ。たとひいかに、智解むねにみちたれども、無常をしらざるをば、なを道心なき人と

(一)佛弟子云云。或る比丘が心の師を求むると云ふ物語にして法句經に出づ。

(二)一期。一生涯。

(一)生者必滅。生れたるものは必ず死する事ありと云ふ意。

(二)東岱。北芒。何れも唐土に於ける死人を送る所の山の名也。

(三)白樂天の語也

て、哀慟す、いつかまた、人われにをくれて傷嗟せん。人をもあはれとみる〃身をもあはれとおもふ。としてもかくしても、ながるれは、ふかくのなみだ、ふたゝびかゝるとも、いひけるなり。すべて老たるは、生者必滅なればとてのがれず。わかきは、老少不定なればとてとゞまらず。世上うきたちて、泉下ながれはやし。いづかたにつけても、ありはつべき世とこそみえね、わづかにこのめのまへの、哀傷だに、なをゆびもおりあへず。ましてみゝのよそなる無常、さぞかずもしりがたかるらん。よな〳〵おもひをいたましむるけふり、ならびてはたてども、たふる時なし。あさな〳〵たもとをうるほす露、すゑ葉にてはきゆれども、もとのしづくとならぬやはある。その(二)東岱前後のたましゐ、かばねをすてゝいづちへかさる。雲となり雨とやなりにけん、ゆくゑもしらず。北芒新舊のほね、たましゐをはなれて、いくばくかのこる。つちとなり、はいとなりて、あとかたもなし。せめてそのぬしこそあらめ、なきあとのしるしに殘るそとばだにも、たがため、とかく、もじさへかすかにきえたるこそかなしけれ。それもかたなく、くちぬれば、(三)「古墓何れの世の人ぞ、姓と名とを知らず」と、ゆきゝの人のくちず

あすまではありもやすらん。しらずなにとまれ、あけぬくれぬと、つゞまりもてゆかんほどに、つゐにいまはの日なからめや。あはれいづれの日、いづれの時、いかなるやまひにかふし、いかさまにして、しぬべき身にかあるらん。無常ときをいはざれば、けふがその日にあたらんも、かたかるべきにあらずかし。すぎぬればこそ心やすけれ。日ごとに、さもあやうき身を、人ごとに、わかきにほこりては、おひたるをわらひて、そのあざけりの、われにかへらんことをしらず、老たるを見ては、いとゞわかきをたのみて、無常の、いまもをのれを、あやぶめん事をわすれたり。さればかならず、おいをまつべきいのちとやおもふ。人をみるにも、おほくは、わかくてしぬる世にこそあめれ。そのあまたのかずにもれん事、はたよくかたかるべし。かの(一)寒山がこれをいひてこそ、「昨來りて訪ひし親友、大半(二)黄泉に入る、今朝孤影に對して、不覺の涙雙び懸る」ともかなしみけれ。げにしづかにおもひつゞくれば、なみだがちなり。きのふまで、をとづれこしとももはや、なかばをすぎて、ゆめになりぬ。けさはたゞ、わがかげひとりたちならべり。これも、いつまでか身にそはんとする。けふは、われ人をさきだ

(一)寒山。支那唐代の人。詩偈に巧みなるを以て聞ゆ。
(二)黄泉。よみの國、人死して後に魂の赴く處。

（一）古人。弘法大師を指す。下に引けるは性靈集に出づる文。

（二）瀛奎律髓の文也。

（三）殺鬼。無常を鬼に譬ふ。

からなく、あけくるゝ月日に、はからはれて、わがまゝにせぬよはひなれば、心ならず、したしみきける、しらぬおきなこそ、いとはしけれ。（一）古人の「何ぞ忍ばむ、日天矢の如く運りて、人の童顔を奪ひ。不分月殿疾く來りて、人をして變異せしむることを」となげきしもことはりなり。これを、をろかなるものは、たゞうはのそらにのみ、あけぬくれぬと見て。つや〳〵身のうへに、をくりむかふる物とはしらず、事しげき世に、まぎれくらしては、めぐりくる月日をだにも、なをわすれにけり。（二）「只看る事の眼前を逐ふて過ぐることを、覺えず老の枕上より來るを」といひけむは、かかるつれなきもののきゝしれにこそ。げにかくよろづの事の、おちぶれゆくにつけても、などかわが身もしかと、おもひなずらふる、心なかるらむ。いかにも、さかさまにゆかぬ、月日なれば、老はつゐにのがれはつまじき物なり。いはむや又、無常おいをまたず。（三）殺鬼、わかきをゆるさねば、いのちのかぎりのさだめなさこそ、いとゞたのみなくおぼゆれ。つく〳〵と光陰の、めぐるをはかりにして、やうやく露命のつゞまる事をしるに、けふもはやくれぬ。けふのいのちはしたがひて減じぬ。のこるいのちいまいくばくぞ、

へる、げにみゝいたきいさめのつゑなれども、なをうちおどろかぬ、心のつれなさは、いまこそおもふことなくわらふとも、とざまかうざまに、うたれん時、いかばかりか悲しからん。(一)「羅刹刄を擎て心眼を刺す、皆心眼に由りて(二)泥梨に墮す」とて、くろがねのひしは、まづむねとまなことをさす。これおほくは目に見心におもひてのみ、つみをつくりしゆへなり。さもぞ身と心とはうとましう、この世のみならぬ、くるしみのうつは物なりける。これを後悔なきさきに。いかゞさはいとひすてずはあらむ。

三には無常を常と思ふ。これ又いたりてあやまれり。おほかた三界はみな、生者必滅のことはりをなげく。(三)なかにも閻浮は、ことに老少不定のならひをそへたり。すでにこのなげきをかさねたる、所にうまれて、いとゞあやうかるべき身をうけながら、いかでかつゐに、のがれはつることはりあらむ。されば浮生にのぞみて、無常をかへりみるに、おいも程なく、死もすみやかなり、駒のあしいそがはしく、ひつじのあゆみあはたゞしければ、しばしともいひあえず、すぎやすきかげにさそはれて、わらはがたちの、とをざかりゆくもなごりおしけれども、ち

(一)羅刹。獄卒。
(二)泥梨。地獄。
(三)閻浮。具には閻浮提。須彌山に南に位する世界、即ち此の娑婆世界。

のわづらひは、心ひとつよりおこれるゆへに、世をすつといふはたゞこゝろをすつるなり。心にだにもめを見せずして、あやにくなる、おもひをとりたてねば、世にもさしたる事なく、名利もいたづら物になりぬ。かくてのぞみたえなむのちの身は、いづくにいかにと、さすらふとも、なにのわづらひかあらん。ひとへに世をもはなれず、又世にも着せず、そのこゝろを雲にし、その心を水にせんは、中々(一)大隱のあとをふにてこそあらめ。たゞし、これはかしこからむ人の、ふるまひみつべきわざなり。にぶきものは、さだめてあしかりなむ。縁にあはゞ、いかにも心おさめがたき事おほかるべし。屠邊のきさや、麻中のよもぎ、好惡なににかよるやといへば、さすが世ばなれたらんすまゐは、おのづから、あはれ、すすむたよりも、あるべきぞかし。それなをとげがたくしては、たちかへり、日夕に營々として衣食の獄につながれ、遠近にわしりをふて、名利のあなに墮す。ましてかへりみる所もなからむ。身のおちつかん行すゑは、おもひまうけたりや。かの(二)古德のことばに、「蕩逸昏迷にして口腹を營む、死去り死去りて灰塵となる、生れ之き生れ之きて咲て又哭、東に打たれ西に打たる總て是の由なり」とい

(一)大隱。王康琚曰く、小隱は陵藪に隱れ、大隱は朝市に隱る。

(二)古德。弘法大師を指す。下に引ける師の文は、性靈集に出づる者也。

かしめかなしむらん。げにことはりにもすぎたり。されどもはぢなく心のかさなきものは、ほど〳〵につけて、それがしの家人などいふを、かへりていみじき名聞にして、たま〳〵うへなきみちにいる、佛の御子をば非人なりとおとしめ、身をいたづらになしぬともどく。これをかしきゑいさまなり。いざしらず、たれをか非人といはん。はぢがましさ世に、觸ればふをぞ、あないたづらとはみる。あはれわづかなる名利のために、はかりなく心ぐるしからんよりは、ひたぶるに、たゞ世をすてねかし。さてぞ思ふ事もあるまじかんめる。つたなからん人のもどきをば、なじかすこしもいたみとせむ。そしるも、そしらるゝも、ともにつゐには、すてゝゆく身の、かばねのうへにはおとしむる。きずものこらばのこれ、それをはゞかる心こそ、かへりて後世のはぢとはなるめれば、すてぬはすつるにてありけるを、あたら身ぞかし。のちの世も、はた、たのもしからんにやはしからん。いかにもすてゝこその、ひとことばは、よくきゝすぐしがたくこそおぼゆれ。たゞこの、すつといふ文字が、まことのみちの、のりにてはあるを、人ごとにまなびかねて、やすかるべき世にくるしみあひたり。せんずるところ、よろづ

（一）癡案。愚かなる思案。

（二）轉輪王。三十二相を備ふる十善の王。

（三）天仙。天人と仙人。

のつかるゝ事をわすれたり。このうへのくるしみは、ふでのしたにもいかゞしるしあへん。すべてはさもかず〳〵に、うたてう心に物のかなはぬ世ぞかし。あるはあるにつけてうれへ、なきにはなきにつけてうれふ。もとむるよりうるにいたるまで、わずらひならずといふ事なし。このおほくのわづらひにかへて、いさゝかの樂をおもふ、まことに小利大損なり。(一)癡案これ、わらひつべし。いはんやなきはうれへのかろむにてこそあれ、あるがまことの樂にてはなき物を、つや〳〵無利の勤苦なり。狂醉それにくまざらんや。たとへばをもきをになひてかたをかゆる、くるしみなをのこらざるにあらず。さらに、名利の重擔をなげすてずよりは、いかでか、うれへなき事をえん。さても、なにほどの名利なればか、又さのみかくまでくるしさにたへてはもとむべからん。たゞゆへもなく、ひたおもむきに、まよへるなるべし。この小國邊土にうまれては、たとひ帝たらんすらよろこぶべきにあたらず。(二)轉輪王にならぶれば、なをし乞丐人のごとしといへり。ましてかれにつかふるつらにだにも、かずまへらるべき、身の程ならぬに、われはときそくばめるも、むげにあなづらはしき心なり。(三)天仙のつまはじきして、はづ

(一)原憲。字は子思、孔子の門人。百結とて澤山つぎ合せたる衣服に甘じたる人也。

さまるゝ方あれば、おほくのくるしみをわすれたり。たまたま病死の身ををかさん事をおもひしるかとすれば、又衣食のいのちをさゝへん、たよりをもとむる程に涼燠をむかへては身のうへのころもの、おりにしたがはぬをなげき。朝夕ををふては口のうちの食の、時にかなはぬをかなしむまゝに、はかりなき、紡績の艱辛をくわへ、稼穡の劬勞をそへて、いとゞおほきなるくるしみとなりぬ。たゞ雲をき風をすきても、あられねば、一生つゐに、世わたるみちに、たふれふしなんこそあぢきなけれ。せめてうゑをやすめ、さむさをやむるまでならば、(一)原憲がもゝつゞり、顏氏がひとひさご、もとめんもやすく、さてもたりぬべきを、このうへになを過分をこのむは、みな要なき心のあやにくなり。そのおこりを思へば貪瞋したがふを愛し、そむくをいかり、癡慢のをろかなる心、たかくあがりたちぬるより、やう／＼むねのうちわづらはしくして、そのおもひやすめがたし。ねんじかねて心のゆくにまかすれば、つゐに名利のそのにはしりいでゝ、はやおほきなるなげきのはしにつきぬ。いまはわづらひのほのを、けすべからざれば、朝につかへて名をのぞみ、市にわしりて、利をもとめ、心のせむるにまかせて、身

がはぬ、馬のほねに、人のかわをきせたらんぞかし。これをえさらぬほだしとして、いかにぞのちの世のうきめをみんとするや。よく思ひつゞけて。心すみやかにおどろくべし。

二には苦を樂とおもふ。これ又きはめてつたなし。(一)「三界は安きこと無く、猶し火宅の如し」といへば、いづこも心とりのべて、ゆるらかなるべき所にはあらねどもことに人間は、みのまへなれば、みるに、おもひのどめがたき事おほし。その憂苦枝葉しげかるべけれども、たゞいひもてゆけば、身心を根元としておこれり。身に(二)生老病死あり、いづれかくるしみにあらざる。心に貪瞋癡慢あり。こと〴〵くわずらひをなせり。その、身のくるしみのなかに、生苦はしゝむらをけづるがごとし。いたみなけども、いはけなくして物いはざれば。父母はたゞよろこびていだきもてあそぶ。死苦はつぎめをたつににたり。かなしみさけめども、たましゐさりてかたらざれば、妻子はなげゝども、さらにかくまでともしらず。病苦はいたましけれども、しなぬ事もあればともおもふに、なげきとせず。老苦はすさまじけれども、いのちのながきにかへて、よろこびとす。たゞすこしもなく

(一)法華經の文。三界。欲界、色界、無色界。

(二)生老病死。是を四苦と云ふ。

(一)先賢。九相詩の作者を指す。下に引けるは其の中の句なり。

(二)善導。支那唐代の人、念佛弘通の祖なり。或は光明大師と稱す。下に引けるは、師の著法事讃の文也。

(三)三途。地獄、餓鬼、畜生の三惡道。

さぎはなをおほひてのみさる。うたて、いつしかなるこゝろがはりかな。戀んなみだのいろは、おもひをく心のみしほれて、野ばらの露ほども、こけのしたまでは、かゝらぬなさけなりけりと。かばねもし、たもとにすがりて、なきをらば、なつかしかりしなごりともなく、いかゞ身のけもよだちて、をそろしからむ。(一)先賢の「紅紛翠黛は、たゞうすきかはをいろどり、男女の婬樂はたがひにくさきかばねをいだく」といひけんも、いまこそ思あはすべけれ。いきても、しにてもおなじ不淨なるに、などかなましきを愛し、かれたるをにくむ。樵夫のみちをゆくとて、されたるかうべをみて、いへにゆきてをのがめの、かしらをさぐりて、すこしもたがはずと、ひとりごちけるが、ふつにおもひすてにけるは、うらやましき心もちなり。あはれなどわれも人も、かゝる心のおこらざるらん。さしも、ほとけの、「汝等臭き屍を抱きて臥すこと勿れ、種々の不淨を假に人と名く」。とはおぢしめ給へるに、せめては我身ばかりをこそ、かゝへもふさめ、あたりさびしとなげくまでは、あまりうたてきまよひざまなり。されば(二)善導大師は、「此人の皮に髑骨を裹むに狂はされて、(三)三途に自ら入る爭ふべからず」との給へり。げにた

(一)四支。兩手と兩足。
(二)五躰。四支と頭。

ろどりなしぬれば、こはわれかの心あがりに、うちをくかがみもなごりをしくおもふ。ましてよその人めは、ひたまよひなり。このあやまり害をなす事ふかし。いかがしておぼらかされぬ事あらん。つかのうちに、すまぬばかりぞ、人みなさきつねの媚をなせり。野外にをかざる程、かばねよく人の心をとらかす。なんぞかりのまゆずみをみて、まことのしゝむらをわすれたる。わづかにうちむかふいろに、めをとゞめて皮ひとへのしたをおもひもやらぬ。心のいたりの、みじかさこそをろかなれ。心にくきところあらば、たゞ野ばらにゆきてしにかばねのふせるを見よ。(一)四支肪脹して、虫うみしるをはみてむぐめき、(二)五體爛壞して、烏はらわたをつかみてあらそふ。これなんさながらありのまゝなるすがたなり。愛着の心なをいかゞおもふ。てをもふれ、身にも、ちかづけなんや。むしをもそねみからすをもねたみなんや。さしもはなやかににほひふかゝりしも、さらに、をのが、いろかにはあらざりけり。いまはたとひ仙方のゆき、粉をほどこすとも、この、あおみつしみたるいろをば、うづみがたし。又妓爐のけふり、薫をゆづるとも、このくさく、けがらはしきかは、まがふべからず。たゞみるものはめをふ

にこれを思へば心驚悲嘆(しんきやうひたん)にたえず。はやく、これをこしらへて、父子相迎(さうかう)せしめんとおもふ。これがために(一)魔郷(まきやう)に、とゞこほるまよひをいさめて、佛國(ぶつこく)をこふる心をすゝめん。そのまよひ百端(ひやくたん)なりといへども、ことにをろかなるは(二)四倒(したう)にあり。

一(いち)にはきはめて不淨(ふじやう)なる身をきよしとおもふ。これはなはだをろかなり。しらんとおもはゞ、をのが身のうちをさぐり見よ。ながくみじかきほねふし〴〵をつぎあつめたるに、ふとくほそきすぢ、そのつぎめつぎめを、くさりあやつりて、それに、あかきしゝむらをまつひ、うへにしろきかはをはれり。かうべには、なづきをいれていたゞき、はらには、はらわたをつゝみてかかへたり。いづくかひとつとして、きよき所(ところ)ある。たとひ海水をかたふけてあらふとも、いかでか清潔(せいけつ)なる事をえむ。とりたてゝいはねばこそあれ、おもひとげば、さもわれながらきたなき身を、せめてもまよへるあまりに、ことさらきよき物とのみおもひしめて、いとをのれなりなる、けがらはしさをだにも心うつくしう、わすれはてたるに、いとゞ青黛(せいたい)まゆをかき、紅紛(こうふん)おもてをかざりて、つや〴〵もとのおもかげもなく、い

(九)姓。名。我が身の佛の姓なることも、佛のみ子たることも忘れたるを云ふ。
(一〇)父。母。佛を父に、蓮を母に譬ふ。
(一一)名利。名聞と利養。
(一二)安養。極樂。
(一三)穢土。沙婆世界。
(一四)五欲。色聲香味觸の境界に執着する欲念。
(一五)淨刹。淨土。
(一六)四德。淨樂我常。本文の後に詳說す。
(一七)倒見。轉倒せる見解、本文具さに四轉倒を說く。
(一)魔郷。娑婆三界。
(二)四倒。具さには四轉倒と云ひ、先の四德に相對し、不淨、苦、無常、無我を轉倒して淨樂我常なりと執するを云ふ。故に、淨轉倒、樂轉倒、我轉倒、常轉倒と名づく。

父子相迎　上

向阿上人撰

夫(一)四生の、群品いまだいやしとせず。みなをのづから(二)佛乘の性をうけたり。(三)十號の尊位なんぞのぞまざらん。たれかもとより(四)法王の御子にあらざるや。しかあれどもわれら、ひとたび(五)自家をまどひいでゝ、ながく(六)他鄉にとらはれてしより、このかた、(七)魔王譜代のやつことして、(八)六道縱橫にかりつかひにしかば、身つたなくして(九)姓をも名をもいはず、心をろかにして(一〇)父をも母をもおもはずなりぬ。あやまて(一一)名利のひとやを迷境のなかにかまへ、恩愛のきづなを妄緣のうへにむすびぬるのちは、(一二)安養を本國ときけどもゆめ〳〵かへらん心もなく、彌陀を慈父といへども、つや〳〵なつかしきおもひもなし。たゞ(一三)穢土の(一四)五欲をまたなき物にして、(一五)淨刹の(一六)四德を、ないがしろにせり。これひとへに(一七)倒見めをくるめかし、着想こゝろをゑはすによりてなり。しづか

(一)四生。胎生、卵生、濕生、化生の四にして、生るゝ狀態の總體なり、生ある者は必ず此の何れかに屬す。故に、生きとしいける者と云ふ意なり。
(二)佛乘の性。佛と成る可き種。
(三)十號の尊位。十種の德號を具備せる佛の位。曰く十種とは、如來、應供、正偏知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊、これ也。
(四)法王。法に自在なるが故に佛を法王と稱す。
(五)自家。極樂淨土。
(六)他鄉。六道。
(七)魔王。欲界第六天王、善法を障へて修道の礙を爲す。
(八)六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

か、かゝる、おほけなき、たのみをかけん。げに思ひとけば悲喜も、こもごもにながれ。いひつゞくれば佛恩も、いまさらにこそ、おぼゆれ。たゞしかゝる悲願に、あまへて、心ざしゆるらかにはあるべからず。くらゐを上品にあてがひて、心行を急にすべきものなり。

かやうに群疑はしおほくして、數篇、事を、つくさるゝ程に、東窓あかつきいたりて、西戸に月のこれり。さらば、やうやうまかりいで侍りなん。いと興にのりぬべき、みちなりといはるれば、面々にげにも、さのみは、いかゞと、なごりおほくて、やみぬ。凡はからざる兩度聞法の得益は、これしかしながら(一)二尊遣迎の方便なり。すでに化風あふぎて、たびかさなりぬ。いまは蒙霧はれて、のこる事なし。されども、うらむらくは、日にそへて老の心、ほれもてゆけば、いかにも程へんまゝに、わすられぬべし。これがために又かの數篇をあつめてこの兩卷にしるす。よろしく(二)先聞にそへて、つねに一具とせむなり。

西要鈔 終

(一)二尊遣迎。釋迦の發遣と彌陀の來迎、此の意は本鈔の先に述ぶる所の如し。

(二)先聞。本鈔の先に編入せる歸命本願鈔を指す。

(一)終焉。命終る時。
(二)順次。現在の壽命の終り次第に淨土に往生するを順次生往と云ふ。
(三)曠劫。極めて永き間、永劫と云ふに同じ。

かならず往生し侍るべし。つらつら事の心をおもふに、彌陀、ものをあはれむ心ざしねんごろにませば、本願人をすくふ心ばせ又こまやかなり。機の上下をもらさじと、くらゐに九品を、わかたれたるのみならず、佛智をうたがふとがありて九品に入がたきものをば、邊地を、まうけてむかへ、極樂の執心よはくして、邊地までも、をよばぬものをば、懈慢をかまへてみちびかる。かやうに、もるゝものはあらせじと、すきまなき御方便なれば、さすが、なにとすとも、このうちに、はづるゝ事はあるまじきを、なを又それまでも、かなはずして、もし穢土に、とゞまる衆生も、あらば、とくしてほいを、とげさせんとまで、ちかはれたる、御慈悲のいたりのふかきこそ、なのめならずおぼゆれ。しかあれば、いまの世に念佛申しあひたる人は、みな、いづかたに、つけても、流轉ひさしかるまじき機となりぬるなり。さしも生死はるばるとして、出離いつとしも、なかりし身の、わづかに一念の縁をきざして、三生に、のぞみをとげんすら、なほ過分の利益なるべきに、あまさへ來迎を(一)終焉のゆふべにまち、往生を(二)順次のあしたに期する。これ(三)曠劫の大慶中々いふにも、すぎたり。まことに願力のふしぎにあらずば、いかで

又問云、懈慢國とかや、いふなるは、いづこに侍る所ぞ。いかなるものの、かしこへは、うまるゝにかあらん。

答云。懈慢は(一)安養のほか、娑婆にちかき國なり。これは往生をせばやなどは、いひながら、心ちも、よはよはと、うきて、佛に、つきても、行につきても、ひしと、ひとかたに、思ひかためたるけもなきものが、まづこゝまで、うまれきて、のち、そのいのちをはれば、かならず極樂へつたふ所なり。これ程、なをざりなる心ざしだにも、なを、かくちかぢかと、ゆきよりぬるぞかし。さすがかまへてと、とりたてねがひもとめん人の、なじかは、とゞこほるみち侍らんと思へば、いとどすゝましくてとあれば、

又問て云。いさゝか極樂に心をかけ、念佛をくちにふるゝよしなるものゝ、安心もかけ、起行も、とげずして、なほ邊地懈慢にも、をよばざらんは、つゐにさて、なにとなり侍らんずるぞや。

答云。さるものは、その(二)係念をはたしとげさせんと、ちかはれたる(三)本願があれば、たとひ、つぎの生にこそ、かなはずとも、結縁くちずして、(四)三生には

(一)安養。極樂に同じ。

(二)係念。生れむと欲する心念を淨土に係くるの意。

(三)本願。法藏四十八願中、第廿、三生果遂の願を指す。即ち「もしわれ佛をえたらむに十方の衆生、わが名號を聞きて、念を我が國に係けて諸の德本を植ゑて至心に廻向して我が國に生ぜむと欲せむに、果遂せずば正覺をとらじ」(無量壽經)と是なり。

(四)三生。現在に於て彌陀の名號を聞きおもひを西方に係け、諸の德本を植ゑて緣を結び(第一生)。次の生に於て、至心に念佛し廻向して(第二生)。次の生に正しく淨土に往生する(第三生)の意なり。

答云。邊地は極樂のうち、九品のほかの、かたほとりなり。かしこに、うまるる心もちは、かゝる罪業ふかき身は、をのづから、つみに、てきたふほど功徳をも、おほく、つとめえたらんはさらなり。わづかなる一念十念にて往生せん事、いかに本願いみじくとも、よくかたかるべしと。佛力をかろしめ、うたがへるもの、この邊地にうまれて、五百歳はなのなかに、はらまれて、見佛聞法せずとみえたり。おほよそ、事のいはれは、佛智不思議にして、ちいさき功徳をも大になし。をもき罪業をも、かろくなす功あらば、重罪を一念に滅して、往生を九品にとげん事、あやしむべきにあらず。されば古人の、まよへる者、うたがひを、そのあひだにをく。まづ佛、よくしたまはざらんやと、いへるもこのゆへなり。さるを、をろかなる心にて、佛力をかろしめ、たてまつるとが、つねにすぎたり。むくひ、さだめて惡道にこそ、あるべきに、大悲世にこえて、なを邊地までも、ゆるさるらん佛恩まめやかにありがたし。まして、ひたすら本願を信じたらん身のなにごとに、もらされ、たてまつりなんと、いとゞたのもしくおぼえてと、いはるれば、

方々より、まほりてをくる、この三のちからを、あはせて、念佛のひとつを、たすくるゆへに、極樂に、うまるゝ事もとも、やすし。されば、(一)孤山の釋に、「大海を渡るが如き、既に巨航を得、仍て良導あり。加ふるに便風を以てすれば、必ずよく速に彼岸に到る」といへり。たとへば、彌陀本願をたてゝ、しづめるをすくふはふねのごとし。釋迦慈悲をもて、まよへるを、みちびきやるは、わたしもりにおなじ。諸佛(二)護念して淨土へ、をくりとづくるは、風のたよりをえたるににたり。いまは南無阿彌陀佛のこゑを、ほにあげて、生死の、うみを、わたらんことゝさらに逗留あるべからず。かくのごとく諸佛、はからひあはせて、よろづの事、そなはりたる緣に、あひながら、なをあやぶみて穢土に、とどまらんは、げに、たれがとがぞ。さらに、うらみどころこそ、侍るまじけれ。せめても、(三)つみのくるをしにそ、しゐても、うたがはしかるらん。いとおしくこそと、かなしみくどき給ふ。

又、おとこのこゑして問て云。疑心あるは邊地に、うまるとかや、うけたまはる。いかなる事にて侍るぞや。

(一)孤山。宋代の智圓法師、天台の學匠にして淨土に歸依し、淨行を勸修す。本鈔に引けるは其の著『西資抄』中の文也。

(二)護念。思をかけて守護すること

(三)つみのくるをしにぞ。罪の報ひに依て心の狂ひしものか、との意。

ことを憂ひて、而も往生を疑ふ者は、亦惑ひならずや」といへり。げに、このいはれをもて、かまへて、決定と、おもひふせ給へ。いはんや彌陀の本願をときあらはす事は、たゞ釋尊ひとりの御ことばにあらず。十方(一)恒沙の諸佛もことごとく證人にたちて、いま念佛すれば往生すといふことは、まことなり。うたがふべからずと、同時にしたをのべて。同音に證誠し給ひき。さしも、いつはりおほき人のことばだにも、あまたになれば、たのまるゝ事にてこそあれ。まして佛語、虚妄ならねば、たとひ釋迦一佛の說ならんすら、かろしむべきにあらざるを、諸佛さへ、又一同にまことのことばをのべ給ひけん。その會の儀式、みる心ちして、身のけもよだち、たうとくこそ、おぼゆれ。これを、きゝながら、いかゞさは、いさゝかの不審をも、のこし侍るべき。はやく(二)三千の長舌に往生のうたがひをすてゝ、(三)六字の口稱に決定の信を、おこし給へ。そのうへ、かやうに諸佛こぞりて、一大事と、し給ふ稱名なれば、往生に他力を、くはへらるゝ事、又ひとつにあらず。いはゆる彌陀の本願のちから、かしこより、よばひて、むかへ、釋迦の勸讃の、ちから、こゝより、いだしたてゝつかはし、諸佛の證誠のちから

(一)恒沙。印度の恒河と稱する大川の中に在る沙に譬とへて數の多きことを表す。

(二)三千の長舌。三千大千世界の諸佛等しく廣長の御舌をのべて、念佛往生の誤りならざることを證明す。具には阿彌陀經に說くが如し。蓋し、舌をのぶる事は證明の方法たり。

(三)六字の口稱。口に稱ふ可き南無阿彌陀佛。

さしく佛のの給ひたる御ことばなれば、つゆも、そのこと、あるまじき事ぞといふ、いはれが、心えやすくて、しかも、思ひえつべき、ことはりにては侍るなり。このひとはしをだにも、ひしと信じ給ひたらば、よろづのうたがひもはれて、往生の安心、さらに、ふそく侍らじと。いはるれば、

又云。まことにこれは、われらがぶんに、かなひたる心もちにて侍り。たゞし、もとより佛の(一)妄語し給ふべしとは存ぜねども、なを往生は(二)一定とも、おぼえ侍らぬといへば、

答云。などやさは、おもひ給ふ。佛語が、まことなるべからんには、往生の不定なるべきいひはなき物を。盲者は明眼の、みちびくに、したがふがごとく。凡夫は、まよひ、ふかくして因果のことはりにくらければ、たゞ、さとれる佛の御をしへによりてこそ、つみつくれば地獄におつなんどいふことはりをも、信じあひたるに、いかなれば念佛申て往生すと、とかれたるのみが、とりわき、さしも、うたがはしき事にても侍るらん。されば(三)揚傑がことばに、「それ惡業を造りて(四)惡趣に入り、彌陀を念じて極樂に生る、二の者みな佛言なり、世人地獄に墮む

(一)妄語。虚僞なる言語。

(二)一定。決定と云ふに同じく、必ずと云ふ意。

(三)揚傑。宋の官人にして深く佛法を信じ淨土を欣ひし人。本鈔に引ける氏の文は十疑論の序に在るもの也

(四)惡趣。三惡趣三途と云ふに同じく、地獄、餓鬼、畜生。

れたる本願なれば、あひなたのみなる事は、よも侍らじ。この世の事も一大事とおもふは、さこそあれ。まことしき人にかねてよく、やくそくしをきぬれば、おもひまうけて、その期は中々心やすきやうに、病者は、いかに苦痛もあり狂亂もせよ、佛はたしかに、日ごろのちぎりを、おぼしわするまじければ、もとのちかひあやまらず、さだめて來迎し給ふべし。來迎ちかづかばおのづから、くるしみもかろみ、心もたゞしくなりて、十念のぞみのごとく、往生さうゐあるべからず。されば佛願あやまりなからんに、なじか、をはりを、あやぶまん。これぞげに、つかのうへにも、かけぬべきと、心やすげに、の給ひしらす。

又男のこゑして、わが身は、性かたくなに、心をろかにして、物のいはれなんど、こまやかに、きゝわくまでも侍らねば、本願いしいしの事も、なを、たちいりたるやうにて、中々是非に、まよひぬべく侍り。いかでやすやすと心えられて往生のたのもしかりぬべき事、ひとはし、うけ給はりとゞめて、涯分の安心にし侍らんといへば、

答云。その事に侍り。さやうの人の御ためは、たゞ念佛申せば往生すとは、ま

(一)死苦。莊嚴論に曰く、もし人終りに臨めば、喘氣あらく出で喉舌乾きたゞれて水を下すこと能はず、言語了かならず、筋脈斷絶して風刀形を俯き、機關凝止して動轉すること能はず、擧體酸痛すること針を刺さるゝが如しと。

(二)四魔。五蘊魔、煩惱魔、死魔、天魔なり。

んは、さだめて相違し侍りなん。なべて人の最後には病苦のかなしさのみならず(一)死苦さへ、くはゝりて、たへがたきうへに、つくりをきたる罪業は、めん〳〵に、きをひおこりて、まづわが報をむくへとせめ、われまづ悪道へ、ひかとあんらそふ。(二)四魔又ちからをおこして、かまへて三途に、おとさんと、さまたぐれば、一かたならぬさはりに、病者正念を、うしなひて、いよ〳〵顛倒をます。この時にあたりては、いかにすとも、つや〳〵、をのが心もをよぶまじく、人のちからも、かなふまじき事なり。しかあれども阿彌陀ほとけ、かゝるおりふしを御覽じたすけんとて、かならず聖衆とともに來迎せんと、ちかはれてしゆへに、臨終、期いたれば、かひ〳〵しく誓約時をたがへず、そのまへに現じ、慈悲をもてくはへたすけ給へば、心さらにみだるることなく、佛の威力つよければ、罪業のちからにも、あらそひかちて、四魔さかひをへだて、三途、とぼそをとづる物なり。されば、臨終正念はひとへに聖衆の來迎のちからにより、聖衆來迎は又平生の念佛の功に、あらんずる事と心をえて、いか程も、たゞいまの念佛を、くり返しかならずむかへ給へと、佛に、きこえをき給へ。さしもおほな〳〵、たてまつら

（一）來迎の本願。法藏四十八願の中の第十九願。曰く。「もし我れ佛を得たらんに、十方の衆生、菩提心を發し諸の功德を修し至心に發願して我が國に生ぜむと欲せむに、壽終の時に臨みて、もし大衆のために圍繞せられて其の人の前に現ぜずば正覺をとらじ」（無量壽經）

ものをのみ攝取すといへば、われら、すでに名をとなふ。ひかりさだめててらすらん。名をとなへて無上の功德をうれば、淨土の業ふそくあるべからず。ひかりにふれて無量の罪惡を滅すれば、往生のみち、なにのさはりかあらん。まことに光明名號のちからにあらずば、いかでか滅罪生善の、すみやかなる事をえん。これ、ひとへに大慈慇懃の方便、他力本願の御恩なり。しづかにおもへば、よろこびにたへたり。などか身をくだきてもむくひん心なきや。

又おとこのこゑにて云。すべて人の臨終ほどに、物の大事なることそ侍らね。あるひは正念もなくなりて一向に、ほれたるもあり。あるひは苦痛にせめられて萬事をわすれたるもあり。かゝる、ありさまどもを見れば、そゞろに身の上も、おそろしくて、もし最後の十念も、かなはでばし、をはらばいかゞせん。聖衆の來迎も、あらましばかりにても、やみなんと、きもつぶらはしく侍るといへば、

答云。この御不審は臨終の早晩によりて引接の有無はさだまらんずる事と思ひ給へるよな。いまだ（一）來迎の本願をたてられし、おもむきをこそ心え給はざりけれ。おほかに臨終正念を、をのがちからにて、はげみえんずることゝ、おもへら

(一)三垢、三毒。何れも貪欲、瞋恚愚癡の三つの事。其れ等の三つの浄心を汚がすの謂より名けて三垢と云ひ、善根を害するの故に名けて三毒と云ふ。

三垢消滅。法藏菩薩四十八佛中第三十三身意柔軟の願は即ち是れが爲にして。曰く「もしわれ佛を得たらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、わが光明を蒙りて其の身に觸れむ者は、身心柔軟にして人天に超過せむ、もし爾らずば正覺をとらじ」(無量壽經)此の願成就の文に曰く。斯の光に遇はむもの、三垢消滅し、身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ぜむ云云(同經)と、即ち今は是れに據る。

まひときは、人に手をひかれたらんやうにて、みちのほそさも、いとゞ心ぐるしからず思ひわたりぬ。されば この光明の、かくまでたうとき事にて侍りけるよ。なを又いかなる利益かとおくゆかしくおぼゆるは、(一)三垢消滅すとかやいふなる事をちとみみにふれてしやうにてといへば、

聖のいはく。さる事侍り。この攝取の光明に、てらさるゝものは、貪瞋癡の三垢こと〴〵く消滅すととけり。そのいはれは、たとへば日のひかりは火の玉よりいでたれば、物をかはかし、月のひかりは水の玉よりいでたれば、物をうるほす用あるがごとく。いまこの光明は、佛の無貪、無瞋、無癡の三善根より、いでたれば、衆生の貪欲、瞋恚、愚癡の三毒をけす徳あり。又いかにふる雪も、かたへの空に日かげたえぬ程は、かつ、うちきえて、つもりかねたるやうに、妄念しばしば、しげけれども、ひかり不斷にてらせば、罪障かつ〴〵滅して、さらにしばしも、つもる事なし。おほよそ、これらの利益は、みな阿彌陀佛、造惡の凡夫をあはれみて、そのつみを滅して、たまはんがために、願をたて、行をおこして、かゝる不思議の光を、え給へるゆへなり。しかるに、この光明は、たゞし念佛の

(一)二河の譬。本鈔の上巻に詳説せり。
(二)不捨。攝取不捨。

となん、きゝつたへ侍る。それにてげにも、よく心えられたり。たとへば光明の、みてをのべて、行者の身をかゝへもて、ながくすて給はぬいはれなるべし。これも又例の御慈悲のふかさは、こまやかにこそ、おもひかまへられたれ。すでに平生のあひだは、本願をもて、かならず、うまれよと、まほり。臨終の時はみづから、きたりて、むかへとり給ふうへは、かた〳〵往生のみちの、あやうかるべきにあらねども、さすがなを、こなたのきしにあるを、心やすからずと見給ひて、はるかに光のなかに、さしこめて、時のまも、てをはなたじと、し給ふなり。されば一たび光明のなかに、おさめとられなんに、ながく、すてらるゝ事はあるまじければ、往生こそ、いとゞうちかためておぼゆれ。いけらむ程は光のなかにこもりゐて、いのちをはらば花のうへにうつろひなんず。すべて平生より臨終まで、心ぐるしからぬ、みちづたひなり。さればかまへて、つねに光明のなかにある心ちをして、ま心に念佛し給ひあへ。

又云。物はいか程もこまやかにこそ、きくべかりけれ。さしも、あやうげなりつる、(一)二河のたとへのおもひやりも、この(二)不捨の光の、たのもしさには、い

るべし。騏驥が良藥に、いばえしは、これしると、しらざるとなり。いつか、やせたるを見て、いきをひの駿なるを、いやしみし。凡愚の佳名をとなふるも、又しると、しらざるとなり。なじか、やすきによりて德のひでたるをかろしめん。いとをろかなりやと、色代もなくはづかしめ、きこえらる。

又さきの老らかなりつる女のをとにて、念佛申ものをば、阿彌陀ほとけの、ひかりをもて、攝取して、すて給はぬとかや、うけ給はる。その(一)「攝取不捨」とは、いかなる、いはれにてか侍る。物のひしとも心をえぬは、たうとさも、いますこし、をろそかにてといへば、

答云。この法門は、經釋のなかにも、いみじき事に申て侍り。まことに、よく、きこしめしゝり給ふべし。まづ攝取不捨とは、阿彌陀佛、(二)光明をもて、はるかに念佛のものをてらして、ひかりの中に、をさめとりて、すて給はずといふ事なり。ちかごろ、あるひじり、これをいぶかしき事にして、いかなる、いひならんと、佛にいのり申たりければ、ゆめのうちに本尊みてをのべて、かのひじりのうでをとらへて、やゝしばしもて攝取不捨とはかゝるをいふなりと、しめされたりける

(一)攝取不捨。此の語は觀無量壽經の中に在り。具には「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」意は本文に詳也。

(二)光明。法藏四十八願中第十二は光明無量の願なり。日く「もしわれ佛を得たらむに、光明よく限量ありてしも百千億那由他諸佛の國を照さゞるに至らば、正覺をとらじ「無量壽經」と。彌陀如來は此の願に報ひて光明無量の德を成就す。其の願心より放なつ光を心光と稱し、身の相好より放つ光を身光と稱す。

（一）無始。始めもわかぬ已前。
（二）六賊。色、聲、香、味、觸、法。是等が善根功德を掠むるの故に六賊と名づく。或は六淨心を汚す謂より塵とも稱す。
（三）超世の本願。三世の諸佛の其れにも超えて勝れたる本願の意。
（四）六字。南無阿彌陀佛。

とに、無上の名號をばみだりにかろしめ、無下の諸善をばかへりてをもくする、これ返す〳〵僻案なり。すでに土壤をつみて泰山のたかき事をなせり。はやく磧礫をすて〳〵王淵のふかきをうかがへと思ふ。さても（一）無始よりこのかた、（二）六賊のために、かすめられて、一善をだにも、たくはへざりつる身の、いかでかゝる（三）超世の本願にあひて、大善の名號をきゝえつらん。これ、しかしながら大慈大悲の善巧、難酬難謝の佛恩なり。たとひ、ほねをくだきても、たやすく報じつくさんや。すべからく、身のたへん程となへて、むくひ、たてまつるべし。それ又、いかに、いみじくとも、たもちがたくば、いかゞせましに、萬善をつかねて、（四）六字につゞめたれば。名號は稱しやすくして、功德ははかりがたし。されば、無上の寶聚もとめざるに、おのづからえたり。往生の業因たやすくして、又たりぬ。あはれ、雜善の、功すくなくして、行じがたきには、にぬ物かな。をろかなる、われらがためには、げに、かくこそ、たくみ給ふべけれ。これまでも佛の御心ざしの、せめてなれば、おぼしのこす事もなきなりけりと、かたじけなくこそ侍るを、となふるが、事やすきによりて、おもひかろめんは、むげに物のこゝろをえぬな

さかひに、みちびかんための方便なり。されば、まづ菩薩かたじけなく罪惡の衆生にかはりて、身命をおしまず難行苦行し、(一)萬善まどかにつとめもて、つゐに佛になり給ひにしのち、あらゆる(二)因行果德を、こと〴〵く名號の中に、おさめて、のこりなく衆生にゆづり給ひぬ。これによりて、その名號を、となふれば、おさまるところの功德、みな衆生の、くちのうちにながれいりて、さながら、おのが物となるゆゑに、念佛の行者の功德は、またく彌陀と、ひとしくして、ことなることなし。まことに佛、かゝる、はかりごとをめぐらし給はずば、いかでか、おろかなるわれら、たやすく大善をえんや。抑(三)佛果圓滿の御身には、萬德ひとつもかけず、これをつかねたる名號なれば、又いづれの善根か、おさまらざらむ。一〻の諸善は、たゞわづかに、その中の小分にこそ、あたりたれ。念佛に、をよばん事、さらに、はしたてゝも、かなひがたし。しかれば名號は一念なれども、滅罪生善の功おほきに、(四)諸行は、ちからをつくせども、除障獲益の用すくなし。かるがゆへに阿彌陀經には餘行をば少善根と、おとしめて、かの國にうまれがたしとゝき、名號をば大善根とほめて、往生する事、やすしといへり。さるを人ご

(一)萬善。ありとあらゆる一切の善根。

(二)因行果德。法藏菩薩初發心より成佛に至るまでの永き間の難行苦行、六度萬行せられしに報ひて得られたる總ての功德。

(三)佛果圓滿。法報應の三身圓かなる佛體。

(四)諸行。餘行と云ふに同じく念佛以外の總ての修行を云ふ。

いきに、つれたる念佛ならば、數返なじか、わづらはん。さて、つねに、いきとゞまらば、念佛とともに、をはりなんず。げにもなにゝよりてか後世にうつらん事を、おそれん。かた〳〵心やすき、ずゞにこそあんめれ。これにて、かまへて申ならふべきをや。

又はじめ、さるべかしかりつる男の聲にて問て云。凡本願といふかたは、なににも、すぎて、たのもしく侍れども、などやらん南無阿彌陀佛と申ばかりは、餘の行よりも、むげに、かろがろしくて、いく程の功德なるべしとも、おぼえぬは、さだめて、おもひ、ひがめたらんか。くはしく恩誨を、たれ給へ。よろしく信心をまさん。

答云。さらなり。彌陀の名號をば(一)無量壽經には「即是具足無上功德」とときて、これよりは、さらにかみなしとほめ。(二)稱讚淨土經には「無量無邊、不可思議功德」とのべて、はかりもなく、ほとりもなしといへり。いまこの名號の、ひとり大善なる事はもと、(三)法藏菩薩の(四)五劫思惟の、たくみ、彌陀如來の本願成就の、ちからよりおこりて、もはら(五)福薄因疎のともがらを、(六)大乘善根の、

(一)無量壽經。淨土三部經と稱する中の第一部にして、法藏菩薩の因願果成の始終を說ける經也。
(二)稱讚淨土經。淨土三部經の一なる阿彌陀經の異譯にして、極樂淨土の始終を讚嘆說示せる經也。
(三)法藏菩薩。久遠劫の昔、彌陀佛が世自在王佛御前にて、初めて出家せる時の名。
(四)五劫思惟。法藏菩薩が吾々を救はむが爲に、極めて永き間、其の方法に就きて思案せられし事。
(五)福薄因疎。過去現在の善根少くして、佛に値ひ奉る可き因うすし、との意。
(六)大乘善根の界。勝れたる善根の世界、即ち西方極樂を云ふ。

うちたえ(一)念珠もつ事も、かなはねば、かぎりある數返をば、あしたの程に申はてゝ、このゝちは、わすれず、心にかけんとおもふは、猶そらくなるにて侍るから、

答云。よくぞかくまでも、おもひ給へらるゝ、これは、ねんごろなるにてこそ侍れ。おほかた法然上人は、數返をば、かまへて一日一夜にしはつべき事ぞと、の給ひけるとかや。それも詮は、つねに心を、かけさせん、ためなれば、いまの用意、さらにくるしく侍るまじ。たゞし念珠は念佛の、もよをしにて、もたずば、いかにも、わすられやせむ。しかるに(二)飛錫禪師の釋をみれば、めづらしきずゞこそ侍れ。「世の人多くは水精木槵等をもて數珠とす、吾は則出入の息をもて數珠とす、佛の名號を稱へて之を息に隨ふれば、大なる恃怙あり、安んぞ一息還らずして後世に屬するを懼れむや」といへる。これいと、人の思ひよらぬ心ばせなり。げに水精木槵子などは、手にもたるも、わづらはし、いでいるいきをずゞにして、南無阿彌陀佛と、あえぎゐたらん程に、たくみなる事こそ、あるまじけれ。ねぶらば念佛を、ふくみて、いねなんず。さめば又、つぎてとなふべし。

(一)念珠。珠數、念佛する時に數を爲す具なり。

(二)飛錫禪師。唐土の高僧、本文に引けるものは、師の著、念佛三昧寶王論の文也。

（一）圓悟法師。支那東晋時代の人、廬山の惠遠と稱し淨土三流中第一流の祖たり。本文に引けるは、師の念佛三昧詩序の文也。

（二）機嫌。時と處とを見はからひて、と云ふ意也。

めて、となへだにもきかせたらば、すこしのつみは、きえなんかし。これ、はかりなき事にあらずや。そのうへ、わが身のつみを滅するに、又重々の益あり。（一）圓悟法師の釋に、「自然に玄音の心を叩くを察して、聽くときは則塵累毎に消え、滯情融朗なり」といへる心は、みづから、聲をあげて、となふるこゑ、かへりてわがみゝにいれば、心たゝき、うごかされて、たうとしときく。きけばすなはち罪業もつねに滅し、むせびたる妄念もうちはらはれて、むねもあき、心もゆるくとなりぬと釋するなり。げに稱名はさる物にてこそあんめるを、これまでとなへ心みて、念佛のきひ、しりたる人は、いとまれなり。なによりも、身づからとなへて、みづからきけば、きくにもきえ、となふるにもきえて、一こゑ佛を稱するに、二たびつみを滅すらん互益こそ、返す返へす甘心せられておぼゆれ。かゝるを塵累つねにきゆとも、かけるなり。まことに天下の至妙にあらずば、なに物か功、これとひとしきならむ。かくのごとくの德おほし、かまへてこゑにたてゝ念佛し給へ。たゞし（二）機嫌をはからひて、人のそしりをばはぶくべく侍り。

又さきのわかき女のこゑして問て云。世に、したがひ、人にまじろふならひは、

しかしながら、子をおもふみちよりこそ、ながきやみにも、まよひきぬらめ。これをおもふにいとゞなげかし。いかでせめて、片時のくるしみをもたすけて、しばし心をもやすめさせたらばとおもへども、(一)「男女非聖無神通、不見輪廻難可報」とかなはぬちからのみかなしきに、いまこの念佛のこゑにそのくるしみの、やむらんこそ、なのめならずうれしけれ。次には心をして散ぜざらしむとて、高聲に念佛すれば妄念やみて心みだれぬ德あり。これによりて遵式法師の念佛の方法をしるすには、「文字をたしかにとなへて、高聲に、はやくよばへ」といへり。又諸佛歡喜すと云ふ德、ことにたうとし。念佛をば、よろづの佛みな、こぞりて、ほいとし給ふゆへに高聲に稱すればいよいよきゝて歡喜し給ふ。さればとなふるたびには、いま、いかに、よろこび給ふらんと、おもひやられて、ことに、たのもしくおぼゆるなり。このほか(二)禪林又一の德をくはへて、「きくもの滅罪す」と釋せり。これ、げにも、ゆゝしき利益なるべし。さしも、見る世には、つみふかげなるものゝみ、おほくて、あはれ惡道のすもりやと、かはゆきに、さるは、つや〳〵後世とだにもいはねばいかに罪業も、いとゞ心のまゝに、つもるらん。せ

(一)男女非聖云云。心地觀經の文。人々未ださとりの境界に非ざれば神通力なし、爲に六道輪廻の苦報見えざるの意。

(二)禪林。永觀律師、三論宗の碩學にして熱心に淨行を以て自行化他す。禪林寺に住せるが故に禪林と稱す。

西要鈔 下

又問て云。名號は心に念ずるも聲にとなふるも、みな本願にかなふべしや。そのなかにはいづれか、すぐれて侍らん。

答て云。善導大師、「十聲一聲一念」と釋し給ひて、みな本願におさめられたり。されば往生のためは、いづれも不足あるべからず。しかあれども、おなじくは聲にたてゝとなへん、よろしかるべし。それにつきて又わがみゝにきこゆるをば、輕聲念佛とてかろきこゑとはいへり。なぞらふるに人のみゝに、きこゆる程ならんは(一)高聲念佛のぶんなるべし。これに十の德ありととけり。事なかければつぶさにはきこえ侍らじ。その中にとりわき要なるは、まづ(二)三途の苦を、やむといふ德、ことに大切なり。すべて地獄餓鬼畜生は、みないづれもたとしへなき、くるしみなるを、たゞ、めにみねばこそあれ。しづかに、おもひやれば身もいたき程なり。心あらん人はいかでか悲心にたへん。いはんや、そのなかの衆生はいづれかわが父母にあらざる。いま、くるしみにかゝるむくひ、なにゝかよりし。

(一)高聲念佛の十德。一、睡眠を排ふ。二、天魔驚く。三、聲十方界に徧す。四、三塗の苦を息む。五、外の聲耳に入らず。六、心散らず。七、勇猛精進。八、諸佛歡喜。九、三昧現前。十、淨土往生之なり。

(二)三途。地獄、餓鬼、畜生の三惡道。

ば、かゝるをも、すて給はぬふしぎさよと、いよ〳〵本願に信心がすゝむなり。これらはいづれもみな詮要なりといへども、大かた行は信によりて成じ、信は行によりてすゝむ物なれば、かまへて、たゞ念佛をもて心をもよをすべきなり。閑窓無爲にして專心に念佛するに、稱名こゑすみぬれば、いかにも信心うごかずといふ事なし。信心もよをされたちぬれば、又稱名かへりていさまし。さる程に信と行とたがひにたすけられて、往生の業いよ〳〵すゝむゆへぞ、かた〳〵たくみなる故實にて侍るなり。

をとなへんものをば、かならずわが國に生ぜしめんとちかはれぬれば、たとひたゞ一遍の念佛ばかりにても、なを一度の往生をばとげぬべし。まして一期の念佛を、とりあつめてなどか一度の往生をせざらん」とこそ侍りけれ。

又おとこのこゑにて問ていはく。さすが、ひたすら念佛に信なき身とはおぼえぬが。しかも本願のたうとき事などの、つねにも思ひいでられぬはいかゞし侍るべき。

答云。まことに信心はたえず、すゝむべき、ものになん侍り。すべて野のかせぎ、つなぎがたく、家のいぬ、つねになれたれば、惡念は、いとへどもおこりやすく、善心はねがへども、しりぞきやすきゆへに、いかにも、さてうちをかば、やがて思ひとをざかる事侍るべし。しかるに信心をもよをすはし、ひとつにあらざれども、ことにたよりをえたる縁に五あり。一には師にしたがひて、たうとき事をきゝ、二には聖教にむかひて、そのことはりをおもふ、三には心あるともにそひて、つねに後世物がたりする、四にはこゑをたてゝしづかに念佛申す、五にはわが身のありさまに心をかけて、なすわざの、みな、つみなる事をおもひしれ

といひ、淨土にゆきて(一)無生にかなふ門を他力となづけたり。そのほかに、またく聖教に、念佛おほく申すを自力と、きらひたる文なし。しかるを、をろかなる學者、經釋にもなき事を、つくりいでゝ、みだりにをのが心をほしきまゝにする。これ沙汰のほか、さらにもちゐるにたらず。詮ずるところ南無阿彌陀佛ととなふるは、たすけ給へ阿彌陀ほとけといふ義なれば、しばしば念ずるは、返す〴〵他力をかこつにてこそあれ、いか程となへなば自力にはなり侍べらむ。されば念佛するをばおさなき子の、ふかきあなにおちて、父母をさけびよばふにたとへたり。それ、いかによばふとも、をのがこゑをちからにてはあがらめや。たゞきこえてたすけられん事をのみこそおもふらめ。稱名の用意これになぞらへてしりぬべし。いか程多念にはげむとも、をのがちからにてはかなふまじければ、たゞいくたびも佛にうれへきこえて、他力の往生をとげんとなり。いはんや又一聲一念をかろしめて、(二)無間無餘にもとなへばこそ自力の心ともきらはれめ。一念なを往生に不足なし、まして多念つとめたらんはと思てはげまんはいづくか他力の信心にそむくべき。されば(三)黒谷の上人のの給ひけるは、「佛すでに一こゑもわが名

(一)無生。生死の苦を離れたる事。

(二)無間無餘。絶えまなく稱名し、念佛以外の行を雜じへ修せざる事。

(三)黒谷の上人。淨土念佛宗の開祖、法然上人のこと、上人夙に名利の學問を厭ひ、年十八歳叡山西塔の黒谷に隱栖せるより、世、稱して黒谷の上人と云ふ。本文に引ける法語は勅修傳廿一卷に出づ。

じたしき縁あり」と釋し給へり。いはゆる佛の衆生を念じ給ふとは、このとなふるこゑをきこしめすごとに、かならずわが國にうまれよと還念し給ふなるべし。さしも、をろかなる凡夫の思ひだにも、念力は、はしたなき物にてこそあんなるに、まいて佛の御心ざし、せちに、かまへてと念じ給はむ、いかでかむなしく侍るべき。これをおもふに、いとゞ往生は、さうゐあらじと、たのもしくこそおぼゆれ。かゝるにつけても、ます／＼佛をとなへて、佛にもつねに念ぜられたてまつるべし。そのうへ多念をはげむおりこそ、おのづから一念もむなしからずと思ふ信心もおこれ。十聲一聲もといふに、うちゆるひて、あまり懈怠になりぬれば、はてはさりともの、たのみもなくなる事にて侍なり。

又問ていはく。一念といひ多念とすゝむるいはれ、あきらかにうけ給はりひらきぬ。たゞし、かく多念にはげまんと思はんは、さて自力の心とはなり侍るまじきにや。

答云。自力他力の法門は、こゝろ(一)龍樹の論判よりいでゝ、ことば(二)鸞師の釋義にあり。そのをもむきをみるに穢土にありながら(三)不退にいたるみちを自力

(一)龍樹の論判。龍樹菩薩は南印度の人、八宗に祖師として仰がるゝ大徳なり。其の著、十住毘婆沙論に一代佛教を難行易行の二道に論判し淨土教を以て易行道と爲す。

(二)鸞師。曇鸞大師、支那梁代の人にして念佛の祖師たり。其の著往生論註の初めに於て、龍樹菩薩の難易の論判を引き、自力他力の語を以て其の意を愈々明らかにす。

(三)不退。進むのみにして退く事の無き、即ち菩薩の位を云ふ。

（一）感應水月。澄める水に月の映ずるが如く、佛の御心と、衆生の心と相通ずるを云ふ。
（二）淨穢。西方淨土と。穢土即ち娑婆世界。
（三）善導。善導大師の觀無量壽經疏の定善義の文也。

たとへば、きみ臣を愛するには仁をもてし、臣きみにつかふるには忠をもてするがことく。佛は、いつくしみ、ふかくませば、一念をもすてじとちかはれたり。機は忠あるべければ多念に、はげめと、すゝむるぞかし。しかれども、つみふかき身のならひは物うくて、をこたるおりあり。まぎれて、わするゝ時あり。わづかに心には、はげまばやと、おもむけたれども、うるはしく身に、つとめうる事はかたし。されば、おちたちてはたゞ乃至十念の本願が、たのむところの詮句となりて、往生の入眼をばする物を、あやまりて一念はいはればかりか、多念や、まことならむと、の給ひつる。返々、さかさまなる、うたがひなり。たゞし、たとひはげみえずとも、かまへてとはなを存ずべきなり。かくて機の多念にと思ふ心ざし。佛の一念をもとおぼしめす御心ざしに相應しなば、（一）感應水月にひとしく、往生のみち、そらに通じ侍りなん。すでに、心ざしかなふ時は、胡越も昆弟たりといへば、などか又心ざしかなはんとき、（二）淨穢も親昵たらざらん。いはんや。つねにとなへんにいたりては、いよ／＼むつびふかゝるべし。これによりて（三）善導大師は、衆生ほとけを念ずれば、佛も衆生を念じ給ふゆへに、佛と衆生と

(一)千劫萬劫。極めて永き時の間。

(二)多念。勵むて、成るべく數多く、念佛を唱へる事。

ましけれ。さるを女人なればと、ひげせんやは、むげに、さまあしきうたがひなるべし。たとひ又おのづから信をとりたるよしなるも、からうじて、男子のつらにたのみをかけて、さしも、とりわき、いまひときはと、たて給へるちかひまでをば、つやつやさらに思ひもしらず。これうたてほいなき事になん侍り。かまへて、をんな心はかたくなに、わが身ひとつの本願ぞかしと思ひいれて、そばめも見ず、ふか〳〵と、たのみたてまつるべきなり。さても(一)千劫萬劫をふとも、あらためがたき女の身の、わづかなる一念十念によりてたやすく往生をとげんきざみ、すみやかに男子とならん事、それいくばくのよろこびぞや。まめやかに本願の世にこえたる程はこれにて、ことにあらはれたり。さる御慈悲は又なにゝむけてもと、いとゞ男子の往生さえ、心やすくなぞらへしられぬ。

又男のこゑにて問て云。一念もまめやかに不足なき事ならば、なじかは、さのみ多念に、となへよとはいはむ。これをおもふに、いかにも一念もといふは、たゞことはりばかりにて、げには(二)多念にはげみてすべき往生なるにや。

答ていはく。かやうにゆる〳〵おしへ急にすゝむる、みな、そのいはれ侍り。

(一)第十八願。法藏四十八願の中の第十八番目の本願なり、無量壽經に說く。
(二)正覺。成佛と云ふに同じ。
(三)第三十五願。「もし我れ佛を得たらむに、十方無量不可思議の諸佛世界に、其れ女人ありて、我が名字を聞きて、歡喜信樂して、菩提心を發し、女身を厭惡せむに、壽終の後また女像とならば正覺を取らじ、(無量壽經」是を女人往生の願と云ひ、或は轉女成男の願と云ふ。

のぞみはひげし給ふべきにあらず。そのゆへは、まづ(一)第十八の願に、「十方衆生乃至十念せんに、もし生ぜずば(二)正覺をとらじ」とたてられし。その十方衆生の中には、男子も女人もみなもらさずをさめられたり。されば男子往生すべくは、女人又往生すべし。なじか、おなじ本願にのれる機の、ひとりはゆき、ひとりはとまるいはれあらむ。そのうへ女性はさはり、をもければ、しゐてもや、なをうたがはむとて、又(三)第三十五の願に、とりわき女人を往生せしめんと、ちかはれたり。つらつらこれをおもふに、うちまかせては、えらびこそすてられまし物を、男子とゝもに願ぜられたるだにも、ありがたきに、あまさへ女人をば、ねんごろに、ふたゝびまでちかはれたる、御慈悲のこまやかさこそ、まめやかによろこびも、かなしみも、あいなかばなれ。よく、つみふかき身なればこそ、返々は願ぜられたるらめとおもふはかなしけれども、又往生のやすき事は本願に乗ずるゆへなれば、いくたびもちかはれたらむこそ、よろこびにてはあるべけれ。すでに男子は一の願に乗ずるを、女人はかさねて二の願に乗じぬれば、他力いよ〳〵つよくなりぬ。往生なにの、あやぶみかあらん。中々女の身こそ、そねましきまでうらや

そのうへ(一)聖衆の來迎ちかづかば、なにとせずとも、をのづからよろづをわすれ侍りなむ。さりながら、ようゐはつねにあるべき事ぞ、古人の、死はねぶるがごとしといひし、いと心やすき思なし也。

又なまさかしげなる女のこゑにて、彌陀のちかひは世にこえて、むらなき御慈悲といへば、人により、事ごとには、よもと、たのもしけれども、女の身は、ことに(二)いつゝのさはりとかや、をもくて、いみじかるべき事にはみな、きらひすてられたりときけば、まして徃生などたやすかるべしともおぼえず。それはた、げにもと、身にしられたる事おほし。はかなくかたちをつくろふわざだにも、かがみの心はづかしきまで、執着ふかきかたは、こよなく、男子よりも、まさり侍るべし。すべてかず〳〵思ひあつめたる、心のうちを、きこえつくしたらば、たうとき御心ちには、いかゞうとましくも思ひ給へられん。たゞなをも本願などやげに、おもほしはなたざらんとはおもへども、一定徃生すべしとまではおぼえずといへば、

答ていはく。まことに五障の身はさらなることとなれども、又ゆめゆめ(三)九品の

(一)聖衆。…佛菩薩。

(二)いつゝのさはり。女人は梵天、帝釋天、自在天、轉輪王及び佛の五つに成ることを得ず、之を女人の五障と云ふ。

(三)九品。西方淨土と云ふに同じ。淨土に生ずるに上中下三品あり、更に其の各々に上中下三品を立つる故に九品となる。

りみだれても、つねに念佛すべきなり。われよく汝をまほると侍るが心やすければ、ねがふ心ちは、さまでなくとも、たゞたのむ心こそすゝみたけれ。すでに十惡五逆の機、四五寸の心ざし、一念十念の行、みな本願にのるにたれり。たれか、さすが、このほどらひにかなはざらん。ゆめ〳〵わが身をふそくに思ひて、往生の道にとどこほるべからず。

又いとわかき女のこゑにて問て云。つゐのみちは、人ごとにのがれるならひなれば、かなはざらん事を、いとけなく、さのみ、なにかとは、おもはねども、いまはのきはのをしはかりは、よにけうとく、すまはしきやうにて、などか、しなでもする往生ならぬと、あさはかなる事さへ、おもはるゝは、心ざしもなく信もおこらぬにてや侍るらむ。げに往生がしたくて、うたがひなからんに、なじかはかくもおぼえんといへば、

聖のいはく。この事はひさしく、いのちを、をもくし、死ををそりながらひぬるくせにて、いかに信ふかく心ざしあらむ人も、きとは、えおもひなをすまじき心もちなり。又それに、さはるまじき本願なれば、なじかは往生をあやぶまん。

きりぬれども、ひとへに釋尊のをしへに、たのみをかけ、彌陀の本願に身をまかせて、妄念のしげきをかへりみず。願心のよはきをあやぶまず。たゞ念佛のあしをいそがすにたとふ。

げにもかひ〴〵しく、まほり給ければ、ことなくて、にしきしにつきぬ。よろこび、きはまりなし。

これは佛願のちから往生あやまらざれば、極樂に、うまれて、たのしみかぎりなきにたとふ。

とこそ侍るめれ。このたとへの心は、我身のほどをはかるには、妄念のこはさといひ、願心のよはさといひ、かた〴〵のぞみたえたれども、かゝるをもすてぬ本願ときく、たのもしさばかりにこそ、さてはと思ひさだめたりとは見えたれ。さらにをのが心ざしのぶんをかへりみよとはをしへぬものを、人ごとにまづわが心ねをさばくり見て、そのうへに本願をたのまんずる事と思ひあへる、これ二河の釋のおもむきには事のほかにそむきたり。さればたゞこゝろざしのよはきにめをかけず、それにつけてもいよ〳〵佛願をたのみ、妄念のしげきをかへりみず、ち

ゐれたば、

これは貪瞋のふかきにくらぶれば、願心はさらに、あるにもあらず。まして妄念のひまなきに、さまたげられて、往生の心ざしたゆみがちなれば、いづかたにつけても、いとゞかなはじと、おそれ、ひげせらるゝにたとふ。

ひんがしのきしに人のこゑありて、たゞそのみちをわたりてゆけ。くるしくはあらじとすゝめ、

これは釋迦のをしへの往生をすゝむるにたとふ。

にしのきしよりは又、たゞきたれ、われよく汝をまほれば、みちほそくとも、水火の河には、おとすまじきぞと、よばふをとすなり。

これは彌陀の本願ちからをくはへて、われらが往生をたすけ給ふにたとふ。

これをきゝて、さらばとおもひたつ。みちはあやうけれども、ひたすら、釋迦こゝにやり、彌陀かしこによばふしるべばかりを、たのみにて、二つの河を、かへりみずわたるほどに、

これは心ざしあさく貪瞋ふかければ、いかでか往生をとげんと、ふつに思ひ

（一）煩惱。心を喧煩し惱亂するの義にして是れに百八、八萬四千等の數多有れども、中に於て貪欲瞋恚は其の顯著なるものなり、故に今はたゞ此の二つを擧げて譬說せらる。

これはわれらが瞋恚の心にたとふ。きたに水の河ながれたる、これはわれらが貪欲の心にたとふ。なかをわたりて、いさゝかのしろきみちあり。これはわれらが貪瞋煩惱のひまもなきなかに、まれ〳〵往生をねがふ心のおこにるたとふ。その二の河のおほきさは、そこもなく又ほとりもなし。これはわれらが貪瞋のをびたゞしく、ふかくげはしきにたとふ。このしろき道のひろさは、わづかに四五寸ばかりなり。これはわれらが往生をねがふ心のよはく、すくなきにたとふ。あしふみたてんほどだにも、あるかなきかの道なれば、たゞをしなべて河とのみみえたり。つや〳〵わたりえつべき心ちもせず。いはんや、なみはひまもなくたつ。道はいつとなくうづもれがちなり。いづくをか、あしにもまかせん。いかでかわたらんとも、おもひよりける。わたらばさだめて死ぬべしと、おくしはて、

れぱこそ、とあさましくて、さりともとおもふも、おほけなき、たのみにやと、つねはひげせられ侍るといへば。

答云、往生のみちはひげするこそ、さはりなれ。いささかも心ざしのうすきに、とどこほる事はあるべくもなし。そこはかとなき心とは貪瞋なんどの(一)妄念にや、これ又(二)凡夫のくせにて、さらに思ひたゆむまじくなん侍り。すべてなにがも、さもあらばあれ、ゆめ／＼、めにかくまじき事なり。もとより願心の淺深、妄念の多少によりてすゝみしりぞくみちならばこそ。たゞ本願のちからにてする往生なれば、なじか(三)機分に、わづらひ給はん。これがために(四)善導大師ひとつのたとへをもて、くはしく安心のぶんざいを釋せられたり。それをだにも、こまかに、きこえなば、いぶかしさは、などりなく、はるけ給ひなん。そのおもむきは、

たとへば人ありて、にしにむかつて、ゆくさきを見れば、

　これはわれらが極樂をねがふにたとふ。

みなみに火の河もえ、

(一)妄念。迷へる思ひ。ほしい、にくい、かはゆい等の心の作用也。

(二)凡夫。罪を作る鄙凡なる者、即ち吾々の如きを云ふ。

(三)機分。機根と云ふに同じく、佛道修行を爲し得る能力分濟。

(四)善導大師。唐代の人、念佛弘通の祖師にして、又は光明大師とも稱す。本文に引擧せる二河白道の譬喩は、師の觀無量壽經疏の散善義に出づる者也。

(一)來迎。法藏四十八願の中、第十九は來迎引接の願にして、阿彌陀佛この願に報ひ、行者正しく命終するの時、觀音勢至及其の他の佛菩薩と共に、其の枕邊まで來り迎ふ。

むこそ、うるはしき、うたがひにては侍れ。佛のちかひをばひしとたのみながら、されば往生はしなんやと、わが身のうへにあてがふなり。なをはれ〳〵ともおぼえぬは、うたがひとまで、いはるべき事にあらず。さしも、かしこかりし智者だにも、いはにも松はときゝておぼつかなさをはるけ、むかへのはちすを見てこそと、いぶかしさを、のこされければ、まして、そのほかの人は、佛のつげをもえず、(一)來迎のけしきをも、見ざらんほどは、さらにいふにもたらず。わずかに、きゝてさてはとおもふ事を、見てげにもといはむやうには、いかゞなぞらへ侍るべき。

又おいらかなる女のこゑにて、としのつもるに、したがひては、さすが世のことはりも、しりはてらるゝけして、あだにはかなきならひ、おほくきゝかさねぬるかずには、たれとても、もるまじき身ぞかしとおもふあぢきなさに、なにとなく念佛は申すよしなれども、つや〳〵往生の心ざしは、げに〳〵しくも侍らず、たゞそこはかとなき事のみ心のうちには、ひきはへて、極樂を思ふ事はたまさかなりされぱとて人まねなんどはおぼえねど、かゝるはいかにも、ねがふ心のうすけ

(一)願海。佛の本願の深く廣きことを海に譬ふ。
(二)染習。同じ事を度々繰り返して習慣づける事。
(三)一期。一生涯

心に、そみ侍るべし。かの泰山のしたゞりの石をうがつは、しかしながら漸微のいたす所ぞかし。この(一)願海のなみに信をすまさん事も、また(二)染習いかでかむなしからん。たゞ物はいさゝかなれども、つねに功をつむが大切に侍る也。すべて人の心のならひとして、なるればその物になる事は、これのみにしもあらざんめり。

又女のこゑにて、往生は(三)一期の大事にて二たび、しなをすべき事にもあらねば、かまへてと、びんぎの聽聞をも、すごさず、心にかけて思ひなれぬるしるしに、いまはだいじさりともと、たのもしくはおぼえながら、さすがはれ〴〵とはなくて、又いかなるおりやらんは、さてもいかゞと、きものつぶるゝ事もあるは、なほうたがひののこりたるにや、露も心なをきそとこそ侍るなるにといへば。

答へていはく。いまだしてみぬ往生のいかゞおぼつかなからでもあらむ。又かまへてと、おぼゆる事は、心ゆるびず、あつかはしきまゝに、ふと、むねつぶるゝ事も、思ひいづるならひなり。これはいささかも、きもすぎて、おもほしとがむべからず。すべていかなるものも、すてられずといふを、本願にあてゝあやぶ

(一)初心。初發心即ち佛道修行にこゝろざしてより間なき者。

聖のいはく、これは(一)初心の人のつねにある事なり。おほかた本願のいはれをきゝわくまでは、やすけれども、さて、ひしとおもひつく事はかたきを、それは、くはしく心得てしかばと、うちやりて、まづいとゞしく、わが身に三心はぐしたりやとあてがひてみるに、なじかはさうなくおこりもせん。さるほどに、てもとこたへてもおぼえねば、いとゞあさましと、つきせぬ心あつかひにとゞこほりあへる、これもどかしきわざなり。まづ安心を、すゝめんとおぼさば、しばしたゞ三心さたを、さしをきて、うちかたぶき阿彌陀ほとけのたうとき事どもを思しり給へ。さすが人木石にあらざればみな心あり。げにまことしく世にこえたる悲願なとおもひつゞけむに、たれかは、たのもしとおぼえざらん。たのもしとだにも思ひしめぬれば、往生はしつべくおぼゆるものぞ。さてのち心をさぐり見給へ、三心はいとよく具足し侍りなん。たとへばつかれたりしつはものゝ、梅のすき事をきゝて喉うるひわたりしがごとく、佛力のいみじき事をきくより、決定往生の安心はすゝむものなり。さればかまへて、いくたびも、本願のたのもしかるべきいはれを、きゝもし、案じもしたまへ。かくて、やう〳〵なれもてゆかば、自然に

給ひわくべき事になんありといはるれば、げにあしくこそ心え侍りにけれ。日ごろはたゞ佛願はうたがはしからねども、わが信心やいかにとおぼえつるより、决定往生の思も、をさへられて、心やましかりつるに、その本願のたのもしきがすなはち信心なるべからんには、さらになにをか、わづらはむ。物のいはれしらぬは、げに、やすかるべきみちにも、とゞこほるならひなり。いかにたれ／＼の御身にも、かゝる事のみおほかるらん。これや、めん／＼におぼつかなからむ心のうち、申し給ひあへと。すゝめられて。

いとさかしげなるおとこのこゑにて、本願のいはれ(一)三心のやうなどは、思ひやひがめたるらむはしらず。心ばかりはおぼつかなからぬ所存にて、いまは、させるうたがひありともおぼえ侍らぬが。しかも又本願もいたく心にもそまず、往生も決定ともおもはれぬは、いかなるゆへにかと案じてみるに、事のいはれを心えたればうたがひははれぬ。安心がうるはしくもおこらねば、一定ともおぼえぬなんめりとしりぬ。さる程にあけくれ、この三心をのみ。もてさばくれども、いまだ、そのかひありて思ひえたる事も侍らぬがなげかしきといへば。

(一)三心。一、至誠心。二、深心。三、回向發願心。

ば、

聖こたへていはく。いまうけたまはるやうは、すでにおこりたる信心を、心からおもひさまされたるにこそ、物のゆくゑしらぬとて、いとうたてうも侍かな。まづその(一)機のわろきをも、行のすくなきをも、すてぬ本願といふまでをきゝて、うたがはしからずたのもしくおぼすらんをこそ、すなはち信心とは申也。そのほかには、さらになにをか、もとめ給はん。いかに(二)十惡五逆一念十念もときけども、さはいへどたはやすくはあらじをなど、本願をかすめうたがひてたうとくもえおほえぬこそ、信心のなきにてはあれ。おほかた、このごろは念佛の法門みゝなれて、あら〳〵しく願力をよもとまでうたがふ人は、よにまれなり。さればわりなき佛の御慈悲なと、きくおり、さすがたのもしと心うごかぬ、ものやはある。それをやがて信心とだにも、しらましかば、(三)往生は、かやすく、おもひかためなんを、このうへに、いまひときは、おこらんずる事のやうに、もてなやむ程に、たま〳〵、たのもしくおぼえつる心をさへ、思ひさまして、はては信なきなげきをする、これいさゝかの、おもむきを、あしく心えたるゆゑなるべし。よく思ひ

(一)機。佛の教を奉修する衆生。

(二)十惡。身にて作る三罪、殺生、偸盗、邪淫。口にて作る四罪、妄語、綺語、惡口、兩舌。意にて作る三罪、貪欲、瞋恚、愚癡。是を合せて十惡とす。

(三)往生。此の穢土を捨てゝ彼の西方淨土に往き、蓮花の上に化生するの意也。

(一)出離。六道生死の苦より免るゝ事。

(二)彌陀の本願。昔、法藏比丘と稱せし時に建てし四十八の本誓大悲願今は別して其の第十八願を指す。

(三)五逆。父を殺し、母を殺し、比丘を殺し、佛身より血を出し、僧の和合を破る、この五つ也。

(四)一念。一聲。

(五)稱名。南無阿彌陀佛と唱へる事

(六)安心。心の落ち付け方。是れに三心、一心等の事あり。

とて(一)出離の大志をわすれたるにはあらねども、つたなく浮世の小節にかゝはされたる、いかに心きたなくをしはかり給らん。苛政は虎よりもはげしといへば、常にこそ、御いさめにも、あつかりたきに、などか、うたてう、まれにも、たちいりたまはぬ。ゆきてはをしへぬ禮なれども、かゝるつみ人をば、すゝみてすくふ儀も侍るらんかし。こよひの面會はことに本望なり。いはけなき、ものともあまた、したひ、まうできたるをも、つみかろめ侍りなんず。

抑(二)彌陀の本願、慈悲ひとしく接し、衆生の根機、善惡おなじく歸すといふ事たび／＼うけたまはり、ふりにき。それにつきて(三)五逆の惡人も簡ばれず(四)一念(五)の稱名も、すてられずと、きくまでは、佛願まことに、さぞあるらんと疑ひなく、わが分よもはづれじとたのもしき程に、信心具足して申念佛こそ往生はすれといふおり、さては、わが身には、それやいまたしからんとあやぶまれて、往生もなを一定ともおぼえねば、心も今ひとときは、うきたちぬる、あさましさに、をして本願があやまりなければと思ひなせども、それも(六)安心のうへにこそと、たちかへり／＼うかれゐたるをば、いづかたにつきてか落居し侍るべきと、とへ

るこゑをきけばこぞの秋、あけがたのきりのまよひに、ゆくゑゆかしくて、やみにしひじりなりけり。そのゝちはたゞ浄土の再會をこそ期しけるにうれしくも、この釋迦の御まへにしも、あひ見つるかな。これやげに眞如くちせぬちぎりならんと、ことにたのもしくおぼゆ。こよひ又いかでいみじき事ども聽聞し侍らん。洪鐘ひゞくといへども、たゝくをまちて、かならずなる。あはれ、さかしくとひてし人もあらばいかに、えもいわず、こたへたまはむ。さりとて、さてはえあるまじければ、につかはしからずとも、てづからや、たづねきこえんなどためらひゐたるほどに、あの御つぼねよりとて、これにこそ、まうでこもりて侍れ。(一)御所作のひまにたちいりたまへなんやと、せうそこすれば、やゝしばしありてわたり給ぬ。對面たゞにはあらじ。しかるべきついでに又所得し侍りなむとうれしくて、やをら、かたつかたによりゐつゝきけば。

　さるべきおとこのこゑして、つねに(二)禪房にも、まうづべくおもひ給へながら、たやすからぬ身にて山ふかき御すまひ、はる〲とは、えおもひたちがたく日にそへては又公私に、ひまなくなりて、いとゞ法門の沙汰も、うとく侍り、されば

(一)御所作。こゝには、禮拜、念誦などを指す。

(二)禪房。僧侶の住宅。

西要鈔 上

向阿上人撰

すぎにし、なが月の廿日あまりのころ、いさゝか、ふるき願ありて、(一)清涼寺に(二)參籠の事侍りき。みぎりかすかに、とき秋なれば、とりあつめたる物のあはれ、ただをしはかりなむ。紅葉いろふかし、なにものか黃纐纈にそめにけむ。(三)白毫かけふりたり。たれの人か赤栴檀をきざめりし。おりにしたがへば感思も、きはまらず。事にふれては信心も、もよをされて、七日とおもふもいとゞ程なく、こよひばかりのなごりにしもなりにしかば、ことに心をおさめて念誦なんどするに、更たけ夜しづかにして、佛前に人まれなるほど、おいらかなるこゑして、南無恩德廣大釋迦善逝と、たうとく禮するをとすなり。げにぞ慈恩は廣大にいますと、いとどきく心までも、もよをされわたりぬ。いかなる人ならんと、ゆかしきに、とばかりありて又、釋迦はこの方にして發遣すと、しのびつゝ、うち誦せられた

(一)清涼寺。京都嵯峨に在りて、釋尊の栴檀瑞像を安置せり。
(二)參籠。おこもりする事。
(三)白毫。佛の御眉間に在る白き毫にして、福德無邊の相也。
(四)善逝。佛の十尊號の一也。
(五)發遣。西方に往生す可しと教示するの意也。

ところは一旦にむなしくわかれて再會しばらく、へだゝりぬる事を、たゞみゝにとゞまることばのみぞ、いまは心にのこるかたみならん。さしもありがたきおもひいでの、跡なくわすれなんはほいなかるべければ、その一夜の閑談をあつめて、この三巻の記録とす。としてもかくしても、たゞ身をまかせてたのめ。本願たすけ給ふべしとのみきゝしかば、歸命本願抄とやなづくべからむ。

歸命本願鈔 終

て、としごろいかがして法然上人の正義をうけて、凡夫往生の徑路を、あきらめましと思侍しに、むなしくすぎし月日の、かげかたぶきぬる身のよはひ、無常の獄者しきりにかりもてゆく。屠所のひつじ心ならずあゆみをいそぐ。たちかへるべきみちならねば、ゆくさきのみちかづくらん。一息かへらざればこれを後世に屬す。一念蹉跎せばすなはち(一)輪廻に墮せん。いたづらにつちとなり、煙とならんずる身をのみおもひて、かなしく(二)こほりにむせび、(三)ほのをにむせばんずるたましゐをかへり見ざるは、後のくゐさきにたゝぬなげきもいまの事ぞかし。後の世のさりともとおぼゆるたのみもなければ、命のをはりもそゞろにおそろしかりしほどに、かぎりなく佛に、うれへ申てししるしならむ。まのあたり明師のをしへをきゝて、はるかに上人の素意をしりぬるにこそ。臨終も心やすく。往生もうちかためておぼえぬれ。かの(四)韋提希の世尊に崛せし時。(五)釋梵そらに住して、(六)二尊の教益を蒙りし、むかしの佛化になずらへて、この修行者の智識にあひし日、愚僧みぎりにのぞんで、一宗の祖訓をさとる。いまの得益をおもふに、まことにこれ多生の大慶也。いかでか又小縁の宿因ならんや。たゞしうらむると

(一)輪廻。六道に迷ひめぐる事。
(二)こほり。八寒地獄。
(三)ほのを。八熱地獄。
(四)韋提希。印度摩訶陀國の頻婆羅王の夫人にして、阿闍世太子の母也。夫人は太子の爲に牢獄に幽閉せられて、深く厭世の心を發し、苦を逃るゝの法を求む。釋尊乃ち靈山より王宮に臨みて、爲に說法す。觀無量壽經の所說即ち是也。
(五)釋梵。帝釋梵天。
(六)二尊。釋迦と彌陀。

ざけりなん。法門のことはりをわきまへざるがゆへに。かしこからん人はかろしむべからず、智者のことばをつたへたるがゆへに。よく〳〵きゝとゞめ給へ。ゆめ〳〵いるかせになしたまはせそ。かやうに申すはをこなる荒言なりや。されども法門にあやまりありなしは。法然上人のあそばしをかれたる物ども、世にかくれなく侍り、又さきに申つるひじりたちのことをば、きゝとゞめたる人もこゝかしこにおほくのこりたれば、かれをひらきこれをとぶらはんにしられぬべし。どしよりの、くりことし侍るほどに、夜もはやあけがたになりぬらん、身もひえむねもわびしければ、さのみは申つくしがたし。この一夜の結縁をもて、(一)かの九品の値遇をまたんといひすてゝたゝれぬ。この修行者さぞあやなくおもふらん。心の中にのこる事おほかるべし。なをもしたひていはんとにや、やがてつゞきていでぬ。そのありさまゆかしくて、愚僧も又たちいでゝみれば、あけがたのきりふかくして、ゆくゑむなしく見うしなひぬ。ねんなしとあきれゐたるほどに、夜もあけきりもはれにしかば、佛にいとま申てまかんで侍りにき。抑安心僻越しぬれば(二)萬行いたづらにほどこす。(三)邪師邪敎、それずばあるべからず。これにより

(一)九品の値遇。極樂淨土に於ての面會。

(二)萬行。あらゆる佛道修行。

(三)邪師邪敎。佛願に背き因果の道理に違ひたる敎を邪敎と云ひ、其を敎ゆる人を邪師と云ふ。

ごとが、ことにたのもしくたうとくおぼゆる也。されば(一)勢観房の聖光ひじりへつかはされしせうそくにも。「當世京邊の念佛の義、みなもて濁亂、しかるに御邊一人、正義傳持候、ことに隨喜し入候」とかゝれたりき。かの勢観房はとしひさしく上人につかへたてまつりて、法門の聽聞もみゝふりたりしひじり也。その消息はまのあたり見侍りき。まさしき自筆の狀にて侍りし也。又(二)法蓮房(三)正信房なんどにたづねうけ給はりしもみな相傳の正義とて申されしは、ことばもひとつに心もかはらざりき。そのほか京都にはやりたる義どもをば。さらに上人の御をしへにあらず。まめやかに潁川ちかくば、みゝもあらひぬべしとぞ、この(四)上足たちはかたられ侍りし。かやうにあるひはあまねくその人にむかひ、或はくはしくその書をひらきて、相傳の邪正をたゞしあきらめて、(五)黒谷の正義をばきゝをきしかども、天性もとよりかたくなゝるに、老性いよ〳〵をろそか也。才もなく智もなし。はぢつべしいたみつべし。かたはらいたく申さでぞあるべきをたづね給ふ心ざしのねんごろなれば、をのづから利益も侍らんに、わたくしありともおもひて、きゝをきしはし〳〵をあら〳〵かたりきこえぬる。をろかならんものはあ

(一)勢観房。源智と稱し、小松内府重盛の孫にして、十三才法然上人の弟子となり、常隨給仕する事十八年間、上人の遺跡、今の知恩院を相續す。

(二)法蓮房。信空と稱し、十二才にして法然上人の弟子となり、其れより已後五十五年間上人に常隨せし上人にして、就學門下中、上人に最も永く仕へ、また信任の厚かりし人。

(三)正信房。法然上人の門下。

(四)上足。高弟と云ふに同じ。

(五)黒谷の正義。法然上人の正しき教。

(一)聖光房。辨長、大紹正宗國師と號し、筑後の善導寺の開山なり。初めは、天台の學匠にて、油山の學頭なりしが後、法然上人の弟子となり、其の正統を相承して淨土宗第二祖となる。

(二)寶池。極樂の八功德池の邊。

(三)遐方。遠き方

とをたてゝ、なをこれをふしんに思あはれば、筑紫の(一)聖光房にとはるべしと申されしにこそ。さては聖光ひじりは、證人になるほどのたしかなる智者にておはするにこそ。とやむことなくおぼえしかば、いかゞしてかのひじりに、たいめんして、安心起行なんど、こまかにたづねうかゞはましと思ひしかども、こしたへぬ老のあゆみなれば、みちゆかぬあらましのみにて、やみにき。ほいなかりし事なれども、よしよしたとひ九州ほどとをくして談話を西海のなみにへだつとも。一生いくばくならざれば、向顏を(二)寶池の月に期せんと、思ひなぐさみてすぎにしほどに、かのひじりのかゝれたる。三心要集。修行門。なんどいふ物をみしかば、のせらるゝ所の義、さらに聖覺のことばにたがはず。あまさへ、われいさゝかも上人の御義をあやまらばとて。さま〴〵の誓言をかきのせられたりしをひらき見てしのちこそ。(三)遐方も終古も、げに面會のごとくに、よろこびもうらみもいまさらなりしか、その書どもはいくらもよの中に侍るなんめり。たれ〴〵もかまへてたづね見給へ。このひじりたちは、その身がらの人にすぎて智者道心者にておはせしも、さる事にて、法然上人の御義をたがへずとたて給ひしちか

修行者又いはく。このちかごろ、こゝかしこ、まどひありきしほどに、げには事のはし〲はだづねとふらふかたもこそ侍りしかども、おほくは經釋にもあはぬ義どもにて、いと心えぬ事のみ也。されば安心もたちがたく、起行もすゝましからざりけるに。しかるべうこよひ、こまやかなる御をしへにあづかりて、往生のみちたどらず思さだめ侍りぬるは、さながら(一)大聖の方便にこそと、よろこびのなみだことばにさきだつ。さてもいにしへの智者のをしへとかやきゝ侍りつるは、たれ人の事にかあらん。それまではいかでもありぬべけれども、又ながれをくみてみなもとをたづぬるならひは、ゆかしかるべき事にこそといへば、老僧のいはく。とりわき一人につたへたる身にはあらず、法然上人の御弟子の中に、智者學生といはれし人々をば、もらさずこそとふらひ侍りしが、なかにもみゝにとまりておぼゆるは、(二)聖覺法印の(三)第三年の御佛事に、(四)當伽藍にして道俗をあつめて。(五)七日百萬返の念佛をすゝめられし結願の說法に、三心の法門を申されて、をはりに、もしこの法門、わが大師法然のおほせられしに、いさゝかもたがひ侍らば、當寺の本尊照罰し給へと、おなじことばに三度までちかご

（一）大聖。彌陀如來、今は眞如堂の本尊を指す。
（二）聖覺法印。安居院の法印と稱し叡山の學匠にして智解萬人に勝れたりしが、深く法然上人の化導に歸依し、稱名を專らとし、文曆二年三月五日往生の素懷を遂げし人。
（三）第三年。順德院の御宇、建保二年正月なり。
（四）當伽藍。眞如堂。
（五）七日百萬遍。七日とは、阿彌陀經に「若しは七日」と說けるに據りしものにして、其の七日間の念佛は、古來百萬遍に當ると爲す。

りをふくみて、生死の深淵をいでん事、さら〳〵うたがひあるべからず。さをにかけたるつりは、のむほどのうをゝえずといふことなし。本願にたれたる名號なれば、となへんほどのものゝうまれぬはあるべからず。餌をもとめて、つりをのむまでは、わづかに魚のわざなれども、つりをかまへて魚をうる事は、さながら人のちからにあり。往生をねがひて名號をとなふるは、いさゝか衆生のわざなれども、本願をかまへて衆生をみちびくは、こと〴〵く佛のちからにあり。極惡の機のたすけ給へと思て南無阿彌陀佛と申すは、機もつたなく、心もをろかに行もいやしけれども、これをわづかに餌をもとめ、つりをふくむほどのなかだちとして、「若不生者不取正覺」とちかひ給ふ本願にすがりなば、さだめて往生せん事を、魚のいのちをつりにまかせたるになずらへてみむ。かゝるを他力に乘じて往生すとはならふ也。さればこの名號のつりをのみぬるこそ。返々たのもしくおぼゆれ。極樂ならではいづくへかまかり侍らん。なにもげに期といふ事がありけるぞかし。このたびが生死のかぎりにて侍りけるよと、いひあへず、ことばもなみだにとゞこほるけしき、ことはりにいりたゝぬ身なれどもたのもしくたうとくおぼゆ。

いたづらに(一)無量無數劫の生死を經て、いままで(二)常沒常流轉の凡夫たるだにもくやしきに、なを又(三)有海の波浪にたゞよひて、こりずまに無窮に(四)楚毒をのまん事は、あぢきなかるべき事なるを、いまこの本願にあひぬるのみこそ、まめやかに多生のおもひいでにて侍れ。(五)呑鉤の魚は水にある事ひさしからずといふ事あり。ふかくこれをよろこぶべし。たとへばうゑたる魚の餌をもとむる、つりをえつればすなはちのみぬ。をのがいのちはあるにもあらず。いまはさだめてひさしからじ。わづかに水にある程、はかなくよろこぶけしきあれども、いまにくやしがるべきがごとく。われらひさしく流轉のなみにつかれて、出離の餌にうゑたりし身の、たま〳〵名號のつりをえてのみぬ、苦海にあらん事いまいくばくぞや。わづかにいのちのつきざらん程、わすれずとなへんとするはくるしきににたれども、前念にいのちをはらば後念にすなはち往生せん。永劫の快樂こゝろよきにあらずや。物うきことをわすれてねんごろに念佛すべし。おほよそ本願はさをのごとし。名號はつりににたり。衆生の南無阿彌陀佛ととなふるは魚の餌をのみぬるにことならず。されば すでに大悲の漁人、本願の竿よりたれたる、名號のつ

(一)無量無數劫。數限りも無き、極めて永き間。
(二)常沒常流轉。苦海を浮む瀬なく常に六道を轉々流迷しつゝある凡夫
(三)有海。有とは因果不亡の義、即ち、三界の苦果の深廣なるを海に譬へて有海と云ふ。蓋し三界とは、欲界、色界、無色界なり。
(四)楚毒。くるしみの本たる貪瞋癡の三毒呑。
(五)呑鉤の魚。此の喩は大悲經に出でたり。

とはなづくる也。されば佛の御ねがひのかなひぬるこそ、返々我らがよろこびにては侍れ。かの孟宗がねがひによりしたかんな、程よく片時に深雪をうがちてをひき。彌陀の本願たる念佛のいかでか一念に(一)重垢をはらひてうまれざらん。我らが往生すべき仕度をば。彌陀本願にかまへてたてられたり。南無阿彌陀佛と申さば、佛なにとも、はからひたまはんずらん。わがちからにてすまじき往生なれば、なにの心ぐるしきところかある。たゞしたかんなをねがひし所にあらぬ草木はをひず。念佛をと、ちかふ佛なれば、稱名にあらずばうまれがたし。をのづからうまるゝ事をうれども、(二)百に一つといへり。これにつけても、いよ〳〵一すぢに念佛して、佛の御ねがひ物になるべき也。しかれば佛、すでに往生せんと思で、南無阿彌陀佛ととなへんものをとねがひ給ふ。我又往生せんと思ひて南無阿彌陀佛ととなふ。わが思ひ佛のねがひにいさゝかもたがはねど、すなはち佛の御ねがひ、もはら我身のうへにあたれり。もしうまれずばと侍れば、かならずうまれん事なにの相違かあらん。ふかく決定の思をなすべし。ゆめ〳〵うたがふ心あるべからず。こまかにこのことはりをあんずれば、よろこびのなみだかへりてかなしむ。

(一)重垢。重き罪過。

(二)百に一つ。念佛の外の行をも、其を修し得る機根有りて其を修し、其の功徳を往生の爲に廻向すれば、彌陀攝機の願に乗じて往生すれども百人の中に一二人に過ぎずとの意なり。

時しもあれ、雪をあいしけるなるべし。ある冬のころせちにこれをねがひけるに。心づきなしとおぼえぬべけれども、孝養の心ざしねんごろなる子なりければ、雪いたくふりつみて、さるべうもなき竹のなかにむかひ居て、せめての事に、泣きゐたるほどに、と見れば、さるべきころよりも、なをあざやかなるたかうな、時のまに生ひいでたりけむ、ふしぎなりける事ぞかし。つら〳〵この事をおもふに、かぎりありて、をのれとをふべきころならば、夏のすゑざまをこそまつべけれ。これはしかしながら孟宗がねがふ心のせちなりしかば、そのぬがひむなしからずしてかなひしゆへに。をふべくもなき時なれども、心ならずをひにける也。まめやかにねんごろなるねがひの、かなはぬ事は侍らぬにこそ。彌陀の本願もかくのごとし。我らがうまるべくもなき事は、雪のうちのたかんなの、生ふべくもなきにたれども、深重の慈悲よりおこりて、ねんごろなりし本願なれば、念佛せんものかまへて、わが國にうまれしめんとねがはれし、その御ねがひむなしからずしてかなふゆへに、となふるものこと〳〵くうまるゝ事は、孟宗がねがひのせちなりしによりて、たかんなのをひしがごとし。かゝるを本願に乗じて往生す

善導大師は、(二)「若我成佛十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虚、衆生稱念必得往生」と釋して。かの佛いま現に成佛し給ひぬ。まさにしるべし。うまるまじくば正覺をとらじとたて給ひしちかごとの重さにかへて、うまれしめんとおぼしめす御ねがひむなしからずして、われら稱念せばかならず往生すべしといふ事をとの給へり。されば衆生の往生すべきによりて佛は正覺をとり、佛の正覺なり給によりて、衆生は往生をすべき也。このゆへに念佛申さんものゝ往生せんずる事は、はやすでに本願成就して正覺なり給し時より、ゆるぎなくさだまりてしかば、我らをみちびき給ふべき佛の御方便は、もとより、したためまうけられたるを、たゞ衆生のかたよりあやぶみて、身を本願にまかせかねたる心のなまざかしさにこそ、けふまで往生もとゞこほりぬれ、いまよりにても心をかずたのみをかけば、やがて本願には乘ずべし。本願にだにも乘じなば、又いのちをはらん時、かの國に生ぜん事、いささかもうたがひあるべからず。それにつきては、本願に乘じて往生すといふことはりをこそ、よく〳〵心にわくべけれ。たとへば(三)孟宗といひしものゝおやは、(三)たかん

(一)善導大師の往生禮讃に在る第十八願を釋せられし文なり。

(二)孟宗。廿四孝の中一人。晋の人、幼き時父に離れ、母の手に育てられ至孝を以て鳴る。

(三)たかんな。たかうな。何れも、竹の子、と云ふ語なり。

ざしのちからむなしくて、もし生るまじくは佛にならじと也。これにつきて、そのつたなきものなりとも、念佛せばかまへて生れしめんと、ねがふを願とはいひ。生るまじくば佛にならじと、ちかごとし給を誓とは申也。いまこの誓願は、彌陀如來いまだ佛になりたまはざりしいにしへ、(一)法藏比丘と申しゝとき、一切衆生を平等にあはれみ給ふ御慈悲のあまり、わがねがひのまゝに衆生往生すべくば、われも佛にならん。そのうまるゝ事かなふまじくば、たゞもろともに、しづみこそせめ。衆生をすてゝ我ひとり佛にならん事、さらにのぞむ所にあらず。あやまで、衆生だにもたすかるべくは、(二)「假令ひ身を諸の苦毒の中に止むとも、わが行は精進にして、忍びて終に悔いざらむ」とまで、身にかへてかなしみおぼしめされし程に、さしも一大事の正覺をかけてちかひ給へる本願なり。されば、念佛せんもの生ぜしめんといふ御ねがひかなふべくは、その御ちかごとにむくひて、をのづから佛になりたまはんずらん。御ねがひむなしくして、我ら念佛すとも、うまるまじくは、又この御ちかごとにむくひて、よも佛にはなり給はじなれば、法藏比丘の成佛が我らが往生せんずるしるしにてはあるべき也。これによりて

(一)法藏比丘。久遠劫の昔、世自在王と稱する佛在世の時、一人の國王あり、佛の說法を聞きて比丘となり法藏と名づく。迷へる衆生を救はんが爲に、四十八條の大悲願を發し、五劫に思惟、兆載永劫に苦修難行し、て既に十劫已前に成佛す。阿彌陀如來是れなり。(後に本文に詳し)

(二)無量壽經の文なり。

歸命本願鈔 下

修行者又問ていはく。本願のなかの機と心と行と別の子細なく、我らがつたなき程にかなへりといふ事、あきらかに承り、ひらきね。このぶんにて往生をとげん事は、「若不生者不取正覺」とちかひたまふ、佛の願力に乘ずるゆへ也と、のたまはせつるいはれは、さるからとおぼゆるやうなれども、なを、ひしとも心えとかれ侍らぬといへば、老僧のいはく。人ごとにみなそのしきにて侍るぞとよ。凡夫の往生は本願に乘ずるゆへとまでは、たれ〳〵もみゝなれてぞ侍らんなれども、まさしく願に乘ずとはいかやうなるすぢといふ事を、おもひときたるはまれならんかし。よろづたゞ人の心のまことなきゆへに、しりがほにだにもなりぬればたりぬと思て、さしも問ひ究めんとはせざらんめるを、かくねんごろに尋ね給ふこそ、げに往生の心ざしもおはするにこそとありがたく覺ゆれ。さればいかほどもくはしくきこゆべし。まづ「若不生者不取正覺」とは、かゝるつたなきものなりとも、南無阿彌陀佛ととなへば、かならずわがくにゝ生ぜしめんとねがふ、この心

いか程も申ぞうやまふにて侍らん。さても、もとよりをこたりがちなりし身の、いとゞ老につかれ、やまふにくたびれて、しばしおきゐる事だにもかなはずなりぬ。まして威儀をうるはしくする事はまれなり。たゞいつとなく、おびとき、ひれふしながら、猶さりともと出離を期する事は、浄土の一門ならで又いづれの敎にかあるや。かゝるにつけても、すゞろに本願がかたじけなくおぼえ、念佛がたうとく侍るぞとよ。さればとてあなかしこ。かなひぬべからん心を、ゆるしはすぐすべからず、いかにも、やすきに事をよするは、かだましきがいたす所ならんかしと、をしはかりも、ようにくかりぬべくや。

也。多念はげめとすゝむるによりて、一念をかろしむるは、行の信をさまたげたる也。すべからく安心をば、かまへて、やはらかにとりて、起行をばいか程も、こはくはげむべきなり。一念功たへにして往生決定ならば、いよ〱多念をこそはげむべけれ。たゞしはげめと、すゝむるにつきて。いか程までといふきはゝあるべからず。たゞ身のたへ、心のをよばん程なるべし。その中に毎日百返が身にたへたるもあるべし。千返がこゝろのをよぶもあるべし。乃至三萬六萬も、機にしたがひてはげみえんまで也。在家の人はまぎるゝなかにはげみえん程、出家の人はのどかならんにつけてはげみえん程、又いたづらなるいとまぞ、をこたらじはやとはおもへども、などやらんわすられんは、ちからなき懈怠の機なれば、それもはげみて思ひいだされんほど也。すべて人によりて事ことなるべし。さらにひとつらにはあるべからず。機にしたがひて行の多少はともかくもあれ、いづれもその心ざしの、いつはりなからんまでを身のぶんとすべし。おほかたは(二)「行住坐臥を簡ばず、時所諸縁を論せず」と侍れば、時をきらはず、所をいはず、縁によらず、たゞたちゐおきふしにとなふべし。念佛に無禮といふ事はあるべからず。

(一)源信僧都の往生要集の文なり。

（一）無生忍。不生不滅のさとり、即ち、眞如の理。
（二）稱佛。南無阿彌陀佛と、佛の名號を唱ふる事。
（三）正座十劫。法藏因位の願むなしからずして、既に正覺をとり給ひしより已來、十劫をへたり、との意なり。月とは佛。信樂とは信心。露とは人の心に譬ふ。
（四）曇鸞。支那、梁時代の人にして、念佛の祖なり。本文に引けるは、其著往生論註の文なり。
（五）法然上人の法語。勅修御傳第廿一卷に出づ。

事、鑽るにたれども、一聲の阿彌陀はすたれず」といへり。すでに先賢の故實也。さらに後學の今案にあらず。すべからく一聲の阿彌陀をたもちて、よろしく九品の（一）無生忍を證すべし。おほよそ（二）稱佛一聲の風、すみやかに妄念の雲をはらふ。（三）正座十劫の月をのづから信樂の露にうかぶ、げにたれか往生をとげざらんと、まめやかにたのもしくこそ覺ゆれ。又（四）曇鸞の釋には、「至極無生清淨寶珠の名號」といへり。たとへば淨摩尼珠といふたまを、にごれる水に入れば、水たちまちにすむなるやうに、名號のたまを、くちのうちにふくみぬれば妄念のつみのにごりすみて、心の水きよくなりぬ。一念の八十億劫の生死のつみを滅すといへるも、かかるゆへなるべし。さて〳〵かやうに一念も往生にふそくなき事をきゝて、かならずしも數返をはげまずともなんど、申すやからも侍るやらん。それは本願をあしく心得たる人也。法然上人の御すゝめには、（五）「信を一念にとりて行を多念にはげめ。一念なを生ず、いはんや多念をや」との給へり。一念もうまるゝとは、本願を信ずるやうをいふ。多念にはげめとは、起行をすゝむる方を申也。一念も往生すと信ずるによりて、多念はげまざるは、信の行をさまたげたる

(一)樂天。支那唐代の人、白居易と稱し、念佛の行者なりし也。

め〳〵侍まじ。水火の二河をかへりみず。念々にわすれざれといふこの心なるべし。又せめて千返萬返申しつゞけんに、妄念おこりて心やましくば、中々一念十念づゝなりとも、つねにとなへてみ給へかし。餘念はよも侍らじ。たとへば河をわたる時は、水のたえまをまつ事なし。たゞその、ながるゝうへをふめば、あまさへ、あしのしたの水がせかるるやうに。われら貪瞋の河ふかくして、妄念のながれやむ事なけれども、南無阿彌陀佛と申せば、かへりてこゑのしたの妄念はをのづからやむ也。かやうに申つけぬる念佛は。妄念をこそさまたぐれ、妄念にさまたげらるゝ事はなきなり。わざとやめんずれば、妄念いよ〳〵たえず。をこらばをこれとうちすてゝ、妄念をかへりみず申すが手にて侍る也。さるを世のまぎれのひまなさに、念佛が申されぬなんどいふ人は、たゞ往生の心ざしのなきゆへに、せめての事とこそおぼゆれ。かならずしも千遍萬遍申つゞけたるのみやは、往生の業なるべき。一念十念づゝなりとも、本願は、よもきらひ給はじ。ずゝをとりたるがいみじきにしもあらじ。とてもかくても申こそ詮にて侍るべけれ。さればく(一)樂天のことばには、「たちても阿彌陀、ゐても阿彌陀、たとひいそがはしき

はげむ所なる。(一)「化佛菩薩尋聲到。」たのもしき慈悲の父母なれば、たゞかまへておさなき子の、母をよばふおもひをなして、こゑにまかせて來迎をまつべし。あなかしこ。こざかしき心ありて往生をうたがふ事なかれ。又いかに妄念に申しまじへたる念佛も、往生の(二)定業となる也。そのゆへはもとより罪惡深重の機の、妄念とゞまりがたかるべしとは。佛もおぼしめしまうけたるらん。そのうへにおこされたる本願なれば。にごれる念佛を、いなとにてはよも侍らじ。されば(三)中路の白道も、なみをふみてあゆむべしとこそみえたれ。いはんや人ごとにその日の數返にとりむかふおりは、まづいかにも往生の思ひより、申そめらるゝ事なれば念々の念佛はみな、もとの、やくそくにかへりて、はじめの心ざしにをさまりぬ。又しどけなく、申ちらしたる念佛なれども、のちにかならず、とりあつめて、極樂に廻向する思あり。この時、妄念は、をのづからえらびすてられ。念佛は悉くえらびとられて、けがるゝ所なく、みな清淨の業となる也。さればかまへて口ばかりそもあれ。となへをくべき也。をはりに廻向せん時、心ざしとひとつになるべきがゆへに、妄念とゝもにても申たらん念佛の、つゐにいたづらなる事はゆ

(一)善導大師の往生禮讃の一句にして「化佛菩薩は、聲(念佛する聲)を尋ねて到り玉ふ。」と和訓す。

(二)定業。決定の業、正定業と云ふに同じ。

(三)中路の白道。水火二河の中央にある白道。即ち貪欲、瞋恚の盛んなるは、水の川、火の川の如し、其の煩惱の中にいさゝかながら極樂を願ふ心あるは、水火に挾まれたる細き白道の如しと云譬にして、具には善導の觀無量壽經の疏、散善義に出づ。

らひにて相違あるべからず。かやうにうしろめたからぬ慈悲の父母にて、心やすくうしろみ給ふうへは、南無阿彌陀佛ととなへて、よろづは佛にまかせたてまつるべし。さてこそ念佛のこゑをば(一)「綠子の哭するこゑのごとし」とも釋したれ。たとへばおさなき子のあしてもたゝず、物もえいはぬは、うへたるにもさむきにも、たゞ母をかこちて、なくよりほかの事なし。母そのこゑをきゝぬれば、かならずゆきてたすく。うへたるらんとおもへば、むねをひらきてちぶさをふくめ。さむかるらんと思へば、ふところにいれて、はだへをあたゝむ。さればうへをやすめ、さむさをやむるは、ひたすら母のちからにあり。わびてなくばかりこそ子のわざにては侍るやうに、我らが身の智惠の心もさかしからず。行のあしてもたゝぬ事はおさな子よりも、なををろかなれども、さすが、ありはてぬ世も、あぢきなくながきまよひも、かなしければ、たすけ給へと佛をかこちて、南無阿彌陀佛とゝなふるほかは、はげみえたるかたなし。佛このこゑをきこしめすに、一子の慈悲、いかでか、やすき事をえん。されば穢土をいで淨土にうまれん事は、しかしながら佛の御ちから也。たすけ給へと思て名號を、となふるのみぞ、おのが

(一)支那の道鏡、善導兩師の共著なる、念佛鏡の釋文たり。

れ〳〵も煩惱のうすくあつきをもかへりみず、罪業のふかきあさきをもいふべからず。たゞ南無阿彌陀佛と申て、これにつきて決定往生の思をなせ」との給へり。そのゆへは、往生せんとおもひたち南無阿彌陀佛と一聲となへはじめぬるが、一念をもかならずうまれしめんとちかひ給ふ。本願のなかにおさまりそむるより、十こゑになれば十念をもといふ願におさまり、(一)一期申ぬれば一形をもといふ願におさまる也。されば我らはしどけなくとなへゐたれども、佛は一こゑもきこしめしすごさず。みな「若不生者不取正覺」といふ本願のなかに、うけとり給て、佛力守護すれば、(二)六塵のぬす人にもかすめられず、(三)三毒の火にもやかれずして一念より一形にいたるまで、みな決定往生の業となる也。(四)「是名(五)正定之業、順彼(六)佛願故」と釋する、この心なるべし。これにつきて決定往生の思をなせといふげにもいはれたり。(七)異香よりも紫雲よりも、南無阿彌陀佛とゝなふるこゑにすぎたる往生のしるしやは侍るべき。かまへてたゞ、とかくのうら思なく、ま心に念佛して、本願にあづけたてまつり給へ。いのちをはらん時、佛たしかに返したまはすべし。それをこそ最後の念佛にもし侍らんずれば、臨終の十念は、佛の御はか

(一)一期。一形。何れも一生涯と云ふに何じ。

(二)六塵。色、聲、香、味、觸、法。是等の六つは、淨心を汚すものなるが故に塵と名づく。

(三)三毒。貪、瞋、癡。是等の三つは、善根を毒害する故に毒と名づく。

(四)善導大師の觀無量壽經の疏、散善義の中の釋文也「一心に專ら彌陀の名號を念じて、行住座臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるは、是を正定の業と名く、彼の佛願に順ずるが故に」と、今は其の終の二句を引けり。

(五)正定之業。往生の正しき業、即ち念佛を云ふ。

(六)佛願。別して彌陀の第十八願。

(七)異香紫雲。極樂往生の祥瑞なり。

(一)生死。三界六道と云ふに同じ。
(二)發心。佛道を修行せむと云ふ心を發す事。具には、發菩提心と云ふ。
(三)宿因。過去世に於て蒔きたる因種。
(四)本願。第十八願を指す、全文上卷に出づ。
(五)勅修御傳第廿一卷に出づる法然上人の御法語なり。

べからず、おほよそ(一)生死をいづる事のかたきにはあらず。(二)發心する事のかたかりしゆへに、過去遠々、生死悠々たりし身の、このたび彌陀の本願にあひて、わづかに、たすけ給へと思ふばかりの心をおこして、往生のほいをとげん事は、ひとへに佛の御ちからぞかし、かゝる、みのりを、ききえつる、むかしのむくひ、うれしくこそと、(三)宿因おもひつゞけて、悲喜こもごもながれ氣なり。

修行者又とひていはく。(四)本願すでに「乃至十念」とちかはれたれば、十聲一聲までもすてられず、かならず往生すべしと、の給ひつるは、よにたのもしく侍れども、いかにもなを。それ程の念佛のさだめて往生の業となるべしともおぼえず。まして妄念うちおこしながら申す念佛は物のかずならじと、かろしめ、おもはるゝはいかゞ侍るべき。老僧のいはく。これは御身ひとつのうたがひにしもあらじ。なべて人ごとに思あへる事なんめり。本願のおもむきを、よくもしらざるゆへに、かゝる、なまざかしき心もおこるなるべし。佛すでに一念十念までもうまれしめんとちかひ給ふ。その願むなしからずばいかでか往生をとげざらん。たゞこゑを本願にまかせて名號をとなふべきなり。これによりて法然上人は(五)「た

ちからにてうまるべくば、をのがちからは、弱くとても、それによるべからず。わが心ざしのつよからんよりは、佛の願力のつよからんこそ、たのもしかるべきに、わが心ざしの、よはければとて、佛もいかゞ、とあやぶむは、願力をいやしむになるぞかし。たゞかまへてをのが力のよはからんにつけても、いとゞ佛の御ちからをたのむべき也。又いかに、よはよはしからん心ざしまでも、すてらるまじき事は、うたがひやは侍る。そのゆへは、すでに機をさだむる時、いたりて重き五逆までをおさめ、行を願ずる時は、いたりて少き一念までをたてたり。心をとらん時いかゞ、又いたりてよはき心ざしまでをも、おさめられざらん。いはんやつみふかき機ならば、心も、したがひてをろかに、行あさきものならば、心ざしも、をのづから、うすかるべき、いはれにてこそあれ。しかあるに、機と行とのつたなきをすくはんための本願に。心はふかゝらんをと、ちかはれたらんは、あたら本願のよきかたはなるべし。さしも五劫まで案じ給けむ善巧の、さるてづゝなる事やは侍るべき。かやうの、ことはりをもて思ふに、いかにあさき心ざしなりとも、いつはりなく、たすけ給へとだにも思ふならば、往生にふそくはある

(一)邪見。善因善果、悪因悪果の道理を撥無するを云ふ。

んとにてはよも侍らじなれども、ひが〳〵しからん機は、きゝあやまりぬべきぞかし。さればすゑ〳〵には、(一)邪見なる義どもゝ、きこゆるにや、返々あさましき事也。すべて罪をかへりみぬものは、身のわろき事をしらず、身のわろき事をわすれぬれば、又たすけ給へとおもふ心もなし。たすけ給へと思ふ心をすゝめんためにも、ことに罪業をおそるべき也。本願にほこりてつみを心やすくおもはん人は、はじめは信心のあるににたりとも、のちにはたすけ給への心もなくなるべし。よく〳〵ようゐあるべき事をや。又人のつねにうたがひあひたるやうは、たとへば智慧才學はいらずもあれ、おなじくたすけ給へと思ふとも、骨髓に、とほりて、ふかゝらんこそ往生をもせめ、我らが心は、さまでもなし、たゞかたのやうなる心ざしにては、かなふべしともおぼえず。又しらず。佛もさ程にはよはよはしからん心なりとも、すてじとまでは、ちかはれずもやなんどおもひあへり。かやうのうたがひはひたすら、にくからざれども、さりとては佛の本願は、さるをも、すてじとちかはれたらんには。そのうへをなをよもとは、いかゞうたがふべき。凡夫のぶんざいの心は、つよくとても何程の事かあらん。とても、佛の御

（一）（二）（三）（四）善導大師の觀無量壽經疏の玄義分に在る一連の文なり

さりとては、たすけ給へと思ふより、佛にはちかづきたてまつるなり、本願により、のきのさかひは、この心の、すゝみ、しりぞくあはひにて侍べし。すなはち。善導大師の（一）「南無者即是歸命」との給へるも、南無といふは、たすけ給へといふことばと釋する也。そのことばのしたに三心あるべければ。（二）「亦是發願廻向之義」ともいふなるべし。（三）「阿彌陀佛者即是其行」とは、助け給ふべき本願の名號なればなり。しかれば、南無阿彌陀佛と、となふるは、たすけ給へ阿彌陀佛といふことばなり。いふことばに思ふ心はあらはるゝゆへに。南無阿彌陀佛ととなふることばに。たすけ給へ阿彌陀佛とおもふ心ありとしられたり。これによりて十こゑ佛をねんずれば、十願十行ありといへり。（四）「以二此義一故必得二往生一」との給へば。たのもしかるべき事ぞかし。さればとしても、かくしても。つみふかき身のかこつかたには、たすけ給へとにてあるべき也。世にこえたる御慈悲なればとおもふのみこそ、又なくたのもしき事にては侍るめれ。さてさてこのごろの學生たちの中に、かく罪人をすてぬ本願の心やすき事を申たてんとて、罪をはゞかるまじきやうに、いひなさるゝ人おほし。さればとて、つみをよき物といは

たゞ學すとも、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまひをせずして、たゞ一向に念佛すべし」との給へり。たとへば人に身をまかせて世をわたらんものは、いかにさへかしこく、心すくよかなりとも、人をたのむ程にては、われはがほならんはにくき心なるべし。まして、その身にとる所なからんはをのが程、おもひしりて、かゝるいたづらものに、いさゝかのなさけをも、のこさるゝは、ありがたき心ざしかなと、おもひいれて、心たらぬあやまりしいでたる時も、うらゝかに、うちむかひ、あさましとわびゐたるむざうさには、よくにくかりぬべきとがなれども、さながらつみゆるさるゝやうに、いまの世の衆生はたとひ智者學生なりとも、そのちからにて生死をいでん事のかなはずして、他力本願を、たのむとならば、かひなき才を、さりともと、をのがちからありがほならんよりは中〳〵たゞひたすらたすけ給へとにてこそあるべけれ。いはんや(一)戒定慧のとる所もなく、(二)貪瞋癡のあやまりのみおほからん身には、いよ〳〵さりとてはと、うちたのみたてまつらん心にぞ、佛もよろづはおもひゆるし給べき。さればかゝるをろかなる身にては、いかゞと思ふより佛にはとをざかり、わろきにつけても

(一)戒定慧。身口意の三業に於ける惡を防止し(戒)、雜念を歛め(定)、眞理を證する(慧)を云ひ、是を總名して三學と云ふ。(二)貪瞋癡。次の如く、むさぼる、はらだつ、をろか。是を總じて三毒と名く。

(一)智慧をきはめて。煩惱妄念に染まざる所の眞智を得る事。
(二)他力にすがり彌陀の本願力にたよる事。
(三)故實。祖師代々相傳の習ひ、と云ふ意なり。
(四)一枚起請文の文なり
(五)一代の法。釋尊一代、五十年間の說法。

ともに花のうてなにはのぼるらめ。おほかた三心はかならずしもならひておこすべき物にあらず。たゞ往生だにもしたくなりぬれば、をのづからぐする事にて侍也。されば智者の往生せぬもあり。愚者の往生をするもあり。これみな、しると、しらざるとにはよらず。ねがふと、ねがはざるとのゆゑなり。さて〳〵、かやうにあまりたやすき事にて侍るほどに、人ごとにかへりてはまことしからず思て、さすが往生ほどの大事をとげむには。いかにも智慧も、ふかく。さとりもあらん心にて申さん念佛をぞ、佛もうけひき給べき。たゞたすけ給へとばかりはかろがろしと、事たらぬげに思あたり、かやうのうたがひは、げにもと、おぼゆるやうなれども、もとより彌陀の本願は、愚智無智のものゝためなるにさやうに智慧才學あらん心をと、ちかはれては、人をわかぬ利益ありなんや。又聖道門の心は、(一)智慧をきはめて生死をいで、淨土門の心は愚癡にかへりて往生をとぐるゆへに自力をもて生死をいでんみちにぞゆゝしく、智慧才學あらん心も大切なるべき。(二)他力にすがりて往生をとぐるかたにては、中々たゞたすけ給へとおもふが(三)故實にて侍也。されば法然上人は、(四)「念佛を信ぜん人は、たとひ(五)一代の法をよくよ

たすけ給へとおもふ心には、露のいつはりもなきぞかし。それをこそ、至誠心とも申せ、このたすけ給へと思ふは、やがて廻向發願心にて侍也。あまりに、つたなくなりて、心のいたりすくなき身には、本願いしいしの事までも、猶おもひわきがたからめれば、それにつけても、わづかにたすけ給へとばかりこそ、おもひえつべき心にては侍れ。これ程の事は又たれか、おもはでもあらんなれば、みな往生はしつべくこそあれ。三心のゆくゑもしらぬ、あやしのめのわらはべなどの、往生する心づかひは、みなこのつらにてこそ侍らめ。たゞし三心こまごまとならひしりたる人も、念佛うち申てゐたるつねの心づかひは、たゞたすけ給へともたるゝなめり。されば阿彌陀佛をたのみたてまつりて、往生をねがふほどの人は、智慧あるも智慧なきもおちつく所はみなひとしき心もち也。さてこそ念佛の功德をうる事も。往生のほいをどくる事も。智者なればとても、まさらず。愚者なればとても、おとらず。かしこきもおろかなるも、おなじく佛のむかへにあづかり、たかきもいやしきも、

この世のいとなみ、惡をなす時は寢食も、なをわすれ、善をなす時は起居みなわづらはし。かゝるあさましきとがは、身ながらもさすがにおぼゆらん。出離の緣なき身とは、あらがふところなかるべし。(一)三惡の火坑あしにまかせていりなんとす。永劫の苦果なにとかせんとするや。しかるに彌陀如來、かやうのつたなきものをたすけんために、本願をおこし給ふによりて、わづかに一世の勤苦をもてながく(二)九品の快樂をうけん事は、かぎりなき悅ぞかし。あやうしな、この本願にあはざらましかば、かなしくからきめは見てまし物をと。うしろめたき心のあたの、身をはなれぬにつけても、本願のかたうどのことにたのもしくおぼえ侍ぞとよ。三に廻向發願心といふは別の子細なし。たゞ申す念佛を極樂に(三)廻向してまめやかに往生せんとねがふをいふ也。さてさて、かやうにくはしく申わけは、中々事おほくして、かへりて詮なるべきところやかくれぬらん。たゞ三心のおほすがたは、まことしく、本願を信じて、往生せばやと思へとにて侍なり。又詮ずるところ、三心とは本願をたのむこゝろにて侍れば、佛たすけ給へと思ふ心だにもあれば、三心はをのづからその中におさまるべきなり。しかるゆゑは、罪おほ

(一)三惡。地獄、餓鬼、畜生の三。

(二)九品。上卷の初めに出づ。

(三)廻向。具には廻因向果。己が作り爲したる善根功德を、極樂往生の爲に振り向ける事

もしたはしく、人のなさけもことにうれしく、おぼゆるやうに、わが身の罪惡深重なることを、よくよくおもひしりてこそ、かゝるをすてぬ本願と、きかんも、いとゞかたじけなくはおぼえぬべけれ、かの聖道の修行におもむく人は、初心より(一)極佛の思をなすゆへに、凡身のあなうらにとゞこほらず、佛祖のいたゞきをこえんとおもへり。されば自身即佛とをごりて他力本願をおとしめたり。この淨土の出離をもとむるものは、(二)鈍根無智の機なるがゆへに、(三)緣を本願にからずしては(四)運を穢方につくしがたし。これによりて身を出離の緣なきものと、くだしはてゝ、たのみを超世の願にかくる心をおこさしむる也。たとへばよの中の人のありさまも、あやしき、しばのいほりにすめども、あるじとなる時は、をごるけしきあり。いみじき玉のうてなにまうでゝも、やつことなるおりはへる心あるがごとし。我人にしたがふと、我人をしたがふるとは、その心もち、かはることなり。聖道淨土の修行の用心のたがひめは。これになずらへてしりぬべし。されば往生を期せん人は、かへすがへすおこの氣なく、身のほどをしり給へとよ。さもげに、わろき身ぞかしな。おもひと思ふ事は、のちの身のあた、なしとなすことは、

(一)極佛。妙覺果滿の位、悟りの絶頂と云ふ意也。極佛の思。眞言には父母所生身速證大覺位と數へ。禪家には指人心見性成佛直と示し。天台には煩惱即菩提生死即涅槃、と觀じ。華嚴には、初發心時便成正覺、と談ずるが如き是なり。

(二)鈍根無智の機。性質にぶく、習へる觀智も無き者。

(三)緣。佛力の增上緣。因に對する語にして、種子の萠を助くる雨露の如し。

(四)運を穢方につくし。三界六道の道の絶ゆる事なり

(一)願力。彌陀如來ハ衆生濟度の誓願力。

(二)出離の緣。苦海生死の繫縛を脱離する機緣。

るゝ程のまことは、よにやすき事なるべし。ゆめ〳〵往生をかたくはおもふべからず。されども人の心すなほならぬより、やすき念佛にくせもつきぬるこそ、返々ほいなくおぼゆれ。人ごとにつくろはぬ心にて、たゞありに申す念佛ならばみな往生はしてんかし、凡夫のならひなれば、この世さまの事こそあらめ、往生の方ばかりはねんじて、さな侍りそかし。二に深信といふは、ふかく信ずる心なりと釋して、往生を、うたがひそと、いましむる也。これにつきて二の信あり。一には自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より、このかた、つねに沒し、つねに流轉して出離の緣あることなしと信じ、二にはかの阿彌陀佛、四十八願をもて、衆生を攝取したまへば、うたがひなく、うらおもひなく、かの(一)願力に乘じて、さだめて往生することをえんと信ぜよといへり。いまこの二の信のおもむきは、苦海常沒の身にして(二)出離の緣もなき我らぞかしと、ひたすら自力のかけたる事をしらせて、されども彌陀の本願によりて、うたがひなく往生せんことのうれしさよと、うら〳〵と他力に思ひつかせむとなり。たとへば世のなかのならひも、さこそあれ。かなしくかずにもあらぬ身となりぬればこそ、わびてはすゞろに世

ばにはおもふよしにいふを、まことなきいつはりと申すやうに。念佛せん人の心も、このなずらへにしられぬべし。心のうちには往生の事までも思ひいれずながら、なべてこのごろの世のしきなるを、いかゞうたてうとおもひて申人も侍るらむ。もしは又身のすてがたきまゝには、世わたるはしにとりなしてとなふるものもありぬべし。これらはみな、心は名利のかたにおもむきて、行は往生を心ざすよしなり。かゝるは虚假にいつはれる念佛なるべし。たゞ心に往生がしたければ。くちに南無阿彌陀佛と申さるゝこそ眞實にまことなる念佛にては侍れ。たとへば何事も、かざりたる世のなかに、人の湯のほしき水のほしきといふのみぞ。いつはらぬ事にて侍らむ。いさゝかにても、ほしき心のなきほどは、こはれぬ事にてあれば、そのほしき心に、濃きうすきはありとも、こふことばはみな、まことなるべし。後世にむけても、かくこそありたけれ。すこしにても往生がげにしたくおぼえて、南無阿彌陀佛ととなへんは、そのねがふ心に、ふかきあさきはありとも、申さん念佛はみな、まことなるべし。こゝろざしふかくば上品に生れ、あさくば下品にてこそくだるとも、みな往生の埒のうちには入ぬる也。その下品にうま

歸命本願鈔 中

修行者又問ていはく。(一)本願に「至心信樂欲生我國」といふは、ひろくいへば三心なり。要をとれば助け給への一念にたりぬと。の給つるその三心とはいかなる心にて侍ぞ。などてか又、たすけ給へとおもふ一念には、たるべからん。くはしくかたらひ給なんやといへば、老僧のいはく。よくとひ給たり。すゝみても申たかりつるに、これなん往生の大事にて侍べし。そのゆへは(二)經には「三心をぐするもの、かならずかの國にうまる。」ときゝ、(三)釋には「もし一心もかけぬれば、うまるゝ事をえず。」といひて、そのおもむき、いるかせなるまじきごとくみえたり。されば念佛するものゝ中に、往生をとげぬが侍るは、一心もかけにけるにこそ。三をぐしたらんものゝ、うまれぬはあるまじき事なり。その三心といふは。一には至誠心、二には深信、三には廻向發願心。一には至誠心といふは、眞實の心と釋して、(四)虛假の心をいましめたり。念佛せんにまことしき心ありて、いつはる心なかれとなり。たとへば人の心には、さまでもおもはぬ事なれども、こと

(一)本願。法藏菩薩の第十八願を指す、其の全文、上卷に出づ。

(二)經。觀無量壽經なり。

(三)釋。善導大師の往生禮讚を指す

(四)虛假の心。眞實に相對する語にして、僞りの心、と云ふ意なり。

(一)五濁。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁なり。總じては、疫病、饑饉等の災難群起する濁惡の世、と云ふ意なり。

(二)四儀。行、住、座、臥の四儀威。

(三)煩惱。心を喧しく煩して、惱亂する義にて、ほしい、にくい、かわゆい等の迷ひ也。具には、百八の煩惱、八萬四千の煩惱等と其の類甚だ多し。

(四)隨犯隨懺。念佛すれば、犯すにつれて、其の罪、念佛の功力にて消滅する意。

(五)福薄因疎。過去現在の善根少くして、佛に値ひ奉ること因うすし、との意。

(六)識癡行淺。心愚かにして、修行の功淺き事。

(七)多生曠劫。生れかはり死にかはり、永らくの間、と云ふ意なり。

(八)安養界。極樂淨土と云ふに同じ。

とく、やめてこそといはんも、又ふぜいすぎたり。なにとしても(一)五濁の凡夫のくせなれば、(二)四儀の作罪とゞまるべきにあらず。たとひわづかにきよき心をおこせども、水にゑがくごとし、貪瞋のなみ、みなぎりきたりて、しばらくもやむ事なし。すでに、(三)煩惱のみなもとをたゝず、いかでか罪業のながれをやめん。たゞわろしとしりあさましとおもふ心ばせまでを申にてこそあれ。ねんじかねてあやまりたらんおりはそれぞかし。たすけ給へ南無阿彌陀佛とおもふべかんめるも、かゝるを(四)隨犯隨懺の念佛とはいふなり。罪垢こと〳〵く、きえて身つねに清淨ならん。臨終の時罪入惡人の名をあらためて、來迎のほとけ善男善女とほめ給ふべし。さてもな。これほどに(五)福薄因疎の機、(六)識癡行淺の身として、すみやかに、あとを娑婆にとをざかり、心を淨域に、すましめん事はひたすら他力本願の御恩ぞかし。(七)多生曠劫にも、いかでか報じたてまつらん。「誓て彌陀の(八)安養界に到り、穢國に還來して人天を度せん、願くば、わが慈悲際限なくして、長時長劫に慈恩を報ぜむ。」さらではいかゞとうちくどかれたるけしき、いかにつれなからん心も、げにとはさすがおもはれぬべうこそ。

(一)超世の悲願。並々ならぬ、彌陀大悲の本願、と云ふ意。

はせよ。たとへば人のおやのとがある子をあはれむ。をかすところを、いましめざるにあらず。いましむれども又すつる事なきがごとし。彌陀の本願罪人をすくふ、つみを、にくまざるにはあらず。にくみながらすて給はざるこそ、わりなき慈悲にては侍るめれ。さればそのおもむきを心えて、ふるまはん人ぞ、わろ〳〵も佛の御心には、かなひ侍るべき。法然上人の御をしへには、十悪五逆も往生すと信じて、すこしのつみをも、をかさじとおもへ、重罪なをうまる、いはんや小罪をやと、の給へり、十悪五逆も往生すと信ぜよといふは、にくみながら、すて給はぬ御心をしるなり。すこしのつみをもをかさじと思へといふは、すてねどもにくみ給事を、つゝしまんためなり。にくみながらすてたまはずと、しりぬれば、重罪なりとも、うまれん事うたがひなし。すてねどもにくみ給ぞかしとしりて、つみをおそるゝ時は、いはんや小罪をやと、いよ〳〵たのもしげにも。にくみてすて給はゞ、(一)超世の悲願かひなかるべし。我らなにをか、たのみとせん。すてたまはねばとて。つゝしまずば、あまりにあやにくなるこゝろなり。かゝらん、ひが〳〵しさをぞ、佛も、かへりて、うと見給べき。さればとて、つみをことご

（一）人能念佛。善導大師の著、法事讃の文なり。人よく佛を念ずれば、佛還つて（人を）念じ給ふ。と和訓す。

（二）籠々常在。同上。籠々として常に行人の前に在り。と和訓す。

（三）終時從佛。同上。終る時、佛に從て金蓮に坐す。と和訓す。

（四）永觀。三論宗の高僧にして、禪林寺に住し、熱心に淨土の行を修せし人なり。下に引けるは其の著、往生十因の文也。

にて。佛もうと〳〵とおぼゆれば、（一）「人能念佛佛還念」のしたしきおもひもなく、をのれと、とをざかるこゝろのへだてに、（二）「籠々常在行人前」のちかきたのみもなし。かゝる念佛にてはつみもきえがたく、ほとけのむかへもいかゞあらん。されば（三）終時從佛坐金蓮のほいもながくたがひぬべし。あさましかるべき事ぞかし。さしも佛のかたよりは、いかさまならんをも、すてじとおぼしめされたるを、こなたより、かゝるつみある身なればと、なまざかしき心のおにこそ、中々身のあだにては侍れ。たゞひたすらにたのましかば、よろづのとがはゆるし給なんかし。おもはずに心をきばみたるは、この世さまにもにくき事なり。いたくわろからんにつけてこそ、いとゞたすけ給へとは思ふべけれ。されば（四）永觀も「我身もし持戒精進ならば、なんぞかならずしも彌陀をのみたのまむ。破戒懈怠の身なれば十念往生の願をたのむなり」との給へり。そのほかの人はまして、さこそたのみ侍るべけれ。たゞし、かゝればとて、本願をたのまん人は、とがをあらためず、つみをおそれずといふにはあらず。罪人は往生すれども罪業は往生のさはりなり。身をばひげすべからず、つみをばおそるべし。このいはれをよくよく心え給

財をうしなへる事は、諸佛こぞりて、惡をやめ、つみをとゞめよとのみ、いましめ給ひしをきてにかなはざりしによりて、かなしく慈悲の父母にすてられて、あぢきなく流轉のみなし子となりにしゆへなり。しかるを彌陀の本願にも、又多聞淨戒をえらびとり、破戒罪根を、えらびすてたまふ事ならましかばいかゞはせん。かゝるつたなき身には、おもひたえたる往生にてぞあるべきに、いまこの釋の中に、「多聞と持淨戒とを簡はず、破戒と罪根の深きとを簡はず、」とて、たゞおなじ詞にいひすてられたるこそ、ことにみゝにたちてたうとく。本願の人によらぬほどもかたじけなくおぼえて、よろこびのなみだもふかくにこぼれにけれ。又法然上人の、鍛冶往生番匠往生とのたまひけんも、たゞもとの身がらをあらためずとも、念佛せば往生すべしといふ心なるべし。かくてぞげに本願もひしとわが物におぼえて、彌陀も諸佛にこえてたのもしかんめるを、人ごとに女はあまにもなり、おとこは法師にもなりて、在家のちりにもけがされず。妄念のにごりをも、すましてぞ。佛の御こゝろにはかなはんずるとおもへるほどに、いまのわが身は本願のよそなる物になりぬ。かくてはあたら念佛もいたずら物なる心地

(一)法照禪師。支那唐代の人。五會法事讃を著し、五會念佛を勸進す。下に引けるは、同讃中の文なり。
(二)持戒。破戒。佛の禁制を戒と名づく。是れに五戒、八戒、二百五十戒、五百戒等の別あり、是等を守るを持戒と云ひ、犯すを破戒と云ふ。

そときたれ。いつかは善人をのみといひたるや。そのうへはたゞまづ善人は善人ながら惡人は惡人ながら、ありのまゝにておさまるべしとこそ心えられたれ。つたなかりし心のもちやう、わろかりし身のふるまひを、あらためてのちかなふべくは、善人をのみすくふ本願とぞ申すべき。さてはなにをもてか、世にこえたるちかひのしるしとせん。たゞしゑらぶところは、わが國にうまれんと思て、名號を、となへんものをと侍れば、往生のねがはしからざらんこゝろと、念佛におもむかざらん心とをぞ、いかほどもあらためずしては叶まじかんめる。このゆへに(一)法照禪師は、「彼の佛因中に弘誓を立つ、名をきゝて我を念ぜば、總て迎來せんと、貧窮と富貴とを簡ばず、下智と高才とを簡はず、多聞と持淨戒とを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず、但廻心して多く念佛せしむれば、よく瓦礫をして變じて金とならしむ。」と釋して、(二)持戒も破戒も、とてもかくても機のよしあしはさらにもいはずただ往生のこゝろざしにて、南無阿彌陀佛と申さんのみ。本願にはかなふべしといへり。抑三世の諸佛いづれか多聞淨戒をほめ、破戒罪根をすて給はざるや。われら無始よりこのかた、六道の貧里にまよひて、福智の珍

なければ、よきもあしきもたゞいふといはぬとにてこそあれ。こゝろのうちをくらべたらばいく程のけぢめ侍らじかし。たとへばそれはともかくもあれ。まつこの阿彌陀佛を、諸佛にこえてたとびたてまつる事は、何ゆへとかしりたまふ。さしもの十惡五逆の機をわづかに(一)一念十念の功にて、たすけ給ふ事のならびなき、かたよりこそ、(二)超世のほまれをも、あげて一代の教にも、ほめられ給ふ事にて侍れ。さればその本願のをこりは、(三)三世の諸佛にもすてられ(四)十方の淨土にも入られぬものゝ、惡をこしつみをつくる事はあらき風よりもはげしく、とき雨よりもしげくして、さだめて惡道におちなんとするをあはれまんがために、こゝろを五劫の思惟につくし、身を(五)兆載の修行にくだきて、たて給へるちかひ、成じ給へる願ぞかしな。それをばたが身のうへとかおもはるゝ、しかしながら我らがためにこそ侍るめれ。かゝるいたづらものなればとて。諸佛はうらめしくすて給にしを、われだにもとてかたじけなく、彌陀ひとりあはれみ給ふゆへにこそ、(六)「われ超世の願を建つ、必ず無上道に至らむ。此の願滿足せずんば、誓ひて正覺を成ぜじ。」とはの給しか、されば本願には、わく所なく總じて十方衆生とこ

(一)一念十念。一聲十聲の念佛。
(二)超世。三世十方の諸佛のそれに勝れたる事。
(三)三世諸佛。過去、現在、未來の三世に亘つて、特に出世する有緣の佛。
(四)十方の淨土。東西南北、四維、上下の十方各々に淨土あり。
(五)兆載。無限の時間を云ふ。
(六)我建超世願。法藏比丘の誓偈にして、無量壽經に出づ。

又修行者とひていはく。「本願のなかの十方衆生といふは、惡人をあて本とすべしとのたまはせつれば、その機にもるゝものはあるまじきなんめりとまめやかに、たのもしけれども、たちかへり又わが身のありさまをおもひとくには、なをうたがひのこらざるにあらず。そのゆへは。かやうにすがたは(一)黒衣なりといへどもこゝろは(二)白俗よりもにごれり。あやまりて(三)出家のかたちをかりて、渡世誑惑のはかりことし。(四)沙門の名をぬすみて(五)名聞利養のなかだちとせり。これ無刀の大賊なり。劫盜よりもつみあらんかし。たま〳〵うちしづまる時は又(六)妄念こゝろにきほひて、念佛はたゞ口ばかりなり。あまりなるには人はよもこれ程もあらじ。わが身ひとつのくせにこそとまでおぼゆるにも、かゝらん身のありさまをばすこしひきかへてこそ、十方衆生のうちにもいらめとおぼゆるは、ひがごとに侍るをやといへば、老僧のいはく。あな事あたらし、ひたすらにごりにそみたるよりも、中々なまうかびでは、つみおほき事ぞとはしり給はずや。されば在家の(七)十惡は(八)下品上生にうまるれども、出家の破戒は下品中生とこそとかれたれ。すべてこのごろのありさまは、世もをしなべてにごり。人もおなじくつれ

(一)黒衣。總じて僧侶の事を云ふ。
(二)白俗。普通世間の人を云ふ。
(三)出家。五欲の家を出づるの意にして僧侶の事。
(四)沙門。梵語にして勤息と譯ず、出家して佛道修行する人と云ふ意。
(五)名聞利養。名譽にあこがれ世の外聞を飾り、私事に財利をむさぼる事。
(六)妄念。迷へる思。
(七)十惡。身にて作る三罪、殺生、偸盜、邪婬。口にて作る四罪、妄語、綺語、惡口、兩舌。意にて作る三罪、貪欲、瞋恚、愚癡。是等を合せて十惡と稱す。
(八)下品上生。極樂に上中下三品の別あり、更に其の三品の各々に上中下三生の別あり、其の中の下品上生なり。

を、これ程のぶんにてはいかゞとぞ。かへりてうたがはれぬべけれども、もし生れずば正覺をとらじとちかひ給ひぬるうへは、ゆめ〳〵卑下すべくもなかりけり、をのが力にて生るればこそ身の程をもかへりみめ。佛の願力によるべからんには、いかさまにてこそかなはめなどはおもふまじき事ぞかし。されば(一)善導大師「若我成佛十方衆生、願生我國、稱我名號下至十聲、乘我願力、若不生者、不取正覺」と釋し給ふて、乘我願力のことばをそへられたる事は、これ程につたなき機のわづかなる心行は、さらに物のようにたつべくもなきよは〳〵しさなれども、さしもねんごろにむまれしめんとおぼしめす、佛の御心ざしの力に、とりたてられて、その本願に乘ずるがゆへに、往生するなりといふ事をあらはさんとなるべし。しかるをよのつねの人のおもはくは、かひなくたゞ、をのが心ざし、をのが行の功にて、むまれんずるやうに心得て、ひたすら佛の御ちからとのみはおもはぬこそ、おほけなき事にて侍れ。さる程はすゞろに心行も不足におぼえ往生もうたがはしげなり。これしかしながら(二)他力のいはれをおもひわかぬゆへ也。

(一二)凡夫。罪を造る鄙しきもの〻意。

(一三)出離。六道生死の苦を免る〻事。

(一)善導大師觀念法門の文。「若しわれ成佛せんに、十方の衆生、我が國に生ぜんと願じて我が名字を稱せむこと、しも十聲に至らんに我が願力に乘じて、もし生ぜずんば正覺を取らず。」と和訓ず。

(二)他力。佛の本願力に打ち任せて往生する事、自力に相對する名目なり。

の(一)聖道門のなかに(二)五逆の(三)調達をさして、(四)三菩提の(五)記別をさづけしが如きは先は機をきらはぬ法なんめりとたのもしけれども、(六)僧那を(七)始心にむすび(八)妙觀を十乘にこらさしむるにいたりては、發心修行、さらに(九)下根のをよぶ所にあらざるがゆへに、つゐには機をえらぶ教になりぬ。されば(一〇)無始生死よりこのかたさすが佛教にもこそ遇つらねどもいまゝでなを(一一)流轉の(一二)凡夫たる事は機根は拙くして心行のをよびがたきによるなり。しかれば自力の(一三)出離は、つや〳〵思たえたることにて侍るに、いまこの淨土の教門、彌陀の本願をもて、我らが分にあてゝみれば、すでに極惡をすて給はぬうへは、もとよりつくろはずしてその機なり。又機のつたなきにつけては、をのづからたすけ給へとおもふ心もをこりぬべし。心にたすけ給へとだにもおもへば、はげまざるに申さるゝ念佛なり。はかなきこの世さまにつけてだにも、なげきある時のまぎらはしには。南無阿彌陀佛とこそいはるめれば、まして後の身をいかゞとおもはん人は、わすれても、となへつべくこそ侍れ。さればこの機と心と行とにてぞ。我らが生死をいでん事は、むげにたやすくなり侍りぬる。さるには又さしもたやすかるべくもなき往生

(二)五逆。殺父、殺母、殺比丘、出佛身血、破和合僧の五を云ふ。
(三)調達。釋尊の當時、阿闍世太子を勸めて五逆を行はしめし惡人なり。
(四)三菩提。梵語にして、等正覺と譯ず、成佛と云ふに同じ。
(五)記別。佛の豫言。
(六)僧那。弘誓。
(七)始心。初發心。
(八)妙觀。十乘の妙觀と云ひ、天台の摩訶止觀に在り、圓頓行者正修の觀法也。
(九)下根。知識の劣れる者。
(一〇)無始生死。始めも分かぬ先の迷ひ初めよりと云ふ意。
(一一)流轉。六道をさまよひ巡るの意。六道とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つを云ふ。

ぬらん。されどもたづね給ふ所の、さりがたければ心にのこりたらん事の、かたはしを、いさゝかきこえ侍らむ。いにしへ智者たちの申されしは、念佛して極樂に往生すといふ事、さらに別の子細なし。いかなる惡人なれども、たすけ給へと思ひて南無阿彌陀佛ととなふれば、佛の本願に乘じて必ずうまるゝ也。その願といふは、四十八願の中の(一)第十八の願に、「設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺」と說きたまへるなり。この願をくはしく心うるに、(二)機につきて(三)心行あり。佛につきて誓願あるべし。そのなかに十方衆生といふは、まづ往生の機類をさだむ。善人も惡人もともにおさまるべけれども大悲の本意をはかるに。もとも惡人をさきとすべし。至心信樂欲生我國といふは往生の安心をあかす。くはしくいはゞ(四)三心あるべし。要をとればたすけ給へとおもふ心になりぬ。乃至十念といふは、往生の起行をとく。彌陀の名號をとなへんこと、十こゑ一こゑまでもすてじとなり。若不生者不取正覺といふは誓願をたつ。その念佛せんもの生るまじくば、われ(五)正覺をとらじといふなり。おほよそいづれの教にも機と心と行との三をあきらむるが、諸宗の大事にては侍るなるに、か

(一)第十八願。無量壽經の中に在り。もし我れ佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、我が國に生ぜむと欲して、乃至十念せむに、若し生ぜずんば正覺を取らじと訓ず。

(二)機。佛の教を奉修する衆生。

(三)心行。安心と起行との事。

(四)三心。至誠心、深心、回向發願心なり、具には中卷に說くが如し、三心次での如く、願文の至心、信樂、欲生我國の三言に當る。

(五)正覺。成佛と云ふに同じ。

(一)聖道門。自己の修行力に依つて佛道を成ずる法門にして、淨土門に相對しての名目なり。

ころ、いとおいたり。をのれからも、よにたうとく思ひいれたる所、さぞ、ふかゝらむと見えたり。ちかくこのあたりより詣でたる人なるべし。いまひとりは(一)初發心のものなんめり。いづくよりの修行者にかあらむとおぼゆ。眠りにけるまに、何事をか語りけむとゆかしくきゝゐたれば、修行者のいはく。「(二)本師一代の(三)諸教は(四)機根の萬差に逗ずれども(五)末法萬年の利益は、念佛の一門にかぎれりといふ事、みなうけたまはりおよぶ所なり。しかはあれども、この念佛の一行をもて、決定往生すべきことはり、いかなるゆへとしらず。もとより一文不知の身なるうへ、はか〱しく(六)知識のをしへをも承らねばつや〱たちいらぬ事に侍り。不審までもをよばぬうゐ〱しさなれば、いづくをいかにと問ひ申すべしともおぼえず。たゞをろかなる心をくみて、きゝやすきやうにをしへ給ひなんや」といへば、

老僧のいはく。「さやうの事は智者のわざなり。さらに愚老がわきまふべき所にあらず。申さむにつけて佛の知見もはゞかりあり。人のあざけりいかゞあらん。そのうへをのづから聞きをきたりし事も、ちかごろはいたく老衰れてみなわすれ

(六)通夜。夜もすがら佛前に於て修行する事なり。

(一)初發心。佛門に入りて日尚ほ淺き者の事。

(二)本師。今は釋迦牟尼世尊の事なり。

(三)諸教。大小權實八萬四千の法門。

(四)機根。教法を聞きて其れを修證し得る各々の能力。

(五)末法萬年。釋尊入滅より五百年間を正法、次の千年を像法、次の萬年を末法と云ふ。今は其の最後の時期なり。

(六)知識。學德兼備の僧、今は淨土の學門と念佛の德とを兼ね備へたる人の意なり。

今さらあはれにおぼえて、(一)一佛浄土もいとゞ急がるゝ心ちすれば、むかしのなごりは花のうへにてもわすれじ物を(二)各留半座乗花葉わがためにもぞ殘すらん。待我閻浮同行人、その人かずに洩れじかしとたのもしくおぼえて、臨終のありさまなど、くはしくかたらふ程に、おぼえずして時うつりにけり。とみれば、日もやう〳〵入りなんとす。立ちかへらん道もはるかなれば、いかゞはせましと思ひわづらふに、さても今日は(三)彌陀感應の日なり。たま〳〵又、(四)利物偏增のみぎりにちかし、事のついでなるは心やましけれども、をろかならぬ心ざしは、佛しり給ひなんと思ひて。その夜は(五)眞如堂にまうでて(六)通夜し侍りぬ。夜さふけ、人うちしづまる程になりにしかば、青嵐のきをはらふひゞき、をのづから念佛衆生のこゑをそへ、皓月いらかを照しかけ、"そらに攝取不捨のひかりをます。心すごさもかぎりなきに、みちのくたびれとりそへて、しづかに念佛するとおもふ程に、さながら眠りにけり、されどもたびねのとこ、うちとげがたく、老の枕おどろきやすければ、程なくねさめてきけば、いつの程よりか、まうでにけむ、僧二人なつかしく、ゐよりてうちかたらふ音すなり。一人は、しきりにうちしはぶきたる

(六)安心。心の落ち付け方、後に詳し。

(七)起行。實行、口に名號を唱ふる事。

(一)一佛浄土。同じ佛の御國と云ふ意。

(二)各留半座。以下二句、法照禪師の五會法事讃下に出づ。先に往生したる人が蓮臺の傍らにより居て半座をあけて、後より來たる娑婆の同行人を待つと云ふ意。

(三)彌陀感應の日。月の十五日なり。

(四)利物偏增。慈恩の西方要訣に出づる語。佛の衆生を利益し給ふことを日を逐うて增勝するの意也。今は斯かる佛を安置せる眞如堂に近しと云ふ心なり。

(五)眞如堂。一條院の御宇、正歷三年の創立、鈴聲山眞正極樂寺と稱し京都東山に在り。

して、往生の徑路ひとかたに思ひさだめがたし。このなかに、いづれか、まさしき法然上人のすゝめ給けんおもむきならんと、覺束なければ、面々に我こそ黒谷の遺風なれと稱し、これなん吉水の餘流なりと號すれば、あまねく、とぶらふに隨ひていとど愚かなる心まよひぬべし。さのみよも、上人のをしへのまち〳〵なりしにはあらじ。いかにも下愚の今案のみだりがはしきならんとをしはかられたり。さればいかゞして相傳の正否をもあきらめ、法門の是非をも、匡ましなんと、さま〴〵思ひわづらひたるにも、あはれ心あらん人もがな、なげき合せまほしきに、まことやそのいにしへ北白河のわたりにすみ侍りしころ、わりなくおもひいれたる同法のありしぞかし。對面などもかき絶えておもひ忘れにける。ゆくゑいかゞなりぬらんと覺束なくてたづねきく程に、ほのかに、そのすみかなんめりとおぼゆる所はあれども、見しにもあらずあれて庭の景色もあとかすかなり。ちかきあたりにたちよりて、もしさる人やとたづぬれば、その僧ははや去年のこのごろにて侍しやらん、めでたく往生し給ひにき。そのゝちは、怪しかる尼の、ひとり出いるがけふしもたがひて侍るにやとかたる。さだめなき世はさる事なれども

(七)四重。殺生、偸盗、邪婬、妄語を云ふ。

(八)八重。四重に觸身、八事、覆罪、隨住の四を加へたる意。

(九)報佛。永き苦行に報ひて成就せる佛體。

(一〇)化佛。報身佛の場合に應じて化現せる佛體。

(一一)無漏無生。煩惱に染まず、生死の苦を離れたる事。

(一二)光明大師。又は善導と稱し、支那唐代の人、念佛弘通の祖なり、稱名する毎に口より光明を放てりと云ふ。故に光明と稱す。

(一三)黒谷の上人。淨土念佛宗の開祖、法然上人なり、叡山西塔の黒谷に居住せる以て名づく。

(一四)穢。穢土卽ち娑婆世界の事なり。

(一五)淨。西方淨土。

歸命本願鈔　上

向阿上人著撰

夫（一）八萬隨情の教門は、みな（二）苦海をわたる法船なりといへども、（三）六八超世の本願のみ、ひとりよく（四）常沒をすくふ教綱たり。是すなはち本師彌陀（五）五劫思惟の善巧、末世の衆生（六）九品往生の方便なるものをや。しかあれば、（七）四重（八）八重のともがら、悉く（九）報佛（一〇）化佛の來迎にあづかり、一稱一念のたぐひ、おなじく（一一）無漏無生の實國にいたる。此ゆへに（一二）光明大師震旦にあらはれて、此おもむきをすゝめ。（一三）黒谷の上人我朝にいでゝ、このむねをひろめ給ひしよりこのかた教をうかゞひ行をもとむるもの四遠にみち、（一四）穢を厭ひ（一五）淨を欣ふやから一天にあまねくして、世のならはし人のことわざになりにしかば大かたことはりまでは我も人も耳なれたる事ぞかし。されども（一六）安心（一七）起行のありさまなんどこまやかに尋ねうかゞはんとすれば、諸方の智者だちそのおしへまち／＼に

相を示現し、緣に隨ひて、莊嚴清淨の國土に在りて、妙法輪を轉じて、諸の衆生を濟度しけり。我が今日極樂を志し願ひし如くに、諸の衆生にその國を願ひ求めしめて、十方に往きて衆生を引接すること、彌陀如來の大悲本願の如し。か樣の利益また樂しからずや。まことに一生の勤めは、夢幻の間なり、何ぞ諸の事を打ち棄てゝ、極樂淨土を求めざらんや。願はくば諸の行者、努々懈ること勿れ。
多くは『雙觀經』『並びに天台の『十疑論』の意に依る。 龍樹菩薩の偈に云はく、「彌陀尊の無量の方便境は、諸の惡趣、惡智識もあらず、一切の惡緣に引かるゝ事なく、自ら佛道に進む事のみなり。一度往生を遂げぬれば、不退にして菩提に至れり、かるが故に我れ彌陀佛を頂き禮し奉る。我れまた彼の尊の功德の事を說くに、衆善廣く大にして邊りもなき事、大海の水の如し。獲る所の善根清淨なるを以て、願はくば衆生と共に彼の國に生れん。願はくば諸の衆生と共に安樂國に往生せん」と。

往生要集卷之下終

逆多き故に、自ら煩惱を起して、還て惡道に墜つるなり。已上。かの極樂國土の衆生は、多くの因緣ある故に、畢竟して退かず、佛道に增進しける。その因緣と云ふは、一には彌陀佛の悲願の力を以て、常に攝め持ち給ふ故なり。二には彌陀佛の光り常に照らして、菩提心を增す故なり。三には水鳥樹林、風鈴などの聲、常に念佛念法念僧の心を生ぜしむる故なり。四には純ら諸の菩薩達は、善き友なれば外に惡緣なく、內に惑ひを除く故なり。五には壽命永劫にして、佛と共に等しければ、生死の隔つることもなく、自然多念に末遂げて、佛道を修め習ふ故なり。『華嚴經』の偈に云はく「若し衆生有りて一たび佛を見れば、必ず諸の業障を淨め除かしむ」と。一たび見るさへ尙ほ爾かなれば、何に況んや常に佛を見奉れば、無量億劫の業障も、春の淡雪露霜の、日に照らされて消ゆるが如し。か樣にいろ〳〵有り難き因緣によりて、極樂の衆生は、所有萬の物に於て、我、我所の心なく、往くも還るも、進むも止まるも露ほども心に係る所なく、諸の衆生に於て、大慈大悲の心を得て、自然に佛道を增進し、無生忍を悟り、究竟して必ず（一）一生補處の位に至り、乃至速かに無上菩提を證して、成佛を遂げ、衆生の爲めに（二）八

（一）一生補處。等覺の位。等覺は僅かに一生を經て、妙覺の佛位に登る故に云ふ。

（二）八相。受胎、降生、處宮、出家、成佛、降魔、說法、涅槃。

(一)二乘。聲聞、緣覺の小乘教徒のこと。

ば苦と云ひ樂と云ひ、共に解脫の道に遠く隔たりぬ、若しは榮え若しは衰ふ、同じく輪廻にあらずと云ふことなし。適、發心修行の者ありと雖も、また成就し難し、煩惱內に催し、惡緣外より牽く。或は(一)二乘の心を起し、或は三惡道に還りぬ。譬へば水の中の月の、波に隨がひて動き易く、陳に前む軍の刄に臨みて則ち逃ぐるが如し。魚の子長じ難く、菴の果實熟すること稀れなり。彼の身子等の六十劫にして退きしが如きも是れなり。唯だ釋迦如來、無量劫に於て、難行苦行し功を積み德を累ね、菩薩の道を求め給ひて、未だ曾て暫くも止り給はず、三千大千世界を觀給ふに、乃至芥子程も、この菩薩の身命を捨て行はざる所なし。皆これ衆生を助けん爲めに、かく修行遊ばされて、その後に自らが菩提の道を成就することを得給へり。その餘の衆生は、己が智分を立てゝ、修行を遂げ得ず。象の子の力弱くして、刀箭に逢ひて死するに同じ。かるが故に、龍樹菩薩の云はく、譬へば、四十里の氷に、一人して一升の熱湯をかくる時、それ程消えて減るに似たり、然れども一夜經て明くるに至りて、猶ほ餘の處より高くなれり。凡夫の娑婆に在て、發心して苦を救ふことも、またかくの如し。貪欲瞋恚の境界、順

の種々の功徳を、見聞くに從ひて、遙に戀慕の心を生じて、各相ひ共に云へるは我れ等何れの時にか、十方の淨土を見ることを得て、諸の佛菩薩に値ひ奉らんと歎きしに、而も若し適、極樂世界に生るゝことを得れば、或は自らの力に依り、或は佛の力を受けて、朝に行きて夕に來り、須臾に去り須臾に還へりて、遍ねく十方の一切の佛の國に至りて、面り諸の佛に仕へまつりて、諸の大士に値遇して常に正しき法を聞き、大菩提の記を受く。乃至普ねく一切の塵數の國に入つて、諸の佛事をなし、(一)普賢の行を修す。また樂しからずや。『阿彌陀經』『平等覺經』『雙觀經』の意に依る。 龍樹菩薩の偈に云はく、「彼の極樂淨土の大菩薩は、日日三時に意に隨ひて十方の佛を直に供養し奉れり、いかばかりか喜ばしき、思ひ議り難し。然しながらこれまた前の世の善業なり、この故に彌陀佛を伏し拜み、常に念じ唱へ奉る」。

第十　增進佛道樂の事

夫れ增進佛道樂と云ふは、今この娑婆世界は、道を修し果を得ること甚だ難しその故何んとなれば、苦を受くる者は常に憂ひ、樂を受くる者は常に著す。され

(一)普賢の行。大慈悲心を以て遍ねく衆生を濟度すること。

願はくば諸の衆生と共に、安樂國に往生せん」。

第九　隨身供佛樂の事

夫れ隨心供佛樂と云ふは、淨土の衆生は、夜晝常に種々の天花を以て、無量壽佛を供養し奉り。また意に他方世界の諸の佛を供養せんと思ふことあれば、即ち彌陀如來の御前に進み出て跪き、手を合はせて、謹んでこの由を申上ぐれば、如來則ちこれを許し給ふ。何れも大きに歡びて、千萬億の衆、各自ら飛び翻へりて等しき輩相ひ追ひて、倶に飛び散り、或は空を飛び、或は雲に乘り、八方上下の無量無數の、諸の佛の國へ、(一)刹那の間に、膦り歩きの如く遊び行きて、佛の御前に進み、禮拜し供養恭敬し奉れり。その供養する備へ物は、諸の妙なる花、諸の名香、百味の妙なる飲食、色々の衣裳、音樂の器具、一切の供へ物、心に隨ひて、自ら出で來りて、毎日朝ごとに供養して、食事は本國に還へりて飲食し、經陀羅尼を讀み、諸の法樂を受く。或は毎日三時に、諸の佛を供養し奉ると云へり。行者沙婆世界に在りし時は、佛の說き置かせ給ふ經文にある所の、十方佛土

(一)刹那。梵音Ksanaにして一彈指の頃の六十五分の一。

なる御事にか笑ませ給へる、願はくば說かせ給へ」とありしかば、その時如來妙なる御聲の八音具はり、雷の如く大音を上げ、菩薩に（一）記を授けて曰く「汝諦かに聽け、十方より來れる菩薩大衆の願を、我れ悉く知れり、莊嚴清淨の國土を求め、無上至極の決を受けて、當に成佛すべし」と。志す一切の法は、猶ほし夢幻の如しと覺りて、諸の妙なる願を滿足して、必ず是くの如くなる淨き刹を成就すべし。諸の法は、電影の如しと知りて、菩薩の道を究めて、諸の功德の本を具へて、決を受けて當さに成佛すべし。諸法の性は、一切空にして無我なりと通達して、專ら淨き佛土を求めば、必ず是くの如くなる國を成就せん已　上。況んやまた水の聲、鳥の囀、草木までも皆妙法を演べ、凡て聞かま欲しきことは、自然天然と聞く。かゝる法の樂は、また何處にかあらんや。已　上（この中は多く『雙觀經』『平等覺經』の意に依る。）

龍樹菩薩の讃に曰く、「一金底寶間の池に生ひたる花には、善根に依て成れる妙臺の座あり、その座の上にましまして山王の如し、有爲の法は無常無我なり、猶ほし水の月、露電の如くにして、名くべき法なしと說き給ひて、常住にして變らぬ妙法の心を示し給ふ。かるが故に我れまた阿彌陀佛を伏し拜みて、常に念じ奉る、

（一）記。記別と云ふ。修道者の證果に關する佛の豫言なり。

（一）無量壽佛。阿彌陀は梵音にして無量と飜ず、無量壽、無量光の二義を具す。故に無量壽佛とは阿彌陀佛の譯名なり。

この時のありがたさ、おもしろさ、快き樂み身に餘りて、いかでか言葉に宣べ侍らんや。或はまた彌陀佛、廣大の御身を現じ、或は丈六八尺の身を現じ、或は寶樹の下、或は寶池の上にましします。衆生の前の世にて、佛道を求めし時、それ〳〵の好み願ひし所の法と、その心の大小に隨ひて、經法を説き給ふ、是くの如く種々の機によりて、種々の法を説き給ひて、各疾く悟りを開き道を得せしめ給ふ。また觀音勢至の二菩薩、常に佛の右左に侍りまし〳〵て、たゞしく論じ給ふ。佛常にこの二菩薩と與に對ひ坐して、八方上下の往來、現在の事を議り給ふ。或時は東方恒沙の佛國の、無量無數の諸の菩薩衆、みな悉く（一）無量壽佛の所に詣で、恭敬供養して、諸の菩薩聲聞衆に及ぼせり。八方上下の佛國よりも、また〳〵是くの如くにして、彼の極樂の淨土の微妙不思議なるを見て、無量心を發して、我が國もまたかくあらんことを願ひ奉る。その時に彌陀如來、尊容を動かし微咲たまひ、御口に無數の光りを出して、遍ねく十方の國を照らし給ふ。光りを廻せば御身を圍むこと三べんして御頂に入り、一切の天人大衆、みな悉く踊躍りて歡喜し仰ぎ奉る。大士觀世音、威儀を整頓ひ、禮拜し謹んで問ひ奉り給ふ樣は「佛何

集り成せる樹なり。樹の上に寳の羅網を覆ひ、枝の間に珠の瓔珞を垂れたり。風枝葉を動せば、その聲妙法を演べ、響流れ布きて、諸佛の國まで徧ねし。之れを聞く者は深き悟りを得て、不退轉に住し、耳根清み徹る。樹の色を覩、樹の香を聞ぎ、樹の味を嘗め、樹の光りに觸れ、樹の相を緣ずること、皆かくの如くにして、佛道を成就するに至るまで、六根清し。樹の下に無量の莊嚴したる座あり、その上に彌陀如來ましましけるが、御相好無量無邊にして、心言葉も及び難し、御髻高く顯はれて、晴天の翠り濃かなり。白毫の光り右に旋りて、秋の月の光り滿てるが如し。青蓮の御眼、丹果の脣、(一)迦陵頻の聲、師子相の胸、仙鹿王の腨千福輪の趺、かくの如くなる八萬四千の相好、紫磨黃金の御身に具はり纏ひで、無量塵數の光明は、千萬倍の日月を集めたるが如し。或時は七寳の講堂にましまして、妙なる御法を說き給ふ、淸らかなる御音深妙にして、聽衆の心を悅ばしめ給ふ。菩薩聲聞、天人大衆みな悉く、一心に手を合して、尊とき御顏を拜み奉る。その時自然の風かすかに吹きて、七寳の樹末亂れ合ひて、妙なる花四方に散り布き、一切の天人は諸の音樂を奏し、いろ〳〵の袖を飜へして舞ひ奏で奉れり

(一)迦陵頻。鳥の名、ヒマラヤ山脈(雪山)に生ずるとも云ひ又極樂世界の鳥とも云ふ。

け禮拜す」。また云はく、「十方より來れる諸の佛子、顯らかに神通を現じて、彌陀の尊容を仰ぎ瞻て、常に恭敬し來れり、かるが故に我れ彌陀如來を頂禮す」と。

第八　見佛聞法樂の事

夫れ見佛聞法樂と云ふは、今この娑婆世界は佛を見、法を聞くこと甚だ難しとす、師子吼菩薩の言はく、「我れ等無數百千劫の間、(一)四無量、(二)三解脫の法を修して、いま大聖釋迦牟尼尊を見奉ること、猶ほし盲龜の浮木に値へるが如し。また儒童は全身を捨てて、始めて半偈を得。常啼は肝府を割きて、遠く般若を求めたり。菩薩すら尙ほ爾なり、何に況んや凡夫をや。釋迦佛舍衛國にましますこと二十五年、その間に彼の九億の家、三億は佛を見、三億は僅かに名を聞き、その殘りの三億は見ず聞かず。佛在世さへ尙ほ爾なり、何に況んや滅後をや。かるが故に『法華』に云はく、「この諸の罪の衆生は、惡業の因緣を以て、阿僧祇劫を過せども、三寶の御名を聞かず。然るに彼の國の衆生は、常に彌陀佛を見奉り、常に深妙の御說法を聞く。淨く嚴りたる地の上に菩提樹あり、枝葉四方に布き、衆の寶

(一)四無量。慈無量、悲無量、喜無量、捨無量。
(二)三解脫。空、無相、無作。

し已上かくの如く。聖衆極樂に充ち滿ちて、互ひに相ひ望み瞻合ひ、共にはなしを聞き、同じく一樣に道を求めて、異なる類ひなし。殊にまた十方恒河沙の佛土の、無量塵數の菩薩聖衆、各神通を現じて、安樂國に至りて、彌陀如來の尊顏を仰ぎ瞻て、恭敬し供養す。或は天の妙なる花を捧げ、或は妙なる寶の香を焚き、或は無價の衣を奉り、或は天の伎樂を奏し、和雅の音を出して、如來を詠ひ讃め、經法を聞き受け、道化を宣べ布けり。かくの如く、夜晝となく往き來絶えせず。東へ歸れば西より來り、西へ歸れば北より來り、北へ去れば南より來り、四方八方上下よりも、互ひにかくの如く滿ち來り、群り去りて、猶ほし盛なる市の如し。此れ等の大士は、一度その名を聞くことさへ、尙ほ少しの緣にはあらず。況んや百千萬劫にも、誰れか相ひ見ることを得まじや。然かも彼の淨土の衆生は、常に一處に聚まりて、互ひに語を交はし物がたりし、物を問ひ習ひ、恭しみ敬ひ親しく近づきけり。これまた樂しならずや。已上『雙觀經』『平等經』の意。龍樹菩薩の偈に曰く、「彼の國の諸の菩薩は、諸の相好を具へて、皆な自ら莊嚴し給へり。我れ今歸命禮拜す、三界の獄を超え出て、目は青蓮の如くなる、聲聞衆無量なり。この故に首を稽

く至心にして念ずれば、みな悉く導きて、安樂世界に至らせ給ふ。龍樹菩薩の讃。また云はく、觀音勢至は、大なる名のきこえあり、功德智慧ともに量りなく、慈悲具足して世間を救ひ、一切衆生の海に遊び給へり。かく勝れたる菩薩には、甚だ遇ひ難し。一心に恭敬して、頭面に禮し奉る已上。かくの如く、佛の跡を續ぎ給ふ大菩薩、その數恒河の砂の如し。色相端しく嚴くしく、功德具足し、常に極樂國にましまして、阿彌陀如來を圍繞せり。また諸の聲聞衆、その數實に量り難し。神通智慧洞らかに達して、威力自在なり、能く手の中に一切の世界を握れり。かの(一)大目蓮の如くなる、神通第一の人、百千萬億無量無數あつて、阿僧祇劫の間、みな共に力を合はして、彼の初會の聲聞を、數へ挍るに、その知る所の數は、一渧の水の如く、その知らざる數は、大海の如くならん。その中に果を得て去る者も數なく、他方より來りて果を得る者も數なし。而も總べて增さず、減らず。譬へば大海の、恒河の水を減らすと雖も、恒河の水を加ふと雖も、而も大海の水は、增すこともなく、また減ることもなきが如し。諸の菩薩衆は、また聲聞衆より一倍なり。『大論』に云へる如し、彌陀佛の國は、菩薩の僧多く、聲聞の僧少な

(一)大目蓮。釋尊の高足にして神通第一の稱ありし人。後外敎徒のために迫害されて橫死を遂ぐ。

〔一〕大勢至菩薩。阿彌陀佛の右の脇士にして知慧を表す。

ん。また地獄に遊び戯れて、大悲を以て衆生に代つて、地獄の苦を受け給ふ。『請觀音經』の偈。弘誓の深きこと海の如くにして、いく劫を經るとも思ひ議られざるなり。多千億の佛に仕へ侍りて、大清淨の願を發し、神通力を具足して、廣く智慧方便を修行し給へり。十方の諸の國土の中に、觀世音の示現し給はざる國はなし。念々に疑ひを生ずることなかれ。諸の衆生の一切の苦惱、死の難に於て、怙み依る所の身となり給ふ。一切の功徳を具足して、慈悲の眼を以て衆生を視給ひ、福聚海の如く無量なり。この故に信じ仰ぎて、禮拜恭敬すべし。『法華經』の意。〔一〕大勢至菩薩の曰く、我れは能く諸の惡趣の、未だ生死の海を渡り出ざる衆生を、渡すことを得たり。『寶積經』の意。智慧の光りを以て、普ねく一切を照らして、三途を離れさせ給ふ、無上の力を得給ふ故に、この菩薩を大勢至と名く。この菩薩を觀ずる者は、無數劫阿僧祇の生死の罪を除く。この菩薩は胎内にやどり給はず、常に諸佛の淨く妙なる國土に遊び給ふ。『觀經』の意。無量無邊無數劫に、廣く願力を修行して、彌陀の助となり、常に大衆の中に居て、法の言葉を宣ぶ。衆生皆これを聞く者、淨き眼を得るなり。神通十方の國に遍ねくして、一切の衆生の前に現ず。衆生若し能

(一)阿僧祇。印度の數名にして無數、無央數等と譯す。

(二)恒沙の定。恒河の沙の如く限り無き數の禪定といふこと。

(三)倶胝。印度の數名にして一倶胝は千萬、或は百億に當る。

(四)觀世音菩薩。阿彌陀佛の左の脇士にして慈悲を表す。

は、千二百劫の生死の罪を滅するなり。よく信仰する者は、無上道に於て退轉せざることを得るなり。『彌勒上生經』の意、彌勒の德を讚め、禮拜する者は、百千萬億(一)阿僧祇劫の生死の罪を除く。『虚空藏經』、『佛名經』の意 無量千萬劫の間に於て、修め給ふ所の願と、智慧と、行と、廣大にして量るべからず。言ひ暢べて稱むるとも盡くることなし。『華嚴經』の偈なり、已上三人の菩薩は、常に極樂世界に在り、『四十華嚴經』に出づ。 地藏菩薩は、毎日晨朝ごとに、(二)恒沙の定に入て、法界に周遍くみちわたりて、諸の衆生の苦を拔き給ふ、所有慈悲の誓願、餘の大士に越えたり。『十輪經』の意 彼の經の偈に云はく、地藏菩薩の功德廣大なる故に、一日名號を稱ふれば、(三)倶胝劫の間、餘の智者の名を稱ふる功德に勝れり、たとひ百劫の間、その功德を讚め說くとも盡きざるべし、かるが故に皆まさに供養すべし已上。(四)觀世音菩薩の言はく、衆生苦あつて三度我が名を稱へんに、我れ行きて救はずば正覺を取らじ。『弘猛海慧經』 若し百千倶胝那庾多の、諸の佛の名號を稱へ、念ずることあらん、また我が名號を、暫くも心を至して稱へ念ずることあらん、この二人の功德同じことなり。諸の我が名號を稱へ念ずる者をば、一切皆不退轉の地を得せしめん。『十一面經』 衆生若し觀音の名を聞けば、苦を離れて解脫を得

り。十方の如來の初めて發心し給ふことは、みな是れ文殊の教化の力なり。一切の世界の諸の有情、文殊の名を聞き、身相及び光りの相を見、並びに有情の類ひに隨ひて、諸に化現し給ふを見るものは、みな佛道を成就すること、思ひ議り難し。『心地觀經』の意なり 若し但だ名を聞く者は、十二億劫の生死の罪を除き。若し禮拜し、供養するものは、常に佛家に生るゝなり。若し名號を稱へて、一日にても若しや七日にても、怠らざれば、文殊必ず來り現はれ給ふ。若し前の世に障ある者は、夢の中に文殊を見て、求むる所悉く叶ふなり。若し形像を見る者は、百千劫にも惡道に墮ちず。若し慈悲心を行ずる者は、即ち文殊を見ることを得るなり。若し名號を受け持ち、稱ふる者は、設ひ重き障りありとても、阿鼻地獄の、極惡猛火に墮ちず、常に他方の清淨の佛土に生るゝなり。『文殊般涅槃經』の意なりその形像のこと經に廣く說く如し。また百千億那由他の佛の、衆生を利益し給ふことは、文殊師利菩薩の一劫の中になし給ふ所の利益にも及ばず。かるが故に、若し文殊師利菩薩の、名號を稱ふる者は、福德も百千億の諸佛の名號を、受け持つよりも多し。『寶積經』の意 (一)彌勒菩薩の功德も無量なり。若し但だ名を聞く者は、暗闇の地獄に墮ちず。一念も名號を稱ふる者

(一)彌勒菩薩。兜率天の内院に居す。五十六億七千萬年後に此土に出現し作佛して釋尊の如く衆生を教化し開導する菩薩なり。

夫れ聖衆倶會樂と云ふは、經に說き給ふ如し、「衆生この事を聞く者は、當さに願を發して、彼の國に生れんことを願ふべし。所以何んとなれば、是くの如くなる諸の上善の人と、倶に一處に會ふことを得ればなり」已上。かの諸の菩薩聖衆は、德行不可思議なり。普賢菩薩の言はく、「若し衆生ありて、未だ善根を種ゑず、及び少しの善根を種ゑたる聲聞菩薩は、猶ほ尙ほ我が名字をも聞くことを得ず、況んや我が身を見んをや。若し衆生有つて、我が名を聞くことを得なば、(一)菩提に於て退轉せじ、乃至夢の中にも、我れを見聞かん者は、また〳〵是くの如し。『華嚴經』の意

また云はく、我れ常に諸の衆生に隨ひて、未來の一切の劫を盡くすまで、恒に普賢の廣大の行を修して、無上大菩提を圓滿せしめん、普賢の身の相は、虛空の如し、眞に依りて住すれば國土にあらず、諸の衆生の心の、願ふ所に隨ひて、普ねく身を示現して、一切に身を等しふして願ひを叶へ、利益し給ふ。一切の國の中の、諸佛の所に、種々の三昧を以て神通を現ず、一々の神通は悉く、十方の國土に、遍ねく滿ちわたりて遺すものなし。一切の國の如來の所に行きて、その國の塵の中にもまた然なり。同じき經の偈

(二)文殊師利大聖尊は(三)三世の諸佛の智慧の母な

(一)菩提。梵音Bodhi智、覺者等と稱ず。佛正覺の智慧のこと。

(二)文殊師利。釋迦牟尼佛の左の脇士にして智慧を司る。

(三)三世。過去世、現在世、未來世のこと。

へ誡しめ、示し導き救ふなり。『平等經』に說き給ふが如し、「西方淨土に生れし者は、みな自ら前きの世は、何れの處に、何樣の者にて、何なる因緣にて今淨土に生れしと云ふことを知り。また八方上下に往き復りし所の現在のことを知るに依りて、彼の諸の天人、人民、鳥獸、蟲けらまでの、心に念ふこと、口に言ふことを知れり。何れの年、何れの劫にか、彼の國に生れて、みな豫てこれを知り、羅漢の果を得、菩薩の道をなすべきや」と。また『華嚴經』の普賢の願に云はく、「願はくは我れ命終んとする時、一切の諸の障礙を除きて、面り彼の阿彌陀佛を見奉りて、即ち安樂世界に往生することを得ん。我れ既に彼の國に往生して、現前にこの大願を成就せん。一切圓滿して悉く餘りもなくて、一切の衆生界を利益せん」と。無緣の衆生をさへ尙ほ爾なれば、況んや結緣の者をや。龍樹菩薩の偈に曰く、「無垢莊嚴の光り、一念及び一時の中に、普ねく諸佛の會座を照らして、諸の衆生を利益す」と。

第七　聖衆倶會樂の事

もの、三にはらるほひの中にわきいづる者四にはばけらまるゝものの中、その人は今、何なる生を受けていづくにありとも知らざるなり。野の獸、山の鳥、誰れか先きの世の親なりと辨へ知らんや。古歌にこの心を詠み侍るにや、

ころ〳〵となくは山田のほとゝぎす
ちゝにてやあらむはゝにてやあらむ

『心地觀經』の偈に說き給ふ如し、「世の人、子のために諸の罪を造りて、地獄、餓鬼、畜生道に墮ちて、永く苦を受く、然れども衆生聖にあらず、神通なければ輪廻せる生々のさきを見ざるに依り、その恩を報じ難く、一切の有情生死に輪廻して、六道の中を廻ること、猶ほし車の輪の如くにして、始めもなく、終りもなし。或は父母となり、或は夫婦となりて、生々世々の中に、互ひに恩有り」。若し極樂に生るれば、智慧高く明らかに、神通洞かに達して、生々世々の恩ある人、知音、近親までも、心の儘に引接するなり。天眼通を以てその生れし處を見、天耳通を以てその聲言葉を聞き、宿命智を以てその恩を思ひ、他心智を以てその心を悟り、神境通を以てその處に逐ひ隨ひ、身を變じて現じ、種々の方便の力を以て教

滅にて、業の報ひの生滅にはあらざるなり。また極樂なれば、苦にもあらず、樂にもあらずと云ふ名もなし、何に況んや苦の芥子ほどもあることなし。龍樹菩薩の偈に云はく、「若し人彼の國に生れなば、終に惡趣及び修羅道に墮ちず、かるが故に我れもまた、命をも顧みず、唯だ一心に彌陀を賴み奉りて、淨土を願ひ求むるなり」と。

第六　引接結緣樂の事

夫れ引接結緣樂と云へるは、人の世に住みて、求むる所意の如くならず、樹靜かならんと思へども風停まず、子養はんと思へども親待たず。また親在せども、家貧しければ、志肝膽を舂くと雖も孝養に備へ難し。また私ならずして遠ざかりぬれば、朝に恩顏を顧て仕ふまつり、夕に寢處を安じ定めずして、徒らに肝膽をくだくのみなり。君臣子弟、妻子朋友、一切の恩ある人、一切の近かづき、みなまたかくの如し。空しく癡愛の心を勞して、いよ〳〵輪廻の業を增す、況んやまた業と果と推し遷りて、生處相ひ隔たりつれば、六道四生（一にははらごもるもの、二にはたまごより生るゝ）

(一)財欲、色欲、飲食欲、名欲、睡眠欲。

(二)別願。極樂往生以外に行者の有する願望。

とも、微塵計りも犯されず。無量無邊の水火の中に入りても燒け溺れず。かるが故に三界六道の縁ある衆生を救はん爲め、または悲願の故ありて、八寒八熱の大地獄の中をも、自由自在に遊び行けり。娑婆の衆生は肉身を受けゝれば、内外共に脆くして、清淨堅固の心あらざれば、(一)五欲の盛んなることは、須彌山よりも高く、蒼海よりも深ければ、色に染み香に愛でゝ、合ふさ離るさに間もなく、心身を惱まして、無きをば貪り有りとても飽き足らず、一生をいたましめ盡くせども、欲心は止まざりける。貪欲を本として、百八煩惱となり、未來の輪廻の業を引く。加之、外より脆き身を犯しつゝ、火難、水難、劍の難、飢渇の難、石に打たれ木に押され、有情互ひに侵し合ひ、寒熱は四季に隨ひて、有情をいたましむ。乃至大きなる者は勿論なり、小さき軒さきにても侵し、疵つくれば苦にあらずと云ふことなし。かの淨土に生るれば、金剛の身にして、不變常住、不增不減、不可思議なれば、肉身の如くなる苦は、微塵ほども曾てなきなり。一度七寶莊嚴の臺の上に至りぬれば、永く三界六道の苦しみに浮き沈む生死の海を別れたり。若しまた(二)別願の子細あつて、他方に生るゝことありと雖も、それは自由自在の生

禪觀念の床の上へ、無想無念の樂みは、微妙にしてはかり難し。或はまた一切の經論を、暫時の中にぞ讀誦しける。或はまた甚深の法門を、最も殊勝に說き明かせり。かく遊び樂むこと、打ち續きて斷え間なし。處は不退の處にて、彼の極樂淨土をば、長へに何時とても、退き去ることあらざれば、永く、三途(一)八難の、畏ろしきことを免れたり。壽はまた無量にて、不生不滅の身なれば、人間の如くなる、生老病死の四苦もなし、心と事と相應して、事に適はぬ心なく、心に適はぬ事なければ、娑婆世界の如くなる、恩愛に迷ひつゝ、必ずまた別れて歎き、ふたゝび盡きぬ物おもひの、愛別離苦と云ふことなし。慈悲の眼等くて、見て隔つる心あらざれば、互に怨み憎める苦もあらず。淨土を願ふその心、諸の欲に染まずして、世間出世の上に盡き、善き行ひの報ひにて、心の水の潔く、萬のことに淡くして、彌陀を念じて一筋に、念々のその中に、この理りにかなひつゝ、自然と至りし國なれば、求めて得ざる患ひなし。金剛の身なれば、設ひ溶くるも變はず、泥にすれども黑まずと云ふ、心に諸の塵勞の境界に犯し穢されず、清淨堅固の妙體なれば、(二)五盛陰苦もなし。設ひまた千萬無數の兵が、弓鎗を以て攻むる

(一)八難。佛を見ず、佛法を聞くことを得ざる難にして一、在地獄の難、二在畜生の難、三在餓鬼の難、四在長壽天の難、五在北鬱單越洲の難、六盲聾瘖瘂の難、七生佛前の難、八生佛後の難を云ふ。

(二)五盛陰苦。有情は色受想行識の五陰より成る。その五陰の熾盛の故に自ら生ずる身心の苦惱を云ふ。

前に現はれて、見まじきと思へば、その境致去りて目に隔たる。香を嗅ぎ、味を嘗め、身に觸れ、法を説き宣ぶることもまた然なり。或は雲の梯を渡り、樂を奏して舞ひ遊び。或は虚空に騰りて神道を現じ。或は他方の大士に從ひて迎へ送り。或は天人聖衆に伴ひて遊覽し。或は寶の池の邊に至り、新たに生れし人を問ひ慰めて、「汝知るや否や、是處をば極樂世界と名け、この界の主をば彌陀佛と申し奉る、今當に歸依すべし」などゝ云ひ。或は同じく寶の池の中に、各蓮臺の上に坐して、もはや(一)宿命通を得ぬれば、互ひに先きの世のことを明かして、我れはもと某の國に在て、菩提心を發して佛道を求めし時に、某の經論を受けて、何々の戒を持ち、何れの法を修し、いか樣の善根をなし、これ〳〵の布施を行じたりしなどゝ、各好み喜びし所の功德を語り、淨土に生れ來りし始終の由來を詳しく述べ。或は十方の諸の佛の利生方便を語り。或は三惡道の衆生の苦を拔くべき謂れを評判し。斯樣に裏なくいろ〳〵の物語をして、その後ち輿に乘じて共に歩き。或はまた七寶の山に登り。七寶の山、七寶の塔、七寶の坊、『十王經』に出たり。八功德池に浴し。或は寂然ともの靜かに、續々と連なり、默坐してもの言はず、威儀を正して、しみ〳〵と坐

(一)宿命通。六神通の一、自他の過去のことを知る神通。

(一)轉輪聖王。須彌四洲を統領する大王。
(二)有頂天。無色界第四天にして三界九地の絕頂なり。
(三)惡趣。三惡道のこと。
(四)西方世界。極樂世界のこと。

第五　快樂無退樂の事

夫れ快樂無退樂と云ふは、今この娑婆世界は、耽り玩ぶことなし、(一)轉輪聖王の位も七寶久しからず、天上の樂も五衰の苦しみ早く來る。乃至(二)有頂天も終に輪廻を免かれず、況んやその外の世の人をや。事願ひと相ひ違ひ、樂と苦と相ひ伴ひて、富める者は未だ必ずしも壽長からず、壽長き者は未だ必ずしも富まず。或は朝に生れて夕に死す。この故に經に曰く、「出る息は入る息を待たず、入る息は出る息を待たず、唯だ眼の前に樂み去りて哀しみ來るのみならず、また命終りて後、罪に隨ひて(三)惡趣に墮つ」と。然るに彼の(四)西方世界は、樂みを受くること窮りなし、人と天人と交はりて、共に相ひ見ることを得たり。總べて何れも慈悲心に薫じて、互ひに一人子の如くに相ひ愛し、諸共に瑠璃の地の上を往き復へり、同じく栴檀の林の間に遊び戯れ、宮殿より宮殿に至り、池より池、林より林に至る。若し靜かならんことを思へば、風の聲、波の音、管絃の調べ、自ら耳に隔たり。若し見んと思ふその時は、深山がくれや、谷川の珍らしき境地まで、目の

(一)世親菩薩。又天親菩薩と云ふ。北天竺、健陀羅國の人にして三世紀頃の人。兄の無着と共に大いに大乘教を弘む。著述頗る多し、世に千部の論主と稱せらる。

の數もなき、あらゆる佛の國の中に、西方極樂世界の、あらゆる功德、最も第一なり。二百一十億の諸佛の淨土、嚴しく妙なること、みな悉く西方淨土に集りて在り。若しかくの如くなる淨土の相を觀ずる者は、無量億劫の、極重の惡業を滅し除きて、命終りて後ち、必ず彼の國に生るゝなり。『二種の觀經』、『阿彌陀經』、『稱讚淨土經』、『寶積經』、『平等覺經』、『思惟經』等のこゝろに依りてこれをしるす。 (一)世親菩薩の偈に曰く、「彼の世界の相を觀ずるに、三界の道に超え勝れて、究竟して虛空の如く、大に廣くして際まり邊りもなし、寶の花千萬種ありて、寶の池の淸き流れ、甘き泉の上に彌り覆ひぬ。風やはらかに吹き涉り、花の色香亂れ合へり、諸の宮殿樓閣は、玉の甍黃金の扉、七寶莊嚴の眞木柱、その相妙にして、悉く言葉に述べ難し。而かもその殿の中樓の上にて、十方を觀ること礙りなし。さま〳〵の寶の樹は、その色妙にして光り奇し。寶の欄干遍く圍み繞れり。無量の寶を以て綾ひ絡りたる羅の網、虛空に覆ひて、黃金白銀いろ〳〵の妙なる響の鈴かゝりて、みな妙法の聲を宣ぶ。凡そ衆生の願ひ求むる所、みな滿足す。この故に我れ彼の彌陀佛の國に、生れんことを願ふなり」と。

味ひにも類せず。また天上の味ひにもあらず。香好きこと人間天上に並びなし、甘さ酢さ心に隨へり。色を見、香を聞ぐとき、身心潔らかにして、即ち同じく食すれば身の色力增しけり。事をはれば化して去り、時至ればまた現ず。また衣服を得んと思へば、念に隨ひて忽ち至る、佛の讃め給ふ如くに、法に應へる妙服自然に身にあり、裁ち縫ひ染め繕ひ、浣ひ濯ぐこと要らず。また光明遍ねければ、月日燈燭などの用なし。熱さと寒さ調ひ和ぎて、春夏秋冬あることなし。自然の德風、暑さ寒さを調へ適へり、衆生の身に觸るゝに皆な快樂を得ること、譬へば比丘の(二)滅盡三昧を得たるが如し。また每日朝ごとに、妙なる花吹き散りて、佛土に充ち滿ちて、香馨し。その花の柔輭なること、兜羅綿の如し。足にてその上を履めば、四寸づつ凹み入り、足を擧ぐればまた、ふくやかにして故との如し。朝を過ぐれば、その花地の中に入りぬ。ふるき花既に入ればまた新らしき花雨りぬ。日中と晡と、初夜と夜中にも、また〳〵かくの如し。これ等の所有微妙の五の境界は、見、聞き、觸るゝ者、心に適ひ悅び樂しむと雖も、淨土の有り難さは、有情の貪著を增さずして、唯だ無量の殊勝なる功德のみ增しける。凡そ十方上下

(二)滅盡三昧。一切の心想を凡て盡滅せしめて得らるゝ寂靜の心境。三昧は定と譯ず。

上には七重の寶の網あり、その網の間に五百億の妙なる花の宮殿あり。その宮殿の中に諸の天の童子ありて、瓔珞光り耀き、自由自在に遊び戯る。かくの如くに七寶の諸の樹世界に遍し。名ある花、軟かなる草、また處に随ひて和かなる香あり、潔らかにして觸るゝもの樂を生ず。（已上樹林）また諸の寶にてなりたる羅き網、虚空に彌り滿てり。その網に諸の寶の鈴を懸けたり。その鈴妙なる法の聲を宣ぶ。また天の花妙なる色々は繽紛と交はり亂れ墜ち、寶の衣、嚴りたる道具など旋り轉びて下ること、鳥の空より下りるが如くにして、諸の佛に散らし供へ奉る。また無量の音樂の器物、虚空に懸り居て、打たざるに自ら鳴りて、みな妙なる法を說く。（已上虚空）また如意の妙香、塗香、抹香、無量の香、馥ばしく香ひて遍ねく世界に滿てり。この香を聞ぐ者は、塵勞垢習、自然に起らず。凡て地より虚空に至るまで、宮殿花樹、一切の萬物、みな無量の寶の雜りたる、百千種の香を以て、共に合はせて成就せり。その香普ねく十方世界に薫ず。菩薩聞ぐ者は、みな佛の行を修す。また淨土の菩薩、羅漢、諸の衆生等は、若し食せんと思ふ時には、七寶の机自然と前に現じて、七寶の鉢に微妙なる百味の飲食滿てり。その味ひ世間の

く者あり、坐禪する者もあり、心に任せて往き復る者もあり。その中に或は未だ(一)羅漢の果を得ざるものは、則ちそれ〴〵の果を得、道を窮めて歡ばずと云ふことなし。また清き河あり、底には黃金の砂を布けり、淺く深く、冷かに溫かに、いろ〳〵の功德具はりて、人の好みに叶へり。諸の人遊び眺め步きて、この河の邊りに萃まる。已上水相。池の畔、河の岸に栴檀の樹あり、樹の葉よくつゞき重なり、紫金の葉、白銀の枝、珊瑚の花、硨磲の實、一の寶の樹あり。七の寶の交はりたる樹もあり。枝葉花果、映り飾りて嚴し。風長閑に枝を鳴らさず、寶の林にそよ〳〵と吹きわたり、羅の網やゝ動きて、妙なる花、ゆら〳〵落ちて風に隨ひ香を散らし、水に雜はり香を流す。況んや微妙の聲を出して五音そなはり、和らぎ合ひぬ。譬へば百千種の音樂を同時に奏するが如し、聞く者自然に覺えず知らず佛法僧を念じける。彼の第六天の萬種の音樂は、この樹の一種の音樂には如かじ。葉の間に花を生じ、花の上に果あり、それより皆な光明を放ちて、化して寶の天蓋となり、樹毎の間に垂れ懸り、一切の佛事天蓋の中に映り現じたり。乃至十方の淨く嚴りたる佛土を見んと思へば、樹の間に於て、みな悉く照らし見る。樹の

(一)羅漢。阿羅漢の略、梵音 Arhan 應供、殺賊、無生、離惡等と飜ず。聲聞の究竟位なり。




第一聖衆來迎樂

(一)波羅蜜。梵書Paramita、度、到彼岸等と譯す。菩薩の修する行にして普通之に六種あり。共に生死の此岸を度りて、涅槃の彼岸に至る行なるを以て度、又は到彼岸の意味を作す。

き蓮華白き蓮華も、各その光りあり。長閑なる風そよ〳〵と吹きわたり、花の光り亂れ合ひ、一入妙なる色にして、芬々と香しく、花の香り充ち滿ちたり。一々の花の中に各菩薩あり、一々の光りの中に、諸の化佛いましけり。微瀾廻りて轉た相ひ注ぎ、安く靜かにして徐くに流れ、速からず、遲からず。その聲微妙にして、佛法にあらずと云ふことなし。或は苦空無我、諸の(一)波羅蜜を演べ說き。或は十力、無畏、不共の法音を流し出す。或は大慈大悲の聲、或は無生忍の聲なり。その聞く所に隨ひて、歡喜の心量りなし。清淨、寂滅、眞實の義により、菩薩聲聞の修行の道にかなふなり。また鳫、鴨、鴛鴦、鷲、鷺、鶴、白鳥、孔雀、鸚鵡、伽陵頻迦の外、寶の色の鳥、浮び遊びて夜晝斷えず、和かに雅しき聲を出して、念佛、念法、念僧を囀り讃め、五根、五力、七菩提を演べ唱ふ。三途苦難の名はあることなく、但だ自然と快き樂みの聲のみあり。彼の諸の菩薩、聲聞衆は、寶の池に入りて浴し給ふとき、淺く深く思ひに隨ひ、その心に違はず。心の垢を洗ひ除きて、その心淸く明かに靜に澄めり。浴しまひて、各自ら去りて或は虛空にあり、或は樹の下に居て經を講釋し、經を讀む人もあり、經を受け經を聽

金の繩にてその道を境ひし、その道平かにして高底なく、大に廣くして邊り際まりなし。諸の妙なる衣を以て遍くその地に布けり、一切の人天これを踐みて行く。（已上地の相。）諸の寶の國の一々には、七寶を以て作りたる五百億の宮殿樓閣あり、高く下く心に叶ひ、廣く狹く思に隨ふ。諸の寶の床には、妙なる衣を敷けり。上に七重の欄干、百億の花の幢あり、珠の瓔珞を垂れ、寶の天蓋を懸けたり、宮殿の裏、樓閣の上に諸の天人ありて、常に音樂を奏して如來の萬徳を歌ひ詠じ奉る。（已上宮殿。）講堂、精舍、宮殿、樓閣の內外、右左に、諸の浴する池あり。黄金の池の底には、白金の砂あり。白金の池の底には黄金の砂あり。水精の池の底には瑠璃の砂あり。瑠璃の池の底には水精の砂あり。珊瑚、琥珀、硨磲、瑪瑙、白玉、紫金もまたかくの如し。八功徳水その中に充ち滿ちたり。寶の砂映徹りて、深く照らさずと云ふことなし。（八功徳と云は、一には澄みわたり淨し、二には冷かに涼し、三には甘く、四には輕く軟かなり、五には潤ひあり、六には安く和ぐる、七には飲むときに飢ゑ渇くなどの無量の患ひを除く、八には飲みて後に必ず能く目、鼻、耳、などの五臟、百骸、四大を養ひ、種々の殊勝なる善根を增す。）四方の邊りの階廊、きざはし、そりはし、その外まで、諸の寶集り合ひて成就せり。種々の寶の花は、池の中にはびこり覆ひて、青き蓮華には青き光りあり、黄なる蓮華には黄なる光りあり、赤

那由他刧に於て、一念の中に自在無礙なり。今この娑婆世界の衆生は、三十二相に於て、誰れか一相をも得るや。五神通に於て、何れの輩か一通をも得たるや。日の光りと燈火とにあらざれば、照らすことなく、歩み行かざれば、近き處へも至ることなし。紙一枚と雖も、その外を見徹すことなく、一念といへども、その前を知らず、(一)樊籠未だ出ざれば、事に隨ひて障あり。然るに彼の極樂の衆生は、一人としてこの德を具へぬ者はなし。百大刧の中に於て、而も相好の業をも種ゑず、(二)四靜慮の中に於て、神通の因をも修せざれども、只これ彼の淨土の、自然と生れつきたる果報なり、また樂からずや。多くは『雙觀經』『平等覺經』に依る

第四　五妙境界樂の事

夫れ五妙境界樂と云ふは、阿彌陀佛の四十八の願を以て、淨土を莊嚴し給ひて、一切の萬物美しきを極め、妙なることを極めたり。見る所はこれ淨く妙なる色なり、聞く所は解脫の聲にあらずと云ふことなし。香を嗅ぎ、味ひを嘗め、身に觸るゝ境界も、またくかくの如し。所謂かの極樂世界は、瑠璃を以て地とし、黃

(一)樊籠。煩惱の纏縛。

(二)四靜慮。色界四禪定のこと。有尋有伺定、無尋唯伺定、無尋無伺定、捨念法事定これなり。

善根を種ゑても、疑へば則ち蓮華開かず、信心清淨なる者は、蓮華開きて則ち佛を見たてまつる」と。

第三　身相神通樂の事

夫れ身相神通樂と云ふは、極樂の衆生は、その身金色にして、內外倶に淨く、常に光明ありて彼れ此れ互ひに照し合ひ、三十二相を具足し、莊嚴端正殊妙にして、世間に比ぶるものなし。諸の(一)聲聞衆は、身の光り一尋なり。(二)菩薩の光明は百由旬を照らす、或は十萬由旬と云へり。第六天の主を淨土の衆生に比ぶれば、乞食が帝王の邊りにあらんが如し。また極樂の諸の衆生は、みな(三)五通を具足して、妙用測り難く、心に隨ひて自在なり。十方世界を見んと思はゞ、歩みを運ばずして即ち見る。十方世界の聲を聞かんと思はゞ、座を起たずして則ち聞く。しかのみならず、無量の過去生のことを聞くこと、今日のことを聞くが如し。六道の衆生の心は、明かなる鏡に影をうつす如く知り。十方の佛の國は、足下にある如くに往來す、凡そ横に百千萬億(四)那由他の國よりして、竪は百千萬億

(一)聲聞衆。小乘教の修行者。
(二)菩薩。大乘教の修行者。
(三)五通。宿命通、天眼通、天耳通、他心通、神境通。
(四)那由他。梵音Nayuta にして印度の數名。或は萬億、或は千億、或は數千萬億を一那由他と云ふ。

あり。かくの如くに無量の天人聖衆、心に隨ひて遊び戯る、況んや(一)化佛菩薩、香花雲の如くに充ち滿ちて、具さに名け難し、またやう／＼眸を廻らして、遙かに彌陀如來を望み瞻たてまつれば、金山王の如くにして、寶の蓮華の上に坐し、寶の池の中央に居給へり。觀音勢至は威儀正しう尊くして、また寶の蓮華に坐して、彌陀如來の右左に侍り給ひ、無量の聖衆恭敬し圍繞せり。また寶の地に寶の樹列び立ち繁りて、その樹々の下に一佛二菩薩まし／＼て、光明を放ち飾ひ、嚴かに莊り、瑠璃の地に遍く照り曜きて、闇の夜に千萬無量の炬火を、俄かにとぼしたてたるが如し。その時に觀音勢至は、行者の前に來り給ひ、大悲の聲を出して、種々に慰め喩し給ふ。行者蓮臺より下りて、(二)五體を地に投げて、頭面に敬禮したてまつり、則ち二菩薩に隨ひて、漸く彌陀如來の御前に至り、七寶の階に跪きて、萬德の尊容を拜み奉り、一實の道を聞きて、(三)普賢の願海に入る。歡喜の涙雨の如く、渇仰の心骨に徹る。始めて佛果に入て、未曾有なることを得たり。行者むかしは、娑婆に於て、纔かに教の文を讀み、或は聞きしが、今は正しくこの事を見る、歡喜の心幾ばくぞや。多くは『觀經』の意に依る 龍樹菩薩の偈に曰く、「若し人

(一)化佛。衆生の機根に應じ種々に形を變へて顯現する佛身のこと。

(二)五體。兩臂、兩膝、額。

(三)普賢の願海。普賢菩薩は釋迦牟尼佛の右の脇士にして慈悲を司ることの菩薩の利他大悲の本願の廣さを海に譬へたる也。

夫れ蓮華初開樂と云ふは、行者極樂世界に生れて、蓮華の初めて開くるとき、ありとあらゆる歡樂、前よりも百千層倍して、譬へば盲者の始めて目のあきしが如く、または邊鄙の賤しき者が、俄かに王宮に入るが如し。自らその身を見れば、紫磨黃金の肌となり、また自然の寶の衣裝を着て、黃金の環、翡翠の簪、寶の冠、玉の瓔珞、嚴しく莊ること量りなし。佛の光明を見て清淨の眼を得、先きの世の宿習によりて、諸の法の聲を聞く。色にふれ、聲にふれて、珍らしく妙ならずと云ふことなし。虛空遙かに見上ぐれば、かゞやきわたる莊嚴は、心言葉も及ばれず、眼も雲路に迷ひぬ、妙なる御法の聲聞えて、寶の國に滿ちにけり。金殿玉樓、翠りの林、寶の池、裏表照り曜き、鴈、鴨、鴛鴦は遠近に群り飛ぶ。或は衆生の十方世界より、生れ來ること雨の降る如く。或は聖衆の無數の佛土より來り給ふこと、恒河の砂の如し。或は宮殿に乘りて虛空に住むもあり、或は虛空に坐して經を讀み說法する者もあり。或は虛空に默然と坐して、坐禪入定する者もあり。地の上、林の間にもまたかくの如し。さてまた處々には河を涉り流に濯ぎ、樂を奏し花を散らして、宮殿樓閣に往き復へりて、如來を禮拜し讚め奉るも

じつゝ、本願に叶ひ奉り、今來迎にあづかる」と、頂を摩でてほめ給ひ、御手を授けて引接す。この時に行者の目に、(一)如來を見たてまつりつゝ、心の中に歡びて、身心安く樂しむこと、禪定に入るが如し。當に知るべし、草庵に目をふさぐ、その間は便ちこれ蓮臺に跏を結ぶ程ぞかし。即ち彌陀如來の後ろに從ひ奉り、菩薩聖衆に交はりて、一念のその中に、西方十萬億土なる、極樂世界に生るゝなり。
、『觀經』『平等覺經』並に『傳記』等のこゝろに依る 彼の忉利天上の億千歳の樂や、大梵王宮の深禪定の樂も、總じてこれ等の如きをば、未だ樂とせんには足らざるなり。その果報力盡きぬれば、終に流轉はてしなく、(二)三惡道を免かれず。然るに今この人は、辱くも觀音の御手のうちにゐまゐらせ、寶の蓮にやどりつゝ、永く苦海を越え過ぎて、初て淨土に往生す、爾の時の歡喜は、言の葉に宣べ難し。(三)龍樹菩薩の偈に云はく、「若し人命終るとき、彼の國に生るゝ者は、即ち無量の德を具す、かくある故に我れはたゞ、命を彌陀にたてまつり、淨土を願ひ求むなり」と。

第二　蓮華初開樂の事

(一)如來。佛の異稱なり。眞如より來生せるの意味。

(二)三惡道。地獄、餓鬼、畜生の三道。

(三)龍樹菩薩。中卷に解説せり。

第一　聖衆來迎樂の事

夫れ聖衆來迎し給ふときの樂とは、凡そ惡業の人は、命盡くる時、風火の二つ先づ去りける。風と火はその性動くことを司るものなれば騷がしく、熱くして、その苦しみ多きなり。善を行ひ、善心なる人は、命の盡くるその時に、地水の二つ先づ去りける。土と水とはその性靜かなるものなれば、身體緩かにして、苦しみなし。何に況んや、念佛の功積り、年久しく心を運びしその人は、臨終になりぬれば、心の中に自ら、大きに喜び生ずるなり。然あることは、彌陀如來本願ましします故により、(一)二十五の菩薩、百千の(二)比丘衆と諸共に來り給ふなり。西の空紫雲たなびき、花ふりて、異香四方に薫じつゝ、音樂の聲妙にして、金色の光りさし、皎然とあきらかに、目の前にましませり。その時に大悲觀世音、百福莊嚴の御手を申べ、寶の蓮臺を擎げつゝ、行者の前に來り給へり。大勢至菩薩は、無量の聖衆と同音に、「汝善きかな〳〵、多念の心まめやかに、惡をあらため善を修し、慈悲正直を常として、賢を賢と色にかへ、稱名念佛疑はず、信心肝に銘

(一)廿五菩薩。觀世音、大勢至、藥王、藥上、普賢、法自在王、陀羅尼、白象王、虛空藏、寶藏、德藏、金藏、光明王、金剛藏、山海慧、華嚴、日照王、月光王、衆寶王、三昧、獅子吼、定自在王、大威德、大自在王、無邊身、以上廿五菩薩。

(二)比丘。梵音Bhiksu 乞士、勤事男等と譯す、僧のこと。

往生要集 卷之下

極樂物語

大文第二　欣求淨土十樂の序

それ欣求淨土とは、一切の衆生悉く極樂淨土に、往生を遂げんことを願ひ求めよと、佛の教へ給ふ綱領なり。極樂の功德無量なる故に、百劫千劫を經てこれを說くとも、說き盡くすべからず。その數をあげ、喩をとることも、また知るべき所にあらず。然りと雖も『群疑論』には三十種の利益を明し、『安國抄』には二十四の樂をあらはせり。既に稱揚することは、只人の心に在りと知る。今こゝに十の樂を擧げて、淨土を讚め奉る。譬へば卯の毛の先にて大海の水を滯らすが如し、一には聖衆來迎樂、二には蓮華初開樂、三には身相神通樂、四には五妙境界樂、五には快樂無退樂、六には引接結緣樂、七には聖衆俱會樂、八には見佛聞法樂、九には隨心供佛樂、十には增進佛道樂なり。

も通ずるなり。『法華經』に云ふが如し、「大慈悲を室とし、柔和忍辱を衣とし、諸法の空を座として、此れに居りて說法すと」已上。諸法空の觀すら尙ほ大慈悲心を妨げず、何に況んや苦、無常等の觀念は、菩薩の悲願を催すをや。この故に『大般若』等の經に、不淨等の觀念を、また菩薩の法となす。若し知らまく欲しくば、更に彼の經文を讀むべし。問て曰く、是くの如きの觀念には何なる利益ありや。答て曰く、若し常にかくの如く、心を調ひ伏せぬれば、五欲少く薄くして、乃至臨終にも正念にて、亂るゝことなきにより、惡しき處へ墮ちざるなり。『大莊嚴論』の勸進繫念の偈に云へる如し、「一年の盛りの患なき時は、怠りて進まず、諸の事のみ貪り營みて、布施と持戒と禪定とを修せざれば、死の爲めに呑まるゝに臨んで、始めて驚き悔みて、善を修せんと求むれども、更に益なし。智者は常に觀念して、五欲の想を斷ち去るべし。精しく勤め勵まして、心を習はしたる者は、命の終りに及びても、悔み恨むことなく、心意旣に專一にして、錯亂の念あることなし。心を習はすこと、專一にあらざれば、臨終に至りて、必ず心散亂す。

往生要集卷之中終

りぬる」と、名殘惜しく、猶ほも願はくは、生々を經るとも、もの言はずして厚德を報ぜんと誓ひ、終に南天竺の大婆羅門の家に生をよせたり、胎を受け胎内を出るに、種々の苦患を經れども、芳恩を忘れずして聲を出さず、家督を受け、元服、嫁取り、親を葬り、喪をつとめ、子をまうくるまで物云はず、宗族外戚みなこれを怪しむ。年六十に餘りて、我が妻の云はく、汝もの云ふべし。若しもの云はずんば、汝が子を刺し殺すべしと、稚子を抱き、劍を提げたり。その時我れ心中に思ひけるは、已に生を替へ世を隔てたり、自ら顧れば、年老ひ衰へて、唯だこの稚子一人なりと、忍びかねて妻を止め、殺すな〳〵と云ひて、終に聲を擧げたり」と語る。隱士これを聞て、これ魔の嬈せるのみ、我があやまりなりと後悔す。烈士は恩を感じてこのことを成就せざるを悲しみ、無念なりと憤りて死す。已上。略抄 夢の境かくの如し、諸法もまた然なり。未だ妄想の夢覺めざるときは、空に於て有とす、かるが故に『唯識論』に曰く、「未だ眞の覺りを得ざれば、常に夢の中に居れり、故に佛說きて生死の長夜とし給ふ」。問て曰く、若し無常、苦、空等の觀をなさば、豈小乘の自調自度に異らんや。答て曰く、この觀は小乘に局らず、大乘に

（一）小乘の自調自度。小乘卽ち聲聞緣覺は自利に偏して利他を思はず、故に大乘教徒より嫌はる。

長刀を持ち壇の隅に立ちて、息ざりをせず、無言にして、夕より朝に至らしめよ。また仙術を求むるものは、壇のまん中に坐して長刀を手に持ち、口に神咒を誦して、目に見ることなく、耳に聽くこと勿れ、明けぼのに及んで、仙に登らん」と云へり。終に仙方にまかせて一人の烈士を求め出して、しば〳〵賂を厚くして、潜かに惠みを行ふ。隱士の曰く「願はくは一夕聲せざれかし、烈士これを聞て、芳命ならば死なんことをさへ尙ほ辭せざらまじ、ましてや息を屛さんことをや」と云ふ。こゝに於て壇場を設け、仙法を受けて、方にまかせてことを行ひ、坐して日の暮るゝを待ち、日暮れて後に、各その務を司る。隱士は神咒を誦し、烈士はもの切れの刀を持ちて、やう〳〵明けがたに及んで、かの烈士聲を擧げて叫ぶ。その時隱士問ふて曰く「汝聲すること勿れと誡めしに、何ぞ驚き叫ぶや」。烈士答て曰く「君が命を受けて後、夜分に至りて、惛然と心亂れて夢の如く、氣色變じて物あやし、更らに起き上りて見れば、むかし仕へし主人、自ら來りて慰め語る。然れども君が厚恩を荷ふ事を感じて無言を破らず、對へ語らざれば、彼の人大きに怒て終に殺害せられ、中有の身を受け、屍を顧て、このことを遂げずかくな

と。また『大經』の偈に云はく、「諸行は無常にして、是れ生滅の法なり、生滅も滅し已りぬれば、寂滅を樂となす」と。已上 (一)祇園寺の無常堂の四の角に鐘あり、鐘の音の中にまたこの偈を說く。病僧鐘の音を聞いて淸凉の樂を得ること、三禪定に入るが如くにして、淨土に生ず。況んやまた、雪山の大士は、全身を捨てゝこの偈を得たり。行者偈の心を能く工風して、忽爾にすること勿れ。說の如く觀察して、貪瞋癡等の惑ひの業を離るゝこと、獅子の人を追ふ如くにすべし。外道の無益の苦行をなして、愚かなる狗の塊を追ふ如くにすべからず。問ふて曰く、不淨、苦、無常はその義覺り易し。諸法は目前に顯はれて法體あり、何とて空と說けるや。答へて曰く、豈に經に說かずや、夢幻化の如しと。かるが故に夢の境に例して、空の義を觀ずべし。『西域記』に云へるが如し、波羅痆斯國の施鹿林より、二三里程東に涸池あり、むかし一人の隱士、この池の邊に庵を結びて隱れ居たり。この隱士博く伎術を習ひ、神理を究めて、瓦礫を變じて寶となし、人を畜生になし、畜生を人になす。但し風雲に馭り仙駕に侍ること、未だならざれば、圖をひらき、古を考へて仙術を求めんに、その仙方に云く、「一人の烈子に命じて

(一)祇園寺。天竺祇園精舍のこと。

し。王位高顯にして、勢力自在なるも、無常至りぬれば、誰れかまた長らへん。浮べる雲の、あるに似たりと雖も、須臾に消えて無きが如し。この身は虛僞なること芭蕉の如し。怨となり賊となる、親しみ近づくべからず、毒蛇の篋の如し、何れの人か愛樂せん。是の故に諸佛、常にこの身を呵し給ふ」已上この偈の中に、具さに無常、苦、空、無我を演べたり。これを聞くもの道を悟る。また堅牢比丘の壁上の偈に曰く、「生死の斷えざることは、諸の貪欲深く、色に躭り、味を嗜む故なり。怨を養ふて塚に入り、虛しく諸の辛苦を受く。身の臭きこと死屍の如し。九の孔より不淨流る、厠の蟲の糞を樂しむが如く、愚にして身を愛し貪るも、これに異ることとなし。相を止めて妄りに分別する時は、則ち是れ五欲の本なり。智者は妄りに分別せざれば、五欲則ち斷滅す。邪念より貪著を生じ、貪著より煩惱を生ず、正念にして貪欲なければ、餘の煩惱もまた盡きぬ」已上過去の彌樓揵馱佛の滅後に、(一)正法滅せん時、陀摩尸利菩薩、この偈を求め得て、佛法を宣べ弘め無量の衆生を利益せり。若し極樂を願はゞ、『金剛經』に云ふが如し、「一切有爲法は、夢幻泡影の如く、露の如くまた電の如し、まさにかくの如き觀をなすべし」

(一)正法。佛法のこと。

（一）假名の法。森羅萬象は因緣の生ずる所にして吾人の思へるが如く不變の體相あるに非ず。

（二）馬鳴菩薩。一世紀頃の人、西印度に生る。其著『大乘起信論』最も有名なり。

阿鼻地獄の一念の苦に比ぶれば、百千萬に割りて其一にも及ばずと云へり。畜生の中に於てその苦無量なり。或は繫ぎ縛られ、及び鞭撻たるゝ者あり、或は明珠、羽、牙、骨、毛、皮、肉の爲めに殘害せらる。餓鬼道の中の苦また然なり。諸の願ひ求むること心に叶はず、飢渴に逼められ、寒熱に苦しみ、疲れ乏しく、これ等の苦はなはだ無量なり。屎尿糞穢の諸の不淨さへ、百千萬劫にもこれを得て食ふことなし。設ひまた、たま〳〵少し許の食物を求め出して食はんとすれば、餓鬼互ひに劫め奪ひて散り失せぬ。淸涼の秋の月にも焔熱を患ひ、溫和の春の日にも轉た寒苦あり。園林の下に趣けば、諸の果盡き、淸淨の流れに至れば、忽ちに枯れ渴く。罪業の緣によりて剩へ命長く、一萬五千歲を經て、諸の楚毒を受けて暫くも隙間なく、一も缺くることなし。皆これ餓鬼の果報、煩惱の駛き河、衆生を漂はし、惡念眞恚の火熾に燃えて身心を燒き焦す。かくの如くなる諸の塵勞を滅せんと思はゞ、眞實解脫の道を修して、諸の世間の（一）假名の法を離れ、淸淨不動の處を得べし。若し厭離の相を存ぜば、（二）馬鳴菩薩の伎女の歌ふ聲を聞いて、唱へて云へる如し、「有爲の諸法は幻の如く、化が如し。三界の絆は一も樂むことな

法界ひとしく道場にて、心ひろく體ゆたかなり。まことに宮もわらやも果しなければ、よしあし引きの山うばが、山めぐりするぞ苦しきと、一節ふたふことまでも、心の夢覺めずして、生死輪廻を離れ得ね、その有様を準ふなり。諸の欲染に於て、厭ふ心を生じ、勤め勵まして、(一)無上涅槃の道を求むべし。先づこの身を調和し安穩にして、その後ち齋戒を修すべし。一夜を分つに五時あり、その中、二時は眠につきて休息し、初中後夜の三時は生死を觀じ、勤めて(二)度を求むべし、空しく過ぐることなかれ。譬へば少しの鹽を(三)恒河に置くに、その水を鹹味くなすことならざるが如く、微細の惡は諸の善に遇ひぬれば、消滅して散壞すること、またかくの如し。梵天の離欲の娯みを受くと雖も、還て無間熾燃の苦に墮ちぬ。天宮に居て身より光明を放つと雖も、後には黑闇地獄の中に入る。所謂黑縄地獄等活地獄は、燒き割き刺し剝ぐこと、間なきなり。これ等の八の地獄は、常に熾んに燃ゆること、みなこれ衆生惡業の報ひなり。その苦しみの有様を、若しは書に書き語に聽き、或は書を讀みて是れを知り、思ひやるさへ忍び難し、況んやまた己が身に觸れんをや。若しまた人有て三百の矛劒を以て、その身を切らんに、

(一)涅槃。泥恒ともいふ。梵音Nirvanaにして滅度、寂滅等と譯す。迷妄欲染を去つて寂滅無爲の眞理に歸すること。
(二)度。生死の苦海を出離すること。
(三)恒河。印度カンゲス河のこと。

りて、傷ひ割く如くなることはあらざれども、臨終に罪相始めて現れて、後には地獄に入て、諸の苦を受くるなり。信心と、持戒と、布施と、多聞と、智慧と、慚愧と、不放逸との、七つの法を聖財と名けて、並びもなき眞實の寳なり」と、如來の金言なり。世間の諸の珍寳に、遙かに勝れり。足ることを知らば、貧しと雖も富と名くべし。財あれども欲多きは、これを貧しと名く。財寳多ければ諸の苦を增すこと、譬へば龍の頭多きは酸毒を增すが如し。美味はまた毒藥の如しと觀じて、智慧の水を以て灑ぎ淨むべし。この身を保たん爲めに食を須ふと雖も、厚味を貪り、口腹を養ひて、心を害することなかれ。この故に小を養ひて、大を失ふことなかれと、孟子も誡しめ給へり。また麤服なりと雖も、肌を覆し、寒を防ぐに足れり、何ぞ好色を貪り、憍慢を長ぜんや。總じて內心を尊ぶときは、外物自ら輕くして、人の錦繡をも羨まず、己が弊衣をも耻づることなし。されば『論語』にも、「道に志して惡衣惡食を耻づる者は、未だ與に謀るに足らず」と云へり。彼の(一)かんゆうきうの、三百餘里にふくゑんして、天日を隔離したりしも、安ずる所は膝を容るゝに過ぎず、柴の庵のあやしきも、その相を見ざるときは、

(一)咸陽宮。

て云はく、「何等の相を以て厭離の心を起すべきや」。答へて云はく、「若し廣く觀ぜんと欲せば、前の所説の如く、六道の因果、不淨苦等なり」。或はまた(一)龍樹菩薩の禪陀迦王に勸め給ふ偈に云はく、「この身は不淨九孔より流れて、河海の窮まり已むことなきが如し。薄き皮覆ひ蔽して淸淨に似たり。猶し錦繡瓔珞を假りて、莊ひ嚴るが如し。諸の智ある人、虛はり誑かしなることを知りて、色欲を捨つ。譬へば疥あるもの、强き火に近けば、初めは心よけれども、後には苦を增す、愛欲の相もその如く、始めは樂めども終には患ひ多し。身の實相はみな不淨をりと知ることは、これ空、無我を觀ずるなり。この觀を修するものは、利益の中の無上なり。其さま勝れ、(二)多聞なりとも、戒行實智なき人は、猶し禽獸の如し。形ち醜く賤しくして、聞見少しと雖も、戒智を修むるものを勝上と名く。利衰の八法は免かるゝものなし、若し貪欲を除斷せば、眞に匹ひなき殊勝の人なり。或は諸の沙門、婆羅門あらんに、父母妻子及び眷屬、彼の意に從ひ、語を受けて、廣く不善、非法行をなすことなかれ。設ひこれ等の爲めに、諸の過を起すとも、未來の大苦は唯だ身のみ受く、夫れ衆惡を造て即時に報はざれば、そのまゝ刀火來

(一)龍樹菩薩。二世紀頃の人、南印度(或は西印度とも云ふ)に生る、大乘佛教の創立者にして後世より八宗の祖師と尊崇さる。

(二)多聞。博聞博學と云ふに等し。

轉窮まりなし。(一)經の偈に、「一人一劫の中に、受くる所の諸の身骨、常に積りて腐り敗ぶれずんば、(二)毘布羅山の如くならん」と云へり。一劫さへ然かなれば、況んや無量劫をや。我れ等未だ道を修せざる故に、徒らに無量劫を經たり、若し今世も勤め修せずば、未來また然なるべし。無量生死の中にも、人身はなはだ受け難し、縱ひ人身を受けても、(三)諸根を具し難し。縱ひ諸根を具しても、佛教に遇ひ難し。縱ひ佛教に遇ふとも、信心を發し難し。されば『大經』に云はく、「人間に生ずる者は、爪の上の土の如く、三途に墮つる者は、十方の土の如し」と。『法華經』に曰く、「無量無數劫にも此法を聞き難し、また法を聽くとも、この人またあり難し」と。而るに今、適〻人身を受け、遭ひ難き佛教に遇ひぬれば、苦海を離れて淨土に往生せんこと、唯だ今生にあり。而るに我れ等、頭には霜雪を戴きて俗塵に心を染め、一生は盡れども希望は盡きず、遂に白日の下を去りて、獨り黃泉の底に入りなば、多百踰繕那の、洞然猛火の中に墮ちて、天に呼はり地を扣くと云ふとも、何の益あらんや。願はくは諸の行者、速く厭離の心を起し、すみやかに出離の道に隨ふべし。寶の山に入て、空しく歸ることなかれ。或る人問

(一)經。雜阿含三十四の文。

(二)毘布羅山。印度王舍城の側にあり。

(三)諸根。五官、手足等。

(一)光音天。色界第二禪天の一。

常に憂ひを懷きて、獄中の囚人に似たり、愚人は常に歡樂して、猶し(一)光音天の如し」と云へり。誠に此娑婆世界は獄中なり、彼の安養極樂は本國なり、急ぎ娑婆の獄中を厭ひ脱れて、極樂の本國へ歸るべしとなり。『寶積經』の偈に曰く、「種々の惡業を作りて、財物を求め、妻子を養育して、歡び娛しむと雖も、命終るとき、苦しみ身に逼れども、妻子救ふことなし、況んや三途の怖ろしき中にては、妻子知音の者を見ず、車馬財寶も軈て人の物となる、三途の苦を受くる時、誰か能く苦を分けて受けたる例あらばこそ。一とたび死して去りぬれば、父母兄弟、妻子朋友、僮僕珍財、一も來り親しまず、誰だ惡業のみ常に隨ふ、乃至閻魔王、罪人に告げて云はく、「我れ少しの罪にても汝に加ふることなし、汝自ら罪を作つて自らこゝに來れり、業報自ら招きて、罪に代るものなし、父母妻子も救ふことあらず、唯だ自ら出離の因を修すべし」と云へり。是の故に鎖、枷の業を捨て、惡道を遠く離れて、安樂を求むべし、『大集經』の偈に、「妻子珍寶及び王位も、命終る時に臨みて隨はざる者なり、唯だ戒と施と不放逸と、今世、後世の伴となる」と云へり。是くの如く展轉して、惡を作りて苦を受け、徒らに生じ徒らに死して、輪

衆苦と比ぶれば、この苦しみ強くして、十六が一より、地獄の苦は輕きなり。また大德の天人生るれば、もとの天女眷屬は、この人を振り捨てゝ、大德に從ふなり。或は威德ある天人の心に順はざる者をば、宮中を驅り出し、終に住ひを止めてけり。その五の欲天にも、皆こと〴〵く苦患あり。また(一)上界の二天には、かくのしなはなけれども、天上を退ぞける、その苦しみぞありける。乃至(二)非相天までも、阿鼻の業を免かれず、然るときは、天上の樂しみもまた由なし。六道のその中、何れか愚かならずや。唯だ願はしきは、西方の不退の臺なるべし。

第六　總じて六道の厭相を結ぶ事

倩ら總じて厭相を觀ずるに、一筬偏へに苦しめり、耽り荒むべからず。四山合はせ來りて、遁れ避けん所なし、然るに貪欲愛念のくせものが、自ら心を覆ひ、深く(三)五欲に著して、常なきを常に謂ひ、樂にあらぬを樂に思ふ。彼の癰を洗ひ、睫を置くが如き、盍ぞ厭はざらんや。況んやまた、程もなく刀山火湯來るべし、誰れか智あるもの、この身を愛し寶とせんや。されば『正法念經』にも、「智者は

(一)上界の二天。色界と無色界を指す。
(二)非相天。無色界の最頂。
(三)五欲。色、聲、香、味、觸の欲。

これを五衰と名けゝる。この苦しみに遭ひぬれば、天女眷屬悉く、厭ひ遠ざけ捨てけり。草むら木の間に偃しまろび、泣き悲しむぞ哀れなる。この時歎きて曰ひけるは、「この諸の天女をば、我が身常に愛せしに、云何ぞ今は情けなく、草を捨つるが如くにて、露ばかりも愍まず、今は早や怙むべき方なし、誰れかまた我れを救はんや。(一)善見の宮城を去りて、玉の緒絶えぬべし。帝釋の寶座にて謁えんことも由なや。(二)殊勝殿の妙なるをもなく〳〵見難く、釋天の寶象に何つか共に乘りなん。衆車苑の花をも、我れまた眺めやはせん。雜林苑の酒宴に袖を連ね得まじ。歡喜苑の中には、遊び止まるべからず。劫波樹の下なる白玉の輭石に坐すると更らになく、殊勝池の水に浴する思ひなし。(三)四種の甘露も何とて食せん。(四)五妙音樂をも我れのみ聽かず。悲い哉、自ら獨りこの苦しみにあひ侍る、願くは慈悲を垂れ、命を救ひたび給へ、暫しの程も長らへて、またも樂しみまゐらせん。彼の馬頭山、沃焦海に墮さしめ給ふな」と、いと哀れに云ひしかども、救ふものぞなかりける。『六波羅密經』の意　この時の苦しみは、地獄よりも甚しと、正しく誰も知りぬべし。されば『正法念經』にも、「天上より去りなんとしけるとき、大苦惱を生ず、地獄の

(一)善見の宮城。色界十八天の第十六。
(二)殊勝殿。帝釋の寢殿なり。
(三)四種甘露。色、香、味、觸。
(四)五妙音樂。宮、商、角、徵、羽。

(一)頭然。然は燃なり。毛髪に火の付きて燃ゆること。
(二)出離の道。迷苦の境界を逃れ離るゝ道、即ち佛道のこと。
(三)五塵　色、聲、香、味、觸。
(四)六欲　色、形貌、威儀恣態、言語音聲、細滑、人相等の欲。
(五)忉利天。欲界六天の一なり。

海、山、虛空、市の中、逃れざりなん所なし、かくの如く觀念し、心大きに怖れつゝ、床に眠りを安んぜず、珍膳をも甘んぜず、(一)頭然を救ふ如くにして、(二)出離の道を求むべし」と。また云はく、「譬へば野干の耳、尾、牙を失ひ、詐はり眠りて脫れんことを望み、忽ち頭を切られんことを聞いて、心大きに驚くが如し。人またた生老病の三に遭ふて、猶ほ急にせず、死のことは忽にせず、奈ぞまた怖れざる怖るゝ心起りなば、湯をさぐり、火を履む如し、(三)五塵(四)六欲貪り染まん暇なし」。已上意を取る　人道かくの如し、實に厭ひ離るべし。

第五　天道の事

夫れ天道に三あり、一には欲界、二には色界、三には無色界なり。その相既に廣くして、具さに述べ難し。(五)忉利天を明して、またその外を準らへん。先づ天人の有樣は、萬づ心に適ひつゝ、樂み限り無けれども、命の終りになりぬれば、五衰の苦しみ脫かれず、一には華の鬘忽ちに萎み、二には天の羽衣も塵垢に汚れ、三には腋の下より汗出で、四には兩眼數〻眴ぐ、五には本の住み家を樂しまず、

(一)六道。六趣のこと。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を六趣と云ふ。
(二)常樂の果。佛果のこと。

りしを、七度び見たる仙人も、終に無常を脫がれ得ず、空に上り海に入り、巖に隱れたりし人、死を受けざる驗なし、彼の仙境に樂しみて、佛の道を願はねば、定めて冥途暗くして、この(一)六道に歸るべし。然かあるときは是れとても、更らに願はしからぬなり、唯だ須らく、畏きを畏きと崇めつゝ、佛の敎に隨ひて、如說修行を勵まして、(二)常樂の果を求むべし。『止觀』に云はく、無常の殺鬼と云ふものは、貴人賢人擇ばずして、威勢ありと雖もこの身は危く脆ければ、朝顏の露、水の泡、徒にたのもしからぬなり、云何ぞ忙然と常に、安然と心安く、愚にして百年の齡をも保つべき樣に思ひなし、四方に走り廻りつゝ、財寶を積み貯ふ。然かはあれど、いまだ心にあきたらず、俄かに長く行きぬれば、彼の貯へし寶物、空しく後に殘し置き、露塵身に隨へず、冥途に獨り趣きて、暗き中有の旅の空、誰れまたあつて善惡を、訪ふ人もなかりけり。また彼の跡の所領財寶、いまだ日數も經ざるに、誰れ彼れと分ち取り、不孝の子は愁に、誰れは多く我れ少し、かくはあらじと云ひ合ひて、口說恨みの媒となりぬることも最とはかなし、無常の來ることは、早川の漲る流れ荒まじく、吹きしく嵐電の光より猶ほ速かなり。

れざる媒となりければ、入るまへさびしき人もあり。設ひ富貴の報ひを感じつゝ富は屋を潤し、家居ゆゆしく賑ひて、東西に甍をならべ、南北遙に冥迷たり。美人の謳ふ聲長閑にして、春の光り悠々たり。また霓裳の舞の袖、颯々と飜へして秋の氣色凄々たり、然はありしも何時しかに、時移り人代はりて、昨日の夢となるもあり。（一）『大經』の偈に云はく「一切諸々の世間に、生ずるものみな死に歸す、壽命量りなきも、終にをはりあり。夫れ盛りなるものは必ず衰へ、會ふ者は定めて別れあり。壯りなる年も久しく停まらず、美はしき色も病に侵され、命は死の爲めに呑まる。（二）法として常なる者なしと」。また『罪業應報經』に云はく、「水は渚に常に滿たず、火は盛にして久しく燃えず、日出でゝ須臾に沒り、月滿ちて已にまた缺く、位尊く榮えまします人にても、無常は速く競ひ來て、また此人に勝りたり、唯だ同じくは信心に（三）無上尊を禮すべし」。已上意を取る。唯だ諸の凡夫のみ無常を畏るゝにあらず、仙人に至りつゝ風に乘り雲に坐し、飛行自在に遊樂す、况んやまた仙境は、四時長へに花咲きて、四山芬々と香しく、命の限り久しくして、この世界みな滅し、天とも地とも分ずして、泥の海となりて、また天地開けはじま

（一）大經。具さには大般涅槃經と云ふ。

（二）法。森羅萬象のこと。

（三）無上尊。佛即ち覺者のこと。

（一）五陰。色、受、想、行、識。

（二）栴陀羅。印度にて種族の最も下卑なる者の名。屠者、殺者等と譯す。

切なり、雨風に犯され、霜雪肌に徹り、種々の苦惱身に逼る、總じてこの（一）五陰の身は、一々の威儀、起居、起臥、みな悉く苦にあらぬことなし。また長時に行きて暫くも息まず、これを名けて外苦と云ふ」と。この外諸の苦の相、眼の前に見つべし、說くことを俟つべからず。

三に無常と云ふは、『涅槃經』に云はく、「人の命は暫くも停まらず、山水よりも速かなり、今日は長らへたりとても、明日また保ち難きなり」と。『出曜經』に云はく、「この日已に過ぎぬれば、命また從ひ減りて、小なる駒の蹄の溜り水に住む魚よりも猶ほ儚し、これまた何か樂しまんや」と。『摩耶經』に云はく、「譬へば（二）栴陀羅の牛を駈り、屠所に至る時、一足づゝ行くに連れ、この牛死地に近く、人の命もまたかくなり」と已上意を取る。設ひ壽命長遠の業ありて、子孫數多嫁し付け、今日はこの子の花の會、明日はその子の月見とて、さも孝行に愛せられ、あはれあやかり者かなと、他の人々に羨まれ、誠にいみじかりしきも、元より無常の習ひにて、若しもまた、孫子の中一人二人と缺けぬれば、後れ先き立つことを歎き、却て長き命を恨み、これより老の涙催して、より〳〵その身衰へ、終に無常を免

(一)欵抱婬樂。口をすひ、だきつき、みだれ樂しむこと。

(一)蚊虻蜂蠆螻蟻か、あぶ、はち等の毒蟲、なり。

へず、たとへば糞を見ざるときは猶ほ能く飯を噉ふ、忽ち臭氣を聞ぎつれば即ち嘔吐く如し」と。また云はく、「若しこの相をあらはせば、高眉、翠眼、皓齒、丹唇も、一聚の屎に、粉をその上に覆へるが如し。また爛れたる屍に假りに綵彩を著けたる如し、尙ほ眼にも見られず、況んや身に近づけ(一)欵抱婬樂せんや、かくの如くなる相は、これ婬欲の病の大黄湯なり。

二に苦といふは、この身初めて生れしよりこのかた、常に苦惱を受くるなり。『寶積經』に說き給ふ如し、「若しは男子、若しは女子、初めて生れ墮つるとき、或は手にて捧げ、或は衣を以て抱く、或は夏は暑氣、冬は寒風身に觸れて、大苦惱を受くること、生きたる牛の皮を剝ぎ、墻壁に觸るゝ如し」と。長大て後ちまた苦惱多し、同じ經に說けり、「この身を受くるに二種の苦あり、眼、耳、鼻、舌、咽喉、牙、齒、胷、腹、手、足に諸の病を生ず、かくの如く四百四病、その身を責むるをこれを內苦と名く。また或は牢獄に在て、種々糺明の責めを受け、或は耳鼻をそがれ、手足を刖られ、諸の惡鬼、惡神その便りを得て惱ましめ、また(一)蚊虻、蜂蠆、螻蟻、いろ〳〵の毒蟲、刺し食ふ。寒熱に堪へ難く、飢ゑ渴わくこと


其一 胮脹相
噉食相
古墳相
骨散相



（一）止觀。天台智者大師の述『摩訶止觀』のこと。

大海の水を傾け洗ふとも、潔きことなし、外には麗しき裝ひを施すと雖も、内には諸の不淨を裹む、猶ほし畫ける瓶に、糞穢も盛りたる如し。また『禪經』の偈に云はく、「身臭く不淨なりと知れども、愚者は故らに愛惜す、外の顏色をのみ見て、内の不淨を觀ぜず」と云へり。況んやまた、命終りて後ち、塚の間に捨つ、一日二日乃至七日經ねれば、その身膨れ脹れて、色變はり青瘀み、臭く爛れて、皮穿げ膿血流れ出づ。鷲、鵰、鵄、烏、狐、狼、いろ／＼の鳥獸、攎み付き食ふ。鳥獸食ひて後ち、不淨に潰え爛れて、無量の蟲けら、臭き所へ雜り出づ、人これを嫌ふこと、死したる狗よりも劣れり、鼻を覆ひ去る、乃至白骨となりぬれば、節々のつがひ離れ、手足髑髏、こゝかしこに散り／＼に風に吹かれ、日に暴らし、雨灌ぎ霜結びて、白骨も色變はり、遂に朽ち碎けて、塵に交はり土となる。白樂天が詩に云はく、「西施が顏色いまいづくにかある、白骨となつて終に郊原に朽ちぬ」と、應さに知るべし此身は始終不淨なり、愛する所の男女みなまた是の如し、誰か智ある人更らに愛着をなさんや。かるが故に（一）『止觀』にいはく、「いまだ此相を見ざれば愛染甚だ强し、若しこれを見れば欲心都べて罷み、懸に忍ぶに耐

常に髪を食む。また一の戶蟲あり、繞眼と名く、眼に住みて、常に眼を食む。また四の蟲、腦に住みて腦を食む。また稻葉と云ふ蟲、耳に依りて耳を食む。また藏口と云ふ蟲、鼻に依りて鼻を食む。また二の蟲あり、一をば遍擲と名く、脣に依りて脣を食む。また一の蟲を針口と名く、舌にありて舌を食む。五百の蟲は左の邊りを食み、また五百は右の邊りを食む。また四の蟲は生臟を食み、二の蟲は熟臟を食む。また四の蟲小便道に住みて、尿を食み、また四の蟲大便道にありて、糞を食む、また黑頭と云ふ蟲、脚に住みて脚を食ふ。かくの如く八萬の戶蟲、この身に依り止まりて、夜晝食み噉ひ、身を熱し惱ませ、心に愁ひあらしめ、諸の病を發す、良醫もよく除き療やすことなし」。(一)經に云はく「人將に死せんとする時、諸の蟲怖ぢ畏れて、互に相ひ食み噉ふ、この故に諸の苦痛を受く、こゝに於て男女眷屬、大きに驚き悲しむ。諸の蟲相ひ食ひ付きて、唯だ二の蟲殘り、七日の間食ひ合ふ。七日過ぎて一の蟲、命盡きて、一の蟲猶ほ在り」と。また縱ひ上膳の衆味を食すれども、夕を經ぬれば皆不淨となる、譬へば糞穢の、大小ともに臭きが如し、この身もまた爾かなり、幼より老に至り、唯だ是れ不淨なり、設ひ

(一)經。經は僧伽吒經なり。

しく、自性潰え爛るゝなり。誰かこゝに於て寵愛し憍慢せん。また謂く、腹中に五臟ありて、葉々相ひ覆ひ、靡き合ひて下に向へり、その狀ち蓮華の如し。孔竅空疎にして、内外相ひ通ぜり、各々九十重あり、肺の臟は上にあり、その色白し、肝の臟は青し、心の臟は中央にあり、その色赤し、脾の臟は黄なり、腎の臟は下にあり、その色黒し。また六腑あり、大腸は傳送の腑とす、また肺の腑たり、長さ三尋半、その色白し、膽は清淨の腑とす、また肝の腑たり、その色青し、小腸は受盛の腑とす、また心の腑たり、長さ十六尋、その色赤し、胃は五穀の腑とす、三升の糞中にあり、その色黄なり、膀胱は津液の腑とす、又腎の腑たり、中に一斗の尿あり、その色黒し、三膲は中瀆の腑とす。かくの如くなるもの、縱横に分ち布く、大腸小腸赤く白く色を交へて、十八周り廻つて、毒蛇の蟠るが如し。また頂より趺に至り、髓より膚に至りて、八萬の戸蟲あり、四の頭、四の口、九十九の尾あり、その形一にあらず、一一の戸にまた九萬の細かなる蟲あり、兎の毛の頭よりも小し。『寶積經』に云はく、「初めて胎内を出るより七日を經て、八萬の戸蟲身より生じて、縱横に食ふ、二の戸蟲あり、舐髮と名く、髮の根に住みて、

一に不淨とは、諸の穢はしきことなり。凡そ人の身の中に、三百六十の骨あり、その骨の節々相ひ拄へたり、（拄ふると云ふは、持ち合てゝくさりつぐことなり。）先づ足の指の骨は、足の骨を柱へ、足の骨は踝の骨を拄へたり、踝の骨は腨の骨を拄へ、腨の骨は膝の骨を柱へ、膝の骨は髀の骨を拄へ、髀の骨は臗の骨を柱へ、臗の骨は腰の骨を柱へ、腰の骨は脊の骨を柱へ、脊の骨は肩の骨を柱へ、肩の骨は項の骨を柱へ、項の骨は頷の骨を柱へ、頷の骨は牙齒の骨を柱へ、その上に髑髏あり、また項の骨は肩の骨を柱へ、肩の骨は臂の骨を柱へ、臂の骨は腕の骨を柱へ、腕の骨は掌の骨を柱へ、掌の骨は指の骨を柱へたり、斯くの如く展轉次第して、鎖り合はせたり、三百六十の骨聚りて、人の形となること、喩へば朽ち壞れたる舍の如し、諸の節支へ持ちて、四の細き脈、五百分の肉を周ねく匝りて、相ひ連ねたり。二の肉の繩あり、長さ三尋半、内より纏ひ結べり。十六の腸胃は生熟の臟を纏ふ。二十五の氣脈は、猶し窻隙の如し。百七の關は恰も破れ碎けたる器の如し。(一)五根、七竅に不淨のもの盈ち滿てり。七重の皮を以て裹み、六の味を以て養ふ、猶ほ一生厭くことなく、貪る心絕えざるなり。かくの如くなる身は、一切臭く穢は

(一)五根。眼、耳、鼻、舌、身。

して徒らに人の信施を受けて、その施物を償はざるもの、この報ひを受くるなり。

第三　修羅道の事

夫れ(一)修羅道を明すに二あり、根本の勝れたる者は、須彌山の北、大海の底に住す、末々の劣りたるものは、四大州の間、高き山、巖の中にあり。若し雷鳴るときは、天の攻め鼓と思ひ、あわて騒ぎて、心大きに戰き悼む。また常に諸天と戰ひて、散々に侵し害せられ、身體を破り、その命を亡ぶ。また毎日夜三度、晝三度の修羅の戰ひ、喚き叫ぶ、その聲は百千の鳴雷の如く、互に切りつ、切られつ、身を通し骨を碎き流るゝ血、紅の波みなぎりて、楯を流す、また兵具自ら來りて、その身を攻め害をなす、いろ〱の苦み數ふべからず。

第四　人道の事

夫れ(二)人道を明すに、略して三の相あり、詳かに觀ずべし。一には不淨の相、二には苦の相、三に無常の相なり。

(一)修羅。阿修羅の略。梵音 Asura にして非天、非類、不端正と譯す。

(二)人道。人間界の道德の意味に非ず、玆には單に人間界を稱せるなり。

の類、二には獸の類、三には蟲の類なり。いろ〱の畜生、害心を含みて、小さきものは大きなるものに呑まれ、弱きものは强きものに噉はれ、互ひに殘害の苦しみ、夜晝暫くも安き間なく、常に怖るゝ心あり。況んやまた諸の水に住む類は、漁る者に殺され、諸の陸を行く者は、獵師に命を取らるゝなり。また馬、牛、象などの如き者は、或は鐵の鈎を以て、その腦に打ち懸けられ、或は鼻を穿ち通されて、牽きずり廻はされ、或は轡を口に食ませ、常に重荷を負せられ、鞭を以て打たるゝこと間なし。唯だ水を念ひ草を願へども、意に任せず、また(一)蚰蜒、(二)鼠狼、の類は、闇の中に生れて闇の中に死し、磯蝨、蚤の類は、人の身に生じて人に殺され、また諸の龍の類は、夜晝三熱の苦しみを受けて、休むことなし。或はまた(三)蟒蛇は、その身大きに、長けながく、聾ひ心騃く、足なくして蟠り、轉び、腹にて行く、この故に、諸の小さき蟲、唼ひ刺し食ふこと間なし。或は窓に立つ微塵の如きものあり、或は兎の毛を百千に割りたる程の者もあり、或は一萬由旬の如き者もあり、斯くの如くにしな〱の畜生、或は一ときの間、或は七時、或は一劫乃至百千萬億を經て、無量の苦を受くるなり。これは愚癡無慚に

(一)蚰蜒。げじ〱。
(二)鼠狼。いたち。
(三)蟒蛇。うはゞみ。

變じて猛火となり、內より身を燒きて燃え出るなり。斯くの如く、おの〳〵の報ひによりて、餓鬼道の苦しみを經ること、人間の一月を以て一日一夜として、壽五百歲なり。『正法念經』に云はく、「慳貪嫉妬のもの餓鬼道に墮つ」と說き給へり。慳貪と云ふは、我が物をば、露塵程も惜みて、人を愛し物を施すことなく、人の物をば貪りて飽ける心なきを云ふ。さるほどに(一)、佛の敎にも、少欲ならんことを宣べ給へり。少欲とは、少しの物を得ても、心に足りぬると知ることなり、何に況んや心至りぬれば、蔬食を食ひ水を飲み、肘をまげて枕とし、樂みその中にありと云へり。嫉妬と云ふは、人を憎み妬むことなり。餓鬼道の報ひを怖れ、心ひろく、おだやかにして、人の惡をせめず、我が過りを改めなば、嫉妬の思ひなくして、常に心安かるべし。

第二　畜生道の事

夫れ畜生道は、その住所二あり、根本は大海に住み、末々は人天に雜はれり。細かに別くれば、三十四億の類あり。總べて合せて云へば三を出でず、一には鳥

(一)佛の敎云々。「遺敎經」に曰く「汝等比丘、若し諸の苦惱を脫れんと欲せば當に知足を觀ずべし。知足の法は卽ち是れ富樂安穩の處なり」又『八大人覺經』に云はく「比丘よ、多欲は苦あり、生死の疲勞は貪欲より起る、少欲にして無爲なれば身心自在なりと覺知せよ。」

髪劍の如くにして、身を切り割き、或は變じて火焔となりて、その身を周りて燒き焦がす。また或は餓鬼、夜晝子を五人づゝ生めり、生むとひとしくこの子を食ふ、然かはあれど猶ほ常に乏ぼし。また餓鬼あり、一切の食を噉ふことならざれば、唯だ自ら頭を破ぶり、腦を取りて喰ふ。また或は口より火を出し、蛾と云ふ蟲の、飛んで火に入るを食とする餓鬼もあり。或は膿、血、嘔吐、糞土の洗ひ汁の殘りを食ふ餓鬼もあり。また外の障りあるに依り、食することを得ざる餓鬼もあり。それは何にと云ふに、飢ゑ渇わくこと常にしきりなれば、その身瘦せ枯れて、哀れに力なく、よろ〳〵として、長閑なる春の風にも倒れつべし、たま〳〵淸き流れを望み見て、走り向ひ手に掬びて呑まんとすれば、大力の鬼、鐵の杖を以て打つ。或はこの水忽ちに火焔となりて身を燒き。或は則ち流れも涸き、水渇わけり。或は內の障りに依りて、食することを得ざる餓鬼あり、それは何にと云ふに、腹は大山の如くなれども、口は針の孔の如くなれば、たとひ飲み食ふ物に逢へども、これを噉はんとするに由なし。また內外の障りなけれども、食物を用ふること能はざる餓鬼あり、たま〳〵少しの食に逢ふて、これを食ふと、等しく

(一)さんまい。墓地の俗稱。

あり、悕望と名く、世の人の死したる父母のために、祭りを設け、供養するとき、これを得て喰ふ、その外は、悉く食ふことならざるなり。これは人の苦勞して、少しのものを得たるを誑らかし、惑はして、取り用ひたるもの、この報ひを受くるなり。また餓鬼あり、海の邊りに生れたり、涼しき木陰、河水などあることなく、その處甚だ熱くして、冬の日も人間の夏に比ぶるに、千倍過ぎたり、唯だ朝露を以て、からき命をつぐ、海の邊りに住むと雖も、この餓鬼の目には、海も悉く枯れ渴くと見ゆるなり。これは昔、道行く人病に疲れたりしに、その賣り物を欺き取りて、價を少し與へたるもの、この報ひを受くるなり。また或は餓鬼あり、元より食物を求め得ざれば、常に(一)さんまい墓原に至りて、燒き焦がしたる屍を噉ふ、されども猶意に足れることなし。これは昔、牢の番をして、科人どもの食物を押さへ取りて食ひしもの、この報ひを受くるなり。或は餓鬼あり、植ゑ木の中に生を受けて、大木どもに押しつめらるゝこと、木賊蟲の如く大苦惱を受く。これは昔、涼しき森、林の木を伐り、また寺の林の木を伐りたるもの、この報ひを受くるなり、また餓鬼あり、頭の髮垂れ下りて、遍ねく身を纏ひ、その

房の自らばかり喰ひて、夫に與へざるもの、この報ひを受くるなり。また或は餓鬼あり、食氣と名く、世の人の病ふによりて、水の邊り、林の中にて祭りを設くるとき、漸々この食物の香を嗅いで、命をつゞくなり。これは昔、妻子などの前に於て、我れ獨り美食を噉ひしもの、この報ひを受くるなり。また或は餓鬼あり、食法と名く、嶮しく行き難き處をも、走り廻りて食を求むれども、更らに求め得ず、若し寺、(一)道場に至り、經、(二)陀羅尼、説法あれば、その功力を得て命をつぐ。これは名利を貪ぼりて、(三)不淨説法したるもの、この報ひを受くるなり。また或は餓鬼あり、食水と名く、水に渇ゑて身を焦がし、あはてさわぎて水を求むれども、露ばかりも求め得ず、髮は長くして面を覆へば、目に見る所なし。河の邊りに走り趣き、若し人河を渡り、足の雫の落ちける殘り水を、そのまゝ疾く攝め取りて、やう／＼咽を濕ほし命をつぐ。或は人の水を掬びて、死したる父母に手向くる折節、少しばかりを得て命をつぐ。若し自ら水を取れば、水を守る諸の鬼ども、杖を以てさん／＼に打つ。これは昔、酒を沽りしに、水を加へ、或は蚯蚓、蛭を沈め、善き法をつとめざるもの、この報ひを受くるなり。また或は餓鬼

(一)道場。佛道を修行する場所。
(二)陀羅尼。梵音Dharaniにして總持、能持等と譯す。廣大の義理を持して散逸せざる意味なり。
(三)不淨説法。名利を目的として法を説くに名く。

往生要集 巻之中

六道物語

第一　餓鬼道の事

夫れ餓鬼道と云ふは、住所二あり、一は地の下、五百由旬にあり、閻魔王界なり。二には人天の間にあり、その樣甚だ多ければ、今こゝに少分を明すなり。或は身の長け一尺、或は人の長けの如く、或は千(一)踰繕那、或は(二)雪山の如し。或は餓鬼あり、鑊身と名く、その身大きに、長け高く、人に過ぎたること二倍なり、面もなく、目もなくして、手足は鼎の如し。炎充ち滿ちてその身を燒き焦がす。これは昔、寶を貪ぼりて、人を燒き殺したるもの、この報ひを受くるなり。また或は餓鬼あり、食吐と名く、その身廣大にして、長け半由旬なり、常に胸、腹、つかへ悶えて、吐き出さんことを求めて、いろ〳〵苦しめども、吐くことならざるなり。これは昔、或は夫にして自らのみ美食を噉ひて、妻子に與へず、或は女

(一)踰繕那。印度の里數にして由旬に同じ。
(二)雪山。印度の山名、今のヒマラヤ山脈なり。

より愚にて、飢ゑにつかれし爲めなり」とぞ申しける。その時獄卒鐵の鉗を以て、口をはさみ開かせて、極めて燒きあかめたる鐵の丸かせを、口の中にぞ入れにける、また異なる有情の申しけるは、「我れは唯だ湯水に渇きし故なり」と、その時に獄卒銅の湯を以て、その口に流しこむ。かゝる無量の苦しみを、長しなへに受くるなり。乃至先きの世に作りたる惡業、(一)那落の苦しみを能く感ず、惡業いまだ盡きざれば、この中を出でざるなり。右の如く劍の道、劍の林、鐵の刺の林などを集めて一つとして、一つの地獄の四つの門の外にあり。かるが故に四つの園あり。已上『瑜伽論』ならびに『倶舍論』の意なり。一々の地獄の四つの門の外に、おの〳〵四つの園あり、合せて十六とするなり。『正法念經』の八大地獄、十六別處、おの〳〵めん〳〵なるとは、同じからず。また頞部陀等の八寒地獄あり、詳しくは經論の如し、これを述ぶる遑なし。

往生要集卷之上終

(一)那落。那落迦の略、地獄のこと。

なる梨の林ありけるが、彼の諸の有情ども、舍りを求めんその爲めに、便ち來り趣きて、遂にその木に上るときに、刺の鋒倒に下に向ひて刺し貫ぬき、下りなんとせしときに、また刺の鋒は上に向ひてつき通す。その時に鐵の觜ある大烏、頭の上に飛び上がり、或は肩に上り居て、目の玉を拔き喰ふ。茨の林のもとよりも、間もなく打ち續きて、大きに廣き河ありて、沸きかへる水、熱き灰、その中に滿ち彌り、彼の諸の有情ども、舍りを尋ね求めつゝ、かしこより來りつゝ、この河にこそ落ちにけり。大鑊に豆を入れ、はげしき火にて能く燒きて、煮たり煎りたりする如く、湯の沸き騰るに隨ひて、周ねく旋り返へりけり。またいかめしく怖ろしきは、河のかなたこなたには、獄卒あまたありけるが、突棒、刺股、縛索、大網を構へつゝ、かの有情を遮ぎりて、この河を逃げ出んこと、蟷螂が斧とかや、猿猴が月に相ひ同じ、或は繩を首にかけ、或は網にて抄ひ取り、大熱鐵の地の上に、有情どもを仰向けて、糺明をぞしたりける。「汝等この度び何の爲め、かゝる業をばなしけるぞ、あり樣に申すべし」と鐵棒にてしたゝかに、臑をひしぎて問ひければ、彼の有情その時に、苦しげなる聲色にて答へける、「我れ等もと

の外に四つの園あり、その園に煻煨ありて膝に齊し。彼の諸の有情出でゝ舍りを求めんとて、尋ね遊び行くまゝに、この煻煨のもとに來て足を下せば、そのまゝに足の肉、筋、骨まで、みな悉く爛れ滅え、足を擧ぐればまた生ず、此煻煨に相ひ續きて、間なく屍糞泥ぞありける、この諸の有情ども、舍りを求めんその爲めに、煻煨のもとを立ち出でゝ、やう〳〵尋ね行くほどに、屍糞泥の中に入り、頭も足も溺れけり。剩さへその中に、孃矩吒と云へる蟲、數多充ち滿ちて有りけるが、皮を穿ち肉に入り、筋を斷ち切り骨に入り、髓を取りてぞ食ひける。また屍糞泥に打ち續きて、間なく利き刀、劍の刄を仰向けて道となす、彼の諸の有情ども、舍りを求め歩きつゝ、此處に遊び來て足を下せば、たちまちに皮、肉、筋、血悉く切れ爛れ無くなりて、足を擧ぐれば故との如し。また劍の道に打ち續きて、間なく刄の林あり、彼の諸の有情ども、やどりを求めて尋ね行き、林の陰に趣きて、しばし休らふそのうちに俄かに、風はげしくして劍の葉を吹き落とし、身の節々を切り割きて、既に地に踣るれば、黧狗數多群がりて、百の骸を攫み付き、掣きずり廻りて喰ひけり、劍の林に打ちつゞきて、間なく鐵の刺生ひ、鋒の如く

卒刀を以て身中を遍ねく切り割きて、極熱の鉛を割けたる處へ鑄こみけり。また四百四病を悉く具足したり。かくの如く苦を受くること、何億歲と云ふ限りなし、むかし(一)辟支佛の食を取て自ら食ひて、與へざるものこゝに墮つるなり。また別處あり、閻婆度處と名けゝる、この地獄に閻婆と云ふ惡鳥あり、その身の大きなること象の如く、觜劍の如くにして、また炎を出だしける。罪人を引き摑みて虛空はるかに羽打て去る、東西に舞ひ遊び、その後ち放ちて蹴おとしけり、その勢ひ強くして、大石の墮つる如し、その身碎けて百千となり、また相ひ合ふて生き返へる、また摑み上りける。また利き劍道に充ち、茂りたる草の如くにて、その足腹を切り割き。また炎の齒ある狗來たりて、これを嚙み食ひけり、かくの如く苦惱を受けて止むことなし、昔たとへば、人をかくせんと定めて渴死にあはしめたるもの、この地獄に墮つるなり。この殘りは經說の如し。已上『正法念經』の意なり 瑜伽論の四の卷に、八大地獄の近き邊りの別處を、おしなべて說いて云はく、彼の一切の諸の(二)大那落迦に、みな四方に四つの岸、四つの門あり、鐵の垣圍ひ周りて、出づるに嚴しきこと指も入らざりけり。四方の四つの門より出づれば、一々の門

(一)辟支佛。緣覺と譯す、十二因緣を觀じて修行する者。

(二)那落迦。地獄の梵名。

り。諸の地獄の中にて、この苦しみ最も勝れたり。また鐵の塼を雨らすこと、盛んなる白雨の如くにて、身を破ぶり骨を碎くこと、乾れたる脯にもさも似たり。炎の牙ある狐ども、常に來りて喰ひけり。かくの如く苦を受けて、長へに止む時なし、これは昔、堂塔伽藍に火を懸けて、佛像を燒き、僧房を燒き、僧の寢道具を燒きしもの、この地獄に墮つるなり。また別處あり、黑肚處とぞ名けゝる、飢ゑ渇わくこと堪へ難く、その身を燒き焦がす故により、我が肉叢を食ひけり。食ひ盡くして消ゆると思へばまた生き返へり、また食へり。また肚の黑き蛇あり、彼の罪人を纏ひつゝ、先づ足の甲より食み、漸々に嚙み喰へり。或は猛火に入つて燒き焦がれ、或は大鑊に投げ入れて、これを煎りこれを煮る、骨、肉の蕩くること春の水の如くにて、漸々焚く火と共に猛火となる。かくの如く種々無量の苦を受けて、無量億歲を經にけり。これは昔、佛の財物を取り用ゐて食としたるもの、この中に墮つるなり。また別處あり、雨山聚處と名けて、一由旬ばかりの鐵の山、上より下りて罪人を打ち碎ぎ、くだくること微塵の如し。然ありてまた生き、また碎けぬ。また十一の炎ありて、遍ねく周り圍み、身を燒きけり。また獄

この地獄の罪人は、大焦熱地獄を見て、他化自在天の樂しみを見る如くにぞ羨みける、若し四天下のその中や、欲界、六欲天の者、地獄の臭氣を嗅ぐならば、諸の有情悉く命も消えて盡きぬべし、所以何んと云ふならば、諸の地獄の人、極めて惡く臭きなり。またその臭氣は何として來らざるぞと云ふならば、出山、沒山と名けたる二つの大山隔たりて、彼の臭きを遮へぎりたり。また若し人、一切の地獄のあらゆる苦惱を聞かんとき、みな聞くに堪へざらん、若し堪へて聞くならば、則ち命消えぬべし。何かに況んや阿鼻地獄は、千に分けて一つをも說き給はずと宣べ給へり。所以何んと云ふならば、說き盡くすことあるべからず、聞くことをも得べからず、喩ふべからざればなり。若し說き盡くす人ありて、聞き盡くす人あらば、忽ち血を吐き死なんとなり。『正法念經略抄』の意 この無間地獄は、壽一(一)中劫なり。『俱舍論』の意 (二)五逆罪を作くり、因果の道理を打ち撥ひ無きものと思ひきり、大乘の法を誹り、(三)四重の過を犯し、信施を虛しく食するもの、この地獄に墮つるなり。『觀佛三昧經』の意 この無間地獄の門の外に、また十六の眷屬の別處あり、その中の一處を、鐵野干食處と名けて、罪人の身の上に、火の燃ゆること十由旬計りな

(一)一中劫。二十小劫を一中劫と云ふ。例へば方廣八十里の城に芥子を充滿せしめ、長壽の天人ありて、三年にその一粒を取り去り、遂にそのすべてを取り盡くすに至る間を一中劫と云ふ。

(二)五逆罪。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。

(三)四重の過。殺生、偸盜、邪淫、妄語の四大罪のこと。

く猛き焔に燃えにけり。東方より來たるのみならず、南方、西方、北方も、また斯くの如くなり。されば四方より來る焔と、諸の有情ども、火花を散らし交はりて、莫大の火聚とぞなりにける。四方上下に充ち滿ちて、少しも間なかりけり。苦痛を受くることもまた暫らくも間なし。しかる故に罪人は、數限りなけれども、互ひに見ることならずして、唯だ苦に逼められて、喚はり叫ぶ聲を聞き、衆生ありとは知れるなり。また鐵の箕を以て、三熱の鐵の炭を盛り滿て、簸揃へて、また熱鐵の地に置きて、大熱鐵山に登らしむ。登りてはまた下り、下りてはまた登る。またその口の中よりも、舌を長く拔き出し、百の鐵釘打ち廻はし、牛の皮を張る如く、皺、襵もなく張り付けて、また更らに熱鐵の地の上に、仰向きにのべ臥せて、熱鐵の鉗にて口をはさみ開かせて、三熱の鐵の丸かせを入れ置けば、口も喉も燒けぬきて、臟腑に徹り下より出づ、また銅を沸かしたて、その口に入るゝとき腹中に流れ入り、腑臟腸胃を燒き拔きて、下より流れ出るなり。已上『瑜伽論』の意なり。三熱と云ふは燒然、極燒然、遍極燒然なり。この阿鼻地獄の大苦患は、諸の七つの大地獄並びに別處の、一切の諸の苦を以て、唯だ一つに打ち合せて、千層倍重きなり。餘りに苦の强き故、

きより火を流し合ひ、城にぞ滿ちける、頭の上に八つの牛の頭あり、一々の頭にまたみな十八の角ありて、その角の先きよりも猛火をぞ出しける、また七重の城內に鐵の幢七つあり、その幢の頭よりも、火のをどり出ること、泉の涌きたつ如くにて、炎流れ迸しり、また城內に滿ちにけり。四方の門の邊りには、八十の釜よりも銅の湯沸き出で、また城內に滿ちにけり。かの一々の隔での間に、八萬四千の鐵の峰と大蛇とありけるが、毒を吐き火を吐きて、その身は城にはびこりたり。その蛇の吼ゆる聲は、唯だ百千の雷の鳴り渡る如くなり。大きなる鐵の丸は霰の降る如く、城の中にぞ滿ちにける。五百億の蟲有りて、八萬四千の嘴より、火の流れ出づること雨の降りしく如くなり、この蟲の下るとき、魔の火いよ〳〵盛になり、八萬四千由旬まで、遍ねく照しわたりけり。また八萬億千の苦の中の苦なるもの、この地獄に集りたり。『觀佛三昧經』の略抄のこゝろ 瑜伽論の第四の卷に云ひけるは、東方多百(一)踰繕那の、三熱の大鐵地に、猛く熾なりし火ありしが、焔を騰げて飛び來たり、彼の諸の(二)有情を刺し、皮を穿ち肉に入り、筋を斷ち骨碎けて、髓に徹りてこれを燒く、枯れし薪に油をうち、風を待つて火を點けし如くに、一身悉

(一)踰繕那。印度の里數。由旬に同じ。
(二)有情。生物のこと。

燒けり、愚なる人かな、既に惡を作りて、今更ら何とて悔ゆるぞや、これ天の修羅、(一)健達婆、龍鬼にもあらばこそ、汝が作りし業の網に繋りたり、他人の知らざる業なれば、他人また能く汝を救はめや、汝また愚なり、中有の苦しみありとても、汝が終に墮ちぬべき阿鼻地獄の苦に比ぶれば、たとへば大海のその中にて、一と掬ひの水の如し、今の苦は一と掬ひの水なり、後の苦は大海の水の如し」となん呵嘖して、それより地獄へ將ゐて向ひ去ること、二萬五千由旬にして、彼の阿鼻地獄の罪人の啼き喚ぶ聲を聞き、獄卒の呵嘖の通り十層倍、恐ろしく魂も消え〳〵にて、夢の中の如くなり。倒になりて、二千年を經てみな下に向ひ行く。

『正法念經略抄』の意 彼の阿鼻地獄の恰好は、縱橫八萬由旬なり。七重の鐵の城に、七重の鐵の網あり、城の下に十八の隔てあり、城の回りには劍の林ひつしとあり。四つの角には銅の狗四つあり、身の長け四十由旬なり、眼は電光、牙は劍、齒は劍の山、舌は鐵の茨の如し、一切の毛の孔より猛火をぞ出しける、その烟臭くして世間に喩へむものなし。十八人の獄卒は、頭は(二)羅刹にさも似たり、口は(三)夜叉の如くなり、六十四の眼よりは、鐵の丸迸しり、鉤りし牙は上四由旬高くして、牙の先

(一)健達婆。鬼神の名、尋香又は食香と譯す。

(二)羅刹。梵語Rākṣasa又はRakṣasにして可畏、又は食人鬼と飜す。

(三)夜叉。梵語Yakṣaにして勇健、暴惡と飜し疾捷と稱す。

剝ぎ割きて、身の肉叢をば切らずして、その皮を身と連らね、熱地の上に敷き置きて、火を以てこれを燒き、或は沸き返へりたる熱鐵を灌ぎける、加樣に無量億千歲、大苦惱を受くるなり。これは出家の戒を道として持ちし女房を、酒を以て誑らかし、その心を能く壞ぶり、與に婬欲を行ひ、或は寶を與へしもの、この地獄に墮つるなり。殘りの別處は經中に說き給ふ如くなり。『正法念經略抄』の心なり

第八　阿鼻地獄の事

八に阿鼻地獄と云ふは、即ち無間地獄なり。大焦熱地獄の下に在り、(一)欲界の果ての底なり。罪人この阿鼻地獄に趣き向ふときに、先づ中有の位にて、啼き哭しみて偈を說いて言はく「一切は唯だ火炎なり、虛空にも遍ねく絕え間なく、四角八方大地にも、炎ならざる處なし、一切の地には惡人みな充ち滿ちて、我が依りつかん處なく、孤兒の如くに唯だ獨りにて友もなし、闇き惡處の中にあり、大火炎の火聚に入る、虛空の中にて、我れまた日月の光りを見ず」と云へり。その時獄卒大に怒る氣色にて云ひけるは、「或は(二)增劫、或は減劫より、大火汝が身を

(一)欲界。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、及び六欲天を總稱す。

(二)增劫と減劫。人壽八萬歲より百歲每に一歲を減じて人壽十歲に到り(減劫)更に人壽十歲より百歲每に一歲を加へて人壽八萬歲に到る(增劫)

十層倍恐しく、魄ひ消ゆる如く、心驚きて怖ぢ戰く。その時獄卒この罪人を呵責していはく「汝地獄の聲を聞き、目に見てさへ斯く怖ぢ畏るゝや、何に況んや地獄にてその身を直に燒かれんこと、枯れたる草薪を燒く如し。但し火の燒くはこれ火の燒くにはあらず、即ちこれ惡業の燒くなり、火の燒くをば則ち滅しつべし、業の燒くをば滅すべからず」と云へり。斯くの如く苦に呵責して、さて將ゐて地獄に向ふに、大きなる火聚あり。その火聚擧りて高きこと五百由旬、その廣さ二百由旬なり、炎の燃ゆること盛にして、彼の人の作りし所の惡業の勢力が、急にその身を擲げて、彼の火聚に墮すこと、大山の岸より推して、嶮しき岸に墮すが如し。（已上『正法念經略抄』の意を取る）この大焦熱地獄の四方の門の外に十六の別處あり、その中の一處は、炎の燃ゆること一切の處間なく、乃至虛空まで燃え、悉く皆針のみゝづ程も、炎の燃えざる處なし。罪人ども火の中にて、恨めしげに聲を揚げ、「無量億歲經るとても、長へに燒け止まず」と唱へて、叫ぶばかりなり。これは清淨潔齋の（一）優婆夷を犯したりしもの、この地獄に墮つるなり。また一つの別處をば普受一切苦惱とぞ名けゝる。炎の刀を拔き持つて、身の皮を殘らず、面、足、手まで

（一）優婆夷。在家の女の戒を受けたる者。

るもの、この地獄に墮つるなり。この惡業の人、先づ(一)中有にして大地獄の有樣を見るに、獄卒あり、その面の氣相荒まじく、手足極熱にして、身を捩らかし肱を怒らす。罪人これを見て、大に忙み恐る、これを聞いて、いよ〳〵怖ぢ戰く。その手に利き刀を閃かし、腹は大きにして黑雲の色の如く、眼の光は火炎の如く、鉤りたる牙は鋒先の如く銳くして、臂手みな長く節だちて、勢ひをなす時は、すべて一身荒らかにて恐ろしきこと、心も消ゆる如くなり。罪人を捉へて、咽を堅く縛りて引き立て、六十八百千(二)由旬の地の中、海の底を過ぎ去りて、また海の外より。三十六億由旬を行き去りて、漸々に下に向ひて下ること十億由旬なり。一切の風の中には業の風第一なり。斯くの如くに業の風、惡業の人を將ゐ去りて彼の處に到る。既に彼處に行き着けば、閻魔王種々樣々に呵責し給ふ。さてその後、惡業の繩を以て縛りて、引き出して地獄に向ひ行かしむ。未だ遠くより大焦熱地獄の、夥しく炎の燃ゆるを見て、また罪人の啼き哭ぶ聲を聞いて、悲しみ愁ひ魄ひ恐る。漸々近づきて無量の苦を受くるを見るに、斯くの如くにして、無量百千萬億歲を經ると云ふを聞いて、初め啼き哭ぶ聲ばかりを聞いて恐しきより、

(一)中有。死して後ち未だ次ぎの生を受けざる間を云ふ。

(二)由旬。印度の里數。我が三十里乃至四十里に當る。

のか。三教を博く見ると雖も、唯だ口耳の學びなれば、語は華やかに辨を好み、自ら向上に覺えて、奥深き理を知りたる顔なれども、隱し置く心底は爲す所、樂しむ所を能く觀れば、夫れいづくんぞ隱さんや。然りといへども、誠僞の間を容易くは知り難し。斯る人は佛種を燒き、聖域を遠ざかるのみならず、大細等しく(一)修因感果の理かならず然なり。伏して請ふらくは、我見をあらため、實の學びに歩みを進め、常に憂ひを懷きて、終に常に樂しみ、貧富貴賤、憂喜にも曾てまた與からざる本然の理を能く知りて、斯る邪見に任せず、諸の地獄を恐れて、(二)不退の臺を願ふべき者をや。

第七　大焦熱地獄の事

七に大焦熱地獄と云ふは、焦熱地獄の下にあり。縱橫前に同じ、苦の相もまた同じ『人論』『瑜伽論』但し前の六つの根本の地獄と、またその別處の地獄との、一切の諸の苦を十層倍づゝ重く受くるなり、具さには說くべからず。その命半中(三)劫なり、殺生、偸盜、邪婬、妄語、邪見、ならびに清淨の戒を持ちたる尼を汚した

(一)修因感果の理。因に緣つて果を感ず、即ち因果の理法。

(二)不退の臺。極樂世界に往生したるものは再び退いて惡道に墮せず、故に淨土を不退の臺といふ。

(三)劫。梵語kalpaにして長時と譯す。

高さ五百由旬なり。その火に燒け死してまた活きけり。然ありてまた初めの如くにぞしける。これは若し人自ら餓死して、天上に生れんことを願ひ、また他人に敎へてかゝる邪見に住せしめたるもの、この地獄に墮つるなり。また闇火風と名けし別處あり、彼の罪人惡風に吹かれ、虛空の中にありて、依りつく處なく、車輪の如くに疾く轉び廻りて、目に見ゆることなし。加樣に旋り廻りて、また異なる刀風起ちて、砂の如くに身を碎き、十方に分れ散り、散り盡くしてまた生じ、生じてまた散りける。長しなへに斯くありて止むことなし。これは若し人思へるは、(一)一切の諸法は常と無常と二つあり、無常と云ふは身なり、常と云ふは四大なりと。斯る邪見の人、斯る苦を受くるなり。『正法念經』の意を取る 愚かなるものもこれを案ずるに、この人空理を見あやまりて、四大はもと地水火風にして常なり、この身は四大を本にかへしぬれば、命終りて無常なり、たゞ(二)空々として異事なしと思へり。況んや(三)諸法實相の旨と、陰陽四大の離合の間に、元來妙理あることを知らんや。凡そ世間の僧俗、學びしも學ばざるも、その智人に勝れたりと雖も、未だ實理を樂しむ程に知らざれば、この見に異ならざる人多し。最も悲しむべきも

(一)一切の諸法。一切萬有のこと。
(二)佛法は非有非空の中道を以て眞理となす。故に死と共に空滅すると說くを斷見と稱して嫌ふなり。
(三)諸法實相の旨。一切諸法は凡て眞理に契ふとの意「一色一香、中道にあらざるは無し」と云ふもの即ち是れなり。

（一）閻浮提。須彌說より出づる名稱にして娑婆世界即ち吾人の住する世界のこと。

（二）他化自在天。欲界六天の一、化樂天の上にありて、欲界の最上なり。

（三）分茶離迦。梵語Pundarīka と言ふ。白蓮華と譯す。

塿に上げ置きて、四方より鐵の火、猛く熾んにして骨髓に通る。『瑜伽論』『大論』等の意を取る。若しこの地獄の火を螢ほど（一）閻浮提に置かば、一時の間に燒き盡くしなん、况んや罪人の身の和らかなること、萌え出し草の如くなるを、長しなへに燒き燃やす、何とて忍ぶべきや。この地獄の人は、前の五の地獄の火を望み見て、雪、霜の如しとうらやましく思ふなり。『正法念經』の意を取る 人間の千六百歳を（二）他化自在天の一日一夜として、その命一萬六千歳なり。また他化自在天の命の間をこの地獄の一日一夜として、壽一萬六千歳なり殺生、偸盜、邪婬、飮酒、妄語、邪見のもの、この地獄に墮つるなり。四方の門の外にまた十六の別處あり。その中の一處を（三）分茶離迦と名く、罪人の一身の內に、芥子ほども火焔に燃えざる處なし。みな地獄の人、かくの如く說いていはく「汝疾く〳〵速かに〳〵來れ〳〵、こゝに分茶離迦の池あり、水ありて飮むべし、林に潤へる影あり」と。罪人この語に隨ひて走り趣くに、道の邊りに坑ありて入りければ、坑の中に熾んなる火充ち滿ちて、一身百骸みな悉く燒き盡きぬる。而ありてまた生じ、また燒きて水の欲しさ息まざれば、便ち前きへ進み行きて、かの處へ入りければ、分茶離迦の炎に燃ゆること、

鉗を以て、その舌を抜き出す、抜き終ればまた後より生えける、生えればまたこれを抜く。兩眼を抜くこともまた舌を抜くが如し、また刀を以てその身を切ること間なし、その刀の利きこと、鐵石もたまらず、况んや肉身をや。斯くの如く種々無量の苦を受くること、みなこれ妄語の報いなり、この外經に說き給ふ如し。『正法念經略抄』の意を取る

第六　焦熱地獄の事

六に焦熱地獄と云ふは、大叫喚地獄の下にあり。縱横前に同じ、獄卒罪人を捉へて熱鐵の地の上にのべ臥せて、或は仰け、或は俯ぜて頭より足に至るまで、或は打ち或は築いて、肉叢の團子の如くにするなり。或は極めて熱き大なる鐵の鏊の上に置きて、猛き炎にてこれを炙ぶる、右左に轉ばし、裏表燒き薄らがす。或は大なる鐵の串を以て、下よりこれを貫ぬきて、頭までつき通し出して、打ち返へし〳〵能く炙りて、彼の罪人の五臟六腑、百の節々、目、鼻、口の中まで、悉く炎を起らしむ。或は大熱の鼎に入れて、豆を熬る如くに踊らしめ、或は鐵の

(一)解脫。生死輪廻の原因たる煩惱の繫縛を解きて迷界の業苦を脫すること。

(二)化樂天。欲界六天の一。兜率天の上にあり。

(三)妄語。うそを云ふこと。

苦を受くること止まず。この外の別處は經文の如く、また獄卒罪人を呵責して偈を說きて曰く「佛の處に於て疑を起し、世間出世の作法を破り、(一)解脫の種を燒くこと火の如くなるは、酒のいはれなり」『正法念經』の意を取る

第五　大叫喚地獄の事

五に大叫喚地獄と云ふは、叫喚地獄の下にあり。縱橫前に同じ、苦の樣も前に同じ。但し前の四つの地獄ならびに、それ〲の十六の別處の、一切の諸の苦を十層倍重く受くるなり。人間の八百歲を(二)化樂天の一日一夜として、その命八千歲なり、また化樂天の命をこの地獄の一日一夜として、命八千歲なり。殺生、偸盜、邪婬、飲酒、(三)妄語の者、この地獄に墮つ。獄卒罪人を呵責して偈を說いていへらく「妄語は第一の火なれば、能く大海をも燒くなり、況んやその妄語の人を燒くこと、枯れたる草木、薪を燒くが如し」と。また十六の別處あり、その中の一處を受鋒苦と名く、熱鐵の針を以て、罪人の口と舌とを一とつにさし貫ぬきて、啼き叫ぶこともならざるなり。また一處を受無邊苦と名けしが、獄卒熱鐵の

に誑らかされ、惡業を作りて今惡業の報いを受けるなり、何とて我れを瞋り恨むるや。」またいはく、「汝娑婆に於て、欲心と愚癡の心に、おのれと誑らかされて惡業を作りたり、その時何ぞかねて悔いざりし、今悔ゆるともやはか叶はん。」(正法念經の意を取る)

人間の四百歳を(一)兜率天の一日一夜として、壽四千歳なり。また兜率天の壽をこの地獄の一日一夜として、壽四千歳なり。殺生、偸盜、邪婬、飮酒のもの、この地獄に墮つるなり。また別處の地獄十六あり、その中に火末蟲と名けたる地獄あり、むかし酒を賣りしに水を加へたるもの、こゝに墮ちて四百四病を悉く一身に具へたり。その一の病の力、一日一夜の間に、四大州の人みな死なしめん程の强き病なり。また身より蟲出で、その皮肉骨髓を飮み食ふ。また一の別處を雲火霧と名く、むかし酒を人に强ひ醉はして、惡しく戲れ弄りて、その人を恥かしめたるもの、こゝに墮ちて苦を受く。獄の火の滿つること厚さ二百尋なり。獄卒罪人を捕へて、その火の中に行かしむれば、足より頭に至るまで悉く消え失せて、形もなきかと思へば、獄卒「活々」と唱へてこれを上ぐれば、また元の如くに生きかへる。また初めの如くに火の中に行かしむ。斯くの如く無量百千歳を經て、

(一)兜率天。欲界六天の一、夜摩天の上にあり。





第四　叫喚地獄の事

四に叫喚地獄と云ふは、衆合地獄の下にあり、縱横前に同じ、獄卒の頭、黄なること黄金の如く、眼の中より火出づ、赭色の衣を着て、手足太くたくましくして長く、疾く走ること風の如し、口より惡くすさまじき聲を出だして、その息ざしつよくして、罪人を射倒すこと矢の如し。罪人おぢおそれて、頭を叩いて哀れみを求め、「願はくはお慈悲を垂れ給ひて、しばしの間ゆるし置かれよ」といへども、いよ〳〵怒りを增して、鐵棒を以て頭を打つて熱鐵の地の上を走らしめ、或は熱き鏊に置きて、打ち返へしてこれを炙り、或は熱き鍋の中に投げ入れてこれを煮る、或は猛き炎の充ち滿ちたる室に逐ひ入れ、或は鉗を以て口を開けて、銅の湯を流し入れば、五臟を燒き爛らかして直ぐに下より出るなり。罪人偈を說いて(一)閻魔王をいたく恨みていへらく、「御司人、何とて悲しみの心ましまさずや、いかに靜かにわたり給はざるや、我れは悲しみの器なり、我れに於いて何ぞお慈悲おはしまさずや」と。その時閻魔王答へていへらく、「おのれと(二)愛の綱

(一)閻摩王。梵名Yamarājaにして雙王、又は遮止王等と譯す。地獄界の總支配者。
(二)愛。こゝに言ふ愛は妄念より生ずる妄愛妄執のことにて無漏の知慧より生ずる大慈大悲の愛に非ず。

火に燒かるゝ苦に比ぶれば、いまだ十六分の一にも及ばず。愛心の苦に責められ終りて、また我が身の苦を受くるなり。先づ獄卒この者を倒になし。銅を湯に沸かして糞門に灌げば、身の中に流れ入り、遍ねく五臟六腑を燒きて、口鼻より流れ出るなり。右の愛心の苦と、身心二つの苦を受くること、無量百千年の中に止まず。また(一)多苦惱處と云ふ別處あり、男が男に愛着して、邪行を犯したるもの、こゝに墮ちて苦を受けゝる。むかしの男子を見れば、その身悉く熱き炎にて、近づき來りて抱きつく、この男身體みな燒かれて解け散り、死し終りてまた生き返へり、大きに恐ろしくして走り逃げ去りて、嶮しき岸より落ちけるを、炎の嘴ある烏、炎の口ある狐これを食ふ。また(二)忍苦處と云ふ別處の地獄あり、他人の女房をぬすみ犯せるもの、こゝに墮ちて苦を受くるなり。獄卒罪人を捕へて、樹の末に倒に懸け置く、その下に火炎熾んに燃えて、一身を悉く燒き盡してまた生じ、また前の如く猛火に燒かれ、叫ばんとして口を開けば、猛火口より入りて五臟六腑を燒く。斯くの如く苦を受くること、無量百千歳にもまぬかれず。この外は(三)經に說き給ふが如し。

(一)多苦惱處。男色者の墮つる地獄。

(二)忍苦處。姦通者の墮つる地獄。

(三)經。正法念經等。

熾にして、また樹の上より下るゝとき、劒の木の葉は上に向ひて、また一身を遍ねく切り破り、突き貫ぬかれて已でに地に到れば、彼の女房また梢にあり、男こがれもだえてまた樹に上る。かくの如くすること無量百千億歳なり。自ら心に誑かされて、彼の地獄の中にして、斯く苦しみを受くる邪欲を因とするなり、獄卒罪人を呵責して、偈を説いて曰く「異なる人の惡を作りて、異なる苦の報ひを受くるにはあらず、自らの業にて自ら果を得るなり、衆生みなかくの如し」と。人間の二百歳を(一)夜摩天の一日一夜として、壽命二千歳なり、また夜摩天の壽命をこの地獄の一日一夜として壽命二千歳なり。殺生、偸盜、邪婬のもの、この地獄に墮つるなり。この大地獄にまた十六の別處の地獄あり、其中に一處あり、(二)惡見處と名くる地獄あり、他人の兒子を强ひ逼めて、(三)邪行を侵して呼はり泣かしめたるもの、此處に墮ちて苦を受くるなり。罪人自らの兒子を見れば、地獄の中にありしが、獄卒鐵の杖、或は鐵の錐を以て、その兒子の陰の中を刺し、或は鐵の鉤を以てその陰の中に引きかくる。既に我が子の斯く苦を受くるを見て、愛の心切りにして、悲しみ悶えて堪へ忍ぶべからず。然れどもこの愛心の苦は、自ら

(一)夜摩天。欲界六天の一。忉利天の上にあり。

(二)惡見處。强姦者の墮る地獄。

(三)邪行。邪淫のこと。

ふ。また鐵の炎の觜ある鷲、その腸を掴み去り、樹の枝にかけ置きてこれを喰ふ。また大きなる江の中に、鐵の釣針ありしが、みな火に燃ゆるなり。獄卒罪人を捕へて、彼の河の中に投げて鐵の釣針の上に墮とす。また江の中に熱き銅の汁充ち滿ちて、彼の罪人を漂はして、或はその身、日の初めて出づる樣なる者もあり、或は沈み入ること重き石の如くなる者もあり、手を擧げて天に向ひ呼はり泣く者もあり、相ひ共に近づきて泣き悲しむ者もあり、久しく大苦を受けて主どる者もなく、救ふものもなし。また獄卒地獄の人を執らへ來りて、刀葉林の中に置きける、此の林の梢をはるかに見上ぐれば、容顏美麗にして、粧ひ飾りたる女房あり、實にも古へ戀ひしかりし人なり、嬉しやとてそのまゝ樹に上れば、枝も木の葉もみな劍にて、身を切り割き骨を通し筋を斷つ、こはそも恐ろしきと思ひながらも、(一)業に引かれて猶ほ戀ひしく、劍を凌ぎ梢に上り、彼の女房を見れば、また地にありて懷かし氣に媚をふくめる目元にて、樹の上なる罪人を見て言ひけるは、我れ汝を思ひし業により、この處に來りたり、汝今なにとて我れに近づかざるや。如何に契りをこめざるや」と、樹の下に婀娜めきたてり。男いよ〳〵愛念

(一)業。業因、果業業感、業苦等と熟す業とは吾人身口意の所作は凡てに名づけたるものにて、それに善惡あれども、時には惡所作のみを業と呼ぶことあり。今爰に出づる業は過去の惡業の意味にて業因又は惡因と云ふに同じ。

自ら殺したるもの、この地獄に墮つるなり。また異處あり、畏鷲處と名く、獄卒ども大きに怒りて、鐵の杖を振り上げ、急に打つて走りまはり、或は火炎の鐵の刀を閃めかし、或は鐵の炎の弓を曳き、矢を番ふて後より追ひかけ逐ひ詰めて、悉く切り散々に射る。昔ものを貪ぼる故に、人を殺し人を縛りて、食を奪ひじ者この地獄に墮つるなり。

第三　衆合地獄の事

三に衆合地獄と云ふは、黒繩地獄の下にあり、縱横前に同じ。この地獄に鐵の山多くあり、その山何れも相ひ向ひたり、牛頭馬頭等の諸の獄卒ども、鐵杖、鐵棒、叉、種々の責道具を持ちて、罪人を驅り廻はして、彼の山の間へ逐ひ入るれば、二つの山迫りより合せ押すに、身體ひしげ碎けて流るゝ血は地に滿てり。或は鐵の山空より落ちて、罪人を打ち碎くこと砂の如し。或は石の上に置きて、岩を以て之れを押し、或は鐵の臼に入れて、鐵の杵を以て擣く、極惡の獄の鬼ならびに、熱鐵の獅子、虎、狼等の諸の獸、烏、鷲等の鳥、競ひ來りてこれを食

繩の上を渡らしむ、などかは落ちざらめや、かの大釜の中に落ちて、摧け煮らるゝこと極まりなく、骨身もわかず盪けゝる。この地獄の苦しみは、等活地獄ならびに十六別處の苦しみを、十層倍重く受くるなり。獄卒罪人を呵責していはく、「心はこれ第一の怨なり、この怨最も惡を爲りて、能く人を縛り閻魔王の前に送り到る、汝われと地獄に燒かれ、われと惡業に食はるる、妻子兄弟、親類眷屬も救ふことならず」と云へり。後の五の地獄までは、その地獄の前より、十層倍づゝ次第々々に重く受くること、この地獄に準らへて知るべし。人間の一百歲を(一)忉利天の一日一夜として、その命一千歲なり。また忉利天の命を、この地獄の一日一夜として、命一千歲なり。殺生、(二)偸盜の者この地獄に墮つるなり。また異處の地獄あり、等喚受苦處と名く、罪人を嶮しく高きこと、無量由旬の岸の上に上げ置きて、熱炎の黑き繩にて束ね縛り、繫ぎ終りて後に、岸の下は皆熱地にして、利き刀草むらの如くに立てる處へ突き墮とす。鐵の炎の牙ある狗これを喰ふ。一身みな分々に離れ散る、聲を擧げて叫え喚べども助くるものなし。むかし法を說き、(三)惡見の論によりて一切まことならず、一切を顧りみず、岸より身を投げて

(一)忉利天。欲界六天の一、四天王天の上にあり。

(二)偸盜。物を盜むこと。

(三)惡見の論。外道などの說にて、正しからざる法を說く者。

したるもの、この地獄に墮つるなり。七には極苦處と云ふ、嶮しき岸のもとに在つて、常に鐵の火に燒き焦さる。昔放逸にして殺生したるもの、この地獄に墮つるなり。

已上正法念經にあり、殘りの九は經の中に止す。これに準らへて知るべし。

第二　黑繩地獄の事

二に黑繩地獄と云ふは、等活地獄の下にあり、縱横廣さ前に同じ、獄卒罪人を執らへて、熱鐵の地に打ち臥せて、熱鐵の繩を以て竪横に墨打して、熱鐵の斧を以つて、墨打の繩に隨ひて切り割き、或は鋸にて挽き切り、或は刀を以て腹を刳り出して、ここかしこに散らし在く。また或は數もなく熱鐵の繩を懸けて交へ横たへ、その中へ罪人を逐ひ入るれば、惡風あらく吹いて、熱鐵の繩身に絡はり付き、肉を燒き骨を焦す。また右ひだりに大きなる鐵の山あり、山の上に鐵の幢を建て、そのさきに鐵の繩をつけて兩方の山へ張り渡し、その繩の下に大釜を數多据ゑならべ、ぐらぐら煮えかへつて湯玉ほとばしれり。罪人に鐵の山を負はせて

（一）楚毒。身を苦しめ痛ましむる毒。

墮つるなり。三には瓮熱處と云ふ、この地獄は罪人を捕へて、鐵の瓮の中に入れて、之れを煎じ煮ること豆の如し。昔殺生して煮て食したる者この地獄に墮つるなり。四には多苦處といふ、この地獄は十千億種の無量の（一）楚毒あり、具さに說くべからず。むかし繩を以て人を縛り、杖を以て人を打ち、人を驅りて遠き道に行かしめ、嶮しき處より人を落し、煙を燻べて人を惱まし、小兒を怖しがらしめ、この外これ等の如き、種々に人を惱ましたる者、みなこの地獄に墮つるなり。五には闇冥處と云ふ、この地獄の罪人は、黑闇の處に居て、常に闇火に燒き焦がさる。また大力の猛風吹きて、金剛山の山と山とを吹き合はして、身を磨り碎くこと砂を散らすが如し。また熱風に吹かるゝこと、利き刀にて切り割く如し。むかし大火炎にて羊の口鼻を唵ぎ、二つの塼の中に龜を置きて、押し殺したるもの此地獄に墮つるなり。六には不喜處といふ、この地獄には大火炎あつて、晝夜身を焚き燃やす。また熱炎の觜ある鳥、犬、狐、その聲極めて惡くして、身の毛よだち恐しく、常に來り食ふて骨肉狼籍と亂りなり。金剛の觜ある蟲、骨の中に往來して髓を食へり。むかし貝を吹き太鼓を打ち、恐るべき聲をなして、鳥獸を殺

(一)四天王天。欲界六天の一。六天の最下にあり。

(二)まるかせ。鐵砲玉の如き、丸き玉なり。

地を打つて「活々」と唱ふると云ふ。人間の五十年を(一)四天王天の一日一夜として、その壽命五百歳なり。また四天王天の壽命を、この地獄の一日一夜として、壽命五百歳なり。殺生したる者この地獄に墮つるなり。また此地獄の四方の門の外に、眷屬の別處とて十六の地獄あり。一には屎泥處と云ふ、この地獄には極めて熱き糞と泥とあり、その味ひ甚だ苦くして、金剛の觜ある蟲その中に充滿せり。罪人ども中に居て、この熱き糞を食とす、諸の蟲あつまりて、この罪人を一時に競ひ食ふて、皮を破り肉叢を食み、骨を嚙み髓を啜ふ。昔鹿を殺し鳥を殺したるもの、此地獄に墮つるなり。二には刀輪處と云ふ、この地獄は鐵の壁周り圍みて、その高さ十由旬なり、猛火熾んにして常にその中に滿ちたり、人間の火はこれに比ぶれば雪の如し、この猛火は纔かに身を觸るれば、芥子の如くに碎くるなり。また熱鐵の(二)まるかせを雨すこと、車軸の雨の如し。また劍の林あり、その刄の利きことは、髮筋卯の毛を吹きかけても、たまらずして微塵になる、況んや罪人の身をや。また劍を降らすこと、虛空より大瀧の落つるに似たり。かくの如く諸の苦患交はり來りて、耐へ忍ぶべからず。昔物を貪り殺したるもの、この地獄に

には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人間、六には天人、七には總結なり。

第一に地獄に、また分けて八あり、一には等活、二には黑繩、三には衆合、四には叫喚、五には大叫喚、六には焦熱、七には大焦熱、八には無間なり。

第一　等活地獄の事

一に等活地獄と云ふは、この閻浮提の下一千由旬にあり、縱横一萬(一)由旬なり。この中の罪人、互ひに常に害心をいだきて、若したま／＼相ひ見れば、獵人の鹿に逢へるが如し。おの／＼鐵の爪を研ぎたてゝ、互ひに眼を摑み、しゝむらを引き裂き、血流れ肉盡きて、唯だ骨ばかり殘る。或は獄卒ども、鐵の棒を以て、頭より足まで普ねく打ちひしぎて、身體破ぶれ碎くること砂の如し。或は極めて利き刀にて、分々に肉を切り割くこと、厨者の魚肉を切るが如し。然るに涼しき風吹き來れば蘇生りて本の形となり、また忽ちに前の如く苦を受くるなり。或は虛空に聲ありて、この諸の有情、還て等活すべしと云ひ。或は獄卒鐵の叉を以て、

(一)由旬。印度の里數の名。三十里又は四十里に當る。

往生要集 巻之上

地獄物語

この集は忝けなくも、惠心の僧都の撰び給ひしを、愚かなる筆を染めて大和假名に和らぐること、罪に似たりと雖も、一文不通の賤の身、尼入道までも普ねく、讀み易く心得易くして、一入後生菩提の道に入りなん便りとも、なり侍らんにや。

大文第一　厭離穢土の事

夫れ厭離穢土と云ふは、穢らはしき土を厭ひ離るゝことなり。この娑婆世界をはじめ、(一)六道悉く穢土なり、總べてこれを三界といへり。(二)三界は安きことなし、猶ほ火宅の如しと佛說き給ひて、火の中を宅として居たる如しとなり、最も厭離すべき者なり。今その厭離の相を明すに、總じて七種あり、一には地獄、二

(一)六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人道、天道。
(二)三界。欲界、色界、無色界。

第十　増進佛道樂の事

（目　錄　終）

下の卷

目錄

七には念佛の利益、八には念佛の證據、九には往生の諸業、十には問答料簡なり。
之れを座の右に置きて、忘れ廢りなん備へとぞし侍る。

往生要集序

天臺首楞嚴院の沙門源信之れを撰ぶ

夫れ極樂淨土に往生を遂げて、成佛する修行の易き道を敎へ給ふ御法は、濁世末代の者のためには、たとへば目ありて物を見、足ありて行くが如し。斯くありがたき敎へなれば、僧俗男女、貴きも賤しきも、智あるも愚かなるも、誰か意を極めて此道に入らざらんや。但し顯密の敎法、その經文廣く、事理の業因、その修行また多し。利根上智にして、精はしく進み易き人は、いまだ到り難き道とせざらん。我が如くなる愚かに拙なき者、明らめ難き理をさとり、行じ難き道を遂げ侍らんや。この故に念佛の一門に思ひ依り、安心決定していさゝか經論の中の肝要の文を集め、書き連ね侍りて、常にこれをひらき見て修するに、さとり易く行じ易し。總べて十門あり、卷を三に分けゝる、一には厭離穢土、二には欣求淨土、三には極樂の證據、四には正修念佛、五には助念の方法、六には別時念佛

怠ることあらば、能く此の趣を專らにし彼の心を勵ますべし。猶强て此の語に隨はざれば、永く本意を失つて成佛を遂げず。伏して乞ふ冥衆知見證明し給へ。仍て結する所右の如し。敬て白す。

愚迷發心集 終

群生を度さんと誓ひ玉ふ。妄想顚倒の我等、已に一子の數に入れり。誓願若誤り無くんば利益何ぞ疑あらんや。仰ぎ願はくは三寶神祇、愚意を哀愍し道心を發さしめ給へ。(一)一要若成就せば、萬事皆足りぬべきのみ。是に於て同心の芳友相議して云く、抑も恩愛の心肝を惱ますもの、皆是れ(二)生死囚獄の繫縛たり。佛陀我等を勸むる寧ろ又彼岸直至の指南に非ずや。去來無常の恩愛を別離して、(三)不退の聖衆を友と爲し、堅固の契約を忘れずして、盡未來際を限りとなす。恒に親友と爲つて互に佛道を助け、鎭に法器と爲りて同じく善事を營まん。人若進んで菩提心を遂ぐることあらば、必ず引導を施さん。我若先づ菩提心を遂ぐることあらば、必ず引導を施さん。若三途の苦難若は人天の欲境にあらば、彼の人を助けて善趣の身と爲し、此の人を導きて出世の門に入れしめん。乃至有緣無緣、現界他界、親しきより疎きに至り、近きより遠きに及んで、面々の恩所一々に利益せんのみ。今雙眼乾くこと無く、同じく倶に隨喜し落涙袂に盈り、從ひて三寶に啓す、此の(四)契約に於ては、今生は即ち終焉の暮を際とし、未來は又證覺の朝を期とせん。而して我等若し此の旨に違して、聊か退屈を生じ少事に拘りて大要を

(一)一要。一大事因緣の一要にて道心是れ也。

(二)生死囚獄。生死に囚はれたるは獄中の囚人に似たり。

(三)不退の聖衆。淨土に於ける菩薩衆を指す。

(四)契約。若し一念の妄心あらば迷界に留る故に同伴の親友相警覺し方便を以て引導せんとする契約なり。

念々の肝を摧く。又冥衆我を照す彼の悲み幾計ぞ。耻づべし痛むべし、悟らずんばあるべからず。彼諸佛菩薩、五濁の我等を救はんが爲めに、專ら大慈大悲の誓願に催されて、自ら法性の都の中を出で、忝けなくも(一)穢惡充滿の土に雜り、感應眼に遮り、利生耳に滿つ。靈神驗佛、此に在り彼にあれども、發すべきの一念の道心をも請はず、訪ふべきの二親の菩提をも祈らず、設ひ彼の靈檀に望めども、殆んど眞實の信を起すことなし。纔に念誦を翹すと雖も、掉擧數競ひ起る。(二)和光同塵の本願は結緣の始め、其れ何ぞ毒醉迷亂の我等に、藥を授くる便りなからん。但菩薩我が受苦を念ひ玉うて骨髓に徹る、恒に利益せんと欲すること猶し一子の如し。其利益何事ぞや、所謂道心是れなり。世間淺近の益皆此方便を爲すなり。我進んで道心を請はゞ、冥に盍んぞ照覽を垂れ玉はざらん。能所若相應じなば、何ぞ其驗なからん、納受此れ無くんば誰か大悲の願を仰がん。若誠なき時は、感應隨つて無からん。若誠ある時は利益何ぞ空しからん。彼の二利の要義を思へば、只一念の發心にあり。抑も佛種は緣より起る、則ち發心薰修の緣なり。覺悟は時を待て熟す、時又大聖(三)加被の時なり。何ぞ況んや佛陀神明の大悲は、偏に

(一)穢惡充滿。諸佛菩薩は衆生を敎化せんが爲めに事を同して之を攝するが故に惡業の穢土に雜るの意、

(二)和光同塵。此の如きの諸の衆生を調伏せんが爲に共に光を和げ其の塵と同くす。

(三)加被。如來の大悲衆生の心に現ずるを加と云ひ、衆生の心佛の力を被むるを被とす。

(一)大地。三千大千世界の草木を取て截て四寸の籌となし以て一劫の中に受くる所の身の父母の頭の數を數ふるに猶盡きずの意。

(二)父母。一切の男は是我が父、一切の女人は是れ我母なり我生々世々に之に從て生を受けずと云ふことなし故に六道の衆生は皆是れ我が父母なり。

汁は四大海の水の如し。身より出づる所の血、復愛別離苦に、泣く所の泪は四大海よりも多からん。(一)大地の草木を盡く斬りて籌として、以て父母を數ふれども亦盡すべからず。無量劫より已來、或は地獄に在り、或は畜生に在り、或は餓鬼に在り、受くる所の行苦稱げて計るべからず。是の如く思惟して夙夜に懈ることなかれ。哀れなるかな生々世々の間、父母あり、親族あり師長あり、同朋あり、皆是れ具縛の凡夫底下の異生なり。彼別れて後再び見ず、今何れの處に在りて何れの生を受くるや。我已に惡世に生れて濟度するに力なし、神通無きが故に之を知らず、慧眼盲たるが故に之を見ること無し。我等生死の廣海に沒在し、六趣に輪廻して出期あることなし、然る間或は(二)父母となり、或は男女となり、多生曠劫互に恩愛を結ぶ。一切の男女は皆生々の父母なり、生を隔つるが故に見ることなし。あらゆる畜類は是れ世々の親族なり、質を改むる故に悉く忘れたり。過古現在の恩徳一塵も未だ報ぜず、未來無窮の生死、自他共に沒するものなり。何に況んや八万四千の毛孔、一戶に九億の虫類あり、我に屬して沈淪して、出離の期を知らず。我若し浮ぶことあらば、彼も亦浮ぶべし其面々の迷を思ふ毎に、只我

捨つ可し、空く苦海に溺れんよりは、急いで(一)彼岸を求む可し。然れば則ち今日より始めて未來際に至る迄、苟しくも我身命を以て、恭しく佛法僧に抛ちて、以て佛道を求め、以て有情を利せよ。之に因りて或は草菴を山林寂漠の霞に結び、暫く今生遊宴の栖となし、或は(二)一鉢を聚洛憒閙の烟に捧げ、永く一佛淨土の緣を萠すべし。若凉々たる冬の影に麻の衣薄くして、寒風膚を徹すの曉、(三)紅蓮罪苦の氷を畏るべし。其憂幾計ぞ。若遲々たる春の天に糲食乏しくして、溫日斜に過ぐるの暮には、餓鬼飢饉の苦を慰むべし。彼の悲み大なるかな、一旦の假身を養はんが爲に、尙能く無益の身心を費す、況んや二利實行を成ぜんが爲ならば、豈に有義の苦惱を痛みとせんや。彼諸佛菩薩も、本は常沒の凡夫たりき。迷心殆んど我等の如し。然れども昔生死夢中に大勇猛を發し、今佛果の覺の前に、我等を利益す。彼を見て我を顧み、恥づ可く悲む可し。淪々たる苦海出離何れの時ぞや。但し一身の事は置いて論ぜず、生々世々の間、佛說きて言はく、大地に汝等(四)長夜に無量の生死の苦を受けざる處あることなし、一人一刧に受る所の身骨爛壞せずんば、其を聚め置かば、王舍城の測廣博脇山に齊しからん。飲む所の乳

(一)彼岸。譬へば人あり栰を浮べて此の岸より彼の岸に渡るが如く生死の此の岸より無爲の彼岸に渡る意。

(二)一鉢。供養を受る器なり。

(三)紅蓮。紅蓮華と云ふ、此地獄に墮する者は寒苦忍ぶべからず其身を破ゝこと紅蓮華の如きが故に喩となす。

(四)長夜。衆生迷盲にして生死に輪廻するを長夜に喩ふ。

ず、目盲足蹇にして火坑に墮ちなんと欲す。他を見て我を惟るに此事疑なし。濁世末代の習人毎に爾なりと雖も、我等が癡闇の深さ心も言も及ばず、知らずんば何んがせん、知り乍ら還て迷ふ。畏れざるは愚の至りなり、畏ると雖も實なし。是を以て生死沈輪の爲には、徒らに身命を捨つと雖も、出離解脱の爲には、何れの時身命を捨てたる。只偏へに暫時の命根を惜まんが爲に、專ら長劫の苦種を殖うる所なり。芭蕉の脆き身、設ひ樂ありとも幾ばく程ぞ。草露の危き命、縱ひ榮有りとも久しからず。況んや我身の如きは、誇るべきの樂都て無し、亦受く可きの榮何ぞあらん。誰れか狂する所ありて、火宅の炎に咽ぶと雖も、淨刹の身を顧みず、流轉の業を萠すと雖も、出離の因を修すること無し。怖るべきの生死都て怖れず、欣ぶべきの菩提全く欣はず、愚にして執する所は虛妄暫時の名利、堅く著する所は電光朝露の身命なり。悲しいかな冥より冥に入り、永く佛名を聞かず、迷より迷に向ひて、鎭へに多劫數を送ることを。豈に是れ我身の上に非ずや、寧ろ又人の上を思はんや。實に此身を念はんと欲せば、此身を念ふことなかれ、早く此身を捨てゝ以て此身を助けよ。徒らに野外に棄てんよりは、同じくは佛道に

すべし。佛の言はく、「是の如き人は、我弟子にあらず、我を稱して大師と爲ざれ所謂佛法の中の(一)旃陀羅なり、(二)國王の地上に唾を吐く處なし、五千の大鬼恒に我足の跡を拂はん」。嗚呼堅く守るべきの慈父の遺言を守らずして、甚だ怖るべきの獄卒の呵責を蒙らんと欲す。實に世間出世に付て、時々の所作と云ひ、念々の思惟と云ひ、其惡轉多し、其過幾計ぞ。名利の妄染は心の底に深けれども、智水乾きて洗ひ難く無明の愛塵は身の上に積めども、梵風斷て尙拂ふことなし。何なる人なれば精進して、(三)頭燃を拂ふが如くする。何なる我なれば懈怠にして、寸陰を惜まざる。齡又齡を積むと雖も善心を增すことなく、迷猶迷を累ぬと雖も衰へざるは妄執なり　兼て當來を想はゞ憑は少く悲は多し。就中(四)五官王の斷罪は、若し脫るることあれども、淨頗梨の鏡の影は設ひ寫すことなくとも、(五)轉識賴耶の念々の薰修に於ては、朽つ可からず、失す可からず。自業自得因果必然なり。當來の苦報は誠に以て遁れ難し、粗嘆くと雖も何んがせん。時を隔つれば速に忘れ、薰習の馴るゝ所、其性還つて本の如し。彼の齡八旬に闌けたるの人は、敢て命の喉に迫ることを辨へず、我病數日に受くるの時も、猶定めて死す可しと覺ら

(一)旃陀羅。屠者と云ふ惡業を以て業となすものなり。

(二)國王。信心を以て佛の正戒を受る故に聖戒を犯せば五千の大鬼常に其前に遮りて曰く大賊なりと云ふ。

(三)頭燃。焦眉の急の意。

(四)五官王。惣じて十王あり、是れ其一にて亡魂の四七日を主る本地は普賢菩薩なり。

(五)轉識賴耶。心を分るに八種あり第八を阿賴耶識と云ふ、此の識を向上せしむるを轉識と云ふ。

に望んで、罪垢を心水に洗はんと欲すれば、散亂の浪忽ちに動いて、(一)一塵未だ清からず。希れに尊容に向うて、迷闇を(二)覺月に照さんと欲せば、煩惱の雲厚く覆うて、長夜猶深し。妄心の迷は往昔の串習なれば、僅に起せども彌盛なり。菩提の道は今新なる行業なれば、勵むと雖も速に忘る。手に念珠を廻らして數ふと雖も餘念と相亂れ、口に(三)寶號を唱ふと雖も、心と脣と調はず。纔に勤むる所のもの既に以て實なし。得難き法なりと雖も、懶して功を終らんことを急ぎ、急ぎ已りて何の所作ぞ。只偏へに世務の計、世務是れ何の要事ぞ。夢中の名利たり、名利只大毒なり、二世の身心を惱ます。富める者は樂を貪りて都て後生を知らず、貧しき者は憂を懷いて彌罪障を造る。凡そ言を述べて記さんと欲すれば筆を染むるに遑あらず。愼む可く察す可きは迷なり愚なり。設ひ今生の中に觀行を企て難しといへども、盍んぞ未來の爲に清淨の願を發さゞらん。然れども串習に拘られ卑下に妨げられて、將來の誓願すら猶以て發し難し、既に一善の眞實も都て無し、又(四)三業の妄染尤も深し。

猥しく比丘と號すれども、ただ(五)蝙蝠の如し、剃へ佛子と稱す、恐らくは慚愧

(一)一塵。塵とは色聲香味觸法なり。

(二)覺月。心源を覺りし智は月の如く朗か也。

(三)寶號。佛法僧の三寶の號を稱するなり。

(四)三業。身に三口に四意に三の業煩惱なり。

ん。加之倒見邪見の惑業は、幻夢の前に起ると雖も、實我實法の盛睡は、未だ長夜の中に寤めず。境界は是れ夢の所緣なりと聞けども、夢同じ夢を知らず。諸法は皆心の所變なりと說けども、宛も影に向つて(一)憤喜を爲すが如し。就中宿習本より薄くして發心都て無し。妄念競ひ起る、出要何事ぞや。憖に世間を捨てゝ僅に深山の洞に移ると雖も、隱遁只名のみありて殆んど一行をも守ることなし。猥しく佛を憑むと稱すと雖も、聖に通ずべきの誡を致さず、設ひ教文に向ふことあれども、都て如法の心を欲することなし。(二)性罪闇深くして(三)戒珠永く光を隱し、(四)遮罪塵積では法水流を通ぜず。善は懶く惡は好ましく、名を求め利を貪る。然る間等閑の言の端には、身の錯りを悲むと雖も、眞實の心の底には、其過を改むることなし。縱ひ隨分の勤ありとも、尙以て憑み難し。况んや是の如く空しく過ぎなば、以後も亦同じかるべし。我閻魔の誡に預り、冥衆の責を蒙むる時に、獨り泪を流して悲しむべし、後悔何の益かあらん。寔に以れば無量億歲を過ぎて、受け難き爪上の人身を受けたりと雖も、受けざるよりも拙し。恒沙塵劫を累ねて、遇ひ難き(五)曇華の教文に遇ふと雖も、遇はざるよりも空し、適(六)道場

(一)憤喜。心は惡業の本となり善惡其形に隨て善を行へば善に趣き惡を行へば卽ち惡に趣くの意。

(二)性罪。性罪とは根本の罪にして殺盜婬妄等を云ふ。

(三)戒珠。戒は大寶珠の如く長夜の闇を照す。

(四)遮罪。佛制無き時は犯せども罪無く制戒以後飮めば罪を得るなり。

(五)曇華。委くは優曇華、三千年に一度現ず卽ち如來の教法は之を聞くこと稀なるに喩ふ。

(六)道場。得道の場の故。

らず。我法を空しくするを覺者と稱し、我法に著するを愚夫と名く。所執の境を穢土と稱し(一)如幻の境を淨土と名く。然れども(二)先生に營まざりし故に、今既に一文の覺悟無きが如し。今生に企てずんば、何れの時か暗に少分の慧解を生ぜんや。況んや佛法に遇ざるにもあらず、又盲聾に旱へらるゝにもあらず。

朦を責めて志を運んで、隨分營み勵まば、何ぞ一塵の得益なからん。(三)此の劫を始となして遂に深廣の佛道に進むこと、豈に至要にあらずや。然れども或は身の堪ふる所にあらずと懈り、或は心の好む所にあらずと慢じ、億劫に一び說き玉へども、釋尊の敎法殆んど其詮なきが如し。剩へ佛法を學ぶの輩に於て、或は憍慢し、或は嫉妬し、或は嘲哢し、或は誹謗す。設ひ又學文の志あれども、無上の法寶を費して、還つて名利の價を募り、(四)甘露の妙藥を嘗めて、彌煩惱の病を增す。(五)出離の指南、徒らに生死の海に沈み、(六)菩提の明月、空しく妄染の雲に隱れぬ。悲しいかな佛法當に喉に迫るべく、(七)福田將に渴なんとす。智水未だ掬せずんば、何に緣つてか善苗を殖ゑん、法燈永く斷たば何を以てか迷情を照らさ

(一)如幻。諸法は如幻なりと觀ずるを以て直に眞理を證す。是れ佛國なり。

(二)先生。現在の賢愚は宿世の修習に因る故なり。

(三)此の劫。漸々修學すれば悉く成佛することを得べきが故に。

(四)甘露。如來の敎法を甘露に喩ふ。

(五)出離の指南。一切衆を解脫せしむる如來一代所說の法なり。

(六)菩提の明月。衆生の自心清淨なれば皆如來を見るの意。

(七)福田。佛法僧の三寶は三界の福田なり。

觀心の基たるべし。急ぎても早く急ぐ可きは、出離解脫の計、忘れても猶忘るべきは、虛妄實有の謬。須らく境界に向ふ毎に、實に是れ夢の如しと想ふべし。

自ら除く可きは迷なり、終に開く可きは悟なり。所以に心を靜めて、遙かに當來を想像すれば、未來無數劫の間、我何れの國何れの處何れの日何れの時に當りてか當に(一)無上正等正覺を證すべき。(二)一如の水流を灑いで、恣に枯槁の衆生を潤し、(三)二空の月光を顯して、普く長夜の迷闇を照さん。悲しいかな無上の佛種を備へながら、自と云ひ他と云ひ、無始無終の凡夫として、未だ都て出離の期を知らず。(四)身命を雪山に投ぜし半偈も、眼に當つて空しきが如く、(五)給仕を仙洞に致せし(六)一乘も、掌を握つて勇みなし。曠劫の幸身に餘あるを辨へず、長劫の迷道を失するをも知らず。惡の上に尙惡を重ね、徒に春秋を數年に送る。夢より猶夢に入り、空しく日月を三旬に過す。悲しみても悲しむべきは、(七)我法の妄執堅く結ぼれたるを、憂へても憂ふべきは、(八)生法の空理遙かに隔つことを。此に依りて流轉常沒の凡夫となり、此に迷うて出離解脫の路を失ふなり。聖者と云ひ凡夫と云ふ、遠く外に尋ぬべからず。淨土と云ひ穢土と云ふ、遙かに堺を隔つべか

(一)無上正等正覺。佛果の號なり。
(二)一如。本有常住なる性を云ふ、
(三)二空。人法二執を空したるを云ふ、
(四)身命。釋尊雪山に修行の時羅刹の諸行無常是生滅法の半偈を說を聞き後偈を聞かんとして身を羅刹に施す。
(五)給仕。釋尊出家修行の時仙人に給仕すること十二年なるを云ふ。
(六)一乘。佛乘を云ふ、
(七)我法我。相を取り畢竟己を廢して理に從ふ能はざるを云ふ。
(八)生法。生は衆生なり、

善根の爲には懈怠を致して、日を送ると雖も痛みとせず。嗟呼、生死の嶮道は常の栖、出づべきの便りを求むること無く、貪愛の繫縛は堅く結べども、之を解くべきの計を辨へず。豫め見聞を失へるの盲聾に異ならず、宛も覺知なき木石に同ずべし。然る間、佛菩薩の影の形に隨ふが如くにして、照見を垂れ玉ふを慙ぢず。(一)倶生神は左右の肩に在りて、善惡を記すをも顧みず、朦々緩々として昨も過ぎ今も過ぎぬ。悲いかな痛いかな、徒らに晩し徒らに曙すこと。若後を期して勤めざるか、期する日は是れ何れの日ぞや。將た性に任せて緩慢なるか、緩慢其れ何の爲めぞや。若愚痴の至りと思はゞ、速に愚痴を愼むべし。若懈怠の過に讓らば、何ぞ懈怠を誡めざらん。坐禪の夜の床には(二)罪闇に迷うて通ずることなく、觀念の曉の窓には(三)妄風を吹いて靜ならず。倩ら心を誡むれば嗚呼するに隙なく、屢ば朦を責むれば淚を拭ふに暇あらず。是を以て(四)心外に法ありと云ふ。生死に輪廻せば嘆くべし悲しむべし。一心を覺知すれば、生死永く棄つ、信ぜずんばあるべからず。

所以に耿々たる燈の影、猶迷を彰はす便りなるべし。蕭々たる風の聲、當さに

(一)倶生神。衆生と倶に生じて善惡を指示するの神なり。

(二)罪闇。罪は惡業闇は無明愚癡の煩惱なり、

(三)妄風。妄想顚倒は風の波浪を起すが如し、

(四)心外に法。三界は唯一心の所作なるも迷者は心外に別に法ありとなす。

隨て命の促るを顧みず。或は(一)日別の所作を始めんと思へども、兼て退屈して企つること無し。此の故に身の堪ふる所、尙ほ之を勤めず、心の及ぶ所、多くは之を怠ることあり。夜は則ち睡眠の爲めに侵され、晝は又塵事の爲めに汗さる。

秋の夜長し、夜長くして徒らに明し、春の日遲し、日遲くして空しく暮す。自行敢て勤めず、況んや他人を益するに及ばんや。我心猶憑み難し、況んや眞の知見に於てをや、彼の乞食非人の門に臨むには、給賜せずして惡み厭ひ。烏雀犬鼠の食を求むるにも、情を廢て丶慈悲なし。頑弊無慙にして憍慢起り易く、放逸熾然として惡行止め難し。身生死に處すと雖も、未だ生死の源を知らず、心妄執を起すと雖も、妄執の基を辨ふることなし。(二)無明の毒に醉うて遠々たるなり、藥を隔て丶醒悟を知らず。(三)愛恚の妄海は渺々たり、浪に漂ひて船筏を見ず。專ら訪ふべきの父母の生所を尋ぬることなく、憐むべきの親昵の苦を受くるをも知らず。終に我後世の苦を畏ると雖も、猶剰へ三途の業を造り。屢彼の惡業の種を結ぶと雖も、未だ因果の理りを信ぜず。愛別離苦をも見已りて還て愛し、怨憎會苦をも覺り已りて彌怨む。惡業の爲には奴婢と成り、刧を經ると雖も憂となさず。

(一)日別の所作。或は念佛の日所作或は其宗門の日修行を云ふ。

(二)無明。無明とは癡闇の心にして惠明なきを云ふ。

(三)愛恚。諸愛の中に欲愛を最となす。

今日の爲めに營み、今日は明日の爲めに務め、何れの日何れの時に當つて、永く此世を逝らんと欲するや。偏へに此の身の爲めに無量の業を造る、一業の果無邊の劫を送る。(一)六趣に經歷せんことは、車の庭に旋るが如く、(二)五欲に躭着することは、膠の革に着くに似たり。悲い哉(三)名利の毒藥を幻化の身中に服して、空しく二世を渡らんことを。愚なる哉恩愛繫縛を迷亂の心上に結びて、徒らに一期を送ることを。今生に聊か制伏の念無んば、後世の大なる怨なり、身に隨ふ影の如し。是に於て適小業を翹すと雖も、多くは惡緣の爲めに破られ、粗罪障を悲むと雖も、還て恩愛の爲めに荒めらる。(四)衆罪は霜露の如しと說けども、惠日隱れて照すこと無く、諸法は影焰に似たりと聞けども、妄情現じて迷ひ易し。滅罪生善の志、心と事と調はず、發心修業の計りごと、內と外と共に乖けり。(五)無益の語を囂くすと雖も、出世の事をば談ずること無く、他人の短を語ると雖も、身上の過を顧みず、自ら人目を愼しむと雖も、全く冥の照覽を忘れぬ。希れに一善を勤むと雖も、多くは名聞の思に穢さる。無常眼に遮れども、實有の執は彌深く、(六)不淨身に滿ふれども、厭離の思は都て無し。或は時節の遷流を歌ふと雖ども、

(一)六趣。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天なり。

(二)五欲。五根に依て生ずる色、聲、香、味、觸の五の欲なり。

(三)名利。名聞利養なり。

(四)衆罪。一切の罪障は忘想より生ずる故に其實相を觀ずれば衆罪は霜露の如く消ゆ。

(五)無益の語。報恩經に曰く猛火は世間の財を燒き惡口は七聖の財を燒く故に禍は口より生じ舌は身を鑿るの斧なりと。

(六)不淨。脹想、壞想、血塗、漫想、濃爛想、青瘀想、噉想、散想、骨想、燒想を云、

可からず、生ずるものは必ず滅する故に。天上人王の快樂をも好まざれ、世々既に歷し故に。(一)胎卵濕化の行苦悲しむ可し、生々恒に惱みし故に。如かず只水沫の命、未だ消えざるの前、務ぎ來世の營みを企て、風前の燈影かに殘る程、宜しく(二)險道の道を脫る可し。今生(三)刹那の快樂は實に以て無益なり、夢の中の困みなるが故に。未來長刧の惱み深く是れ厭ふ可し、迷の前の憂なるが故に、明日を期して懈怠を存すること莫れ。

過去に未だ發心せざるが故に、今既に(四)常沒の凡夫となり、今生空しく過ぎなば、後ち彌よ惡趣の異生とならん。豈に只晻然として、徒らに有り難き日月を送らんや。寧ろ亦緩慢にして、得易き(五)㝡要を求めざらんや。加之過去の宿業拙くして、今生已に卑賤孤獨の報を感ず。今生の所行愚なる故に、未來にも亦地獄(六)鬼畜の生を受けんか。況んや先の因たる戒善の力は、今身に既に果し畢んぬ。(七)後生善所の貯へは、望む所何事ぞや、數十餘年の日々の所作は、惡業實に多く、百千萬億の念々の思惟は、妄想至つて深し。(八)二利の行願勤むる所已に闕け、現當㝡要儲くる所一もなし。只我等作る所流轉業にあらずと云ふこと無し。昨日は

(一)胎卵濕化。諸の有情類に四種の生あり、卵生と胎生と濕生と化生となり。
(二)險難の道。三塗八難を云ふ。
(三)刹那。時の極少を刹那と云ふ。
(四)常沒。常に生死の中に在るを常沒と云ふ。
(五)㝡要。發菩提心の信心にして涅槃に到るの要たり。
(六)鬼畜。多く性は怯劣にして身心輕躁なり故に鬼となし、畜は畜生又は傍生とも云ふ。
(七)後生善所。是の佛法を聞き已て後現世安穩にして後に善處に生ず。
(八)二利。自を利し他を利すること。

(一)幽冥の路。三惡道は足の下にあり佛道を行はずんば惡道を免るゝ能はず。

(二)再會。一生空く暮れなば再會知り難し。

(三)閻魔。双王と翻ず、兄及妹皆地獄の主と作る兄は男事を治め妹は女事を治む故に双王と云ふ。

(四)衆縁。人身は地水火風の四大合成の故に假に名けて身と爲す四大主なく身亦我なし。

しく、再び將來を想ふに、(一)幽冥の路跌の下にあり。倩ら世間の轉變を觀れば、哀傷の涙袖に餘り、靜に此の身の浮世を思へば、憂懷の悲肝に銘ず。凡そ身の資體斜なる質を見る毎に、用ゐんこと幾計の程ぞ。氣の出入の僅かに通ふことを尋ぬる毎に、保たんこと今や其の限ならん。況んや年月は圖らざるに遷ること、山水の庭に流るゝよりも俊し。身體は覺えずして衰ふること、舊宅の風に向ふよりも危し。何なる時節に當つてか靑眼永く閉ぢて、(二)再會を隔てんと欲す。又何なる野の叢に移ってか白骨新に曝らして、塊塵に伴んと欲す。屠所の羊今幾くか無常の道を歩み、(三)閻魔の使何れの時にか朽宅の窓に臨まん。電泡の保ち難き、身旦暮を送るの際、草露の程無き、日の出づるを待つ計りなり。知らず今の時拔精の猛鬼、鉾を捧げて樞の下に來らんと欲することを辨へんや。此の日より極重の病苦身に受けて爲無くして死せんと欲す。況んや衆病身に集る、驚くべし怖るべし。頓死眼に遮る顧みずんばあるべからず。此の世豈に牢固ならんや、(四)衆縁を以て暫らく成すなり。我身寧ろ堅く執せんや、名字を以て人に假るなり、設ひ樂むとも樂み遂ぐ可からず、始あれば終あるが故に。縱ひ惜むとも惜み終ぐ

に哀を塚の側の松に問ふ。傷しき哉、親しく語を交へし芝蘭の友も、息止りぬれば遠く送る。哀い哉、新に契を結びし斷金の昵も、魂去りぬれば獨り悲む。啻春の空に歸るの鴈、髴に霞の中に音づれ、僅に秋の野に鳴く蛬、頻に籬の下に訪ふ。頗る殘る所は筆を染し跡、適ま呼ぶ所は主を失ふ名のみなり。況んや春の朝に華を翫びし人も、夕には北芒の風に散り、秋の夕に月を伴ひし輩も、曉には東岱の雲に隱れぬ。昔見し人も今は無し、唯絕えたる跡の芒屋を訪ふのみ。今聞く類も忽ちに去りぬれば、亦荒砌の墳墓に埋れなん、人は往きて我は殘る。是れ有りとやせん有らずとやせん。體は去りて名は留まる。彼は夢か夢に非るか。一生過ぎ易く萬事實無きこと、朝露に異ならず夕電に相同じ。燈滅して再び見ざるが如く、魂去りて人重ねて來ることなし。豈に圖らんや裴を敷く樹の華風に化して散り、翠に蕭たる庭の芊霜に遷れて枯れんとは。加之、槿花一晨の榮は夕なく、郭公數聲の愛さみ久しからず。視聽の觸る丶所、併ら發心の便と雖も、世事暇無くして、都て思ひ寄ること能はず。抑電光何なる物ぞ、髴かに烻いて忽に滅す。我身幾くの程ぞ、有りと見て焉くにか逝る。一たび往事を顧みれば、深更の夢枕の上に空

(一)寶聚の山。佛法を寶山に喩ふ。

(二)貧賤。賤は乏なり、賤乏の家の中に與へ來る寶財を取り得ずして後必ず悔んの意。

(三)初中後年。初は若年中は壯年後は老衰也。

(四)身口意業。身三、口四、意三の十惡を云ふ。

(五)常樂我淨。身心の常住なる、樂みなる、主宰者なる淸淨なるものと謬見を起すを云ふ。

(六)芒庭。墳墓を云ふ。

ことを得たり。(一)寶聚の山の際に望まざるに自ら入れり。(二)貧賤の家の中に取らずして後に悔んや。受け難くして移り易きは人身、値ひ難くして稀に得たるは佛法なり。當に何なる行業を以てか今生の思出と爲すべき。此を默止せば盍んぞ大利を失はざらんや。況んや一たび惡趣に入り已んなば、曠劫にも出難しと爲す。設ひ亦人身を受くるとも佛法に値はんこと尤も難し、早く萬事を抛つて當に一心を勵す可し。實に此度に非ずんば始めて企んこと何れの時ぞや。

就中時遷り質改りて百年の齡漸く闌け、春去り秋來りて三途の鄕已に近し。(三)初中後年何の貯うる所かある。命は即ち日に隨ひて促る。(四)身口意業に作す所の多くは罪なり。數又時を逐ひて增す。行住座臥に積む所幾く業ぞ。(五)常樂我淨い顚倒と云ひ、生老病死の轉變と云ひ、片時も廢むこと無く、億劫にも窮りなし。何に況んや風葉の身保ち難く草路の命消え易し、野邊の煙と昇らんこと今に在るをや明に在るをや。(六)芒庭の苔に伴はんこと晨を待たんや暮を待たんや。南隣に哭し北里にも哭す。人を送るの涙未だ盡きず、山下に慘へ原上に慘ふ。骨を埋むるの土乾くこと無し。寒洞の夜の月獨り影を荒原の骸に留め、連峯の曉の嵐、纔か

の益を蒙ると雖も、(一)三界輪廻の我等其時何れの處にか在りけん。黄金端正の聖容は五濁惡世に出で玉へしかども、惠眼早く盲ひて全く之を見奉らず。迦陵頻伽の音聲は三千世界に響しめ玉へども、(二)天耳已に聾ひて都て之を聞くこと無し。照于東方八千土の光に隱れ、從阿鼻獄上至有頂の益に漏れたり。遂に化緣已に盡きて、龍顏永く金棺の底に入り、(三)荼毘時至つて、聖容忽に栴檀の煙と昇り玉へしより已來、毒氣深入の輩は、(四)擣簁和合之藥をも知らず、爲毒所中の類、(五)好色香藥の敎を守ることなし。闇の中に彌闇を重ね夢の上に猶夢を見る。驚かすべきの(六)法王の音永く絕て、鷲峰山の暮の嵐獨り吟じ、照すべき(七)慈尊の月未だ出で玉はず、(八)鷄頭城の曉の空猶遙かなり。佛前佛後の中間に生れて、出離解脫の因緣なく、七粟散扶桑の小國に住して、(九)上求下化の修行にも闕けたり。悲の又悲なる者は在世に漏れたるの悲なり、恨の更に恨なる者は苦海に沈むの恨なり。何に況んや曠劫より來た今日に至るまで、(一〇)惑業深重にして既に十方恒沙の佛國にも嫌はれ、罪障猶厚くして今亦五濁亂漫の邊土に來れり。嗚呼(一一)八相成道の昔は、獨り如來の出世に漏れたりと雖も、二千餘年の今は、僅に慈父の遺誡を聞く

(一)三界輪廻。色界無色界に生死するを云ふ。
(二)天耳。六神通の一也。
(三)荼毘。焚燒の意。
(四)擣簁和合。一切衆生の煩惱の病を治す藥。
(五)好色香藥。如來の說法を藥物に喩ふ。
(六)法王。佛は法王とす。
(七)慈尊。彌勒菩薩なり。
(八)鷄頭城。彌勒菩薩下生の所を云ふ。
(九)粟散。小國に喩ふ。
(一〇)上求下化。上菩提を求て下一切衆生を化度せんと欲するの意。
(一一)惑業。惑は煩惱業は惡の業作なり。
(一二)八相成道。釋尊出世の相は八の次第あるを云ふ。

(一)一切三寶。佛法僧なり、此の三寶に其品多きが故に一切三寶と云ふ。
(二)三途八難。三途とは地獄、餓鬼、畜生なり、八難とは、地獄、餓鬼、畜生、長壽天。北鬱單越、聾盲瘖瘂。世智辨聰。佛前佛後なり。
(三)解脫。極果の覺位を云ふ、即ち煩惱の繫縛を解して三界の獄を脫する意なり。
(四)本師。此の娑婆世界の化主なる故に釋迦如來を本師と云ふ。
(五)靈山。中印度摩伽陀國にあり靈鷲山と云ふ釋尊此山に居して說法す。

愚迷發心集

解脫上人造

敬つて十方法界の(一)一切三寶、日本國中の大小の神祇等に白して言さく、弟子五更に睡り寢めて、寂莫たる床の上に、雙眼に涙を浮べて、倩思ひ連ぬることあり、其所以何となれば、夫れ無始より以降、此に死し彼に生ずるの間、或時は鎮に、(二)三途八難の惡趣に墮ち、苦患に旱へられて、既に發心の謀を失ふ。或時は適人中天上の善果を感ずれども、顚倒迷謬して未だ(三)解脫の種を殖えず、先生又先生、都て生生の前を知らず、來世猶來世、全く世世の終りを辨ふることなし。常に地獄に處ることは園觀に遊ぶが如し。餘の惡趣に在ることは己が舍宅の如し。我れ何れの處より來りひ去つて何なる身をか受けん。親に付き疎に付く、皆今生に始めて見る人なり。神と云ひ佛と云ふ、亦此度纔かに知るものなり。彼の弟子が、(四)本師釋迦牟尼如來、昔(五)靈山に在せしの時、十方所有の群生恣まゝに其

(一三)喜見燒身等藥王品の說
(一四)妙音、觀音は妙音品、觀音品の說。

道に入り、乘象の普賢は三七を期して前に出づ。髻中の明珠、掌中の妙菓とは、蓋し斯れを謂ふなり。

法華諸品大意 終

果に趣く。(一)化城に中路に眠り、去りて寶處に來る。寶珠を友宅に繫けて資財に恣ならしむ。多聞の慶喜は記莂を聞きて往を憶ひ、忍辱の羅雲は深決を受けて來を覺る。五種の法師は同類を悲村に分ち、三箇の儀軌は聽衆を幽岫に集む。多寶の妙塔は上空に踊りて實を證し、釋尊世雄は下地を變じて客を坐せしむ。惡性の調達は阿鼻に臥して記を聞き、聽明の(二)龍女は圓珠を奉じて成佛す。(三)得記の除饉男は願を發して此經を他國に弘め、未記の乞士女は顏を改めて受記を將來に求む。(四)四安樂の行は初業に龜鏡たり、一佛乘の名は十方に聞え難く、(五)魔賊を摧きて明珠を得、法夢を見て即是を尅す。(六)淨行菩薩は大地を萬法に裂き、能昇の如來は、(七)本地を三世に顯はす。(八)八生一生分眞究竟に即座に登り、(九)五品六根觀行相似を後代に導く、(一〇)三佛性の像不輕の鏡に鑒み、(一一)十禪力の影舊住の池に浮ぶ。(一二)三摩三唱の付は如來の三業を動じ、三敬三答の禮は菩薩の十善を振ふ。分身既に本土に還へり、寶塔もまた玉扉を閉づ。(一三)喜見身を燒きて十喩に經を讃し、(一四)妙音國に入りて萬鉢目を樂しましむ。觀音普門に遊べば七難永く霧の如くに卷き、藥王摠持を說けば三災も霜の如くに消ゆ。邪見の嚴王は二子に緣りて

(九)五佛四一等。方便品の意。
(一〇)門外三車等は譬喩品に說く。
(一一)窮子傭賃等は信解品の意。
(一二)三草二木は藥草喩品に說く。
(一)化城は化城喩品。
(二)龍女成佛。提婆品に說く。
(三)得記除饉男。勸持品の意。
(四)四安樂。身、口、意、誓願。安樂行品に說く。
(五)魔賊を摧きて明珠を得ること。安樂行品の意。
(六)淨行菩薩等の事、從地涌出品の說。
(七)如來の本地。如來壽量品に說く
(八)八生一生等。分別功德品の說。
(九)五品六根等の事分別功德品以下法師功德品に至て說く。
(一〇)三佛性等。常不輕品の說。
(一一)十禪力等。神力品に說く。
(一二)三摩三唱、囑累品の說。

法華諸品大意

沙門最澄撰

夫れ(一)六句の通序は證信を擧げて首めに稱し、(二)五種の別叙は發起を表じて次ぎに居す。是を以て等覺の(三)慈氏は三念一疑を(四)覺母に問ひ、龍種の文殊は四酬三問を(五)逸多に答ふ。然れば則ち無問の法雷、(六)鶖子の蟄戸を驚開し、簡許の嚴風、上慢の萎華を吹去す。諸佛の(七)二智以て標章となし、實相の十如以て肝心となす。開權顯實以て咽喉となし、開近顯遠以て唇舌となす。所以に大事の因緣、出世の大意を諸機に盡くし、已今當の說難信難解を一代に極む。(八)爪像沙塔高く如來の因に登り、小音一稱遠く妙覺の果を攀づ。(九)五佛の四一は契經の筵に琴瑟たり、六義の三一は應誦の機に錦繡たり。(一〇)門外の三車は方便を先三に開き、露地の一牛は眞實を後一に顯はす。跉跰の(一一)窮子は傭賃に緣りて宅に近づき、憂慮の長者は君臣を集めて財を付す。(一二)三草二木同じく一地に歸し、四大聲聞倶に一

(一)六句通序。如是、我聞、一時、佛、住處、列衆の六句は、諸經に通じて同じき故に、通序と云ひ、又は證信序と云ふ。

(二)五種別叙。衆集、現瑞、疑念、發問、答問の五種は諸經同じからざる故に別叙と云ひ、又は發起序と云ふ。

(三)慈氏。彌勒の事。

(四)覺母。佛を云ふ。

(五)逸多。彌勒の事。

(六)鶖子。舍利弗の稱。

(七)二智。權智實智。

(八)爪像沙塔。戯れに爪を以て佛像を畫き、童子沙を聚めて塔を作ること。

說しつ。而るに、いま汝のために、略して少分を說かん。若し、善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を得んがために、精勤に(一)十波羅蜜を修行するに、若し有所得ならば、未だ報恩と名けず。若し人須臾もよく一善を行ひ、心無所得なるも乃ち報恩と名く。所以はいかん。一切の如來、無所得に觸れて乃し佛道を成じ諸の衆生を化したまふ。若し淨信の善男子等ありて、この經を聞くことを得て、信解受持し、解說書寫するに、無所得なるを以て(二)三輪體空なり。竊に一人のために四句の法を說けば、邪見の心を除きて菩提に趣き向はん。これ即ち名けて四恩を報ずとなす。何を以ての故に。この人、當に無上菩提を得べく、展轉して無量の衆生を教化して佛道に入れ令め、三寶の種子永く斷絕せざればなり」と。

爾のとき、智光長者、この偈を聞き已りて忍辱三昧を得、世間を厭離して不退轉を得たり。時に諸子等八千人と俱に、この三昧を得て、みな(三)無等々の阿耨多羅三藐三菩提を發す。四萬八千の人、また三昧をさとり、(四)塵を遠ざけ垢を離れて、法眼の淨きことを得たり。

大乘本性 心地觀經卷第二報恩品終

(一)十波羅蜜。六波羅蜜(前出)に方便、願、力、智を加へていふ。

(二)三輪。神通輪(身)、教誡輪(口)、記心輪(意)。これ衆生の煩惱を摧く濟度の力なり。

(三)無等々。等しく等しきもの無しといふことにて佛のさとりをいふ。

(四)塵垢 煩惱のこと。

正見の比丘もまた是の如し　(一)四種の輪王の及ばざる所なり
是の如きの(二)四類聖凡僧　有情を利樂して暫くも歇むことなし
稱へて世間の良福田となす　是れを僧寶の大恩德と名く
我說くところの四恩の義の如き　是れを能く世間を造る因と名く
一切の萬物これより生ず　若し四恩を離れては得べからず
譬へば世間の諸の色塵　能造の(三)四大にして而も生ずるを得るが如し
有情世間もまた〱然り　彼の四恩によりて安立するを得

爾のとき、智光長者、及び諸子等、佛の說きたまふところの四種の大恩を聞きて、未曾有なることを得、歡喜合掌して佛に白して言さく、「善いかな、善いかな、大慈世尊、濁惡世の、因果を信ぜず父母に孝せざる邪見の衆生のために、眞の妙法を說き、世間を利樂したまへることや。惟願はくば、世尊、報恩の義を說きたまへ。我すでに甚深の四恩を悟る。而かも今、未だ何れの善業を修めてこの恩を報ずるかを知らず」と。

佛、長者に告げたまはく、「善男子等。我れ五百の長者のために、先きに已に廣

(一)四種輪王。前出。
(二)四類。菩薩、聲聞、凡夫僧、及び他の一類の凡夫僧、前の二は聖僧後の二は凡僧也。
(三)四大。地、水、火、風の四要素。

是の因縁をもつて慈氏と名く
第四の(一)兜率天
晝夜恒に不退の行を説き
(二)八功徳水の妙華の池
我れいま弟子を彌勒に付す
末法の中において善男子
この善根をもつて彌勒を見て
舍利弗等の大聲聞
若し能く解脱戒を成就すれば
他のために説法して大乘を傳ふ
或は一類の凡夫の僧あり
一乘微妙の法を讃詠し
諸の衆生のために佛因を成じ
鬱金華の萎悴すと雖も

諸の衆生を成熟せんと欲ふがために
四十九重の如意殿に處りて
無數の方便をもつて人天を度したまふ
諸の有縁のもの悉く同じく生る
龍華會の中に解脱を得ん
一摶の食を衆生に施せば
當に菩提究竟の道を得べし
智慧神通をもつて群生を化す
眞にこれ正見を修行する人なり
是の如きの福田を第一となす
戒品全からずして正見を生じ
隨つて犯せば隨つて悔い障鎖除る
是の如きの凡夫もまた僧寶なり
猶ほ一切の諸の妙華に勝るゝが如し

(一)兜率天。須彌山の頂上十二萬由旬の處にあり、人間の壽四百歳を一日一夜となし、天壽四千歳、人壽に換算すれば五十七億六百萬歳を生く。
(二)八功徳水の輕、軟、冷、養、清淨、不臭、調適、無患の徳ある水。

法寶はよく大寶車となる　能く衆生を運んで火宅を出づ
法寶は能く大導師となる　能く衆生を引いて寶所に至る
法寶はよく大法螺を吹く　衆生を覺悟して佛道を成ず
法寶は能く大法燈となる　能く生死の諸の黑闇を照す
法寶はよく金剛の箭となる　能く國界を鎭めて諸の怨を伏す
三世の如來說きたまふところの法　能く衆生を利して苦縛を脫れ
涅槃安樂の城に引入す　是れを法寶の恩報じ難しと名く
智光長者、汝あきらかに聽け　世出世の僧に三種あり
菩薩と聲聞と聖凡衆　能く衆生を益して福田となる
文殊師利大聖尊を　三世の諸佛、以つて母となしたまふ
十方の如來初めて發心したまふは　皆これ文殊敎化の力なり
一切世界の諸の有情　名を聞き身及び光相を見
幷に類に隨うて諸の化現を見るに　皆佛道を成して思議し難し
彌勒菩薩(一)法王子　(二)初發心より肉を食はず

(一)法王子。佛法の王たる佛の弟子。
(二)初發心。初めて佛道修行心を起すこと。

菩薩、縁覺、及び聲聞　根の宜しき所に隨つて聖果を成す
是の如き所說の三身の佛　最上無比を名けて寶となす
(一)應化の二身の說きたまふ法　(二)教理行果を法寶となす
諸佛は法をもつて大師となす　心を修め證るところの菩提道
法寶は三世に變易なし　一切の諸佛みな歸學す
我れいま(三)薩婆若を頂禮す　故に法寶を說いて佛の師となす
或は猛火に入れども燒く能はず　時に應じて即ち眞の解脫を得
法寶はよく生死の獄を摧く　猶し金剛の萬物を碎くが如し
法寶は能く衆生の心を照す　日天子の空界を臨むが如し
法寶はよく堅牢の船となる　能く愛河を渡して彼岸に超ゆ
法寶は能く衆生に樂を與ふ　譬へば天鼓の天心に應ずるが如し
法寶はよく衆生の貪を濟ふ　(四)摩尼珠の衆の寶を雨すが如し
法寶は能く三寶の階となる　法を聞き因を修めて上界に生る
法寶は金輪大聖王なり　大法力をもつて(五)四魔を破る

(一)應化二身。衆生の機に應じたる佛身と、男女等に變化する佛身。
(二)教理行果。教とは、教によつて顯はるゝ道理と、道理によつて修むる修行と、修行によつて得る證果。
(三)薩婆若。一切智と譯す。
(四)摩尼珠。前出。
(五)四魔。前出。

(一)能化所化。能く教化する佛と、教化せらるゝ衆生と。
(二)本緣。もとのゆかり。
(三)四大洲。前出。
(四)六欲。欲界の六重の天。
(五)四禪。前出。
(六)空處識處悲想みな天の名なり。
(七)南贍部 前出。
(八)菩提樹王。前出。

根に稱うて爲めに諸の法要を説く　法樂を受けて一乘に入らしむ
彼れ神通を獲て漸く增長す　悟るところの法門また是の如し
下地の菩薩智慧を起すも　上地を了達すること能はず
(一)能化所化地に隨うて增す　各(二)本緣に隨うて所屬となる
或は一菩薩多佛に化し　或は多の菩薩を一佛に化す
是の如く十佛正覺を成じ　各〻七寶の菩提樹に坐す
前佛入滅して後佛成ず　化佛の劫を經て現はるゝに同じからず
十佛坐したまふところの蓮華臺　周徧くして各百千の葉あり
一々の葉の中に一佛土あり　即ちこれ三千大千世界なり
一々の界の中に百億の　日月、星辰、(三)四大洲
(四)六欲の諸天及び(五)四禪　(六)空處、識處、非想等あり
その四洲の中の(七)南贍部に　一々に各金剛座
及び(八)菩提大樹王あり　爾の變化したまふところの諸佛身
一時に菩提の道を證得し　妙法輪を大千に轉ず

(一)有爲無爲の諸の功德　法身に依止して常に清淨なり
法身の本性虛空の如し　(二)六塵を遠離して染むところなし
法身形なくして諸の相を離る　能相所相こと〴〵くみな空なり
是の如きの諸佛の妙法身　戲論言辭の相寂滅たり
如來の身を證得せんと欲するがために　菩薩よく萬行を修む
智體無爲眞法性　色心一切諸佛おなじ
譬へば飛鳥の金山に至るが如し　能く鳥身をして彼の色に同じからしむ
自受用身は諸の相好　一々十方の刹に偏く滿つ
(三)四智圓明にして法樂を受け　前佛後佛體みな同じ
法界に偏しといへども障礙なし　是の如きの妙境不思議なり
是の身は常に報佛の土に住す　自ら法樂を受けて間斷なし
他受用身は諸の相好　機に隨つて應現して增減なし
地上の諸の菩薩を化せんがために　一佛十種の身を現したまふ
所に隨つて應現して各同じからず　(四)展轉して倍增して無極に至る

(一)有爲無爲。はからひあると、なきと、迷と悟と。
(二)六塵　前出。
(三)四智。大圓鏡智、妙觀察智、平等性智、成所作智。
(四)展轉。その次〳〵とつゞくこと。

(一)淸信士。佛教の信者をいふ。

(二)三僧企耶大劫。前出の三僧祇劫に同じ。

(三)三身。前出の自性身、受用身、應化身。

(四)法身。自性身のこと。

(五)常斷。常恒と斷滅とをいふ。

菩提の妙果成り難きにあらず　眞の善知識に實に遇ひ難きなり
一切の菩薩勝道を修むるに　四種の法要を應に知るべし
善友に親近くを第一となし　正法を聽聞するを第二となし
理の如く思ひ量るを第三となし　法の如く修め證るを第四となす
十方一切の大聖主　この四法を修めて菩提をさとる
汝もろ〳〵の長者大會の衆　及び未來世の(一)淸信士
是の如き四法の菩薩地を　要ず修習して佛道を成ずべし
善男子等まさに諦に聽け　如來の說きたまふところの四恩は
佛寶の恩を最も上となす　衆生を度はんがために大心を發して
(二)三僧企耶大劫の中　具に百千の諸の苦行を修め
功德圓滿して法界に徧く　十地究竟して(三)三身を證る
(四)法身は體諸の衆生に徧し　萬德凝然として性常住なり
生ならず滅ならず來去なし　一ならず異ならず(五)常斷にあらず
法界に徧滿して虛空の如し　一切の如來ともに修め證る

心を發し行を修め(一)正覺を成ずれば　一切の佛土みな嚴淨なり
一乘の法寶は諸佛の母なり　三世の如來これより生ず
(二)般若の方便を無間に修むれば　解脫の道を成じて(三)妙覺に登る
若し佛菩薩、出現せずんば　世間の衆生に導師なけん
生死嶮難よりて過ぐるなく　如何して實所に至るを得ん
大願力をもつて善友となし　常に妙法を說きて修行せしむ
(四)十地に趣向して菩提を證り　善く涅槃安樂の處に入る
大悲の如來世間を化す　方便をもつて衆生を引導するが故に
內は一乘眞實の行を秘し　外、緣覺及び聲聞を現す
鈍根小智は一乘を聞きて　發心して多劫を經るを怖畏る
身に(五)如來藏あるを知らず　たゞ寂滅を欣んで塵勞を厭ふ
衆生もと菩提の種あり　悉く(六)賴耶藏識の中にあり
若し善友に遇ひて大心を發し　(七)三種鍊磨して妙行を修め
永く煩惱所知の障を斷ちて　如來常住の身を證得る

(一)正覺。正しきさとり、佛果をいふ。
(二)般若。智慧と譯する梵語。
(三)妙覺。妙なるさとり、佛果のこと。
(四)十地　前出。
(五)如來藏。眞如のこと、さとりの寶藏なればいふ。
(六)賴耶藏識　第八識のこと。異熟識と義譯す。前出。
(七)三種鍊磨。憐愍の念を起すこと、聰明なること、堪忍なること。

衆生(一)根に隨つて各々解を得　草木の潤を稟くるもまた差殊あり
菩薩聲聞衆生を化するは　大河の水の流れて竭きざるが如し
衆生信なくして化を被らざるは　幽冥に處りて日照し難きが如し
如來の月光甚だ清涼なり　能く衆の暗を除くもまた是の如し
猶ほ覆盆の月照さゞるが如し　迷惑の衆生もまた是の如し
法寳の甘露妙の良藥は　能く一切煩惱の病を治す
信ありて藥を服すれば菩提を證る　信なければ緣に隨つて惡道に墮つ
菩薩聲聞常に世にありて　無數の方便をもつて衆生を度す
若し衆生信樂の心あれば　各々三乘安樂の位に入らん
如來、世間に出でざれば　一切の衆生、邪道に入る
永く甘露を離れて毒藥を飮む　長に苦海に溺れて出づる期なし
佛日、三千界に出現して　大光明を放つて長夜を照す
衆生睡るが如くに覺知せず　光を蒙れば(二)無爲の室に入ることを得
如來未だ一乘の法を說かず　十方の國土悉く空虛なり

(一)根。根機、ひとがら。
(二)無爲。前出。

人天に王となりて自在を得ば　三聚淨戒を良緣となす
及び餘の(一)四趣諸王の身　淨戒を緣として勝果を獲
是の故に能く自在の因を修め　當に王となりて尊貴を受くるを得べし
應に先づ十方の佛を禮敬すべし　日夜に清淨戒を增修すれば
諸佛護念して常に受持す　戒は金剛に等くして破壞なし
三界の諸天、もろ〳〵の善神　王身及び眷屬を衛護し
一切の怨敵みな歸伏し　萬姓歡娯して王化を感ず
是の故に菩薩戒を受け持ちて　世出世の(二)無爲の果を感ず
三寶常住にして世を化す　恩德廣大にして不思議なり
(三)過未及び現(四)劫海の中　功德利生休息なし
佛日千光つねに世を照し　群生を利益して有緣を度す
緣なければ佛の慈光を覩ず　猶し盲者の見るところなきが如し
法寶は一味にして變易なし　前佛後佛說みな同じ
雨は一味にして普く能く霑ふが如し　草木滋榮するに大小の別あり

(一)四趣。地獄、餓鬼、畜生、修羅。

(二)無爲。爲すことなし。涅槃のさとりをいふ。

(三)過未現。過去、未來、現在。

(四)劫海　劫は長時と譯する梵語。時の長きことを廣き海に譬へていふ。

（一）修攝一切善法戒。修攝一切律儀戒。攝善法戒と攝律儀戒とに同じ。共に自利の戒なり。
（二）無間非法。無間地獄に墮すべき法ならざる惡業。
（三）二障。煩惱障と所知障。前出。
（四）三障。煩惱障業障、報障。
（五）習氣。前出。
（六）善逝。善く迷の世界を逝き去りたまへる方、佛のこと。

（一）修攝一切善法戒　修攝一切律儀戒
是の如き三聚清淨戒は　三世如來の護念したまふところ
（二）無間非法の諸の有情は　無量劫のなか未だ聞見せず
たゞ過去十方の佛のみまし／＼て　已に淨戒をうけて常に護持したまふ
（三）二障煩惱ながく斷除して　無上菩提の果を證るを獲
未來一切の諸の世尊　三聚淨戒の寶を守護し
（四）三障幷に（五）習氣を斷除して　常に正等大菩提を證るべし
現在十方の諸の（六）善逝　具に三聚淨戒の因を修め
永く生死の苦、輪廻を斷ち　三身菩提の果を證るを得
生死の深き大海を超越するは　菩薩の淨戒を船筏となす
永く貪瞋癡の繫縛を斷つは　菩薩の淨戒を利劍となす
生死の嶮道もろ／＼の怖畏　菩薩淨戒を舍宅となす
貧賤もろ／＼の苦因を息除むるは　淨戒をよく如意寶となす
鬼魅の著くところ諸の疾病　菩薩の淨戒を良藥となす

若し有智のものは信解を生じ　念々に觀察して眞如を悟らん
十方の諸佛みな前に現れて　菩提の妙果自然に證る
善男子等、我が滅後に　未來世の中の淨信の者
(一)二の觀門において常に懺悔して　當に菩薩の三聚戒を受くべし
若し上品の戒を受持せんと欲せば　應に戒師佛菩薩を請ずべし
我が釋迦牟尼佛を請じて　菩薩戒の(二)和上となすべし
龍種淨智尊王佛を　當に淨戒の(三)阿闍梨となすべし
未來の導師彌勒佛を、　當に淸淨教授の師となすべし
現在十方の(四)兩足尊を　當に淸淨證戒の師となすべし
十方一切の諸菩薩　當に修學戒の伴侶となすべし
(五)釋、梵、四王、金剛天　當に學戒の外護の衆とすべし
是の如きの佛菩薩　及び現前の傳戒の師を請じ奉り
普く四恩を報ぜんがための故に　淸淨の菩提心を發起して
應に菩薩の三聚戒を受くべし　(六)饒益一切有情戒

(一)二の觀門。觀事滅罪門、觀理滅罪門。
(二)和上。和尙とも書く。親敎師と譯する梵語なり。
(三)阿闍梨。軌範師と譯する梵語。
(四)兩足尊。二足尊ともいふ。二足あるもののうちの尊者。
(五)釋梵。帝釋天と大梵天とをいふ。
(六)饒益一切有情戒。攝衆生戒に同じ。利他の戒なり。

(一)名相。名稱と相狀、なまへとすがた。

是の如きの罪相本來空なり　三世のうち所得なし
內にあらず外にあらず中間にあらず　性相如々ともに動かず
眞如の妙理は名言を絕ち　たゞ聖智のみありて能く通達す
有にあらず無にあらず有無にあらず　有無ならざるにあらず(一)名相を離る
法界に周徧して生滅なし　諸佛は本來同じく一體なり
唯願はくは諸佛加護を垂れて　能く一切顚倒の心を滅したまへ
願はくは我れ早く眞性の源を悟りて　速に如來の無上道を證らん
若し淸信の善男子ありて　日夜よく妙理の空を觀ずれば
一切の罪障自から消除る　これを最上の淨戒を持つと名く
若し人實相空を觀知すれば　能く一切もろ〳〵の重罪を滅す
なほ大風の猛火を吹くに　能く無量のもろ〳〵の草木を燒くが如し
諸の善男子眞實觀ずるを　名けて諸佛の秘要門となす
若し他のために廣く分別せんと欲はば　無智の人の中に宣說すること勿れ
一切の凡愚衆生の類は　聞いて必らず疑を生じて心に信ぜず

(一)三業。身口意の三通の行。

(二)根緣。衆生の根機のてがゝり。

(三)跏趺。結跏趺坐のこと。右の趾を左の股に乘せ、左の趾を右の股にのせて坐ること。

(四)如。眞如そのまゝのすがた。

若し下根にして淨戒を求むるものあるに　是の無上菩提の心を發して
涕涙悲泣して身の毛竪ち　造るところの罪において深く慚愧し
十方三寶の所　及び六道衆生の前に對して
至誠に無始より來　あらゆる諸の衆生を惱亂するを發露して
無礙の大悲心を起し　身命を惜まず(一)三業を悔ゆ
已に作せる罪はみな發露し　未だ作さゞる惡は更に造らずと
是の如きの三品に諸罪を懺ゆるを　みな第一清淨戒と名く
慚愧の水をもつて塵勞を洗ひ　身心ともに清淨の器となす
諸の善男子、汝當に知るべし　已に淨觀、諸の懺悔を說きつ
その事と理とにおいては差別なし　たゞ(二)根緣の應ずると同じからざるを以てなり
若し修習して正理を觀んと欲はゞ　一切もろ〱の散亂を遠離し
新淨の衣を着けて(三)跏趺して坐し　心を攝め念を正して諸緣を離れよ
常に諸佛の妙法身を觀じ　體性空の如くして不可得なり
一切諸の罪性みな(四)如なり　顚倒の因緣は忘心より起る

我れ三界火宅の中に處り　妄に(一)六塵に染れて救護なし
我れ貧窮下賤の家に生れて　自在を得ずして常に苦を受く
我れ邪見の父母の家に生れて　罪を造るは惡の眷屬に依る
唯願はくは諸佛大慈尊　哀愍護念して一子の如くせよ
一たび懺いてまた諸罪を造らじ　三世の如來當に證明すべし
是の如く勇猛に懺悔する者を　名けて上品に淨戒を求むとなす
若し中根の戒を求むる者あれば　一心勇猛に諸罪を懺い
涕涙交々横りて覺知えず　徧身に汗を流して哀を佛に求め
無始生死の罪を發露して　願はくは大悲の水をもつて塵勞を洗ひ
罪障を滌除して(二)六根を淨め　我れに菩薩三聚戒を施したまへ
我れ願はくば堅く持ちて退轉せず　精修して苦の衆生を(三)度脱せしめん
自ら未だ度を得ずして先づ他を度す　未來の際を盡して常に斷ゆる無し
是の如く精勤勇猛の者　身命を惜まず菩提を求む
能く三寶靈異の相を觀ず　是れを中品の大懺悔と名く

(一)六塵。色、聲、香、味、觸、法をいふ。
(二)六根。眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根。
(三)度脱。生死海をわたして苦を脱れること。

懺悔はよく(一)四禪の樂を得　懺悔は寶を雨す摩尼珠なり
懺悔はよく金剛の壽を延す　懺悔はよく常樂の宮に入る
懺悔はよく三界の獄を出て　懺悔はよく菩提の華を開く
懺悔は佛の大圓鏡を見る　懺悔はよく寶所に至る
若しよく如法に懺悔する者は　當に二種の觀門に依つて修すべし
一には(二)觀事滅罪門　二には(三)觀理滅罪門
觀事滅罪にそれ三あり　上と中と下根とを三品となす
若し上根に(四)淨戒を求むるものあれば　大精進を發して心に退くなかれ
悲涙血に泣き常に精懇し　哀感身に徧くしてみな血現る
十方三寶の所　幷に餘の六道諸の衆生を繫念し
(五)長跪合掌して心亂れず　(六)發露心を洗ひて懺悔を求む
唯願はくは十方三世佛　大慈悲をもつて我を哀愍したまへ
我れ輪廻に處りて所依なし　生死の長夜常に覺らず
我れ凡夫に在りて諸の縛を具ふ　狂心顚倒して徧く(七)攀緣す

(一)四禪。四禪天。
(二)觀事滅罪門。差別の事をみきはめて罪を滅すること。
(三)觀理滅罪門。平等の理をみきはめて罪を滅すること。
(四)淨戒。三淨戒。
(五)長跪。兩膝を地につけること。ひざまづくこと。
(六)發露。あらはし告白すること。
(七)攀緣。外物に心をまよはすこと。

是の如きの人王は大恩あり　撫育の心報ずべきこと難し
この因緣をもつて諸の有情　若し能く大菩提を修證せば
諸の衆生において大悲を起して　如來の(一)三聚戒を受くべし
若し汝の如く戒を受けて欲する者は　應當に罪を懺いて消滅せしむべし
起罪の因に十緣あり　(二)身三と口四と及び意三となり
生死無始なれば罪も無窮なり　煩惱の大海は深くして底なし
業障峻極にして須彌の如し　業を造ること二種によつて起る
謂ゆる(三)現行と及び(四)種子と　(五)藏識一切の種を持緣す
影の形に隨つて身を離れざるが如く　一切時中に聖道を障ふ
近くは人天勝妙の果を障へ　遠くは無上菩提の果を障ふ
在家はよく煩惱の因を招き　出家もまた清淨の戒を破る
若しよく(六)如法に懺悔するものは　あらゆる煩惱こと〴〵くみな除る
猶ほ劫火の世間を壞るに　須彌幷に巨海を燒き盡すが如し
懺悔はよく煩惱の薪を燒く　懺悔はよく天に往生するの路なり

(一)三聚戒。前出の三淨戒をいふ。
(二)身三口四意三十惡のうち殺生、偸盜、邪婬は身の三惡、妄語、綺語、惡口、兩舌は口の四惡、貪欲、瞋恚、愚痴は意の三惡。
(三)現行。事實に現れたるもの。
(四)種子。事實に現るべきもの〻種。
(五)藏識。第八識をいふ。萬有の種子を藏せる故に名く。
(六)如法。法にかなふこと。

中品の菩薩戒を受け持てば
心の所作に随つて盡くみな成ず
下上品に持てば大鬼王となる
戒品を受け持ちて缺犯すと雖も
下中品に持てば禽獸の王となる
清淨戒において缺犯することあれども
下々品に持すれば閻魔王となる
禁戒を毀つて惡道に生ずと雖も
是の義を以ての故に諸の衆生
善能く護持して缺犯することなければ
若し(二)如來戒を受けざることあれば
何に況んや人天中の
是の故に王は因なきにあらず
國王は自らこれ人民の主

福自在を得て轉輪王となる
無量の人天悉く遵奉す
一切の非人咸く率伏す
戒の勝るゝに由るが故に王となるを得
一切の(一)飛走みな歸伏す
戒の勝るゝに由るが故に王となるを得
地獄の中に處りて常に自在なり
戒の勝るゝに由るが故に王となるを得
應に菩薩の清淨戒を受くべし
所生の處に随つて人王となる
終に野干の身を得ること能はず
最勝快樂にして王居に居るを感ぜんや
戒業精勤して妙果を成ず
慈恤すること母の嬰兒を養ふが如し

(一)飛走。禽獸の類をいふ。

(二)如來戒。菩薩戒に同じ。

國中の處々珍寶を生じ　人馬力を彊め怨敵なし
如意寶珠、王の前に現はる　境外の諸王自から賓伏す
若し不善を王の國に生ずれば　一念の起心衆惡を成ず
是の人命終りて地獄に墮ち　苦を受くること永劫にして出づる期なし
若し誠を勤めて國王を助くるあれば　諸天護念して榮祿を增す
智光長者、汝知るべし　一切の人王は(一)業の感ずる所なり
(二)諸法因緣より成ぜざることなし　若し因緣なければ諸法なし
生天及び惡趣なしと說くは　是の如きの人は因を了らず
無因無果の大邪見　罪福を知らずして(三)妄計を生ず
王の今受くる所の福樂　往昔に曾て(四)三淨戒を持ち
戒德熏習して招き感ずるところ　人天の妙果王身を獲る
若し人菩提心を發起して　願力をもて資けなば無上の果を成ぜん
堅く上品の淸淨戒を持てば　起居自在にして法王とならん
神通變化十方に滿ち　緣に隨つて普く諸の(五)群品を濟ふ

(一)業。過去になせし行。
(二)諸法。一切萬有。
(三)妄計。みだりなるはからひ。
(四)三淨戒 攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒。消極的に戒律を守りて惡を犯さず、積極的に善を修め、この二の自修より進みて他の衆生を攝めたすけること。
(五)群品。むらがれる衆生。

（一）正見　正しき見解。
（二）毘沙門王。多聞天王のこと。
（三）餘の三天。持國天王、廣目天王、增長天王。
（四）羅刹。可畏と譯す。畏るべき鬼神をいふ。
（五）帝釋。帝釋天をいふ。忉利天の主。
（六）夜叉。勇健と譯す。勇ましき鬼。

轉輪聖王出現のとき　六分に分作して王一を得
時に諸の人民五分を得　善惡の業報もまたみな然り
若し人王ありて（一）正見を修め　法の如く世を化するを天主と名く
天法によつて世間を化するを以て　（二）毘沙門王つねに擁護す
及び（三）餘の三天の（四）羅刹衆　みな當に聖王の宮を守護すべし
聖王世に出でゝ國を理るとき　衆生を饒益して十徳をなす
一には能く國界を照すと名け　二には國土を莊嚴ると名け
三には能く諸の安樂を與ふと名け　四には能く諸の怨敵を伏すと名く
五には能く諸の恐怖を遮ると名け　六には諸の聖賢を修集すと名く
七には諸法の根本と爲ると名け　八には世間を護持すと名く
九には能く造化の功を作すと名け　十には國界人民の主と名く
若し王十の勝徳を成就すれば　梵王（五）帝釋及び諸天
（六）夜叉羅刹鬼神王　身を隱して常に來つて國界を護る
龍王歡喜して甘雨を降し　五穀成熟して萬姓安し

世間のあらゆる妙なる園林　王の福力によつて皆滋茂る
世間のあらゆる諸の藥草　王の福力によつて諸疾をいやす
世間の百穀及び苗稼　王の福力によつてみな實と成る
世間の人民豐樂を受くるは　王の福力によつて常に自から然り
譬へば長者の一子あるか如き　智慧端嚴にして世に比なし
父母の恩愛眼目の如し　晝夜常に護念の心を生ず
國の大聖王もまた是の如し　衆生を愛念すること一子の如し
(一)耆年を養育し(二)孤獨を拯ひ　賞罰の心常に不二なり
是の如き仁王を聖王となす　群生敬仰すること如來に等し
仁王の化治には國に災なし　萬姓恭勤して常に安隱なり
國王法をもつて世を化するなくば　疾疫流行して有情を災す
是の如き一切の人非人　罪福昭然として覆ふところなし
善惡の法の中七分を分ち　造るもの五を獲て王は二を得
園林田宅こと／＼くみな然り　所税等しく分つこと亦是の如し

(一)耆年。老人。
(二)孤獨。みなしごと獨身者。

(一)三十三天。前出。

(二)琰魔王。靜息王と譯す。惡を靜めやむる王。地獄の冥府にある判罪王。

(一)三十三天及び餘天　恒に福力を持て王化を助く
諸天擁護りて一子の如し　是をもつて天子の名を稱することを得
世間王をもつて根本となす　一切人民の所依となす
猶し世間の諸の舍宅の　柱を根本となして成立するが如し
王は正法をもつて人民を化す　大梵王の萬物を生むが如し
王、非法を行へば政理なし　琰魔王の世間を滅するが如し
王、姦邪の人を容受るれば　象の華池に蹋ると等しくして異るなし
謂ふなかれ、時濁惡世に逢ふと　當に知るべし善惡はこれ王の修なり
日天子の世間を照すが如く　國王の世を化するも亦是の如し
日光は夜分に照さずと雖も　能く有情をして安樂を得しむ
王、非法をもつて世を化さば　一切の人民に依るところ無けん
世間のあらゆる諸の恐怖は　王の福力によつて生ずること能はず
人民なすところの安隱の樂　當に知るべし是れ王の福の及ぶところ
世間のあらゆる勝妙の華　王の福力に依つて而かも開敷く

(一)福智の門。六波羅蜜前出のうち前五を福門といひ後一を智門といふ。
(二)六時。晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜。
(三)宿住智。宿世即ち過去世のことを知る智慧。
(四)六趣。六道に同じ。
(五)四生。胎生、卵生、濕生、化生。
(六)六度。前出の六波羅蜜のこと。
(七)二種生死。分段生死と變易生死。

或は父母となり男女となり　世々生々互に恩あり
父母を見るが如く等しくして差なし　聖智を悟らざれば識るに由なし
一切の男子はみなこれ父　一切の女人はみなこれ母
如何ぞ前世の恩を報ぜざる　却つて異念を生じて怨嫉を成さんや
常に須らく恩を報じて互に饒益すべし　打罵して怨嫌を致すべからず
若し(一)福智の門を増修せんと欲はば　晝夜(二)六時に當に願を發すべし
願はくば我れ生々無量劫に　(三)宿住智の大神通を得て
能く過去百千の生を知り　更に相ひ憶識して父母となり
(四)六趣(五)四生の中に循環る　我が一念をして常に彼に至して
爲めに妙法を說いて苦因を離れしめ　人天の長受の樂を得しめん
堅固菩提の願を勸發し　菩薩(六)六度の門を修行し
永く(七)二種生死の因を斷ちて　疾く涅槃無上の道を悟らしめん
十方一切諸の國王　正法をもつて人を化するを聖王となす
國王の福德を最勝となし　作すところ自在なれば名けて天となす

(一)輪廻。車輪のめぐる如く迷の世界を經めぐること。

(二)追勝の福。死せるものに向つて勝れた福を廻向すること。

(三)父母。蓮華のなかより生れ出づる故に蓮華を父母となすといふ。

(四)無生。前出の無生忍。

(五)六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

男女聖にあらざれば神通なし　(一)輪廻を見ざれば報ずべきこと難し
哀なるかな世人聖力なし　慈母を拔濟すること能はず
是の因緣をもつて汝當に知るべし　福利もろ〱の功德を勤修すれば
其の男女(二)追勝の福をもつて　大金光ありて地獄を照す
光中に深妙の音を演說し　父母を開悟して意を發さしむ
昔の所生の常に罪を造るを憶うて　一念の悔心をもつて悉く除滅す
口に南無三世佛と稱へて　暇なき苦難の身を脫るゝことを得
人天に往生し長に樂を受け　佛を見、法を聞き當に成佛すべし
或は十方淨土の中に生れて　七寶の蓮華を(三)父母となし
華開いて佛を見て(四)無生を悟る　不退の菩薩を同學となし
六神通自在の力を得て　菩提微妙の宮に入ることを得
皆これ菩薩男女となりて　大乘の力に乘りて人間を化す
是れを眞に父母の恩を報ずと名く　汝等衆生ともに修學せよ
有情輪廻して(五)六道に生ず　なほ車輪の始終なきが如く

佛むかし修行して慈母のために　相好金色の身を感得し
名聞廣大にして十方に徧く　一切の人天ことごとく(一)稽首す
人と(二)非人とみな恭敬す　自から往昔の慈恩を報ずるに緣る
我れ(三)三十三天の宮に昇つて　三月母のために眞法を說き
母をして聽聞して正道に歸せしめ　(四)無生忍を悟つて常に不退ならしむ
是の如きをみな悲恩を報ずとなす　恩を報ずる深しと雖も猶ほ未だ足らず
神通第一の目犍連　已に三界の諸の煩惱を斷ち
神通力をもつて慈母をみれば　見るに苦を受けて餓鬼の中にあり
目連自からゆいて母恩を報じ　慈親を受くる所の苦より救ひ免がれしめ
(五)他化の諸の天衆に上生して　共に遊樂をなして天宮に處らしむ
常に知るべし父母の恩最も深し　諸佛聖賢は咸く德を報ず
若し人至心に佛を供養すると　また精勤に孝養を修むるとあれば
是の如きの二人の福異あるなし　三世の受報もまた窮りなし
世人子のために諸罪を造り　三途に墮在して長に苦を受く

(一)稽首。稽は至にて、頭を地に至りつけて禮拜すること。
(二)非人。前出。
(三)三十三天。前出。釋尊の御母摩耶夫人は釋尊出生後六日にして死し更に此の天にありしといふ。
(四)無生忍。前出。
(五)他化。他化自在天をいふ。

是の慈悲善根力のために　命終りて梵天に上生し
長に梵天の三昧樂を受け　如來に遇ひて佛の（一）記を受くるを得たり
この故に悲母に十德あり　應に隨つて義利その名を立つ
一には大地と名け、二には能生　三には能正者、四には養育
五には與智者、六には莊嚴　七には安隱と名け八には敎授
九には敎誡者、十には與業　餘の恩は母の恩に過ぎず
何の法か世間に最も富有なる　何の法か世間に最も貧無なる
母堂にゐます時を最富となし　母ましまさぬ時を最貧となす
母まします時は日中たり　悲母なきときは日沒たり
母まします時はみな圓滿　悲母亡きときは悉く空虛なり
世間一切の善男女　恩を重ぬる父母は丘山の如し
當に孝敬して恒に心を在くべし　恩を知り恩を報ずるは是れ聖道なり
身命を惜まず甘旨を奉じ　未だ一念色養を虧かざれ
その父母亡喪の時の如きは　將に恩を報ぜんと欲へども誠に及ばず

（一）記。佛が修行者に向ひ、汝は未來に何佛となるべしなどの豫言したまふこと。

(一)金剛天。執金剛神をいふ。

(二)恒河。ガンヂス河。

一切の佛と(一)金剛天と　神仙の祕法も能く救ふこと無けん
若し男女ありて母の敎によりて　顏色に承け順うて相違せざれば
一切の災難こと〴〵く消除り　諸天擁護りて常に安樂なり
若し能く悲母に承順すれば　是の如きの男女こと〴〵く凡にあらず
大悲の菩薩人間に化して　恩を報ずる諸の方便を示し現す
若し男子及び女人ありて　母恩を報ぜんために孝養を行ひ
肉を割き血を刺して常に供給へ　是の如く數一劫に盈ち
種々に孝道を勤め修むとも　なほ未だ暫時の恩を報ずること能はず
十月胎藏の中に處りて　常に乳根を銜み脂血を飲む
嬰孩たるより童子に及んで　飲むところの母乳百斛あまり
飲食、湯藥、妙の衣服　子は先に母は後るるを常則となす
子若し愚痴にして人に惡まるるも　母また恩憐みて棄遣せず
昔女人ありて其の子を抱き　(二)恒河の水瀑流を渡るに
水汎るをもつての故に力前み難く　子と倶に沒して能く捨つること無し

若し正しくその胎藏の子を誕む時は　鋒刃を攢めて肢節を解くが如し
東西に迷惑して辨ふること能はず　(一)偏身疼痛して堪ふる所なし
或は此の難によりて命終る　(二)六親眷屬こと〴〵く悲惱す
是の如き衆の苦みな子による　憂悲痛切にして口の宣ぶる所に非ず
若し平復を得て身安樂なれば　貧の寶を獲て喜び量り難きが如し
容顔を顧視して厭足なく　憐念の心、暫くも捨てず
母子の恩情常に是の如し　出入胸臆の前を離れず
母乳なほし甘露の泉の如し　長養時に及んで曾て竭くるなし
慈念の恩まことに比ひ難く　鞠育の德また量り難し
世間の大地稱して重しとなせども　悲母の恩の重きことは彼は過ぎたり
世間の須彌稱して高しとなせども　悲母の恩の高きことは彼は過ぎたり
世間の速疾はたゞ猛風なれども　母の心の一念は彼に過ぎたり
若し衆生ありて不孝を行ひ　母をして暫時恨心を起さしめ
怨念の辭の少分を生ずれば　子乃ち言に隨つて苦難に遇はん

(一)偏身疼痛。からだ全體の痛むこと。
(二)六親。父、母、伯、叔、兄、弟。

（一）七珍。七寶の珍財。

（二）大恩田。父母に供養する種をまけば、福徳自然にみのるが故に、父母のことを大恩田といふ。

（三）五欲。色、聲、香、味、觸の欲。

慈父の恩は高きこと山王の如し　悲母の恩は深きこと大海の如し
若し我れ世に住みて一劫において　悲母の恩を説くとも盡す能はず
我いま畧して少分を説く　猶、蚊虻の大海を飲むが如し
たとひ人ありて福徳のために　淨行の婆羅門
五通の神仙自在の者　大智師長及び善友を供養するに
(一)七珍を安置して堂殿となし　及び牛頭栴檀の房を以てし
百寶の臥具各敷き陳べ　世間の美味を甘露の如くし
萬病を療治する諸の湯藥を　金銀の器物に中に盛り滿し
是の如く供養すること日に三時　乃至數々百劫を盈つるも
如かず、一念、少分を申し　悲母の(二)大恩田を供養せんには
福徳無邊にして量るべからず　算分喩分もみな比るなし
世間の悲母その子を孕むや　十月懷胎長き苦を受く
(三)五欲の樂において情著かず　時に隨うて飲食するもまた然り
晝夜常に悲愍の心を懷き　行住坐臥に諸の苦を受く

難思の劫海に行願を修め　是の如きの大神通を證獲したまへり
我三昧の大寂室に入りて　諸根及び藥病を觀察す
自ら禪定を出でゝ而かも　三世の佛法心地門を讃歎す
時に諸の長者(一)大心を退きて　樂うて(二)二乘自利の行に住す
我れ大智方便の教を聞いて　(三)三空解脱の門に引入す
如來の意趣は能く量ることなし　たゞ佛のみ眞の秘密を知りたまへり
利根の聲聞、及び緣覺　不退を勤求する諸の菩薩
十二劫數ともに度量るとも　能くその少分を知ることなし
たとひ十方凡聖の智を　一人に授け與へて智者となし
是の如き智者竹林の如きも　その少分を測量ること能はず
世間の凡夫は慧眼なし　恩愛に迷うて妙果を失ふ
(四)五濁惡世の諸の衆生　深恩を悟らず恒に德に背く
我爲めに四恩を開示して　正見菩提の道に入らしむ
慈父慈母の長養の恩は　一切の男女をみな安樂ならしめたまふ

(一)大心。大乘教を學ぶ心。
(二)二乘。聲聞と緣覺との小乘。
(三)三空解脱門。空、無相、無願の三解脱門にて、一切は空なり、從つて相なし、從つて願ひ求むるものもなしと、執著差別を離るゝこと。
(四)五濁。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。

法のための故に、我が所に來至し、是の如く八十由旬大地微塵を經過す。一々の塵數、よく人天輪王の果報を感ず。既に法を聞き已りて、(一)當來に阿耨多羅三藐三菩提を證り得べし。我先に甚深の四恩微妙の義趣を説くと雖も、今また汝がために重ねてこの義を宣べん。而かも(二)偈を説いていはく。

最勝法王大聖主　一切人天に等倫なし
諸の相好を具へて以て身を嚴り　智慧空の如くにして量りあることなし
自他の利行みな圓滿し　名稱普く諸の國土に聞ゆ
永く煩惱餘の(三)習氣を斷ち　善く蜜行を持して諸根を護る
百四十種の不共の德　廣大の福海悉く圓滿す
三昧神道みな具足し　(四)八自在の宮に常に遊樂む
十方の人天及び外道　能く調御師を難ずること有ることなし
金口よく無礙辯を宣べて　能く問ふことなしと雖も而かも自ら説く
大海の潮の時を失はざる如く　亦た天鼓の天心に稱ふが如し
是の如きの自在は唯佛のみにあり　五通の仙(五)魔梵等にあらず

(一)當來。當に來るべき次の生涯。
(二)偈。讃歌をいふ。
(三)習氣。習慣の氣分。煩惱の本躰を斷ち去れる後に未だ餘薰として殘れる習慣性をいふ。
(四)八自在。一身が多身となり、世界にあまねく行く等の八種の自由。
(五)魔梵。魔王と大梵天王。

(二)金輪轉輪聖王。金の輪寶を持てる轉輪聖王。(三)欲天王。欲界に六天あるうちの王。(四)梵天王。前出。

(二)金輪轉輪聖王。金の輪寶を持てる轉輪聖王。(三)欲天王。欲界に六天あるうちの王。(四)梵天王。前出。

王舍城の(一)耆闍崛山にまし〳〵て、濁惡世の無量の衆生のために、大乘報恩の法を宣說したまへるを聞きて、父母及び子、幷に諸の眷屬、法を聽かんための故に、供具を齎持し、佛の所に來り詣でゝ、供養恭敬して、佛に白して言さく、「我れに一子あり。その性弊惡にして父母のあらゆる教誨を受けず、いま佛、四種の恩を報ずるを說きたまふを聞きて、法を聽かんがための故に、佛の所に來り詣づ。惟願くは、世尊、我等が類、及び諸の眷屬のために、四恩甚深の妙義を宣說して、彼の惡子をして孝順の心を生ぜしめ、此世當世、安樂を得しめたまへ」と。

爾のとき、佛、智光に告げたまはく、「善いかな、善いかな。汝、法のための故に我が所に來至し、供養恭敬し、この法を聞くを樂ふ。汝等、諦に聽いて善くこれを思念せよ」。

「若し善男子善女人ありて、菩提心を起し、法要を聞かんがために、足を擧げ足を下し、その遠近の踐めるところの地の微塵の數量に隨つて、この因緣をもつて(二)金輪轉輪聖王を感得す。聖王の報盡きて、(三)欲天王となる。欲天の報つきて、(四)梵天王となる、佛を見、法を聞きて、速に妙果を悟る。汝、大長者及び餘衆等、

(一)忍辱三昧。何事にも堪へ忍ぶ禪定。
(二)不退轉。如何にするも再び墮落せざる位をいふ。
(三)無生忍。一切萬有には眞實の生滅なく、そのまゝ常住實相なるを悟ること。忍は忍定にて悟ることをいふ。
(四)彌勒の內宮。彌勒菩薩の居る兜率天の中央宮をいふ。
(五)白毫相。佛菩薩の兩眉の間にありて光明を放つ白き卷毛。
(六)龍華三會。五十六億七千萬年の後、彌勒は龍華樹の下にて佛となり三回の說法をなすをいふ。
(七)正定聚。正しく佛となるに定まれるともがら。
(八)王舍大城。前出。
(九)由旬。印度の里程をいふ。三十里程に當るとか。

き、(一)忍辱三昧を得て、不思議智に入り、(二)不退轉を得たり。爾の時に、會中の八萬四千の衆生、菩提心を發して堅固信を得たり。及びこの三昧海會の大衆、悉く金剛忍辱三昧を得て、(三)無生忍及び柔順忍を悟る。或は初地を悟り、不起忍を得たり。無量の衆生、菩提心を發して、不退位に住す。

爾のとき、佛、五百の長者に告げたまはく、「未來世の中に、一切衆生、若しこの『心地觀報四恩品』を聞くを得ることありて、受持し、讀習し、解說し、書寫して、廣く流布せしめん。是の如き人等は、福智增長し、諸天衞護し、現身に疾なく、壽命延長ならん。若し命終のときは、即ち(四)彌勒の內宮に往生することを得、(五)白毫相を觀て生死を超越し、(六)龍華三會に當に解脫を得べし。十方の淨土意に隨つて往生すべし。佛を見、法を聞き、(七)正定聚に入りて、速に阿耨多羅三藐三菩提の如來の智慧を成ずべし」と。

爾の時、(八)王舍大城の東北八十(九)由旬に一の小國あり。增長福と名く。彼の國中において一の長者あり。名けて智光といふ。其年衰邁してたゞ一子のみあり。この子惡性にして父母に順はず、あらゆる敎誨みな從ふ能はず。遙に釋迦牟尼如來

男子善女人ありて、大悲心を發して、(一)無上正等菩提を求めんがために、自の妻子を以つて他人に施與して心に悋惜なく、身肉手足、頭目髓腦、乃至身命を來りて求むる者に施す。是の如きの布施は、ただ親近波羅蜜多と名けて、未だ眞實の波羅蜜多と名けず。若し善男子善女人、無上大菩提心を發起して、(二)無所得に住して、諸の衆生を勸めて、同じく此心を發さしめ、眞實法の(三)一四句の偈を以て一の衆生に施して、無上正等菩提に向はしむ。これを眞實の波羅蜜多と名く。前の二の布施は、未だ報恩と名けず。若し善男子善女人、能く是の如きの第三の眞實波羅密多を修すれば、乃ち眞實に能く四恩を報ずと名く。所以はいかん、前の二の布施は有所得心なり、第三の施は無所得心なり。眞實の法をもつて一有情に施して、無上大菩提心を發さしむ。この人、菩提を悟るを得るに當りて、時に廣く衆生を度して、窮盡あることなし。三寶の種を紹けて、斷絕せざらしむ。この因緣をもつて名けて恩を報ずとなす」。

爾の時に、五百の長者、佛に從つて、昔より未だ聞かざるところの報恩の法を聞き、心に踊躍を懷き、(四)未曾有なることを得て、發心して求めて無上菩提に趣

(一)無上正等菩提　阿耨多羅三藐三菩提といふ梵語の譯この上なく正しく等しき佛のさとり。

(二)無所得。心に執着するところなきをいふ。

(三)一四句の偈　僅かの文句。

(四)未曾有　未だかつて有らざること。

もまた／＼是の如し、諸の世間最勝妙寶を超えたり。十には不變なること眞金の火に入りて不變なるが如し、佛法僧寶もまた是の如し」。

「世間の(一)八風も傾動すること能はず、佛法僧寶、無量の神通變化を具足して有情を利樂し、暫くも休息なし。この義をもつての故に、諸の佛法僧を說いて名けて寶となす」。

「善男子。我れ汝等のために、略して四種の世出世間有恩の處を說きぬ。汝等當に知るべし。應に菩薩の行を修めて、是の如き四種の恩を報ずべし」。

爾のとき、五百の長者、佛に白して言さく、「世尊、是の如き四恩は、甚だ報じ難しとなす。當に何の行を修めて、而かも是の恩を報ずべきや」。

佛、諸の長者に告げて言はく、「善男子。菩提を求むるがために、その三種の十波羅蜜あり。一には十種の(二)布施波羅蜜多、二には十種の親近波羅蜜多、三には十種の眞實波羅蜜多なり。若し善男子善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發して、能く七寶を以て三千大千世界に滿てゝ、無量の貧窮の衆生に布施せん、是の如きの布施は、たゞ布施波羅密多と名けて、眞實の波羅密多と名けず。若し善

(一)八風。利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂。

(二)布施。ものを施し與へること。

す。佛法僧寶もまた〳〵是の如し。一には堅牢なること、(一)摩尼寶の人の能く破ることなきが如し。佛法僧寶もまた〳〵是の如し。(二)外道天魔も破ること能はず。二には無垢なること世間の勝寶の清淨光潔にして塵穢を雜へざるが如し。佛法僧寶もまた〳〵是の如し。悉くよく煩惱の塵垢を遠離す。三には樂を與ふること天の(三)德瓶のよく安樂を與ふるが如し。佛法僧寶もまた〳〵是の如し。よく衆生に世出世の樂を與ふ。四には難遇なること、吉祥寶の希有にして得難きが如し。佛法僧寶もまた〳〵是の如し。業障の有情は、億劫にも遇ひ難し。五には能く破すること如意寶のよく貧窮を破るが如し。佛法僧寶もまた〳〵是の如し。能く世間諸の貧苦を破る。六には威德あること轉輪王のあらゆる輪寶のよく諸怨を伏するが如し。佛法僧寶も、また〳〵是の如し。(四)六神通を具して(五)四魔を降伏す。七には滿願なること摩尼珠の念に隨つて能く求むるところの衆寶を雨すが如し。佛法僧寶もまた〳〵是の如し。能く衆生の修むるところの善願を滿たす。八には莊嚴すること世の珍寶の王宮を莊嚴るが如し。佛法僧寶もまた〳〵是の如し。法王の菩提の寶宮を莊嚴る。九には最妙なる天の妙寶の最も微妙なるが如し。佛法僧寶

(一)摩尼寶。前出。

(二)外道。佛教外の教。主として婆羅門教にいふ。

(三)德瓶。意のまゝに何物にても出す不思議の瓶。

(四)六神通。前出の五通に宿命通を加ふ。宿命とは宿世の運命にて、前世のことをいふ。

(五)四魔。前出。

正見の(一)比丘も、また〳〵是の如し。餘の衆生に勝ること、百千萬倍なり。禁戒を毀つと雖も、正見を壞らず、この因緣をもつて福田僧と名く」。

「若し善男子善女人等、是の如き福田僧を供養するものは、得るところの福德、窮盡あることなし。前の三の眞實の僧寶を供養して獲るところの功德は正等にして異なることなし。是の如き四類の聖凡僧寶、有情を利樂して、恆に暫くも捨てず。これを僧寶の不思議恩と名く」。

爾のときに、五百の長者、佛に白して言さく「世尊、我等、今日、佛の法音を聞きて三寶の世間を利益することを悟るを得たり。然るにいま何の義をもつての故に、佛法僧を說いて、名けて寶となすを得ることを知らず。願はくは、佛、解說し顯示して、衆會及び未來世の三寶を敬信する一切の有情をして、永く(二)疑網を斷ち不壞の信を得て、三寶不思議海に入らしめたまへ」と。

爾のとき、佛、諸の長者に告げて言はく、「善いかな、善いかな。汝善男子、能く、如來甚深の妙法を問へり。未來世において、一切衆生を利益し安樂せしめむ。」

「譬へば、世間第一の珍寶の如きは、十義を具足し、國界を莊嚴し、有情を饒益

(一)比丘。乞士と譯す。道を乞ひ食を乞ふ僧のこと。

(二)疑網。疑のもつれたるあみ。

「善男子。三世の如來の說きたまふところの妙法に、是の如き等の難思議の事あり。これを法寶の不思議恩と名く」。

「善男子。世出世間に三種の僧あり。一に菩薩僧、二に聲聞僧、三に凡夫僧なり。(一)文殊師利、及び彌勒等はこれ菩薩僧なり。(二)舍利弗、(三)目犍連等の如きは是れ聲聞僧なり。若し(四)別解脫戒を成就することある眞善の凡夫、乃至一切の正見を具足して、よく廣く他のために衆の聖道法を演說し開示して衆生を利樂せば、凡夫僧と名く。未だ無漏の戒定、及び(五)慧解脫を得ること能はずと雖も、而かも供養するものは、無量の福を獲。是の如きの三種を眞の福僧と名く」。

「また一類ありて(六)福田僧と名く。(七)佛舍利及び佛の形像、幷に諸の法僧聖の制する所の戒に於いて、深く敬信を生じ、自ら邪見なく他をしてまた然らしむ。能く正法を宣べて一乘を讚歎し、深く因果を信じて、常に善願を發し、その過を犯すに隨ひて業障を悔除す。當に知るべし、この人は三寶を信ずる力、諸の外道に勝るゝこと、百千萬倍なり。また(八)四種の轉輪聖王に勝る、何に況んや、餘類の一切衆生をや。鬱金華は然かも萎悴すと雖も、なほ一切諸の雜類華に勝るゝが如く、

(一)文殊師利。妙德と譯す。
(二)舍利弗。身子と譯す。十大弟子のうち智慧第一なり。
(三)目犍連。胡豆と譯す。十大弟子のうち神通第一なり。
(四)別解脫戒。部分的に一つ〱非惡を解脫して行く戒律。
(五)慧解脫。智慧をもつて煩惱障を離れること。
(六)福田僧。僧に供養すればその人に福自らみのる故に僧を福田といふ。
(七)舍利。身骨と譯す。
(八)四種の轉輪聖王。鐵輪王、銅輪王、銀輪王、金輪王。

を求めて、永く生死を斷ちて大菩提を得たり。是の故に、法寶はよく一切生死の牢獄を破ぶること、なほ金剛のよく萬物を壞るが如し。法寶はよく(一)癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。法寶はよく貧乏の衆生を救ふ、(二)摩尼珠の衆寶を雨すが如くなるが故に。法寶はよく衆生に喜樂を與ふ、なほ(三)天鼓の諸天を樂ましむるが如くなるが故に。法寶はよく諸天の寶階となる、正法を聽聞して天に生まるゝを得るが故に。法寶はよく堅牢の大船たり、生死の海を渡りて彼岸に到るが故に。法寶はなほ(四)轉輪聖王の如し、よく(五)三毒の煩惱賊を除くが故に。法寶はよく珍妙の衣服たり。無慚の諸の衆生を覆ふが故に。法寶はなほ金剛甲冑の如し、よく(六)四魔を破りて菩提を證るが故に。法寶はなほ智慧の利劍の如し、生死を割き斷ちて繫縛を離るゝが故に。法寶は正しくこれ三乘の寶車なり、衆生を運載して火宅を出だすが故に、法寶はなほ一切の明燈の如し、よく(七)三塗黑闇の處を照すが故に。法寶はなほ弓箭矛矟の如し、よく國界を鎭め怨敵を摧くが故に。法寶はなほ險路の導師の如し、よく衆生を誘ひて寶所に達するが故に」。

(一)癡闇。愚癡のやみ。
(二)摩尼珠。如意珠と譯する梵語前出。
(三)天鼓。忉利天の善法堂にある鼓人の叩かざるに鳴る。
(四)轉輪聖王。全世界を統一せる王輪寶をもつて魔軍をくぢくが故に名く。
(五)三毒。貪欲、瞋恚、愚痴。
(六)四魔。蘊魔、煩惱魔、死魔、天魔。
(七)三塗。地獄、餓鬼、畜生。

消除り、福智増長し、善根を成就し、速に佛を見たてまつることを得て、永く生死を離れ、當に菩提を證るべし」。

「諸の善男子。一の佛寶に無量の佛ましますが如く、如來の說きたまふところの法寶も、また然り。一の法寶の中に無量の義あり。善男子。法寶の中にそれ四種あり。一には敎法、二には理法、三には行法、四には果法なり。一切の(一)無漏、よく無明煩惱の業障を破ぶる聲、名、句文を名けて敎法となす。(二)有無の諸法を名けて理法となす。(三)戒定慧の行を名けて行法となす。(四)爲無爲の果を名けて果法となす。是の如き四種を、名げて法寶となす。衆生を引導して生死の海を出だし、彼岸に至らしむ。善男子。諸佛の師とするところは即ちこれ法寶なり。所以はいかん。(五)三世の諸佛、法に依りて修行して、一切の障を斷ちて、菩提を成ずることを得、未來の際を盡して衆生を利益す。この因緣をもつて、三世の如來、常によく諸の(六)波羅蜜微妙の法寶を供養す。何に況んや、(七)三界の一切衆生未だ(八)解脫を得ず、而かも微妙の法寶を敬ふこと能はざらんや」。

「善男子。我れ昔、曾て法を求むる人王となりて、大火坑に入りて、而かも正法

(一)無漏。前出。
(二)有無。實在と非實在。
(三)戒定慧。戒律と禪定と智慧と。
(四)爲無爲。迷のはからいを爲といひ、はからゐなき涅槃を無爲といふ。
(五)三世。現在、過去、未來。
(六)波羅蜜。前出。
(七)三界。前出。
(八)解脫。迷を解き苦を脫れることさとること。

の六種の功德を具へて、常に能く一切衆生を利樂す。これを佛寶不思議恩と名く」と。

爾のときに五百の長者、佛に申して言さく「世尊、佛の說きたまふ所の如き、一の佛寶の中に、無量の化佛、世界に充滿して、衆生を利樂したまふ。何の因緣を以てか、世間の衆生、多く佛を見ず、諸の苦惱を受くるや」。

佛、五百の長者に告げたまはく、「譬へば日光天子、百千光を放ちて世界を照明すれども、而かも盲者ありて光明を見ざるが如し。汝、善男子。意においていかん。日光天子、而かも過あるや否や」。

時に長者の言さく、「不なり」と。

世尊佛の言はく、「善男子。諸佛如來は、常に正法を演べて(一)有情を利樂したまふ。この諸の衆生、常に惡業を造りて、都て覺知らず、慚愧の心なく、佛法會において親近するを樂はず。是の如き衆生は、罪根深重にして無量劫を經て、三寶の名字を見聞するを得ざるは、彼の盲者の日光を觀ざるが如し。若し衆生ありて、如來を恭敬し、大乘を愛樂し、三寶を尊重すれば、當に知るべし、この人は業障

(一)有情。情識あるもの。衆生に同じ。

三藐三菩提を得て、佛慧を究竟せしむ。(一)辟支佛を求むるもの丶爲めには、應ぜる(二)十二因緣の法を說き、聲聞を求むるもの丶爲めには、應ぜる(三)四諦の法を說きて、生老病死を度たして涅槃を究竟せしむ。餘の衆生のためには、人天の敎を說きて、人天安樂の妙果を得しむ。諸の是の如き等の大小の化佛、みな悉く名けて佛の變化身を爲す」。

「善男子。是の如き二種自受用他受用應化の身は、佛滅度を現すと雖も、而かもこの佛身は、相續常住なり」。

「諸の善男子。一佛寶の如き是の如き等の無量無邊不可思議なる利樂衆生の廣大の恩德あり。この因緣をもつて名けて(四)如來、(五)應、正徧知、明行圓滿、(六)善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊となす」。

「善男子。一の佛寶の中に六種の微妙の功德を具足したまふ。一には無上大功德田なり。二には無上の有大恩德なり。三には(七)無足二足、および多足の衆生中の尊なり。四には極めて値遇し難きこと優曇華の如し。五には三千大千世界に獨一出現したまふ。六には世出世間の功德圓滿して一切義の依なり。是の如き等

(一)辟支佛。緣覺

(二)十二因緣。迷の因果を十二階に分けたる敎義。

(三)四諦。迷悟の因果を四通に說明せる敎義。苦、集、滅、道。

(四)如來。眞如より來れる方。

(五)應。供養に應ずる資格ある方。

(六)善逝。善く迷の世界より去れる方。

(七)無足多足。蛇の如き足なきもの、百足の如き足多きもの。

て大神通を起して變化して千佛世界に滿ち、無量の衆生を利益し安樂す。第三の佛身は萬葉の蓮華に坐して三地の菩薩のために萬法明門を說く。菩薩悟り已りて大神通を起して、變化して萬佛の國土に滿ち、無數の衆生を利益し安樂す。是の如きの如來、漸々增長す。乃至十地の他受用身は不可說妙寶蓮華に坐して、十地の菩薩のために不可說の諸法明門を說く。菩薩悟り已りて大神通を起して、變化して不可說の佛微妙の國土に滿ちて、不可宣說、不可宣說、無量無邊種類の衆生を安樂す。是のごとき十身みな七寶の菩提樹王に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を證得す。諸の善男子。一々の華葉、各々一の(一)三千世界となり、各々百億の(二)妙高山王、及び(三)四大洲、日月星辰、(四)三界の諸天ありて具足せざることなし。一々の葉上の諸の(五)瞻部洲に金剛座菩提樹王あり。この百千萬より不可說に至る大小の化佛、各々樹下において魔軍を破り已りて一時に阿耨多羅三藐三菩提を證得す。是の如き大小の諸の化佛身、各々(六)三十二相八十種好を具足して、諸の資糧(位)及び(七)四善根(位)、諸の菩薩等、二乘凡夫のために、宜しきに隨つて爲めに(八)三乘の妙法を說く。諸の菩薩のためには、應ぜる(九)六波羅蜜を說きて阿耨多羅

(一)三千世界。須彌山、日月、三界の諸天を一世界といひ、これを三千集めたるもの。
(二)妙高山。須彌山。
(三)四大洲。須彌山の四方にある南閻浮洲、東勝神洲、西牛貨洲、北俱盧洲をいふ。
(四)三界。前出の三有のこと。
(五)瞻部洲。南閻浮洲のこと。
(六)三十二相八十種好。佛身にある三十二の大きなるすがたと、八十の小なるすがた。
(七)四善根。小乘の修行の四階級。
(八)三乘。聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘。
(九)六波羅蜜。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。

功德の依止するところたり。二に平等性智、(一)我見識を轉じてこの智慧を得。是をもつて能く自他平等、(二)二無我の性を證る。是の如きを名けて平等性智となす。三に妙觀察智、(三)分別識を轉じて、この智慧を得。よく諸法の(四)自相共相を觀じ、(五)衆會の前において諸の法を說き、能く衆生をして不退轉を得しむ。是をもつて名けて妙觀察智となす。四に成所作智、(六)五種識を轉じてこの智慧を得。よく一切種々の(七)化身を現す。諸の衆生をして善根を成熟せしむ。この因緣をもつて名けて成所作智となす。是の如き四智を而かも上首となして、八萬四千の智門を具足す。是の如きの一切諸の功德の法を、名けて如來の自受用身となす」。

「諸の善男子。二に如來の他受用身とは、八萬四千の相好を具足す。眞淨土に居して(八)一乘の法を說き、諸の菩薩をして大乘微妙の法樂を受用せしむ。一切の如來、(九)十地の諸の菩薩衆生を化せんがために十種の他受用身を現す。第一の佛身は百葉の蓮華に生じて初地の菩薩のために百法明門を說く。菩薩悟り已りて大神通を起して、變化して百佛の世界に滿ち、無數の衆生を利益し安樂す。第二の佛身は千葉の蓮華に坐して、二地の菩薩のために千法明門を說く。菩薩悟り已り

(一)我見識。第七識をいふ。迷を起す根本精神なり。
(二)二無我。前出の二空に同じ。
(三)分別識。第六識をいふ。ものゝ辨別を立つる精神。
(四)自相共相。箇別のすがたと、共通のすがた。
(五)衆會。澤山なる人の集會。
(六)五種識。眼耳鼻、舌、身のはたらきを起す精神。
(七)化身。變化の佛身。
(八)一乘法。すべてがたゞ佛となる敎。乘は衆生を乘せてさとりに運ぶ敎のこと。
(九)十地。菩薩の位に、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の五十二段あるうちの第四十一位より第五十位迄をいふ。

周圍際なくして凝然常住なり」。

「その(一)受用身に二種の相あり。一には自受用、二には他受用なり。自受用身は、三僧祇劫に修むるところの萬行、諸の衆生を利益し安樂し已りて、十地の滿心に身を運んで直に色究竟天に往く。三界を出過せる淨妙の國土にして、無數量の大寶蓮華に坐して、不可說海會の菩薩前後に圍繞す。無垢の繒をもつて頂上に繫く。供養恭敬、尊重讃歎す。是のごときを名けて後報利益となす。爾のときに菩薩、(二)金剛定に入り、一切微細の(三)所知、諸の煩惱障を斷除して、阿耨多羅三藐三菩提を證得す。是の如きの妙果を現報利益と名く。この眞報身は有始無終なり。壽命の劫數、限量あることなし。初め正覺を成り、未來の際を窮めて(四)諸根相好法界に徧周し。四智圓滿する、これ眞報身の(五)受用法樂なり。一に大圓鏡智、(六)異熟識を轉じてこの智慧を得。大圓鏡の諸の色像を現ずが如し。是の如く如來鏡智の中によく衆生の諸の善惡の業を現す。この因緣をもつて、この智を名けて大圓鏡智となす。大悲によるが故に恆に衆生を緣ず、大智によるが故に常に法性に如ふ。(七)眞俗を雙觀して間斷あることなく、常によく無漏の根身を執持して一切

(一)受用身。自性身がはたらきをあらはせる佛身。自己のためにはたらくを自受用身といひ、他のためにはたらくを他受用身といふ。

(二)金剛定。金剛の如く堅き不動の禪定。

(三)所知と煩惱。外物に迷ふを所知障といひ、自己に迷ふを煩惱障といふ。

(四)諸根相好。眼耳等の六根のすがた。

(五)受用法樂。心に味ひ樂しむこと。

(六)異熟識。第八識とて、精神の根本をいふ。異熟とは善惡の分別を離れたること。

(七)眞俗。平等門の眞諦と差別門の俗諦。

て、違順の果報みな響の應ずるが如く、聖王の恩德廣大なること是の如し」。

「善男子。三寶の恩とは、不思議に名く。衆生を利益して休息あることなし。この諸の佛身は、眞善(一)無漏なり。無數大劫に因を修めて悟るところなり。(二)三有の業果ながく盡きて餘すなし。功德の寶山巍々として比ひなし。一切の有情の知ること能はざるところなり。福德の甚深なること猶し大海の如し。智慧無礙にして虛空に等し。神通變化して世間に充滿す。光明あまねく十方三世を照す。一切の衆生の(三)煩惱業障すべて覺知らず、苦海に沈淪みて生死きはまりなし。三寶出世して大船師となり、能く(四)愛流を截ち、彼岸に超え昇す。諸の有智のもの悉くみな瞻仰す」。

「善男子等。唯一の佛寶に三種の身を具ふ。一に自性身、二に受用身、三に變化身なり。第一の佛身に(五)大斷德あり、(六)二空の顯るゝところなり。一切諸佛悉くみな平等なり。第二の佛身に大智德あり。眞常無漏なり、一切の諸佛悉くみな同意なり。第三の佛身に大恩德あり、(七)定通變現、一功の諸佛悉くみな同事なり」。

「善男子。その(八)自性身は無始無終なり。一切の相をはなれ、諸の戲論を絕つ、

(一)無漏。漏とは膿血の如く身心に流れ出る煩惱をいひ、この煩惱なきを無漏といふ。

(二)三有。三界に同じ。欲界、色界、無色界とて、迷の世界の全體をいふ。

(三)煩惱業障。煩惱と煩惱からつくる惡業のさはり。

(四)愛流。貪愛に迷ふ生死の流轉。

(五)大斷德。大いに煩惱を斷ち切る德。

(六)二空。我空と法空。我も萬有も實在ならずといふこと。

(七)定通變現。禪定力によつて通力を起し、自由に形と行とをかへること。

(八)自性身。眞如そのものゝ自性に一致せる佛身。

(一)羅刹。食人鬼と譯す。

(二)如意寶珠。前出。

(三)非人。天、龍、夜叉、阿修羅等の類をいふ。

(四)禁戒。戒律のおきて。

王及び忉利天は、常に人王を助けて勝妙の樂を受けしむ。諸の(一)羅刹王及び諸神等、身を現はさずと雖も、潛に來りて王及び眷屬を衞護す。王は人民の諸の不善を造るを見て、制止すること能はざれば、諸天神等悉くみな遠離す。若し善を修むるを見れば、歡喜讃歎し、盡くみな唱へて我が聖王と言ふ。龍天喜悦して甘露の雨を澍ぐ。五穀成熟して人民豐樂なり。若し諸の惡人等に親近せざれば、普く世間を利して咸く正化に從ふ。(二)如意寶珠、必ず王の國に現る。王の隣國において咸く來りて歸服す。人と(三)非人と稱歎へざることなし。若し惡人ありて王の國内において、而かも逆心を生ずれば、須臾の頃において是の如きの人、福自から衰滅し、命終りて當に地獄の中に墮ち、畜生を經歴て備さに諸の苦を受くべし。所以はいかん、聖王の恩を知らざるによるが故に、諸の惡逆を起せば、是の如きの報を得るなり。若し人民ありて、能く善心を行ひ、仁王を敬輔して、尊重することゝ佛の如くすれば、この人現世安隱豐樂にして、願求するところあれば、心に彌ざらざることなけん。所以はいかん、一切の國王、過去の時において、曾て如來清淨の(四)禁戒を受け、常に人王となりて安隱快樂なり。この因緣をもつ

と、また〳〵是の如し」。

「若し人王ありて正見を成就し、法の如く世を化せば、名けて天主となす。天の善法を以て世間を化するが故に。諸天善神及び護世の王、常に來り加護して王宮を守るが故に、人間に處ると雖も、天業を修行して賞罰の心偏黨なきが故に、一切の聖王の法はみな是の如し。是の如き聖王を正法王と名く」。

「是の因縁をもつて十德を成就す。一に能照と名く。智慧眼をもつて世間を照すが故に。二に莊嚴と名く、大福智をもつて國を莊嚴するが故に。三に與樂と名く、大安樂をもつて人民に與ふるが故に。四に伏怨と名く、一切の怨敵自然に伏するが故に。五に離怖と名く、能く八難を郤けて恐怖を離るゝが故に。六に任賢と名く、諸の賢人を集めて國事を評するが故に。七に法本と名く、萬姓の安住、國王によるが故に。八に持世と名く、天王の法をもつて世間を持つが故に。九に業主と名く、善惡の諸業は國王に屬するが故に。十に人主と名く、一切の人民は王を主とするが故に」。

「一切の國王、先世の福をもつての故に、是の如き十種の勝德を成就す。大梵天

聖王よく治國の法を生じて衆生を利するが故に。(一)日天子の能く世間を照すが如く、聖王また能く天下を觀察して人安樂なるが故に」。

「王、正治を失へば人依るところなし。若し正化を以てすれば、八大の恐怖その國に入らず。謂ゆる、他國の侵逼、自界の叛逆、惡鬼の疾病、國土の飢饉、非時の風雨、過時の風雨、日月の薄蝕、星宿の變怪なり。人王の正化、人民を利益すること是の如くなれば、八難侵す能はざるが故に。譬ば長者のたゞ一子ありて愛念比なく憐愍饒益し、常に安樂を與えて、晝夜に捨てざるが如く、國の大聖王もまた〳〵是の如し。等しく(二)群生に示すに同一子の如く、擁護の心晝夜捨つることなし」。

「是の如き人王、(三)十善を修めしむるを福德王と名け、若し修めしめざるを非福王と名く。所以はいかん、若し王の國內に一人善を修むれば、その作すところの福みな七分となす。善を造すの人この五分を得、彼の國王において常に二分を護。善は王によつて修め福利同じきが故に。(四)十惡業を造るもまた〳〵是の如し。その事同じきが故に。一切の國內、田地園林、生むところの物、みな七分となるこ

(一)日天子。太陽のこと。

(二)群生。むらがれる民草。

(三)十善。不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不惡口、不兩舌、不貪欲、不瞋恚、不愚痴。

(四)十惡業。十善の反對なる行。

の故に、一切の男子は即ちこれ慈父、一切の女人は即ちこれ悲母なり。昔、生々のうちに大恩あるが故に、猶し現在の父母の恩の如く、等くして差別なし。是の如き昔の恩、猶いまだ報ずる能はず。或は(一)妄業によりて諸の(二)違順を生じ、執着をもつての故に、反つてその怨をなす。何をもつての故に、(三)無明、宿住の智明を覆障して、前生曾て父母たるを了らざればなり。恩を報じて互に饒益すべき所なり。饒益なきものを名けて不孝となす」。

「この因縁を以て、諸の衆生の類、一切時に於いて、また大恩あり。實に報ずることと難しとなす。是の如き事を衆生の恩と名く」。

「善男子。國王の恩とは、福德最勝なり。人間に生るゝと雖も、自在を得るが故に。(四)三十三天、諸天子等、恆にその力を與えて、常に護持するが故に。その國界において、山河大地、大海の際を盡して國王に屬し、一人の福德、一切衆生の福に勝過するが故に。この大聖王、正法を以て化して能く衆生をして悉くみな安樂ならしむ。譬へば世間一切の堂殿は、柱を根本となすが如く、人民の豐樂は王を根本となす。王に依つてあるが故に。また梵王のよく萬物を生ずるが如く、

(一)妄業。間違へる行。
(二)違順。理に違ひて瞋り、迷に順うて貪ること。
(三)無明。智慧なきこと。これ迷の根本なり。
(四)三十三天。忉利天をいふ。中央に喜見城ありて四方に各八天あるが故に合して三十三天となる。

(一)五根。眼、耳、鼻、舌、身をいふ。

(二)善巧方便。善き巧みなるてだて

(三)無始。始めなき昔のこと。

(四)五道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天。

と名く、恒に母の手をもつて(一)五根を理ふるが故に。四に養育を名く、四時の宜に隨ひて能く長養するが故に。五に智者と名く、能く方便をもつて智慧を生ずるが故に。六に莊嚴と名く、妙瓔珞をもつて嚴飾るが故に。七に安隱と名く、母の懷抱をもつて止息なきがゆゑに。八に教授と名く、(二)善巧方便して子を導引するが故に。九に教誡と名く、善き言辭を以て衆惡を離れしむるが故に。十に與業を名く、能く家業を以て子に付囑するが故に」。

「善男子、諸の世間において、何者か最も富むや、何者か最も貧しきや。悲母堂に在す、これを名けて富となす。悲母在さず、これを名けて貧となす。悲母ます時は名けて日中となす。悲母死するときは、名けて日沒となす。悲母ましますときは、名けて月明となす、悲母亡るときは名けて闇夜となす」。

「是の故に、汝等、勤加修習して父母に孝養せよ。若のごとき人は、佛を供すると福等しくして異なし。應に是の如き父母の恩を報ずべし」。

「善男子。衆生の恩とは、即ち(三)無始よりこのかた、一切の衆生、(四)五道に輪轉して百千劫を經るに、多生の中において互に父母となる。互に父母となるを以て

「若しそれ男子善女人、悲母の教により、承順して違はざれば、諸天護念して福樂盡くることなけん。是の如き男女は即ち尊貴天人の種類と名く。或はこれ菩薩、衆生を度はんがために、現に男女となり父母を饒益す」。

「若し善男子善女人、母の恩を報ぜんがために一劫を經て毎日三時に自身の肉を割きて次で父母を養ふも、而かも未だ一日の恩を報ずること能はず、所以はいかん。一切の男女、胎中に處りて口に乳根を吮ひ、母の血を飲噉す。胎を出で已るに及んで、幼稚の前、飲むところの母乳は百八十斛なり。母、上味を得れば先づその子に與ふ。珍妙の衣服も、また〳〵是の如し。愚癡鄙陋も情愛に二なし」。

「昔、女人あり、遠く他國に遊び、生むところの子を抱いて(一)殑伽河を渡る。その水暴漲して力すゝむこと能はざれども、愛念して捨てず、母、子ともに沒す。この慈心善根力を以ての故に、即ち(二)色究竟天に上生することを得て(三)大梵王となりき」。

「是の因緣をもつて、母に十德あり。一には大地と名く、母胎の中において所依となるが故に。二に能生と名く、衆苦を經歷て而かも能く生むが故に。三に能正

(一)殑伽河。恒河とも書く。印度の有名なるガンヂスのこと。
(二)色究竟天。色界の最上にある天。四禪天の最頂天をいふ。
(三)大梵王。大自在天王をいふ。

形に及ぶ。始め胎を受くるより終り十月において、行住坐臥、諸の苦惱を受くることロの宣ぶるところにあらず。欲樂、飮食、衣服を得と雖も、而かも愛を生ぜず、憂念の心つねに休息なし。但みづから思惟して、將に生産まんと欲すれば、漸く諸苦を受け、晝夜に愁惱す。若し産難のときは、百千の刄をもつて競ひ來りて屠割くが如し。或は(一)無常を致す。若し苦惱なければ、諸親眷屬、喜樂盡くしがたきこと猶し貧女の(二)如意珠を得るが如し。その子、聲を發すれば音樂を聞くが如く、母の胸臆をもつて而かも寢處となし、左右の膝の上を常に遊履となす。胸臆の中において甘露の泉を出す。長養の恩、(三)普天に漲る。憐愍の德廣大にして比なし。世間の高しとするところは山岳に過ぐることなきも、悲母の恩は(四)須彌に逾えたり。世間の重しとするところは大地を先となすも、悲母の恩はまた彼に過ぎたり。若し男女ありて、恩に背き不順にしてその父母をして怨念の心を生ぜしめ、母に惡言を發せんには、子すなはち墜墮して或は地獄、餓鬼、畜生にあり。世間の疾は猛風に過ぎたるは莫きも、怨念の徵はまた彼よりも速なり。一切の如來金剛天等、及び(五)五通の仙も救ひ護る能はず。」

(一)無常。死すること。
(二)如意珠。意の欲するまゝに何物をも出す不思議の寶珠。
(三)普天。天にあまねきこと。
(四)須彌。世界にて最も高き須彌山をいふ。
(五)五通の仙。五神通を得たる仙人。五通は前出。

ざる一切の衆生を利益し安樂ならしめむ。諦に聽け、諦に聽け。善くこれを思念せよ。我れいま汝がために分別して、(一)世出世間の恩ある處を演說せん。善男子、汝等が言ふところは未だ正理とす可からず。何を以ての故に、世出世の恩にそれ四種あり、一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には(二)三寶の恩なり。是の如きの四恩は、一切衆生平等に荷負す。」

「善男子。父母の恩とは、父に(三)慈恩あり、母に悲恩あり。母の悲恩とは、若し我れ世に住みて一劫の中に於いて說くとも盡くす能はず。我れ今、汝がために少分を宣說せむ。たとひ、人ありて福德のための故に、一百の(四)淨行大婆羅門、一百の(五)五通の諸大(六)神仙、一百の善友を恭敬し供養して、(七)七寶の上妙の堂內に安置し、百千種の上妙の珍膳を以てし、諸の瓔珞、衆寶の衣服を垂れ、栴檀、沈香をもつて諸の房舍をたて、百寶をもつて牀臥敷具を莊嚴り、衆病を療治する百種の湯藥をもつて一心に供養し、百千劫を滿たすも、一念孝順の心に住して微少の物をもつて悲母を色養し、隨所に供侍するに如かず。前の功德に比ぶれば百千萬分にして挍量ぶべからず。世間の悲母の子を念ふことは比ぶるものなし。恩、(八)未

(一)世出世間。此の迷の世間と、迷の世間を離れることゝ。

(二)三寶。佛寶、法寶、僧寶。

(三)慈恩悲恩。樂を與ふるを慈といひ、苦を拔くを悲といふ。

(四)淨行婆羅門。清き行をなせる婆羅門教の修行者

(五)五通。天眼通、天耳通、神足通、他心通、宿命通、

(六)神仙。不思議なる仙人。

(七)七寶。金、銀、瑠璃、頗黎、硨磲、瑪瑙、珊瑚。

(八)未形。未だ身體の形なきをいふ

たまふ。我れ苦行を行ふ心を(一)愛樂せず、誰かよく永劫に生死に住して、而かも衆生のために諸の苦惱を受けんとするやと。

この念を作し已りて、即ち座より起ち、右の肩を偏袒ぎ、右の膝を地に著け、掌を合せ恭しく敬うて、異口同音に、前みて佛に白して言さく、「世尊、我等、大乘の諸の菩薩の行を樂はず、また苦行の音聲を聞くことを喜まず、所以はいかん。一切の菩薩の修むるところの(二)行願は、みな悉くこれ恩を知り恩を報ぜず。何を以てのゆゑに、父母を遠離して出家に趣き、自らの妻子をもつて(三)所欲に施し、頭目髓腦もその願ひ求むるに隨ひて悉くみな布施す。諸の苦惱を受くること(四)三僧祇劫なり。具さに(五)諸度八萬四千の(六)波羅蜜行を修め、生死の流を越え、方に菩提の大安樂處に至る。二乘の(七)道果に趣向して、(八)三生百劫に(九)資糧を修集し、生死の因を斷ち　涅槃の果を證り、速に安樂に至るを、方に報恩と名くるには如かずとせり。」

そのときに、佛、五百の長者に告げたまはく、「善いかな、善いかな。汝等、大乘を讃歎するを聞いて心に退轉を生ず。妙義を發起し、未來世の中に恩德を知ら

(一)愛樂。好み願ふこと。
(二)行願。志願と修行。志望と實行。
(三)所欲。欲し求めるものをいふ。
(四)三僧祇劫。僧祇は無數と譯し、劫は時と譯する梵語、無限の時間の三倍をいふ。
(五)諸度。度は生死海をわたり超ゆる修行をいふ。
(六)波羅蜜。度と譯す前項をみよ。
(七)道果。さとり。
(八)三生。外凡の生活、內凡の生活、聖者の生活。
(九)資糧。さとりを得る助けとなる功德。

死を厭離し、ながく涅槃に入り、大乘常樂の妙果を願はず、然かも諸の如來、法輪を轉じ、四失を遠離して相應法を說きたまふ。一に處として非なることなく、二に時として非なることなく、三に器として非なることなく、四に法として非なることなし。病に應じて藥を與へて、また除くことを得しめたまふ。即ちこれ如來(一)不共の德なり。聲聞緣覺は未だ自在を得ず、諸の菩薩衆の不共の境なり。この因緣をもつて、菩提正道心地の法門は見難く聞き難し。若し善男子善女人ありて、この妙法を聞いて、一たび耳を經、須臾の頃に念を攝め心を觀じ、(二)無上大菩提の種を熏成じて久しからず、當に(三)菩提樹王金剛寶座に生じ、(四)阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。」

爾のとき、(五)王舍大城に五百の長者ありき。その名を妙德長者、勇猛長者、善法長者、念佛長者、妙智長者、菩提長者、妙辯長者、法眼長者、光明長者、滿願長者といひき。是の如き等の大富長者、正見を成就して如來及び諸の聖衆を供養す。この諸の長者、この世尊の大乘心地法門を讚歎したまふを聞いて、而かもこの念をなす。我れ如來を見たてまつるに、金色の光を放ち、菩薩の難行苦行を影現し

(一)不共　共通せざる特別のもの。

(二)無上大菩提。この上なき大きなるさとり。菩提は前出。

(三)菩提樹王。道樹王と譯す。佛のさとりをとりたまふところにある樹をいふ。王とは樹を尊ぶ語。

(四)阿耨多羅三藐三菩提。無上正徧道と譯する梵語。この上なき普遍的な正しき佛のさとり。

(五)王舍大城。中印度摩伽陀國の都にて、釋尊のころ頻婆娑羅王の築くところ。今のラージュギルの地。

大乘本生心地觀經卷第二報恩品

大唐罽賓國三藏般若奉詔譯

爾のとき(一)世尊、(二)三昧より安詳として起ち、(三)彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく、「善いかな、善いかな。汝等大士、諸の善男子、世間の父に親近せんと欲するがために、出世の法を聽聞せんと欲するがために、(五)如々の理を思惟せんと欲するがために、如々の理を修習せん欲するがために、佛の所に來り詣でゝ供養し恭敬することや。」

「我れいま(六)心地の妙法を演說し、衆生を引導して、佛智に入らしめん。是の如きの妙法は、諸佛如來、無量劫をすぎて、時に乃しこれを說きたまふ。如來世尊の世に出興したまふに、甚だ値遇し難きことは(七)優曇華の如し。假使、如來世に出現したまふとも、この妙法を說きたまふことは、またまた難しとなす。所以はいかん。一切の衆生、大乘菩薩の行願を遠離して、(八)聲聞緣覺の菩提に趣向し、生

(一)世尊。世に尊ばるゝ人、釋迦のこと。

(二)三昧。等持と譯する梵語。心を亂さず一定に持つこと、即ち禪定にいることをいふ。

(三)彌勒菩薩摩訶薩。慈氏と譯す。菩薩摩訶薩大道心と譯する梵語。佛の道を行ふ菩薩の詳しき稱呼。

(五)如々。眞如。

(六)心地。萬物の根本となる心をいふ。

(七)優曇華。靈瑞華と譯す。千年にたゞ一度咲く花と傳ふ。

(八)聲聞緣覺の菩提。佛になり得ざる小乘教のさとりをいふ。菩提は道と譯する梵語にして、さとりのこと。

るときは何を以てか國を治めむ。

十五に曰く。私に背きて公に向ふは、是れ臣の道なり。凡そ夫人私あれば必ず恨あり。

十六に曰く。民を使ふに時を以てするは古の良典なり。故に冬月には閒ありて、以て民を使ふべし。其れ農ざれば何をか食む。桑ざれば何をか服む。

十七に曰く。夫れ事は獨り斷むべからず。必ず衆と共に宜しく論ふべし。少事は是れ輕し。必しも衆とともにすべからず。唯大事を論ふに逮びては、若し失あらんことを疑ふ。故に衆と相辨ふるときは、辭則ち理を得べし。

憲法十七條 終

彼の人は瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に從ひて同じく擧へ。

十一に曰く。功過を明察にして、賞罰必ず當よ。日者賞功に在てせず、罰罪に在てせず。事を執れる群卿、宜しく賞罰を明かにすべし。

十二に曰く。國司國造、百姓に斂ることなかれ。國に二の君なく、民に兩の主なし。率土の兆民、王を以て主と爲す。所任官司は、皆是れ王の臣なり。何ぞ敢へて公と百姓に賦斂む。

十三に曰く。諸の任官者、同じく職掌を知れ。或は病し、或は使して事を闕ることありき。然れども、知ることを得るの日には、和ふこと曾より識るが如くせよ。それ與聞に非るを以て公務を妨ぐること勿れ。

十四に曰く。群卿百僚、嫉み妬むことあることなかれ。我れ既に人を嫉めば、人亦我れを嫉む。嫉妬の患は、其の極りを知らず。所以に智己に勝るときは則ち悦ばず。才己に優るときは則ち嫉妬む。是を以て、五百歳の後にして、乃し賢に遇はしむれども、千載にしても以て（一）一聖を待つこと難し。それ賢聖を得ざ

（一）一聖を待つ。一本得るに作る。

七に曰く。人各々任掌あり。宜しく濫れざるべし。それ賢哲官に任すときは、頌音則ち起り、姧者官を有つときは、禍亂則ち繁し。世に生れながらにして知るは少なし。尅念々聖と作れ。事大少となく人を得て必ず治む。時急緩と無く賢に遇うて自ら寛なり。此に因て國家永く久しくして、社稷危きことなし。故に古の聖王は、官の爲めに以て人を求めて、人の爲めに官を求めたまはず。

八に曰く、群卿百僚、早く朝り晏く退よ。公事監靡く、終日にも盡し難し。是を以て、遲く朝るときは急に逮ばず。早く退れば必ず事盡くさじ。

九に曰く。信は是れ義の本なり。事毎に信あるべし。それ善惡成敗は、要ず信に在り。君臣ともに信あるときは、何事か成らざらむ。君臣信なければ、萬事悉く敗れむ。

十に曰く。忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各々執ることあり。彼れ是なれば則ち我れは非なり。我れ是なれば則ち彼は非なり。我れ必ずしも聖に非ず。彼れ必ずしも愚に非ず。共に是れ(一)凡夫のみ。是非の理誰れか能く定むべき。相共に賢愚なること、鐶の端無きが如し。是を以て、

(一)凡夫。智慧あさく愚なる人のこと。『大乘義章』に「凡は謂く生死凡部の法。夫は謂く士夫。凡法夫を成すが故に凡夫と曰ふ」とあり。

（一）下靡びく。一本下效に作る。

（二）餐。一本饗に作る。

（一）下靡びく。故に詔を承ては必ず愼め。謹まざれば自ら敗れむ。

四に曰く。群卿百僚、禮を以て本と爲よ。それ民を治むるの本は、要ず禮に在り。上に禮なきときは下齊はず、下に禮なきときは、以て必ず罪あり。是を以て、君臣禮あるときは、位の次亂れず。百姓禮あるときは、國家自ら治まらむ。

五に曰く。（二）餐を絶ち欲を棄て、明かに訴訟を辨へよ。それ百姓の訟は一日に千事あり。一日すら尙爾り。況んや歲を累ぬるをや。須らく訟を治むべき者は、利を得て常と爲すべし。賄を見ては唉を聽す。則ち財有るひとの訟は、石をもて水に投ぐるが如く、乏きひとの訟は、水をもて石に投ぐるに似たり。是を以て、貧き民は則ち所由を知らず。臣の道亦焉に於て闕けむ。

六に曰く。惡を懲し善を勸むるは、古の良典なり。是を以て、人の善を匿すことなく、惡を見ては必ず匡せ。それ諂ひ詐くひとは、則ち國家を覆へすの利器たり。人民を絶つの鋒劍なり。亦佞く媚る者は、上に對しては則ち好みて下の過を說き、下に逢うては即ち上の先を誹謗る。其如此人は、皆君に忠なく、民に仁なし。是れ大なる亂の本なり。

憲法十七條

聖德太子御撰

一に曰く。和を以て貴となし、忤ふこと無きを以て宗となす。人皆黨ありて亦達者少なし。是を以て、或は君父に順はずして、また隣里に違ふ。然れども、上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬれば、則ち事の理自ら通じて、何事か成らざらむ。

二に曰く。篤く(一)三寶を敬へ(三寶とは佛法僧なり)則ち四の生の終の歸。萬國の極の宗なり。何の世何の人か是の法を貴ばざる、人はなはだ惡きもの鮮し。能く教ふるをもて之れに從ふ。其れ三寶に歸たてまつらずば、何を以てか枉るを直さむ。

三に曰く。詔を承ては必ず謹め。君をば則ち天とす。臣をば則ち地とす。天覆ひ地載す。(二)四の時順ひ行はれて、萬氣通ふことを得、地覆はむと欲する時は、天則ち壞るゝことを致さむ。是を以て、君の言ふときは臣承る。上行ひませば

(一)三寶。同體、別體、住持の別あれども、今は住持三寶を云ふ。卽ち泥龕、塑像、繪像を佛寶。黃卷、赤軸の經典を法寶、剃髮染衣の僧を僧法とす。末代までも世に住持する三寶の意なり。

(二)四の時。春、夏、秋、冬。

生る。七歳出家し、十八歳比叡山に上つて專ら天台の敎法を學ぶ。四十一歳三千衆徒の交りを絕ち、獨り黑谷に入て閱藏五遍、偶々善導の觀經疏に依つて終に念佛の一門に歸す。後ち淨土院に參籠して慧心の往生要集を感得し、爾來自行化他共に本書を以て依憑とせり。文明十八年四十四歳にして始めて、化他門に出で、未だ日ならざるに仰望頓に擴く、明應元年三月勅請に依つて淸凉殿に參向し、主上（後土御門天皇）及び春宮（後柏原天皇）に圓頓菩薩戒を授け奉る。叡感斜ならず、畏くも主上は眞盛上人の四字を宸筆に下し賜ひ、春宮また同じく大師の自賛を宸染し給ふ。越へて永正十三年、後柏原皇帝は、先帝の遺詔を以て圓戒國師の號を賜ふ。化導僅かに十年、德を上下に布き、終に春秋五十三にして伊賀國に寂す。明治十六年、明治天皇、慈攝大師の諡號を賜ふ。

執持鈔一卷（覺如上人撰）上人は本願寺第三世にして、學殖深く、詞藻に長じ、開祖親鸞の遺業を大成せし人。本書は嘉曆元年、飛驒の願智房永承の需に應じて執筆せるものにて、一部五章に分れ、其の初の四章は親鸞の語錄にして、後の一章は上人の私見なり。他力信仰の精髓を道破せる寶典として古來眞宗信徒の間に珍重せらる。眞蹟は越後の淨興寺及び山城市田の永福寺に現存せり。

細揣摩。路頭盡處再經過。明明說與虛堂叟。東海兒孫日轉多と。文永中、築の興德寺に出世し、嗣法の書並に入院の語を以て虛堂に呈す。堂大いに喜び、衆に謂つて云はく吾が道東せりと。其の器重せられしこと此の如し。翌年崇福寺に移り、居ること三十三年、嘉永中、詔を奉じて京に入り萬壽寺に住し、東山の故趾に嘉元寺を興す。又關東に下り建長寺に住す。延慶元年臘月二十九日、遺偈を止め泊然として寂す。壽七十四。皇上哀慕し給ひて圓通大應國師と諡し、寺を建てて龍翔と云ひ、遺骨を寺の後山に塔せしむ。門下に大燈あり、大燈に關山あり。其の道大いに揚がる。虛堂の言虛しからざりしと謂ふべし。

横川法語一卷（源信僧都記）此の法語は源信僧都自像の談文にして、像は現に宇治の平等院に藏せらる。僧都の居叡山の横川なりしに因み、此の法語を「横川法語」と云へ傳ふるなり。或は『慧心院法語』とも『念佛法語』とも云ふ。一紙に過ぎざる短文なれども、念佛の奧義を直寫して惻々人を動かさずんばあらず。蓋し僧都が其著『徃生要集』に廣く顯釋せし徃生淨土の法門を此の一紙の法語に壓搾せるの慨あり。

眞盛上人奏進法語一卷（眞盛上人述）念佛の要旨を謹述して、御土御門天皇の勅問に奉答せるが、此の一篇の法語なり。上人は天台宗眞盛派の開祖、嘉吉三年正月廿八日、伊勢一志郡に

居して盛んに念佛爲本の要義を唱ふ。上下靡然として之に歸し、念佛の聲都鄙を通じて起る。建久二年弟子住蓮安樂の事に連座して讃岐に配流せられしが、建暦元年赦に逢ひて京に歸り、二年正月廿五日洛東大谷の禪房に寂す。壽八十。東山天皇、圓光大師の謚號を賜ふ。

安心決定鈔　一卷（眞佛上人撰）本書は他力信仰の極致を詳述せるものにて、本願寺の傳說によれば、第三代の覺如上人は弟子乘專に此の書を懇望し、第八代の蓮如上人は四十餘年間此の書を精讀し「金をほり出す如き聖教なり」と賞嘆せしと云ふ。されど古來その著者の何人なるかを詳かにせず。或は覺如上人の作ならんと云ひ、或は西山の善慧上人の撰ならんと云ふ。然るに高田專修寺にては、此の書を第二代眞佛上人の撰述なりと傳ふ。而して其の所傳の本は世に廣く傳へらるゝ者と少しく異なる所あり。特に書中親鸞上人の著作を引用せるは大いに注意すべきことにて、今出す所は其の高田本なり。眞佛上人四十歲、寶治二年仲冬の撰述なりと傳へらる。

大應國師法語　一卷（大應國師述）本書は京師龍翔寺開山大應國師平生の垂示を、門人等の收拾採錄せるもの。國師名は紹明、法號南浦、駿河の人なり。幼にして出家し、建長寺の大覺禪師に參ず。正元年中、宋に入り息耕軒虛堂和尚に謁す。和尚の門庭高峻を以て聞ゆ。國師この鎚下に參じ、旦暮入室、遂にその堂奥に入る。辭し歸らんとするに臨み、虛堂偈を餞す。敲磕門庭

述せるもの。建久九年正月一日より、上人草庵に籠居して招待に赴かず。兼實乃ち藤左衛門尉重繼經を使として「淨土の法門年來敎誡を承ると雖、心腑に收め難し。願くは要文を記し給はりて、一は面談になぞらへ、一は後の御形見に備へたし」と請ふ。上人よつて本書の選集を思ひ立ち、弟子安樂房等をして執筆せしむ。其の稿本は京都盧山寺に現存す。

本書は淨土宗々典の根幹にして、一部十六章、具さに念佛宗義の要旨を闡明せり。所說の大意は「夫れ速に生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、且く聖道門を閣きて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中には、且く諸の雜行を抛つて、選んで正行に歸すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業の中には、猶ほ助業を傍にし、選んで正業を專らにすべし。正定の業とは即ちこれ佛名を稱するなり。名を稱すれば必ず生ずることを得。佛の本願に依るが故なり。」と云へる第十六章段の一節に盡く。尙本書はもと漢文なるを假名混り文に寫し換へたるなり。

撰者法然上人名は源空。淨土宗の開祖。長承二年四月七日美作の國稻岡に生る。九歲父を失ひて出家し比叡山に遊ぶ。遍く八家九宗の奧義に通達して、智慧第一の稱を專らにす。安元元年三月善導の『散善義』及び慧心の『往生要集』を讀みて、大いに發明する所あり、之より洛東吉水に菴

の。始め寶の種類に就いて問答を構へ、佛法僧の三寶を眞實第一の寶なりとして、次第に世相を述べ法味を展開し行くの結構にして、筆路井然、文章嫺雅、古今の事證を引き、詩歌吟詠の妙を混へて、趣味津々、坐ろに卷を措くに忍びざらしむ。『源平盛衰記』奴の卷に本書の由來を叙して「雙林寺の庵室に閉籠り、なからん跡の形見とて、涙の隙々に、寶物集を造りて、世にこそ披露したりけれ」と云へり。選集者平康賴に就いては、深草の隱逸元政上人の記あり。云はく「康賴は平氏なり。嘗て廷尉たり。假の幽居を雙林寺に卜す。治承中に藤原成親、淸盛が帝業を蔑するを疾み密かに平族を滅さんことを謀り、康賴も亦與る。事發れて鬼界が島に謫せらる。康賴途中祝髮して、名を性照と易ふ。居ること三年、偶々赦に逢うて還り、直ちに東山の舊業に入る。復世を顧みず。乃ち寶物集を著して、萬寶の中には三寶獨り勝れたることを論ず。嘗て島に在りし時、京に老母あり。康賴思慕の餘り自ら一千の小浮圖を造り、故國に向つて之を投ず。其の一の窣堵婆、浪に隨つて洛陽に達す。貴賤之を哀んで、以て孝感の致す所となす。其の和歌遂に勅選に入れらる。康賴の子康基亦孝思あり』云々本書に異本數種あり。今七卷本に依る。蓋し後人の加筆亦尠なからざるべし。

選擇本願念佛集

一卷(法然上人撰)略して選擇集と云ふ。攝政關白藤原兼實の請によりて撰

歸命本願鈔三卷　西要鈔二卷　父子相迎二卷　（向阿上人撰）以上三部何れも假名書きにして、撰者を同じくする故、合して三部假名鈔と稱せらる。洛陽淨土宗本山清淨華院第五世向阿上人の筆に成れるもの也。歸命本願鈔は筆を眞如堂に於ける靈佛の問答に寄せて、淨土念佛門の要義たる念佛往生、往生の機類（以上上卷所明）安心、起行（以上中卷所明）感應道交、相傳の源流（以上下卷所明）を說示せるものにて、一部の要點は「たゞ身をまかせてたのみ、本願たすけ給ふべしとのみきゝしかば、歸命本願鈔とや名づくべからむ」とあるに外ならず。次に西要鈔は筆を清涼寺に於ける靈佛の問答に藉りて、修道上逢着すべき疑義二十番を決着し、安心の細を穿ち微を極めたるもの也。次に父子相迎は彌陀を父に喩へ、衆生を子になぞらひ、生佛相逢の感味を縷述せるもの。三部ともに文章流麗典雅にして朗々として誦するに堪へたり。因に著者向阿上人は諱を證賢と云ひ、龜山天皇の御宇、文永二年の誕生幼にして剃髮し、園城寺に天台の幽旨を極めて龍象の望を囑せられしが、出離の念熾んにして洛陽花開院に遁世す。時に歲二十三。後禮阿和尙に謁して淨土宗の宗脈を承け、清淨華院に住して專ら自行化他に力めたり。

寶物集七卷　（平判官康賴撰集）　本書は發心菩提の資糧となるべき故事逸話を、廣く日本支那印度の三國に尋ねて、法華を行じ阿彌陀佛を恭敬し、彌陀の名號を唱ふべきことを慫慂せるも

宇建保元年五十九歳にて寂す。解脱は其の德號なり。

往生要集 三卷（源信僧都撰）本書は慧心院源信僧都が、愽く經論を涉獵して、永觀二年十一月より、翌年四月に至る約半歳の間に、諸經諸論中より往生極樂の要文を集錄して一本とせるものにて、原本は漢文を以て書かれ、一部六卷を十科に分つ。今出す所の和字本は、原本の十科の中最初の厭離穢土の一科と、次の欣求淨土の一科とを抄出し、之を一般に讀ましめんがために平易なる和文に書き換へたるものなり。然も其の和譯、動もすれば、偏に字解に急にして、却て意義の通じ難き處の尠なからざるを以て、本叢書の出版を機とし、親しく原本と對照して訂正改竄を加へたり。

抑々往生要集は、我國念佛門の元典にして、法然上人の淨土宗、親鸞上人の眞宗等本邦念佛の流派多しと雖、苟も源泉を本書に汲まざるはなし。加之、宋人は此書に對し、佛陀所說の敎典と階を等しうするの尊信を致し、時の眞宗皇帝は宣示を下して特に塔を創建し、僧都の眞影と本書とを安置せしめ、以て朝夕敬禮せしと云ふ。或はまた毗沙門影現して「僧都撰する所の往生要集は、皆是れ經論の文なり。一見一聞の倫は、無上菩提を證すべし」と證誠したりなど丶傳へらる丶を以て見ても、如何に本書の尊重せられしかを知るべし。

稟承し、歸朝の後、比叡山上に圓密禪戒、四宗合一の新教を樹立し、自ら天台法華宗と號す。蓋し傳教の素懷、四宗合一と云ふと雖、畢竟これ法華の妙用を開發して、圓密禪戒を互に融合せる者なれば、特と天台法華宗と標榜せるなり。若し然らば法華は是れ傳教生涯の眞髓にして、また天台一宗の生命と云はざるべからず。今本書は大師が自解佛乘を奏聞せんが爲めに、筆致を盡して撰作せるもの。法華の妙旨に觸れんとするもの丶第一に味讀せざるべからざる寶典なり。

愚迷發心集一卷（解脫上人撰）本編は愚迷の者に發心の端緒を示し、正道を助顯せんが爲に述作せるものにて、原作は漢文にて書かれてあり。或は云はく元來は假名雜り文體なりしを、中程之を漢文體に直して以て今日に傳へたるなりと。如何にや。今讀者の便を圖りて暫く傳來の漢文體を和文に返せり。然も漢文に於ける焉、也、于、於等の助字及び讀曲が、巧みに文意の緩急强弱を致すと雖も、和文に移して能く其の筆勢を現はす能はざりしは筆者の遺憾とする所なり。

作者解脫上人は近衞院の御宇、久壽二年の出生にして左大辨藤原貞憲の子たり。貞慶と云ふ。興福寺に於て剃髮出家し、學德一世に秀でしも名利を忌みて山城笠置の窟に止住す。甞て勅に依りて最勝講の講師たりし事あり。又甞て後白河上皇の命に依りて鹿福寺の落慶導師となりし時、節を揩へ破笠を肩に置きて參殿し、上皇をして其脫俗の高風に隨喜せしめしと云ふ。順德院の御

眞宗の祖親鸞は太子を讃じて「和國の教主聖德王、廣大恩德謝し難し、一心に歸命したてまつり、奉讃不退あらしめよ」と云へり。

心地觀經報恩品　一卷（般若三藏譯）草木の大地より生成する如く、萬有は吾人の心地より生起するもの故、この心地を觀じ究むれば乃ち佛道に悟入することを得と云ふが心地觀經所說の要旨として、一經を分つて序品、報恩品等の十三品とす。報恩品は即ち其の第二品として、父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩を縷述して、この恩を報ずるを以て心地觀の第一步と說けるもの。誠に恩を報ずるは人道の根本義にして、此の根柢に立づものを佛教の本旨とす。說き示すところ懇切叮嚀、その母恩の說明の如き、一讀人の肺肝を突かずんばあらず。譯者般若三藏は北印度ヒマラヤ山麓に在りしヤシユミール國に生れ、支那に來り唐の貞元六年勅詔によつて本經を飜譯し、同年七月三藏の號、及び紫袈裟を勅賜せられし人なり。

法華諸品大意　一卷（傳教大師撰）又は法華二十八品大意と云ふ。傳教大師最澄の撰作にして文章幽麗、義味深玄、能く簡决に法華經一部の大要を盡せり。抑々法華は諸佛出世の本懷として、速疾頓成の極致と稱せらる。是を以て古來この經の鑽究時に絕えず、諸師の註釋また尠からず。茲に傳教、曾て桓武天皇の勅を奉じ、入唐して天台圓教の幽旨を窮め、併せて密禪戒の奥義を

解題

憲法第十七條　一卷（聖德太子撰）本書は上宮聖德太子の親選に係り、我國最古の法典にして我國人の手に成れる最古の漢文なり。撰定の年時に異說あり。或は推古天皇の即位十二年甲子四月と云ひ、或は十三年乙丑七月と云ひ。又十年壬戌十二月と云ふ。然れども今は正史に依りて十二年說を採る。撰者に就き久米博士は「此の文は博士覺哿の起草にて、僧慧慈、慧聰等討論潤修したらん。」云々と云へり。或は然らん。而も太子の叡旨より出でたるものなれば、其の親選たるや論なき也。而して本憲法が單に政治上の法文たるに止まらず、實に本邦風教道德の源泉たることも亦多言を要せざる所なり。

太子は用明天皇の第二皇子にして、御母は穴穗部間人皇后、敏達天皇の三年甲午正月元旦の降誕と傳へらる。推古天皇の元年皇太子となり、攝政の要職に任ぜらる。深く佛教を信じ、自ら經論の要義を講じ、佛體を刻み、寺塔を建て、時に親しく僧衣を召させ給へり。推古天皇の二十九年（或は云ふ三十年）春二月己丑朔、斑鳩宮に薨ず。諸王諸臣及び天下の百姓、老は愛兒を失ひしが如く、幼は慈父母に離れしが如く、哭泣の聲行路に滿ちたりと傳ふ。河內國磯長の陵に葬る。

存するあつて、自ら恃む所なきに非ざりしを自白して憚らざるなり。

一。本叢書は或る程度まで原文を尊重したれども、既に發行の趣意、普通讀書界の普及に存するを以て、一般讀書子の便宜をはかり、もと漢文なるは和文に移し、送り假名を加へ、漢字を假名に、假名を漢文に書き換ふる等、宜しきに隨つて加減鹽梅する所ありたり。

一。欄外の註釋は可及的平易を宗とせるも、含蓄的なる其道の專門語を通俗の言語に移して然も意義の明了を得るは倒底望み得ざるべく、一應の解釋を以て滿足せざるを得ざりしは編輯者の心ひそかに遺憾とする所なり。

一。本叢書編輯に關して、常盤大定、大內青巒、大村西崖、鷲尾順敬、島地大等、望月信亨、森大狂、岩田教圓、今津紹柱、加藤智學、柏原祐義、大道法道、塚本賢曉、常川忍澄、望月歡厚、菅龍静諸氏の提撕及助力に負ふ所尠なからず。又發行に關しては、根津嘉一郎、藤崎三郎助、小池國三、相生由太郎、久原房之助、山本唯三郎、古賀三千人、三島彌太郎諸氏の外護に待つもの多し。玆に芳名を錄して感謝の意を表す。

凡例

一。本叢書編纂の目的は緒言所陳の如く、我國風教道德の振作擧揚に資せんとするに外ならざるを以て、書目の選定、內容の按配等、一に目的の貫徹に忠實ならんことを期したり。

一。古來傳ふる所の佛典、印度、支那、日本の三國を通じて、其數其量、古人の所謂充棟汗牛も啻ならず。本叢書は是等浩澣の典籍中より、特に我國民道德の涵養と關係の密接なる本邦佛教各宗の祖師、並に高僧碩德の名著を主として簡抜し、之に主要の經典數部を添加して、錦上更に花を添ふるの趣を致さんとせり。

一。由來佛書は多く專門的にして、普通讀書子の難解難入とする所、然も一國風教の擧揚に資せんがためには、汎く一般讀書界の理解と愛讀とを期待せざるべからず。編輯者の分けて苦心を要したる、懸つて此の一點に存せりき。

一。爰を以て本叢書は、道義信仰の醇實を內容の第一條件としたりと雖、又一面記述の平明と、趣味の潤澤との二個條を、書目選擇の標準中に加へ置くことを忘れざりき。思ふに本叢書選拔書目の當否に就いて、或は識者間に批評の區々たるものあらんか。然れども編輯者は一家の識見の

教を立て法を說く、宗派各々別あり、大日本風教叢書は元より經を說き法を講ずるものにあらず、要は人生に對する教訓指導にあるを以て、一宗一派に偏せず、其粹を集め其名著を簡拔す、即ち教界選手の大競技にして兼て風教の大博覽會たり、請ふ其雜陳を咎むる勿れ、是れ我叢書の長所にして、併せて他に比類なき所なり。

大日本風教叢書一本を藏して永く子孫に傳へなば、其子孫必ず多幸多福なるべし、一人一日一章を讀まば、其人必ず勇猛精神斷じて而して過ちなかるべく、國家興隆の基礎、人々修養の道、之を措いて他に何物もあらざるべきを確信す。

大正六年五月

義ある敎訓を得たりと謂ふべし。佛敎の初めて我國に入るや、陶鑄融和能く我國民性と同化して、建國の精神骨髓に適合し、上下之に歸依し、奕世之を崇信し、政治經濟敎育文學、凡そ社會百般の事、其開發啓沃を受けたるの事實は歷史の證する所なり、殊に風敎德化の源泉として國民道德を釀成したるの功に至つては、天下何人か異議を挾むものあらん、以て古德先聖の紹述する處、片言尺璧よりも貴く、隻語鼎呂よりも重きを知るべし。

大日本風敎叢書は、千有餘年來帝國の德敎文化に大關係を有せる佛敎各宗の開祖を始め高德碩學の述作及び浩澣なる經典の一部、苟も世道人心に益あり且各人の修養處世に適應せるもの、其他古聖先賢の言行錄、法語、隨筆等何人も一讀して理解し易き敎訓趣味竝有の名著珍籍を纂輯せる本邦唯一の風敎文庫なるを以て、政治家、軍人、法曹、敎育家、藝術家、實業家に論なく、又階級男女の區別なく、普ねく國民一般を通じて必讀玩味

士大義に通ぜず、上下靡然として輕薄風を成す、今にして弊竇を杜絶し風敎を既墜に廻さずんば、其れ國家の前途を如何せん。懦弱優柔、譎詐嫉悪、煩悶執着は風敎の賊なり、須らく勇猛精進不退轉の大覺悟を以て、國家生民の進歩向上を圖らざるべからず、假令物質の文明が翔天縮地の術を語るも、之を活用する心上一點の靈火なくんば、生猶死の如くならんのみ。

人は氣に依て活き靈は機に依て動く、若夫れ死生を超絶し執着を解脱するの大機を捉へ、鐵牛を驚走し大象を嚇殺するの膽氣勇力を養ひ、又彜倫綱常の大道と慈悲忍辱の至極とを修めんと欲せば、之を法門古大德の敎に待たざるべからず。內に此の修養を累ねて之を外に適用す、天下何物か我に敵せん、一國の政治も一身の處世も、歸趨は皆一閃發の精神にあり。

信抑なき敎訓は千言萬語竟に何等の權威を有せず、一代鍛練の業績を傾倒し、十年修行の心血を披瀝したる古大德古碩學の大文字にして初めて意

緒言

歐洲大戰亂の後、踵で來る所のものは何ぞ、武力の競爭か、種族の呑噬か、禍機の發する所、時や旦夕を計らず、地や東西を選び難し、外に此の戒心の事あり、內にしては人心漸やく荒頹に傾き、浮華輕佻動もすれば固有の美風良俗を破壞せんとす、國家の興廢世道の安危實に繫つて今日に在り。

知らず經世の士此難局に對して恁麼の名子を打了し得るや、艨艟海を壓し貔貅野を掩ふも、心上斷々の機を缺くあらば、畢竟殃門に禍を添うるの類のみ。博士學を講じ長者道を說くも、宇宙の眞理を闡き人心の機微に觸るゝに非ざるよりは、焉ぞ能く一世を指導して風敎を振作するを得んや。道義振はず風敎衰うるや久し、金冠朱綬の人名分を辨ぜず、讀書講法の

大日本風敎叢書

第一輯